泡鳴全集

第七巻

目次

部落の娘

一

東京と云ふところへ行きさへすれば、自分のこの悲しい境遇を免れることができると思つたばかりに、高子は決心して七條停車場へ出かけたのである。さて、停車場へ來て見ると、どう云ふ手續きをしたらいいのか分らなかつた。ただ多くの人がどや／＼してゐるのに先づ氣がのぼせてしまつて、切符とか云ふ物をどこでいくら出して買へばいいのかにまご付いた。

廣い建て物だけれども、その高い天井が自分を押し付けるやうで――聽き慣れない色んな聲の爲めに自分の耳が何となく遠くなつた。そしてぼんやりと行き來の人々の間に突ツ立つてゐたが、やがてまたいつもの情けないそして恐ろしいことを思ひ出したのである、――

『若しこの中にわたいの顏を知つてる人がおしたら！』

その顏がその場に青くなつたと思ふと同時に、からだ中がぞツと身振ひをした。それを、知らない人々にも見られたくないので、ちよツと自分で自分の氣を引き立てて、それとなく場所の隅の方へ足

を運んだ。そしてそこから見てゐると、自分と同じやうにひさし髪を結つてる人や、同じやうに牡丹色の帶を締めてる人も、見ツともないほど氣をあせらせて、他の男や女同樣に、丁度自分と反對のがはに付いてる窓へ行つて、入れかはり、立ちかはり、何かを買つてる。それが切符なのであらうが、自分はいくら出せばそれを買へるのか分らなかつた。その窓の上の方にかかつてる大きな額のやうなものをあふ向いて見てゐるおぢイさんの人もあるので、それが値段書きででもあらうかと考へたけれども、そこへ進んで行くのさへ氣が引けて、自分は時間をすごしてゐた。

そのうちに人々は大抵狹い入り口から小さい札のやうな物を切つて貰つて、奥の方へ這入つて行つた。殘つてるものは僅かになつた。すると、自分のやうにけば〱したなりをしてゐる者は一層人の注意を引くやうに思はれて、なほ更らのぼせて來た顏をちよツとそばの壁へ向けた。そしてそこにかけてある何か書いた物を見てゐるふりをして、自分で自分の氣を休めた。が、『鐵道』とか、『上り』、『下り』とか、その他にまた大きな字だけは目に這入つたけれども、澤山の小さな文字や數字らしいのは今の自分にはただごちや〱として、何のことだか讀めなかつた。

不思議にも、その讀めない額面の眞ン中に、自分よりも二つ三つ年うへかと思はれる男が浮んでゐた。これも鐵道に關係ある人らしく、特別な帽子に洋服を着て、左りの腕には赤い幅びろの何かのしるしを卷いてる。通辯さんとでも云ふのか——別に年寄りや田舍ものくさい人の世話も親切に燒いて

る外にも——西洋人が來ると、一々、その世話をしてやる。ここへ來て初めて見たのだが、それが何となくなつかしかつた。日本人と西洋人とが違つてゐるやうに、一般の京都人と自分らとも亦違つてる。そして西洋人が嫌はれるやうに、自分らも亦さうだ。それにも拘らず、西洋人に親切な人だから自分らにも親切にして具れるだらう。あア云ふ人ばかりがこの世にゐて具れるなら、自分もわざ〳〵東京などへ逃げて行くには及ばないのだが——。

ぎゆう〳〵と云ふ靴の音がして來たので、その方へふり向くと、さながら自分が待ち受けてでもゐたやうに、その人が矢ツ張り親切さうな笑みを帶びながらこちらへ近づいた。俄かにまた自分の顏が赤くなつたやうだ。たツた今、自分のうツとりと想像してゐたことでやツと少しばかり心が落ち付いてたところであつたのに。

『あんたはどこへお行きですか？』

『東京へ行きとおすのどすけれど——』ちよツとどぎまぎしたあとで、兎に角、斯う答へることができた。それから、直ぐ心を定めてはツきりと問ひに進んだ、

『どないしましたら、行けまひようか？』

『あすこで』と、その人は腕にしるしのある方の手をさし延ばして、さきに皆の集つた窓を返り見てから、またこちらをしげ〳〵と見ながら、『切符をお買ひになれば行けますが——』

『………』こちらには向ふのうるみ多い目がこちらの腹の中までも見ぬくやうで、おそろしくも見えたが、なほその親切さうな口ぶりにたよつて、その切符を買つて貰はうかと云ふ氣になつた。

『東京には』と、向ふは言葉をつゞけた、『御親類でもおありなのですか?』

『………』親類! こんな關係やこれを知つてるもの等のゐないところへ放たれたいのであるから、この言葉を聽くさへもいやであつた。それを努めて見ぬかれないやうにからだを堅くして、『おへんのどすけれど――』

『では、お知り合ひでも――?』

『なにも――』ゐがほを見せてゐたいのだが、それが自由に出ない。答へはほんとうのことで、決してうそではないが、若し實際には何かの關係が東京にあつたとしても、矢ツ張り、こちらは同じ答へをするのであつた。それほど自分の血すぢと周圍と世間のうわさとが恨めしかつた。それほど、自分は父の種を母が宿して呉れなかつたらよかつた。

『それでは、――少し立ち入つてお聽きするやうですが、――あんたは一體何の爲めにお行きになるおつもりです?』

『………』こちらは向ふをその年の割りに優しさうだと見たのに、その問ひが案外に人のお腹をゑぐるやうなことに受け取れた。赤くなつてた顏がまた眞ツ靑に變はつたかと思はれるほど、自分は自分

の心を引き締めて、この人にも矢ツ張りうかく〳〵物は云へないぞと警戒しながら、それでもまだ訴へるやうな氣持ちでその人の顔を見つめてゐた。

『立ち入つてお聽きするのは如何にも失禮ではありますが、お見受けしたところ、何かわけがおありのやうですし、今伺へばまた別にお知り合ひもなくこの地をお立ちですので、あんたのお爲めをおもひまして、間違ひのないやうにお尋ねするのですが――？』

『……』さう事を分けて男らしく云はれたので、こちらも何とか返事をしないではゐられなくなつた。丁度、おない年ぐらゐの兄さんが朝鮮へこれも逃げて行つて靴屋になつてゐるのを思ひ出してだ。若し自分が當り前の家の娘であつたら、きツと直ぐあまへた涙をこぼしてゐたであらうと思はれるほどの素直さで、『ちツと悲しいことがおして――。』

『そんなら、なほ御注意してあげたいことがあります。まア、こちらへお出でになつたらどうです』と云つて、その兄さんとおない年はこちらを一二等待ち合ひ室と書いてあるところへ案内した。

『……』こちらは親の血を分けた兄の外には若い男から斯うして話しかけられることがなかつた。そして、それも、もう今から二三年前までのことであつて、兄が朝鮮へ行つてからは、今が初めてだ。嬉しいやうな恥かしいやうな氣もして、然しそれにまたこの人も自分らの仲間以外の人だからと云ふ顫えるやうな警戒心が加はつてゐた。

『まア、おかけなさい。』向ふも少し聲が顫えてゐたが、角のあるおほテイブルの長いがはに面して置いてある長椅子の脊に奥の方で右の手をささへて、こちらに頼母しさを與へるだけの禮儀を以て、『さうしたらわたしもかけますから。』

『へい。』こちらは改まつてお辭儀をした。そして再び向ふと顏を見合はせた時には、何を云ひ出されるのだらうとおそろしかつた。それが遠慮してゐるのだと見えたかして、

『では、このままでお話し致しますが』と斷わつて、名刺をこちらに渡してから、『實は、わたくしはそれに書いてあります通りここの案内掛りで――』

『……』如何にも、よく見ると、赤いしるしにも『鐵道案内』と書いてあつた。

『すべてのお客さんをお世話してあげてをります。若し御言葉通り東京行きの切符をお買ひですなら、いつでも買うておあげ致しますが、別に當てもなしに、ただ悲しいことがある爲めの御旅行なら危險ですよ。東京と云ふところは、御存じないのでは京都と同じやうに呑氣なところと思はれましようが、すりが多く、また朦朧車夫と云ふて、方角の分らぬ女と見れば、怪しいところへ引き込んでしまう車屋も澤山をります。それに、いろ〳〵惡いことをするものがあつて、殊にあなたのやうな身なりも綺麗な御婦人で手頼るところもないと見れば、どんなことをされるか分りません。わたくしが申し上げたいのはそれで――若し大して御必要もないのなら、思ひとまる方がよろしうございましよう。

またどうしてもお行きになるなら、誰れかお附き人をつけて行くのが安全でしよう。』

『さよどす、な。』こちらはぼうツとのぼせてゐた。自分が何も知らないで人の眞似をして見ようとしたのをきまり惡かつた爲めでもあるが、また一つには、いつのまにか、自分も同じ椅子の脊に手前の方でつかまつて、その左りの手のひらを堅い木にこすりつけてゐたのが、何だか向ふから傳はつて來るあたたか味をおほびらに享け樂しんでたやうに思はれたからである。それに氣が付くと、直ぐその手を放して、自分の胸のところへ持つて行つた。この時、反對の手にはひわ色の絹張りからうもり傘があつた。お金の外に持ち物はただこればかりで――秋とは云へど、まだ日中を歩くにはこれが必要であつた。

『今一度お母アさんなり、お父さんなりに御相談なさつたらどうです？』

『お父さんはをりまへんのどす』と、つい入らないことを云つてしまつた。不斷から、父の死と共に父の血縁も切れたと云ひたい、云ひたいと思つてたのだ。

『では、お母アさんに相談なさつて御覽なさい。』

『さよどす、な。』少しらくな氣ぶんで微笑も浮んで來た。そして言葉もはツきりとなつて、『別に、けふに限つて行かねばならんわけでもおへんさかい。』行けたら行くと、一度は、もう、別れを告げて來たのだけれども、今のやうなことを聽かされて見ると、この地で考へてたやうな容易なものではなか

つた。自分らの仲間のむかし話には、或さむらひが門の前を通つたのを部落の人が無理に連れ込んで一ヶ年もそとへ出さず、そのあひだにその娘に人間並みの種を宿さしめたとある。それだから、自分もその反對に人間の手ごめに會ふほどのことは覺悟の前である。女子大學とやらへ這入つてゐて男を見つけると直ぐ、卒業などのことは――どうせ目的でなかつたのだから――棄ててしまつたものもある。つまり、正しい子だねさへ得て來れば、それで望みを達しられるのだが、折角得たその種が惡人やどろ棒のであつたら、矢ツ張り、なんにもならぬのである。

『さうして、若しなほお分りにならんことがありましたら、またいつにてもわたくしが御相談相ひ手になつてあげましよう』と、向ふの云ふことはその目つき、ゑがほによく釣り合つて、まん更らうそでもないやうであつた。

『………』こんな人がこの地にもまだ澤山ゐるなら、わざ〲東京三界までもそれを求めに行くには及ばないのであるが――。

この時、二三名の客が一緒に這入つて來たので、自分のくねらせてゐたからだが急にまたきツとなつた。習慣として、人が自分のそばに來れば、先づ自分を知つてる人ではないかと心配するのだ。が、さうではなかつたので、安心はしたものの、それツ切りなつかしい言葉を聽くことはできなかつた。

『わたくしの住所は』と、向ふも言葉が改まつて、『名刺に書いてありますから。』

『ほしたら、都合によりましてまたお伺ひ致しますかも知れません』と答へて、自分は名殘り惜しく別れを告げた。

誰れか知つてる人が來はしないかと左右を返り見ながら、顏をかうもり傘に隱して、烏丸通りを停車場から離れて行くと、お晝近くだけれども、自分と同じく世間にうそを云つてるやうな秋の日の光りが殊に寂しくしみ〴〵とからだ中に感じられた。そして自分は今の人に呼びとめられながらも、罪深い爲めに、鴨川の水のやうにうす暗く透きとほつた地獄の底へとめ度もなく落ちて行くのが見えた。

二

『惡い因緣にからまつて』と思ひながら、からす丸を七條通りに出て、その角から東本願寺を拜んだけれども、心の明るくならないのはいつもの通りであつた。地獄の七條通りだ。その底を東に向つて行くと、そのどん詰りには高瀨川や鴨川を越えて東山が見える。

『蒲團着て寢たる姿』とあるのを思ひ出しても、浮き世の人が羨ましい。自分のかど口からいつも見る、あのひら底の高瀨舟になつてもいいから、その血緣につなぐ綱がぷツつり切れて、ここまであがつて來た身體を、早く逆に野を過ぎ、海を越えて、いツそのこと、今しがた見たやうな西洋人の國へ

でも流し運んで呉れたらよかつた。

　ことしもまたすがれが見えて來た柳並み木の川まで來ると、幅二間ばかりの板橋だが、これを渡るのがこの七條通り全體をでも渡り返すやうにつらい。それを渡つてから、川に添つて下ると、直ぐ自分の家だけれども、けふ、一たび決心して見棄てた家へ二時間とたたぬうちにまた這入るのが、一段とつらかつた。有名になどならないでもいいのに、惡い意味で有名になつてるところの柳原と云ふ部落にあるからである。

　私かにこちらも見知つてる一人の船頭が、長い綱を引いて一方の肩にかけ、ちから一杯にからだをかた向けて、川ぷちをあがつて行くところであつた。が、こちらの不斷よりも着飾つてる黒地に赤縞のお召、から草に鳳凰を出した牡丹色繻珍の丸帶なる、よそ行き姿を見ると、それとなく冷かしの挨拶でもするつもりでか、俄かにこちらへ當て付けのやうな歌を歌ひ出した。

『むすめ島田に
てふ〱が　とまる、
とまる　筈だ　よ
花　だ　もの！』

『………』こちらは今島田を結つてゐないけれども、そしてその船頭はてふてふのやうに優しい人で

はないけれども、貧乏なそして亂暴さうな男の聲を聽くだけでも恐ろしかつたので、それをちよこちよこ走りに行き違つてしまつた。つい二三日前の思ひ出が浮んだからである。

自分は母の代りに古着をしよつて、或皮剝ぎの家へあきなひに行つた。すると、そこの常からいやらしいことを云ふ主人が僅か一圓六十五錢の物をきツちり一圓に負けろと云つた。五十錢までにしますと答へたけれども、なか／＼買はなかつた。そして丁度誰れもほかにゐなかつたのをしほに、こちらを押し伏せて怪しいことをしようとした。その場はやツと免れたけれども、如何にも失禮なことには、

『穢多のくせに、生意氣や』と一と言、おのれがおのれを罵るやうなことを云つた。

『………』こちらは寧ろどちらが多く卑しい血を受けてるのか、考へて見ろと答へてやりたかつた。が、あんな向ふ見ずの人だから、またあとの祟りがこわいので、相ひ手にしないで引き上げた。

そのことも然し俄かに東京へ行きたくなつた一つのわけ合ひだが、――一間のこまかい出格子窓につづく、これも格子のくぐり戸を明けた時には、二時間または一時間半前までは母と共に住み慣れてた家だけれども、何だか自分の家に歸つた氣はしなかつた。

『どなたどす』と云ふ母の聲が、おもてから眞ツ直ぐにとほつた土間の奥から聽えた。流しもとでちやらちやらと茶碗を洗つてる音がするのを見ると、今おひる御飯をすませたところらしい。こちらが

歸つて來たとは知るまいから、よそ〳〵しい言葉振りであつたのは不思議でも何でもないが、いツそのこと、その通り母が自分の他人であつて吳れたらと云ふ氣が自分に動いてゐた。また、たとへ母が兒を產むにしても、亡くなられた父のやうな物を養子にしないでもよかつたものを！

『わたい』と、返事のおもてでは優しくした。

『どないおしたんえ？』

『……』こちらは、もう答へはしなかつた。土間をなか仕切りのさる戶を明けて母のそばへ行くのも臆劫であつた。くつぬぎをおもて六疊へあがつたが、そこに積んである赤や黃いろの反物や古着の荷を見るのも亦いやであつた。

『赤い切れを見れば穢多村だと思へ』と云はれるほど、なんで皆赤なら赤、黃なら黃ばかりの原色を好きなのであらう？自分はさう云ふ色を見るだけでもけがらはしいやうに思ひながら、中の茶の間へとほつた。

かみがた風の家は、中の間がおもて窓からか、裏の緣がはの方からかでなければ日光を取れないので、いつもうす暗いのだけれども、けふはまた一層暗く見えた。いつも母を主人としてさし向ひに坐わる長火鉢のそばの場所とは違つて離れてるところへ、お佛壇の前近く、ペツたりと腰をおろした。

やがて母は、洗つた物を、流しもとにつづいて壁のおもてにおしつけてある戶棚へしまつてから、

あがり口の板の間と奥のふすまとで角を成してるところに近い火鉢わきの主人の座に着くと、直ぐこちらのもじ〳〵してゐるのを見やつて、『なんでそないなとこに坐わつてゐるのやえ、なア?』近く進んで來いと云ふ意味らしかつた。

『………』こちらは足も勞れてゐたが、氣づかれもしてゐた。その上、母に產んで貰つたことを心ですねながら、悲しいやうな、――そして泣きたいやうであつた。これまでにもこんな感じが出ないでもなかつたやうだが、――そして身うちのものは、亡き父をでも、また一緒にゐる母をでも、一切慕はしくもなつかしくもなかつた。それが――どうしたものか、けふに限つて――停車場へ行つて來てから、殊に甚だしく情けないやうに感じられた。自分のからだがお白いのやうに融けて、朝の顏を洗ふ水に流れて、おしまひには、そのにほひと共に消えて行つて呉れればよかつた。こんな機緣には二度と再び生れて來たくはない。自分の身をも心をも通り拔けた、ずツと、またずツと深い底の底から停車場で逢つた人と同じ年輩の兄さんばかりが、毛だ物の皮のにほひの全く取れた別人として、今は不思議にも自分の目の前に戀しく浮んで來た。物憂く、ぐツたりとして、自分で自分の置きどころがないやうなからだを、疊に左りの手を突いてささへて見たけれども、殆ど手ごたへがなかつた。自分は、もう、ここにはゐたくなかつたけれども、また、どこへも行きたくもなかつた。ただ自分の聲を何か外の物からでも出る響きかと感じながら、それでも『鐵道の掛りの人に』と云つたのには自分の

心に滲みとほる親しみをおぼえて、『問ふて見ましたら、東京へもうかく行けまへん。』

『どうしてや？』

『悪いものが多いいさうやで。』

『廣い云ふ東京でもわてらをむごういぢめるんかい、な？』

『……』ぎよツとしたことには、何でもないことをも母は自分らのことへ持つて行くのであつた。こちらは少しむツとして、『そないなことやあらしまへんが、な！泥棒や悪い車夫がをつて、不慣れなものをだますんやさうどす。』

『ほ！そら困つた、なア。』こちらを哀れんで呉れるやうな顔つきをしたが、さほどありがたくもなかつた。母は言葉をつづけて、『折角、わてらが儲けて溜めたお金を取られては仕よがない。』

『わたい、行きたうない！』こちらは自分で云ひ出したことを人から押し付けられてたことのやうに断わつて、かしげた肩のゆすりに駄々を捏ねて見せた。

その駄々のわけは停車場でけふの人を見たことにあつたが、それが、しんみりと意識できると同時に、朝鮮の兄がどうしてゐるだらうと頻りに思はれた。

この時、丁度、人が來たので、母はおもて六疊の方へ出て行つた。すると、もう、こちらへは毛だ物くさいにほひがして來たやうで、直ぐそのお客さんは井戸のつるべのことをつぶれとしか云へない

連中の一人であることが分つた。それだけおのれからおのれの賤しいことを見せるのだのに、なんでかれ等は赤や黄の木綿を好いたり、つるべをつぶれなど云つたりするのだらう？　こちらはかれらとは、幸ひにも、育ちや學校が違つてた。兎も角も、高等女學校を三年までは一般の人と一緒に教育を受けて來たが、成績がよくなるに從つて憎まれ出したのがもとで退學したのだ。

友達を避けてゐたのは自分も惡かつたけれども、今となつては、たツた獨りでもいいから相談に乘つて呉れるものがあつて欲しい。

『正しい種さへ受けてお來やつたら』と、母は今更ら母の昔を後悔してゐるやうに容易に東京行きを贊成したのだが、自分としてはさうも容易でないことが分つた。

『あの鐵道案内の人のお云やした言葉では』と、さながら兄の新らしい寫眞をでも受け取つたほどのなつかしさを以つて自分はさきの名刺を右の手で帶の間から出して見た。それを貰つた時には氣がわくわくしてよくも讀まなかつたところが、堀川通り七條下る、下魚の棚專心寺かた植原庄三郎とあつた。それを先づ、母の方には見えないやうにして、ありがたく押しいただいて拜んだ。そしてその名刺を見つめながら考へて見ると、なに三郎とある以上はあと取りではなく、他家へ養子に行ける人だらう。それがここからさう遠くもない下魚の棚にゐるのだ！

そんなことを取りとめもなく繰り返して考へてると、疊に突いてた左りの手がしびれて來たので、

臆劫ながらそのかた向いてゐ半身を起した。そして右の手なる名刺をあわててもとの通りに押し隠した。客が何かを買つて歸つたので、母が立ち戻つて來るのであつた。

『やめなら、べべを着かへはつたらどうや——ままも喰べんならんさかい?』

『…………』こちらはどうでもいい氣でだが、おもい腰をも起して明り取りに明けてあるふすまの明きから奥の間へ這入つた。壁につけて簞笥が三さを並んでる、その一番緣の方に近い一つ——これには多く不斷着がしまつてある——の前に、まだ自分の銘仙の衣物がぬぎツ放しになつてゐた。『ほツたらかしといて』と、母の不精をつぶやいたが、矢ツ張り、このままどこかへ行つてしまひたいやうでもあつた。

障子を荒らかに明けて緣に出た。裏庭を越えて向ふを眺めると、樹木で一面にむツくりした東山にも色づいた葉が雲か霞のやうに縫ひ込まれてゐる。その南に當つて、また伏見のいなりさんの山が見える。秋の寂しい日光はさう云ふ見慣れた景色の中へもこちらを誘つて消え入らしめるやうだけれども、自分の心の目だけは——どうしたものか——あと戻りをして、自分の家や、川や停車場よりも後ろに當るところの魚の棚の方ばかりを見てゐた。

そして折角、斯う遠方行きの用意をした姿を再びこの部落にうづめ返すことがつらかつた。親切な相手さへあらば、どこへでもこのまま出奔してもよかつた。

喉のかわきをおぼえたので、奥の間から土間へ下り、その前なる流しもとの手桶から水を柄杓(ひしやく)で口移しにした。その音が聽えたかして、母は、

『べゝよごれるが、な！』

『子どもやおへん』と云つてやりたかつた。

『おまを喰べたらどうや、な！』

『………』こらもとう／＼その氣になつて、先づ帶を解き初めた。そしてぬぎツ放しのに着かへたが、そのあとをまたぬぎツ放しにして、自分で自分のお膳を拵らへて茶の間へ持つて行き、母の火鉢に近い板の間のところで食事(しよじ)をした。そして茶づけのお香々をぽり／＼云はせながらだが、停車場で注意を與へて吳れた人の親切を、わざとにも落ち附いて、ぽつり、ぽつりと話して聽かせた。そして最後(さいご)に『年の若い割りにはしツかりしやべらはる人どしたえ』と讃めた時には、それでも、われ知らず、箸をくはへた自分の顏が赤くなつた。

三

夜になると、二人は一緒に奧座敷に這入つて、いつも別々な床で西をまくらに寢るのだが、母は必らず箪笥に近い方をえらぶのであつた。

『若いものは泥棒が這入つて、引き出しを明けても知らへんさかい、な』と云ふわけの爲めだ。『泥棒云ふものは、な、箪笥の引き出しを上から明けんものや。上から明けたら、また締めてからでなければその下のが明からん。そやさかい、いツち下の引き出しさへ明かんやうにそのそばに寢てをりや、大丈夫なもんや』とも母は語つたことがあつた。

『……』今夜は、然し、高子自身には毎晩母と二人でし飽きた泥棒の心配などをしてゐる餘地もない程、自分の心を占領してゐるものがあつた。それは或物には違ひないが、何物であるかを自分ながらはツきり攫めなかつた。そのもどかしさに母ともいつもの通り親しく話をすることができなかつた。そして獨りで私かに考へつづけたのである、一旦思ひ付いたことを、けさ、とどこほりなく實行してゐたら、今ごろは、もう、長い旅の半分以上を行つたかも知れないと。

まだしたこともない旅と云ふものにも興味を持つてゐたのである。女學校に這入つてゐた時には、毎年修學旅行があつたけれども、そして多少それとなく同情を持つて吳れたお友達からその旅行に行つた方がいいと勸められたこともあるが、いつも皆と一緒に行く氣にはなれなかつた。父にかまはず、母の身うちから云へば、皆に對しても決して遠慮は入らないのだが、どうしても何だか馬鹿にされてるやうなのが面白くなくツて、いつも自分自身から遠慮だか敬遠だかをしてしまつた。そしてあとでは、その度毎に、思ひ切つて行けばよかつたか知らんとも殘念がつた。今もまたそれと同じやう

に惜しい氣がしてゐる。あのがや／＼した停車場をあさ出た汽車は、今も進んで行きつゝあるに相違ない。だのに、自分はおひるからゆふがた、夕がたから夜へと、もう再びは決心をしかねて時間をただあと戻りばかりした。

さきへ進む汽車とは自分は段々に後れるばかりで——それをばかり考へてると、丁度、試驗の時間に早いものは四五名も答案をすませて教場を出はじめたのに、自分はまだ問題を半分までも考へてないその苦しさ、つらさ、消え入るやうな思ひ。そこにも嵯峨やお室、さては高雄の紅葉に滲み込む秋の景色がゐ坐わりに自分の神經に現はれて——その方が矢ツ張り自分の氣を落ち付かせるやうでもあり、また落ち付かせないやうでもあつた。

『そないに思案ばかりしてたかて切りあらへんが、な』と、母も見かねて注意して呉れたのをしほに、こちらはほほゑみにまぎらせて聽き返した、

『ほしたら、どうしまひよ？』

『どないにと云ふて、わたいが聽かれても、仕よがないやないか』との答へであつた。『あんたのこツちやさかい、あんたが前の通りきめるだけや、な』

『……』こちらはさう云はれるとなほ自分の決心がぐらついて行つて、心がただむしようにかき亂れた。いツそのこと、やめるならやめろときツぱり親としての命令を發して貰ひたかつた。

『わたいは前の通りどツちやでもかめへん』と云つた母は、まだこちらの話の決着がつかないのに、寢床へ這入ると直ぐ、枕もとへ置いたランプをふき消してしまつた。

『……』こちらはわざと自分の床の中でそツぽうを向いてゐたのだが、闇の夜同樣の底もない國へ落ちて行くやうな氣持ちであつた。自分は今一度着て行くかも知れないと思つたので、いい衣物を重ねたままふすまの鴨居へ衣紋竹で掛けてある、その黑地に幅一分ほどの赤縞が一寸置きにすら〳〵と並んでるのを、つぶつて目さきの神經にちら付かせながら、あれを見て吳れた人には自分がまさか貧乏くさい家の娘でないことだけは分つただらうと嬉しかつた。尋ねて行きさへすれば、きツとまた親切に會つて吳れるだらう。と、蓋し、さう思ふには、あすは朝早くそれを尋ねて行つて見ようと云ふした心があつた。その樂しみを私かに樂しむやうに自分をあふ向けにして、うんとからだを延ばして見た。そして母にもそれを今かららち明けて置く方がよからうと考へたが、あたまを枕につけたままごろりとその方へ向いて、『おかはん』と呼んだ時には、笑ひごゑでだが、別なことを口に出した、『わて、矢張り東京へ行た方がよろしおすやろか?』

『さう、やなア』と、母もまだ眠つてはゐなかつた。が、返事は見當はづれで、相變らずもどかしかつた。『正しい子だねは欲しいけれど——おかねも惜しいし、な、若し取られでもしたら。』

『……』こちらは母の見當外れをそのはづれのままに理窟で押し付けて置かずにはゐられなかつ

た。無理を云ふ時のやうな聲なり憤りなりを以つて、『そんでも、あんたの家の爲めやないか？』
『そやさかい』と、母はむきになつて、『わたい、反對はしやへんやないか？』
『………』こちらはそれツ切り默つて、また橫を向いてしまつた。當り前の親なら、年ごろの娘を仲へ這入つた人が違てどこそこへ異れないかと云つて來ても、なか／＼威張つておいそれとはやらないのらしい。それをうちではあべこべに親からのしをつけてやらうとするどころではなく、その娘自身をして自分の相ひ手を探させようと云ふ。それも止むを得ず、尤もなことでないことはない。
『むかし、手の指が六本ある人と人とが夫婦になつたら。その子に矢張り六本ゆびがでけたけれど、その六本ゆびと當り前の人とのあひだにでけた子は、ひとりが同じかた輪であつても、今ひとりは人並みであつた。さうしてその人並みの子には、もう、かた輪がでけなかつた。』
『………』こちらは母のむかしばなしを自分の子供の時から聽かせられてゐたのだが、それが自分の將來に對して最もこころ得て置くべきことであつたことが初めて分つた時には、自分は母と共に抱き合つて泣いた。
『泣かんすな、泣かんすな』と、母は慰めて異れても、取り返しの付くことではなかつた。『これでもわたいの生れだけは穢多でも六本ゆびでもない。たツた一代か二代かでもと／＼通りになるこツちやさかい。』

『そんでも、わてのからだは一生直らへんやないか』と云つて地團駄を踏んで泣きわめいたのであつた。自分は賴みもしないのに、自分のこの生きた血といのちとを生まれた時から穢してゐたのは母だと思ふと憎ましくもあり、恨めしくもあつた。そして斯う怒らないではゐられなかつた、『なんでまたあんたはそんなお父さんを養子にしやはつたんや？』

『もう、そないなこと云はんでおいてんか、みなわたいが惡かつたんやさかい。』母はなほその娘に向つて詫びごとを云つた、『あんたやあんたのにイさんにすまん、すまんおもて、毎日罪ほろぼしに佛んを拜んでをります。』

『………』如何に佛さんを拜んでも、また幾たびすまないと云つても、然し、それですむことではなかつた。自分も親のならひをそのまま受けてお佛壇は——殊に、うちのは金ぴかのそれだから——大切にしてその前で念佛申すことを今でもしないではない。が、その佛壇の中には自分の父も這入つてゐることに思ひ及ぶと、その度每にいやな反感が生じるのである。けれども、母はそのさきの所天と二度目の所天との戒名をいつも一緒に並べて唱へてゐる。して見ると、二度目のも——母の四十近くになつてからのであつたのだが——それほど慕はしかつたのであらうか？お負けにさきのには子がなかつたのに——尤も、ひとりは生れたが死んだと云ふに——あとので自分らふたりを產んだのだ。それさへ、自分らから見ればいやらしいのに！どうせ後家をとほさないでまた男を持つなら、當り前の

男を持つて呉れたらよかつたものを――。

その失敗を母は今やその娘をして取りつくろはしめようとしてゐるのである。そしてこちらも亦その氣になつてたのだが、その相ひ手が――東京までも行かないかツて――手近にありさうで、何となく樂しいのである。

『負けとく、負けとく！』母は出あきなひの夢を見たかして、寢ごとを云つた。

『……』こちらがぞツとするまで思ひ出させられたのは、こないだ、あきなひに行つて自分もすんでのことでまた母の二の前に落ちかけたことをだ。自分はそれでも無事に逃げて來たけれども、昔の母はそんなことからでも素性のよくない男と仲よくなつてしまつた。『みだらな人』と心に云はせて、母のぐう／＼云ふいびきを目をつぶつて聽いてゐた。が、自分も亦ひとりで隨分自由な心になつてあたたまつた床の中に自分のからだを延ばした。そしていい夢を見て目がさめたり、また眠つたりして夜が明けてしまつた。

珍らしくも、母よりさきに起き出でて、先づ緣がはの雨戸をくり明けると、ゆふべからの樂しさに見渡される景色までが殆ど全く違つたやうに思へた。そして初めてこの家へ這入つて來たのかと思はれるほどのいい空氣に、氣がすが／＼してゐた。

『なんでそないに早う――』母はこちらに先んじられたのを不平さうであつた。

『わて、けふ』と、こちらはこれまでに見せないゑがほを以つて、『鐵道へ出やはらんうちに、あの人に逢ふて來まツさ。』

『それもよろしいやろ、な。』

いつになくおかゆやお膳の手傳ひをして、速かに食事をすませると、高子は急いで自分の鏡臺に向つた。そしてひさし髪を結ひかへながら、いつも思ふことだが、鏡に映る自分のまる顔が圓いなら圓いでもツと正しくあつて呉れたらと思つた。初めは買つた鏡が悪いので、人の顔をうへしたにつぶしたやうに見せるのかと考へたが、母の顔をよく見くらべて見ると矢ツ張りそれなので、これも遺傳の一つだとあきらめた。けれども、けさはそれが笑ひを帶びてゐるのである。いつも青いやうに憂ひを帶びてる眼つきにも、どことなく明るい光りがあつた。そして

『植原さんが』と、今やその名によつてその人を私かに思ひながら、『あんたのやうな、身なりも綺麗な御婦人』と云つたには、ただ身なりばかりでなく、顔のことをも云つて呉れたのだらうかと嬉しかつた。

きのふから重ねたままの衣物に手をとほして見たが、全く同じのでも面白くなかつたので、藤色地に白く秋草をこかまく刺繡した襟のを拔いて、襦袢は玉子色に源氏香を刺繡した襟のに換へた。帶もひわ色地に白く龜甲がたを織り出した博多のにした。そしてむらさき縮緬の三紋羽織をひツかけた。

そわ〳〵して出るのが自分にも氣はづかしかつたので、笑ひながら申しわけのやうに、
『あんじよう相談に乘つて吳らはつたらえいけれど、な』と云つて見た。すると、母はこちらが實際に東京行きそのことに知慧を貸して貰つて來るつもりだと思つてだらう、きのふの朝と同じやうに機嫌よく、
『まア、行て來なはれ』と答へた。

四

七條通りを眞ツ直ぐに西へ堀川に突き當り、川に添つて僅かばかり南へ下ると、その川はまた西へ曲つてゐる。そのかどの石ばしを渡ると、直ぐの白い練り塀が專心寺であつた。川ぶちから塀は十間ばかりもつづいて、その眞ン中に大きな門があつた。

途中から車に乘つたので、思つたよりも早く來た。そして車屋は門前で乘り棄てて歸してしまつた。この時刻にまさか、もう出てしまつたと云ふわけもなからうと思つたからである。蘇鐵や芭蕉の植わつてる庭を左りへ行つて、玄關で、
『きのふ停車場でお目にかかりました栗原高と申します』と云つて、小僧さんに先づこちらの來たことを植原さんへ通じて貰つた。が、自分の如きものに家に於いて會つて吳れるかどうかが僅かに疑問

になつた。

『お會ひ致したらは存じますが、これから直ぐ鐵道へ勤めに出なければなりまへんさかい』と云ふやうなことにでもかこ付けて、體よく斷わつて來はしないだらうかと思ふと、自分のあんまり心を安んじて出て來たのが大膽すぎて、わざ〳〵の恥さらしではなかつただらうか？

母の話によると、部落の人はよそへ行つても弱みのある爲めに氣が引けて、初めから決して人の玄關の敷き居をまたがない。またいで叱られる位なら、前以つてそんな恥ぢのうは塗りをしない方がいいと云ふ愼しみである。そしてその愼しみが男でも段々ひがみ嵩じて、

『お前は穢多だからきん玉が二つあるだらう』と云はれると、

『どう致しまして――矢張り、旦那がたと同じやうに一つほかありまへん』と、うそを以つて答へるさうだ。が、なんて、まア、女としては耻かしいことをこんな場合に考へ出したのだらうと思つて、自分の顏が赤くなつたのをおぼえた。若しや自分もさきの人に、

『穢多の子などにお目にかかることはでけまへん』とでも云はれたら――？

然し、――さうだ、自分は男ではない。さうだ、それから、自分がそんな女であることは分つてゐない筈であつた。また出て來て、

『どうぞお通り』と云ふその小僧さんに案內されて行くと、門から云へば眞正面に當るここの御本堂

に這入つた。

『………』むツと押し迫つて來た線香のにほひに、自分の素性をいつはる心が返り見られて、そら恐ろしい信仰をいつも通りに感じながら、お佛壇の前をとほつて、その横手に在る一室に達した。

『よう來て呉らはりました、な』と、言葉ぶりでは植原さんもかみがた者らしかつた。あわてて、まだ敷き蒲團をかたづけてゐた。

『早うあがりまして――』こちらは思はずぺたりとその室の外の疊へ坐わつてお辭儀をした。

『さア、どうぞお這入り――どうぞ。』その促す手つきもその言葉と共に年に似合はず巧者であつた。

『………』この人はうちのにイさんよりは恐らく世間慣れてるのだらうと思ひながら、室の中の方へ膝をすり入れた。

『ちよツと失禮します、顏をあろて來ますから』と云つて、渠は齒みがき楊子と手ぬぐひとを持つて急いでおもての方へ行つた。

『………』まア、よかつたと、こちらは安心したやうな、またなか〳〵おそろしいやうな氣がして、獨りになつてもまだ取りのぼせてゐるのが直らなかつた。明けツ放しの坐敷を一番下座の太い角ばしらのわきから見渡すと、上座の方にすゑてある低い机のうへには、お經のやうな物がのせてある外に、小

說本らしいのもある。この人も桃郎の『琵琶歌』を讀んだことがあるか知らんと考へて見るだけでも一層のなつかしみをおぼえた。

そのうちに、小僧さんが植原さんの食事を運んで來た。こちらの想像通り、渠はこの寺に下宿してゐるのであつた。まだ奧さんがなければ、そんな風にでもして貰はねばならぬだらう。もツとうちが近ければ毎日のやうに世話をしてあげてもいいがなと思つてると、多少は心が落ち付いて來た。そして自分の鼻には自分のお白いのかをりと共に襟もとから發する自分のあせばんだ肌のにほひが嗅ぎ取られた。すると、またこのにほひによつて自分の本性をあばき出されてはと云ふ恐れが出て、兩手できちんと自分の襟をかき合はせた。

『やア、失禮しました』と云つて、この時、渠は臺の附いた火かきに炭火を入れて自身で持つて來た。そして小さい瀨戸の圓火鉢に火を入れて、その方へ來いと無理に勸めたので、

『では、遠慮せんで』と、こちらも少しはあまえる氣味になつて近づいて行つた。

『けふは幸ひわたくしの休暇日です。』

『さよどすか？そんなら、ゆるりとお休みでけますところを、あんまり早うお邪魔しまして――』

『なんの、かまひません。ゆるりとお話を伺ひましよう。その代り』と、渠は色じろの福々しさうな顏に無邪氣さうな笑ひを見せて、『ちよツとその前に食事をさせて貰ひます。』

『ほしたら、わたい』と、こちらも向ふのほほゑみに釣り込まれてゑがほを見せながら、渠の一方の手を出した一人前のお櫃をこちらへ引き取つて、『お給仕致しまひよ。』斯う云つてしまつてから、初めて氣が付いて見ると、その蓮葉さに自分で自分の顏を赤くした。

『では、すみませんが――』渠もきまり惡さうに他方に持つてる茶碗を出した。

こちらが止むを得ず給仕をしてゐるあひだは、向ふも氣が詰つたかして、茶碗の受け渡しに遠慮がちな挨拶をするだけで、別に言葉はなかつた。それが丁度こちらのうちの居さふらふをでもしてゐるかのやうで、氣の毒にも見え、またをかしくもあつた。が、いよ〳〵火鉢を中にさし向ひになつた時には、何とかこちらからここへ來たわけをほのめかしでもしなければならなくなつたので、

『どうでしよ、わたし、矢張り、東京行きはやめた方がよろしゆおすやろか？』

『さやう、さ、な――一體、あんたの悲しいわけとは何でしよう？』

『………』こちらはそれを云ひに來たのではないので、まぎらし笑ひをして、ただ『そこにそこがおして、な。』

『それをうけたまはらんでは、わたくしも返事に困りますが――』

『………』こちらは向ふが堅苦しく出ただけに一層返事がでけなかつた。『えらう勝手のやうどすけれど、それだけは云へまへん。』

『では、そのことは別にして』と、少し興をそいだやうすであつたが、なほ渠は問ひをつづけて、『あんたは東京へ行て何をするつもりです。』

『女子大學へでもはいろおもひまして。』これは、然し、必ずしも望んでることではなかつたが――。

『そんなら、それで方針がつきましよう。あすこには寄宿舍もある筈ですから。』

『さよどすか？』自分ながら見當違ひのことだけれども、――だから、また、うはのそらで――同大學に關することを相談するやうにいろ〳〵聽いて見た。ところが、渠にも詳しいことは分つてゐないのでか、いい加減なことを以つて答へながら、話を別な方へ持つて行つた。こちらもその方が氣がらくになつてよかつたので、渠と同じ程の年輩の兄があることなどを語つた。

『わたくしは、また』と、渠も云つた、『六人兄弟です。そのうちのうへ二人、した一人はみな僧侶です。わたくしも滋賀縣の或寺へ養子に貰はれて行てをりましたが、坊主になるのがいやでそこを逃げ出しました。』そして十四歳の時から苦學生であつたさうで、三日三晩も食はず飲まず中學へ通つたこともあるとのこと。それに、どうした間違ひか、役場の戸籍に生れたことが落ちてゐたので、小學校へやツと這入れたのが十歳の時からだから、今でも中學校に學籍を置きながら、兵隊をのがれて自活をしてゐるのであつた。

『をとこはんは皆自由でよろしゆおす、な――わたしの兄も朝鮮へ逃げて行きましたのどす。』それ

は、然し兵隊や坊主ぐらゐをいやの爲めではなかつた。どこまで逃げてものがれ難い血のつながりには、その實、自由と云ふものはないのであるが、そこまでは無論うち明けることができなかつた。
『男子は兎も角えらうなりたいとか、何か大きなことをしたいとかおもて逃げ出すのですが、あんたのは』と、渠はちよツと笑ひを見せながら、『おかアさんの我がままからでも逃げたいのやあらしませんか？』
『さうどすやろか？』
こちらも無理に笑つては受けたが、母を思ひ出させられるのが、一番つらかつた。それだのに、渠は何かにつけて段々とこちらの東京行のきわけを聽きたさうにするし、こちらはまたそれを云ひたくないしするので、話はいろんなことに飛んでも、結局は行きづまつてしまうのであつた。
手すりのついてる高い緣がはを越えて、綺麗に造つてある可なり廣い庭の隅に八つ手の花が白く咲いてるのが見えるその方へ、こちらは度々目をやつてると、その塀のそとから川の水の流れる音が聽えて來た。自分の家の前を流れる高瀨川のとは違つて、ちよろ〳〵と可愛い音だ。そしてそれが今自分とさし向つてる男の住むところによく釣り合つてると思ふと、私かにまた顏が赤くなつた。
『高倉あたりは、今えいでしよう、な。』
ちよツと目と目を見合はせたが、こちらも何か云はねばならぬ氣がして、つかない返事ではあつた

が、

『えい庭どす、な』と賞めた。柳原の一番ひどいところへ行けば、喰つた魚の骨でも何でも、勝手の前や何かに、ところかまはずぶち棄ててある。わるぐさいのは當り前だ。それに引き比べて見ると、ここのお寺などは、掃除もよく行き届いて氣持ちがよかつた。人並みに四方の紅葉狩りなどには少しも行きたくないけれども、ここにはもツと心を落ち付けてゐたかつた。

けれども、さう思ふほど心の落ち付きが却つてなくなつて來たので、苦しいやうな、名殘り惜しいやうな思ひをしていとまを告げた。

『まア、よろしゆおすやろ』と、すツかり京都口調で云つて、見送つて來て吳れた。山形縣鶴岡の生れだと云ふけれど、十四の時からかみがたに來てゐる爲めだらうか、なかなかこちらの氣ぶんにもしツくり合つてゐるところがあるのが嬉しかつた。が、『あんたは一體どこどす』と聽かれた時には、こちらの住所を知つてひよツこり來て貰つては困るので、

『間の町を七條から上つたところの小さい吳服屋どす』とばかり、うそを以つて答へた。けれども、分らない爲めにつけ加へた小さいと云ふことだけは今度逢ふた時には取り消したくもあつた。おもて向きはつまらぬ商賣をしてゐるけれども、昔から母の家に附いてる相當な財産があることは知らして置きたかつた。都合によれば、

『もツと正式な勉強をしたいのどすけれど』と云つた植原さんの學費ぐらゐは、こちらで出してあげてもいいと思つてるのであるから。けれども、間の町とだけはいつまでもそを云つて置く必要があつた。

その間の町の角をも曲らないで、なほ眞ツ直ぐに歸りを急ぎながら、自分は、もう、あの人を朝鮮のにイさんとは見ないで、實際に專心寺の植原さんとして思ひ浮べてゐた。そしてふときのふの朝から自分の兒を思ひ出してゐたのは、植原さんを見てからの自分の戀であつたことも分つた。

『まだおひるにはずツと前やけれど、ままなど喰べんかてえい。うちへ歸つたら直ぐ休んだろ。さうして床の中で十分に植原さんのことを考へたろ。』斯う心に云はせながら、橋を渡つて自分の格子ぐちまで達した。そして格手に手をかける前に、いつもする通り、後ろをふり返つて、誰れか自分の素性を探りにあとを附けて來てゐはしないかと見たのである。

すると、意外にも、植原さんその人が橋のたもとなる柳のそばに立つて、こちらを見てゐた！

俄かに天が落ち、地が崩れて來たやうな仰山なおびえを以つて、こちらは家のうちへ飛び込んだのである。

五

『誰れや!』
留守居がなゝなるのでけふもあきなひには行かぬと云つた母も、びツくりしたかして、奥の方からけたたましい聲であつた。
『……』こちらはそれに對する返事をもできなかつた。鬼か泥棒でも這入つて來るのを防ぐやうに締めた格子戸にかきがねの輪をはめてから、奥に這入り、衣物をぬぐが早いか、箪笥の前に自分の床を出して、それにもぐり込んだ。そしてきのふからつもり積つた樂しい夢を見ようとしたのがあべこべにぐれてしまつたことを獨りで歎いた。
直ぐ歸つて來なかつたらよかつた――西山の方へでも車でまわつてもみぢでも見てゐたら!間の町など云はないで――反對の方の上御靈とでもして置けば!自分はうそを云ふにも、考へが足りなかつたのである。いや、からだはゐても心のゐない家などへ歸つて來ないで――直ぐ東京へ行つてた方がよかつたのだ!、いや、いや――さうだ、いツそのこと、この世に生れてゐなかつたらいいのだ!
年の割りに利口なあの人には、もう、何もかもこちらのことが分つてしまつただらう。多分、向ふへ歸つてから、渠はあさ喰べた物をもどすほどむなくそ惡く思つてはゐなからうか?こちらもまた、をなごの癖に初めて尋ねて行つたところで、而も若い男の人に向つて、よくも、まア、あんなに遠慮なく、お給仕などができたものだ。今更らながら、穴へでも入りたいほどで――向ふが鹽でもまいて

そのあとを清めながら、ぷり／＼怒つてるやうすまでが、如何にも氣恥かしく想像される。
それが最も殘念で溜らないのである。いツそ行かなかつたらよかつたのにと思ふと、自分のそんなことを考へたこころ根までが憎ましくツて、あふ向けになつた自分の胸を兩手でかきむしりながら、からだを左右に振りもがかせた。そしてくやし涙が枕の方へとめどなく流れた。

『ほんまにどないしたんや』と云つて、母はまたこちらの枕もとへやつて來た。これまでに、もう、二度も來て、いろ／＼聽いて呉れたのだけれども、こちらの胸が一杯になつて返事をしなかつたのだ。この三度目にも亦、母は斯うつけ加へた、『けたたましう歸つて來たばかりで、何もやうすを云はんで？』

『………』こちらは自分の母の心配さうな顏を下から自分のひたへを越えてにらむやうに見つめて、矢ツ張り、默つてゐた。

『また、男にけたいなことしかけられたんやないか？』

『それどころやおへん！』もツとひどい目に會つたと云ふ意味を不平たツぷりに聽かせたのであつた。

『ほしたら』と、母は案外にもその黑みを帶びた皺くちやがほに若返つたやうな恥かしみをも見せて、こちらの意味を取り違へたらしい、『却つてこツちやに都合よろしゆおしたやおへんか――向ふの

男はんが穢多やない以上は？』
『……』まだ東京へ行つて來たのではないと叱つてやりたかつた。が、間違つてでも自分らの望みのことに云ひ及ぼされたので、こちらもちよツと顏が赤くなつて、『そないなこと云ふてやへん！』
『ほしたらなんや？』母はまたもとの通りたよりなささうになつた。
『まるでちごてるやないか？』こちらも氣がむしやくしやしたので、かけ蒲團をはねのけて敷き蒲團のうへに半身を起して坐わり、目は引きつづいて母を見つめながら、『あんたは、な、ようも、ようも、わでをこないなやくたいな人間にお產みやした、な！あの人がわでをけたいにおもて、あとをつけて來たやおへんか？』
『ほ！なんでや？』
『なんでや！』と、こちらは母の呑氣さうな言葉を押し伏せるやうに繰り返してから、『そないにおとぼけやして濟みまツかい、な？』
『つけて來たら』と、母はこちらの目と言葉とをさけるやうにして、『ちよツと横へはづしやはつたらよかつたやないか？』
『誰れがあの人のついて來たのを知つてます？』
『あんたやないか？』

『わて、知つてやへなんだもん！』

『ほしたら、もう、あきらめるより仕よがないが、な。』母もこちらの心を受けたやうに失望のやうすであつた。

『間の町と云ふて置いたんどすけれど、こツちやの知らへんうちについておいでやしたんやさかい。』

斯う云ひながら、こちらはまたごろりと横になつて、蒲團をかぶつてしまつた。ひる御飯を取れと勸められたのをも斷わつた。そしてこちらのぬぎ棄てて置くよそ行きは、もう、殆ど全く用もなくなつたと思はれるのだが、母が頻りにたたんで呉れてるのを枕のうへから見てゐた。

母に注意される前からあきらめてはゐるが、なほ何となく悔し涙がこぼれた。この着物を着てゐた自分のあとをつけて來た人が憎いやうでもあり、またこの着物と共に可愛いやうでもあつた。

『またいつでも來て下され』と、親切ぶりを以つて云つたではないか？

『………』その人が直ぐついて來たとはあんまり意外でもあり、あんまり早わざでもある。而も橋のたもとの、柳がもとに――！何だか、曾て母と共にこツそり聽きに行つた淨瑠璃『三十三間堂』の文句にでもありさうだ。お柳はやなぎの精であつたが、あの人の姿もひよツとすると自分を思つて呉れてる精靈がそツくり現はれたのではあるまいか？それならそれで、おそろしいやうだが、自分の思ひは叶ふわけだらうけれど――

またさうでなくとも、自分の思ひが途々俄かに切になつたところから、わが身でわが身の思ひをまざまざとかたちに見せたのではなからうか？鳥うち帽を眞ぶかにかぶつた白い顏がこちらと目を見合はせた時に、にツこり笑つたやうであつた。そして手を帽子の方へ擧げたのは見えたが、その時、實際に脫帽したかどうかは——こちらが家へ逃げ込んだ爲めに——見きはめなかつた。今一度出格子からこツそりのぞいて見て、ほんとの人間であつたか、それとも幽靈ではなかつたかを突きとめたらよかつたものを。今更ら惜しいやうな氣がした。

それは兎もあれ、あの人とこれから交際して親しくなればなるほど、どうせおしまひには住所を云はなければならぬだらうと思ふと、戀どころか、ただの交際さへも斷念するより仕かたがなかつた。

『わたくしはこんな武骨ものですけれど、あんたさへおつき合ひ下されば、これから末長うおつき合ひ致しましよう』と云はれたことも、ほんの糠よろこびであつた。

『一筆申しまゐらせ候。けさ程はいろ〳〵お話を承はり、ありがたく存じ候へども、母とも相談の上東京行きはやめに致し、大阪の方へまゐることに相成候へば、もう、お目にかかることもなくと存じ殘念に候。何卒おからだを御大事に——栗原高子』と書いて、そのハガキを夜になつて自分で郵便箱へ入れて來た。そして母には別にそれに就いて何ごとも語らなかつた。どうしてもいま〳〵しかつたからである。

その翌日、かの女は自分でとう〳〵床を出なかつた。尤も、前夜、少し隔たつてる郵便箱まで秋の夜冷えに對する何の用意もなしに出かけたので、少し風を引いた氣味でもあつた。そのうちに、長火鉢のそばに臺ランプの光りがついたことがこちらのふすまの明きから見えた。母はけふのことを總はつて、佛壇のお燈明をいつもの通り改めたやうすである。と、やがて例の念佛が初まつた。また二人の旦那の佛名をも唱へるのだらうが、こちらもいつか自分の養子を貰つて死に分れたら、それを二度目のも同樣にして、植原さんのと一緒に念じてやらうなどと考へてゐた。

すると、そこへ尋ねて來て呉れたのは思ひも寄らぬその人であつた。

六

思ひも寄らぬその人が尋ねて來て呉れたので、——それは、もう、その壁で分つたのだ、——高子は今まで全く失望の爲めにぐツたりしてゐた自分をはね起して、先づ茶の間とのさかひのふすまをこちらから締めてしまつた。そして簞笥の上にあつた手燭に火をともして姿見に向ふと、自分の圓い顏は嬉しさうににこにこしてゐた。相變らず深いゑくぼが兩方の頰に出た。

お念佛を中止して挨拶に出た母は一旦立ち戻つて來たが、こちらの樣子を見て取ると、何も云はないでまた出て行つた。そして

『あんたが植原はんどすかいな、――まア、おあがり』と云つて、渠を茶の間へ案内して來たけはひだ。

『………』こちらにはそのけはひが實際に見えるやうな響きとなつて、心の目から胸にまで滲みとほつた。そして今夜の母ほど恐らく世にありがたい人はなからうと云ふ想像をゑがいた。

『ようこそ尋ねて來ておくれやした、な』と云ふ母の言葉が火鉢の坐からまた繰り返された。すると、渠の聲で、

『けふ、勤めから歸つて見ましたら、おハガキが來てをりましたので――』

『ほ――、あんた』と、母は優しくこちらへ呼びかけて、『わざ〳〵お呼び申上げたんかい、な？』

『ちがひますが、な――』こちらは假りの化粧を急ぐ爲めにこなお白いの毛ばけを頰に叩きつけてゐたが、自分ながら俄かに晴れがましいほどの聲になつてるのをおぼえた。『わて、もう、お目にかかれんかおもてましたのどす。』

『さよか？――娘は、もう、お目にかかれんかおもてましたのどすやさうに、まア、ようおいでやしとくれやしたえ、なア――こないなむさくろしいとこへ。』

『いえ、どう致しまして――』

『上御靈にをりましたんどすけれど、な、あきなひの都合でこないなとこへ引ツ込みまして。』

『………』こちらは十年あまりも以前の事をさう初手から辯解しないでもいいのにと思つた。却つて自分らの弱みを自分から白狀するやうなものではないか？

『御蠶のあたりもよろしいです、な。』

『こないなとこに比べましては、な。』

『………』しツと、こちらは詆止でも命じたかつた。たとへこんなところにでも、若し當り前の、そして相當なをなごがゐると見えるものなら、先づ、一と通りは、かまひはしないではないか？丁度、鼻が夜の光りに成るべく高く見えるやうに、お白いのこなをそこへつけてるところであつた。

『むさくろしいとこどすけれど、まア、ゆるりとして行てお呉れやし。』

『ありがたう。』

『よんべから風を引いたとか云ふて、寢てましたのどすが、な、今起きて來まツさかいに。』

『御病氣ですか？』

『へい——少し風を引きまして。』

『………』こちらは自分のことが云はれてゐるのをもとの子供に立ち返つた氣持ちで聽いてゐた。が、やがて銘仙の不斷着に着かへると、今度は風引きを大きく見せて粗末な假り化粧の申しわけにする爲め、きのふも持つて行つた白の絹ハンケチを喉に卷いた。そしてそよにも劣らぬ簞笥が三さをあ

ることをそれとなく見せるつもりで。手燭をつけツ放しにしてふすまを明けた。
『おう〳〵』と、母はこちらを見向くが早いか、力を添へるやうに、『おめかしやしたこと!』
『おいでやす。』こちらは先づにツこりして見せてから、渠が火鉢の長さの方のかみに坐わつてるその後ろをまわつて、母の坐と相對するがはの、それも少ししも手へ來た。そして疊のはづれの板の間へ渡つて坐わり、渠と少しはすかひに向ひ合つた。うちのことだけに、きのふほどはきまりも惡くないが、努めて平氣に見せようとしたその笑ひ聲には自分ながら顫えをおぼえながら、『風を引きまして、な、こないな風をしてます』と、渠と母とを等分に見つつ手を突いた。『きのふはお邪魔致しまして。』
『なんのお愛相も無うて失禮でした。』
『……』こちらが見ると、男の堅苦しくさう云つた目つきにも可愛味があつた。『わたし、嬉しゆおした、わ、――あんたがゐてて。』
『丁度休暇でして。』
『そんで』と、母はこちらを見て、『ゆツくりして來たんやな?』
『いろ〳〵お話も伺ひましたのどす、え』と、こちらの代りに渠が受けた。しツかりした返事で、なかなかうち解けてないけれども、その目が母とこちらとの孰れに向くかと見たら、矢ツ張り、こちらへ向いた。

『……』目と目とが出くわすと、こちらはまた微笑を促されたが、あとさきを考へるひまもなしに、斯う云つた、『あんた、どんな小說をお好きどす?』
『なんのこツちやい、な、出しぬけに』と、母は口を入れたが、こちらにはそれが聽き漏らして殘念であつたことの一つだ。
『いろ〳〵讀みましたが――』と云つて、渠はちよツときまり惡さうにこちらの視線をさけるやうにしたが、
『そのうちで』と、こちらはなほそれを目で追つて行つて、『何がおもしろおした?』
『さうです、な――』渠も亦こちらを見た。
『……』あれであつて欲しいと思つたら、果してさうであつた。
『琵琶歌でしようか、な。』
『ほんまに、なア』と、こちらは喜んで、『あのさとのは可哀さうやおへんか?』
『わたくしはまたあのさとのの兄にも同情します。』
『……』こちらには、渠がさう重ねてあの兄弟に同情して呉れるのが結構であらねばならぬのであつた。同じやうにこちらも特殊な部落の血を受けた兄弟であるから。ところが、今、渠がさう云つたには、こちらの素性を既にそれと判斷して來たのではないかと云ふ疑ひが出たので、自分ながらまづい

ことを云ひ出したものだと後悔された。で、聴きたい聴きたいと思つたことではあつたが、それツ切りで話を他に轉ずるつもりで、『「ほととぎす」も可哀さうな小說どす、な。』

『然し』と、まだ渠は同じことにとどまつてゐて、『あの不如歸はあんまりあま過ぎて、わたくしにはつまりませんが、琵琶歌の方は多少深刻で、意味ある同情を引き起します。』

『……』こちらはそれにしても穢多と云ふ言葉を一遍でもここで使つて貰ひたくなかつた。渠もそれをそれとなく遠慮してか、ただ

『兄にせよ、妹にせよ、あア云ふ境遇に置かれての悲しみなり、憤りなりは』と云つて、『讀む者の心の底から眞に同情を起させます。單にしうとの爲めに仲のよい夫婦が引き裂かれて、浪子が肺病になつて、死ぬなんて、わたくしには作者がただあり振れた感情をもて遊んだやうにほか思はれません。が、さとのが特殊な境遇に生れた爲めにあんな悲慘に落ち入つたのは、その周圍や社會が悪かつたことになつてをります。』

『さうしますと、なんどすかい、な』と、こちらもつい釣り込まれて、『さとのはんが所天のお　さんにけたいなことをしかけられたのも、生まれが悪かつた爲めどして？』

『いや、わたくしの考へでは、生れその物に善悪はありません――所天のお父さんが嫁さんの生れを卑しみ馬鹿にした爲めに、あんなことをやつて見ようと云ふ氣になつたのです。』

『………』こちらはこの時自分の母が佛壇の方へ目を向けてたのを自分の父を思ひ出してるのかと見て、いやな氣になつた。少し自分の顏をしがめながら、『さう書いてありましたかい、な?』
『はツきりとは書いてなかつたかも知れまへんけれど、わたくしはさう解釋します。ところが、わたくしの生れた國では、あア云ふ人を特別に區別せんで、矢張り同等につき合ひますので、わたくしも子供の時からそんな人を習慣として卑しんだり、馬鹿にしたりして來ませなんだのです。』
『それがほんまどす、わ』と、母は口を出した。その癖、母も穢多と云ふものをいやだ、いやだと口ぐせのやうに云つてるのである。そしてそれがこちらにも自分の當り前のやうに思へてるのだ。穢多を所天に持つた母は勿論、自分はまだ半ばそれでありながらも、その穢多を嫌つてるのに、この人だけがそれを何ともないと云ふのが俄かに興ざめて不思議であつた。
『………』ちよツと自分は母に目くばせしたのである。その意味は、渠がきツとこちらをそれと見てゐるに相違ないのだから、注意せよと云ふに在つた。が、母はさう取らないで、自分がうちの系圖を見せてあげろと云つたことに取つたらしい。
『世間の人はみな身勝手なもので、わたいらがこないなとこに住んでをりまツさかい、矢張り穢多の仲間のやうに申しますけれど、うちには立派な系圖があるのどす、え』と云つて、こちらがわざと明け放して置いた奥の間へ這入つた。そして簞笥の引き出しへ行つた。

『……』あすこを見て呉れいと渠に云はぬばかりにして、こちらは『お母はん』と呼びかけた、『來る時に蠟燭を消やしてお呉れやし。』

『あんた、ほんまに大阪へお行きですか?』

『えい——いいえ——』こちらは何と云つて渠の問ひに答へたらいいのかにまご付いた。別にそのつもりがあつたわけではなかつたので、病氣にかこ付けて、『こないに風を引いてをりましては、な。』

『それは直ぐにおなほりでしようが——』

『……』では、生まれ付きの穢れはさうでないと云ふのか?

『東京にしても、大阪にしても、都會ですから、な、うか／＼行くとあぶないですよ。』

『さよどすか?』こちらは母の立ち戻つて來る方へ目を轉じて渠の視線をさけたが、渠の可愛い口もとに見えた微笑はこちらの胸まで達した。

『これがうちの系圖どすが、な——よう見てお呉れやす』と云つて、母は渠の向ふがはに坐わつた。そしてお經のやうに折り本になつてるのを開らいて、熱心さうに説明をした。先祖は山科の宮つきざむらひで、それから分家してこの栗原の家は母が五代目である。代々、上京室町の上御靈に反物屋をしてゐたが母の代になつてから少し商賣が思はしくなくなつたので、得意さきを別な方面へ廣げる爲めに、餘り人の好まぬ柳原の部落へも手を出した。それが人から卑しめられる初めとなつた。

『……』こちらもそれは本統(ほんたう)だから本統だと云ひ添へたかつた。

『そんでも、な、わたいはあきなひの爲めやさかい、人が何と云ふてもほたらかして置いて、夏でも冬でも、反物を脊中に負ふて來てたのどす。そのうちに後家になりまして、二度目の養子を貰ひました。』

『……』それも事實には違ひなかつた。

『ほしたら、どうどす、世間ではそれが穢多や云ふやおへんか？その系圖にも書いておす通り、立派に大阪の人どすのに。』

『……』系圖には無論、大阪府西成郡云々なる農家の次男としてあることはある。けれども、それは自分らには眞ツ赤なうそであることが分つてゐた。母が父にせついて、誰れかにさう書いて貰つたのだとは、さきに母が自分に向つて白狀した。

『世間と云ふものは、何も知らんで知つたかぶりを云ひまツさかい』と、渠は答へた。

『さよどす、な。』母はそらとぼけて、『それがとの兒や兒の生まれました時にはひどなつて、御靈(ごりやう)の神主さんまでがお宮まゐりをさせて呉らはらなんだのどす。太政官のお布れで穢多非人の稱を廢すと云ふことがおすのに、その穢多でもないわたいらの兒に氏がみさんを持たせて呉らはらんのどす。』

『……』それも、然し、そんな世間としてはありがちなことだと、こちらにはまた寧ろ母に對する

反感が起つた。母は非人でも何でもないのに、わざ〳〵考へもなく穢多の兒を產んだのではないか？
『それはひどいです、な！』渠の斯う受けた言葉が特別に力づよかつたので氣が付くと、その顏には赤みを帶びるほどの昂奮が見えた。
『……』こちらには、渠のその昂奮と自分の反感とが何かに於いて一致したやうに感じられた。
『佛敎では』と、渠はその言葉の力をつづけて、『殊に眞宗では決してそんなことは致しません。』
『……』さうだ、信仰から來る一致だらうか？
『そやさかい』と母は喜んで、『わたいらはいつも阿彌陀さんを拜んでますが、な。』
『わたくしも眞宗ですから、彌陀の歸依には贊成します。』
『あんたもどすかい、な？』
『……』こちらには、然し、母がさう正直さうにそんなことをうち明けていいか、どうかと云ふことを考へられた。この部落に住んでゐて、さう眞宗熱心と見えれば、きツと部落の仲間に見られてしまうにきまつてゐた。
『ほんでも、な、世間にはあんたのやうにえい人ばかりゐて吳れまへん。わたいらは町內の人にいぢめ拔かれまして、よんどころ無う、こないなとこへ引き移りましたのどす。けれど、な、あきなひの都合どすさかい、決して穢多である爲めやおへん。』

『十分御同情申します。』

『………』こちらには、母ばかりが急いでその身をいさぎよく云ひぬけようとしてゐるかのやうにしか取れなかつた。

七

『わたいの家は決して穢多やおへん』と、母は誰れにでも少し親しみを感じて來ると必ず云ふのである。

『………』けれども、こちらの考へではさう〳〵辯解ばかりしてゐたくない。人がお前は馬鹿だぞと云つたに對して、いいや、わたしは馬鹿ではない、馬鹿ではないと云ひわけしてゐたツて、それが必ずしも信用を恢復する道にはならない。その上、それがあまりくどくなると、却つてあべこべに自分からその馬鹿と云ふことを證明してゐることにもなつてしまうだらう。

そしていよ〳〵そのやうなまづい結果になつたとしたら、困るのは母ではなく、その娘なる自分ではないか？自分の母には少しも賤しい血がまじつてゐないのだから、たとへ自分の父の血すぢが賤しかつたと云ふことが皆に分つたとしても、母自身には何ともないかも知れぬが、自分にはそれは最もいま〳〵しいことである。それも、自分が阿彌陀さんに向つた時は、隱し切れないことであるから諦

らめてるが、せめては世の中の人にだけなりと隱しおうせればと思ふのである。

だから、一番おしまひのところだけをうそで堅めた系圖ではあるが、ただ一應は見せるのもいいけれど、それを種にくどい辯解はさせたくなかつた。

『……』植原さんはまた植原さんで、こちらが見てゐると、系圖の中に何かのけがれをでも見つけ出さうとするかのやうに、頻りにそれを繰り廣げてゐるのであつた。

『そんな物、見たかて仕よがおへんが、な』と、こちらは渠に向つて云つた。

『なにを云ふのや？』母はこちらを咎めたが、なほ渠に向つてまことしやかに押し付けるやうに、『系圖と云ふものは家のたからどすさかい、な。』

『お母はんもそないな物しまひなはれ』と、こちらはまた母を押し付けるやうに答へた。『もツと何かおもしろい話でもしまひよ。』

『あんたは家のこととなると、ようぃやがらはります。』

『……』當り前ではないかと思つた。が、默つてゐた。

『これなら御立派です』と、渠は廣がつたのを折り疊むが早いか、それを兩手に持ち擧げてちよツと押し戴いてから下に置いた。

『……』こちらはその仕ぐさを見て、さきに渠が坊さん育ちだと云つたことを思ひ出した。そして

若しそれが渠の本心から出た仕ぐさなら、こちらがうその物を拜ませたのが勿體ないとまで思つた。そこに二人が信仰なり愛なりの一致點を見付けて、お互ひに全くうそ拔きなほどの親しみを感じたかつたが、こちらは一方にさう云ふ正直な心が出ただけ、また一方には私かに殆ど近づけないほどの隔たりができてゐた。

　けれども、母は渠をそツくり信用したらしく、

『まア、さう云ふわけどすさかい、な、あはれな親子やおもて、末長うつき合ふてお呉れやすや』と云ひながら、渠のそばを離れてもとの坐へ戻つた。

『あんたがたさへお構ひなくば』と、渠もその氣になつたやうに、『わたくしはこれからいつでもあんたがたのお力にも、御相談相ひ手にもなりましよう。』

『さうしてお呉れやしたら、この兒も喜びまひよ——兒がひとりおすけれど、遠方へいとりまツさかい。』

『さうやさうです、な。』

『もう、お聽きやしたかい、な』と、母は嬉しさうに笑つた。『えらうおしやべりの兒やさかい。』

『………』こちらはそれでもあの時そんなことしか話の種がなかつたのであつた。今夜だツても、折角來て貰つてゐながら、最早や何も云ひ出すことがないやうにもどかしかつた。第一、上茶を入れて

出したのだが、渠が飮んで呉れるかどうかを心配した。それから、飮んで呉れても、いや〳〵飮んでるのではないかと思はれた。

次ぎに、どうせ自分のこの思ひはぢかにうち明けられないので、信仰のことにでもかこつけて段々進めたいのだが、世間のこととは違つて、信仰のやうな、自分に眞面目なことは、いつはりを抱く身の口に出しては畏れ多くて、渠と共にはとても語り切れなかつた。

それに、また渠も眞宗の信徒だと云ふことに照り合はせて考へて見ると――こちらを穢多だと知りながら――そして知つたに相違ないのに――尋ねて來たのが既に不思議な上にも、こちらと共に容易に昂奮したり同情したり、平氣でこちらの茶を飮んだりしたのが、いよ〳〵以つて疑へば疑はれた。この種族の人で坊主になつてる人も多くあると聽いてゐるのだ。それが坊主をいやだと云つて逃げて來たからとて、若し當り前の家なら、若い者をさう獨りで貧乏させて置くわけがなからう。

『あんたの悲しい云はれたわけはお母アさんのお話でざツと分りましたけれど、東京なり大阪なりへ行て何を勉強するつもりですか』と、渠が尋ねたので、

『あんたも鐵道にゐてて』と、こちらも問ひ返して見た、『何におなりやすのどす?』

『實は』と、渠は正直さうに答へた、『もツと學問をしたいのですけれど、親が學費を出して呉れませんので、あア云ふことをやつてをります。』

『お父さんがおかねを出して呉らはらんのどすかい、な？』
『さうです』と、渠は今度は母に向つて答へた。『逃げ出して來ましたので。』
『若い者はみな親から逃げたがるものどすかい、な？』
『さうきまつたわけでもありますまいが――』
『………』その逃げたと云ふことも亦こちらのと同じ事情ではなかつたのだらうか？して見れば、こちらの思ひは全く破れてしまうわけだ。東京への希望が渠を知るに至る手續きであつたとすれば、大阪へは――都合によれば――渠と一緒にでも行きたかつたのである。
『あんたのやうなえい人に――親がかねを送らんとは、な――』
『………』うちで出してあげたらどうだとも云ひ添へたかつたのだが、あんまり云ひたいこと、聽きたいことが胸一杯になつてゐて、却つて一つも口へは出せなかつた。
『そんでも、あんたは男はんやで結構どす、わ』などと、母はこちらの心も察しないで、こちらのやツと物を云はうとし出す腰を折つてしまうことがたび〳〵であつた。
『………』こちらは母のおしやべりにむツとしてゐたので、渠が京都と云ふところは見物の箇所が多いと語つた時、『一度あんたと一緒にもみぢ見に行きまひよかい、な』と云つて見た、『お母はんはほたらかしといて？』

『それも結構です、な。』
『逃げられるよりやましどすか』と、母も仕かたなしのやうに他の二人と笑ひを共にした。
『………』一度は何とかして、誰れもほかに人がゐないところで、兎に角、心と心とを突き合はして見たかつた。
『けふはこれで失禮致しますが――』と、渠はやがて歸り仕度になつた時、顏を赤くしてゐた。
『まだよろしゆおすやろに。』こちらも赤い顏になつたやうで――斯うなると、何だか、もツと止めて置きたいのであつた。渠も一旦坐わり直してかたちを正したまゝ、もぢ〳〵してこちらを見つめて、
『あんたは、しかし、ほんまにいつ大阪へお行きです？』
『………』まだそのことを心配してゐるのかと思ひながら、微笑にまぎらせて、『實はわたい、どこへも行きとおへんのです。』
『それではまたお目にかかります。』斯う云つて、渠がいよ〳〵いとまを告げて歸つて行つたあとを、母は矢鱈に讚めて聽かせた。そして、
『わたい、あの人すツきや』などと繰り返した。
『………』こちらは母の相ひ手になるべき人でもないのにと思ふと、その席に母のゐたのが殘念であ

つた。そして母があの人に對して好き嫌ひを云ふのさへ妬ましかつた。今や云ひたいことも云はない
ですんだその自分ながらの不平の持つて行きどころがないのを、ここにゐない渠のうへに持つて行つ
て、『そんでも、な、あの人は矢張り穢多かも知れへんで。』
『どないしてや？』母はその目を一杯に圓くした。
『でも、貧乏なうへにあんまり話が平氣やさかい。』
『あ、そや〳〵！わてもちよツとさう思はんでもなかつた。』
『……』さうだ、さう思つてをれ、思つてをれ！そのあひだに、こちらは獨りで渠のさうでないと
ころを十分に考へて樂しんでゐたいのであつた。

八

それからと云ふもの、高子は自分が世間に對する恐れや戀しさを全くたツた一人の植原さんに集め
てしまつた。
　自分は自分の周圍の世間に對してはこれまでの經驗上恐れや憎しみを持つと同時に、自分から遠い
ところの世間を想像して、何となくそれが戀しく慕はしかつた。ところが、この二箇の別々な世間が
今や自分に一つになつて、憎みにも慕はしさにも植原さんばかりがただ一つの相ひ手になつた。一ち

では、若し
『あんたほんまに穢多でしよう』とでも渠が云ふなら、こちらも直ぐ
『あんたこそ、そやおへんか』と云ひ返してやる覺悟は用意してゐながら、他方ではまた三日と置いて渠の顏を見ずにはゐられなかつた。そしてこちらが渠を尋ねて行けない時は、渠に必ずこちらへ來て貰つた。

そしてこちらの不思議なことには、渠が段々と子供ツぽく見えて來たのである。初めはその年の割りになか〳〵おとならしい物の云ひかたをしてゐたのが、親しくなるに從つて、その四角張つた他國ものらしいかどが取れて來て無邪氣に京都人そツくりの言葉使ひをすることもある。

或時、ひるまはうちにゐたが、
『その代り、けふは夜勤どす』とのことであつたので、夜、こちらもそれとなく遊びがてら停車場へ行つて見た。すると、他人に向つては鹿爪らしい言葉を使つてたのが、こツそりこちらのそばへ來て、訴へるやうに『何かうまい物たべとおす、な』と云つた。可愛くもあり、氣の毒でもあつたので、こちらもこツそりよろかんを買つて來てあげた。すると、また、それが役員中のおほ評判になつて、
『あのをなごは何ものや——何ものや』と、四方八方から渠を取り卷いたさうだ。そのことをあとで

渠は面白さうに語つて、

『あれは僕のねえはんや云ふてやつた』と嬉しがつてゐた。

『ほんでも、な、わてのこと云ふたら聽きまへんさかい。』斯う念を押したのには、こちらが柳原のものであると云はれたくなかつたのは勿論、またこちらが渠自身に向つてほれてるのだともだ。但し。こちらは毎晩夢にまで見てこの情を折りある毎に示めしてはゐるのだけれども、肝腎の渠がいつも氣付いて吳れないのである。それほど子供でもあるまいにと思ふと、却つて憎らしくもなるのだ。いや、その憎らしいと云ふことを今一歩進んで考へると、渠はこちらをてツきり例のだと見て、まだなか／＼警戒してゐるのかも知れなかつた。

一度もみぢ見の約束を果す爲めに、二人であらし山へ出かけた時、嵯峨停車場を下りて川添ひをのぼつて行くと、どうしたわけか渠がずん／＼さきへ行くので、こちらはそのあとをちよこ／＼と急いで追ひ付いた。すると、その時丁度意地惡さうな顏をして行き違つた女の子がこちらに向つて、小癪にも、

『よう似合ふてます』と冷かした。

『……』見つきでは何の似合ふものか？こちらは兎も角お召しを來てゐるのに、渠は木綿着だ。やがては何か一ついいのを買つて進上しようと思つてるのだけれども、そして母もそれに同意して吳れ

てるのだけれども、まだ渠に向つてそれを云ひ出す折りがないのであつた。が、この時思はずひやりとしたのには、そんなことの不釣り合ひを考へたばかりではなく、こちらをまた見知つてるものではないかと思つた。が、こちらをふり向いた渠と顔を見合はすと、渠も亦ちよツと耻かしさうにもみぢ色になつてゐた。それを見て、こちらのひやりにも亦熱が加はつた。察するところ、渠はあんな女の子がにや〳〵と底意地悪い笑ひを見せながら向ふからやつて來たので、それを耻かしくツて足を早めたのであつたらしい。

『……』うひ〳〵しい渠も物を云はないで進んだ。

『さくらの時とはちごて、秋は矢張り人もすくのおす、な。』こちらは全く別なことにかこつけて、やツと口を出した。が、心では男と一緒に並んで歩いてのるが一番嬉しかつた。若し自分が卑しい素性だと云ふことをうち明けても、なほこのつき合ひができるものなら、——そしてその爲めに却つて二人の情愛がしツかり結び附くものなら、——一度渠に何もかもすツかりうち明けて共に泣いて貰ひたいほど、この自分の、秋が滲み込んだやうに寂しい胸の中には、正直な心が浮んで來ないではなかつた。

が、向ふ岸の松の根もとをすツきりした姿の女——どこかの奥さんだらう——が、すぼめたからもり傘を地に引いて、その旦那さんらしい洋服と共にむつましさうに歩いてゐるのを見ると、その見物

ぶりがうらやましくなつたと同時に、自分の境遇が返り見られた。そして自分の斯うしてゐるのが寂しいよりも、悲しいよりも、一しほおそろしくなつた。そして、それには巡査のがちや／＼云はせる帶劍が思ひ出された。

部落の或娘が女中奉公に出た。すると、その前に一度部落づめであつた巡査がその近所に來てゐて或時そこへ戸口調査に來てそれを發見した。そして、知つたか振りをして、

『お前は穢多ではないか』と云つた。さう云はれた娘はその場にゐたたまらなくなつて、その家を逃げ出した。そしてまた別なところへ奉公して見た。すると、また、折り悪くも同じ巡査に發見されて、『また來てる、な』と云はれた。今度は別に穢多であるぞと云ふことはあばかなかつたけれども、その娘は同じやうにおぢ恐れてそこをも逃げ出したと云ふ。

自分らはそんなことを聽き知つてるので、部落の巡査どもには、それがひとりびとり來る度毎に、よくしてあるつもりだ。が、渠等はいつも駐在場所がかはるものだから、さきにゐたものが、あらし山附近に來てゐないとも限らない。そしてそれにでも行き合つたら？

さうだ、渠等のうちにはいやらしいことを云つて、こちらをぶしつけにからかつたものもあつた。そんな者に若しこんな場所でこんなところを見られたら、今の女の子の冷かしどころではなく、以前の恨みを報いるのはこんな時だなどと考へて、もツと、もツとひどいことを云はれるかも知れない。

それが最もおそろしいのであつた。

植原さんは渡月橋まで來ると、

『どうです、山へ這入つて見まひよか』と云つた。

『えい。』こちらもその方が贊成なので、橋を渡ることにした。人出が少いと云つてもぽつ〳〵見える間を、わざ〳〵かうもり傘で顏を隱すやうにして歩いてるよりも、どこか皆とかけ離れたところで二人ツ切りになりたかつた。それほど自分の心が沈み氣味になつてゐたのである。

が、渠は大變にはしやぎ出した。山全體を我が物がほにして、あちらの巖へかけ上つたり、こちらの木の根に飛び付いたりした。そして一ケ所、水の幅びろく滲み出たのがやま路を横切つてる、そのあひだを飛び越えた。僅かの幅だけれども、こちらはそれを獨りでまたぐことが女としてできかねた。お腰のうらまで見られるやうで。それに、はいてる空氣草履をぬらしたくもなかつた。で、さきに進むのを

『植原はん』と呼びとめた。この時、下の川の水音が右手から聽えて來たが、――『賴みまツさ!』

『………』渠はあとをふり向くと、直ぐ戻つて來たけれども、ただ突ツ立つてゐるのであつた。そしてあたりの木々の葉いろが映つてるばかりでもないと思はれるほどその顏を赤くしてゐた。

『………』こちらはすぼめた傘を左りの手に突いて、右の足を湧き水に出てゐる石の上に乘せてゐな

がら、俄かにからだがぐら／＼する程ど胸のとどろきをおぼえた。が、向ふへさし延べた右の手を引ツ込めることもできない氣がして、思ひ切り命令するやうな、またあまへるやうな聲が、『さア！』

『………』渠はこちらの手を取つて呉れなかつた。『ちよツと待つてゐやす』と云つて、おもさうな石を兩手で持つて來て、それを今一つの渡りにして呉れた。

つまり、こちらの心の望み通りにして呉れなかつた、のをむツとして、自分は獨りで二つの石を渡つたのだ。が、そんな轉婆にはまだ經驗がないので、渡つたことは渡つたが、そのはづみで倒れかけて手のひらを地上に突いてしまつた。そして傘のひわ色をも少しぬらした。

『あんた薄情や、な──あんたは！』こちらの目には十分恨みを籠めて渠をにらんだ。そして絹ハンケチを出してよごれた手のひらを燒けにふきながら、この手がさはつた位で身の穢れがうつるものでもあるまいにと思つた。

『衣物をぬらさんでよろしゆおした。』渠はすみませんとも云はないで、また無邪氣さうにさきに立つた。そして大きなもみぢの樹が一つ、太い幹や枝々を大きな岩の横から下の流れをのぞくやうに出してる、その根もとへ來ると、それへ馬乘りになつた。

『べべがよごれますが、な！』斯う寂しい聲でだが、こちらが微笑しながらそのそばへ立ちどまつた。

『えい景色やおへんか？』

『さよどす、な。』こちらも渠の言葉や樣子通りに打たれて、まじめになつた。

目をじツと明けてゐられないほど危險さうに川の中へ突き出てゐるところだ。下の方からは水の音が川しもよりもひどく聽えると思つたら、川の中には岩が多くあるのであつた。木の廣げたえだ葉が家のひさしのやうに平たく二段にも三段にもなつてる、そのあひだをとほして眺めると、多くの岩と岩とのあひだに、水の渦が卷いてゐる。その中をまた船が一つ下だつて來たが、岩にぶつかりかけると、乘つてる人がさをを持つてその岩を突くのだ。すると、船の方向が器用に轉じる。男の客が二名乘つてる。そして次の岩に來ると、またそのさをで船を少しよこへ向ける。すると、また次ぎの岩だ。これまでに見たこともない自分には、それがあぶなツかしくツて見てゐられなかつた。けれども、

『あれが例の保津川下りの船どす』と說明した渠は、さう云つた時に一度こちらをふり向いた切り、じツと下を見つめた。そして、ついには『おもしろい、なア』と云ふ獨り言になつた。

『……』こちらは男と云ふものを憎らしいものだと思へた。こちらが渠を思つてるのは大抵分つてる筈だのに――若し渠の無邪氣がわざとであつて、その實、本心では、渠が同種族でないことの故を以つてこちらを嫌つてゐるのなら、渠を今ここから突き落して自分も一緒に死んでしまつてもよかつた。が、死ぬなり殺すなりはいつでもできると思つて、『もう、いきまひよ』と渠を促した。

橋のたもとまで山を下りて來ると、橋をまた向ふへ渡つた。そして渠の好みに從つて三軒家の茶屋へあがり、渠の爲めに鯉こくを御馳走した。酒を飲むなら取りますと云つて見たけれども、渠は飲みたくないと答へた。この時にも、結局、自分は渠の心を捕へてしまふことができなかつたのである。自分としては、いま〳〵しい遠慮やら弱みやらが自分にこびり附いてるからで――。

けれども、渠は箸を運びながら、別に少しも惡意がないやうすを以つて、

『僕、あんたと一緒に日本中のあはれな部落民の爲めに盡しまひよか』と云つたツけ――穢多とか特殊部落とか云ふことを無遠慮に云ふやうになつたのを見ると、初めのほどとは違つて、こちらをそれとはしないで、夫婦になつてもいいと思つてるやうにも見える――『慈善事業でもして?』それには丁度あんたは事情も分つてて都合がよろしゆおすやろ。』

『そんでも、わて穢多はきらひどす』と、こちらは一も二もなく答へた。

渠は母のゐる前ででも言葉を遠慮しなくなつて來た。そして滋賀縣にゐる時、或友人の寫眞機を持つて二人で穢多村を撮影しに行つたことを語つた。その村で割り合ひに立派さうな家に向つてレンズを向けてゐたら、その家からひげの長くはえた人が出て來て、如何にもおも〳〵しい調子で、

『國に要惡あり、一家に主人あり』と云つた。何をされるか分らなかつたので、寫眞機をそのままに手ぶらで逃げて來たさうだ。

『穢多にかて圍右衛門を初め、えらい人がをりまッさかい』と、母はこの時返事したが――
『……』そんな辯解をするだけ穢多の根性に落ちてるのではないか？

九

『あんたはまだ書生はんも同じどすさかい、おかねがいる時分にはいつでもわたいらのとこへ云ふておいでやすや』と、母も渠の爲めに好意を添へる氣になつてゐた。

が、渠は――どうしたつもりか――そんな無心を云ふやうすもなかつた。ただ無邪氣さうに世間ばなしをして、それでも割り合ひに世間のことをよく知つてるので、こちらの狹い見聞を廣げて呉れた。或夜など、母のかはりに、

『僕がお經をよんであげまッさ』と云つて、佛壇に向つて阿彌陀經一卷を讀んだ『によぜがもん、いちじぶつざいしやゑこくぎじゆぎこどくをん。よだいびくそうせんにひやくごじふにんく。』なか〲上手であつた。

『若いのに感心な人やで――』母は半ばお寺の住職に對するほどの信用を以つて渠をも信じてゐたので、高子がたび〲渠と行き來するのを少しも邪魔しなかつた。で、かの女は自分として自分の切な心が十分に渠に通じるやうにさへすればよかつたのである。

好きだと云ふむし菓子を持つて行つたこともある。一緒に喰べる爲めに牛肉を買つて行つたこともある。銘仙の中ぶるを外出着に與へたこともある。また、銀貨やお札を無理に渡したこともある。けれども、渠がこちらを女として飽くまで愼み深くしてゐるのをこちらは憎いとも、また一しほ奥ゆかしいとも思つて來た。

向ふからだツて、たまには、こちらの手に觸れようとして來たと思はれることがないでもなかつたけれども、そんな時には渠も顏を眞ツ赤にして中止した。その顏を赤めるのが事をさし控へるしるしでもあつたやうに。

それがやがて渠の女に對するうぶで卑怯な爲めだとは分つたが、さうかと云つて、こちらからも手を出す折りがなかつたのである。まかり間違つて拒絶でもされたら、自分が若い女としてこの上に生きてゐやうがないのだ。

東京へ出ようと決心したのは、好きでない人にでもかまはず何とかして貰ふ覺悟の爲めであつたが、植原さんを知つてからは、今や死ぬにも渠でなければならぬやうな氣だ。たとへからだの關係がないうちに自分が死ぬにしても、渠と共にでなければ往生ができさうでもない。それだのに、渠の方では平生あんまりかかはりがなさ過ぎてる！

『あんた死にとなることがおすか』と、こちらがそれとなく聽いて見た時、渠は取り付く島もないや

うな返事をした、

『そんなことはあんたはんのお母はんにまかせときなはれ。』

『………』尤も、こちらの信じたところでは、渠はもツと勉強してえらいものにならねばならぬと云ふことを心から考へてゐたのだ。それも賴母しかつたので、兼て母と相談して置いた通り、向ふが養子になつて呉れるなら、そしてこちらの兄が見棄てた家をこちらと共に繼いで呉れるなら、望みの學校へ入れてあげてもいいと云ふつもりで、『都合によれば、あんたの學費はうちで出してあげてもよろしゆおす』とまで、これもそれとなく、うち明けて見たこともある。

　が、渠の返事はそんな時に限つて責え切れなかつた。何となくその胸にまだ一物を持つてるかのやうに、

『お心ざしはありがとおすけれど――』などと。で、こちらは母には、もう、あきらめてる樣子を見せて、はツきりと

『とても駄目どす、わ』と告げながらも、渠に向つては、この點に關する渠の決心を促すやうなことにばかり、逢ふ度毎に意を盡してゐた。

『特殊部落民の爲めに慈善事業を――』

『………』こちらの本意ではないけれども、そんなことで先づ以つて渠の意を迎へることができるな

ら、それでもかまはないとまで思つた。いよ〳〵結婚してしまへば、もツと別なことを勸めて二人で心づよく、また安心して、廣い東京へなりどこへなり自由な家を持つてもよからうと――私かに。

そのうち粂は或朝尋ねて來て、出しぬけに

『鐵道の方をやめました』と告げた。

『………』では、いよ〳〵こちらの望み通りになるつもりかとその初めには見て取つた。が、それにしては前以つて何の相談もなしに突然のことであつた。『一體』と、暫らくこちらは粂の顏を見てゐたが、『どうしてどす?』

『國から歸れ云ふて來ましたさかい。』

『國から――歸れ――?』ぢやア、これはきツとこちらをいやになつて急に逃げるのだと思はれた。水をあびせかけられたほど俄かに冷やかになつて、わざとらしくただ『へい――』と云つた。そしてそのわざとの冷やかさがその場に心をまでも眞ツさをに塗りかへたかと思はれるほどのすご味を自分に感じた。逃がすものか、どこまでも行くところへ追ツかけて行つてやる!

『實は、兵隊に行かねばならんことになりました。』

『兵隊にんどすかい、な?』母はそれを眞に受けたらしいが――。

『………』こちらはそんな手に乘るものかと、心で叫んだ。まじめ腐つて、そんなうそを! いふな

ら正直にいやと云へ、殺してやる！どうせ、お互ひは世間から執念深いとも云はれてる仲間ではないか？斯うなると、渠をも穢多の仲間と見ないではゐられなくなつたのだ。こちらの日常生活にも實際に親しみを持つてゐながら、一方ではまたそれを嫌ふ。嫌つてそしてこちらの愛を途中から受けまいとする。そんな奴はまた他の世間へもぐり込んで、無理にも第二の父となり、また第二の高子を産ませるのだらう。自分の生まれを呪ふだけ、ますます〳〵そんな考への人を自分は許すに堪へられなくなつた。目も引き釣つてるだらうと思ひながらも、俄か思ひ付きの意地悪い皮肉を口に出して、『あんたもいぢめられまツせ』と云つた。自分の聽いてるところでは、自分の同種族は軍隊に這入つても他のものよりひどく虐待されるのだ。

けれども、渠はこちらを惡く取らなかつたのか、それともなほ白ばツくれてか、

『僕も行きとないのどすけれど』と、相變らず親しみのある言葉ぶりであつた、『これは國の爲めやさかい仕よがおへん。』

『困つたことになつた、なア』と、母もがツかりしたやうすだ。

『……』母のやうすは、その實、こちらの失望を示めして吳れたのであつた。思ひ返して見ると、渠は矢張り近頃の渠であつて、もとのそれではない。若し逃げるつもりなのなら、もとの、初め通りの、渠に立ち返つてるところがどこかに見えなければならぬ。ところが、もとのやうな

『わたくしは』で初まる堅苦しさは再び見たいと云つても見られないのであつた。そこにこちらの心はまたひとりでに和らいで來るのをおぼえた。

『ほんまどすかい、な』と、微笑になつて、改めて問ひ返した。

『ほんま――』渠はその優しい目を以つてこちらを不思議さうにながめた。『僕前に云ふてたやおへんか、徴兵のがれにまだ中學に學籍を置いてますと?』その不自然な行きかたを學校も承知しなくなつて國の役場へ通知した。そして役場からまた渠の實父へかけ合つたのだ。『あんたはうそやおもてやはるけれど、この手紙を讀んでお呉れなはれ』と云つて、渠は今度は不平さうにその實父から叱つて來たのを見せた。

『………』それを讀んで見ると、どうせ一度は行かねばならぬ兵隊のことだから、いッそ今のうちに行つてしまう方がいいとあつた。無論、ことし、試驗なしで入隊するのだ。『ほしたら、行ておいでやす。その代り、な、すんだら直ぐ戻つて來てお呉れやすや』と、もう、こちらにさう要求する權利でもあるかのやうに云つた。

『………』渠も名殘り惜しさうに別れを告げた。

　こちらはまた渠の歸國の旅に要する喰べ物に入隊までの小使ひを添へて見送りをした。が、別れてから日が重なるに從つて、戀しさがいや増した。そして渠を假りそめにも自分の同族と思つたことを

勿體ないやうな氣がして來た。

『可哀さうに、な、あの人までをちよツとでも穢多やおもて。』

『わても確かにさうやないおもてます』と、母も答へた。『はやう兵隊はんの三年が明けて呉れりや――』

『………』いよ〳〵入隊の通知が來ると、その三年がます〳〵待ち遠しくなつた。そしてそのあひだに、今まで渠を多少見くびつた報いとして、こちらが忘れられてしまうやうな氣がしてならなかつた。いや、さう云ふ氣を向ふに向けながら、こちらはまたどうせこんな身でと云ふあきらめを着けつつあつたことに氣が付かなかつた。

一〇

それは、然し、渠の兄だと云ふ坊さんが無心を云ひに來たので、こちら自身に意識されたのである。

さふらふ文のやり取りではどうもこの寂しさに滿足が與へられないので、最後には一つ見舞ひがてら渠のところへ行つて來ようかとも思ひ出した。そしてその意を相談がてら向ふへも通じて見たのだけれども、その返事が相變らず煮え切らなかつた。その上、向ふからの手紙の十日目が二十日目にな

り、二十日が一ケ月置きになつた。

　こちらも旅費を使ふ代りに、一度拾圓のかはせをためしに送つて見た。そしてそれに對する返事を待つてゐると、待ち受けた期日より廿日も後れて、――渠の返事ではなく、――渠の兄と云ふのがやつて來た。そして先日の禮を云ひ傳へたのは滿足だが、同時にまた五百圓の無心をした。銀閣寺の近處で養鷄事業をやつてる人があるが、それに資本を出してやらぬか、儲けは分配するからと云つて。

『人を穢多と見て、馬鹿にして來たのや』と、こちらは直ぐ見破つてしまつた。植原さんの兄がひとり京都に坊主をしてゐることは兼て知つてゐたが、放蕩に身を持ち崩してゐるので、渠もそれを避けて成るべく會はないやうにしてゐた。こんな人がかねを目當てに養子に來ると、かねを使ひ果したらへ、家をも子をも見棄てて逃げてしまうのだらうと思へた。

『うちはこの通り貧乏どすさかい、とてもお望みには從へまへん』と、母もきツぱり斷わつてしまつた。

『然し』と、その人は、植原さんの兄であるのを笠に着て、『おとうとにもさう貢いで戴けるほどなら――』

『……』何を云ふのだ、畜生！母はかねのことを云はれたのでぎよツとしてしまつただけだらうが、こちらには今一ついま／＼しいことがあつた。坊主の袈裟をまとつてゐながら、そのこちらを誘ふや

うないやらしい目つきには、こちらのからだを――おとうとにも許したと思つてだらうが――この兄にも許せと云つてゐた。

愼みのうへに考へ深くあるべきことをそれとなく行ひの上に教へて吳れたあの植原さんがなかつたら、或はこんなのらくら坊主にも――ただ正しい種を得たいと云ふだけの故を以て――こちらの身を許したかも知れない。が、今や自分は愼みを教へられたうへにも、また、考へ深い人だッてその身うち以外では少しも賴みにならぬことをも知つた。

もう、植原さんが手紙で直ぐ挨拶をしないで、冷淡にもこんな坊主をよこしたことは責めない。渠には如何に放蕩者でも、無禮ものでも、その身うちの方が穢多よりも大切に考へられたのであらう。こちらはこれだけ心を盡してゐたのに、そんなことは少しも取り合はないで、渠はその兄の事業費か放蕩費かの爲めに世間に秘密な金の出どころを教へたとは！少くとも、確かに穢多だと告げたらう。

斯うなると、こちらにも自分の兄があることが俄かにまた思ひ出された。そして、それがこちらと同じく結婚もできないで、獨り困つてゐるだらうと戀しくなつた。そしてまた、植原さんへの當てつけに、自分は自分で朝鮮へその兄の手助けに行つてやらうと考へられた。先づ植原さんへ手紙を出したのだが、――

『あなた様のお言づては本日』と、わざ〳〵期日のあまりに後れたことを思はせる爲めに『三月十一日』

の口附けを示めし、『お兄樣より承はり候。わたくし事生憎病氣にて十分にお相手致しかね、誠にすみません。』これは本統のことだが、さきに渠が始めて尋ねて來た時の病氣の誇張とは反對に、わざと何でもないやうに見せたのである。若し渠の兄に少しでも思ひやりがあつて、こちらの弱つてる樣子を直ぐ向ふへ報告して吳れたら、よく分ることだ。自分は渠を思ひはじめてから肥えたからだが瘦せて來たばかりでなく、鏡に向へば分る通り、また兩の頰に自分のいのちと見たゑくぼが消えて來たばかりでなく、せきをすることが多くなつて、――寢つづけてはゐないけれども――醫者の言葉によると肺が惡くなつてるのである。因果のうへの因果と諦らめてるのだ。』その上お兄樣には五百圓を融通致すやうわたくしかたへお賴みに候へども、御存じの通りの貧乏に候へば、お斷わり申上候。何卒惡からずお思召し下されたく候。また、わたくしは今回朝鮮へでも渡らうかと考へ居り候。どうせ長くは生きること叶はぬ身に候へば、――』ここまで來ると、然し、自分で自分を泣いてゐた。『お斷り申上候』で感じた渠に對する反感が俄かに腰を折つて、斯う書いて置けば、何とかいい返事が來はしないかとも望まれた。『せめては、一度兄の世話なりと致して見たく候。末筆ながらあなた樣の末長き御健康を祈り上げ候。』

これに對する返事が直ぐ來たことは來たが、そして渠の兄の無心は渠の本意でなかつたことを吳れぐれも辯明してあつたが、そしてまた

『お斷り下され候て却つて結構に候』とも書いてあつたが、こちらの病氣の見舞ひは通り一遍の言葉に過ぎなかつたし、朝鮮行きに關してはなにも云つてなかつた。

『お高』と、母もそれを讀み終つてから、こちらを絶望と病氣との床に返り見て、『これではあんまり薄情やないか？』

『わて、疾から諦らめてまツさ――』湧き出る涙を意地にも押し返しながら、自分を生んで呉れた母にまでも恨みを籠めて、『どないしたかて、穢多の種どすさかい、な。』

二

いつのまにか冬も過ぎてしまつた。

けれども、高子自身には去年の秋からの戀病ひがいよ〳〵肺病に變じてしまつたばかりだ。まだ輕いとは云はれたが、自分にはどうせ不治のやまひをいやな世界に寢て暮すことはできなかつた。

あらし山の遊びは、もう、一と昔以前のことにもなつたやうな思ひをしながら、同じ山に人々が春をうかれる頃、思ひ切つて兄のところへ出發することにした。そして母に向つては、

わて出發しましたら、な、植原はんへはただ遠方へ行たとだけお母はんから知らせといてお呉れや

すや』と云ひ置きした。わざ〱朝鮮とまで斷わる必要もないと思つてだ。いや、朝鮮がやがてこの病氣の爲めにあの世に變はると思つて。

――（大正八年三月）――

蜜蜂の家

この作は事件の性質上『征服被征服』と聯絡してみるべきものである。

一

『………』口かけにでもしてそとへ圍つて置くには、却つて、一般の口かけなどとは違つて、波瀾もあり話し相手にもなつて、たま〳〵會ふには手ごたへがあつて面白いかも知れぬ。が、長く一緒に住むべき女ではなかつたことを、耕次は近ごろになつてやツと發見したのであつた。

東京にゐた時は、矢張り、一緒であつたとは云ひながら、まだお互ひに各自の好奇心やら自重心やらが勝つてゐて、愛は接近して來ながらも、互ひに戸籍上の立ち場が別々であつた如く、また人間としての立ち場も獨立してゐた。從つて、そこにまだ互ひの遠慮もあり、尊敬もあつた。

が、かの女の窮極の意志が矢張りこちらの正式な妻になつてしまひたいのであることが分つて來たので、さう來ると、もう、こちらは自分の從來の考へ通り遠慮をも好奇心をも撤回して、女に對する征服と男に對する服從とを正面から要求しなければならなくなつた。愛は強者が弱者を誠實に征服するところに成立することを明らかに信じてゐるからである。

東京は西大久保に於ける生活がかの女をこちらの品のよきいろ女から女房に落す順序であつたと云へる。が、その末期に於いては、經濟上、殆どかかる生活をつづけてゐるわけに行かなくなつて、渠は先づかの女を殘して大阪の或新聞社に雇はれて來た。そしてかの女が女中の老婆を伴つて東京を引き上げて來たのは――これも經濟上の都合で――一ケ月ばかりもあとのことであつた。

梅田の停車場へ渠が迎へに行くと、改札口の向ふから最初にこちらを認めたぶよ〳〵と太つた婆アやが先づ

『旦那さま』と、嬉しさうに叫んだ。この婆アやは西大久保のいつも行きつけの湯屋で、自分のところの奥さんのことをお目かけだと云はれて憤慨し、『あんなに仲のいい御夫婦も珍らしいのですよ』と辯解したこともあるさうだ。實際に、耕次等は他のものに知れるやうな喧嘩やいさかひはしなかつた。若しその必要がある時は、戸山の原へ出てか、床へ這入つてからかにするのであつた。詳しいことを知らぬ婆アやは、その主人の最初の妻、と云つてもまだ戸籍だけは拔けてゐないのが、時々かねの無心に來るのを、ただあまりに世間外れの不心得な女だと云つて、をんな主人の方の肩ばかり持つてゐた。

『………』その婆アやの後ろから、澄子は疲れてゐる時にいつもするやうな筋肉のゆるんだ顏つきを無理さうに引き立てながら、何も云はないで微笑して來た。そしてその自分の手には、袋に入れた自

分の絹かうもり傘と共に、こちらの棄たてつもりで殘して來たところの繻子まがひのかうもりと櫻の安ステキとをも紐にしばつて、大切さうにかかへてゐた。

『こんなステキなど、うツちやつて來ればいいのに、——貧乏くさい！』耕次はこちらへ來てからまだ一ケ月になるかならないのだけれども、東京に於けるやうな行き當りばツたりの生活では行かないことが分つてゐた。かねのある時はあるやうに、またない時は湯錢にも困ると云ふやうな、ごく自由なやりかたはこの友人も知人もない土地では全くとほらないのであつた。自分の同僚どもを見ても、すべてがきちやうめんにして、ぼろを見せないやうにしてゐるのが、如何にも、世間並みに本統のことだと思はれた。そして自分も成るべくけち臭く、貧乏くさく見えることはしたくなつてゐたので、澄子をこちらで見た時のこの第一印象が既に面白くなかつた。

『でも、あなたの不斷お持ちになつてた物ですから、うツちやつて來ては惡いと思つて——』かの女のきまり惡さうな返事には、然し、こちらに對する無邪氣な誠實があつた。そこに、こちらも自分とかの女との東京からの愛情的聯絡をそツくり受け容れることができた。

『が、然しだ』と、耕次は大阪人の生活ぶりの一般に堅實にして、おもて向きを亂さぬことを説明したのち、『僕等もそのつもりで馬鹿にされないやうにやりましよう。それには、東京で同棲などと云つて意張つてたことはこツちぢやアそのまま通りまんから、先づ、あなたが相變らず近藤と名乘るのを

やめて、今から關根澄子になつておしまひなさい。どうせ、いつかはさうなるべきものですから』と勸めた。

『……』かの女もそれには異議がなかつたが——

二

大阪から五里を離れた池田の室町は、耕次の勤める新聞社に關係のある電軌會社が經營する邸宅地である。その上、そこから電車はたツた三十分で大阪へ達するので、渠は同會社のすすめによつてその碁盤の目並みに殆ど同じやうな家が立て込んでる、その一つを借りて住むことにしたのだ。

二階にあがつて見ると、左りの方には、寶塚行きの電車軌道で新市街と舊市街とを一直線に横に仕切つて、そのさきの舊市街を越えて池田山が手近く見える。また右の室の窓に倚ると、六甲山の眺めもさう遠くない。家の向きで云へばその後ろをたツた四五十間ばかり離れたところに、電車の鐵橋を渡した猪名川が流れてゐる。その土堤にも、五月のことだから、大きな並み樹があをあをと繁つた枝を廣げてゐる。それに、電車軌道とこちらの家との間に幅二十間ばかりの牡丹ばたけがずツと電車停留場の方へまで延びてゐる。

『……』東京をいやな記念ばかりのちまただと云つて嫌つてる爲めに、こちらの大阪行きには一も

二もなく贊成したかの女は、矢張り、同じ意味をも含めてだらう、天然好きの得意を叫ぶやうに、『い
いところです、ね』と喜んだ。
『景色だけは、ね。』耕次には餘りいい返事ができなかつた。自分がかの女も喜ぶだらうと思つてこの
地を選定して置きながら、それを賞められると、いやな氣のするのは自分でも不思議のやうであつ
た。が、よく考へて見ると、別にこの地には何も直接に關係のないことであつた。然しやがては自分
の正式な妻となるべきものが東京を嫌つてるのは、かの女のしたいろ〳〵な失敗や恥辱を思ひ出させ
ることが多いからであらう。一種の人間ぎらひになつてるので、――して見ると、その反動としてか
の女が天然に憧憬してゐるのは、おのれでおのれのふる傷を忘れようとするに過ぎなからう。前にも
一度渠はかの女に向つて云つた、
『あなたの好きだと云ふ自然は單純な天然のことで、少しも人間味が生じてゐません。』
『だから、高尙なのでしよう』と、かの女はぷり〳〵して而も得意さうに答へた。『人間ばなれがし
てゐて？』
『單純過ぎますよ』と、その時和らかにだがこちらから投げ與へた言葉を思ひ出すさへ面白くなかつ
た。渠には、單純な天然憧憬などに耽りつつ互ひの戀をもて遊ぶやうな餘裕がないほどに自分の思索
と生活とに緊張してゐたのである。そしてその緊張を破らずに自分の戀をも取り入れようとすると、

どうしてもかの女からは露骨に見られた。が、この止むを得ず露骨になる實例を自分は今度大阪人の生活に於いても確かに發見して、それを是認したのだ。

一般に大阪人には金と女としかないと云はれる。そして大阪人自身もそれを他の一般と共に低級な生活のやうに卑しめながら、そのまま生き通してゐる。が、渠等にだツてえらい人物がないではない。若し金儲け以外のことに專心に手を出したら、他の土地の人のやうに矢ツ張りえらくなる要素を持つてる人がゐないではない。さう云ふ人々までも周圍の空氣に養はれてかねにばかり努力する。ところで、男子としてこの努力をする性質は、學問の爲め若しくは人間救濟の爲めに努力のそれと少しも違つたことはない。若しかねを手段に過ぎないと云へば、學問だツて人間救濟だツて自己の爲めには手段でないか？いづれも自分から見れば勝り劣りはない。その上に持つて來て、現今の人間救濟に直接に從事する宗教家や、學問の府に引ツ込んでる學者どもは、周圍の刺戟と自己の要求とが少い爲めに、——但し、これは新聞記者や政治家もさうだが、——うわツつらばかりに高尚をてらふ遊びの、實は、安ツぽい氣ぶんに慣れ切つてる狀態ではないか？それに比べると、實業家には春秋二期の決算報告が直ちに物を云ふ爲め、そして主人や株主なるものがなか〳〵默つてゐない爲め、一日一刻も油斷できない。古來の大阪人がかねに眞劍なのは、つまり、さうした心理からである。そして毎日の眞劍な業を終へてから、夜、いろ町へ飛び込むものが多いのは、その英氣を最も手ツ取り早く養ふ爲め

である。それをはたから見れば、あまりに區別が附いてるやうだ。露骨に見えるのはそれだが、本人から云へば、緊張の內部的連續だ。

　斯う云ふことも、渠はそれとなくかの女に說明したけれども、かの女の先入見には受け容れられたやうすもなかつた。そしてうわべばかりの言葉や風俗やの違ひをあげ足取りのやうに擧げて、かの女は婆アやと共に笑ひ合つた。かの女の到着の翌日であつたが、耕次が社から歸宅すると、かの女は東京で云ふ七輪をわざ〳〵持ち出して來て、笑ひながら、

『七輪たら八輪たら云ふもんはこれだツせ。』と云つた。室町の購買組合の小僧さんが注文をさう云つて持つて來たさうだ。

『カンテキ、さ。』と、渠は鼻を高くして答へた。

『旦那さまはよく御存じだこと。』婆アやはそばにゐて感心したやうすだ。

『これでもおれはかみがた生れだから、ね。』渠は斯う云つて澄子らに向ふのを、今のところ、一番自分に釣り合つた氣ぶんと見た。

　池田驛から五つ六つ驛を越えたところに、寶塚の溫泉場がある。武庫川をさし狹んでその舊新の場所が別れてゐる。新溫泉とはただ川の水を吸み上げてあツためたに過ぎないのだが、浴場が大理石作りの建築であるのが呼び物だ。何萬と云ふかねを、損益の問題はあとまはしとして、大きく人にゆだ

ねて經營させることにしたその本人の、大膽勇猛の企てを耕次は自分の考へに比して買つてゐるのだけれども、澄子にはただ

『俗ツぽいの、ね』としか見えなかつた。山を利用した箕面の動物園もかの女にはさうばかり見えた。そして大阪の婦人どもは歯ぎれの悪い言葉を發し、おしやべりで品がなく、着物を惜むせいか、ややともすると裾をはしよつて、ふるぼけた長襦袢や腰巻きを耻かしげもなく出して、『まるで腰巻きの行列か展覧會かをやつてるやうだ』と云つた。

『………』その展覧會はこちらにもさういい趣味とは見えなかつたが、大阪婦人どものおしやべりは、澄子のやうなつんと澄ました氣取りを持たない爲めで、却つて渠等の西洋婦人流に社交的ないい傾向を示してゐるのである。また、大阪言葉がかの女に歯切れ悪く聴えるのは、獨逸語や英語の力點本位に慣れたものが佛蘭西語のねツとりした優しみある口調の味はひを解しないのと同様である。若しまた歯切れの悪いのを事實だとして見たところで、そこにその優しみのあるところは、澄子その人の言葉のぎくしやくして、時には神經的にきんと響くのよりはまだまましではないか？

耕次の同郷人で、子供の時ぶんに無邪氣な初戀の仲であつた婦人が、大阪に於いて、長らく産婆をやつてるのである。それが一度、

『關根はんの今度の奥さんを見たい』と云つて、十歳になる男の子をつれて池田へ尋ねて來た。その

子は、かの女が耕次に最初の妻ができたのを知つて燒けを起し、或男と關係して產んだのだが、その男とは直ぐ死に別れた。そしてまた老母と共に獨身をとほして來た。子供がやツと這ひ初めた頃、一度耕次が尋ねて行つたことがあるが、その時、皆が渠の歡待の用意に急がしかつたうちに、その子が二階のはしごを獨りでしたまでころげ落ちた。あたまを打つたらしいので、その結果が馬鹿にでもなつてはしないかと心配して、今回の來阪に、それとなく訪問して見ると、幸ひにも小學校で成績がよく、いたづらは隨分ひどいけれども級中では二番か三番を爭つてた。ここへ來て、直ぐ、庭の蜜蜂にいたづらをして早速その手をさされた。

『來れば動物園ぐらゐはつれてツてやらねばなるまい』と云ふことは澄子、にも兼て云ひ含めてあり、子供にも約束してあつたので、耕次はその用意をしながら、かの女に向つて、『あなたも一緒にどうです』と促した。が、應じなかつた。そして三人が出て行くのを二階の窓からでも見てゐたと見え、渠が獨りで歸つて來ると、直ぐ、

『よく似合つてゐましたよ』と、いや味ツたらしく云つて、内ら向きの目つきであつた。

『………』耕次としては、今更ら同い年の女と、如何にさきが獨身でも、關係するなどと云ふ野心は夢にも持つてゐないのだが――。澄子がさう云ふのは、こちらには、自分がかの女の中野に關する追回を成るべく遮斷させようとしてゐるのに對するあわい嫉妬的復讎とも取れた。

兎に角、耕次は天然をも人間化してゐないでは承知できないのに對して、澄子は成るべく人間を遠ざかつて行かうとした。東京から去つたのもかの女にはただ人間を離れたのであるから、こちらへ來ても、不慣れな、そしてそれが爲めにかの女には不快と見える空氣の中に生活する人間には、なほ更ら近づかうとしなかつた。

そしてゆふぐれの定刻に耕次が池田停留所で電車を下りて來るのをも、天然風景の一部でもあるかのやうにして、かの女はいつも家の門に出て寂しさうに待つてゐた。そして、

『斯う云ふとこへ來てゐては、もう、婆アやだツて、あたしだツて、あなたばかりが手賴りですから、ね』と云つた。

『………』渠は或人が强情な女を服從させるには山へつれて行くに限ると云つたことを思ひ出した。寂しがらせて、素直な依賴心を起すやうにするからであらう。こちらに對する澄子の態度も可なり一變したのである。曾て寢どこを反抗的に起き出でて、

『ながなが御厄介になりました。あたしはこれから父のところへ歸ります』と云つて、兩手にそろへた五本の指でその口を抑へながら室を出たが、夜中のことであるので、乘りつけた車屋も寢てゐた。で、斷念して逆もどりして來た時の却つて一層素直になつたのよりも、もツと素直な優しみを見せて、今や、その心のかどが取れて、そのぎくしやくした言葉ぶりも直つたやうに見えた。

二人のあひだにまだ用ゐ殘つてた不自然な隔ても、かの女からいよ〳〵撤回するやうに申し出た。そして渠はこの申し出を丁度自分がかの女の天然癖に讓歩してゐるやうに許した。

三

けれども、耕次は東京に於ける浪人生活とは違ひ、大阪では雇はれの身であつた。毎日出勤するには及ばなかつたが、社用の爲めに兎角外出がちであつた。或時は、全國玉突き大會の一審判官として同會に立ち會ふ爲め、夜おそく歸つたり、とまつて來たりした。また、本願寺の式能に招待されて、京都へも行つた。社で京都、大阪。神戸の三都美人遊覽團の催しをした時には、三都の藝者や幇間を引きつれて、岡山の金神さんや、安藝の宮島や、別府溫泉までも一週間ばかり家を留守にした。

そんなことにもすべてかの女は自分らの生活を飽き足らなかつた。そしてその反動としてのやうに、頻りに風景あさりをした。ずッと昔、學校の修學旅行で耕次も行つて見たことのある、箕面公園の一番奥なる瀧をかの女は獨りで見に行つた。また、猪名川の上流にある昔の城あとで、自分らもよく知つてる同業者上司小劍氏の故鄕なる多田神社をもかの女は音づれた。さうしたあひだにも、かの女が若し、こちらとの同棲以前からかの女自身でも本心にはすさび穢れてたと思つてる筈な、その節操若しくは品性をいい方へ取り直して呉れるなら、まことに結構だが——と、耕次には思はれた。

結局は、平凡に正式な家庭生活を望んでる女であることが分つた以上、耕次にも普通並みの注文があつて――自分の妻たるものに關係以前のふる傷を思ひ出しも出させもしたくなかつた。そしてそれがなくなるだけ、かの女が耕次や世間に對して有する引け味や、ひがみや、その結果の强情やもなくなつて、かの女の心がもツとゆツたりと、そしてもツと廣く、實際的になるだらうと想像された。

けれども、そんなことをこちらが正直に云へば云ふで、かの女は別に小理窟を附けて、

『あなたがあたしに冷淡なのでしよう』と、かどのある言葉にかどのある目つきまで添へて、而も訴へるやうに答へた。『あたしの趣味をもツと考へて下すつて、あたしの面白く思ふところへも一緒につれてツて下さればいいでしよう――?』

『また、中野はさうでなかつたと云ふんでしよう?』耕次は度々のことにうるさいので、つい、自分から先手を打つこともあつた。

『ふん!』かの女は鼻であしらつて、横を向いた。

『………』中野のことはただ靈的にとどまつてたなどと云ふ辯解を何度されても、耕次には矢ツ張りかの女のふる傷の一つであつた。それを自分らの友人どもには今でもかの女の辯解通り肉の關係が少しもなかつたのだと云つてるが、それは外部からかの女がその傷を突ツ付かれていら〳〵する度合ひを少しでも減らして置きたい渠の考へからであつた。が、かの女はさうとも知らず、自分の鈍潔であ

つたことを信じられてるものと早や合點して、その標準で小理窟を云ふのがこちらにはうるさかつた、そして一たびちよツと納まつたやうであつた衝突がまたつづき初めた。

渠は實際にかゝ女の趣味におつき合ひをしてゐるだけの餘裕がなかつた。そして東京ではそれが思索と創作との爲めであつたが、こちらへ來てから、その緊張が少し方向を轉じてゐた。

第一に、今の社に於いて新聞記者たることにそも〳〵からの不平をいだかせられた。記者たることそのことが別に下だらないわけでもないだらうが、今の社は來て見ると思つたよりもちツぽけであつた。それに、社が自分を持て爲すことに於いて初めの約束を違へてしまつた。うへには見聞の狹い、見識の低い編輯長があり、したにはまだ改革前の末輩どもが編輯長を初め東京下だりのものに對して攻守同盟を結んでゐて、その爲めにいろ〳〵な理由を附してこちらに對する執筆範圍の自由を制限した。文藝や思想問題には觸れさせても、こちらの一種得意の政治論は許されなかつた。また出勤自由の條件もすんでのことで撤回されるところであつた。その次ぎには、こちらが東京の諸雜誌に書く創作や論文を手内職も同樣と見て、社員の內職禁止と云ふ動議が編輯總會に出た。で、

『ちよツと申しますが』と云つて、耕次は椅子を立ちあがつた。『若しこの動議が成り立つとして、內職を禁止される社員と云ふのに僕も數へられるのでしようか？』

『無論です――社員なら』と、さう云ひ出しさうにこちらが豫期してゐた記者が果して得たりかしこ

しと云ふ風に應じた。反對同盟のうちででも一番彌次馬であり、一番役に立つ讀み物を提供してゐると云ふ自信ある人だ。そして耕次もその人の雜駁だが面白い隨感的記事を新聞の一讀み物として必要だとは思つてゐたが、自分はそんな物で別に競爭する氣がなかつただけだ。
『それなら云つて置きますが――』渠はわざとにも落ち着いて、向ふよりはもツと高いところにゐる氣持ちであつた。自分が日々の記事に於いてたとへ全く役に立たなかつたとしても、自分のゐることを以つて社は一つの飾りにしてゐることが分つてゐたからである。『僕には東京で發表する原稿の方が本職です。こツちのは寧ろ内職ですから。』これは若しいよ〳〵社員の内職禁止が自分にも及ぶとなれば、自分は直ちに辭職するだけのことだと云ふ意味だ。そして辭職は自分の來さう〳〵から約束が違つてる爲めの覺悟であつた。すると、社長は
『君は別ですから』と口を出した、『御心配には及びません。』
『別に心配したわけではないのですが――』耕次は正直な微笑に碎けて、『皆さんとおつき合ひをしなければならぬと云ふなら、僕もこの社に於ける内職をやめようと思ひまして。』
『問題が違ひます。』
『ぢやア――』斯う云つた切りでもとに返つたが、渠は別に意張つたつもりでもなかつた。そしてますます東京に於ける注意を自分の爲めに引くやうな創作なり論文なりをできるだけ努めて發表するこ

とが社その物の本意に叶ふのだらうと云ふ責任感を增した。
渠は決して社長の宅を訪問しなかつた。また、別派なる主幹の機嫌を取らうともしなかつた。どちらかと云へば、東京から一緒に來た編輯長の馬鹿にされてる苦境に同情して、できるだけその肩を持つてやらうと思つた。が、編輯長もその初めにこちらに向つて吹いたやうな計劃はすべてその獨り合點の空想であつたことをきまり惡がつてるのかして、東京下だりの銘々に向つては社の實際と違つてゐるやうなことをばかり云つて、お茶を濁すだけになつてることが分つた。

耕次は他のもツと大きな社へ轉じる運動もして見た。ところが、あとで聽いて見ると、そこの幹部會で、あの男の細君がしたたか者で、箕面公園などをステッキをふりまはして步くからあぶなくツて近よれないなどと云ひ出したのがあつたので、一も二もなく否決になつたのだと云ふ。まさか、かの女もそんなことはしてゐない。が、一度、こちらの舊友を怒らせてしまつたことがある。舊友は大阪に於いて耕次も曾て入學してゐた英語學校の現在校主だが、氣候も投あみにいい時となつたので、こちらの家を足ばとして猪名川に本年第一回のあゆ獵をやつた。澄子や、かの女のちよツと話し相手になつてる出入り八百屋の若主人もついて來た。皆が一緒に川の淺瀨を渡つたり、川を上下したりして、あゆを初め、鮒やなまづや川えびやその他のものを滿足するほどに取つた。そして家に來て、皆で料理して喰べた。

この時、男どもは酒になつてたので、氣が付かないでゐると、かの女はとがつた聲で、
『あなた、少し婆アやにだツてやつて下さいよ。大抵な世話ぢやアなかつたのですから』と云つた。
『………』それで耕次にも、さツきから、澄子が變な顏をして渠の友人からすすめられても自分の手を出さずにゐた意味が分つた。が、そんなことを云ふ位なら、あとで少し友人の細君のところへも届けさせるやうに女としては注意すべきであつた。だのに、それをしなかつたので、友人を二重に怒らせてしまつた。
『あんな失敬な女はない』と、友人は耕次がそこの英語教師に世話した社員にかの女を讒侮したさうだ。『それに、あの八百屋とくツ付いてるよ。』
『馬鹿!』耕次はそれを社で聽かせられた時、私かに斯う叫んで、心で友人を怒り返した。如何にかの女が浮氣であつたとしても、あんな者に一時の寂しみを許すとは、かの女の不斷の氣取りから云つてもあるべきことではなかつた。西大久保にゐる時、かの女が
『木山さんなどはむやみに○○と云つて、あの顏の長い老人の獨り者を馬鹿にしていらツしやるけれど、あの人だツて若し誠實に女を求めて來れば、あたしなら打ち込んでもやります』と云つたことはある。が、それはこちらに對してもツとあまい誠實を催促する一種のおどし言葉であつた。だから、こちらは輕く受けて、

『そんなことは、まア、僕とまた手の切れた時にでも云つて貰はう』と、かの女に向つて答へて置いた。まして今回の八百屋と云ふのは、東京の一法律學校にゐたことはあるが、禿頭病の爲めにあたまが全くつるりとなつてる男で、而も既に女房持ちではないか？

女が少し親しさうに男と交際すると、直ぐそこに怪しい關係を豫想する今の教育者流の、姑息にして時代後れの考へは許してやるとして置いて。澄子が『失敬』だと云はれるその理由がこちらに分ると、耕次はまたかと云はぬばかりにかの女が家庭の主婦らしくできてない缺點を思ひ出した。そしてその時、友人に對しては、一面には申しわけする、そして他面ではまたその蒙をひらくやうな、二つの意味の手紙を一封書いた。

四

社に於ける不愉快な氣ぶんと、澄子の案外粗笨に見える性質に對する失望と近ごろでは思ふやうに創作が書けなくなつた苦しみとが、亂れた絲の固まりのやうにこんぐらかつた、そしてそれが自分のいのちになつてるやうに緊張した心の狀態に於いて、一つの新らしい希望が自分を貫いてるのが、耕次には自分でまだ賴母しいことに見えた。

それはほかでもない――自分の舊友や、新らしくできた知り合ひや、東京でざらにあるのなどとは

違つて一般に大きな會社やが、かね儲けの爲めに全心または全力をそそいでるその男らしさ、勇ましさ、緊張味に釣られて、自分も今一度それに似たことをやつて見たくなつた。つまり、北海道や樺太へまで出かけて行つて失敗した自分の實業慾が再び恢復して來たのである。以前には、これでも父の遺產をだが投資することができたけれども、今はまだ東京に於ける米代の殘りをいまだに月賦で少しづつ送つてるほどの素寒貧だ。が、それでも、この慾望は達しられるやうに思へた。と云ふのは、無一文から實驗的に進んで行く方が却つて堅實で、失敗の恐れがないからである。自分の出直しになると云ふことは、既にこれまでにも一二度あつたので、そしてその氣持ちが恐らく仕慣れた成功に於ける喜びよりも一層さツぱりと新らしいことを經驗して知つてるので、自分はこれを少しも耻辱や損耗だと考へない。

そしてさうした考へから耕次は蜜蜂の飼養とその研究とに本氣になつたのである。が、その飼養の初めはほんのでき心からであつた。それに關する雜誌や書物は自分も英語で時々讀んでゐないことはなかつた。そして或時は飼養して見たい氣も出た。ところが、池田へ移つて來てから、まだまもない時であつた、自分が澄子と共に散步がてら、舊市街の山手を町から大分離れたところまで、たんぽぽなどを摘みながら行くと、その箕面街道に添つて蜂飼ひの家が一軒あるのを發見した、

『あ、養蜂をしてゐる、ね。』

『ちやア、寄つて見ましよう』と云つて、かの女がさきに立つて這入つて行つた。そして多くの小さい蜂が五つ六つの箱からその自分の箱を間違はずに出入りするのが面白くなつたと見え、かの女はその一群を買はうと云ひ出した。そしてその二三日後の朝早く、蜂屋が新たに分封したと云ふ一と箱を持つて來た。

かの女にはそれも人間離れのした天然であらうが、生き物ならすべて好きな耕次はその生き物なる故を以つて蜂の生活をも人間のそれのやうに見た。產むものが一匹、產ませるものが少數あつて、あとはすべて男性の變形なる中性の働き蜂ばかりになつて、この群が力を合はせて一つの生活を整然として經營してゐる。

これを天然と見ようが、人間的としようが、この少しも動かせない生きた事實を見て樂しめるところに、二人は兩方面から期せずして趣味の一致ができた。初めはそれだけでよかつたのだ。が、耕次はそれを趣味ばかりにとどめず、やがては實益にも供しようと云ふつもりになつて、その研究を進めた。箱の中を時々明けて、巢のわくを取り出し、巢がどうなつてゐるか、蜜のたまりかたはどうか、女王が兒の產み工合ひはと調べて見る時、自分が顏をおほふ爲めのベイルも買つた。外國まで行つて研究して來たもツとえらい養蜂家が池田山のふもとにゐると聽いて、その人をも敎へを乞ひに訪問した。そしてその方にばかり今度は自分の緊張が向いて行つた。

『然し、緊張以外に人間の生活の捕らへどころを捋らへるのは、何と云つても結局は理想的固定觀であつて、流動的現實主義の生活には必要のないことだ』としてゐる渠には、方向の轉じるのは少しも人格に變化を與へるものではなかつた。かかる人格その物が既に浮氣だ、氣が多いのだと云はれても、そんなことは愚論としか見えなかつた。緊張が乃ち充實した生活の内容であり、實質であるからである。そして問題はこの内容實質を實現しつつあるかどうかに在つた。

けれども、渠が養蜂の教師と屢々行き來することがまた一つ澄子との衝突をふやす原因になつた。と云ふのは、教師は大阪生れで、從つてその言葉も人物も大阪的であつた。それを耕次は共鳴こそすれ、不思議とも何とも思はなかつたが、澄子はあたまから卑しんだ。そして渠が教師と共に飲みに行つたり、玉突きを試みたりするやうになつてからは かの女は自分をうとんじられると見て渠にそれとなくいろんな邪魔や難題を持ちかけた。

渠がまた蜂のことで外出するとでも豫想した時は、かの女は前以つて豫防線の爲めに、

『けふは何とかして文樂座につれてツて下さいよ』とか、『三越へ行つて來なけりやアならないのですが』とか云つた。

『そんなかねがどこにある?』

『だから、何とかして――』

『……』渠はただむツつりして答へなかつた。實際に、大阪への往復も無賃乘車券を持つてればこそで、電車の上を全くむてで往復することが度々になつてゐた。小使ひを貰ひたいにも、貰ふみなもとをかの女に與へてない時が屢々つづいた。經濟上、一時の苦しみを脫しようとして、安い月給の新聞社などへ赴任して來たことが後悔された。そして社に於いても家に在つてもむしやくしやと面白くないことばかりになつた。

そのむしやくしやしたあたまを乘せて、或日、歸宅すると、定刻よりも少し早かつたせいか、かの女も送アやも聲さへなく、迎へに出なかつた。いら〳〵してゐるこちらには、それがわけもなく癪にさわつた。そして澄子がかの女自身のいつわりの氣取りや無反省の要求を原因として泣きツつらをしてゐるのを想像して見て、寧ろそれを直接に見ない方がいいと思へた。で、そのまま、すツと二階へあがつて、渠は自分の書齋の疊の上へどんと下へも聽えるやうに音を立てて自分のからだを投げ出して、横になつてしまつた。

『湯どいで今あせをふいてしまつたので――』かの女は二階へあがつて來てから斯う云つた。いつもとげとげしいと云はれる聲を無理に押さへてゐるやうであつた。次ぎの室からかい卷きを出して來て、それを掛けて與れてから、こちらの枕もとへ倒れるやうに坐わるが早いか、かい卷きの襟の上からこちらを押さへて、『どうなすつたの？』

『……』渠はかの女の顫えた聲には十分同情しないではなかつた。自分の目を見ひらけば、きツと淚がぽろ〳〵とこぼれるに違いないと思つた。若しこれが相變らずいろ女に對する關係以上に進まないでゐたものとしたら、それだけこちらの要求もさし控へられ、それだけこちらの責任も輕いわけだらうが――。そしてただその場のがれに速かに妥協してその場の喜ばせを與へてかの女からもその場の愉快な反應を手ツ取り早く味ひ取つた方がよかつた。が、それだけではかの女自身の本心に橫たはつてる望みが滿足しないのである。

さうかと云つて、かの女は今日まで戀の概念をただ表面的に押し付けて行けばいいと云ふかの如き態度にとどまつてゐて、本統にその本心の望みに適應するほどの、內部からの緻密な優しみや注意深さをもたらして來ない。月並みには戀を知り、戀を感じてゐながらも、つまり、まだ女としての一皮むけた、いつはりのない純全性が、中野その他の中途半端な男に對するこれも半端な追回や復讎心の爲めにさへぎられて、實際に現はれて來ない。それを現はれさせるに至つてこそ、こちらのかの女に對する最も誠實な征服の事業も成就されるのであらう。が、かの女はそれを悟らないでゐる。そしてこちらからかの女を悟らせようとする努力を――丁度、かの女が耕次の知り合ひとしてかの女にも近づいて來るものを退けたやうに――退けてゐるのである。かの女がこちらに飽き足りないのは、その實、かの女自身に飽き足りないのであらねばならぬ。

耕次は自分が殆ど第二の妻としてさじを投げた女に自分の溢れようとする涙を見せたくなかつたので、返事をするまでに至らないうちに、つと、また立ちあがつた。そしてはしご段をばたばたさせて行つて、庭へ下りた。もみぢの木や松や檜葉の根のあひだには、もう、また雜草が大分に延びてゐた。引ツ越し當時はこちらがそとの用事で忙がしかつたので、草も拔かないで置いた。すると、それが板塀のふし穴から馬飼ひにのぞかれたのを緣として、耕次の留守に四十錢に買つて行かれた。

『東京ぢやア、とてもないことです、ね。』澄子はそれをあとで面白さうに語つた。

『また生やして置きましようよ』と、婆アやはまた慾張つてゐた。『いつでも買ひまツさと云つてましたから。』

『それに、生やして置けば、秋になつて蟲が聽けるでしよう――。』

『………』耕次も別に反對はしなかつた。その草の明きに、澄子が土堤から取つて來た月見草の花も咲いてゐる。

渠はけさ忙いでゐた爲めによく見てやらなかつた蜜蜂の働きぶりを見たかつたのである。さきの一群はこちらへ來てからまた王臺を四つ五つ拵らへたが、そのうち一番恰好のを一つ殘して、あとを皆わざ〳〵つぶして置いたら、その一つにやがて王蜂が生まれて分封した。今ごろ分封させるのが既にそのもとをも子をも冬になつて滅亡に至らしめることになると云はれてゐたのだが、研究の爲めにや

つて見た。で、箱が二つになつてるが、そのいづれもの群がゆふがたの月見草に行つて來るかして、働き蜂は各々あか黃いろい花粉をたんまりとその兩方の足につけて運んでゐる。たまには、灰白の花粉を運ぶのもあるのを見ると、どこかのクローバにも行つて來たらしい。さう云ふ觀察が少し渠の心を落ち付けた。

が、また考へて見ると、子供のやうに自分を敎訓するのでもないが、蜂のせツせといとなむ生活を見るにつけても、自分はもツと奮發しなければならなかつた。どうせ澄子とは尋常に家庭を持てぬものとすれば、丁度自分が社に於いてわざ〳〵好んで孤立してゐるやうに、家に於いても寧ろ一本立ちになつてる方がよかつた。自分が北海道で受けて來た絕望と疲勞とを最初に直して吳れたのはかの女であつたのだから、それはそれとしていつまでも感謝することにして置いて――。

五

晚食も無言ですませると、直ぐいつもの室町俱樂部へ出かけた。

そこには玉突き臺の備へがあつて、購買組合の主人が世話をしてゐる。この主人とも澄子はかき附けのつけ違ひから衝突してしまつたが、こちらには玉に於いて殆ど同點のいい相手であつた。耕次は先日連中の大會に一等賞を取つた餘勢がまだ殘つてたので、十二時過ぎまでそこで玉を突いてから歸

つて來ると、門のくゞりはいつも通り明いたが、廣く平ベツたい敷き石を二間ばかり行つた玄關の、こまかい格子になつてるがらす戸はわざとらしく締まつてゐた。

『……』くわツとあたまへ來たので、握りこぶしで思ひ切りひどくその戸を三たびつゞけざまに叩いた。

『旦那さまでございますか』と云ふ、婆アやのあわてた聲が聽えた。

『明けろ！』知れ切つてると云はぬばかりに。斯うして、自分は不斷澄子のとがつた聲を責めながら自分も亦もツと大きくそのとがり聲になつて行くのであつた。

　耕次の無言はその翌日もつゞいて、かの女の目をさけるやうにして家を出た。夜になつて歸つて來ても、無理にかたちの上の出迎へをしてゐるらしい澄子のやうすを見ると、婆アやがかの女に代つて『お歸りなさいまし』と云つたのをも聽かぬふりで、またすツと二階へあがつた。そして机に向つてたばこにマチの火をつけたが、自分の席ではないかのやうに落ち付かなかつた。

『御飯は』と、澄子が聽きに來たのを、

『入らない』と、一言のもとにはね付けた。實際、大阪でわざ〳〵すませて來たのだ。

『あたしは肉的でないから』とか、『男にあまへる事も心が許さないから』とか云ふことをかの女はよく云つた。そしてそれも一種の痴話喧嘩の種に過ぎなかつた。こんな時にもさう思つてるのかも知れ

ないが、問題はそんな單純な、淺薄なところになかつた。寧ろ、不純と粗製との爲めにそんな見當違ひの氣取りが云へてるのを心から直すべきであつた。かの女の所謂情熱はそんなところにあると云ふのだらうが、眞の情熱なる物はそんな言葉の上にはない。かの女にはそれが云つてもどうせ分らない。また玉突きへ出かけて行つて夜をふかした。そして歸つたのは十一時だ。

ゆふべよりも一時間早い。あまりうちのもの等を心配させるのもよくないと思つた爲めだが、今回の無言の行はこちらから初めたのだから、またこちらから中止すべきであつた。かの女の初めたのはかの女から先づ取り消すのが例になつてゐたのである。それに、渠は自分が男子としての要求も起つてゐた。かの女の外に女を持たない自分がそれを要求するのは當前の權利でもあつた。が、まだ〳〵いま〳〵しいので、かの女がこちらの書齋に來て、雜誌を讀んでるのに聲もかけないで、自分の机の前で机と丁字がたのあふ向けに横になつた。そして兩手を自分のあたまの下に入れてぼんやりと考へると、ふと、東京の讀賣新聞へ書く原稿があるのを思ひ出した。

半身を起して机に向ひ、かた手であたまのふけをぼり〳〵搔きながら、且考へ、且筆を進めた。やがてかの女は、

『もう、十二時ですから、あたしはお先きへ失禮いたします』と云つて、狹い廊下を隔てた次ぎの室へ引きさがつた。

『……』渠はかの女の聲がずツと當り前になつたのを知つて、かの女も亦こちらの樣子を既に見て取つたのだと思へた。あと一時間ばかりで原稿を書き終へたので、それを小よりにとぢてから、自分もかの女の方へ行くと、果してまた眠らないでゐて、まくらの上からこちらをにツこりして見た。

『……』かの女はその目で氣がすんだのと云つてるやうであつた。

『新聞記者なんかやめてしまはうか？』渠は自分ながらまだ少しどこかにちから瘤が殘つてるやうであつた。

『……』かの女は暫らく默つてこちらの樣子をうかがつてたが、やがて和らかに微笑して、『そんなら記者をやめて、東京へお歸りになつたらどうでしよう？』

『東京へも歸りたくない。歸つたツて喰へやアしない！』

『……』かの女は見る〳〵その顏いろを變へた。そしてそのからだの痙攣がこちらにも感じられた。泣き出しさうな聲で、『ぢやア、つまり、あたし達がゐるのがお邪魔になるのでしよう――？』

『……』渠もさうした考へを――殊に、經濟上では――この頃私かに持たないではなかつた。が、さう面と向つて女に云はれると、こちらも男として『まさか』と笑つてのけるより仕かたがなかつた。

『ぢやア、社でまた何か面白くないことがありました？』

『つまり、あんなことをしてゐただけでは、段々葬むられてしまうばかりだ』

『ぢやア　どうしようとおツしやるの?』

『まア、蜂でもしツかり飼つて見ます。』『大きな事業を起さうたツて、その資本もないのだから、直ぐには望めないことであつた。

『………』かの女はまた少し自分で聯想の惡さうな顏つきをしたが、やがてその頰にまで耻かしげを見せて、『あたし、變なことがありましたのですよ――お話しするをりがございませんでしたけれど。』

『何が?』よく聽いて見ると、この二三日前、便所に於いてかの女の子宮の破裂したやうな音がした。けれども、そのあとは別に何ともなかつたさうだ。思ふに、子を產んだ經驗のないかの女がごく初期の流產に氣が付かなかつたのだらう。

かの女との間はそれから少し融和するやうになつた。が、今度は婆アやが突然に歸京したいと云ひ出した。その前から婆アやは氣が變になつたのでないか知らんと耕次らに思はれたことには、少しせッせと用事を仕初めると、きツと口のうちで

『くしや〳〵くしや、』『くしや〳〵くしや』と云ふやうな、何だか分らないことを云つた。多分、主人が二二度外國語の本を音讀したその眞似だとは思はれたが、それを井戶ばたなどでやつてゐると、隣りへも聽えさうで見ツともなかつた。

『また、婆アや――およしよ』と、澄子が叱り付けることも度々になつた。

『お前、あんまり熱いのでのぼせてしまつたんぢやアないかい？』耕次も斯う云つて痛はつて見もした。けれども、婆アやの新たらしく得た癖は直らなかつた。
『旦那さまがあまり奥さまをお叱りになるので、わたしはどうしてもおひまを戴きます』と、澄子にはこッそりつげたさうだ。
『あたし達のおもて向きは仲のいいやうに見えてたのをあんまり信じ込んでゐたので』と、かの女は婆アやを哀れむやうに、そして渠を戒めるやうに云つた、『近頃のやうすを俄かにがッかりしたせいでしようよ。』
『さうかも知れない。』『然し、どうすることもできなかつた。もう五十を越えてもゐるもので、こんな遠方へ來てまさかのことでもあつたらなほ大變だから、云ふ通りにして歸してやつた。
それから、土地の女中はいづれもゐつかないで、幾人も變はつた。例の八百屋か、耕次が東京から呼んだ記者かが遊びに來ない時には、三ツ目小僧のお化けが出さうにして、澄子ひとりで留守をしてゐることも度々あつた。
或夜、十時過ぎに歸つて來ると、かの女は下に見えなかつた。はしご段をあがらうとすると、書齋のふすまのあはひからけむりが吹き出してゐた。火事かと思つて驅けあがり、そのふすまを明けると[illegible]つまる大体からむく／＼と上つてゐる。そのかたわらに澄子が火ばしを持つ

て坐わつてて、けむたさうな目をしてこちらをじろりと見上げた。
『これでぁなたの不愉快な根本原因がなくなりましよう。』
『……』何かと思ふと、かの女が戀の記念だと稱して行李の底深くしまひ込んで置いたところの、中野の手紙をすべて燒き棄ててるのであつた。耕次はまだこちらに突ツ立つてゐながら、『それもその一つでしようが――。』
『まだあるんですか?』斯う云つて、かの女は目を火の方に伏せた。
『明けてすればいいぢやアないか?』渠は一たび窓の一方を自分で明け放つた。『薄い紙の灰が部屋中に飛んでる!』そんなことをしたツて、くその役にも立たないとは思つたが、曾てはこちらが燒き棄てろとも云つたし、また、もうおそいが、いよ〳〵燒き棄てる氣になつただけでもかの女が純全の方へ一歩を進んで來たのかと見えたので、少しでもその手傳ひをしてやるつもりであつた。涼しい夜かぜが山や川の方から吹き入つて來て、けむりは段々とそとへ逃げて行つた。
『あたしの友達を少し拵らへて下すつたらいいぢやアありませんか』と、それからよく云ふやうになつたけれども、人に對して氣六ケしいかの女に向きさうなものは――かの女自身がえらび出さない限り――見付かりさうでなかつた。男ならまだしも、婦人のうちからではとてもなかつた。社へ新らしく這入つた婦人記者をどうかと云つて見たら、こちらが一度芝居の記者席へ同道してやつたのを、も

う、社では怪しんでると云ふ話をしてあつたので、澄子は相手にしなかつた。そして獨りでかの女はこちらが養蜂の教師としてゐる人の細君を――昔の高等女子師範の出だから多少は話せるだらうと云つて――訪問した。が、それも相變らず一般の消極的引ツ込み思案の人であつたので失望したやうすだ。けれども、そこの若い二番目娘を耕次のところへよく來る第三の養蜂家に媒介しようと努めた。それは娘の父がさきの男を信用しないので駄目になつた。

『一つあなたのいい友人をつれて來てあげましよう』と云つて、耕次は社の物置きで生まれた犬の兒を一匹、電車にのせて持つて來て、かの女に與へた。そして自分は矢ツ張り自分を緊張を一番多く蜜蜂の研究に向け、そしてその緊張の連續を、云はば大阪流に、澄子と玉突きの勝負とに向けた。現在に握れる生活の內容若しくは實質はただそこにだけあつて、これに外れないやうに努めるのを以つて自分はやツと自分の存在を認めてゐた。

『あなたも實際は孤獨の人、ね』と云ふことを、かの女からはここまで徹底して云つて貰ひたかつた。

『……』渠はかの女とのあひだにまだ隨分の隔たりがあるのを感じた。

氣を取り直して、渠はまた同じやうなことを繰り返すこともあつたが、かの女は病み付きになつたのかと思はれるほど、その自分ばかりを寂しがつた。そしてたま〳〵こちらが二晩もつづけて玉突きに遲くなると、かの女は家を明けツ放しにして倶樂部の窓したまでやつて來て、出しぬけに泣き出し

たやうな聲で、
『あなた』と、こちらを呼んだ、『もう、遲いぢやアありませんか？』
『……』渠は直ぐそれが自分の耳に這入つたと同時に、かの女の顏のすぢがぴく〳〵してゐるそのしがめツつらを見るやうであつた。人の手まへもかまはずにまた何と云ふ無作法だらうと心で怒つた。が、自分の爲めに自分の緊張連續の的と的とが相衝突したのだと私かに思つた。たとへば、他の或人に付いて云へば、本妻と目かけ、または目かけと目かけ同士が――。但しこの倶樂部には女ツけはなかつた。『今行くよ。』ウツちやつても置けないので、自分もそこ〳〵にして、その窓とは別ながはにひらけてゐる出ぐちからまわつて行つて、かの女に合した。そして無言で歩きながら、かの女のまかせてゐるその手を引いてゐた。こんな時の方が却つて自由自在になるのであつた。

* * * *

『あんな夫婦はあんたの飼ふてる蜜蜂のやうやさかい。』これは耕次に對して購買組合の主人が冷かし半分に云ひ出した言葉であつた。そしてこちらのいろんな内情を知らない人々は、皆でそれを繰り返すやうになつた。
『君は蜜蜂を飼つてなさるんですか』とも、大阪で名の出てゐる實業家や會社の重役などまでが不思

議さうに聽いた。
『なアに、まだ研究中です』と答へた。そして渠は渠等の仕事に對しても內容と實質に於いては同格だと云ふ自信があつた。
『蜜蜂の家』と云ふことがさうして耕次の家の別名になつてしまつた。

六

かの女は『園根澄子』と改めて、博文館の或婦人雜誌に賴まれてから、三四ケ月もつづけて雜文を書いた。そして每月十圓づつは取つてゐた。それが中絕した頃になつて、また、東京の新らしい女の一團體から出初めた機關雜誌の寄稿者に賴まれた。そして小說を二つばかり發表した。この方は少しもかの女の小使ひにさへならなかつたが、耕次はかの女がさう云ふ風にして再び社會に顏出しができるやうになれば、段々と眞にかの女の——單に堅い言葉や空想の上にでなく——根本からの獨立もできるだらうと喜んだ。眞にかの女が獨立獨步ができれば、必らずしもこちらと一緒に苦しませて置くにも及ばないと云ふ考へが、この頃では、渠には、さきに或女を女優に仕立てようとした時に考へた如く、出てゐた。またつづけて一緒に住むとしても、かの女がさうして新らしく社會に返り咲きがやれれば、それだけもとのふる傷をも忘れて、心がゆツたりして來るばかりもその人格や品質が改善さ

れることにならうと考へられた。
　そのうち、新らしい女の團體幹部の一名が大阪へ來た何かのついでを以つて池田へ澄子を訪ねて來た。そしてその歡迎會の爲めにと云つて、耕次が世話した記者の細君（これも筆が執れる婦人）がキユラソを一と瓶寄附して來た。豫定の婦人連が集まる前に、耕次のところへも、或小い新聞社の一記者が――これが初めてだが――訪ねて來たので、
『まア、一杯飲まさうか』と云つて、耕次は寄附の瓶を拔いた。そして自分も同じ小いコツプで二杯をかたむけた。庭さきを見て蜂の話などしながら、客に三杯目をつがうとすると、その同じ室にキユラソの寄附者と共にこれも蜂のことを語つてゐた澄子が、突然、例のけんある聲でこちらを叱り付けた、
『さうむやみに飲んでしまつちやア困りますが、ね――それはあなたがたの物ぢやアありませんよ。○○さんが會に寄附して下すつたんですから！』
『ぢやア、やめだ』と云つて、耕次は微笑しながら何げなく瓶の口をした。
　それがこちらの初めて來た客を怒らせてしまつたのであつた。客の書いた翌々日の新聞には、
『澄子と離別せよ』と云ふ見出しで、二段ばかりに渡つた罵倒の記事が掲載された。キユラソの事件が書き並べられたあとに、『自分は何もそんな物を飲まされないでもよかつたが、こちらを文學上の木

ツ葉武者と見て、初めから鼻にもかけぬかの女の態度が如何にも心外であつた。自分は澄子なる者に教へを乞ひに行つたのでないことは分つてるが、こちらに對する遠慮若しくは禮儀と云ふことも知らないで、かの女がその自分の夫を自由に左右してゐることを自慢らしく見せたのは、最もこちらを馬鹿にしたのである。あんな女に左右されてる○○氏も鼻ツたらしだ。賞むべきことではない。どうせ正式の細君ではなく、妾ではないか？僕は氏の爲めに速かに澄子を離別せんことを勸める。』

『……………』耕次はそれを讀んだ時、一度は怒りもしたが、また、筆者が大阪へ下だつた前に東京にゐて、いろ／＼なことをまた聽きしてゐたことを種にして、青年としては餘りに詰らないおせツかひを云ふとも考へられた。離別する時が來れば、そんなことをはたから云はれないでもするだらう。が、一たびこちらからしよひ込んだ以上、こちらの責任だけは輕んじたくなかつた。東京、大阪の友人中にもそれとなく同じやうなことを云ふものがあつたが、渠は同じ意味を以つて答へて來たのである。自分としては、女に煩はされてゐることが――これまでの經驗上――左ほど苦ではなかつた。いや、苦ではあるに違ひないが、人生はすべて苦であるから、これもその一部として、そして燃燒する時は全部ともして、それを身に帶びつつ勇猛に努力する方が氣持ちいいのであつた。

　室町神社の森に蜂がたんと來てをりますと云ふ報告を出入りの小僧がもたらして來たので、耕次はどこからか飛んで來た分封群ではないかと思つて、澄子と共に急いで行つて見た。すると、神社の後

方で、おほ杉が立ち並んでるそのあひだなる一本の木へ、蜜を取りに來てゐるのであつた。何か知らぬ木の一丈あまりも高い枝々の周圍に、白いこまかい花が澤山咲いてる。そこへ何千匹と云ふ蜜蜂がたかつて、嬉しさうにぶん〳〵云つてる。かたちの大きいのを見ると、多分、耕次の教師のところの西洋蜂らしかつた。欲しいけれども、蜜取りには王のついて來るわけがないので、どうすることもできなかつた。それに、とまつてるところが高かつた。渠はただそこを肩の痛くなるまでも久しく見上げてゐて、そのよく働いてる狀態に感心した。

或日、また報告があつた。それは購買組合の主人が云つて來て呉れたのだが、

『倶樂部のすぢ向ふのうちへ仰山蜂が飛んで來て、庭の松の木の枝にとまつてをります――』ぶんぶん云つてやかましいばかりでなく、子供の爲めにあぶないから、早く何とかして呉れろと云ふのであつた。

『……………』今度は分封群に違ひないと渠は思つた。然し、先づ、『そのうちは主人が迷信家ぢやアないか、ね』と聽いて見た。福の神として貴ぶところもあるのだ。梅田停車場のそばの宿屋で飛んで來た蜂群を大切に飼つてから、その家が繁昌したと云ふ話もある。また、電軌會社の某重役の住宅が舊市街の山手に在つて、そこの物置きの家根へ熊蜂が巣を拵らへてると云ふので、それを耕次が主導者になつて、自分の教師やその教師の弟子と共に、棒のさきの竹の皮一面に鳥もちをつけたのや、一匹づ

つをはたき付ける爲めの庭球ラケトやを、他の武裝と一緒に用意して、退治に行つた。そこの主人は丁度留守であつたが、あとで大いに怒つた。と云ふのは、こちらには熊蜂が黃蜂と共に最も有害の敵であるけれども、主人は私かに矢ツ張り蜂を福來のしるしだと思つてた。

『そんなことはありまへんやろ――今、留守やが、奧さんや御隱居さんが僕に早ら何とかして吳れと云やはるのやさかい。』

『ぢやア、一緒に行から』と云つて、耕次は一つのから箱とベイル附きの帽子とを以つて行つて見た。土地に慣れ切つてる爲め、氣ままで氣六ケしいと云はれる日本蜂だから、逃走者であらうと思つたが、その騷ぎをやツと納めたところであつて、庭の眞ン中なる低い松の枝にかかつてる圓がた窓に密集してとまつてゐる。王を發見して箱に入れさへすれば、あとは皆ついて來るのだ。が、窶はベイルをかぶりつつ大きな茶碗を以つてかたツぱしからその密集群をすくひ移すのだけれども、また散亂するばかりであつた。王のゐどころが發見されなかつた。けれども、若し王を失つてるものなら、斯う一つに集つてるわけがないと見たから、今一度靜かに密集するのを待つて、窓ごとそツくり箱に入れて持ち歸つた。

『收容の仕かたがまだ本統ではない。先づ、霧を吹ツかけてからにしたら、さう散亂はさせなかつただらう。』敎師から斯うあとで敎へられた。實は、耕次も理窟では知つてたが、ちよツとあはてた爲め

に忘れたのだ『然し』と教師の言葉はつづいて、『蜂のとまつてる物ごとそツくり持つて來たのは、まア、七十點ぐらゐに價へする思ひ付きぢや。』

『……』第三の養蜂家に告げて見ても、そこでは逃がした群はないと云ふので、耕次はその收容した群をも自分の物にして、置くことにして、他の二群から蜜やたまごの附いた巣の枠を一つ宛抜き取つて、それにから枠をもつけて新らしい蜂群に與へた。それがまた四方に働き出して、箱の中には蠟で眞ツ白の綺麗な巣ができ初めた。そして一つびとつの房には新らしいたまごがふえて行つた。庭の空を眺めてゐると、黒い小いものが澤山勢ひよく飛んで行つたり來たりする。まるでおほ風の日に音なく雨が降つてるやうであつた。

栗の實が熟し初める頃には、この小人間どもの喰ひ物が少くなつて來るので、蜜蜂以外のなまけ蜂はよく蜜蜂の箱を目がけて襲ひ來たる。で、熊蜂や黄蜂が一匹でも庭へやつて來ると、耕次はラケトの代りに雜誌などを手にしてはたき落した。その頃では、ます／＼社の仕事よりもこの方に渠の心がそそがれてゐた。

或日、渠はぼんやりと庭に向つてそらを眺めてゐると、いつもの黒いかたちよりもずツと大きなのが一つ塀のうへに浮び現はれた。ただ一つかと思ふと、また一つ。そして、また一つ。いや、五匹までもが揃つてやつて來たのである。

『………』黄蜂の襲來！渠は斯う思つた時、ぎよツとして自分ながら胸のとどろくのをおぼえた。日本の海軍が露西亞艦隊に遭遇した最初の勇ましさと恐怖とはこんなものでなかつたかと思はれるやうな氣持ちをいだいた。そして急いで二階の扇子を取りに行つてから、庭へ下りた。

黄蜂は箱の入り口の方に隱れてゐて、歸つて來る蜜蜂を襲ふが、熊蜂は直接に箱の入り口に向ふ。手わけをしたやうにあちらこちらの箱を狙つてる敵を、耕次は三匹まではたき落したが、そのうちに他の二匹を逸してしまつた。それでも、自分はいい氣持ちであつた。

すべて自分の生活に收される範圍は自分の國家ではないか！自分は今その自國防衛上、自分の思ふ通りの自由と全力とを以つて現實的正義の戰ひを戰つたのである。

七

また、この頃は蜜蜂逃走の時期でもあるので、山の方からでもまたやつて來ないか知らんと思つたのが、ふと或日の出來ごころになつて、渠は自分から澄子を促して池田山へ登つて見る氣になつた。かの女も喜んで從つて來た。

八百屋が時々碁の相手につれて來る禪僧が山の中腹に住んでゐて、その寺へは耕次も澄子も行つたことがあるので、

『そこの道は知つてるから、もう、面白くないでしよう』と、かの女は云つた。

『ぢやア、一つ別なところから。』つい、こないだ祭りがあつた稻荷のおやしろのあるところから登つて行くと、正面の方角が違つてて、猪名川の向ふがよく見えた。平地の稻田のあひだを寶塚の方へ電車が消えて行く山の鼻まで。然し、谷を一つ上へまはらなければ、室町の方の見える高みへは行けないのであつた。

『行つて見ましよう。』かの女はさきに立つて進んだ。『松だけがありさうなものです、ね』とも云つて、ぼこ〳〵した土をかうもり傘のさきで引ツくり返して見もした。

山を一つ移ると、雨がはに高い赤松が立つてゐて、そのあひだから下の樹木のあたまを越えて市街がよく臨めるところがあつた。舊い方のをばかりでなく、そのさきもだ——いや、そのまたずツとさきの伊丹あたりも可なりはツきりと。そして六甲山はその右手にそびえ列なつてる。いろいろな事業——戀をも籠めて——のけむりに曇つてる大阪市は、少したり手にそれと分るだけにうす遠く。

さう云ふ風にこちらの眼界を廣げてゐると、横ながに走つてる箕面有馬の電車軌道は殆ど眞ぢかの眼下に在るやうだ。その軌道がまた、池田の部分では、わざ〳〵新舊市街をその兩方から目かくしするやうに高くなつて走つてゐる。そして行き來の電車に隱れたり見えたりする新開室町の家々は、それぞれ小さくマッチ箱のやうに仕切られてる。そのうち、正面の並びの川づつみに寄つた方に、自

分らの『蜜蜂の家』もそれとゆび指された。

『ああ、いいこと！』

澄子が少し前にさう叫んだのであるが、それが聽えてゐなかつたかの如くして、耕次は改めて別に簡單に斯う尋ねた、

『どうだ、ね？』

『いいところです、わ――あなたは早くつれて來て下さらないんですもの！』かねがねの不平が全く喜びに變じたと云はぬばかりにして、かの女は先づそこに据ゑつけてある切り石に腰をかけた。そしてこちらの手を握つて無意氣と思はれるほどぐツと引いて、『あなたもおかけなさいよ。』

『………』渠は、かの女の不斷沈んで血のけの失せたやうになつてた顏に時ならぬうしほべにがさしてゐたのを見て、自分もちよツと頬のあたりが赤くなつたやうに思つた。そして寧ろ秘密で自由な家にゐたかつた。

『また衝動が』と、然し、かの女にほんのうはべばかりの氣取りや高尚がりを以つて――これは實にかの女の小理窟に過ぎないではないか？――こちらをただの一ときでも滑稽化されるのが面白くない爲めに、――さうだ、それが爲めにこちらはわざと家を遲くまで明けて、かの女を小理窟が出ないほどに泣き氣持ちにさせてやるのだが、――今もただ默つてかの女のわきへ腰をおろした。

『……』暫らく無言がつづいた。

『いいぢやアありませんか？あなたも何とかおツしやいよ。』

『いい、ね。』渠は止むを得ずただ機械的に返事をした。そして私かにかの女の浮かれかたが曾て熱海の梅林に於いて現はれたのと同じやうであると考へて見た。少しでも天然の風景に打たれなければ、直接の愛情が起らないとは不思議でないか？愛情的神經痲痺の傾向でもあらうか？また、かの女に關する昔の聯想がよくなかつた。そしてます／＼そんな遊びにはわざとにもおつき合ひはできなかつた。早く歸宅して蜂の働きをでも見てゐる方がまだ／＼ましであつた。

『……』かの女はこちらがかの女の天然憧憬にかかはらないのをじれ出したやうにただ獨りで立つて見たり、坐わつて見たり、また坐わつたり立つたりした。

『……』渠はそれを見てゐるのも馬鹿々々しくなつた、心は張り詰めてゐながらもだ。一間ばかり前方のはづれまで進んだかの女の後ろから聲をかけて、『もう、行かうぢやアないか？』それとも、こんな時にこそ、かの女がこれまで云はないで內心にばかりこじれさせてることをすべて白狀するか？

『もう、少しゐましようよ。』あまへる聲ではあつたが、向ふ向きのままだ。

『……』渠は往生して立つ氣もなくなつた。かの女のだらりとさがつた雨がすり綿お召しの書生羽織り——これを先日からまた出して不斷羽織りに着初めたのだか——の脊中に向つてこちらからげん

こつを一つ喰らはせる眞似をした。それから、『ぢやア、いらツしやい。』

『……』かの女はこちらを見ながら素直ににこ〳〵して立ち戻つて來た。その口に渠はいきなり接吻した――かの女はそれからその目を內らに向けて、下の市街の方へ暫らく後ろを見せて立つてゐた。

やがて山を下だつて行つたが、途中で出會つた二名の書生に耕次は特別にじろ〳〵見られる氣がした。そして計らずも知つてる禪寺の前庭へ下りた。道がさうついてたからである。友人がゐればそこへ一と先づ立ち寄つて、一服してもいいと思つたが、見られなかつたことにも氣が引けて、直ぐその門を出た。

もう、松だけも澤山出て、いよ〳〵秋の中ごろの景色になつた時、耕次は二階の書齋で、近ごろ外國から注文で屆いた養蜂書の一つを讀んでゐた。すると、澄子が遊びがてらあがつて來た。そして、『今度の女中は落ち付きさうです、ね』などと云ひながら、明け放した窓の欄干にかた腕を奥までもたせかけて、澄み渡つた空をながめてゐた。やがてまたこちらに向いて、『何でしよう、ね、あれは？』

『あれかい？』渠もそれに氣が付いてゐないではなかつた。こないだから、何か知らん、この近所のそらでぎやアツ〳〵と云ふ聲が聽えてゐたのである。五位さぎにしてはその聲が大き過ぎた。けれども、左ほど興味のあることでもないので、今も亦聽き流して、書物に書いてある王蜂製造法のことか

ら目を離さなかつた。

生き物を製造することができれば、人間の女をだツて好きなやうに造り換へられるわけだが、ここでは少し用語例が變はつてるのである。一群に王が逃げるか死ぬかした時、その群の散亂若しくは絶滅や、働き蜂の不自然女性への還元やを妨ぐ方法は二つしかない。他から王を持つて來て與へるか、働き蜂になるべき幼蟲を途中から王臺に入れて、それを仕立て上げさせるか。若し後者の場合には、幼蟲を小房から王臺に移す時、小さい銀さじを以つてそれを痛めないやうにそツと一つ移してやらねばならぬとある。

『鶴ですよ――鶴です、わ!』

『どれ、どれ?』渠も俄かに珍らしい氣がしたのでかの女のそばへ立つて行つて、聲のする方のそらを見まはしたが、近眼の目がね越しではなか〳〵見えなかつた。

『而も二羽、――つがひでしよう。』

『……』渠は、かの女のあちらこちらと二三度に急がしくゆび指す方を追つて行つて、やツとその形を認めた。おほ空のうへに高いから小さく見えるけれども、羽根が白く、足が長い鳥で、その勢ひと云ひ、飛びかたと云ひ、初めて見たのだが、如何にも鶴の趣きであるらしかつた。こないだ自分らが登つて見て二度とはない徒ら氣を起した池田山をすり鉢の底として、そのずツと上のそらへ無形の

周圍とふちとを廣げた大圓をゑがいて、二羽の鳥が遠くかけ離れて兩方から鳴きかはしつつ、大きくゆツたりと飛んでゐる。自分にはそれがよそごとではなかつた。そらも鳥も、またその底なる山も皆自分なる緊張生活者のものになつてしまつて、渠はかの女に禪僧の如く無言の微笑を以つてそのつがひ鳥の數と同じだけの指を出して見せた。

『およしなさい』と、かの女はそれをひら手でよこにはたきのけた。その時のかの女には不斷のいやな氣取りも高尙ぶりも見えなかつた。ただ耻かしかつたやうにこちらを見る視線が亂れながら、『あなたも隨分ひどい、わ。』

『………』渠はたださう聽いただけでもけふの空の如くいつに無い天空海濶な一種の征服慾を滿足させた。

八

或新聞社の催しで、大阪から箕面まで五里間の徒歩競爭があつた。その到着點が箕面公園なのでそこへ耕次も澄子をつれて見物に行つた。すると、意外にも、耕次とその最初の妻との爲めに媒介人となつた農學士の細君に出逢つた。かの女は出しぬけから、

『どうしたのです、ね、この頃の評判は』と云つた。

『どうも斯うもないです。向ふにも弱みができたのですから、早く別れて呉れさへすりやアいいのです。』

『そりやア、どうせさうより仕かたがないのでしようから、一度よくお話を伺ひたいと思つてましたの。』

『コッちにいらッしやるとは知りませんでしたから――』よく聴いて見ると、その所天は大阪府の技師をしてゐるのであつた。そしてけふはその親類の子の應援に來たのであつた。

その一週間ばかり後になつて、東京なる妻も呼ばれて農學士のところへ來てゐたが、耕次は會ひたくないので、その別室に於いて學士夫婦と共に離婚の協議をした。そして手切れ金として拂ふべきものの一部なる百五十圓を學士から借りて拂つた。

『お禮も云つて貰はなければならないし、またこれからおつき合ひもしたいのですから、一度、今度の奥さんをおよこしなさいよ』と云はれた。

『あんなに物をつけ〱云ふ人にあたしは會ひたくありません』と云つて、然し、澄子は一度も行かうとしなかつた。けれども、耕次の見たところでは、つけ〱云ふ女は却つてこちらの方であつた。渠の推察をめぐらして見ると、かの女は自分からも他日同じやうな場合に立ち至つた時、自分らには――かの房子さんを別にちやんとした媒介者に頼んだわけでもなかつたから――一人もそんな時の離

婚の媒介をさへして吳れるものがなからうと云ふことを寂しんだのかも知れなかつた。別れてゐればこそかの女は手紙も時々出してゐるが、東京にゐた頃は、もとのやうにさう親しく房子を思つてゐなかつた——これも澄子がふる傷にさはられるのを避ける爲めのやうに。
兎に角、隨分長い間の一問題が解決したし、養蜂のこともいよ〳〵獨り立ちでやつて行けるやうに思へて來たので、
『これを機會に東京へ歸らうか』と、渠はかの女の意を探つて見た。
『そりやア、あの新らしい女の國體の爲めにもいいかも知れませんが、ね——折角、わざ〳〵こちらへ來たものぢやアございませんか？』
『………』その返事によると、渠が見たところ、かの女は果して東京並びにそこに住む舊知人どもに對する反感がまだ殘つてるのであつた。そしてまたこの地に於いて新らしく得たところの戀愛的記念物——そのうちには鶴もあらう。やま川もあらう——に執着し初めたのであつた。

——（大正八年三月）——

わが子のやうに

『………』姉崎は、第二の妻の生みの子でない者がひとりゐる爲め兎角家庭に波瀾が生じるのを見て、さきに一度先妻のところから呼び返した子ではあるけれども、再び思ひ切つて手放してしまつた。あたまもよく、中學での成績も可なりいい方ではあつたが、その第二の母に向つてはどうしても反感ばかりを持つてゐた。勉強をすることはするが、女中のせいにして瀬戸物を毀わして置いたり、砂糖をなめてしまつたりした。そんなことならまだしもよかつたが――母が中途半端な西洋音樂の趣味に飽いて三味線をまじめに稽古し初めたのをも、子は自分の勉強の邪魔になると云つて、いつのまにか三味線の皮を破つたりした。そんなことが段々と嵩じて行つて、ついには、母の女としてはいのちとも云ふべき姿見にもひびを入れてしまつた。

父として、正面から又うちわからも、何と教へたりなだめたりしたツて、とても駄目であつた。それに、斯く生意氣になり出した子をうまく操縦して行かうとするには、今の母は少し年が若過ぎて六かしかつた。で、上の子を[illegible]、思ひ切つて、商店の小僧に出してしまつた。何かになつても世に出る

素質が備はつてるなら、小僧からでもきツとあたまを持ち上げて來るだらうと云ふ最後の希望をもつてた。尤も、父の云ふことを聽かぬ子に殆ど全く愛想をつかしてだが――。
するど、矢ツ張り、渠にはその周圍がそれだけ少し寂しく感じられた。さア、これを書き寫せとか、直ぐ郵便局まで行つて來いとか命令するには、全く無學な女中では物足りなかつた、それでも、初めのうちは辛抱してゐたのである。が、近頃になつて多少有利な事件の辯護を二つも引き受けたりして、自分の新らしい職業の方にも少し急がし味をおぼえてゐたところへ、
『どうだらう一つ、君のうちに置いて貰ひたい書生があるが――』と紹介して來たものがあつた。
『話しによれば置いてもいいが』と答へた。そしてそれがいよ〳〵本箱や蒲團を荷車に乘せて屆けて來た。が、荷が屆いてゐながら、當の本人が來ないので、
『どうしましよう、ね、運び賃を拂つて呉れいと云ふのですが?』妻は決しかねてゐた。
『拂つて置くのは何でもないが――』と答へながら、姉崎も玄關に出て見た。本人は一緒について來なかつたか?』
『へい』と、車屋はよわつてゐた。『さきへ電車で行つたものと思つてをりました。』
『それぢやアそれで、早く來てゐなけりやア駄目だのに! 第一、いくらで約束したのか分らないし、――』

『それは確かに壹圓五拾錢でした。』
『それにしたツても、受け取つた荷を本人が見てまだ足りない物があるとでも云はれたら困るからな。』
『そんな不正直なことはしてありません。』
『それはさうだらうが』などと、あしらひながら、まア、少し待たせてあつた。が、まだ早い時間を斷ればまだ仕事ができるのにと思ふと、餘り可哀さうになつたので、云ふ通りに拂つて置けと妻に命じた。
『………』本人はそのうちにやつて來た。
『荷が屆きましたよ。』妻の聲であつた、『壹圓五拾錢でしたか？』
『さうですが――拂つて下さつたのでしようか？』
『………』まだ隨分のんきさうなことを云つてるのが聽えるので、姉崎も二階から下りて來た。『一體、荷をさきへ屆かせると云ふものがどこにある？君が先づ來てゐなけりやア、約束が分らないし、また、荷物が滿足であるかどうかも分らないだらう――？』
『すみませんでした――友人のところへちよツと寄つてをりましたので。』
『そもそもから君は一つの失敗をしたのだよ――注意し給へ。』斯う云ひながらも、私かに新らしい子を貰つたやうな氣で、もと實子を入れてあつた室を渠に當てがつてやつた。堀を隔てて帝國議會の方

に面してゐる玄關の格子戶を這入つたつき當りの三疊の、その右手にある四疊半だ。小さい机は渠も持つて來たけれども、そこにあるテイブルと椅子とを使はせてやることにした。

増田と云つて、〇〇大學の法律科に這入つてたものだが、親からの學費が絕えてまご付いてたのであつた。そとへ出したわが子に比べては、たツた三つしかうへでないのだが、この青年のおとなびてゐる點に於いてはとてもわが子などは——たとへ、たまに歸つて來たとしても——及びも付かないだらうと思はれた。尤も、この年輩の時代には、年が二つ三つ遠へば、もう、おとな同士で云へば二三十年の違ひと同じであるかも知れないが——そして、さうして見ると、わが子も今年一杯、若しくは來年ぢうには、これと同じほどにませるのだらうが——。

先生、これからはわたくしはどうせ獨學でいかなければならないのですが、先生にも教はりながら、どう云ふ風に勉强していけばよろしいのでしようか？』

『………』こちらはこの時增田がどんな書物を持つたゐるかと云ふ好奇心で、渠の部屋の椅子に腰をかけて渠の立て並べてある本を調べてゐた。多くの筆記のほかに、綺麗な製本の憲法論や法學通論や民法總論などがあるあひだに、夏目漱石の『虞美人草』もあつた。『君は小說を好んで讀むか、な？』

『はい、時々讀みます。』書生はかた手をテーブルのはじにかけて立つてゐた。『いけないでしようか？』

『……』姉崎はわが子もいろんな小說を人に借りて來て讀んでたことを思ひ出しながら、『いけないこともないが、その讀みかたにある、な。』斯う答へるより外に――自分には經驗が少いので――何とも云ひやうがなかつた。今どきの靑年は敎育家らの心配する通り、それが爲めに墮落し易いのではなからうか？考へて見ると、自分も若い時に女郎買ひはしたことはあるが、精神まで墮落したことはない。いや、そんな餘裕がなかつたのだ。『前以つて云つて置くが、僕も獨學ぐみの方で――人とはその出が全く違ふから、ね。長らく憲兵さんの一人であつて、やツと辯護士試驗にとほつたのだから。』

『では、わたくしも先生に倣らつて奮發しましよう。』

『あア、そのつもりで勉强し給へ。』主人らしく云つてのけたが、自分には殆んど讀んだ經驗もない小說を讀んで、而かもそれが正當に分る男とすれば、さう馬鹿にもできまいと思へた。言葉もはき〱として、賴母しいところがあつた。それで、ほん立てのあひだにあめちよこの十錢入りがあつたのなどには、左ほど氣をとめなかつた。

皆が一緒に食事をしてゐる時であつた、妻はこちらに向つて、

『增田さんはうちへ來てから、御はんがおいしくツて溜らないんですツて』と告げた。

『それはまたどうしてだ』と受けて、增田に飯をよそはせながら、『僕も經驗がないではないが、自炊をしてをれば自分の焚いた物がうまい筈だが、な？』

『もとは自炊もやりましたが、めし屋へたべに行つてたんですツて』と、妻は說明した。『自炊がめんどくさくなつて。』
『それぢやア仕やうがない。』
『ところが、めし屋のは何度場所を換へて見ても、うまいところがないのです。だから、つい、好きな物を買つてすますやうになります。』
『好きな物とは――?』
『それが、ね』と、果物ずきな妻が引き取つて、『いやなことには、あまい物ですと。さうして增田さんは自分の胃を毀わしてゐるのですよ。』
『……』姉崎には直ぐさツきのあめちよこ入れと小說とのことが一緒に心に浮んだ。そして增田を矢ツ張り書生ツぽだ、いや、うちの子どもも同樣だらうと見て、渠に對して相當に有してゐたところの、尊敬心が先づ可なりうすらひでしまつた。けれども、その方が堅くるしくない親しみになつていいだらうと考へながら、『道理で君の顏の色つやが惡いと思つた。黄疸病になりかけのやうだぜ。目の色も尋常ぢやない。』
『さうでしようか?』增田も餘ほど心配さうになつた。
『それに』と、姉崎は子どもを時々戒しめたのと同じやうな心持ちになつて、『君の目がねも恐らく近

眼のぢやあるまい。』
『老眼のです。』
『さうだらう。まだ徴兵まへだと云ふのに、――近眼ならまだしも――老眼をかけてをると云ふのは、そこに何か意味があらう、な。きツと、君の喰ひ過ぎや、あまい物過食の結果だらう。注意し給へよ。』
『若しそれぢやア　わたくしも何とか改良しなければ――。』
『増田さんはたべ過ぎちやア、タカヂヤスターゼを飲んでいらッしやるのですよ。わたしはそりやアよくないと云つてゐますの。』
『さう、さ。』姉崎は然しうちが喰ひ物をけち臭くやかましいのだと思はれない爲めに言葉を添へて、「めしの喰ひ過ぎはまだいいとしても、菓子の喰ひ過ぎにはうちの子どもも一度やられて黃疸になりかけたことがある。』
『そんな時にはしじみの味噌しるが一番よくききましたが、ね』と、妻は増田に語つて、それからこちらに向ひ、『一度増田さんにもたべさせて見ましようか？』
『それもよからうが――本人が直す氣にならないぢや駄目、さ。』
『これから直します』と答へゐてた。が、その日にまた渠はこツそり菓子を買つて來た。そしてそれ

を自分の部屋で喰べてるところを、うちの下の女の兒が見付けて、
『增田さん、あたしにも頂戴』と云つたさうだ。で、止むを得ず一つを與へた。すると、今一人、妻のつれ子の男の子も欲しさうに見てゐたかして、貰ふことになつた。それをあとになつて、その男の子が母にうち明けたので分つてしまつた。
『わたしはよして頂戴とおこつてやりました、わ』と、妻は二階へ來て私かにそれをこちらへ告げた。『子供のためにならないいぢやアございませんか――いやしくなつて?それに、たべるのは子供だましの駄菓子ですよ。貢さんの時のやうに、また近處の評判になつてしまひます、わ。』
『困つたものだ、な。』姉崎は自分の妻が妻自身のことをばかり考へてゐたのでないことは前にもよく分つてゐた。貢もよくうちで喰ひ過ぎた。その上にも、やつてある小使ひを以てよく買ひ喰ひをした。毎日、中學へ出て行く時は十分にめしを喰つてるのにも拘らず、そとへ出ると直ぐ燒き芋屋へ行つた。それが近處一般の評判になつて、近處のかみさんどもが貢の出て行く後ろ姿を見ると、
『また姉崎さんのところの坊ちやんが芋屋へ寄るから見て御覽よ』などと云ひ合つたさうだ。
『………』それをこちらは最初に氣が付かなかつたが、注意して吳れるものがあつたので分つた。つまり、妻がままましいので、まま子に十分に食物を與へないからであると見られてゐたのだ。以つての外のことであつた。それは子供によく云つて聽かせて直つたが、矢ツ張り、どこからか物を買つて來

て、親や兄弟や女中に見られないやうにして、寢どこの中でむしや〳〵やつたり、便所へ行つてたべたりした。それが爲めにだらう、勉强はよくしても、いつもあたまが痛い、痛いと云つてゐた。

ところが、今回の書生もまた、やがては、便所でこツそり物を喰ふやうになつたのである。貢の時には妻も子供の敎育上には犧牲を惜しまぬからと云つて、便所のきん隱しの前の方に白い不思議なこなが散らかつてるのをゆび先きにつけてちよツとなめて見た。

『さうしたら、果してあまい味がして、お菓子のこなぢやアありませんか？まるでおはなしに在る意地きたないお嫁さんや、しうとさんのやうです、わ、ね！』

『困つた、な』と、その時も答へた。それと同じやうなことを妻はまた發見したのだ。けれども、喰ひたい病はとめられると抑つてます〳〵意地ぎたなさがつのるものだし、それに今回のは自分らの子でもないのだから、さしさはりのない限り、成るべくうツちやつて置くことに夫婦は相談をきめた。

『然し、わたし達の食事中にははばかりへ行くことだけはやめて下さいよ』と、妻は增田に對して少し神經質的になつて宣言した。增田は齒が殆ど皆取れて入れ齒になつてると云ふので、堅い物が喰へず、また食事の進みが遲いけれども、妻が子供の世話や所天の給仕をしながら箸を運ぶのよりも早くおしまひになる。そして渠は箸を置くが早いか、必らず便所へ行くのであつた。

『……』姉崎は妻がさういふまでは左ほど氣が付かなかつたので、妻や女中の急がしい時には增田

にも自分のめし茶碗を渡すことが度々であつた。が、喰ふと直ぐ下へ出しに行くと云ふことに氣が付いてからは、自分も增田の給仕を餘りどツと感じなくなつた。たばこになつてから、『君、便所へは起きると直ぐ行く習慣をつけるといい、ね。時間から云つても一番便利な時で、それがまた一度習慣になると、毎日その時刻でなければ出たくならぬものだ』と云ふ、自分の經驗などを敎へた。
『ぢやア、さうして見ましよう。』增田は他の點に於いてはごく素直で、從順で、一度子供に懲りたこちらに取つては、氣持ちのいい靑年であつた。或手紙の文句を書かせても可なり書けた。
『あのくせが直りさへすれば、いい男です、わ』と、妻もかげで賞めてゐた。
主人が湯好きの爲めに朝から立てて置く風呂のことに就いても、大抵の女中では石炭に火をつけるこつがなか〳〵敎へても分らないけれども、增田はさすが男だけに――うちの釜が舊式で火が燃えにくいにも拘らず――直きにおぼえてしまつた。
朝は主人と主婦とだけが這入つてしまつたあとを、またよく燃して置いてゆふがたまで湯の加減を持たせ、再び主人夫婦と子どもが這入つてから、あとを書生や女中に與へるのである。が、增田は、
『けふはやめて置きます』と云つて、湯に這入らないことが多かつた。
『折角、君がせツせと焚いて置きながら、這入らんとはどうしたんだ――うちでは、皆綺麗好きなのだから、ひとりでもあかだらけになつてをる者があると面白くないのだから、な?』

『然し、湯に這入ると、ぞツとすることがあります。』

『それはこれまで這入りつけぬ爲めだらう――？』一つには、また、それも增田の胃が慢性的に惡くなつてゐて、その結果が皮膚をまでもよわくしてゐるのだらうと思はれた。

或日、客と下の座敷で將棋をさしてゐると、增田もやつて來て、

『拜見してもよろしうございますか』と云つた。

『君も分るのかい？』

『少しは知つてゐます。』

『……』何だかなか〳〵分つてゐさうで、むづ〳〵してゐるやうすが見えたが、姉崎は主人としてただ寛大にうツちやつて置いた。增田はやがてふところの中から何物かを出して、口へ持つて行つた。そしてその口をもぐ〳〵させた。それが一度ですむかと默つてゐたら、二度やつた。そしてまた三度。その初めはそれでも遠慮しながらのやうに多少の時を置いたが、三度目四度目になると、殆どつづけざまになつた。酒がつのると、ただうちで飲んでるのでは面白くなくなつて、雪見や花見やその他の變はつた場所へ行つて興を添へたがると云ふが、增田の喰ひけも、こちらの勝負に私かに興を添へさせてゐるのかと思ふと、少し癪にさはらないではゐられなかつた。で、こちらは初めての怒りを顏に見せて、それでもまだ言葉は優しくして『君は、まア、向ふへ行つてゐ給へ』と命令した。

『はい』と、増田は相變らず素直に行つてしまつた。

客が歸つてからのことであるが、主人は渠に向つて、

『君はあんなことぢや落第だよ。これから一人前になつて行かうと云ふ男が主人の客がゐる前で駄菓子を喰つてるなんて――まさか、子供ぢやあるまいし！』

『すみません。氣が付かなんだのです。』

『あんなことに氣が付かないぢやア――』それでも、増田に對して子供らしい意地ぎたなだけが直ればいいと考へてゐたのだ。

が、或日、ゆふがたから渠がちよツと友人のところへ遊びに行きたいと云ふ許しを得て、出て行つたあとで、女中がその主婦に向つて渠のひどいしらみたかりであることを訴へた。すると、主婦はまたこれをその所天に訴へたのである。

『あなた、ちよツと來て下さい、な』と云はれたので、姉崎は二階を下りて、もう、子供を寢かしてある妻の部屋へ行つて見ると、かの女は氣味の惡さうな顏つきをして、『増田さんにはどツさりしらみがたかつてるさうですよ。』

『さうか？』直ぐ二三日前に自分のした紐に大きなのが一匹ゐたのを思ひ出した。かの女にも告げようと思つてたのだが、その後何ともなく、且、仕事に急がしかつたので、そのままになつてゐた。『お

れにも一つゐたが、それぢやア增田のだ、な。』

『わたしはまた二匹取りました、わーどうも不思議だと思つてましたが、あの湯殿へ腰卷きを置くのがよくなかつたのです、ね。』

『………』姉崎は、寧ろ蟲のことよりも、その蟲が夫婦以外のものにも共通であつたことを先づ面白くなく感じた。で、何となくいきどほらしい感情が先きに立つて、『直ぐ追ひ出してしまはう、きたならしい！』

『そりやア、どうせさうしなけりやアならないでしようが、まア、思つてもぞツとするぢやアありませんか、これも貢さんの時のやうに』と云つて、かの女が女中の告げたことを取り次いだによると、自分らに移つてゐたのと同樣に麥つぶほど大きなのが、襦袢の襟うらなどにづらりと行列してゐた。女中が何げなく襦袢を洗つてやると云つたら、增田はそれに及ばぬと答へてゐたさうだが、自分でも知つてたからであらうと云ふのだ。無理にぬがせてよく調べて見ると、襟うらに限らず縫ひ目と云ふ縫ひ目にはずつと白い玉子が殆どすきまもなく附いてゐて、そのあひだにまた大きな親がいくつも喰ひ込んでゐた。それをつぶしただけでも五勺や一合にはなつただらうと云ふのだ。

『ぢやア、湯に這入るとぞツとすると云ふのも恐らくその關係だらう。』胃病の爲めだとは取り消してあつた。

『つぶせるだけはつぶして、假りに洗つて置いたさうですが』と、妻はなほその聲までをも氣味惡さうにして、『子供のおしめなどと一緒のところぢやア移つても困ると思つて、別なところにしたのです。きツと、あの人の衣物や蒲團にもついてゐますよ。あの人はよく、どてらを着て御はんでも何でもたべるでしよう――きたないぢやアございませんか？なんだツて、麥つぶほどもあると云ふんですもの。それがぞろぞろ匍つてゐちやア――。けふはねイやがたツた一枚の襦袢におほかた半日かかつてると思つてましたら、今聽いて見ると、その麥つぶを澤山地めんへ並べてうへの子供と一緒に競爭させたりなんかしてゐたんださうですよ。』

『ねイやも亦馬鹿なことをする、なア――一體、その襦袢を洗つたりしないで、――どうせさうなつては取り盡せないものだから――ひらべツたい石の上にのせて、また石か何かで打てばいいのだ。』貢の場合を考へて見ても、その母が不精で、その子をしらみたかりにさせたままでこちらへ渡したのだ。何も知らない子は、ただからだがかゆい爲めに、夜なかでも夢中に爪でぼり〳〵かいたものらしい。こちらが氣づいてからの渠をはだかにして見ると、からだ中の皮膚と云ふ皮膚はかき荒されてがんがさのやうに血がにじんだり、でき物になつたりしてゐた。最初の妻と無理に別れたのをまだ多少は氣の毒に思つてた自分だが、かの女の不精もその子をこんなにまで苦しめて知らないでゐるのかと俄かに憎ましくなつた。その時は、自分がさきに立つて子供のシャツをそのまま石の上にのせ、かなづち

を持つて打ち叩いた。すると、その叩く度毎にぴしり〳〵と云ふ音がした。そして不都合な先妻をあはれな子の爲めになぐり付けてるだけの氣持ちよさをおぼえた。が、その子をも亦別な不都合の爲めに家から出してしまはねばならぬやうになつた。

『どうしましよう、ね？』

『……』たとへ置いてやるにしても、このままでは妻が承知しないにきまつてた。かの女は貢に對しても或程度までの讓歩をしてなほ融和ができぬと見た時、こちらに向つて止むを得ないから何とか別な道を講じて呉れろと訴へた。そしてそれはこちらに取つても尤もだと見えた。まして今回のは出してしまへばもとの他人である。そんな者の爲めに今後の家庭にまた騷ぎを起すでもなかつた。『斷わつてしまうより仕かたがないのだが——それは今夜歸つて來たら、おれからよく云ふから。』女が正面に出て物を云ふとさうでもないことにも角が立つと思つたからである。

けふよそから辯護の相談を受けた事件に關してなほ民法を調べてゐると、十一時ごろになつて增田は歸つて來た。戸は締めた樣子であつたが、はしご段の下から、

『只いま歸りました』と云つた切りであつた。待つてゐても別に顏を見せないので、便所に行きながら下りて行つた、

『增田、ちよツと話があるんだ。』

『何か御用ですか』と云つて、渠があがつて來たのを見ると、不斷どほりで、別に赤い顏もしてゐなかつた。あア買ひ喰ひをしてゐたら、高が知れた所有金も直きになくなるだらうから、そのあとはうちの物をどうするか知れないと云ふ疑問を持つてゐたのが、これまでのところでは幸ひにも夫婦のわる推量に終りさうであつた。その代り、また、おそくそとから歸つて來ても顏を見せないのは、てツきり酒でも飮んで來たのぢやアないかと思はれた。が、それも幸ひに無事のやうすだ。

『………』いい青年で惜しいが、止むを得ないと云ふ考へを先づあたまに持ちながら、『ほかでもないが、ね』と、こちらは主人らしく堅くるしくなつて、左りの手を事務デスクの前にかけた。そしてデスクの横手に突ツ立つてゐる增田を見あげた主人の顏つきが少し違つてると見て取つた爲めか、渠が何を云はれるかとをぢけたやうに伏し目になつてるのを私かにあはれみながら、『君にゐて貰ふことができないことが――實は、突然だが――出來したのだ。』

『さうですか？』ちよツとこちらを見たが、また目を伏せた。

『けふ、女中が君の襦袢を洗つたので分つたのだが、君にはしらみが澤山たかつてるさうだよ。』

『さうですか？』

『さうですかツて、君にはそれが分らなかつたのか？』

『へい――』

『何だか曖昧な返事だが、それを今更ら責めるのではない。兎も角、うちには子供もゐることだから移つては困るので一先づそツくり立ちのいて貰ひたいと云ふわけで――實は、僕にもそれが一匹たかつてゐて、不思議だと思つてをつたが、今夜女中の話で初めてその原因が分つたのぢや――』事實としては、まだ一つ云つて聽かせたいことがあつたが、自分の妻にもたかつてゐたと云ふことだけは――自分の妻のからだを樂に解放でもしたのと同じやうに思はれるのを恐れた爲めに――云ひたくなかつた。その代り、自分の息子の場合を詳しく語つてやつた。そして、實際に同情もしながら、子供や書生の時代には、自分も經驗があつて止むを得ないと云へば云へるが、自分の子もその時湯に這入るとぞツとすると云ふことを云つてたのを見ると、矢張り、しらみたかりが原因らしく、湯に這入らないと蟲が涌き、蟲が涌くとまた這入りたくなくなるのだらうとも。そして増田の爪に黒いあかがたまつてるのに氣が付きながら、『きツと、君のからだ中にひツかきむしつたあとができてをるのだらう？』

『そんなものはありません』との答へであつた。

『……』うそとは思つたけれども、『して見ると、君のからだは喰ひ過ぎの爲めにでも皮膚までがしびれてをるのだらう――餘ほど注意せんと駄目だぞ。』

『そりやア、これまでにも一匹二匹は見付けたことがありますが――』

『話によると、それどころぢやない――まア、うちで見られても困るが、衣物でも蒲團でも親類のと

ころへ歸つて行つてからよく調べて見給へ。』

『若しそれとしたら、親類でも嫌ひましようから、もと〳〵通り、友人のところへ行きます。友人とは同じ蒲團に寢てをりましたから、同じやうにたかつてをりましようが――』

『……』姉崎は、自分の子供もよそへ出てゐては、――年も一層じただから――またそんな狀態になつてはゐないか知らんと思ひながら、蒲團やどてらは棄てるのも惜しいだらうが、シヤツや股引きはどうしても思ひ切つて直ぐ棄てるがいいと念を押してやつた。

『そんなものですか、あの蟲の猛勢は？』などと、增田はまだ左ほど氣味惡くもおそろしくもないかのやうに問ひ返してゐた。

『しらみの爲めに苦しみ死にをしたものもあるのだ――尤も、それは今一つ別種の、毛穴に喰ひ込むやつだが』とも、をどして置いた。

『ぢやア、これから行くさきをきめてまゐります』と云つて、渠がその翌朝こちらの枕もとへ來て挨拶した時には、自分としてまことに氣持ちが惡かつた。一匹でもここへ落して行きはしないかと思つてだ。

自分はゆふべ寢たのがおそかつたので、少し不斷よりも寢坊をしてゐた。

妻には書生の立ちのき料には餘るほどの金を與へるやうに命じて置いたので、かの女はそれを次ぎ

の茶の間で實行してゐるやらであつた。それが渠の禮を云ふ聲に終はると、またかの女の聲で、
『然し、まア、ちよツとこツちへ來てシャツの襟を見せて御覽なさい。』
『………』若しその相手がこちらと同じやうな紳士であつたら――と云ふやうな、あわいねたみも出た。が、姉崎は矢ツ張りあふ向けになつたまま、かの女が椽がはへ出たけはひに耳をかたむけてゐた。
增田のシャツの襟うらをでもひツくり返して見たらしいかの女は、やがて頓狂に叫び出した、――
『あ！うぢや〳〵ゐますよ――ほんとに麥つぶほどのが！左りの方は？あ！ひどい、ひどい！ちよツとじツとしてゐて御覽なさい（一匹をつまみひねつてゐるらしかつたが）、そられ、この通りのが。（手渡しでもしたかと思へると、やがて）あツ』と、特別にまたひどく叫んだ。
『………』その叫びかたが餘り特別にひどかつたので、こちらも床をはね起きて出て行つて見た。すると、かの女はただでさへ大きな口を明けて、その喉の奥から
『げツ、げツ』と云つてゐたが、溜りかねたやうにして便所へ逃げ込むと、直ぐげろを吐いたやうすだ。
『一體、どうしたのだ？』姉崎は寢まきのまま立ちながら斯う聽いて見たが、增田も女中もあツけに取られて返事がなかつた。
『もう、直りましたが、ね』と云つて、妻は便所の方から椽がはを歩いて來た。去年住んでた人がうんと手入れをして置いたと聽く庭の藤棚の、澤山その小い芽をむくみ出させた枝々をとほして來る朝

日の光に、かの女も照らされながら、『増田さんがその爪と爪とで大きなのを一つつぶした、そのしるがわたしの口へ這入つたのですもの――たださへ氣味が惡いのに！』

『増田の血を吸つてたのだから』と、張りつめてた心も滑稽に砕けて、『さぞお菓子のやうにうまかつただらうよ。』

『もう、云つて下さるな！』かの女はまた庭に向つてつばきをした。そして女中に水を持つて來いと命じた。

『うちぢやこれだから困るの、さ。』姉崎は半ば増田を今一度納得させるやうに、また半ばは自分の妻の我慢づよくない潔癖を責めるやうに云つた。そしてかの女にまた二度目の子種が宿つたのではないかと思ひながら、増田に向つて最後の挨拶をした、『ぢやア、行つて來給へ――友人のところなら拒絶もしまいから。』

『シャツやもも引きはすツかり棄てて改めるつもりですが、絣織りやどてらは大丈夫でしよう、な？』

『まア、いよ〳〵荷物を運んでからよく調べて見給へ。』どうせ再び見ず知らずのもと〳〵通りに返るのなら、蟲がゐようがゐまいがこちらの問題ではなかつた。

『兎に角、それでは相談して來ますが、どうか惡からず――これもわたくしが不都合でございましたのですから』と云つて、増田が出て行つた。そのあとで、

『では、お父さんのお言葉通り奉公に出ます』と別れの挨拶をして行つた貢の後ろ姿が思ひ出された。今回の書生とは違つて、まだ少しも世慣れぬ爲めに強情でもあり、また口もよく聽けなかつたけれども、もう、日本橋へ行つてからおほかた半年ばかりになつた。

『増川さんは知らなかつたなんて、うそですよ。ねイやに聽くと、毎朝起きる前にはぼり／＼と――』妻はその顏をしがめて胸のあたりを兩手で八方に搔きむしる眞似をしながら、『毎朝、暫らくは、きツと、見てもゐられなかつたさうですの。』

『大きいのがどこにおツこちてをるかも知れんぞ。』

『……』妻はその足もとから板の上や疊の上を調べながら、書生部屋まで行つた。女中もそのつもりでか、立つてゐるあたりを小い眞珠をでも失つたかのやうに探してゐた。

『蒲團や衣物を一つにまとめさせてあるか？』

『それはちやんとして行きましたが、ね――』

『……』それほど素直に分つてるものがどうしてあんなに先妻の如く不精なのか不思議であつた。けれども、まだ書生で、年も行かないのだと考へてやると、如何にも冷淡さうに突ツ放したのが可哀さうでもあつた。

『いツそのこと、あなたは決心して一度お國へ歸つて、お母アさんにすツかり蒲團でも洗つて仕立て

直してお貰ひなさいよ。』妻は斯う渠に勸めてゐた。
『さうだ、それが君の爲めには一番いい道だが』と、こちらも贊成はした。先妻のやうな不精ものもまたと世にあるまいから、親に行きさへすれば、直して異れるだらう。ついでに、あの喰ひ辛坊をも直させるやうに手紙を書いてやらうかとも考へた。
午後には小つぶの雨が降つて來た。そのそらを見ると、そらが一面にしらみだらけと想像された。
『もう、春が近いが、春になると、花見じらみと云つて、衣物のうらにをるのがおもてへいくらでも這ひ出して來るものだ』とも云ひ聽かせてやつたツけ。
さツと春さめまがひの雨が降つてまたやんでしまつたゆふがたになつてから、增田は再びやつて來た。妻は三味線の糸を買ひに外出して、うちにゐなかつた。が、渠は羽織りこそそのままのやうだが、したの物はすべて取り換へてるのを見ると、ゆふべからこちらが渠の拒絶の爲めに餘り緊張し過ぎてゐたやうにも思へた。
『奥さんは勿論、先生も、わたくしなどから見れば、少し潔癖過ぎます。書生仲間にしらみの五匹や六匹は左ほど苦にもならぬものです』と、渠は云つたのであつた。
『………』こちらは一匹でもゐたら困るけれども、そのみなもとがさツぱりとなれば、もう、それでいいのではないか?

『蟲さへのがれてしまへば、先生、奥さんも御承知の上でまた使つて下さいますか？』

『そりやア――』とまでは答へたが、蟲のみなもとはただシヤツや衣物のやうならはべばかりにとどまらぬことをも考へてゐた。『ついでに、君のお菓子病も直つて來さへすれば。』

兎に角、けふは天氣が惡いし、四五日中に國へ行くかも知れないから、荷物はそツくり預つて置いて吳れと云ふ賴みを殘して歸つて行つた。友人が來てゐてもかまはないと云ふからと云つて。

『紀伊の國は音なしがはアのみなアかみイに』と云ふのを、子供や女中と一緒になつて眞似もし出した無邪氣な靑年が、恐らくそのこれまでの一生中に初めての大打擊をかうむつて、出て行つたのだ。懲戒的には本人の爲め一つの進步になるだらうと考へれば考へるほど、人ごとではなく、わが子のそれのやうに感じられた。

『今そこで增田さんに會ひましたが、ね』と云つて、妻も歸つて來た。『しほ〳〵して行くのが可哀さうになりましたから、すツかり直つたらまた使つてあげますから、ね、と云つて置きましたよ。それでいいでしよう――別に、何も泥棒したわけでもないんですから、ね？』

『うん、それでよからうが――』姉崎はただ斯うばかり答へて、增田の爲めをばかりではなく、わが子のことをも考へてゐた。何とかして惡いくせが直りさへすれば、いつでも再びうちへ呼び返してやるのにと。――

――（大正八年三月）――

二食主義者

『そりやア、一體、どう云ふわけなのか？　晝めしを拔きにする人はそれだけ宿に儲けがないと云ふので、よそへ行つて呉れろと云ふのか？　多分さうだらう。さうにきまつてる』と、渠は言葉にまでも斷定してしまつた。そして今夜だけはおとまりになつてと云はれたのをもふり切つて、わざ〳〵さして來た宿を直ぐ出ることにした。田舍ものめが！二食主義を儉約の爲めにやつてるのだと見たのだらうから、かねさへ增す約束にしてやれば、それで向ふには何の申しわけもなくなるのだらうが、くわツとあたまへ來たので、そんな讓步をおとなしくするだけの餘地もなかつた。

けふは實に、渠に取つて、初めから面白くないことがつゞいた。東京の家を出る時には俄かに小さめが降つてたので、面倒にもから傘を持つて出た。電車のうへでは、友人に出逢つた爲めについ市場の景氣などを聽いたり語つたりしてゐて、まだ半分もつかはない回數券をうツかり落してしまつた。兩國停車場前で下りて、今一つ云ひ忘れて來たことをハガキで出してから、急がないでもいゝのを急いだ爲めに、停車場前の石のうへで日より下駄をすべらして、膝を突き、膝ツこへすりむき傷をつけ

た。

『おとなのころんだのア見ッともないものだア、な。』

さう、向ふがはにゐる車夫どもが云つてるのにも神經がいら〳〵した。

『……』ころばうが、起きようが、こちらの勝手次第ぢやアないかと云つてやりたかつたが、車夫どもが相手なので、わざと見向きもしないで切符口へ行つた。

旅行に出て少し海の空氣をでも吸つて來ようと云ふその原因なる神經衰弱がすべてそんな失敗をさせるのだと思ふと、それも止むを得ないのだが――

幸ひに直ぐ乘れて、直ぐ發車であつたものの、途中の驛をさして來たところと聽きちがへた爲め、あまり速くついたと思ひあわてて顏を出して見ようとして、がらす窓にぶつかつた。明いてるのだと思つてだ。こんなことでは、昔どほりの横すぢを二本、がらすにまだ必要とせられるではないか――田舍もののやうに？

それから、稻毛驛に下車すると、あかりがさツぱりついてゐなかつた。汽車が行つてしまうと、たツた獨りぼツちで全く異樣なところへ置き去りにされたやうな感じがした。手さぐりで段々をのぼり、橋を向ふへ下りる時に、やツとその下からがんどう提燈をさし向けて呉れたものがある。多分驛員だらうと見て、半ば獨り言のやうにだが、

『ひどいぢアないか――まツくらで?』

『……』向ふには返事がなく、その提燈をおろしたので、またまツくらになつた。

この時には、然しもう、段をおり切つて改札口の方へ近づいてゐた。あたまばかりでなく、足もふらふらするのを、

『おい、海氣館』と呼んで、見おぼえのある名の弓張り提燈にちから付けた。そしてそれをさし上げてたものに車を呼べと命じた。

『電氣が消えてしまつて――こんなことが月に二三度はあります』と云つてゐた。

東京の方が低く一面にあかく見えるだけで――月のないそらは車夫の提燈の火がうつる範圍以外を眞ツくらであつた。提燈の火が多少こちらの見おぼえある道を押しひらいて行くと、脊の高い松原に這入り、松のでこぼこした根もとをとほつて宿のおほ玄關へ來た。

曾て閑院の宮さまが到着せられた時、丁度この玄關の眞うへなる室に新俳優の夫婦が來てゐて、子供のおしめを欄干にほしてあつた。前以つてそんなことのないやうにと通知されてゐたさうだから、それにも拘らずさうしてあつたのはわざとであつたらしい。番頭どもは警察官と共に怒つてその俳優のぶしつけを何とか處分しようと立ち騷いだが、却つて寬大な宮さまは笑つてそのままお許しになつた。その數日後にも渠はここへ來たことがあるが、ここも今電氣が消えてゐた。

がらすの板に圍まれたランプの光りにみち引かれて、渠は山の上なる一つ座敷へ行つた。つれ込みには持つて來いのところだらう。獨りで寢起きするには少し凄いほど寂し過ぎさうだが、どうせ暫らく静養する爲めだから、これも亦一興であつたらう。

番頭が錠まへを明けようとしてもなか／＼明かなかつた。踏み石の上に置いたランプをこちらがさし上げて見せてやつても、矢ツ張り明かなかつた。

『これは違つてますから』と云つて取りかへに行つたのも、亦、一つの面白くないことであつた。神經の衰弱はいろんなことに緣喜をかつがしめるやうだ。

横の方なる松の根もとへ行つて小便をしてゐると、これはもとからゐた筈の年増女中が火鉢を持つて來た。が、勞れてゐるので暫らくだツたとも直ぐ愛嬌をふり撒く氣にはなれなかつた。

やがて別なをとこ衆と共に鍵を持つて今の番頭が返つて來たが、

『こんな間違ひをして置くのはいけないぢやないか』と、横柄にをとこ衆を叱りながら戸を明けた。

『もう、澤山明けなくてもいゝよ』と命じたので、二枚にとどめた。そこの四疊半にあがつてから、例の二食主義をかけ合つたのだ。氣が向けばまた十日ばかりもゐようと思つたからである。が、道理で番頭があまり面白い返事をしないで、再び茶道具を取りに行つて來た女中と入れかはりに去つた。けれども、それでいいことと思つたので、こちらは少し氣が落ちついて茶をすすつたりした。そし

て風呂にはうちで這入つてから來たので、今夜はやめることにした。時計を見ると、もう十時二十五分にもなつてゐた。酒でも少し飲んでぐツすり眠ればよかつたので、一合だけを命じ添へた。二合も飲めば、いつも苦しくなるのを知つてるからである。ところが、それもまた二食主義と共にただけち臭い註文と見られてしまつたのだ。

『あの、をかしなことを云ふやうですが、な――』と云つて、暫らくしてから立ち戻つて來た女中が云ひにくさうにからだをひねつたりして語つたところでは、さう云ふ註文ではうちではできにくいから、ここの門を右へちよツと行つたところに上總屋と云ふのがあつて、近ごろ新らしい座敷も建てたし、よくお客を歡迎するとのことだ。

『……』渠はそれを皆まで聽かずくわツとなつた。『あたまからよそへ行つて呉れろと云ふのだ、ね。よし！もとの番頭さんがゐれば知つてることだが、おれは前にも十日間ばかりとまつてたことがあるが、矢ツ張り、二食であつたのだ。』

『近ごろは――然し物が高くなりましたので』と、女中は相變らず云ひにくさうに辯解した。

『物が高ければ二食を高く取ればいいぢやアないか？習慣上喰はないと云ふものを無理に三食やつて呉れいなどとは、田舍ものの主人でなけりや云へないことだ――馬鹿々々しいやつだ！』

『では、ちよツと待つて下さい。』

『いや、もう、何もお前から主人にかけ合ふにやア及ばない。』斯う渠は矢ッ張り多少おぼへのあると思へる女中の横がほに向つて云つてのけた。『もッと安い宿があるなんて、客に對して失敬きはまる云ひぶんぢやアないか？おれは安けりやア三食もすると云ふんぢやアない！』

『…………』女中は氣の毒さうに默つてしまつた。

『…………』渠も默つて籐の小籠をひッさげて庭へ下りた。そして言葉を少しおだやかにして、『代がかわつたのだ、な？』

『代はかはりませんが』と、女中も活路を得たやうになつて、『番頭がかはりました。』

『ぢやア、その爲めだらう』と云つたところへ、その番頭がやつて來た。

『今夜はもう、おそうございますから――』

『いいや、とまらない。』渠はくらい道を下りて行きながら、『何とか別な云ひかたもありさうなものぢやアないか？』

『どうもすみません。』

『まるで田舍者そツくりの云ひ分ぢやアないか、東京では二食主義を實行する紳士が幾らもあるのだ！』

『…………』

海に向つた正門手まへの高みで渠は番頭の提燈に離れると、また一とき眞ツくらになつてしまつた。犬の一匹、こちらに向つて吠えながら逃げて行く聲が聽えた。以前にゐたあのつんぼのしろ犬はどうしただらう——つんぼだから、ろくに吠えることもできず、そして手眞似で呼べばどこまでもあとをついて來たが？誰れもちやんとは飼つてやらないけれども、子供のほかの誰れもにあはれまれてゐた。渠は或朝、自分の喰ふ飯をそツくりあの犬にぶちまけてやつたことがある。滯在十日間を何だかめしがうまくないと思つてたら、それが南京米であつたことが分つた。そしてその朝、直ぐ海氣館を引き上げてしまつた。けれども、今夜のことはまさかその時のことを誰れかがおぼえてゐての仕返しとも思へなかつた。知つてるものがあるとすればあの女中だが、それもこちらの顏さへ左ほどおぼえてゐなかつたやうだから、まさか——。

目が段々やみに落ち付くと、正面の海が門の兩方のくひの間から、直ぐ目前に白く見えて來た。それが左右へ全くひろがつてしまうと、渠は海岸のじやり道へ出てゐた。道も白く、海も白くて、自分の周圍をもやが立ち籠めてるかのやうに海陸のけぢめが分らなかつた。子供の時に聽いてる海坊主とやらがぬツと現はれて、その大きな手で以つて自分を深いところへ引ッ込んでしまつても、今なら、誰れにも分らないですむだらうとおぞけ立つた。

人どほりもなく、かたがはの人家もすべて寢しづまつてるやうだ。而も一二年前に來た時とは殆ど

すツかり遠つてるらしい。ここも一昨年の津浪でやられたのだらうと思へた。門から二三町目に小いけれども新らしい室もできた宿があると云はれたのを、幸ひにまだ起きてたので賴むことにした。

『一體』と、渠の心は、然し、まだ直ぐには納らなかつた『おれはただ二食主義の爲めに嫌はれたのか？それとも、別にまたけちな男だと見えるやうなことを云つたか？』若しけちと見る方から云へば、恐らくきてうめんに物を云ふ奴はすべてけちであらう。ただ酒を飮みたいから一本つけて來させて、飮めないですんだだけは默つて殘して置き、舊い習慣通り三食を持つて來させて、喰ひたくなければ喰はないで置けば、人は喜ぶだらう。が、こちらには無駄なことだ。自分は豫定の十日なり十五日なりを無駄をしてまで人を喜ばしてゐることはできない。そこをけちとするならけちでもいい。ただそんなところに厄介になりたくないだけのことだ。

今一つ考へて見ると、こちらは人と習慣が違ふから人よりも少し食料の割り合ひを高くして吳れてもかまはないと云へば云へた。が、それは向ふでは云ひ出せなかつたのだらうし、こちらも亦おだやかには云ひ後れてしまつた。

『きツと顏の圓い番頭のせいでしよう』と、蠟燭の火を大きなのと取りかへに來た第二の宿の主人が云つた。ここへ來たわけは初めにちよいと聽かせられてたので。

『あれがいけないのかい？』渠には、顏ばかりでなく、目も五分刈りのあたまも圓くくりくりした男

のありさまがはツきりと浮んだ。それが最後にも提燈で以つて山の道を見送つて呉れたのであつた。
道理で、紳士を馬鹿にすると云つてやつた時返事をしなかつた。
『あの番頭さんにたつてから、あすこの商賣ぶりがかはりました。こないだも、同じやうなことでおこつてうちへ來られたお客さんがございました。』
『………』矢ツ張り、一食主義を云つた爲めであらうか、それとも酒をあまり飲めないことを見せた爲めだらうか？或はまた人品を見て勝手にけち臭いものとされてしまつた爲めだらうか？
ふと思ひ出すと、あの女中のことであつた。あの横がほはちよツとこちらの知つてる某子爵の落し子になる武子さんに似てゐた。痩せぎすで、三十五六の、脊がすらりと高いところも、見おぼえがあると思つたのは、さきに自分があの宿へ來てゐた時のことではなく、東京に於いて知つてたからである。それにしては、然し、最初に火鉢を持つて坂をのぼつて來た時に、あの物慣れていつも親しげな物ごしで、
『お久し振りです、な』ぐらゐのことは云ふべきであつた。さうすればこちらも直ぐ
『こんたところへ來てゐるのですか』と少しびツくりして叫んだでもあらう。
若い友人の紹介で初めて物好きにだがかの女をその酒屋の借り二階へ訪問してから――、二度目の妻がまだきまらない時であつたから、都合によると、貰ひ受けようかとも思つてたが、――三四度も

訪問をつづけた。どうせ旦那取りをしてゐるか、それともそれを望んで探してゐるかのやうすであつた。友人は年が若いのであんな婆々アぢやア眞ツぴらだと云つてたが、或は一度ぐらゐは當つて見る野心もあつたやうだ。

何と云つても、美人ではあるが、獨りで自炊をしてゐながら、生活費がどうしても七十圓はかかると云つてるので、とても手の出しやうがなかつた。そのうちにハガキが來て、

『今度わたくしは人のゐさふらふになつて行きますから、當分お目にかかりません』と云ふ文句が書いてあつた。で、口かけにでも行つたのだらうと思つてた。

あれが若し果してかの女なら、意外だ。向ふも亦意外なところで出くわして、きまり惡かつた爲め電氣が消えててランプのあかりのうす暗いのをしほに、とぼけてゐたのかも知れない。斷わりを云ひにくさうにからだをひねつたりしてゐたツけ――。うツかりしてゐたので、今一度念を押しに行つてもいい。が、若しかの女とは取つてもつかぬ別人ででもあつたら、こちらは恥ぢのうは塗りをするばかりではないか?

然し、今一度行つて見ようか? いや何でもないことをあまり考へ込んでるのであつたら、これも自分のからだの衰弱してゐるせいにならう。どうもこの頃は、その爲めに相違ないが、一つの糸ぐちがあると、それからそれへと取りとめもなく下だらぬことを考へて行く。これを直す爲めに出て來たの

ではないか？

兎に角、渠はここに前のとはずツとまづい宿屋の一室で蠟燭の火を珍らしい物として見つめながら、前の番頭や女中に拒絶された自分の現在からこれまでにも經過して來た所謂氣まづい人生を返り見ないではゐられなかつた。

『人生はおのれの生活にしかない』と、或人が雜誌で云つたのを見たことがある。自分のやうに思想上のことは他人に考へて貰はないでは考へられない者には、人の言葉のうちで自分がいいと思つたのを信じて行くより外に道がないのである。二食主義も矢ツ張りその一つで——初めは半ばけちな考へも伴つてゐた。或新聞で、ふと、この主義のいいことが生理上、時間上、並びに經濟上から證明されてゐるのを見た。

その頃は、[illegible]ゆづりの商賣を全然失敗したあとで、まだ自分の職業が殆ど不定であつた。いろ〱小さな仕事を人から人に紹介して、僅かの口錢を取るのが收入のおもなものであつた。從つて、先づ第一に二食主義に共鳴したのは經濟上からであつた。米や副食物が儉約になるだらうと思つてだ。まだ藝者あがりの妻がゐた時で、

『あんまりけち臭いやうだけれど』と云ひながらも、かの女も不同意ではなかつた。が、使つてゐた婆アやがそれが爲めに逃げ出してしまつた。

『馬鹿にやつだ。二度なら二度のやうに割り合ひを多く喰ふからおなじことぢやアないか――その上に手が省けて』と、渠はあとで妻に語つた。實際、三度に三杯づつ都合九杯喰ふよりは、二度に五杯づつで十杯の方の多いことが分つて來てゐた。その上に手まが省けて、段々とからだにも工合ひがいいのは事實であつた。

けれども、また逃げ出されるのを恐れて女中には再びこの主義を押し付けないやうにすることにした。すると、今度はまた別な理由で妻が逃げ出してしまつた。

『いつまでもこんな生活をしてゐたつて、仕かたがないだらうぢやアないか』などと、屢々繰り返して、こちらの仕事が思ふやうに發展しないのを不平がつてたのだが、下だらぬことから喧嘩を吹ツかけて出て行つてしまつた。それもおもて向きでは二食主義に少しも關係がないとは云へなかつた。かかる種類の女として經濟がへたなので、こちらは一週間毎に改めて毎日のおかずの表を拵らへて、それに相當するだけの小使ひを渡して置くのであつた。すると、或週の終はりにかの女は持ち殘してゐる小使ひをずツと超過するのもかまはないで、まぐろの刺し身を取つた。それが無邪氣にならおこりもしなかつたのだが、どうしてもわざとらしかつたので、

『不都合ぢやないか』と責めて見た。

『………』かの女はそれをきツかけにして、不斷は何とも云はないで來たことまでを持ち出し、『人並

み三度のものを二度にしてゐるのだもの、少しやアおいしい物をたべたツて』などと云ふいや味まで云ひ加へた。

『ぢやア、勝手にしろ！』こちらは、つい、この叫びの勢ひでちやぶ臺の一方をはね上げたから溜らない。臺のうへの物がひツくり返つて、疊へ落ちたのもあつた。が、兩方からおさいのまぐろには手を出さないで、兩方とも強情張つて、その晩食はただ香々ばかりでぼり／＼すませた。

その翌日、朝から出てゆふかた歸つて見たら、かの女の姿は見えなかつた。かの女の簞笥もすつかりからになつてゐた。身受けだけにも、もと三四千圓はかかつた女であるから、さう容易に逃がさないつもりで心當り、心當りを追ツかけて行つて見た。用意して逃げただけになか／＼その行くゑが分らなかつた。一つには、かの女の老いぼれおやぢが死んだのをしほにして、再び今一度うは氣をして見たくなつたのであらう。靜岡にゐるかの女の妹――これも人のめかけだ――までは身受け料に對する故障を申し込んで置いたが、ほんの、うはべばかりの申しわけが來たばかりであつた。一度は旅費をかけて靜岡まで行つて見たが、二度とは行く費用もなかつた。

いつになく畜生がをんなだてらに酒に醉つて夜遲く歸宅したことがあるが、それを『もとの學校友だちに逢つて久し振りにふたりでおそば屋へ寄つてゐた』と云つたのは眞ツ赤なうそで、――これはあとで分つたことだが――もとのいろ男に途中で出逢つて、その時既にその方へまた

行く氣になつてたのであらう。
渠は却つてそれから自分で自分を一層奮發させた。そして自分も人並みに戰爭の餘德を受けて、瓦斯に關することざ〳〵した機械や道具を製造する今の工場を落合に持つやうになつた。そして友人の紹介で二度目の妻をも持つた。これは前のとは違つて決してかねで買つたのではない。その代り、つれ子があつて、もう、五歳になつてゐた。信州の女だが、物好きに自然にあくがれたとかで、どこかの山奥の小學校へ教員に行つてた。あしかけ二年ばかりの末に遠足があつて、生徒と共にとまつた宿で、かの女はその校長の爲めに夜、夢うつつのあひだに無理なことを行はれてしまつた。母に來て貰つて直ぐ辭職の手續きをしてしまつた。が、たとへ本人にはその氣がなかつたと云つても、まだ十九やはたちの時であつたから、たツた一回のことで自然に男の種を宿したと見え、知らないうちに妊娠となつたのだ。それをいつまでも私生兒として置くのは可哀さうだし、こちらもまた自分の妻にそんな物があるのは不名譽だしするから、自分の子として認定をもしてしまつた。それを十分恩に着た爲めか、妻はこちらの爲めにいとも素直でしとやかに立ち働いた。生まれもよく、相當に自發的な教育もあつて、藝者あがりなどを持つてゐたこちらに取つては可なり不相應なほどいい女房に見えた。
『君はあんな子爵のできそくなひなど貰はないでよかつた。案外な儲け物をしたんだぜ』と、友人も冷かし半分に云つた。

『工場の方もやがて順潮に行くだらうし』と、渠も亦直接に妻に語つた、『お前はまじめだし。』が、段々と親しみ合つて行くうちに、たツた一度だが、人間のあさましさがかの女にも見えたことがある。忘れもしない、春めいて來た日の午前であつた。

『けふはお彼岸だから、お萩をしましよう、ね』と、妻は云つた。

『それもよからう。』こちらには大抵のことに反對はなかつた。が、ふところ合ひには大いに反對があつた。夫婦のあひだに立つた紹介者がこちらの近い將來の發展をまでも現在の勘定に入れて、大分にいいことをかの女に聽かせてあつたので、それをわざ〳〵裏切るまでもないと思ひ、こちらもかの女にまだ全體の收入などは知らせてなかつた。一箇の工場の持ち主になつたとは云ひながら、やツとなれたところであつたから、まだ苦しいやりくり算段をばかりやつてゐた。この時もその前日に丁度材料購入の爲めありツたけのかねを拂つたあとのことであつたので、曖昧なことを云つたあとでだが、

『然し、今かねがないよ。』

『それツばかりの?』かの女は不思議さうであつた。

『……』然し、作る身になつては、かねと云ふものは僅かなことでもさう思ひ通りになるものではないのだ。

『ぢやア、よしましよう――』かの女の品よく引き締まつた顏には、一しほ引き締まつた爲めの皺が

できてゐた。そしてこないだぢうから『少しおいしい物をたべなければ』と冗談に云つてたのをいよいよ本氣に直したかのやうな燒け氣味になつて、茶碗に殘つた飯へ湯をかけるが早いか、ちやぶちやぶとその箸で以つて口のなかへかツ込んだ。かの女はその子にしたらいけないと教へてることを自分で以つてやつて見せたのだ。

『……』こちらは私かに何たるあさましさだらうと思つた。斯うなると、藝者あがりよりも良家の出の方に寧ろそのあさましさが目に立つのであつた。喰ひ物には苦勞もなく田舍の大家に育つたものは、却つて、如何に教育があつても、こんな時にはおとなしく辛抱のできないものと想像された。一般の父兄が子女の行儀のことをやかましく云ひ、世間體では不正直や不便を感じてもなほ且喰ひ物や勘定のことに成るべく觸れないやうにするのは、尤もなことだと思はれる。それに比べると、二食主義の如きは精神上から云つても寧ろ正直でもあり、また便利でもないか？

けれども、その初めは矢ツ張り自分の胃弱と貧乏からの思ひ付きであつた。それまでは食鹽水を飮んで見たり、太田胃散を絶やさないやうにしたりしてゐたのだ。如何にも貧乏くさい。先妻が逃げたのも詰りその爲めなら、今の妻が思はずちよツと化けの皮を現はしたのもその爲めだ。一、今では、もう、やツとそんな恐れはなくなつた。工場がますます發展して來たからである。發明品も一つ特許を得た。こないだも、兄のところへ自分の成功を自慢しに行くと、兄よめがこんなことを云つた。

『誠次郎さんは餘ツぽどよくなつたと見える、わ、前にはどこそこへ行くから兄さんの羽織りを貸して呉れいなど云つて來たのに、この頃ぢやア、來るたんびに衣物が違つてるもの！』

『こりやア、なアに、女房がゐますから。』若い妻も渠自身には一つの誇りであつた。

『いくら奥さんばかりが若くツたツて――』

『………』それには違ひなかつた。妻がます〱熱心になつて來たのもこちらの成功の爲めだ。その代り、また、前ののやうに子宮病でも何でもない女で、割り合にずツと年したなのが熱心である爲めに、こちらの根氣はさう續かないのである。

同じ神經衰弱の爲めにこの稻毛へ來たのでも、前には思ふやうに行かぬ事業の疲れであつたが、今は少しのあひだをでも妻から離れてゐたい爲めにだ。これは二食主義で直せるものではない。この主義の方は自分では、もう、不斷は忘れてゐるほど自然の習慣になつてるのだが、今夜は突然それを自分には不自然に海氣館ではね付けられたのである。そしてそこでも東京紳士の新らしい習慣と云ふことを云つて驚かせたが、ここでも亦主人に向つて同じことを語つて、今度は失敗を繰り返さないやうにそれだけ割り合を高くしろと命じた。

『なアに、それには及びません』と、正直らしい朴訥の主人は答へた。

『………』それで兎に角渠の心は落ち付いた。持つて來させた一と銚子から半分ばかり酒を飲んでか

ら、まだ電氣が來ないので、とこへ這入つた。
あのおうしの白犬も津浪の時にやられたのか知らんと思ひながら、くらやみの天井を見つめてゐると、そとの方で來た時から水の音が絶えずおとなしくしてゐるのが頻りに氣になつて來た。夜おそく、戸の締まつたうちへ這入つて、蠟燭の火で狹い室へ案內されたのだから、そとの樣子は少しも分らなかつた。ぽちや〳〵、ぽちや〳〵、ぽちやと絶えずつづけざまに云つてゐる。
前に來た時、今そこだらうと思へるところに掘り拔き井戸を掘つてたことが思ひ出された。幅半間さし渡し三間ばかりの輪がたが空にかかつて、一人の男がその輪のふちをうちがはから踏み進むと、輪がまわるにつれて、掘り拔き穴にさし込んだそぎ竹のつなぎが卷けて行く。それがまた逆に行くと、穴の方へ押し込まれる。毎日、毎日、まどろツこしくそんなことをして、こちらの滯在間もやめたことはなかつたが、そのうへにも既に何十日とかかつてるのであつた。滿潮どきの海ぎはから五六間しかないところだから、まだ鹽水が出ると云つて、頻りに深く掘り下げてた。それでも水と共に出て來る泥はあか土であつた。
舊式なやりかたではあらうが、その仕かけが面白かつたうへに、毎日こつ〳〵と多人數がかかつてるその熱心に、渠は自分の仕事にも應用すべきものがあると見た。で、自分も毎日宿の飯を下りて來て、門の手まへに立つて、それを垣根越しに見てゐた。しまひには、それも飽いて詰らなくなつたけ

れども、歸京してから、それが自分の考へに――少くとも、そのこつ〳〵とやつてゐると云ふところが――役に立つて、今の成功を得たのである。して見ると、その音のしてゐる水がさきの物の結果であるとすれば、まんざら自分の仕事に無關係なものではなからう。

ぽちや〳〵、ぽちや〳〵と、矢ツ張り、音がつづいてゐる。出て來た時にはちよツと緣喜の惡い雨が降つたが、今また降り出したわけでないことは分つてるのだ。

『あれはどうしたらう――あれは？』さうだ、あれとは矢張りこの海岸で――つい、この宿から五六間さきで――宿屋の客や通行人を相手に、老いた父母と共にしるこ屋をやつてた娘だ。渠と隣り合せになつた客の話では、かの女を淫賣にしてゐたが、渠が物好きにちよツて當つと見たところではさうでもないやうすであつた。そして東京へ行つてたのだが、親が年取つて來たので近ごろ手助けに歸つて來たと云つてゐたツけが――。

まツくらで氣が付かなかつたが、隣りにも人がとまつてるかして、そのいびきが聽える。また、風も出たかして海のとほ鳴りがして來る。そのとほ鳴りと水の音が自分から離れてゐて珍らしく氣持ちよかつた。妻がそばにゐないのが却つてらく〳〵してゐる。ぐツと自分のからだを獨りで延ばしてゐた。

『………』そのうちに自分の汽車が着いた。自分は籐かごをさげて田舍くさい土地へ下りた。水おと

のしてゐる川ぷちの灌木のあひだを拔けて欄干もない板の橋を渡ると、やがてさして來た宿であつた。すると、土地にも似合はぬ大きな西洋料理屋であつて、赤い戶張りや立派な椅子のかいま見えた廣間の入り口に、赤い服を着た肥えた西洋婦人が――脊の高い洋服の男と共に――立ちふさがつて、

『あなた、とまるなら二十圓かかります』と云つた。

『……』はて、こんなところへ來るつもりではなかつたがと、自分はあとずさりした。富士の湖水のほとりにある西洋人專門の旅館がかねのない日本人を馬鹿にして相手にしないと聽いてるが、そこへでも來たのか知らんと考へられた。自分はこれで二度も宿屋からはね付けられるのであつた。そしてその西洋人の後ろについて、燕尾服とかの裾を後ろへはねた、脊の高い男が、武子さんのお父さんなる子爵その人であつたのぢやアないか知らんと思つた。

どうしてそんなことが思へるのか、自分にも分らなかつた。第一、どうしてこんなところへ來たのだらう？　稻毛驛を下りたところにも左右に田はあつたらうが、やみで見えなかつた。山も見えなかつた。が、川のなかつたことは確かだ。當惑して別室に來て見ると、多くの田舍靑年が集つてがやがやしてゐた。そして皆こちらへ同情をよせた目つきを見せたが、そのうちの一人が、

『宿屋なら、こんなところにとまらないでも』と、西洋人を輕蔑したやうにして、――これはこちらにも失望のあひだに少からず慰めとなつた――『今一つらうへの橋を渡ればいいのがあります。』

『……』それは然しまだ隨分遠いやうだし、汽車で行くとしては時間を急がねばなるまい。
『野崎さん、ちよツと待つて下さい。』脊びろの男があぐらをかいてゐて、こちらを見知りがほに聲をかけた。『あなたに一つ見て貰ひたいものがあります。』
『……』また瓦斯に關する機械や道具の發明品なら、今の場合、ききたくもなかつた。
『これですが、な』と云つて持つて來たものをちよツと立ちながら一と目見たが、何でも木の札のやうなものであつた。

　そのうちにがう〱と音を立てて汽車が來たと思つたのは隣りでするいびきの聲であつた。次ぎにまた海の音がする。また、水の垂れる音がする。自分はどうしても二食主義を卑しめられたのが紳士として殘念でもあり、落ち度でもあると思へた。割り合を高く取れと云ひ出したのはあとのことで、自分はその初め矢ツ張りひるが拔きだけ安く行けるものと考へ込んでゐたのだ。自分はさきに自分の新らしい妻のあさましさを責めたが、同じやうな理由で妻から自分が責められても仕かたがなかつた。けちな點で云へば、あのくり〱した番頭もこちらも共に同罪であらねばならぬ。

　それこそ今一度おほ津浪でも來て、この兩方を帳消しにして呉れたらいいのだ。それにしても、あの白犬はどうなつただらう？　あのしるこ屋の娘はどうしたか？酒の醉ひがさめると共に目も冴えて來ると、まツくらの中に掘り拔き井戸の輪仕かけばかりが今もあるやうに見えてゐた。それがくるく

るまわりながら空に高くのぼつて行つたかと思ふと、ぱツも電氣がついた。
もう、何時かと思つて、枕もとの時計を見ると、二時を少し過ぎてゐる。八時ごろからの停電であつたと云ふから、六時間以上を經てやツとついたのだ。たださへ眠られないで來た神經がここへ來てもますます冴えて行く。こんなことなら寧ろ妻のそばにゐて、一番疲れをおぼえたあひだをでもよく眠る方がよかつた。
それからはただうとうとしてゐるばかりで夜が明けてしまつたのだが、夢に脊びろの男が持ち出した木の札は何であつたらうなどと思ひながら、今一度ぐツすり寢入ることができた。
とこを起き出たのは午前の八時ごろであつた。枕の方でしてゐた水おとは椽さきにある庭の噴水井戸だ。離れの前の大きな瀨戸のわくを涌き出て、直ぐその下の池へ流れ込んでゐる。
その水で渠は先づ顏を洗つた。それから、寢卷きのままで庭から直ぐそとへ出ると、たひらかな海が太陽にかがやいてゐて、そのきらきらしたおもてを渡つた向ふの正面に、富士の眞ツ白な姿が下の濁つた雲のうへへ大きな食鹽の固まりをきざみ上げたやうに、最も健康さうにそびえてゐた。行つて見たい、行つて見たいとながねん思つてる山をけさも夢に見たのだが、それが海を越えてはツきり見えるところへ思はずも來てゐたのだ。そして廣い海のうへには二つ三つ大小の帆かけぶねがこちらの目ぢよりも高く靜かに浮んでゐた。

渠がさきにつんぼの犬を手まねで呼び招いて海のうへまでも來させたことのある低い棧橋の鼻や、安藝の宮島のおほ鳥居に似せた淺間神社の海中鳥居などは、もと〳〵通りであるやうだ。が、道路に添つて海に面したかたかはの家々はすべて新らしくなつてゐる。

足を二三歩左りへ運んで、松原の上に引ツ込んで建つてゐる、これも元々通りの旅館を海岸から見上げると、ゆふべ自分が拒絶されたのを悋むやうな、また耻ぢるやうな氣がしながら、あの女中が果して武子さんではなかつたか知らんと云ふ疑ひを再び思ひ起させられた。

『をかしなことを云ひますが、な――』

『………』さうだ、渠も自分のからだを私かにかの女のやうに和らかにひねつて見たかつた。

然し、他人のそら似もあることだし、その上に電氣の光りで見たのではなかつたと思ひ返すと、ただくり〳〵した番頭に對する悋しみだけが殘つた。そしてその下を多少氣恥かしいやうにしてなほ進んで行くと、或畫家が岩崎の屛風にこの稻毛の松原を書いて、多くの金と共に貰つたと云ふ簡單な別莊もなくなつてる。それが管理を頼まれてたしるこ屋の家もあとかたさへなかつた。が、そのかはりにその近處へ誰れのか知らないが立派なのが一つ新築されてゐる。

今、渠がとまつてる宿の後ろの高みにある淺間神社のあたりから、この別莊の少しさきまでは、松が低い道ばたから生えてゐて、すべてそれが後ろの方へかた向いてる。海からの風が一やうにひどく

當るからであらう。そのまたさきの松原が崖の上になつてる手まへまで行つて、渠はちよツと掛け茶屋へ這入つてたばこを買つた。ゆふべ別なはなしの爲めに宿の主人に聽きそこなつた津浪の話をそこで詳しく聽き糺すことができたのだが――漁師あがりのやうな巖丈な老人夫婦がゐて、その時の話をした。

『あア、あア』と、おやぢは大相に受けて、『人のいのちにやアどこも別條はなかつたが、家と云ふ家はみんなやられたア、な。稻毛は後ろが高いから人の逃げどころはいくらでもある。然し家は逃げられない。建て物だからじツとさせて置くより仕かたがない。そのうちに前後左右からおほ浪が來て、ぶつかつたり引ツ張りころがしたりしたのだもの、どんな物だツて溜らねいや、な。一度でやられなけりやア二度目に、二度目がしぶとくツても三度目に。このむさくるしいわら葺き家でもすツかり建て直したので、いい淸潔法をして呉れましたよ。警察から淸潔法をやつたかと聽きに來たのを、二度までも、へい致しましたと云つて置いたが、そのうその罰が當つて、はア、天道さまがすツかり綺麗にやつて下さつたア、な。』

餘ほど感じてゐたと見えて、つづけざまの不作法にだが、如何にも正直さうなうち明けかたであつた。

『そりやア困つただらう、ね』と、同情的に愛相を云つて見た。すると、おやぢは一層得氣さうであ

した。

『なアに、そんな時にやア慾も得もなくなつてしまはア、おらの一生涯も建て直しだア。』

『……』さうだ、人生はすべてそれだらうと、初めてこんなおやぢに教へられたも同樣だ。家がつぶれてしまへば、別なのが建つ。女房が逃げれば、あとのが直る。そして前のよりもあとのがよくなつて行く。渠は何と云はれても――さうだ――二食主義に於いて自分の胃弱のからだを建て直した。今やこの神經衰弱と睡眠不足とを何によつて直さうか？

　思はず富士の遂つた勇ましく健康さうな姿を見たことと、このおやぢのまた健全さうな快活に接したこととで、渠は心を持ちかへて自分の二食主義に對するはたからの卑しめなどを、矢ツ張り、少しも氣にすまいと決心した。同時にまた女房のことでも、若いのを持つた以上は、その熱心を意氣地なくさけるやうなことはしないで、寧ろしツかりと受けてやる方がいいだらうと云ふ氣を振ひ起した。

莊なほ、このおやぢから聽いたところによると、しるこ屋は家をさらはれてから一家こぞつて東京へ行つたさうだ。が、つんぼでおうしのあの犬の行くゑは誰れも知つてるものがなかつた。

――（大正八年三月）――

お常

一

『お常、お前は女中の分際として、一體、主人の子供を主人の留守に呼びつけにしたり、なぐつたりするのはどうしたことだ』と、旦那さんから云はれた。

『……』常は直ぐには返事ができなかつた。皆と一緒に晩の御飯をいただいてた時で、箸と茶碗を持つた兩手を膝の上に置いて、暫らく默つて顏を赤くした。主人の方を見てゐると、然し、どうしても返事をうながしがほなので、止むを得ず『ぼツちやんが』と先づ口に出た。『ぼツちやんが――わたくしが洗濯をしてをりますと、わたくしの後ろへ來て、棒を以つていたづらを致しましたのです。』

『たとへいたづらをしたツて、こツちへ告げさへすればいいのだ。何も女中が直接に子供の尻ツぺたを叩いたりするにやア及ばない。』

『へい。』常は斯う返事して置きさへすればいいと思つた。告げ口をするやうなぼツちやんなら、また主人の留守には主人のするやうに尻をまくつて白く和らかいところを叩いてやるぞとも。

『それに、お前はまたしたの子をふく、ふくと呼びつけにして叱つてるさうだが、これもどうしたことだ?』

『そんなことはありません。』

『ないとは云はせない!』

『……』さうだ、實際にはあるのだから、默つてるより仕かたがないが、それをもぼツちやんがしやべつたとすれば、今少し手なづけて置く方がいいやうでもあつた。

『ふく、ふくツて呼びつけにしてゐることは』と、奥さんも横合ひから、こちらの意外なことを云つた、『お隣りの奥さんから聽いてちやんと分つてるが、ね、――お留守の時はそれでぢきに分るツて。然し、このふくだツても、もう馬鹿にはできないよ。にイちやんのおちりをびちやりと叩いたと云ふ手眞似をしたので、お高がかいと問ひ返すと、いいや、つねがと云つたよ。』

『……』たツた三つになるかならないのに小癪な子だ!箸をもちやんと持つて、賛なめでも何でもしツかり挾んで口へ持つて行くのだから。皆の食事がすむと、またここで一と仕切り兩手を腰のあたりへ當てて、ひよい〳〵と、『秋ぞら晴れて日は高し』を踊り出すのかと考へると、たゞ〳〵何とも云へず小憎らしくなつた。

『お前はうらはらがあつていけないよ』と云はれてゐるのだ。が、常の心中では、女中にうらはらが

あるのは當り前のことでもあり、また誰れもあることであつた。どうせこの家にもゐられないのなら、こちらでさきまわりをしてまたお高さんをも一緒につれ出してやらうと、毎日、毎日、新聞の廣告をあさつてゐるのだ。

二

常は自分でもこんなに人が惡くなつたのを、つい、近ごろのことだと思つてる。

自分には幼少の時から實父も實母もない。多少の財産はあつたさうだが、後見人の叔父がそれをすべて渠自身の物に書き換へてしまつて、今では自分は渠の同居人になつてるだけだ。

これを知らせて呉れたのは村役場の書記で、菊地さんと云つた。その人とも關係してゐたのだが、別にまた野添と云ふ男があつたので、逃げられてしまつた。野添さんも亦自分獨りを思はないと云つて、日立鑛山へ行つてしまつた切りだ。そのあとへ殘つた男の田島さんも亦東京へ出てしまつた。常は自分でも、ふと、他國へ出て行きたくなつたところへ、

『お前のやうなものがゐるから、お鶴までがだらしなくなつた』と、うちで叱られた。

『……』なんだ、人の財産をすツかり横領したくせに！お鶴はこちらをねイさん、ねイさんと云つてるけれども、實は、年したのいとこで、財産横領者の子だ。自分はかの女にはそのことを語つて聽

かせて同情を求めると同時に、自分の男のことを叔父に云はせない爲め、かの女にもひとりの男を紹介してやつた。それも亦すツかり、自分の流產のことからばれてしまつたので、とう／＼うちにはゐたたまらなくなつた。

丁度宇都宮の吳服屋へ周旋して吳れるものがあつたので、うちのかねをこツそり十五圓盜み出した。そして吳服屋ならいい衣服も自由に着せて吳れるだらうと思ひ樂しみながら、宮へ來て見ると、それは本當の吳服屋ではなく、質屋をかねた古着屋であつた。それでも、なほメリンスの帶や銘仙の衣物や、いろ／＼派出な物が目に付いた。

女學校へ行くそこのお孃さん附きになつてゐたので、その教科書を見たり、その仲間の用ゐる言葉を聽いたりして、自分は小學校を出ただけだが、多少は新らしいこともおぼえた。そしてお孃さんのお下げどめを盜んだり、店の見本切れを隱したりしてゐるうちに、そこの裏向ふに下宿してゐる男がちよツと好きになつた。初めは、お孃さんの云ひつけで買ひ物に出たりするたんびに、向ふは二階から、こちらは裏門のそとで、互ひに笑ひ合つたり、手眞似でからかひ合つたりした。

或時、向ふがおいで／＼を手まねでしたので、こちらもおりて來いと云ふ意味を通じた。すると、渠が下りて來た。そして話しをして見ると、下村と云つて、牛乳配達をしてゐるのであつた。そして、『僕のやうな者でもよければ、女房になつて吳れませんか』と云ふのだ。それでも顏を赤くしてゐる

のが可愛かつた。『こないだから、あなたを見て、思つてばかりゐましたのです。』
『わたしのやうな者でもよろしければ』と答へた。尤も、こんな答へはその前にも他の二三の男に向つてしたことであつた。
それから、毎晩のやうに、用事が一とわたり濟むと渠のところへ入りびたつた。（神へ信心しに行くと云つて置けば、主人はおほびらに獨りで外出するのを許して呉れたからである）。そしてお孃さんの黑とみどりの青海波のメリンス切れを盜んで、見付けられない爲めに、渠に預けた時、渠は
『こんな物を取つて來たツて仕方がないや』と云つた。
『でも、これを見えるところへ出して縫へば、いい帶あげができます、わ。』
『帶あげなんか！』
『ぢやア、おかね？』常は自分の男の心を迎へるやうに、思はず斯う尋ねた。
『うん』と、渠も嬉しさうに答へた。『さうして一緒に東京へでも行かう。』
『東京にはわたしのにイさんも行つてますから。』かの女は自分では前の男であつた田島のことを云つてゐた。その時でも手紙のやり取りは時々してゐたのだ。
お孃さんの萬年筆を運び出してからと云ふものは、主人がはでは特別にこちらに氣を許さぬやうになつた。で、どうせ長くゐるつもりではなかつたのだから、またをりを見て、簞笥の引き出しから現

金九拾圓と、店の銘仙の見本切れ、半幅で七八寸ながのを重ねて五寸だかばかりのとを盗み出して、男と共に高とびをして來た。そして上野停車場近所の〇〇館と云ふのに止宿して、方々へうまい物を喰ひに行つたり、淺草へ活動寫眞を見に行つたりして、骨休めの日を暮してゐた。

そして丁度東京へ來てから一週間目の朝であつた――いつもよりはもツとさんざんな疲れの眠りから午前の九時頃に目をさますと、先づ自分の床が廣くら〳〵してゐるのに氣が付いた。自分の男は便所にでも行つてるのだらうと思つてあツたかいとこにまだぐツたりしてゐるまま、ゆふべのことなど心に浮べながら待つてゐても、歸つて來るやうすがなかつた。腹這ひになつて首を擧げて見ると、枕もとにぬいであるのは自分の帶と銘仙の羽織を重ねた衣物と、白地に紺の太いすぢが這入つた紀州ネルの腰まきとで――男の物は一つもなかつた。おととひ洗つてやつたのが、きのふやツとかわいたもも引もだ。

それだけなら、まだ何の疑ひも起らなかつたのだが、はしらの釘にかけた鳥打ち帽も見えなかつたので、かの女は俄かに半身をはね起こした。そして蒲團の下に隱してあつた自分のがま口が飛び出してるのを調べて見ると、別くちにしてあつた五十圓の方がそツくり無くなつてゐた。

『泥棒のうばまへをばねて行つた、な!』人を――殊に、ゆふべは――さんざんにおもちやにしたあげく、憎い奴ではあつたが、仕かたなかつた。

『お前と一緒に暮してゐれば、いつおれにも繩が付くか知れやしない。』

『死ねばもろともだから、いいぢやアないの』と、こちらは冗談のつもりでゐたら、男は本氣であつたのだ。そしてその行きがけの駄賃まで不相應に取つて行つた。それでも、五十圓以外の殘金はすべて置いてあるのがまだしも惡人にも人情があると思へた。

『よくお眠りなさいました、ね』と、宿の女中はこちらが顏を洗ひに出た時に云つた。『おつれさんは御飯もあがらないで、早く出られましたが――』

『さうです。』こちらは成るべく心を落ち付けて答へた、『あれは急用ができて國へ歸りました。』

三

宿にゐるあひだに新聞の廣告を見ることを敎へられたので、それを見て京橋の栗岡さんへ山部德子と名乘つて雇はれることになつた。山部は自分の生まれた村に自分のうちの外にも澤山ある姓だが、德子は或オペラ女優の名から取つたのだ。

大きな門がまへで、立派な辯護士だかと思つたのは間違ひであつた。やツと近ごろ試驗に及第して、どこかの法律事務所から獨立したのだ。旦那は薩摩、奥さんは會津とかの人で、いづれもその言葉を東京流に云ふやうにしてゐるけれども、分りにくかつた。その奥さんは十三をかしらに五人もある子

供に向つて、
『人間と云ふものは、ね、自分の腹だけはしツかりきめて置いて、他人にはただいいやうに云つてゐればいいのだよ』などと教へ込んでゐる。
『……』常は自分にもそれが本統だと思はれたけれども、さうおほぴらに子供にまで教へるのは如何にも見ツともないやうに聽えた。自分ながら無教育を示すやうに見えて。
それに、新らしい箪笥が二つもあるのをこツそり明けて見たら、二つとも、殆どなんにも這入つてゐないと言つてもよかつた。今は不用な夏物——それも大して目ぼしいのではない——のほかには、旦那の紋つき羽織りと袴とばかりで、奥さんの冬物などはなかつた。そしてあるのは質屋の帳面であつた。それから思ひ付いて、常は自分のをんな主人が、
『お德、お前のをばさんと云ふのは何をしてゐる、ね』と云ふのをうへから押し付けるつもりで、宇都宮のことに持つて行き、
『質屋をして、家作も二三十軒持つてをります』と答へた。
『それはいいことをしてゐる！』
『……』ふん、無論いい筈である！この奥さんは自分で風呂敷を持つて、毎晩、夜店の青物をも買ひに行くほどだから、女中は一錢や二錢すらも買ひ物代からくすね取ることができないのだ。近處

へ行つても、少しも女中のはばが利かなかつた。

『今度は女中さんがふたりにもなつたのですか』と、こちらまでを冷かすやうに云つて、たツた三十錢のもち菓子をさへ店で貸しては吳れなかつた。

『………』一圓札を奧さんから預けられ、辯護のいい依賴者が來たのだから早く買つて來いと云はれた。が、生憎、店につりがなかつた。では、あとでくづしてから持つて來ますからと云つたけれども、そのあひだだけも貸して置けないとのことであつた。

『あのお宅は信用ができませんから。』

『………』こちらはさう露骨にも報告できないから、『おつりがございませんさうです』と云つて歸つて見ると、

『つりがなければどこかでくづして貰つたらいいではないか』と、奧さんが叱つた。『氣が利かない!』

『………』ふん、さう意張つたツて、誰れにその意張りが利くものか?・然し止むを得ないので、別なところへ行つて札をくづして貰つてから、これもいま〳〵しいけれどもまた同じ店の包ませたままになつてる菓子を貰つて歸つた。一つだけでも橫取りしてやらうと思つたが、奧さんはかね日と合はせて數を勘定するにきまつてゐるから、さし控へて置いた。

お高さんと知り合ひになつたのはこの家でだが、人のよささうなかの女が十九だと云ふのに對して、

常のお德は自分の實際の年を三つも隱して、自分もおないどしにした。そして寒いのを口實にして床を一つに寢て、まだ男を知らぬと云ふ者にいろんなことを云つて聽かせるのを每晩の樂しみにしてゐた。自分には、今男が三人あるが、ひとり(野添)は鑛山に行つてるし、ひとり(菊地)は國の役場にゐるし、今ひとり(田島)は神田の猿樂町に來てゐるとも聽かせた。

『そんなに持つてどうするの』と、お高さんは心配さうに云つた。

『なアに、男は助平なものだから、直ぐ引ツかかつて來る、わ。』

『でも、子ができたら――』

『……』その問ひに對しては一つ隱してゐることがあつた。常は國で子を生んだのだが、誰れの子ともきめることができなかつた。幸ひに早く流産したので世間にはさう目立たなかつたが、それが第一の原因で叔父の家にゐられなくなつたのである。けれども、別に懲りてもゐないので、『そんな心配は入らない、わ、男を十人持てば、もう子供はできないと言ふから。』

『さうか知らん?』お高さんも大分に乘り氣になつてゐたのだ。

『わたしがひとりいいのを世話してあげる、わ』と云つて、常はお高を喜ばせて、成るべく多くの仕事をこちらに代つてして呉れるやうにさせてあつた。そして、宮の九十圓を國の十五圓に加へて、百と五圓を國の叔母から盜んでまた別な男と共に出て來たが、その半分以上はその男に持ち逃げされた

ので、その残りの金で宿賃を拂つてから、ここへ來たのだと告げた。けれども、まだ、金が欲しければ、叔母へ云つてやりさへすれば、どうせすべての財産はこちらの物であつたのだから、いくらでも送つて來て吳れるとも。

お高さんは十分にこちらを信じてゐたけれども、主人の方は――どう見ても――信じて吳れてるやうすがなかつた。主人の目をかすめては常だけがらくをしてゐるのを見付けられて、

『お德はどうも圖々しい』と云はれた。

『……』むろん、女中なんかしてゐたくないからであつた。宮の時とは違つて夜も籠の鳥のやうにとぢ込められて、男に逢ひにも行けず、さうかと云つて何をくすねると云ふ望みもなく、ただ詰らなく寂しい時には、矢ツ張り、叔父さんのそばにゐた時の割り合にらくで、自由なことが思ひ出された。

『お前は手紙ばかり書いて、郵便の來る時間には玄關ばかり氣にして心が落ち付いてゐない』と、奥さんに云はれた。

『……』こちらは、然し、男の返事ばかりを待つてゐるのではなかつた。國の叔母さんにも詫びの手紙を出して、『これから改心致し候へば、何卒今一度國へ歸れるやうに叔父さんへおはなし下さいませんか』と云ふことを云つてやつた。すると、叔父さんの手で意外な返事が來た。

『お前のうちだから歸鄕致したくば直ぐにもよろしきわけ合ひに候へども、お前はまた宇都宮に於い

て大變なることを仕でかしたと見え、目下當方へまでも警察の問ひ合せがまゐり居り候、お尋ね者も同樣なれば、今歸つてはお前の爲めにはなり申さずと存じられ候。』

『……』最初にそれを讀んだ時には、常は自分のからだがふるえあがるのをおぼえた。さすが、國の時は身うちのあひだゆゑにそのままにしたが、宮は他人のことであるからおもて沙汰にしてしまつたかと！けれども、二度目に讀み直してゐるうちに、叔父もこちらの賴みに從つてこちらの名を德と云ふ僞名にして來たのに思ひ及んで、少し安心した――宮では本名の龜子を用ゐてゐたが。そして三度目の讀み直しには、もう、平氣になつてゐた。その上にも、叔父はそんなことをいいしほにして、再び國へ歸つて來させないつもりだらうと云ふことが疑はれた。

『今歸つてはお前の爲めにはなり申さず――』これは本統か？それともうその手か？

『わたし、もう、寂しい人よ、あなたにでも同情して貰はなければ。』斯う云つて、常がお高さんにまことしやかに告げたによると、叔父ではなく、叔母からお前が本統にうちの金を取つたのなら取つたと正直に云つて來い、さうしたらまた取り成しやうもあるとあつた。で、こちらは本統に百五圓を取りましたと云つてやつた。（但し、この金額は自分のうちに財産があると云ふのをお高さんにほのめかす爲めだが。）すると、それツ切り返事がないのは、こちらの白狀を證據にして、二度と再びこちらをうちへ入れないつもりである。

『氣の毒、ね。』お高さんは涙をこぼした。そして『わたし、どこでもあなたの行くところへ行く、わ』と云つた。

『………』常はお高も男が欲しいばかりに何でもこちらの云ふことを聽いてるのだと分つてるので、いいのがあらば紹介してやる、やると云つて、どこまでも引ッ張つて行けばと思つた。

常は自分も逢ひたいし、お高さんにも羨やませてやりたいので、田島を一度手紙で時間を知らせて呼び寄せた。そして主人にはこッそりとお高さんをも引き合はせた。そしてあとになつてから、

『あの人はひよッこり來たのよ』と說明した。それには、つい、きのふ、近處の人に聽いたことが自分のうその種になつた。今、ここの離れと云つてるところは、今でも、門から這入つて、家の横手をぢかに行けるやうになつてるが、それがもと印刷屋であつたと云ふ。『まだあることだと思つて、田島さんは名刺を賴みにひよッこり這入つて來たの。そこへわたしも亦ひよッこり出くわしたの。』

『でも、前に手紙が來たでしよう――?』

『………』如何にもそれを自慢して見せたことは忘れてゐたが、その云ひぬけもできないことはなかつた。『まさか、ここだとは思つてなかつたでしようよ。向ふも、だから、びッくりした、わ。』男を呼び寄せては見たが、一緒にそとへ出て樂しめるわけでもなかつたので、まア、こんなことでもお高さんに語つて、氣休めを云ふより仕かたがなかつた。

『また誰れか別な男と一緒にやつて來たのだらう』と、田島さんは離れへの狹い横手でこちらを窺
したツけ。高い鼻に添つて兩方の眼のするどい視線がこちらへ落ちて來た時には、少しおそろしかつたけれども、思へば、きりりとしたその顔つきがあとまでも頼母しい。

『宇都宮にも叔母さんがあるの、そこから九十圓ばかり盜んで出て來たのだけれど、宿屋にゐるうちに、朝、目がさめて見たら、一緒に來た人がみな取つて行つてなかつたのですもの。』

『馬鹿！』その聲は低かつたけれど、そこぢからがあつた。『お前のすることはみなそんなものだ。ほかにもまだ男があらう？』

『ない、わ、ひとりも。』

『………』田島さんは疑はしさうな顔つきをした。

『若しわたしをいやなら、お高さんを紹介してもいい、わ。』手紙では既にかの女のことをも朋輩として書いて置いたのであつた。

『兎に角、ちよツとどこかへ行け』と、男は押し付けるやうに云つた。

『でも、けふはとても駄目よ――これがゐるから』と、おや指を出して見せた。

『ぢやア、なんしに呼んだのだ？』

『顔が見たかつたの。近いうちに財布を一つ縫つて送つてあげる、わ。』斯う云つてやツと男を返し

のだが、宮で盜んだ銘仙の見本切れはこんなことにでも使はなければ、ほかに使ひ道がないのであつた。

四

『お前の縫つた財布はきツとこないだの男に送つてやつたのだらう』と、奥さんは云つた。直接にはさうおこつてゐるやうすは見えなかつたけれども、そんなこんなで常は自分の信用が全く主人の家になくなつてるやうに感づかないではゐなかつた。

『わたし、いつ追ひ出されるかも知れやせん、わ。』

『あなたが出たら、わたしも出ますよ』と、お高さんは同情して呉れた。

『………』常は、自分の受けるべきぶんまでの信用をかの女が占領してゐるかたちになつてるので、心中ではかの女を憎んでゐた。そしてこの憎みがかの女のこちらへの同情を利用してかの女をも出る時は一緒につれ出さないでは置かないと云ふ決心をかためしめた。

また新聞の女中廣告に注意し初めてゐたのだが、丁度、國民新聞に『女中二名入用、給金各々拾圓』と云ふのが出てゐたので、早速手紙を書いてお高さんに郵便箱へ持つて行かせた。さうすればかの女の方が切手代を出すからであつた。こちらの男へ出す手紙をもさう

してこれまでにいくらもかの女のふところ金から出させたし、またちびり〳〵と五錢や十錢を借りてそのままにゝしてあるのだ。

『有望な返事が來たら、先づわたしが行つて來ます、わ』と云つて、お高さんには主人への口どめをして置いたのだが、若し一名は既にできてて、あとの一名だけが入用と云ふなら、自分だけがきめて、お高さんをすツぽかしてもよかつた。僅か三圓や五圓の給金でかの女とおつき合ひするまでもなかつたからである。

『ふたり一緒に行けたらよろしいが、な』と、お高さんは返事の來ないうちから泣き付くやうに云つてゐた。

『御返事は封書でお願ひ申し候』と書いた。それが思つたよりも二三日後れた日の朝、奥さんの氣が付かないうちに、第一便で直接に自分の手に受け取れた。直ぐ常は赤と黃と黑との子持ちじまなる手織り木綿の衣物に、黑地に赤の入つた模樣のメリンスだが、はぎばかりある帶を締め、見えるところだけに例の黑とみどりの青海波のメリンスが出る帶あげ（これはここへ來てから安心して縫ひ上げたものだ）をつけ、黑と白茶のぼうじま銘仙の羽織りを引ツかけた。そして何喰はぬ顏をして、ちよツと自分の買ひ物に出る口實を以つて主人の家を出た。

もう、三月に這入つたのだから、水仕事もさう苦しくなくなつたらへに、ずツといい給金を取れる

のだから、大塚行きの電車に乘つてゐても、自分ながら、つい、嬉しいやうなほほゑみがこぼれるのを覺えた。そしてそのゑみをとめると、そのあとへ今度の奧さんのまだ見ぬやうすが想像された。そして貧乏辯護士の奧さんよりも立派な衣物を澤山持つてゐて、而も一層若くツて、もツと間ぬけであつて呉れればよかつた。

書かれてあつた通りに大塚の終點で下りて、左りへ神社の中をぬけたところで人に聽いて見ると、すぐ分つた。まだ東京のまちを不案内なのに少からずおど〳〵してゐたのだが、さして來た『平田』と云ふ家の門をくぐつた時、まアよかつたと云ふ氣がした。

門から二三間で玄關へ達するまでの、左りには庭があつて、何かの草の芽などが出てゐるのを見ると、直ぐかの女のあたまには自分の新らしい主人は――職業が小說家だと書いてあつたから――趣味と云ふものもあるのだらうと思はれた。右手には、然し、小い畑があつて、小松菜のいじけたのが生えてゐるのを見ると、自分にこんな物の世話をさせられるのではないかと思つた。鍬などは、實に、自分が生まれ故鄕でさんざん持ち飽きたり、見飽きたりしたところの物であつた。

こんなことを考へてる時には、もう、ここの勝手の方へまわつてゐた。ちよツと氣さくらしさうに見える奧さんが臺どころへ出て、そこから茶の間へ案內して呉れた。

壁からしておそろしいやうな旦那さんや、三つと書いてあつたその兒らしい女の兒もゐて、ちやぶ

臺で食事をしてゐた。おひるにはまだ早いやうだし、朝はんとしてはおそ過ぎると思つたら、

『うちでは旦那さんとわたしとは二食なんだが、ね』と、奥さんは云はれた。『女中や、學校へ行つてる子供は、矢ツ張り三度にさせてあるの。』

『さやうですか？』儉約の爲めか知らんと考へて見たが、それだけ手が省けるだらうから嬉しかつた。それに、次ぎの三疊敷きらしい玄關のまに書生見たやうな若い人がゐるのを自分のいい話し相手になると思つた。

『お前の國はどこだい？』これは旦那さんの問ひであつた。

『茨城縣ですが――』

『茨城縣は――？』

『水戸在です』と、少しもぢ〳〵して答へた。これは本統のことだが、若しこれ以上を詳しく聽かれたら、田島の村を云つてやらうと考へてたところ、それだけでその場はすんでしまつた。

『學校はどこまで行つた、ね？』

『女學校を卒業しました。』これもうそだけれども、常は自分ほど漢語を使へるなら、お高さんなどとは違つて、斯う云つて置いてもさしつかへないだらうときめてゐた。

『こないだまでゐた乳母も女學校卒業だツたが、ね』と、奥さんも箸を運ぶあひまに語つた。『それは

國から迎へが來て歸つたし、今ひとり十五のがゐたのだけれども、それはまた親が病氣で呼び返されたしして、とう〳〵新聞へ廣告を出したわけで——お前は然し子供を好きかい、うちにはこの兒のほかに今ひとり乳のみ兒もゐるのだが？』

『わたくしは殊に子供さんを好きでございますから——』こんなことからまた取り入つて見ようとした。

『それはいい、ね。まア、二三日働らいて御覽。』

『………』それには、然し、常はちよツと行き詰つた。直ぐ今夜にもお高さんと共に辯護士のところを逃げ出す約束にしてあるのであつた。ちよツと奥さんの言質を取つて見るつもりで、『手紙で申し上げました通り、今ひとりお高さんと申すのが來たいと申してます。その人は一緒の學校を出て、わたくしとはおないどしで、縫ひ物も上手でございますが——』

『向ふの都合次第でそれも來てもいいが、ね——まさか、お前たちは今までの主人のうちを無理にぬけて來るのではないだらう、ね？』

『そんなことはありません。御主人の方で、もう、かはりができまして、わたくし達がゐなくてもいいやうになりましたものですから、御主人とも相談して、新聞の廣告を見てまゐりましたのでございます。』

兎に角計畫通りに行きさうなので、常は自分の働らきぶりを見せるつもりで、早速自分の羽織りをぬぎ、自分の持つて來たたすきを掛けた。この時、奥さんは臺十に入れた火を二階へ持つて行けと命じた。それを受け取つて書生部屋をとほり拔ける時、書生の机に向つて勉強してゐるうしろ姿をちよツと横目で見て、をとこツ振りがあの田島よりもよくあつて呉れればいいと思つた。

二階は一と間だけれども、額や、あぶら繪がかかつてゐて、疊の上もよく綺麗になつてゐるのを見ると、ここの奥さんには餘ほど油斷できないやうだ。少しでも女中がぶしようすると、きツと叱るに相違ない。こんなことを考へながらも、よこ窓のそばにある、火鉢に火を入れて叮嚀に灰をならしてから、大きな机の引き出しを一方だけ、そツと明けて見た。が、新聞の切り拔きや、赤いけいの這入つた紙に字を書いてあるのやばかりであつた。それから、机と反對の壁一杯に廣がつてゐる書棚の前に行き、小說らしい書物のあひだをざツと探したけれども、有名な『不如歸』や『乳兄弟』などは見えなかつた。

『………』して見ると、ここの主人は小說家と云つても、まだへツぽこのか知らん――西洋の本は澤山あるけれども？

『アララツラ』と云ふ男の聲が眞向ふの二階から聽えた。

『………』こちらをからかつたのかと、心ををどらせて見たけれども、ここの庭の目かくしになつて

る檜葉の並み樹のあたまで邪魔をされてゐた。とん〳〵とはしご段をのぼつて來る音の爲めに、あわてゝその下り口へ行くと、新聞を澤山まとめて片手に持つた旦那さんと行き違つた。

下へ來て先づよごれた茶碗などを洗つてしまつてから、茶の間の次ぎの奥の間を見がてら、掃木を持つて行つた。こゝにも新らしさうな簞笥が二つ並んであるが、まさか、辯護士のところのやうなからツぽではあるまいと樂しまれた。

『ちよツとお隣りへ行つて來るから、ね』と云つて、奥さんはうへの兒をつれ、したの兒を抱いて出て行つた。

そのあとを常は直ぐ茶の間の、奥のふすまに接したところに据ゑてあるすがた見の前に立つた。そしてそれに近よつたり離れたりして、兩手でひさし髮の後れ毛を直しながら、自分の顏の地はだは黑いけれども、斯うしてお白いをつけてゐれば、胡麻化せるから、その他にはどこと云つて特別に惡いところもないのが嬉しかつた。

『アイアム……カインドリ……ション……コン……セス……ドン』何とか――。

『……』書生さんが英語か何かを讀み出したのをしほにして、かの女はそのそばへ行つて、明いてるふすまのこちらから、立つたままで顏を出して、『あなたは書生さん？』

『さうです』

したが、な
かなかおとなしさうなのが可愛かつた。『あなたも聴いてたでしようが、これからどうぞこころ安く願ひます。』

『ああ。』

『………』そのそツけないのは恥かしいのであると思へた。また少し近づいて膝をついてから、向ふの顔をのぞくやうにして、『ここの旦那は有名な人？』

『有名です。』矢ツ張り、渠は二度とこちらを向かなかつた。

『でも、いい小說は持つてないやうぢやアありませんか？』

『さうですか？』

『………』あまりの返事なので馬鹿にされたと思つた。私かに少しぷりぷりして再びすがた見の前に來た。奥さんのに比べてはまだ自分のお白いがうすいと見て、そこにある瓶から水お白いを手のひらに出し、自分の顔にぬり付けた。それから、また鏡の前を少し立ち離れて自分を映してゐると、お隣りからこちらの子供の聲で、

『おかアちやん、何してゐるの』と云ふのが聽えた。

『………』その方をふり向くと、窓の障子も明いてて、板べいのふし穴から奥さんらしいのがこちら

をのぞいてるのが見えた。だから、油斷ができさうでないと思へたのであつた。

直ぐ井戸端へ行き、裾をはしよつて、これ見よがしに赤いネルを出し、バケツに水を汲んで庭へまわつて行き、椽がはやはしご段をふいてしまつた時、奥さんが歸つて來て、

『もう、おひるだらうから、あの書生さんと一緒におたべよ』と命じて、おかずのさし圖などをして呉れた。

おひるをふたりですませて、手早くその始末をしてからは、京橋のことばかりが考へられて、もう、氣が落ち付かなくなつたので、奥さんに向つて、――あの素直さうな顔で人が惡くもこちらをふし穴からのぞいてゐたのかと思ひながら、――

『どうでしよう、お高さんをつれにまゐつては――けさから來て、子供のもりをしながら、わたしの迎へに行くのを待つてをりますのですから？』

『ぢやア、行つておいで』と云ふ承諾を得た。『お前さへゐると心がきまつたら。』

『わたくしは、無論、置いていただくつもりでございます。』

五

栗岡の家を出て行つた時と同じやうに、また何喰はぬ顔をして常は同家へ歸つて來て、

『うまく行つたのよ』と、お高さんへ私かにささやいた。
『わたしも――?』お高さんはこちらに向つてなほ不安さうであつた。
『無論』と、かの女をも喜ばせて、『だから、少し割り前をお出しよ。』
『出す、わ――よかつたの、ね!』
『……』常はそれから用事のあひま、あひまにお高さんにも云ひ含めて、こツそりと荷物の取りかたづけをさせた。そして自分でも不断ばきの下駄までを新聞がみに包んでしまつた。『今度は面白い書生さんがゐるの、わたしが一緒に御はんをたべた時、お給仕をしてあげましようと云つても、恥かしさうに自分で勝手によそうんですもの。』
『若いの?』
『さう、ね、あなたよりも一つ二つうへでしよう』と、お高さんの肩をたたいて、『あなたに丁度いいのよ。』
『わたし、いやよ』と、お高さんは赤い顔をした。
『僕は日高です』と、渠が名を聴かれて堅くるしく答へた時のやうすまでをも、こちらはそツくりして見せてお高さんを笑はせた。
別に行きがけの駄賃に持つて行つてやる物もない家なので、常は奥さんの眞綿と、旦那のシヤツを

お高さんが洗濯してそのほころびを縫つたのとを――これはお高さんにも隱して――自分の小さい行李に入れた。そしてその上へお高さんの僅かの持ち物をも入れさせてやつた。

そして夜の九時を過ぎて、皆の寢に行つたのを見さだめて、ふたりで家をぬけ出した。今夜は一と先づお高さんの叔父さんのところへ一泊することにきめてたのだが、ふたりとも東京を不案内なので、前以つて車屋を頼んで置いたのに途中から乘つて行つた。そして行つたさきの家を叩き起した。

清水と云つて、しもた家とは聽いてゐたが、たツた二ましかない家の一方玄關のまへとほされると直ぐ、清水さんはお高さんに向つて不審さうに云つた、

『あすこからお前が勝手にひまを取れるわけがないが――？』

『でも』と、お高さんは正直にうち明けかけた、『あすこは面白くないので――』

『いえ、面白くない位は女中として辛抱しなければならぬことでございますが』と、常は自分で引き受けて、『わたし達にはおひまが出ましたのです。さうして、もう、その代りが這入りましたので――』ゐたいと云つてもゐられなくなつたやうに話し、お高さんがへたなことを云ひ出すのを一々またこちらが引き取つてまことしやかに取りつくろつた。

清水さんの無學らしくもくど〳〵云ふのによると、お高さんは、その父と栗岡の主人との間で約束ができて行つてるのだから、父から引き取りに來ない以上は、ひまが出るわけがないのであつた。或

はさうだらうけれども、そこはこちらがお高さんをうまく取り込んであるので、こちらはどうやら斯うやら奇麗に云ひ開らきをしてしまつた。

『確かにさうか？』淸水さんがお高さんに念を押した時、

『確かです』と、お高さんも答へた。そしてその夜を二人で玄關のまにとめられた。

　おかみさんをなくしてゐる家なので、朝はふたりで臺どころの世話をしてから、行李は預けて置くことにして、大塚へやつて來たのだ。

『女中ができたら、いよ〳〵日高は追ひ出されるのだから、その覺悟で近處に貸し部屋を探して見なければならんぞ』と、旦那さんはゆふがたの食事の時に書生へ告げた。

『はい。』書生も素直に返事してゐた。

『………』常はそれでは折角一つの樂しみにしてゐたことが無になるのであると思つた。が、なほ奥さんの日高さんと話つてるところなどを聽いてゐると、追ひ出すと云つてもそとから毎日かよつて來ることになるだけらしかつた。それに、近々大きな家があり次第、どうせ市中へ引ツ越すのだから、それまでは無理に出なくてもいいでしようと、奥さんは書生に云つた。旦那さんも別に反對はしなかつた。常には、もちろん、書生がゐて與れた方が賑やかでもあつて嬉しいのであつた。

　女中どもと十歳の男の子とが茶の間に、そして書生は玄關の三疊に寢るのだが、旦那さんが便所へ

おりて來た折りに渠に向つて、
『日高、今夜からは女中も來たことであるから、寢る時はあひのふすまを締めて寢ろよ』と注意した。
『はい』と、矢ツ張り、素直な返事であつた。
『……』常にはふすま一枚のことがその前から氣になつてゐたので、いよ〳〵休む時になつてから、お高さんに向つて『ちよツと明けていらツしやい』と勸めた。男の寢すがたを見てゐたかつた爲めだが、さうとは見せず、『その方が書生さんもあかるくツていい、わ――でないと、氣の毒でしよう。』
『でも、おこられる、わ。』
『誰れが明けたか分るもんですか?』
『でも――』お高さんはこちらの云ふことを聽かないでしまつた。
『……』常も自分でわざ〳〵明けに行くだけの大膽にはなれなかつた。

六

明くる朝になつてから、風呂場の水汲みは矢ツ張り前々通り書生さんにやつて貰ひ、常は自分で最もらくな仕事にまわるつもりで、掃木をもつて二階へあがつた。きのふの『アララツラ』がゐるかどうかの好奇心もあつたのだが、向ふの障子がしまつてるのに失望した。

先づ、再び机の引き出しを兩方とも明けて見たが、旦那のかね入れは見當らなかつた。東京地圖が出てゐたので、暫らくそれを見て、自分の田島さんがゐる猿樂町の見當をつけて見ようと思つたが、おづおづ見てゐるせいか、さツぱり分らなかつた。掃除をすましてから、また書棚の前に立ち、ここの旦那の名が出てゐる本のうちから、表題のおもしろさうなのを一つ出して見ると、新體詩の本であつて、その中に斯う云ふ句が讀めた、

『血しほぞ踊るわれ、君もてあそぶ、君われもて遊ぶ。』

『……』常には矢ツ張り旦那も助平なのだらうと思へた。今、自分が踏んでる二階のしたで、まだ奥さんと一緒に寢てゐるのだ。如何に夜おそくまで書き物をすると云つても、もう、九時過ぎではないか——自分達や、うへの餓鬼ふたりは食事をすませたのに?けれども、それが却つて何となく自分には頼母しいやうであつた。

『わたし、奥さんから旦那を寢取るぐらゐの腕はないことない、わ』とは、冗談にお高さんへ向つて云つたことだ。

旦那や奥さんの朝風呂がすんで、食事になると、かの女は自分で給仕の役目にまわつた。すると、奥さんが云つた、

『けふはお前がうへの用をするなら、あしたはお高と替つてやつて、お前がしたの用をおしよ。隔日

交替にしないと、不公平になるから、ね。』

『はい。』こちらには、奥さんが隣りの板べいの穴からのぞいただけあつて、實際になか〳〵喰へない人と受け取れた。もうこちらのぶしようを感づいてゐるやうであつた。が、辯護士のうちでしてゐたやうに、お香々を切つた時、眞ン中のうまさうなところを自分の方へ取つて置いて、兩はじに近い方を持つて來たのに、それを旦那も奥さんも知らずに喰べてゐるのが私かにをかしくもあり、可哀さうでもあつた。粟岡にゐた時にも、皆のいわしを燒いて、一番大きなのは先づ自分の皿へ入れて取つて置いたのであつた。

用を順番にするにしても、ここでは朝風呂も立つて、朝の仕事が一番面倒のやうなので、あすの朝も自分は二階の掃除にまわるつもりで、ゆふがたの食事後の始末は自分が尤もらしく働らいた。そして御飯が澤山殘つたのを、あすの朝おひやで自分らがたべさせられるのがいやさに、おはちへ水をぶちまけて、米でもとぐやうに掻きまわし、それを井戸端からぢかに流した。すると、臺どころの前なる板べいに添つておもてのみぞまで眞ツ直ぐにとほつてる半土管の水みちが、うすぼんやりした夜目にも、白ぬのを敷きつめたやうに見えた。これではあすにも見られて主人におこられるにきまつてゐから、小さい掃木を以つて近いところからかき浚つて行かうとしたが、途中に土管の少し落ちこんだところなどがあつて、そこにたまつてる御飯が掃木のさきをおもくとめてしまつた。で、考へを變へ

て、水みちのおもてみぞに近いところから流して、畑のわきを段々とさかのぼつて行つた。それも一度や二度のゆき戻りではすまなかつた。二三度も井戸の水をポンプで出しては、また掃木を持つのであつた。

ところが、それをおもての魚屋のおかみさんが直ぐ明くる朝になつて發見して、奥さんに告げたさうだ、

『今度の女中さんは御飯を勿體ないほどすてます、ね、みぞに一杯たまつてますよ』と。

『わたしだツて、けさ、ちよツと門を出た時に直ぐ見つけたが、ね』と、奥さんはうちへ這入つて來てからこちらへ云つた、『まさか、うちの女中の仕わざとは知らず、誰れかわざ〳〵あんなところへ持つて來て棄てたものだと思つたのだよ。』

『………』こちらは奥さんと云ふものはどこのも人が惡く物を遠まはしに云ふと思へた。

『井戸ばたから水と一緒に流したに相違ないが、あれは一體誰れのせいだ、え？』

『………』お高さんもそばに呼ばれてゐたが、返事ができなかつた。それもその筈で、こちらはかの女と相談してやつたことであつた。

『女中と云ふものは、默つてゐると、よく御はんを棄てるものだが、うちぢやアああ云ふことはさせないから、ね――勿體ないばかりでなく、御飯と云ふものはたべ殘しが一と粒お茶碗についてゐても

きたならしい感じのするものだから。』

『はい』と云ふ返事は、こちらのとお高さんのとが一緒に出た。が、お高さんのもこちらのと同じやうに餘り本氣の返事ではなかつたやうだ。

このいきさつを聽いてゐた爲めか、旦那さんもそのうちに起きて來て、いきなり誰れにとも付かずおこつた、

『きのふから庭に紙くづが二つも飛んで來てゐるのに、いまだにどいつもこいつも掃除することを知らないのか？默つてゐると、いつまでもうツちやツて置く！一體、ほかよりも澤山の給金を出してふたアりも女中が來てゐながら、何をさせてゐるんだ？』

『まだうちのことに慣れないせいでもありましようが』と、奧さんが受けて、『あんまり氣がきかないので、今、叱つてたところですが――』

『圖々しいばかりで役に立たなけりやア、けふにも斷わつてしまへ！』

『………』お高さんはただおど〳〵してゐたけれども、常は自分でこんな時の氣轉が必要だと思つて直ぐ庭をはきに行つた。そして多少は叱られても、月十圓に對しては辛抱する氣であつた。

庭をはきながら考へて見ると、旦那はおもて向き奧さんに向つておこつたやうであるけれども、その實、女中をおこつてゐたのだ。それから、女中のうちでも、お高さんに對してよりもこちらにだ。

どうもここでも亦お高さんの方が信用あるらしいのをねたましかつた。
　主人の食事になつてからも、
『お常、ちよツと來て御覽』と、奥さんは云つた。
『……』こちらは丁度赤ちやんのおしめを洗つてゐたので、井戸ばたから手をふき〳〵あがつて行くと、お高さんがお給仕をしてゐた。
『けふのお香々は誰れが出したのだ、え?』
『お常さんです』と、お高さんが默つてればいいのに答へた。
『さうだらう。わたしはきのふからわざと何も云はないでゐたが、ね、きのふもけふもこれは』と、奥さんはちやぶ臺のどんぶりをこちらへ突きつけて、『皆しツぽの方だよ。主人にこんなのを出して、女中がいいところをたべると云ふ法はないよ。』
『つい、氣がつきませんでした。』
『氣がつかないと云ふが、お前はふく子にも——子供だから何も知らないと思つて——しツぽをたべさせてゐたよ。』
『……』もう、また返事ができなかつた。が、旦那さんの方が何とも云はなかつたのをまだ多少はこちらをひいきしてゐて呉れるのではないかと思へた。そしてお高さんとふたりになつた時、『あな

た、なぜ奥さんにあんなことを云つたの』と責めて見た。
『あんなことツて――?』
『分らなけりやアようござんす』と、わざとすねて見せた。どうせ突き詰められれば、こちらが惡かつたのだが、奥さんに叱られた餘憤をお高さんに向つてのほか漏らすところがなかつた。その勢ひでかの女を踏み付けるほどこちらの働きを當分のあひだ見せてやる氣になつた。
『わたし、旦那さんが一番こわい、わ』と、お高さんが云ふのに答へて、こちらは、
『あれは聲がふといだけ、さ――わたしの癪にさわるのは物の云ひかたのきつい奥さんだ。』
『わたし、さうでない、わ。』
『あなたはまだ男を知らないからよ。わたし、奥さんから奪ひ取つて見ましようか』と云つた氣持ちで、旦那さんの衣物の世話などもした。
　ふたりが來てから五日目に、お高さんの叔父さんが來た。何でも引き受けのことを云つてるやうであつたから、自分のも一緒にやつて呉れるのだらうと喜んでたが、こちらへは何の話もなしに歸つて行つた。そして奥さんがこちらに向つて、
『お常、お前はお高をそそのかして前のうちを出たんだツて、ね』と云つた。
『そんなことはありません。』若しそれがいけなければまた出るまでのことだから。

『それはそれとしても、然し、お前の引き受け人には誰れがなる、ね？』

『お高さんの叔父さんがなつて呉れます。』これはまだ話をしてないが、若し必要なら、お高さんから云はせることにしてあつた。

『さうはできまいよ。あの人はお高を引き受ければ十分だらう。お前はお前で別に引き受け人を拵へないぢやア——。』

『はい。』常は自分でもその場では承知したふうに見せた。が、私かにお高さんに向つて、奥さんは自分を追ひ出すつもりらしいと云ふことをあはれツぽく語り、『わたし、また新聞の廣告を見てる、わ。』『わたしもゐたくないから、あなたが出るなら一緒に出る、わ。』お高さんは相變らずこちらの手に乗つてるのがただ一つこちらの心だのみであつた。

七

その翌日、またお高さんの叔父がお高さんの父親をつれてやつて來た。すると、奥さんは奥のお座敷へとほして、ふすまを締め切つてお客さんどもとひそ〳〵ばなしをした。

常はお高さんと一緒に締まつたふすまのこなたで縫ひ物をしてゐたが、いよ〳〵お高さんの身元引き受けができて、ここへ無理にも引きとめられることになり、自分だけが出て行かねばならぬやうで

はと思ふと、こころ細くなつて、氣が氣でなかつた。
『あなた、きツと誓つて——わたしが出たらあなたも一緒に出ることは?』斯う、お高さんの耳もとへ自分の口を持つて行つて念を押すと、向ふも、
『むろんよ』と、自分のをおぼえたらしい口調で以つて本統のやうに答へた。
『………』けれども、自分が案じて見れば、かの女が親に就くか自分に就くかと云ふ切破つまつた場合になると、心が變はらないとも限らないので、自分は針を運びながらも、その方へ心は向かず、ふすまのかなたへばかり耳をそばだててゐた。そしてお高さんの機嫌を取つて置く爲めには、一つうその手紙を書いて、田島さんから自分へ來たやうに見せ、その中へ『お高さんへもよろしく』と入れてやらうと考へた。
『ぢやア、學校が一つであつたと云ふのもうそですか?』奥さんの少し高い聲がきこえた。
『………』あんなことまでばれて來たのぢやア、とてもここにゐられないのだらう。
『わたくしなどは、もう』と、これは清水さんの聲であつた、『二度と見るのもいやです。』
『………』若し自分のことを云つてるなら、少し失敬ではないか、初めて行つてお高さんと共にとまつた時には、をかしな目つきをしてこちらを見たこともあるくせに?見るのもいやだとは寧ろこちらから云ひたいのだ。たとへおかみさんがなくなつてるのだから、代りになつて呉れろと云つたツて、

あんなぶよ〳〵したおぢイさんに誰れが？

旦那さんが下りて來たやうすだが、やがてお高さんのお父さんのらしい聲で、

『わたくしの方では、あの女と一緒なら、お斷わりしたいのです。』

『ぢやア、一方を早く處分したら――』

『………』して見ると、もう、自分を出すことはきまつたのか知らん？

『然し、若し直せるものなら、人ひとり助けることですから、ね。』

『………』一番人の惡いと思つた奥さんが却つてあんなことを主張した。して見ると、まだ自分のここに於ける命脈はあるのだらうか？それにしても『わたしのことばかり云つてるの、ね』と、自分はお高さんにささやいた。

『棄てて置けばいいぢやアないの？』

『………』自分には、相手の左ほど心配もなく針を運んでるのが、どちらになつてもかまはないと云つてるやうにも取れた。で、若しそんなつもりなら、いツそのこと、しツかり自分が踏みとまるやうにして、かの女の方を追ひ出してやるぞとも考へた。

が、お高さんのお父さんが歸る時、お高さんをそとまで呼び出したが、清水さんまでが一言もこちらへ言葉をかけないで行つたのが癪にもさわつたし、またたよりなくもあつた。そして自分は他人の

家にたツたひとりぼツちである寂しみを感じた。
お高さんは立ち戻つて來てから、こちらに向つてこツそり告げた、
『奥さんはあなたの惡口をお父さんにも言つてよ。』
『お父さんはあなたのことを何と云つて？』この方を寧ろ早くききたかつたのだ。
『もう、二度と動いてはいけないツて。わたし、顏をなぐられた、わ。でも、わたし、あなたが出るなら、ひとりでゐられないから、矢ツ張り、一緒に出る、わ。』
『………』常は自分の身のことさへどちらともきまれば、あとはまた自分の胸に在ると思つた。奥さんが奥でしたの兒に牛乳を飮ましてゐるところへ行つて、少しあまへる氣味になつて、『どうしても引き受け人が必要でしようか？』
『さうだ、ね。受け人がなければ困るよ。もう、お高のはできたが、——お前は東京に知り合ひでもないのか、え？』
『牛込に叔母さんがをりますが——』これも出たら目であるから、そこへ頼めとでも云はれては自分も困るので、『さう親しくしてをりませんから。』
『神田から手紙の來たのは？』
『………』常は田島のことをあの下村へ向つてのやうに兒だとも云へなかつた。『わたしの生れた近所

の人で、まだ學校へ行つてますので——』

『ぢやア、誰れもないのだ、ね？』

『はい。』それがいけなければ覺悟するより仕かたなかつた。が、

『お前はふけてるせいか、どうしてもお高より二つ三つ年うへとしか見えない』と、最初に奥さんに云はれたのが、實を云へば、間違ひでない自分が、その年したの相手に負けて行かねばならぬかと考へると、如何にも悔しかつた。そしてこれも自分には早くから兩親がなく、叔父があつても因業な爲めだと思へば、今や他のことはすべて忘れても、眞人間になつてそればかりが私かに歎かれた。

『今聽いたところで見ても、前の主人のうちでお前は隨分ひどいことをして來たやうだが——そのことをただせば、お前には人に云はれぬ事情が何かあるやうだ、ね？』さすがの奥さんもこちらの心に觸れることを云つて吳れた。『それを正直に云つて御覽。話の都合では、いつまでもうちに置いて、わたしが眞身も同樣にお前の相談相手になつてやらないこともないから。』

『………』常は俄かに嬉しいやら悲しいやらで思はず自分の手を顏に當ててその場に泣き伏してしまつた。それから、流れた淚を本統に自分の袖でふきながら、實は、自分にはお高さんと違つて兩親がなく、叔父に財産を橫領されたのを知つた悔しさに、叔母の金を盜んで家を出たことなどをうち明けた。そして一度詫びの手紙を出したけれども、それツ切り返事がないことをつけ加へた。このつけ加

へには、然し、まだうち明けられぬ宇都宮のこともそれとなく自分では云ひ含めたのであつた。

『何かそんなことでもあるのだらうと思つてたのだが、またゆツくり聽くよ』と云つて、奥さんはお隣りの人が來たのを玄關へ迎へに出た。

『………』常は久しく自分の胸にばかりこぢれてゐたことを幾分なりともここに泣き訴へることができたのが却つて自分の久し振りの心やりであつた。早速お高さんが井戸ばたで洗濯をしてゐるところへ行つて、『わたし、奥さんが置いてやるとおツしやつたから、嬉しい、わ。』

『さう』と、お高さんは却つて意外にも氣のぬけたやうな顔つきをしてふり向いた。『では、ゐることにするの？』

『わたしもゐるから、あなたもいらツしやいよ。』斯う押しつけるやうに云つて置いてから、常はまた机に向つてる書生のそばへ行き、渠にぴツたり寄り添つて坐わり、笑ひながらひそやかに、『わたし、ゐることになつたの。あなた嬉しくない。』

『どうして、さう？』渠はこちらへ顔をふり向けたが、相變らず野暮天のやうに生まじめであつた。尤も、これまでにここを出るとも出ないとも話をしてなかつたのだが――。

『どうしてツて――』かの女は自分だけで分り切つてるではないかと云はぬばかりにして、なほ一層の意味を加へてただ微笑して見せた。そして奥さんが奥でお客さんと話をしてゐるのへも耳をかた向

けながら、日高さんに向つて『あなたの萬年筆はどんなの？わたしのも見せましようか』と云つて、自分のをも持つて來た。そして渠のよりもずツといい品であるのを自慢した。それもその筈で、宇都宮のお孃さんが高いおかねを出して買つたものであるから。

八

今度奥さんに今一度詳しい身のうへを聽かれても、宇都宮のことだけは決して云ふまいと心できめてゐながらも、兎に角、お高さんよりも多くの信用を得て置く必要があると思つたから、その後は誰れよりもさきに立つて働いた。

けれども、毎朝、二階の掃除には必ず常が自分で行くやうにした。一つには、旦那さんがいつもふところへ入れて外出するところの、縮緬のふくさに包んだ紙入れのありかを知りたいのであつた。

その紙入れは旦那がお湯を出た時に着せてあげる不斷着のたもとに這入つてることはあるが、二階に置いてあつたことがない。たまには、十錢や二十錢の銀貨が机のうへ又はその引き出しの中にわざとらしく置いてあることはあるが、それはうか〳〵取れなかつた――直ぐ分るに違ひないのをお高さんか、日高さんか、それとも十歳のぼつちやんかのせいにするつもりなら兎も角。

今一つ二階の戀しい理由には、眞向ふの二階に二三名ゐるのが大工の若い衆だと分つて來た。その

どれかの注意を引く爲め、朝化粧をした顏を――寒い風に吹かれながら、――窓に出してやるのだけれども、向ふは滅多に顏を出してゐないし、またゐた時でも檜葉の樹が邪魔になつてよく見えなかつた。

一番手近にゐるのは矢ツ張り書生さんだけれども、その代り、石部金吉かなかぶとの方であるではないか？

『日高さんは隨分ひらけない人よ』と、こちらの思ふやうにならぬ不平をそれとなくお高さんに云つて聽かせた。

『勉强家なのでしよう。』お高さんも亦駄目だと、こちらには思へた。

お高さんの叔父さんのところに預けてある、あのをとこシャツを常は持つて來て日高にやらうかとも考へてるのだが、こんな男にやる位なら、矢張り、盜んだ時の考へ通り、折りを見て神田の田島にやる方がよかつた。そして、

『洗つてあげますからおぬぎなさいよ』と云つて、日高に二三度もその着てゐるシャツのよごれてることを注意したけれども、渠はなか〳〵ぬがなかつた。一つには、男の肌を見るのが面白かつたので、一度無理にぬがせて見た。そして井戸ばたへ持つて往つて、先づその男くさいにほひを私かにかいでゐたが、ふと思ひついて縫ひ目のところを返して見たら、俄かにからだ中がぞツとしたほどの氣味わ

るさを感じた。大きなしらみとその白い玉子とがいづれ劣らずぞろりと並んでゐるのであつた。『お高さん』と、思はず大きな聲が出た。『ちよツと來て御覽なさい。』

『なアに』と、お高さんは相變らず間のぬけた返事をして來たけれども、畑のところで遊んでたぼツちやんの貞ちやんは駈けつけて來て、見るが早いか、

『あア、しらみだ、しらみだ』と叫んだ。

『默つてらツしやいよ。日高さんに氣の毒だから。』

『……』お高さんは何も云はないで、ただ二三度もつばきをした。

その間に、常は大きなのを五六匹取つて、流しのうへの乾いたところへ並べた。そして

『若し〳〵龜よ、龜さんよですよ』と、貞ちやんに云つて見せた。

『あゝ、競爭だ。競爭だ。』貞ちやんも云はれた通り聲をひそめてゐた。

『さア、あげましよう』と云つて、常はまた一匹をお高さんの足もとへ投げると、かの女はそれを下駄で地べたへ踏み付けた。すると、貞ちやんも競爭組の方をそツくり踏みにじつてしまつた。

常は二人のじツとのぞいてるところであとの蟲や玉子をいくつも一つづつ取つては、自分の爪でつぶして行つた。ぴちり、ぴちりと云ふのが氣持ちよかつた。そしてその一つの血がはねてお高さんの口のあたりへ飛んだので、かの女は氣味わるさうに何度もまたつばきをした。

常はそれでも遊び半分に根氣よく玉子までも取り盡し、そのきたないシャツの洗濯に皆が小半日もかかつたので、

『何をみんなでしてゐるのか、ほかの用ができないぢやアないか、ね』と奥さんに叱られた。

が、その夜になつて、このことが貞ちやんやお高さんの口から奥さんへ、そして奥さんから旦那さんへ漏れたので、こないだぢうから子供に時々しらみがついたのはその爲めだと云ふことになり、日高さんはたうとうその翌日から追ひ出されることになつてしまつた。

常にはそれが一つの失望であつた。その代り、また、手のすきを見ては、茶の間の緣がは近くに横になつて、おもて通りの長屋の二階のうら窓を見て暮した。長屋は魚屋、米屋、そば屋と三軒並んでるが、その眞ン中の米屋の二階には、鈴木と云ふ巡査の獨り者がとまつてゐた。そこへ買ひ物にやられるついでなどに話をして見て、その姓名やその休み日やその歸つて來る時間やを知つたので、時間にたると、自分はお高さんや貞ちやんに、

『障子を明けて置きなさいよ』と命じた。そして向ふが顏を出すと、こちらから手似眞を以つていろんなからかひをして見せた。兩手に茶碗と箸とを持つて口に運ぶかたちをして、それからかた手を一方のくびにかついだのは、御はんをたべてから一休みするのかと云ふ問ひであつた。また、腰のあたりへ長い物をかける眞似をして、兩手を右ひだりに動かしたのは、これから出勤して行くのかと云ふ

また向ふから呼びをかける時など、たまにはわざと障子をしめて隱れてると、貞ちやんが却つてこれ見よがしに引きあけた。こんな時には、常は笑ひながら兩手を後ろへ突いて自分の半身を隱した。

『お常さん、貞ちやんに來いと云つて下さい、繪ハガキをあげますから』などと、鈴木さんは子供好きだと云はれるだけにいつもそんなことを云つた。が、こちらはもツと意味を持つてゐた。

『いつでもシャツを洗つてあげますよ。』これにはまたしらみがたかつてゐはしないかと云ふ好奇心もあつた。そして一度洗濯を賴まれた時に、それをよく調べて見て、男のにほひがついてるだけで蟲などは一匹もゐなかつたのに何だか却つてたよりない氣がした。そして洗つたのをしぼり丸めてちよツと新聞紙にくるんで、板べいのうへから手渡しした。

『なアに』と、お高さんはそこへひよツこり出て來て不審がつた。が、こちらは新聞紙の中の物を何だとも說明しなかつた。

或時、へいの向ふがはへ來て、鈴木さんが貞ちやんと何か話をしてゐたので、紙切れにかた假名ばかりで書いた物を貞ちやんに渡し、

『これを鈴木さんに下から讀んで御覽なさいとお云ひなさい。』

『……』鈴木さんは受け取つたが、やがて、『こんな猥褻なことをしてはいけません』と云つて突ツ

返した。
それを貞ちやんがひろひ上げて見てゐたが、
『ねィやは助平だ、ねい』と叱つた。
『この小わッぱめが！』常は笑ひながらも斯う思つて十歳の子供が小憎らしかつた。で、主人の留守には、渠が、
『御主人さまを何する』などと滑稽なことを云ふにも頓着なく、本統の主人がその子にするやうに、時々その尻をまくつてその尻ッぺたをなぐつてやつたのだ。それを見た三歳の子も、
『ねィや――馬鹿』と云つた。それも癪にさわるので、主人の留守の時に、
『こら、ふく！默れ！泣くとやかましい』と叱り付けたこともあつた。
そんなことが主人に分つてしまつたのだ。それに、奥さんがあとでまたゆッくり聽くと云つたこちらの身の上ばなしも、あれッ切り、いつまで心待ちにしてゐても聽かれなかつた。どうせ、もう、ゐられないのだらうと、またく考へるやうになつてゐた。半ば燒けになつて、奥さんのお白いを少し多過ぎるほど横取りして自分のびんに入れて置いたので、それがまた直ぐに分つてしまつた。
『わたしのお白いを誰れが出したのだ、え？』
『わたしは知りません』と、お高さんはおづくして答へた。けれども、それがお常さんでしようと

『ぼツちやんがけふお顔に白い物をつけてゐました。』
『なアに、あれは徒らにてんかふんをつけてゐたのだが、ね――』
『………』ぢやア、おぢよツちやんでしようと云ひかけたのだが――
『わたしのお白いのにほひがお前達のうちでしたよ』と、奥さんはこちらの圖ぼしをさした。『わたしのは、お前達の使つてるのなどとは違ふから、ね。』
『………』常は、もう、一言も云ひ返しができなかつた。若し押しつめられたら、自分も奥さんと同じのを買つて置いたのだとでも云ふより仕かたがなかつた。あとでお高さんに向つて、『あなたばかりあの女の疑ひをのがれたらいいの』となじつて見た。すると、かの女はあわてて、
『わたし、實際に知らないのですもの。』
『でも、あなたでなければわたしのせいにされてしまうでしよう――？』
『ぢやア、奥さんはうそを云つてるのでしようか？』
『………』丁度いいことを思ひ付かせて呉れたので、常はその問ひにつけ込んで、『あんなことを云つて、わたし達を追ひ出さうとしてるのだ、わ。』
『さうか知らん？』お高さんは暫らく物が手につかぬやうであつたが、『わたし、おそろしい、わ――

若し無理に泥棒にでもされたら。』

『だから、早くまたもツといいところを探しましようよ。』

『わたしも一緒に行く、わ。』

『………』常は横を向いてちよツと舌を出した。

九

けれども、奥さんに云ひつかつて奥さんの爲めに縫つた帶は既に短くでき上つてるのである。メリンスだが、そのむらさき地の白しぼりの切れを一尺ばかりはかすり取つた。それを幸ひにも奥さんは氣が付かないでしまつた。そして、ここを出るまでには、如何に嚴重でぬけ目がないやうにしてあつても、まだ何かいい物を取ることができさうであつた。

一方には、また、毎朝、ここへ來る五六の新聞に出てゐる廣告を主人や奥さんが起きないうちに讀んで、ここと同じほどのお給金を呉れるのがあらばと頻りに注意してゐるのたが、どうも思ふやうなのがなかつた。

さうかと云つてお高さんひとりがうまくここに殘り、自分だけがもとのやうに四圓や五圓のところへ行くとも言はないので、どうしても意地になつて、かの女をもつれ出さねばならぬと思つてゐた。

そして一緒につれ出しさへすれば、お高さんの給金をも卷き上げることは容易であつた。
それにしても、お高さんが京橋で貰つてからそツくりまだ持つてると云ふ五圓を先づ何とかして卷き上げたかつたので、日立鑛山へ行つてる男を自分の義理の妹と見做して、それに子どもができたことにし、妹の母乃ち自分の叔母が急に手傳ひに行つて、そこから自分によこしたていの手紙を書き、私かに近所の郵便箱へほうり込んだ。そしてそれが再び自分の手に屆いた時、それをお高さんにも讀ませた。それまでにも度々自分の書いた僞書を以つてお高さんに自慢したり、競爭したり、喜ばせたり與へたりしてあるので、今回のもすツかり信じられるのは分つてたのだ。
で、常はまじめな顏で、
『妹の初產だから』と、お產と云ふことでさきに自分が誰れのとも分らぬ兒を流產した時には、たとへ無事に生まれてもお祝ひなど望めなかつた事情に思ひ及びながら、『どうしても拾圓ばかりの反物は送つてやらねばならないでしよう。わたし、今その半分はあるけれど實は、(これもうそだが)、あとの半分が足りない、わ。あなた、今月のお給金が取れるまで貸して吳れない?』
『おかねのことだから、ね』と、お高さんは答へて、なか〳〵貸しさうでもなかつた。
『………』このうす野呂でもかねのことになると馬鹿にはできないのか知らん?それならそれで、別にまた考へがあるのであつた。

この日、奥さんはこちらを奥へ呼んで、

『お前のところへ來た郵便で見せてもいいのを一つ持つて來て御覽』と云つた。

『………』わざ〳〵どうするつもりか知らないが、丁度お高さんに見せたハガキがよからうと思つてそれをさし出した。すると、奥さんは一言のもとに、

『これはお前の手ぢやアないか？』

『………』常はちよツと返事に困つた。自分のやつてるたくらみをかの女に横合から見破られたからである。

『さうして見ると、こないだから不思議だ、不思議だと思つてたことが矢ツ張りさうだ、ね。お前は何の爲めだか、ハガキばかりでなく、手紙にもお前が書いた物を自分で受け取つてるよ。これだツて日立鑛山とはしてあるが、消し印は巣鴨局だよ。』

『決してそんなことはありません。多分何かの間違ひでしよう。』

『そんならそれでもこツちは別にかまはないが、ね、文句までがお前の書く通りに似てゐるよ。』

『………』文句と云へば、自分は男にやる手紙には『カルタ早わかり』と云ふ小さい書物に書いてある百人一首の戀歌の說明から、いつも思ひ付きつつあるのであつた。

床に這入つてから、常はお高さんの寢がほをまた別な床に見て、――この時には、もう、大分あた

たかくなつてたので、別に寢てゐた——その馬鹿げさ加減をひとりであざ笑ひながら、自分の萬年筆でこツそり手紙を三本書いた。その一つは猿樂町の田島宛てで、いよ〳〵お高さんを三十一日の晩にはつれ出すから、あなたも一緒に加勢して神田なり淺草なりの活動へでも這入り、お高さんの財布を取つてしまはう。その時には、今月のお給金拾圓と別に五圓とが這入つてる筈だから。そしてあなたはお高さんを一度おもちやにするなり、何なりして、おッぽり出してしまへばいいから、と云ふのであつた。

次ぎには、日立鑛山の男に與へる手紙で、自分は今日となつては、もう、誰れとも手が切れてるから、東京へ出て來て一緒に家を持たないかと云ふ、例の戀歌もどきの誘ひの意味を書いた。この男はをとこツ振りが田島よりもよくないけれども、自分の流産した兒は自分では渠の種に違ひないと云ふ見當はついてゐた。

今一つは、お高さんに見せる爲めの物で、神田の叔父から自分に若し困ればいつでも友達もつれてやつて來いと云ふことを書いた。自分はお高に向つて神田にひとりの叔父があつて、借家を三十軒も持つて立派に暮してゐると云つてあつた。

以上の三通を書き終はつてしまうと、たださへ勞れてゐたのであるから、まだ封もしないのに、そのままべたりと突ツ伏して眠つてしまつた。そして朝起きてから考へて見ると、どうも夜中に奥さん

にすツかり見られてしまつたやうすがある。よくは自分もおぼえてゐないが、手紙をほうりツ放しにした位置が朝見た時には違つてたやうだ。

ひまを見て郵便箱へ入れて來てから、

『奧さんはあなたに何も云はなかつて?見られては少し困る手紙があつたのだけれど』と云つて見た。

『………』お高さんには、然し、何も知れてゐないらしいのにこちらは多少安心した。

旦那さんが書き物の爲めに度々旅行に出るせいか、奧さんはこちらを追ひ出すときめてゐるに相違ないにも拘らず、一向にそれをおくびにも見せないで月の末に近づいた。だから、こちらはお給金を取れば、直ぐ先手を打つてやらうと考へてたのに、三十日と云ふ日の朝になつて、

『あすは月末だが、ね、お前達は五日に來たのだから、お給金は勘定に都合がいいやうに毎月四日に渡すことにしたいが、それでいいだらう、ね』と云はれた。

『はい。』常は仕方がないので自分からお高さんをも代表して返事した。が、あとでこツそりとかの女の顏を見て、ちよツと困つた、な、と云ふ意味を目と目で語り合つた。自分は三十一日の晩に一緒にまた逃げ出さうとしてゐたのだ。その計劃が狂つて來たと同時に、『わたし、あなたの叔父さんに手紙を書いてあげる、わ』と云つて、有無を云はせず、手紙が書けるのを自慢の常はお高さんの代筆をし

た。――

『拜啓、春暖之候と相成り申し候。此花節に叔父上樣には如何お暮し遊ばされますか。さだめし御壯健の事と思ひ居ります。私は日々淋しく暮して居ります。今日此頃は何かにつけて怒つてばかりゐて、奧樣が輪に輪をかけて主人に話すので、大いに懲り、今は居ることは一切出來ず、けふが日にもひまとり度と思ひ居りますが、今度は叔父上樣の前がありますから、何とも仕方が御座いませんから、がまんして居りますが、何卒早くひまを取つて下さいませ。此手紙着次第、何か文を作つて半日ひまをもらつて行きて、種々御話し致し度候へば、至急主人の處へ御手紙下さいませ。私の友達のつね子樣も四月四日にはひまとつて故鄕へ歸るか、又は東京で何か藝を習ふと云つて居りました。つね子樣の叔父樣は大變立派に暮して居る樣子で、つね子樣がひまとると私一人で何とも手の付けやうがありませんから、ひまとつて下さいませ。私はひまとることに心配致し居ります。再々のお願ひであります。叔父上樣には度々御心配を掛けまして何とも相すみません。何卒御ゆるし下さい。今は叔父上樣よりの御手紙を日々待ち居ります。先は亂文亂筆御許し下さいませ。さよなら。かしこ。三月三十日午前。叔父上樣御許に。淋しきたか子より。』

これに對する返事は三十一日の晩になつても來なかつた。四月に這入つても來なかつた。そして二日の朝にはしたの兒の爲めに乳母が目見えに來た。

『三人の蒲團はないから』と、奥さんはこちら二人に向つて、『お前達のうちでひとりを斷わらなければやならないが、ね――』

『では、わたくしが出ます』と、常は云ひ放つた。『妹が呼びに來て居りますから、あす會ひに行けば、多分國へ歸ることになりましよう。』これもうそだが、お高さんの手まへもあつた。かの女に對しては、妹なる者が來て神田から手紙をよこしたことにしてあるのだ。どの妹かと云ふやうな疑ひはお高さんには出る筈がないと思はれたから。

『ぢやア、丁度お互ひの爲めだから。』斯う云つて、奥さんが二階へあがつたあひだに、常はお高さんに向つて、

『あなたも一緒に出るのですよ』と、念を押した。そしてこのうちはどんな樣子かとこツそり聽きに來た乳母に向つて、とてもゐづらくツてあなたなどにゐられるものでないと云つてやつた。『晩の御はんをうんとたべて、今夜は田島さんに逢ひに行くのだ』とも云つて、お高さんを羨ましめた。そして斯う云つた時には、また、妹の來てゐると云ふうその方を忘れて居た。

そのうちに、奥さんが手帳を持つて下りて來て、

『お前の本籍をちよツとここへでも書いておくれ』と云つた。

『茨城縣水戸在〇〇村――』常は自分の知つてる男の村名を書き入れて『山部常子』とした。

『これが本當の戸籍だ、ね?』
『然し、わたしの戸籍はいろ〳〵になつてますから、調べたツて、それだけでは分らないでしよう。』
斯う答へたには、自分の叔父に對する燒ツ鉢の恨みもあり、また奧さんに向つての隱し立てもあつた。
『あなたは京橋では德子と云つてたし』と、お高さんはいつかも不思議がつた、『ここでは常と云ふし、どツちが本統なの?』
『わたしの名前はその時。その時で澤山ついてゐます。』もツとも、子供の時に弱かつた爲め、別に緣喜を直すと云つてよし子と呼ばれてゐたこともあるが、今うか〳〵本名を名乘つてれば、どんな目に逢ふかも知れなかつた。
『お常――お常』と、また二階へ行つた奧さんの呼び聲であつた。行つて見ると、『今、旦那さんとも相談して、いツそのこと、けふひまを取つて貰ひたいが、ね』と云はれた。『わけを云へば澤山云ふことはあるが、どうせ出て行くものに云つたツて仕やうがないから。』
『さうですか?』常は、今更ら悔しいことには、却つて先手を越されてしまつたので、ひやりと水をあびせかけられたやうな氣がしたけれども、その場で腹をきめてしまつた。『今月のお給金さへいただけば直ぐ引き取ります。』
『お前は』と、旦那も口を出した、『惡い癖が直りさへすればと思つてたのだが、駄目であつたのだ。』

『さうですか？』そんなことを二人で云つてただで突ツ放すのかとも思へたので、『お給金をいただいて歸ります。』『若し呉れなければ警察へ訴へてやると覺悟した。

『給金はしたへ行つてあげるが、ね』と、然し、奥さんはおだやかに出たが、果して三通の手紙は――少くとも、一番見られては困るのを――讀んでたらしかつた。『お前はおほ芝居を打たうとして失敗したのだよ。うちの旦那さんの爲めにはいい小説の種をこしらへて呉れたものだ。』

『さうですか？』常はまた斯うしか云へなかつた。

一〇

『お前を世間から助けてやらうと思つたやうに、わたしはお高をお前の手から助けるつもりだから、ね、いくらつれ出さうとしたツて駄目だから、さう思つておいで』とも、奥さんは云つた。

『……』それは然し二三日のうちにお高さんの叔父さんが來て、どうせつれて行くに違ひないと云つてやりたかつた。お高さんにはそこをよく云ひ含めて置いて、一と先づ別れることにした。

米屋の二階にゐる男が生憎巡査であつたので、物を盜んでも預けることができないと分つてた爲め殆ど何も目ぼしいものは盜めなかつた。が、晩めし近くで腹がへつたので、戸棚の煮ぼしをふくろごと自分の風呂敷へ入れて來た。そして先づ天祖神社の森の裏手へ隠れてそれをたべながら考へて見る

と、田島さんのところへうそをついて行つて見たところで、とめて呉れるかどうか分らなかつた。奥さんに見られたこないだの計劃に對する返事だツてまだよこさないのだ。田島ばかりではない。日立鑛山のだツて、あれだけ文章をねつて云つてやつたのに、さツぱりたよりがない。

まだ道案内も詳しくない東京を、ひとりぼツちで、どうしたらいいだらうと迷つてると、山の手の電車がとほる響きがきこえた。それで行けば上野へ行けると聽いてたので、盜んだ物をたべてしまうと、大塚停車場へ急いだ。そこから出た電車を上野で下りると、前に逃げた男と一緒にとまつたところの〇〇館へ行つて、またそこへとまることにした。

その夜は、これからどうしていいのか分らなくなつて、あたまがかきみだれてゐたので氣が付かなかつたが、明くる朝になつて見ると、自分の業の道具がなかつた。まだお白いもつけないで電車に乘つて、今一度大塚へ來たが、きのふまでゐた家が初めてその門をくゞつた時よりも一層おそろしかつた。おづ〳〵と勝手の方へまわつて、お高さんに忘れた道具を取つて貰つた。が、急にかの女のやうすも變つてるやうなので、

『どこにゐるの』と尋ねられても、

『いづれ知らせる、わ』と答へただけだ。『叔父さんが來て？』

『まだよ。でも、きのふ、ちよツと行つて來た、わ。奥さんから手紙が行つてて、叔父さんは來てか

ら樣子を聽いて見ないとひまも取らせないと云つたの。』

『……』常はお高さんにはまだ出る氣があるのを知つて、少しは自分も心丈夫になつた。

『お常かい』と、例の長火鉢のそばから奥さんの聲がした。『お前は費ぼしをすツかり持つて行つた、ね。』

『……』こちらは歸りかけて茶の間の緣がはの前をよぎるところであつたが、ちよツと踏みとまつて締まつてる障子のうちへ向つて、『わたくしは知りません。』若し執念深く問ひつめられたら、そんなら證據があるかと自分は問ひ返してやるつもりであつた。が、自分としては、そんな下らない物よりも、なぜメリンスの帶切れのことを聽かないのだと心に云はせて、復讎の如き痛快を感じながら、門を出た。そして門を出てから、俄かに、奥さんが旦那さんに話して、旦那さんが自分を追ツかけて來はしないかと思はれたので、丁度一ケ月間も見慣れた道の左右へは目も吳れないで、さツさと停車場へ急いだ。

宿へ歸つてから、まだ脈があると思はれるお高さんの心をつなぐ爲め、そして奥さんへは自分のそんなに棄てられ者でないことを示めす爲め、妹から來た自分當てのハガキを書き、また天祖神社ワキ平田方へ向けたことにして、

『いろ〳〵話もあることに候へば、早く來て下さいませ。母上からもことづかり物があります』など

と云ふ文句を入れた。郵便局の消し印がどこになつてゐようと、それは自分には關係がなかつた。
　廣告で見たところを二ケ所目見えに歩いたが、一方では、人を馬鹿にしたことには、
『お前は淫亂らしいから、書生の多いうちでは置きにくいから』と斷わられた。また一方では、
『お前の目つきがよくない、ね』と云はれたので、どうせいやなのだらうと思つて、自分から引き取つて來た。
　そして三度目にやツとゐて吳れろと云ふところがあつたので、そこへ落ち付くつもりで淸水さんのうちへ荷物を取りに行つた。
『どうも御無沙汰致してをりましてすみません。平田さんを出ましたので、直ぐにもあがるところでしたが、わたくしも今回神田の叔父さんから學費を出して貰ひまして、或女學校へ這入ることになりました。その入學試驗でこないだぢう急がしうございましたが、幸ひにも入學ができましたので、やツとお尋ね致すことができましたわけで――。』
『それは結構でしようが――もう、こちらでも平田さんへ伺つていろ〳〵聽いてをります。』
『………』何を聽いてたツてかまうわけではなかつた。こんな無學な男が！
『お高も來て、もう、自分の物は疾くに別にしてありますから、よくあなたのを調べて見て下さい――
――あとで間違ひがあると困りますから。』

『………』して見ると、お高さんはこれからのつき合ひをやめる氣になつたのか知らんと思ひながら、常は自分の行李のひもをほどいてその中を調べた。一つでも足りない物があつたら承知しないと云ふ決心になつてゐたが、その必要もないので少しがツかりして、『確かに間違ひはありません。』

『それなら、念の爲めにわたくしから伺つて置きたいのですが――』

『………』常は清水さんの妙に威だけ高になつたのを何のことだと思つて、あざけりの目をじろりと向けてゐた。

そのシャツはどなたのですか――男ものですが？』

『………』さうだ、をとこ物であらうが、あるまいが、他人の關するところではないではないか？少しはまご付いたが、直ぐ腹をきめて、『これは』と、京橋にゐた時のことを思ひ浮べながら、手早く行李に押し込んで、『確かにわたくしのです。』

『然し、お高の話では、栗岡の旦那さんのをお高が洗つて縫ひつくろつた物ださうですよ。』

『そんなことはありません。お高さんの思ひ違ひでしよう。』行李には蓋をして、その上へ自分の右の手を置いてゐた。

『さうきツぱりと云へるかどうか分りませんが――』斯う云つて、清水さんはこちらに云ひくるめられてしまつた爲めだらう、今度は止むを得ずお高さんのことに話を移して、矢ツ張りいろんなことを

平田さんから聽いて來たから、『以後、お高とのつき合ひは御免かうむります。』
『へい』と、お常はとぼけて見せた。それから、『お高さんはわたくしより年うへですよ。』これもうそだが、生まれ月だけで云へば、向ふが二月、こちらは十月であるところから思ひ付いた理窟だ。『その年うへのものが年したのものにだまされると云ふことがありますか？京橋を出たのも、お高さんに出る意志があつたからこそ出ましたので、決してわたくしがだましたわけではありません。それに、あなたはあなた、お高さんはお高さんでしよう。お高さんが向ふの意志でわたくしとつき合ひするのがどうしていけませんか？』
『どうせ警察ものだらう、な』と、清水さんは横を向いて聲をかけた。
『さう頼む』と、奥にゐた男が答へた。平田のうちで一度見たことのあるお高さんの父親の聲らしかつた。
『………』常はぎよツとしないではゐられなかつたが、弱みを見せては却つてよくないと考へたので、少しもおぢけを見せず、何喰はぬ顏をして行李をひとりでしばつてゐた。
そとへ出た清水と入れ替つて、お高さんの父親が玄關のまに出て來た。一方が長い髮を分けて、ぶよツとした顏をしてゐるのに比べては、これは目つきもきりりとして、五分刈りのあたまにはしらがだらけだが、なか／＼きつい口のききかたをする、

『お前の爲めにまたわざ〲出て來なければならんやうになつたのだが――お高は手紙に自分のことを高子とは書きません。』斯う云ふのをきツかけにして、何でもかでもこちらを責めるやうにばかりしたので、勝手に云ふだけのことを云はせて置いた。兎に角、平田の奥さんがこちらの惡くちをさんざんに云つて聽かせたらしかつた。で、

『奥さんは隨分うそを云ふ人ですから』と、常は切りぬけたつもりであつたが、淸水さんが實際に警察へ行つたものとすれば、自分がここにうか〲してゐるのは利口のことでもなかつた。『わたくしは今一度念の爲めに調べて見ましよう』と云つて、再び自分の行李を明けて、栗岡さんのシャツを取り出し、下に置いたり、兩手で持ち上げたりして見せてから、『ああ、これは違つてをりました。わたくしが國を出る時から叔父さんに貰つてあつたのかと思つてをりましたら、矢張り京橋の旦那さんのでした。ついでですから、この眞綿も奥さんのを間違つて持つて來たやうですから、一緒に返しましよう。ちよツと失禮してその申しわけの手紙を書かせて貰ひます。』

『……』お高さんの父親は何も云はないでそばについてゐるのが、こちらには逃げるのを見張りされてるやうな氣持であつた。

一一

『拜啓、その後は御無沙汰致し候』と、常は紳士の眞似をして持ち歩いてる萬年筆で以つて行李にあつた西洋紙――これも取つて來たのだ――に栗岡の主人に當てるつもりの文句を書き初めた。が、いつもすら〳〵書けるのが自慢の文句も、けふに限り、ことがらが違ふ爲めか、思ふやうに出なかつた。それでも、わざと心を落ち付けて、自分はあやまつて御主人の物を荷物に入れて來たが、今日それを發見致しましたから郵便にて送り返しますと云ふことを、筆を置かずゆツくりと書き進めてゐた。

そこへ淸水さんは實際に巡査をひとりつれて歸つて來た。かちや〳〵と云ふ劍のおとを聽いた時、こちらは既にわれ知らずぎよツとしたのである。

「お前か山部常と云ふのは？」

『はい』と、内心ではおど〳〵しながらも、さうは見せないやうにかしこまつた。そして淸水さんよりもさきへ土間へ這入つて突ツ立つてる巡査の方にからだを向けた。

『ちよツと聽きたいことがあるから、警察まで來て呉れんか？』

『わたくしはそんなところへ行くやうな惡いことはしてをりません。』

「惡いことをした爲めに呼ばれると限つたものでもないから。』

『でも』と、常はその說明に少し安心して、『わたくしが間違つて持つて來たものですから、わたくしが手紙をつけて送り返せば、それでいいと思ひます。』

『それはそれとしてだ――』

『………』默つて、ただ渠の顏を見上げた。さう云はないで許して吳れいと云ふやうな目つきでだ。

すると、あの鈴木さんよりは少し年うへらしいが、鼻すぢなどちよツと田島さんに似たところのある人だと思へた。淸水は直ぐまたついて行くつもりらしく、その後ろにゐて、自分の家へ這入らないでゐた。

『警察は惡いことをしたものにはこわいだらうが、お前さへ惡いことをしてゐないなら、何もおそろしいところではない。女中の口がなくつて困つてれば、また、その世話もしてやるから、な。』

『わたくしは、もう、使つて下さるところがきまつてますから――』つい、斯う云つて、女學校入學の話と喰ひ違つてしまつた。

『それならなほ結構だ。兎に角、ちよツと一緒に來て貰ひたい。』

『どうしても一度行かねばなりませんか？』

『迎へに來た以上は、な。』

『では――』常はおもてには惡びれを見せなかつた。が、若し自分が泥棒になる位なら、お高さんをも自分の巻き添へにしないでは置かないと云ふ覺悟になつて、書きかけの手紙をも手早く行李にしまひ込み、それを再びほそ引きでしつかり結んだ。

『わたくしも兄をつれて直ぐあとからまゐります』と、清水は巡査に告げた。

『……』常はなほ默つてるまゝ巡査と共に先づそとへ出た。が、大道を手行李を持つて歩きながら考へて見ると、これまでに自分を孕ませて逃げたり、置き去りにしたりした男も憎いけれども、今回の清水やお高さんの父親が一層憎かつた。そしてお高さんを卷き添へにできるなら、京橋のことでも、大塚のことでも、すべて白狀してやつていいのであつた。

が、自分には今一つ重大な事件があるのであつた。そしてその爲めに、國の叔父からの手紙が本統なら、おたづね者も同樣になつてるのだ。どう責められても、すかされても、このことだけは一言でも口に出すまいと思ふと、生れた故鄕でも、まだ親しみのない東京でも、兩親や兄弟のない自分ばかりを目あてにして、ほんの僅かのことの爲めに、人をいぢめ拔かうとしてゐるやうに見えた。

まるで罪人のやうではないか、かちや〳〵と云ふ音のする物が光るその後ろをついて行つて――さうだ、この手賴りなさ、このこころ細さの爲めに、自分は世間の大道を自分の目の前に泣き伏してしまひたいのであつた。

――(大正八年四月)――

山の總兵衛

『ぢやア、おまはりさん、酒でも一本つけさせて呉んねえか』と、總兵衛は燒けになつて叫んで見たのである。『よう――かねは出す！』

『……………』靴のおとはしてゐたけれども、返事もなしにまた離れて行つてしまつた。

『畜生！』低い聲でまた呪ひの言葉を吐き出したが、一體、何の爲めに、渠は長い腰かけ一つしかない、こんなうす暗いところへ入れられてるのか自分ながらわけが分らなかつた。泥棒をしたり、人殺しをしたりしたものが這入ると云ふ牢と云ふ物へはまだ這入つたこともないが、多分こんなところではないかと思はれた。自分としては少しも牢へなど入れられるおぼえがない。一體、全體、どうしたと云ふのだらう？

　おほ酒を飲んで前後不覺になり、その不覺のあひだや覺めてからや、あたまをさんざんになぐられたことはある。去年など、自分がうちの胡瓜の賣り上げ代をおやぢから胡麻化した金で近所の居酒屋

を飲み歩いてるところを見つかつて、おやぢに自分のむき出しに着てゐるシャツのくび筋をつかまれ、そのままうちへ引きずられて來て、いやと云ふほど自分の五分刈りあたまをなぐられた。その上にも、そんな金がどこから出だと問ひつめられ、とうとう賣り上げ代の胡麻化しまでがばれてしまつた。そしてまた一つなぐられたあたまががんと鳴つた。

けれども、それはうちの近所などで飲むからいけなかつたのであつて――好きな酒を自分で自分が飲むのに法度などはない筈だ。その飲みしろだツても、年の割りにまだ厳丈で頑固なおやぢの知らないやうに、コツそり別くちの炭を燒いたり、大根を出したりして、それを賣るにもおやぢに見られないやうにさへしてゐればよかつた。そしてさう云ふ物を賣り渡すところも大抵は自分の肥え取りに行く近所でころ當りがきまつてゐて、自分を信用して呉れてるうちばかりだ。

『奥さまア!』自分は大きな聲でそんなうちの門前から怒鳴つて這入つて行くと、必らず、『まだ來たのかい』と、優しいやうすをして出て來るうちもあつて、『今度は何を持つて來たのか、え?』

『ならの炭を二俵だア、安く買つて呉んねえ。』

『それもまたお前の飲みしろになるのかい?』

『それにちげひねいんだ』と笑つて、『買つて呉んねい。』

『買つてもいいが、ね、お前は去年おなすの苗をどうしたのだ、え——持つて來ると云ふので待つてたのに、來ないからハガキを出しても矢ツ張り返事がなかつたが？』

『あれはおふくろに目ツかつて、な、飲みしろにならねいからやめただ。おふくろがおめへ知つてるかと云ふから、おらア知んねいと云つてやつただ。』

さう云ふ風に自分は正直にしてゐる。だから、よその人も皆自分を、

『お前は正直で面白い』と云つて呉れるではないか？四斗俵をかた手でさし上げることができるこの大の男だ。やかましいおやぢにこそあたまは上らないが、生まれてからまだ惡いことをしたおぼえはない。それを、癪にさはることには、いきなり引ツとらまへて、朝ツぱらからこんな牢へぶち込みやアがつた！

『よう、おまはりさん、酒でも飲まして呉んねいと云ふに！』また叫んで見たが、少しも手ごたへがなかつた。

渠はこころみに自分の身のまはりを見まはして見た。シャツの上へ腹がけをして、その上へ筒そでの袢纏を着て、兩の足にきツちり合つてゐる紺のもも引きも色がさめてゐる。わらぢは警察署のあがり口でぬいだが、きやはんは穿いたままほこりだらけだ。町の人に比べては如何にも薄ぎたないだら

うが、それは肥え取りに出たのであるから仕かたがない。少しも惡いことをしたことにはならぬ。

思ひ出すと、けさの肥え取りを一番あとでしたうちでは、生えてるふきを倒したと云つて叱られた。自分が何げなくたごをかついで、いつも通り、御門を這入つて、そこの勝手もとをまはつて行き、一番奥のすみのところで、掃除ぐちへ向つて自分のかついでる荷を勝手のいいやうに一とまはりさせて、自分のからだと共に兩方の荷をもあとさきにした。その時、自分の荷にはその前のうちで取つた肥えが兩方ともに半分ばかり這入つてゐたので、多少はおもかつた。そしてそのおもみで一方のたごの底がそこら一杯に生えてるふきをなで倒しにした。

然し、そんなことはいつも通りの仕事をしてゐる自分には氣が付かなかつた。が、荷をやツとそこへおろしたとたんに、

『こら！氣を付けろ！』便所のなかから、突然怒鳴つたものがある。

『……』こちらはびツくりして、からだがふら〳〵とした。そして俄かにむきになつてしまつた。にらむやうにその聲のした方を見あげると、うへの小窓から髪の長いひたへとその鼻がかみ半分ばかりと見えた。なま意氣に金ぶち目がねなんかを掛けてやがつても、めツきだらうと思ふと、そこの書生ツぽとしか見えなかつた。『なんだ！おらァ肥え取りに來たんだ。』

『いつも來てゐて氣が付かないか、頓馬！見ろ、ふきをめちや〳〵にしやアがつて！』

『………』こちらは自分の足もとを返り見ると、如何にもさうであつた。が、これしきの物はどぶ六一杯のねうちにもなりさうでなかつた。『けちくせいふきだア』と、こちらもなほ怒鳴り聲を返して、『こんなせめいところに生やして置くから、いけねいだア！』

『なんだと、土百姓め！こツちが樂しみに育てて置くふきだぞ。手めへなどの金では買へないんだ。』

『………』して見ると、それはここの主人かと見直したけれども、その場の勢ひがこちらの心をも和らげなかつた。

『手めへのやうな無意氣なものア以後斷わるから、直ぐとツとと歸れ！』

『なアに』と、こちらも膽ツたまを据ゑて力み返つて見せた。『おらア野口の旦那に賴まれて取つてゐるだア。』斯う地主の名を出したので、向ふもしようことなしに引ツ込んでしまつたのだと見て、自分は再び心を落ち付けてそこのを丁寧に取つてやつた。存外いい物を喰つてるかして、肥やしにもいいのを出してあるうちだ。

が、そのあひだに、そこの主人がそのことをでも密告したのであらうか？自分は一旦兎に角も、主人に斷わられたうちの物を强情張つて取つたわけだらう。それは如何にも惡かつた。が、考へて見ると、その肥えがまだ自分以外の百姓――たとへて見れば、うちの隣りの久べヤ――に約束をきめてし

まはれるだけのひまさへなかつた。また、その場に自分らの敵も同様のおわい屋が來て、それと主人と約束したやうすもなかつた。おわい屋と云ふやつは小百姓のくせに自分らをよく心配させやアがるやつで、自分らが少しいそがしくツて肥えを取りに來ないでゐると、いつのまにかそれを横取りしてしまつてあるのが癪にさはる！

けさは、幸ひにもそんな横取りをされたところもなく、自分の五荷、十箇のたごを滿たして、荷ぐるまのうへにかたづけ、先づ一服してから、くるまをそのままにして置いて、あかん坊の聲がするうちを探して歩いたのであつた。

『奥さまア、どこかで餓鬼を一匹呉んねいか、な』と、自分が云つて見たうちもあつた。それは自分が荷をかついでそのうちを出ようとする時に、奥さまとそこの勝手もとで顏を合はせたからであつた。そこにも猫か何ぞのやうにおぎやア／＼と云ふ聲がしてゐた。が、とてもそれを呉れさうではなかつた。だから、

『貰つてどうするのだ、え』と云はれたのに對して、

『なアに、ちよツくら考へがあるんだア』とばかり答へて別れてしまつた。

それからその近所をぶら付いたのだが、門がまへのうちなどは、矢張り、とても自分らの手にをへないと思つた。繩でゆはへた自分の袢纏の襟へ兩手を組み合はせて突ツ込んだまま、まだ少し寒いの

を自分で自分にまぎらしながら、きのふもこの近所の大通りを、成るべく貧乏くさい店やしもた屋のなかをのぞいて歩いた。すると、がみ〳〵子供を叱つてるところもあつたし、可哀さうなほど手や棒で以つてなぐり付けてるところもあつた。そんなのなら、らくに呉れて呉れるかも知れなかつたのだが、自分の欲しいのはそんなに大きくなつた子どもではない。

自分のうちなどでは欲しいと云つててもなか〳〵できなかつたものを——ゐるところには、土の中のみみずのやうに隨分うぢや〳〵してゐた。或さかな屋などには、小さな家のくせに、あんなに多くの子供をどこに寢かせるのだらうと思はれるほどであつた。米の高いのは百姓の儲けだが、それだけ町人は困つてる筈だらう。七つばかりの女の兒におんぶさせたあかん坊一匹ぐらゐは呉れてもよかりさうであつたので、自分は暫らくその店さきに立つて見てゐて、餘ツぽど賴んで見ようかとも考へた。が、そこの亭主が店の水溜めのわきで頻りに出双庖丁をといでゐるのがおそろしかつたので、何も云ひ出せなかつた。

ところが、ふと、また、自分はきのふ目ぼしを付けて置いた家の前へ來た。たたき大工の家らしいが入り口のがらす戶がきた一方だけ明いてて、そこから見える部屋におかみさんがゐて、丁度、自分の女房がしてゐたやうに胸をはだけて、子供に乳を飮ませてゐた。自分は先づ可愛い女房の肌のにほひをあり〳〵と思ひ起した。腹のすぢが俄かに突ツ張つたかと思ふと、自分のあたままでかぽツとの

ぼせてゐた。今から考へて見ると、きツと腰を少し曲げてただらう。

『おかみさん』と、今度は思ひ切つて呼びかけて立ちどまつた。實は、子供その物を欲しかつたのではないのだが、死んだ兒の爲めに自分の女房が歎き悲しんでるらうへに、乳を飲むものがないのでその乳を如何にも痛さうに脹らしてゐるのが、思ひ出しても可哀さうで溜らなかつた。『そのあかん坊を呉んねいか？』

『………』向ふはびツくりしたやうにこちらを見つめたが、直ぐまたもとの顔になつてにツこりした。『これはうちの兒ですからあげられません。』

『さらアさうだんべいが――』こちらも斯う云つて、笑ひにまぎらせてしまはうとしたが、さうはできなかつた。おかみさんの胸や自分の乳までもともどもに痛み出したかのやうにおぼえて、一刻も早く自分の女房の苦しみを助けてやりたかつた。自分はそのままに足のうらを釘づけにされたやうになつて、そこを動く氣もなくなつた。自分の女房に對すると同じあまへ氣味でなほかの女の方を見ながら、

『それを呉れるといいんだが、なア――』

『これはあげられません、ね。』

『………』自分は困つてしまつて、もう、どうしたらいいのだか分らなかつた。きのふのやうにまた手ぶらで歸つて行つて、あの歎きや痛がりを見たくはなかつた。

がらす戸の開いてた家は何でも角から一二軒目であつたが、この時、横合ひからひとりのかみさんが出て來たかと見ると、

『この人ですよ』と云つてこちらをゆび指した。

『………』こちらは思はず一目散に逃げかけた。何も子供を昊れいと云つたのを惡いと思つたのではないが、横合ひから出て來たかみさんの顏が何とも云へずおそろしかつたうへに、巡査をつれて來たのであつた。何か事ができたに相違ないが、そのかかり合ひなどになるのはいやだと云ふ考へが即座に浮んだからである。けれども、逃げることはできなかつた。

『こら、待て』と云ふ聲が自分の耳に這入つたのはおぼえてゐるが、そのあとを自分はどうしたのか分らない。ただわけもなく横ツつらを擲ぐられたのが、丁度、うちのおやぢに擲ぐられたほど痛かつた。そしてそれで氣が付いて見ると、自分は巡査の前にお辭儀をしてもみ手をしながらぶるぶるからだを振るはせてゐた。

『勘辨して昊んねい』逃げようとしたのをあやまつたのだが、巡査は小癪にもなかなか承知しなかつた。

『警察まで來い！』

『警察！』こちらは思はずびツくりした。そして心でおこらないではゐられなかつた。かた手で痛い

方の頬をなでながら、こんな目に合はせたうへにもかと云はないばかり、向ふの顏を見つめて自分の口をとんがらせた。『おらア——何も——かかり合ひなんか——ねいんだが——』

『圖々しい人だ、わ、よ、この人は！』斯う、巡査をつれて來たかみさんが氣違ひのやうになつて云つたツけ。

『………』何をぬかすとどなつてやりたかつた。けれども、見ツともないことには、その近處のをんな子供が銀ばへのやうに一杯たかつて來た。その中を巡査は有無を云はせずぐん〳〵引ツ張つて行つた。見ツともないばかりでなく、まことに困ることには、折り戸から乞食橋へ來る通りなどは、自分の肥え取りに行きつけの家が多いので、顏を見られたくなかつた。

が、山の手電車のガードまでくぐつて、よんどころなく、長い口ひげをはやした人もゐる警察まで引ツ張られて來ると、直ぐここへぶち込まれて、おツちよこちよいのやうな別な巡査からいきなりまた踏んだり蹴つたりだ。そして、

『貴さまか、今逃げようとしたのは』と云はれた。

『………』こちらは面くらつてしまつて、返事もできなかつた。

『何の爲めに逃げようとしたのか、貴さまにやア分つてゐるだらう？』

『お、おらア——か、かかり合ひに——な、なりたく——なかつただ。』

『とぼけるな!』また一つこちらの横ツつらを喰らはせて、それは行つてしまつた。
『……』こちらは何のことだか、あんまり情けなかつた。
入れ替つて、今度は長い口ひげの巡査が這入つて來て、
『貴さまも、さうぶん擲ぐられては溜るまい、な。尋常に白狀した方がよからうよ。』
『……』こちらは、今度のを大分えらい位に在るから親切でおだやかに出たのだらうと思つた。
『おらア何を白狀するんだんべいか?』
『まア、段々にきき糺すが、な、尋常に答へないとまたやられるぞ。』斯う云つて、その巡査は持つて來たちツぽけな本をひらいた。そのくせ、何も讀めない人であつたかして、こちらの名を云つてやつても直ぐには分らなかつた。
『貴さまの名は何と云ふ』と聽くから、こちらはありのままに、
『山のそうべヤと皆が云ふよ』と答へた。
『ヤマノが貴さまの苗字だ、な。』
『うんにや、山に住まつてるからさう云ふんだんべい。』
『さうか?そんなら、本統の苗字は?』

『そらア、別に手塚そうべヤと云ふだ。』
『そのそうべヤとはどう書くのだ？』
『……』實に分らないやつぢやアないか？『おらの名めへだよ。』
『名まへだらうが、そうべヤとは？』
『なアに、そうべヤはそうべヤだんべい。』
『多分總兵衛だらう、な。』
『……』やツと分つたらしいので、こちらも『うん、そうべいとも云ふだア』と云つてやつた。
それから、雜司ケ谷の番地と親の名まへをも。すると、向ふはまじめ腐つて聽き初めた、
『で、貴さまは一つ惡いことをしたおぼえがあらう。それを云つて見ろ』と。
『さア、惡いことと云はれちやア、それも一つや二つぢやアねいだ。』
『そんなら、それを白狀して見ろ。』
『さうだ、な――』こちらは自分でちよツと思ひ出して見ると、いづれも皆誰れでもする當り前のことのやうだが、斯う云ふのを警察の方では小やかましく惡いことにするのか知らんと考へながら、『さうだ、な、――まア――でい一におやぢやお袋の目を盜んで、うちの山の炭や畑の物を持ち出して、たび〳〵おらの飲みしろにしただア。』

『そんなちわのことを聽いとるのぢやない。』

『はて、な。』こちらはこの時ちよツと不思議であつた。『そでねいとすりやア、けさのことだんべいか？おらアいつも行くうちの主人にさからつて、な、そこの便所の肥えを取つただ。』

『官吏を馬鹿にするか？』

『………』あまりに突然のおほ聲であつたのでまたびツくりした。どう致しましてと云ふ風をして、おそるおそる巡査の顏を見ると、前とはがらりと違つて、こわい顏つきであつた。

『あまく取り扱つてやるのをいい氣になつちやア承知しないぞ。もツと正直に云へ、重大なことを？』

『ちうでいツて？』

『もツとほんたうのことだ！』

『ほんたうのことツて――ぢやア、あのことけい？』おかみの人々はあんなことまで見とほしてゐるのだらうか？昔から千里眼と云ふものがあるさうだが、渠等は人の腹の中までも見ぬくことができるのか知らんと閉口しながら、『實は、あのかみさんに濟まねいことだツたが、な、おらアうちのかかアに考へるやうなことをあのかみさんにもちよツくら考へただが、ほんの、ただちよツくらだア。』

『あのかみさんとは誰れか？』

『大工のかみさんだア。』

『この野郎!』この時、またぽかりと横ツつらを喰らはせられたのである。
『……』では、何を糺明されてゐるのかまた分らなくなつた。
『ほんたうのことを云へ――貴さまは子供をさらつて行つただらう?』
『……』へい、そんなことまで人の心を感づいてたのか?『そらア、攫つてもいいものなら、攫らつてもいいとまで思つてるだ。おらのかかアは今乳を脹らして、な、その死に生きの苦しみをおらア見てゐられねいだ。それで、おらアきのふも誰れか子を呉れるものはねいかと歩きまはつただが、な、けさもおらアそれで隨分苦勞しただ。』
『またとぼけやがるか?――貴さまはきのふ〇〇湯の前をとほつただらう?』
『へい、とほりましただ。』
『その時、その隣りの床屋のうちをのぞいてをつただらう?』
『へい、のぞきました。』
『さうしてそこの三つになる女の兒をどこへつれて行つた?』
『おらアそんなことア知らん。』
『知らんとは云はせないぞ』と、また向ふはこちらをぶちかねない權幕であつた。『その證據には、今、

貴さまが床屋のかみさんを見ると、直ぐ逃げ出さうとしたぢやないか？』
『そらア全く違つてるだア。』こちらはあんまりこの巡査の見當ちがひなのを人のいはゆる無學な爲めだらうと馬鹿々々しくなつて、これまでおぢおそれてゐた自分の氣持ちが自分の心ではあざ笑ひ出してゐた。『おらアおまはりさんが來たのを逃げただが、女の方は床屋のかみさんだツたかどうだか、そんなことは知らん。』
『そんなら、なぜ警察官をおそろしがつた？貴さまの胸に思ひ當つたことがあつたからぢやないか？』
『おらアただかかり合ひになりたくなかつただ。』
『惡いことをしてかかり合ひにならんことがあるか？』
『おらアほかの惡いことなら、いくらでも白狀するだ。子さらひなんかしたおぼえは全くねいだ。』
『しぶとい野郎だ！』またこちらを撲ぐつたあとで、巡査は出て行つてしまつた。

『………』こちらはよく考へて見ると、自分が横丁の大工のかみさんに物を云つてた時、本通りの方から出て來たのは○○湯の隣りのかみさんだ。それがその子供を子さらひにさらはれたに相違ない。三つだと云へば、自分もきのふその店さきで遊んでたところを見たあの兒だらうが、今どきでもひど

いことをするやつがあつたものだ。
が、それもよんどころなからうか、自分がうちのおやぢやお袋の目をかすめるのと同じやうにしていこの世間には、行き届いた警察の手さへのがれて利口にも泥棒をするやつもまだ〲多くあるのだから？然し、その子さらひをこちらの仕わざだなどとは――馬鹿〲しい！――以つての外だ。
『今に白狀させてやるから』と巡査は云つたッけが――自分のしないことがいつまでだッて白狀できるものか？多分これには何かのこんたんがあらうと考へられた――巡査と床屋のかみさんとのあひだに、さうでなくば、あのふきの主人とのあひだにだ。
ひよッとすると、床屋のかみさんは初めの巡査とくッ付き合つてでもゐるので、自分の兒が自分の無用心から人にさらはれたのを、その亭主に申しわけのない爲め、巡査に內々で賴んでこちらをそのさらひ手にきめて、自分の申しわけをしようとしてゐるのかも知れない。それにしては、然し、あんまりこちらにおぼえの無いことではないか？
『あのかみさんは、さうだ、わざとあんな氣違ひじみた顏つきをして出て來やアがつて――畜生！』
この人ですとは、思へば、思へば、如何にもたくみもたくんだり、ぬす人たけだけしいをんなだ。あんまり眞がほの、本氣らしかつたのでこちらも何ごとが起つたのかと見て取つて、そんなかかり合ひになるのがおそろしかつた。ところが、そのおそろしさの爲めに逃げようとしたのを、こちらにも十

分おぼえがあるからだらうとは――ふん、物を知らぬにもほどがあらうではないか？
さうかと云つて、また、こちらに確かにおぼえのあることでも、自分の飲みしろをおやぢやお袋からくすね出すことなどは、『ほんの、うちわごと』だと云はれた。して見ると、これは矢ツ張り御法度ではなく、これからでも自分がいくらやつてもかまはないことのやうだ。次ぎに、また、人のかみさんに就いてちよツくらひよんなことを思ひ付くのも、ただ『この野郎』ですんでしまつた。そして今一つはふきの件だが、どうも、自分にはこれが一番こころ當りのやうに思はれる。

最後の巡査に向つて、自分は、
『おらア馬鹿になんかしてゐないだ』と云つてやりたかつたのだ。肥えを取ると云ふことは自分ら百姓の大事なことだ。これがなければ百姓の仕事はできぬ。けれども、ただ主人の言葉にさからつて取つたのが悪いと云へば惡かつたのだらう。だから、それを悪いなら悪いと、はツきり云つて呉れたらいいではないか？肥やしとしてはいいやつだが、なアに、一荷ぐらゐは返してやつてもいい。然し、ちよツと持てよ、あすこで取つたのはきツちり一荷ぶんには滿たなかつたのだ。そのお隣りやそのまた隣りで取つたぶんが段々にかさなつて行つて、自分がふきを倒した時には、自分のかついでる兩方のたごでぽちやんぽちやん云ひながらも多少のおもみがあつた。さうだ、それだけはさし引いて返し

てやる。が、それもいけないなら、思ひ切つて一荷すツかりを返したツて知れたものだ。兎に角、さうして貰ひたいなら、はツきりとさう云つて呉れさへすりやアわけはないのに——『とぼけてゐる』のは、こちらよりも却つて向ふだ。さうだ、そこにてツきりぢうでいのこんたんがあるのだらう。
考へて見れば、呆れて物が云へない。あすこの主人は——今、思ひ出して見たが——確か帝國軍人だ。服を着て出て行くところをいつか見たことがあつたツけ。サアベルをがちや／＼云はせることでは、警察と親類すぢである。この親類すぢが申し合はせてぐるになるのは、あながち、六ケしいことぢやアない。斯う考へて來れば、——こちらには癪にさはつて溜らないことになるが——こちらがこゝへつれられたわけは分らないでもない。
あのけち臭いふき——それをも大切な物だと云つたツけ——をこちらが肥えたごで撫で倒したのを怒つて、帝國軍人は直ぐ近處の巡査へ訴へた。そして巡査はまたその訴へを懇義づくで取り上げて、何かの理窟をつけねばならぬ爲め、あのかみさんをつれて來てこちらを子さらひだと云はせた。かみさんが子をさらはれたのはほんたうかも知れないが、そのお鉢をこちらへ持つて來て押しつけようなんどとは、なんぼこちらに對するかたき打ちの御膳立てであつても、迷惑千萬でもあり、また、そのこんたんとしてもあまりに見えすいてる。
『もツとぢうでいなことをしたらう——今に白状させてやる』ツて、

『畜生！おらア腹が立つて、腹が立つて！』さうだ、渠は自分が正直ものとしてとほり者になつてるのを思へば思ふほど、ます／＼その場にゐたたまらなくなつて、うす暗い部屋の板のまをわざと足ぶみして歩きながら、からだを投げ倒したくなつた。そして襟から胸へ突ツ込んでた自分の兩手を兩方へふり拂つて、直ぐ握りこぶしを拵らへると、それで以つて自分の胸やあたまをなぐつて見た。これまでは隨分おそれ敬まつてた巡査のことだが、今と云ふ今、あまりに子どもらしいやつらばかりなのに呆れたので、自分らの近處となりの田吾作連中に對するのと大して變りのないこころ持ちになつてしまつた。そして氣やすい燒けツ腹が酒を欲しくなつて、初めて『ぢやア、おまはりさん、一ぺいあついのでもつけて呉んねい』と云つた。そしてそのかはり、もとのなが腰かけの眞ン中に腰をおろし、暫らくおとなしくして、そとの樣子に耳を澄ましてうかがつてゐたが、誰れひとり自分の望みを叶へに來て呉れるものはなかつた。

　然し、のどの渴きをおぼえながら、なほつづけてじツとしてゐると、不思議にも、長いあひだ全く忘れてゐたことが自分の目の前に浮んだ。もう、十年も昔のことで、――自分はまだ二十三歳の時、矢ツ張り、けふのと同じやうな無實の罪の爲め、若いもの同志の寄り合ひ所で皆から糺明されて、ひどい目に會つた。權と云ふ仲間の物を自分が盗みもしないのに盗んだと云はれてだ。その爲めに自分は撃劍のしないで以つてなぐり殺されかけてるところを、やツと、おやぢが驅け付けて來たのに助け

られた。その寄り合ひ所の前には大きな栗の木が一本立つてゐたツけが、それへゆはへ付けられてたのをほどいて呉れたのもおやぢであつた。

うちへつれて來られてから、

『馬鹿』と、おやぢはこちらを睨み付けた。今それを思ひ出してもぞツとするほどおそろしい目つきであつた。おやぢの目のふちはあの時からして、もう、おほ酒の爲めにただれてゐたのだが――こちらに向つては酒をやめろと云ふ權幕で、『それと云ふのも、手めへが若いくせに飲み助だからだんべえ。これから、もう、そんな付きえひはすな！』

『……』自分はそれに懲りごりして皆とのつき合ひをよしたが、酒はその時からおやぢ同樣好きであつたのでやめなかつた。お袋もなか〳〵きつい人だから、それにも隱して飲んでゐた。そしてそれが目つけられてから、このかたと云ふもの、ずツと自分は小使ひと云ふものを親から貰つたことがない。で、よんどころなく、自分の飲みしろを出す爲めに、因業な親の目をかすめることをおぼえて來た。女房を貰つてからも、それは同じことであつた。

そのまた女房のことでもなか〳〵手數がかかつたのである。おやぢは早く貰へと云ふし、自分も亦その氣になつてゐたけれども、とても見込みはなかつた。

『おや子そろつてあんな飲み助のところなんかへ誰れが大切な娘を呉れるものか』ツて、そればかり

をお袋は氣にやんでゐた。
『酒だけはやめて呉んたよ、拜むから、な』と、かの女はいつも云ひ〱して、こちらが二十九歳になる時までに及んだ。そしてやッと嫁入りして來たのは今の女房だが、近處の評判では少し足りない女だと云ふことであつた。自分はどうせ無學なものだから、自分ではその評判がほんたうであるかどうか今でも分らないのだが——兎に角、おやぢやお袋はこちらよりもかの女をおほびらに可愛がつた。こちらも亦こツそりとはさうしてやつた。かの女はさうして二重の得をしながらも、おやどもの待ちまうけてゐる子と云ふ物を產まなかつた。そして、
『わしが惡いなら、おふくろにもすまねいから身を引くべいか——』などと云つた。
『うんにや、しんぺいすな、しんぺいすな、子どもなら犬畜生にでも產ませろよ。おらア好きな酒はやめられねいだ。』このことだけは女房にもよく云ひふくめて、夜のことと共におやどもには成るべく內密にさせてあつた。かの女もそれはよく承知して、こちらの醉つてるからだをいつもこつそりと介抱して來た。
『物の苗だツて、肥やしが利き過ぎちやア育たねいだ。手めへのやうに飲み過ぎちやア、とても種の育ちやうがねい』と云つて、おやぢもしまひには諦らめてるやうすであつた。
ところが、珍らしくもひよツこりかの女に子どもができたのは、つい、こなひだのことだ。而も男

の子だと云ふので、お袋などはほく／＼喜んだ。

けれども、それは皆のぬか喜びであつた。生まれた時から何となく勢ひがなかつた兒は、たツた一ヶ月にもならぬうちに風を引いて死んでしまつた。そしてそのをとこ親なる總兵衞はその兒の死に目にも會へなかつた。

渠は畑からあがると、必らずと自分の家をこそ／＼出て、どこかの居酒屋へ行く。そして九時を過ぎなければ歸つて來ない。と云ふのは、その頃になれば、おやぢもお袋も寢てゐるのだ。ほかの人から見れば、休むのが少し早いやうだが、自分には、それは自分の家が大きな樫の木や栗の木に取り圍まれてゐる爲めに、日の暮れるのがほかの家よりも早いからであらうと、若い時から思ひ込んで來た。

その日も、もう、おやどもは寢てゐるだらうから、歸つて茶づけでも喰はうと、いつも通りいいころ持ちになつてやつて來た。すると、玄關もまだ開いてゐて、家の中は案外にも明るかつた。不思議に思つて、直ぐ先づおほ土間へ這入つて行くと、電氣の光りに隣り近處の人々までも來てゐるのが見えた。

『どこへうせやがつてただ、この野郎！』おやぢは、いきなり、板のまのはづれまで飛び出して來て、こちらの横ツつらをなぐつた。自分の顏はおやぢにはまるで張り子のやうにでも見えてるのだらう。

『また飮み歩いてやがつて！』

『………』さうだ、自分の痛いのさへ我慢すれば、たとへ見付けられても、相變らずそれで濟むのを知つてゐた。おやぢだツて、飮んでるのだから。然し、その夜はそれだけではすまなかつた。
『畜生！』おやぢはその場へ突ツ立つたまま、こちらをうるんだ目でにらみ付けて、『手めへの餓鬼が死んだのも知んねいで！』
『………』こちらはさう云はれて、なほ、初めはただ自分の顏の痛みをおぼえただけであつて、左ほど違つた心にはならなかつた。物の死と云ふことには、たツた一度、犬ツころの死んだのを見た時のおぼえしか自分にはなかつたからである。
で、自分としては、それから、いつも通り、ゆツくりとまだ穿いてる脚絆を取り、わらぢをぬぎ、それから別な草履を手に持つてうらの井戸端へ行つた。そして足を洗ひながら、つめたい水をがぶがぶとつるべ移しに飮んでから、臺どころへ這入つて來た。そしてそこからあがつて奧の方へ行つて見ると、お粂は變てこな目つきでちよツとこちらを見上げたが、直ぐまた死んだと云ふ赤ン坊に抱き付いて、
『わツ』と泣き出した。
『………』こちらは敷居の上に突ツ立つてゐながら、初ゆてかの女が人の云ふ通り少しうす馬鹿ではないかと云ふことを見たやうな氣がした。かの女のまる髷のうへの方に默つてる赤ン坊の青白い顏を

見ながら、子どもぢやアあんめいし、泣いたツてどうするだ？』
『馬鹿野郎、手めへの子が死んだだ！』おやぢはまたこわい顔をして下からにらんだ。が、そのうるんでる目はこれも泣いてるのだと見えた。おやぢでさへさうかと思ふと、自分も俄かに胸がつまつて來た。そしておぎやア、おぎやアと云ふ聲がしないのを耳寂しく可哀さうになつた。
『手めへ——まア、——早くこの——顔でも——見てやれ』と、おやぢのそばに坐わつてるお袋が涙を一杯出してこちらを見て、言葉を切れぎれにふるはせたので、こちらもとう〳〵自分の立つてる足までをぐら付かせて、そこへべツたり坐わつてしまつた。いつのまにか、自分の頰にもあつい水が垂れてゐた。しなへで投ぐられた以來、自分が涙と云ふ物を手の甲で拂つたのは、これが初めてだ。
『もう、醫者が來さうなものだが——來たツて、どうせ駄目だんべい』と、おやぢはこの時最も悲しさうな聲で云つた。
『酒喰れひの子にやアどうせろくなことがねいだ』と、お袋もまたその聲をふるはせてゐた。『どうせ病身か片わで生きてゐるくれゐなら、死んだ方がましだんべいか？』
『………』そんなことをほざいたツて、こちらは、もう、この時酒の醉ひが俄かにさめてゐたのだ。
お粂はそれを聽いた爲めであらうが、またひイ〳〵と泣き出した。そして今度はその爲めに、こちらもかの女を一層可哀さうで溜らなくなつた——死んだ兒よりもだ——さうだ、自分に於いては、し

んからふるひ付きたい程の用があるのはかの女にだけであつたから。

『泣くなよ、泣くな。』その夜、お通夜の人々が歸つたり横になつたりしたさまを見きはめて、渠は——それを私かに待ち兼てたので——やツと自分の女房のはたへ近づくことができた。そして、そんな時にはいつもぶる〳〵するにきまつてるその手をかの女の脊なかにかけて、かの女がその青白い仰向けがほの兒をいつまでもかい抱いてゐるのを痛はつてやつた。泣き死にでもしたら困る爲め、あたりの人々の寢がほをかすめるやうにして、『餓鬼はまた產めばいいだ。さう泣いてて、手めへのからだにやアかけげひがねいから、な。』

『……』お粂は顏を上げてこちらを見たが、もはやその目を赤く泣き脹らしてゐた。こちらには、人間と云ふ物は、こちらがたツた二三時間を飲み歩いてゐるあひだに、さう死んだり赤目になつたりするものかと不思議でもあり、おそろしいやうでもあつた。が、圓く肥えたかの女の顏にちよツとにツこりしたゑくぼが出たかと思ふと、少し恥かしいやうすをして、『產めるだか——また、さうくさいほど飲んでゐて？』

『酒はやめる、やめる！』ほんとに、渠は自分の心をさうきめてもいいと思つた。そしてその代りに親どもの命令で自分の女房の乳を飲ませられることになつた。

それは死んだ兒の葬式がその明くる日の夕がたすんだ頃のことであつた。お粂は、
『乳が張つていていだが――』と云ひ出した。
『手めへは餘ツぽどしぶといやつだア』と、おやぢはまだ赤ん坊を殺したのがこちらの女房の仕わざででもあるかのやうに憎んでるやうすであつた。『こんな時にやア乳が出なくなるものだんべいが、な。』
『矢ツ張り、呑氣だんべいか』と、お袋も云ひ添へた。
『……』渠がお粂を見ると、然し、のんきどころぢやアないやうであつた。かの女の目はますます泣き腫れて來て、本人でない自分でさへ――きのふ、涙をこぼした時の心持ちで以つて思ひやつて見ると――今見るのもいた〳〵しかつた。そのうへにかの女はふツくらと圓ツこく張つた乳ぶさのかたかたを抑さへて、
『あゝ、いて！あゝ、いて！』
『總ベヤ、手めへ少し吸つてやれ。』お袋はさう云つた。
『それがよかんべい』と、おやぢも調子を合はせた。おやぢは何でもお袋の云ふことにはさからはないのだ――それもおのれが酒を飲むのを邪魔されない爲めにだが。『吸ふものがゐなくなつたからだんべい。』
『……』少しきまりが惡かつたけれども、渠はよんどころなく兩手を疊に突いて自分で自分の女房

の痛む方の乳ぶさへ口を持つて行つた。ぷんとおぼえのあるにほひがしたので、親の見てゐる前で――そして而もまだ日は暮れてもゐなかつたので――一しほきまり惡さを增した。が、思ひ切つて目をつぶつたまま、その乳ぶさを銜はへて、自分の子供がしてゐたやうに吸つて見た。

『うめいだ、うめいだ』と、お袋がきのふから初めての笑ひ聲であつた。

『………』こちらは珍らしく讃められた氣がしてぐん／＼吸つたのだが、張つてる割りにはさう出なかつた。そして自分の口へ溜つたなまあツたかい味に先づ以つて胸が惡くなつたので、喉へ飲み下だすには堪へられなかつた。それをくくんだまま、直ぐ緣がはへ飛び出して、まへ庭の土のうへへ吐き出した。そして誰れにともなく、『薄あまツたるいだ』と云ひながら、自分の口を水でゆすぎに行くふりをして、臺どころへ行つた。そして戸棚にしまつてあるおやぢの一升德利からひや酒を少し口うつしにがぶ付いて、やツと自分の口直しをした。

『大きなくせに、あいつは案外意久地がねいだ』とお袋の云つてる言葉が聽えた。

『手めへのかかアの乳ぢやアねいか、何がきたねいツて云ふだア？』おやぢも斯うひとり言のやうに云つてゐた。

『………』こちらはきたないもきたなくないも無かつた。なまあツたかさを酒のひやで直したあとが、またぎゆツと熱いのを一杯飲みたくなつたので、そのまま默つて家をぬけ出してしまつた。

そとから歸つて來た時には、床の中をお粂ひとりでもだえ苦しんでゐた。また、あんまり可哀さうになつたので、

『いていから吸つて呉んなよ』と云ふにまかせて、誰れも見てゐないのを幸ひ、今度は餘ほど丁寧にしてやつた。けれども、一度が二度になり、三度が四度になつて、夜ツぴてうるさくなつた。ぐツすり一と寢入りしたいのをかの女はゆり起して眠らせなかつた。

『これぢやア溜りツこがねいだ。おらの代りに、おらア餓鬼を一匹貰つて來てやるべい』と、つい、約束してしまつた。そして手ぶらで出るのも詰らないので、きのふも肥え取りがてら朝早く、ねむりの足りないのを辛抱しながら出て、子供の餘つてゐさうなところを探して歩いたのだ。詳しくわけを云ふなら、それだけのことで――。

『おまはりさん、おらアきのふも餓鬼を探して歩いたツて、子されひをしたおぼやアねいだ！』お粂が死んだ兒の代りを欲しいと泣きわめいてゐるのだよ。自分も亦代りを見付けてやらないでは、夜ツぴてぐツすり眠られないのだ。かの女は泣き付くし、自分は二晩も眠れないし、これでは、おめへ、人間がゐても立つてもゐられないではないか？早く牢を出して呉れ。斯うしてゐるうちにも、お粂の乳がもツと脹れ上つたかも知れない。早く乳飲み兒でも貰つて、溜つた乳を飲みほさないでは、お粂

がにうがんとか云ふ病氣に取りつかれて死んでしまふと、ゆふべも隣りのお末婆アさんが云つてたのだ、などと、こんなことをも大きな聲で泣き訴へて見た。

　あんまり人を馬鹿にして、返事一つしないのだ。あまりの手頼りなさに涙はます〳〵焼けツ腹になつて、再び部屋中をあばれて見た。そのあとのこと、もう、二度とおとなしくして見せるのも無駄だと思つた。

　入り口のひらき戸に行つて、うちがはからそれを一心に固めた握りこぶしで以つてどん〳〵、どんと叩いた。それから、自分の鼻から落ちかけた鼻みづをちよツとこぶしの手くびのところで横なでしてから、またどんと一つ力づよく戸を叩いた。そして自分の泣き聲をふり立てて、

『よう、おまはりさん、早く歸して呉んなよ。そでなけりやア、あついのを一杯つけて呉んねえ！』

――（大正八年五月）――

催眠術師

一

『初、こんどアまいねい——とても見込みアない。この家も越えねばまいねいでば。』賢三は自分の顏の色も少し青くなつてるかと思へた。

いつも治療をやりに行くうちから全く失望して歸つて來るが早いか茶の間へどツかりあぐらをかいたが、自分の妻が人仕事をしてゐるのに向つては、この宣告のやうな物がかの女へ氣の毒にも感じられた。

『また引ツ越して今度は何をするの？』かの女もこちらの樣子を見て取つたか、縫ひ物の手をやすめて心配さうにかしこまつた。その圓い顏の愛嬌にも陰鬱のかげをさしてゐるのは近ごろ珍らしくなくなつてゐたのだけれども——。

『矢張り、催眠術の先生か？』渠が斯う答へた時には、自分で自分をあざけるやうになつてゐた。が、脊に腹は替へられぬところから、二日のあひだも方々を探しまわつて、やツと安直な住まひを發見し

て、ここに相變らずの『心理研究所』と云ふ看板を掛けた。

　神田の方から來ると、その電車を曙町で下り、右の横丁へ這入つて、少し行つたところだ。材木屋と云つても殆ど名ばかりで、貸間をして喰つてるうちの一と間を借りたのだ。が、便利にも家の横手に研究所の効能を書き並べた大きな看板がかかげられて、その下をくぐつて這入つて行くと、家の向きとは横ざまに格子戸つきの狹い土間がある。そこをあがつて、左りの六疊を渠は占領した。右の六疊にも、奥の三疊にも、また二階の六疊にも借り手は這入つてゐたが、この商賣に對する客を受けるには、こちらの占領してゐる部屋が丁度都合がよかつた。が、不幸にも、ここでも、ひやかしの客はあつても、本氣で治療を賴んで來るものが殆どなかつた。

　妻のお初が割り合に裁縫の達者な爲め、『仕立て物仕り候』を以つて少しはかせいで呉れるので、どうやら斯うやらその日をしのげて行けたのだが、それもやがてさうは行けなくなつた。と云ふには、自分の妻の氣ぶんが變化して來たのは妊娠の爲めだと云ふことが醫者の診斷によつて分つた。自分はそれを喜ぶより寧ろ呪ひたいほどに貧乏であつた。

『わも物好きであつた、なア』と、渠は自分で津輕言葉まる出しの歎息を發したこともある。考へて見ると、まるで貧乏をしに東京へ出て來たのも同樣だ。國で歌を詠んだり、近ごろ流行の散文詩を作つたりして、小い雜誌など出した時は、まだ獨りであつたとは云ひながら、のんきであつた。が、職

業としての小學校教員には行く末の見込みがなかつた。如何に多く教育書を研究して行つても、教員の俸給には分り切つた制限があつた。やがて三十歳に達しようとするものが、たとへ校長になれたとしても、狭い偏僻な地方のあちらこちらを轉任してまわつてゐるのでは、いつまで行つても、わが國の中央へのり出せる機會のないにきまつてた。さうかと云つて、好きでやつてる歌や詩にも自分の中央文壇に對する確信などはなかつた。

で、あれかこれかといろんな書物を自分の手にをへる範圍で讀んだうちに、法律や經濟や政治の書もあつた。が、或時、地方新聞の廣告を見て、ふと讀みたくなつた催眠術に關する著述を一つ註文して見た。それはほんの小さい安い本で、竹内楠三と云ふ人の舊著であつたけれども、自分はこれを讀んで催眠の暗示と云ふことに餘ほど興味をおぼへた。そしてこの新らしく得た知識を以つて、早速、當時貰ひ立ての妻に應用して見た。そしてかの女がうまく假りの眠りに這入つたのを見きはめると、自分は思はず一層の興味に乘つて、

『お前はげやろになつた』と云ふ證言的暗示を與へた。

『……』かの女は新潟のものだけれども、既にこのげやろなる言葉を知つてゐたので、坐わつてゐたのが兩手を疊に突くと直ぐ、その兩手の肱をそとへ張つて、前の方へ這ひ初めた。そのざまがさながら引きがへるで、突き出した口でくわツ、くわツと鳴き初めさうだ。餘りに滑稽であつたと同時

に、これが自分の女房であるかと思ふと、ちよツと薄氣味が惡かつた。自分はあたまで知りつゝも新たにこの意外なことを實驗したので、また思はず身をよこに引くと、かの女はそのあとを這つて行つて、壁のところで方向を轉じ、部屋中を這つてまわつた。けれども、自分はいい加減のところで眠りを解いてやつた。そして自分は、

『こりや實に驚くべきことだべ』とかの女にも語つて、そこに初めて自分の天才を發見したと思つた。それから、普通心理學や催眠心理の書物を隨分研究して、自分自身で一種の心理治療法を思ひ付いたのである。そしてこれを以つて妻と共に東京へ出て來た。

初めのおほ屋さんが非常に信じて吳れて、自分はその人によつてかのいはゆる『御殿』へ紹介された。電氣の器具を製造しておほ成り金になつた屋敷のことだが、職工あがりの主人は無學で朴訥なだけに前後九ケ月間もこちらへそのひどい神經衰弱のからだをまかせてゐた。こちらもそれから殆ど月給のやうにして生活費を得てゐた。が、どうもその結果が思はしくなかつたので、向ふも失望し初めるし、こちらも本氣の毒になつて、自分から責任上、手を引くことにした。

自分としては、初めて職業的に責任ある患者を引き受けて置きながら、九ケ月間も經て而も不結果に終はつたのである。それが爲めにこの術の効能をばかりでなく、自分自身をも疑ふやうになつた。卑怯な自分本來の性質としては、とても斯う大膽にやれる筈がない。ましていろんな競爭者も多いこ

の大都會の眞ン中に於いては！さうだ、人をこの術で治療するどころか、『わも、、、、しよしき自分で催眠術にかかつてゐただでば。』斯う、自分の妻だけにはこツそり白狀もして見た。さうでなければ、實際、こんな不結果のものに熱中して、自分から求めて貧乏に飛び込む筈はなかつた。けれども、今となつては仕かたがない。妻は妊娠の爲めに十分生活上の手助けもできないし――自分からの生活費をかつ〳〵にでも出す爲めには、どうしても、この半ば習慣ともなつてゐる、そして半ばは詐僞とも思へることを看板にして置かねばならなかつた。さうして置けば、たまには僅かでもその料金は取れるのだが、もう、自信も何もなくなつてるのであるから、術に於いてはますますいい結果を得られなかつた。ただそのうちに何か別にうまい金儲けをとばかりあせつた。

二

渠は先づ秘密出版と云ふことを考へ出したのである。これなら、たとへ直接に世間へ向つては卑怯な自分でも、別に公けに顏を出さないですむから、隨分思ひ切つたことをやれないでもなかつた。けれども、秘密物を秘密に多くの人々に買はせるにはどうした方法を以つてすればいいか？　そこに考へが行き詰つてしまつた。で、せめては新聞へ廣告ができる程度の物にして、成るべく人の心をそそりさうなのを工風した。歌や詩を作る時のやうな思ひを凝らして、先づその書からうとする書物の

表題をきめた。

『夜の明くる迄』、『愛の盃』、並びに『秘密の樂しみ』と云ふのがそれであつた。そしてその中へは夫婦間の情愛や用語や衛生的注意などを成るべく奇麗な言葉を以つて書き入れた。三つが三つとも別に大した特色も出なかつた代りに、さう秘密にするまでもないまじめな物ができ上つた。そこに、もう、おほ儲けができてしまつたかのやうな意氣込みを感じて、

『こら、見たまい』と、つい、ふと、自分の妻に向つて同學の友にでも對する言葉つきが出た。それをあわてて自分の顏や口ぶりで訂正しながら、『男女間の道德書と云つてもよかべおん。立派なものだべ。』けれども、自分がかの女にわざわざ讀んで聽かせた文句のうちに、『女はいつも男のした手に出るべきものなり』とあつた。

『………』かの女はそれを矢ツ張り秘密のことに關する文句だと聽き取つたのであらう、直ぐその顏を赤らめて、ただにたりとしてこちらを見た。『そんなことを書いて!』

『さう云ふ意味では無くてあつたばて――』こちらも計らず顏が赤くなつたと思へた。けれども、別に自分の心ではこの文句が讀む人にさう云ふ意味にも取れるなら、却つて賣れ行きには都合がよからうと考へられた。自分のよそ行きや妻の博多帶などを質屋へぶち込んで、そのかねを以つて四號活字四十頁、三十五錢の赤本が三種百部づつでき上つたので、『男女草紙』叢書として、廣告を小さいのだ

けれども、先づ試みに都新聞に、出して見た。ところが、何等の反應もなかつた。再びやまと新聞へ廣告しても、また一部の注文さへ來なかつた。その爲めに夫婦は二度目の失望に落ちたと共に、一層かねの融通がつかなくなつた。ふたりは努めて外米を喰つてゐたけれども――。

もう、年の暮れになると云ふのに、その用意どころか、或は、その日の釜の下たに燃やす物がないと云ふ騷ぎであつた。身もちの妻を朝ツぱらからまた質屋へ行かせるのは忍びないので、賢三は自分で思ひ切つてまき屋へ出かけて行つて見た。けれども、自分がおもてに立つて人を說いたり、かけ合ひをしたりすることは至つて不得手なのを知つてゐるので、かの成り金御殿へ治療に行くことだツて、おほ屋さんにすツかりお膳立てをして貰つてから行つたほどであつた。それを辛抱してと思へば、なほ更ら口がきまり惡さの爲めに澁つてしまつて、――それでも、こう、した手には出ないで、『おい、キ、君』と、ふところ手をしながら、いきなり、そこの主人らしい人へ呼びかけた。『國でなら、へんへと云ふところを、君と出るのさへ苦しかつた。『マ、まきを、シ、四五本、カ、貸して呉れないか？　ダ、代金は、ニ、二三日のうちに、ハ、拂ふ。』

『お斷わりします。』一言のもとにはね付けられてしまつた。

『………』これでも十分妥協的な態度を取つてゐたつもりが、くわツと俄かに取りのぼせた氣味になつて、ぷりぷりしながら歸つて來た。

この不平を隣りの中田さんが聽いてゐたかして、兩手の握りへ白い息を吐きかけながら、ちよツと顔を出して、

『そりやあなたがへたですよ』と、年したの人だが親切にも注意を與へて呉れた。『まきを一わ持つて來させて、そのうちを默つて使つてしまつて、代金は今ないからあとで取りに來いと云へばよかつたでしよう。』

『しまつた、な。』賢三はにが笑ひに轉じて妻の顔を見た。

『仕かたがないから』と、かの女はいつよりもまじめになつて、『わたし、また行つて來ます、わ。』

『……』渠には、默つてかの女のするがままにさせて置くよりほかに道がなかつた。もう五ケ月の腹を隱すやうにしてかの女が寒さうな風で質物の包みを以つて出て行くのをじツと見送つてから、今のはなしからそれとなくお互ひに障子の明けツこをしてあつた隣りの人に向つて、『中田さん』と笑ひながら呼びかけた。『何かいいかね儲アごへんか、な？斯う貧乏してゐちややり切れません。』

『そりやお互ひですよ。』

『然し、キ、君はまだ獨身ですから。ボ、僕など夫婦もので、而も一方がこれですから。』腹を手で大きく見せて、もう、何も包み隱す必要はなかつた。

『僕もあるのですが、國に置いて來ました。つれて來ても、どうせまだ喰へません。』

『君も細君おありですか？』

お互ひに斯うした親しみをまじへるのはこれが初めてであつた。而も、こちらは向ふにも細君のあるのを知つて、これまでの警戒をゆるめてもいいのであつた。

『僕は郵便局に勤めてをりますが』と、中田さんは云つた、『君もどうです、今、年賀狀のために人が澤山入るやうですが？』

『そだ、な――』こちらの氣は一も二もなく動いた。歸つて來た妻に相談をかけて見たのもほんのおもて向きばかりのことで――自分の心は最初からきまつてゐた。中田はまだ人を推薦する位置にはゐないので、わざと知らぬ顏をしてゐるからと云つた。自分はひとりで初めから口を利くのが少しいやであつたけれど、その日、直ぐ行つて手ッ取り早く採用されることになつた。そして直ぐ事務に就いて晩に歸つて來ると、

『うまく行つたの？』妻は嬉しさうに立ち迎へた。

『中田さんとは違つて臨時やとひのことだども』と、こちらも久し振りのにこ付きを見せて、『これでも信用を得てあとまでも殘るやうになれば、まア、お前のお產がすむまででも安心だべ。』

『さう、ね。』妻もその氣になつてゐた。

その夜、お禮の意味ともなく菓子を買つて、中田さんをお茶に呼んだ。すると、中田が催眠術のこ

とを興味ありげにそれからそれへと根問ひするので、
『それでは、一つ君に說明が、でらかけて見ましようか』と云つて、先づ渠の承諾を得た。これはすべて催眠術師の最初の用意であつて、承諾もしない者にかけたと云はれては實地の規則に違反するからであつた。
　渠と自分とは安瀨戸の火鉢を一つさし挾んで互ひにそれをかかへるやうにしてゐたのだが、自分はそこにさしてある鐵の火ばしを二本取つて、先づ渠の兩手に持たせた。そしてその火ばしのさきとさきとを渠の目の前で二寸ばかりに接近させた。
『……』渠は隨分きまじめにこちらの云ふ通りになつて、その火箸の先きを見つめてゐた。
『これがひとり手にもツと接近します！』と云つた時、そばで微笑しながら見てゐる自分の妻と自分はちよツと顏を見合せた。が、直ぐ自分もまじめになつて、『さア、接近します。――今少し、へ、ば接近します。――そら、して來ました。――段々と、して來ました。――そら！』いよ〳〵接近したかと思ふと、またそのさきとさきとが遠く離れてしまつた。どうもこの人に限りうまく行かないやうだから、それと感づかせないやうにしてそツとだが、こちらの兩手を以つて兩方から向ふの兩手をちよツと押さへて、これも一種の暗示を與へるやうにして見た。が、矢ツ張り、駄目であつた。
　この人はわざとこちらの暗示に反抗してゐると云ふことが分つた。けれども、專門家がそんなこと

にうち勝てないと云はれては耻ぢだと思つて、なほ何喰はぬふりで――もう、無理に、不自然にだが――その暗示を加へてゐた。

『一向かからんぢやないか？』

『どうも、君は虚心平氣になれねでまいねい、なア。』これは、然し、今のこちら自身に對しても云ふべき言葉であつた。とどの詰りは、自分の斷念してゐる術から、かかる反抗心ある人をも催眠狀態に入れるだけの力が出て來よう筈はなかつた。向ふから頼んで來るものとは違つて、而もわざとにも反抗しよう、しようと思つてるのを從へるのは六ケしい。ましてや、こちらにつよい熱心のなくなつてゐる今日に於いてはだ。それを自分ながら知つてゐないでもなかつたけれども、自分の商賣がらとして私かになほいま／＼しかつた。『では』と、妻の方を見せて、『こいつをかけて見せましよう。』

『また、わたしいやだ、わー！』

『……………』こんな時に所天の加勢をしないとはと云ふ意味で、自分の妻の逃げようとして立ちあがりかけたのを心で怒つて、思はずちよツと睨みつけた。すると、もう、それでかの女は半ば暗示を受けてゐた。さうだ、思ひ出すと、最初から素直で、これにかかり易いたちであつたが――引きがへるになつてをかしな風をして歩いたと云ふことをあとで聽かせられた時、それでも、眞ツ赤になつておこり出し、

『わたしは、ね、これでも人間ですよ。そんなことをして、若し、そんなら、ね、をなごが人の奥さんだと云はれて、その眞似でもするやうになつたら、あんたはどうします』と云つたツけ。

『そんな暗示を二度とかけさへさねばよかべ。』

『でも、若し人がかけたら――?』

『他人にやア承知しなけりや――』さうだ、暗示にかかるにはその本人の承知不承知が先決問題だと云ふことを學理上からもよく説明して聽かせてやつた。兎に角、生活までを共にしてこちらを信用して來たをんなのことでもあり、そして商買上の必要に應じては、安心してこちらの術をかける一つの無くてならぬモデルにしば／＼なつて來たをんなだ。容易にこちらの自由自在になるのは當り前であつた。はたから見れば餘りにそらぞらしく、前以つて申し合はせをしてあつたかのやうに、かの女は催眠の狀態に這入つた。

『不思議です、な』と、それでも、中田はまじめになつて、その襟を正した。

『………』こちらは中川のそのやうすを見て、自分ながら自分の普通人とは違つた力を有してゐると云ふ誇りを再び恢復しないではゐられなかつた。

三

かの女に向つて、

『お前はこれから國さ歸してやる』と命令すると、別に少しも嬉しさうな顔つきにはならないけれども、その手では不斷着をよそ行きに着かへるやうなことをし初めた。それから、また切符を買つて汽車に乘り込むやうすをした。やがて汽車を下りてかの女の新潟なる里へでもいよ〳〵歸つた段になつたかと見ると、お辭儀をするが早いか、肱を張つてその兩手を腰のあたりへ置き、優しからぬ聲まで出して、

『よう歸つた、ね。』

『……』こちらが驚いたことには、かの女はいつのまにか男性の聲や態度を取つて、催眠心理學上の變性狀態に這入つてゐる。自分としては、そんな暗示を與へたおぼえもないのに。かの女が國へ一度歸りたい、國へ歸つて母に會つて來たい、來たいと、——姙娠を意識してからは、殊にさう——云ひつづけてゐたので、試みにその望みを滿足させる爲めの暗示であつた。だから、國と云へば新潟市のことを意味したつもりだ。が、かの女はそこへ汽車を下りなかつたらしい。どこか別な驛——いや新津で下りたにきまつてる。

『達者でゐたか、ね?——東京は南部のヅウ〳〵と違つて、ね、結構だらう?——結構なところではなヘツて、それで歸つて來たのか?』

『………』畜生、畜生！　全くこちらに對するうら切りの言葉をでもかの女はかげで云つて、その男にひやかされてゐるやうすだ。男の聲がてツきりかの女のいとこのだと分つた。と云ふのは、かの女がこちらへあまへた時、一度、その聲つきをして聽かせたことがある。その聲は無邪氣のやうだが、ふとかつた。新津には、その聲のぬし――さうだ、かの女が寢もの語りでよくあまへると、『わたしの好きな、好きないとこ』と云ふ、その男が或石油會社に勤めてゐるのである。『ほんまは、ね、子供の時から好きであつたけれど、ね、いとこ同士は鴨のあしと云ふでしよう――？』

『馬鹿！そりや味アいいと云ふことだべ。』

『あら、さう？』かの女はこの時如何にも耻かしさうにその顏を特別に赤らめた。『わたし、また、矢ツ張り、結婚してはいけないと云ふことかと思つてをりました、わ！』なほ、こちらの不機嫌をからだに手をかけてなだめるやうにして、『だから、ね、別に關係なんかなかつた、わ。』

『………』そんなことは、然し、今の場合、どうでもよかつたが――こちらも、實は、いたづらにかの女の國を思ひ出した心の底には、まだ會つたこともないのに名を聽くのさへ毛ぎらひしてゐるそのいとこが潜在してゐたのである。それを、而もおそろしいことには、かの女はこちらの暗示のうちに感じ取つたものらしい。だから、催眠のうちにだとは云へ、所天とその友人との見てゐる前でおほびらに會見してゐるのだらう。御叮嚀に、而も、かの女がその本人の位置にまで立ち變はつてだ！　餘

りのねたましさに、――どうせ、中川には何のことだか分つてゐ筈もないのに安心して――こちらは胸をどき付かせながら、じツと、かの女のざまを見つめてゐた。眠りを解かないうちに、もと、實際には關係があつたかも知れぬと云ふ疑ひに對する確かめの證據をでも握れないかと思つてだ。

すると、被催眠者はなほ引き續いて鹿爪らしい挨拶ばかりを云つて、別に婦人を侮辱するやうなことばも、女をわが物にしたやうなこともなかつた。して見ると、矢ツ張り、かの女自身の白狀通り無事な交際だけにとどまつてゐたのか知らんと、こちらも少し心を落ち付けた。

やがてかの女はすツくと立ちあがつた。そして矢ツ張り、太い聲で、

『こら、小わツぱめら！』手あしをひろげて往來の眞ン中にでも立ちふさがるかたちになつて、右や左りを忙がしさうに防ぎとめてゐるやうすだ。つまり、向ふからをんなの兒がつれ立つて來たのを、自分ひとりが大將がほで喰ひとめ、その手のしたを右から左りから渠等のくぐりぬけようとするのに對抗でもしてゐる樣子さながらだ。

『……』こちらが見てゐると、お初もその可愛いおかツぱのひとりであつたに相違ないが、その時のことに就いてかの女がそのいとこを思ひ出してゐるのだとすれば、一層罪のないことであつた。一時くわツとしたこちらのあたまもすツかり冷やかになつた。『もう、よかべ、よかべ』と、つい、非科學的だと思へる言葉が出た。

『………』かの女は今度は仰向いて高いところをでも見てゐたが、『なつてるぞ、なつてるぞ』と叫んだ。そして木のぼりをして、何かの實を取つて喰ふ眞似をしてゐる。これもいとこが子供の時にしたことであらうが――。

『………』こちらはちよツとかの女を呼びさます機會を失つてしまつて、中田と顏を見合はせてにツこりすると、中田さんはやツと今氣が付いたかのやうに、

『男の子になつてるのです、な』と云つた。

『さめろ！』こちらはわざとにもおごそかな態度を中田に見せてかの女に命令したつもりだが、一向に通じなかつた。

『………』かの女は一生懸命に走るやうすをしてゐる。

『もう、よかべ――さめろ！』

『………』なか〳〵にそれが通じないのであつた。

『どうしたんだべ？』低い聲で斯う、ひとり言のやうに云つて見たのだが、それは自分には度を失つたかと思はれるほどの失敗豫想とそれに對する恐怖とが含まれてゐた。自分の暗示がへぼくたになつたのだとすれば、自分の命令以外の潛在意識までがうまく向ふへつたはるわけがなかつただらう。しかし見ると、かの女の方に於いて現在ただならぬからだが禍ひして、こちらの暗示から離れてまでもお

のれ勝手な眠りに耽つてるのか？斯う思ふと、實際にどうしていいのか、ついぞこの術に於いて經驗したことのない心配をおぼえた。そして立ちあがつて行つて、『おい、さめろ！　もう、よかべ！』術としては如何にもまづいが、かの女が手と足とだけをからだも走つてるやうに動かしてゐるその脊中へぽんと一つひら手を與へた。

『……』かの女はそれでやツとさめて呉れた。そしてそのさめた時の姿勢のままで先づにツこりして見せた。

『馬鹿！』と、つい、こちらは苦しかつた喉までこの言葉を込み上げて來させたが、口には出さないでまた飲み込んでしまつた。かの女のとは違ひ、却つてこちらはいやな顏をしたに相違なかつた。不斷はあんな優しいやうすをして見せてゐながら、心の奥では――この頃のやうに生活が行き詰つた反動としてか？――また他の男を思ひ出してゐるのかと思ふと、こちらとしては、ただ自分の催眠術が殆ど役に立たなくなつたばかりの不愉快ではなかつた。

が、――かの女がこちらの顏いろを少しは見て取つたかして、ちよツと心配さうに、

『何かをかしなことをして』と聽いたのに對しては、わざとにもゑがほを見せて、

『上できだ――でき過ぎたほどだべ。』これは、かの女によりも、中山に向つて、自分の術が決してへたではなかつたことを――學術上ではなく、寧ろ處世策の上から――暗示したのであつた。

『僕はこんな不思議なことは初めて見せて貰つたのです。』

『さうでしよう。』これでこちらは自分の專門的商賣のことは向ふも十分に納得して呉れただらうと見えたので、『然し』と，今度は全く別な方へうち解けて行つて、『とても、これでは喰へません。段々聽いて見ると、催眠術の本は商店の小僧さんだヾによく賣れたことがあるさうですが、それは何か誰れにでもできるうまい手であつて、これで以つて若いめらすを自由にできたらと云ふ、ほんの、空想的な好奇心から讀んだものです、な、實際はこれで以つてさう惡いこともできず、極まじめな物に違ひありませんが――』この時、少し私かに相手の氣を引いて見るつもりで、『世の中はまじめばかりではとほれないと思ひますが？』

『無論です。』中田さんも、横を向いてだが、そこへ大分にちからを入れて返事した。それから、まだ少しはとぼけてゐるやうにしてだが、こちらを見て笑ひながら、『まだ、その好奇心の小僧さんのやうな人間がうぢやくをりましよう。』

『それで、し、秘密出版もやつて見だども――。』

『あんな物を！』妻はまた何を思ひ出したのか、赤い顏になつた。大體から云つて、別に耻づべきこともなかつたのに。

『やりかたが拙かつたのでしよう。』中田はこちらの思ひ通りに乘り氣を見せないでもなかつた。そこ

へ催眠術に於いて云へる氣合ひとでも云ふべき物を突ツ込んで、
『では、一つ、一緒に何かやりましようか、な？』
『何かやりましよう』と、中田も答へて呉れた、『どうせ、あの郵便局の仕事などはほんの一時の腰かけですから。』
『さうです、な。あれが、キ、君にも一時なら、ボ、僕にはもツと情けないわけでしよう、新年までの臨時やとひですから、な。』さうだ、その臨時を間がよくば妻のお產まで延ばすやうにしたいものだが、それまでにも、ほんとうに何かよいことを思ひ付きたかつた。ところで、その自分自身としては、どうしても誰れか別にあひ棒がなければ何事もできない性分がこころ寂しかつた。東京へ決心して出るには、――そして自分ばかりにではなく、世人一般にも、新らしいだらうと思つたその術を商賈にするには、――自分の妻がそのあひ棒であつたからよかつたが――。

四

もう、多の夜も大分に更けてゐた。賢三が氣が付くと、けふは午前から手紙のより分けと云ふ慣れない仕事をやつて、既に宵のうちから勞れてゐたのであつた。催眠術のでき榮えにゆるみがあつたのも、一つには、この勞れの爲めではなかつたらうか？果してそれなら、自分の腕もまださう見限つ

たものではなからう。

中田さんがその自室へ歸つて行つてからのこと、

『もう、寢べア』と、こちらは獨りで火鉢を占領して、少し腰を浮かせたもも引きばきの膝と膝とのあひだへまた火をしながら、自分の妻に向つて見ると、またいつも通り目くらのやうな愛情がからだ中にみなぎつて來た。そして何だかあかじみたにほひをそれが乃ち人間その物の『カマリ』(かをり)であると見て、もう、自分はかの女が催眠中にその好きな男に變性したことなどは左ほど重大な事件には數へなかつた。ほんの、ただかの女をからかふ冗談として、それを語り出したのであつた。そしてその最後に、『矢張り、お前のいとこに對する戀がお前の意識の奧に潛在してゐるべに』と附け加へた。

すると、かの女は俄かにその微笑を取り消したと同時に、一つしかない床を取つてゐるその手をやすめた。そしてぷり〳〵しながら、

『わたし、これから催眠術にかかることはお斷わりします。』

『なしてや』と、こちらは笑ひながらとぼけて見せるより仕かたがなかつた。

『だツて』と、かの女は最も恨めしさうにこちらを見つめた。その目には淚をさへ浮べて、『だツて、わたしの知らないあひだをげやろにされたり、子供の時のことを云はせたりするのですもの！』

『そりや、然し、おれの命令では無くてあつた。お前ひとりでどし／＼なつて行つただべ。』

『そんなおそろしい物はわたし、これから全くお斷わりします。』

『……』こちらはかの女の氣性を知つてるので、いやだと云へばまたそのいやを押しとほすのだらうと思へた。が、臨時にでも郵便局員になつた自分には、もう、少くとも當分のうち、そんなことはどうでもよかつた。

　十二月の二十三日、四日、五日とは無事に勤めたが、その二十五日の晩おそくの歸りが寒かつたので、かぜの氣味になつた。そして世界かぜにでも取りつかれたかと心配しながら、二十六日、七日と休んで、二十八日の朝、熱も幸ひに取れたので出勤して見ると、もう、自分の席は人がそれを占領してゐた。

『無斷で缺勤するやうなものは二度とやとひません。』

『……』馬鹿！　斯う一つ、局を出る時に怒鳴つてやりたかつた。まだそんな經驗もなかつたものが、よく說明されてゐない限り、――ふる狸のお化けぢやアあるまいし――缺勤屆けを出すことなど知つてるものか？主任の局員がほんのへツぽこ官吏のくせに高慢ちきな顏をして、意張つてるのが最初から氣に喰はなかつたのだ。

　賢三は自分の妻がゆふべぷり／＼したのよりも、もツとぷり／＼して、まだ多少は病後の氣持ちが

悪いからだで寒い風を勢ひよく切りながら、家へ歸つて來た。
すると、お初は何だか知れない老人と云ひ合ひをしてゐた。
『新聞の勘定はみそかときまつたものぢやアございません。』
『………』みそか？今年今月のみそかはしあさつてだ。
『それはさうかも知れませんが――』
『なんだべ？』いきなり、こちらは怒鳴つた。まだ格子のそとにゐたけれど――。
『なアに、ね――』妻はその所天を見てやツと心が落ち付いたと云ふ風で、『新聞代を取りに來たのですよ。』
『………』そんなかねがあるものかと私かに考へながら、『何新聞だ？』
『讀賣です』と、老人が少しおだやかになつて答へた。
『讀賣を取つてゐると云つたのか？』これには少からず一種の暗示が這入つてゐた。
『………』かの女はこちらを見あげて躊躇した。が、もう、術にはかからぬと云ひながらも、馬鹿ではない女としてこの暗示には直ぐかかつたものと見え、『さうでした、ね。うちぢやア讀賣は取つてゐないのですよ。』
『おらアのア萬朝だべ。』こちらは中田さんのを、面倒くさくなれば、借りて見せてやつてもよかつた。

『取らないのに、帳簿へついてるわけがないが、――』老人は不審さうに獨り言になつた。
『そりや帳簿が消えてゐないのだべ。先月は取つてゐたが、な、ちやんと斷わつた。』
『さうですか？ぢやア、今一度よく調べて見ましよう』と云つて、老人はしぶ〳〵ながら歸つて行つた。
そのあとをふたりは互ひに顏を見合はせてにツこりしたが、お互ひに直ぐまた去つた老人のよりも澁い顏になつた。郵便局の失敗が報告されたからである。
『困るぢやアございませんか』と、かの女はその圓い顏を少ししがめて、『おツ母さんはのん氣だから東京のお正月から見て置きたいと云つて來たし？』
『手紙で斷わればよかべ。』
『もう、まに合ひますものですか？』
『お前これになつたのを知らせてやるはでだ――』斯う云つて手を自分の腹へ持つて行つた時には、こちらは一番自分の顏がしわんだと思へた。
『でも、仕方がないぢやアございませんか？』かの女には、然し、こんな苦しいあひだでも、情愛のうへの恥しみが見えた。尤も、かの女のつもりでは、産み月になつて母が來て呉れればそれでもよかつたのだらうが――。

『……』こちらはそのかの女の爲め、またかの女の孕んでる兒の爲め、また〳〵かの女の呼んだ母の爲め、どうしても何かにあり付かねばならなかつた。『わ、きらひだ巡査志願でもすべ。』

さうだ、實際は、教育の時から、もう、習慣のやうに毎日取つてゐて、教育のことや文學のことで一日でも見ないではゐられぬその讀賣新聞紙上で、巡査の募集があることをも見て置いたのだ。

直ぐその手續きを警視廳までしに行くと、歳が明けての七日にならないではその試驗がないとのことであつた。で、願ひ書だけを書いて置いて來た。

『おツ母さんに來さう〳〵からこんな貧乏くさいところを見せたくありませんから』と云つて、妻はまたその自分の物を持つて質屋へ行つた。そしてお正月の餅をまで一斗ばかりあつらへた。

『そさないでもよかべに。』こちらは妻の物を失つても、つまりは、自分の責任に歸するのを考へた。

『でも』と、妻は答へた、『あんたの耻ぢになるぢやアございませんか？』

『……』さう言はれると、然し、一言もなく自分の不平を押さへてしまはねばならなかつた。

五

おほ雪の爲めに信越線が途中でとまつてたからと云つて、母は三十日のゆふがたになつてこちらへ到着した。

賢三は初めてかの女に會ふわけだが、さすが、お初の母だけに色が白く、その顏のかたちまでが――瘦せてるのが違ふだけで――先づ、その娘そツくりだと思へた。最初、母が座敷――と云つても、茶のま寢室兼用のたツた一つしかない――に坐わつた時には、じろりと一と目低い天井までも見まわして、

『こんなところに住んでゐるのか』と云はぬばかりの不平がほを見せた。そして初對面の挨拶になると、人が惡いのかと思へるまで切り口上になつて、これが五十を越えた母とは見えないほどはき／＼してゐる。いや、あまりに向ふがはき／＼してゐるので、こちらは會はぬさきからこころ賴みにしてゐたのがそれてしまつたやうな氣もして、何となく自分の妻を奪はれて行くのではないか知らんとも思へた。で、自分の妻の顏やしてゐることを返り見てはゐられぬほどの寂しい氣持ちに堅くなつて苦笑しながら、伏し目がちに母のはなし相手をして暫らくの間、

『は――どうも――は――し――わ――では――はで』と云ふやうな、自分の地方言葉を連發してゐた。よそ行きのたましひが全く拔けてゐたやうに――。

然し、それに活を入れたやうにこちらを正氣づけて吳れたのは、母のお國なまりらしいのだが、まことにきりりとした言葉であつた。

『人間は、ね、何を致しましたツて、ね、夫婦滿足して暮して行けさへすりやそれでよろしいのであ

りますさかい。』

『さうです、さうです!』こちらは向ふの機嫌を取るやうに斯う思はず叫んで、ちよツと愉快であつた。が、ただ巡査を志願してあることは云つてもいいのか――但しは、まだいけないのか? この場合、まだお初と相談して置かなかつたので、云ふのをさし控へた。

ふと考へて見ると、自分の妻はその所天の故郷なる黒石にゐた時には可なり津輕ことばを使へたし、東京へ來ては直ぐまたうまく東京語になつてゐる。そしてその娘の親だけに、母もなか／＼利口のやうだ。ふたりが貧乏してゐるのをさへ淡白に承知して呉れれば、こちらも母のゐるあひだはいろ／＼な意味で賴み甲斐になるのであつた。

『うちには番僧をひとり置くやうにもなつたし』と、母はその留守の心配がいらないことをお寺生れの娘に語つてゐた。然し、その娘が暫らく見えないのを、『どこへ行きましたか、な?』

『買ひ物にでも行きしたか?』

『かまはんでもえいのに。』母は半ば獨り言でだが、一段低い聲で投げ出すやうに云つた。

そのうちに、お初が歸つて來た。

『おツ母さんはお酒をお好きでしたさかい』と、もう、母のやうなお國言葉を出して、母のゆふめしの膳へ、かの女自身の計らひで買つて來たところの酒をまでお燗して乘せた。そして日ごろの苦しみ

を忘れてしまつたかのやうにいそいそして、近來にない晴れやかな笑ひ聲を漏らしてゐる。
『まア、御主人に。』母は遠慮らしくかしこまつた聲をしてその娘に目くばせした。
『飲めないのですよ。』お初はにこ付きながら顏を横にして肩を下げ、少しうわ向き加減に母の顏を見た。
『……』そのかの女の優しさに免じて、こちらはかの女の母のおつき合ひをしなければならぬやうに思へた。『まア、初めてのことだはで、相ひ手しましよう』と云つて、自分の手を無格恰につき出して、母が手早く取り上げて渡す猪口を受けて、妻に酌をさせた。
それから、また二三度の取りやりがあつて、こちらはいつに無くのぼせたやうになつたところ、妻の計らひで誰れよりもさきへ御飯にさせて貰つた。
『結構でありますよ。わたしのやうにお酒を好きでも困ります。』
『なに、飲めるに越したことアありますまいが――。』
『何よりも好物でありますさかい』と、母は微笑しながら、『わたしにだけは仕かたがございません。』
『おツ母さんは憎らしいほど醉はないのですもの。』
『さうでもない』と云つたが、母はなほ娘を相ひ手にして、久しく積りつもつたらしい話をしながら獨りでちびり／＼とつづけてゐる。お燗も三度は取りかへられた。

『……』こちらは、これから毎晩こんな風にやられては、お初だツて溜るものぢやアなからうと云ふ想像が、私かに、自分の心に經濟的心配を浮べないではゐなかつた。

そのうち、貸し蒲團屋が蒲團を一と組持つて來たのを見て、

『どうするの』と、母は醉ひにただよつてるその目を以つて、今、娘が立つて蒲團を受け取つてる方を見上げた。

『……』お初はその母と顏を見合はせたが、云ひにくさうにしながら、『あんたのに――』

『借らんでもえいではないか――お前ので？』

『でも、一と組しかないのですもの！』

『……』さうだ、お初がとついで來た時には新らしいのを持つて來た。が、それは成るべく荷物をへらす爲め、そして國を出る時の旅費や何かを拵らへる爲めに賣つてしまつた。斯うなると、どうせ、いつまでも母の手まへを取りつくろつてゐることはできないのであつた。

『では、わたしが借り賃を出すことにします。』

『それにア及びません』と、兎に角、こちらは云ひ添へずにはゐられなかつた。

その翌日、母は正月の餅がつけて來てもその他の用意がなければ見ツともないと云つて、お屠蘇やその道具や三つ組のふた物などを自腹を切つて――而も、東京の買ひ物に慣れない爲めに途方もなく

高い値段で——買つて來た。それがまたこんな見すぼらしい住まひには釣り合はぬほど立派なのであつた。

『おツ母さんは自分のうちにゐるつもりだすかい』と、お初は自分の財布の中をでも使はれたかのやうに不機嫌を見せた。

『では、どうしたらえいのだ？』母は詰らなささうな顏つきをして、ちよツと困つてた。

『………』賢三はたださし出ぐちを控へて、親子がこころやす立てからの最初の衝突を默つて見てゐた。そこへ、このおほつごもりの日にも拘らず、珍らしくもひとりの患者が附き人をつれて車で飛び込んで來た。ひどいリヨウマチを直して吳れろと云ふのだ。例の如く眠らせて、『お前の病氣はあすの今ごろまで直つた』といふ暗示を與へた。尤も、あすまた來たら、今度は二日間の、そしてまたその次ぎは三日間、五日間、十日間と、段々日にちを延ばして行くつもりであつた。そして最後には、もう全く直つたと云へるやうに。

眠りからさめた男は、

『大變に氣持ちがようございます』と喜んだ。そして先づ最初のお禮として包みがねを置いて行つたのを、あとで夫婦が待ちかねてひらいて見ると、十圓札が一枚這入つてゐた。

『さうかね持ちのぢイさまとも見えないであつたばて』と、賢三は母へも自慢するつもりでにこ付き、

ながら妻の方を見た『これだけでこの商賣をやめられないでは』
『あんなことで病氣が直るなら』と、母はまだ疑はしさうにして微笑を半分その口びるでゆがめ殺しながら、『誰れでもらくなものだが、な。』
『そこが』と、渠は自分の妻にもちから添へを賴むつもりの微笑を浮べて、『わたくしの催眠術の得意なところですから。』
『自分ながらも不思議なものです、わ。』かの女も斯う簡單にだが專門家らしく說明して吳れた。
兎に角、思はぬかねが這入つたので、これで以つて母の蒲團を買ふことにして、この年が全く過去にならうとする眞ぎはの時間を見許つて、渠は母や妻と共に出て行つて、中ぶるのを一と組安くねぎり落した。そしてそれを一緒に家まで持つて來させた。
『東京の買ひ物はすべてこんな風にします。』渠は都會には母よりも故參なのを誇りがに感じたと同時に、店の云ひ價から二圓五十錢も負けさせたのが愉快で——今夜こそ、もツとかねさへあれば、何か必要な物を今一度買ひに行きたかつた。
『今夜なら、何でも安く買へますが、ね』と、妻もなほ未練がありさうに云つた。
隣室の中田がまだ起きてたので、こちらへ呼び込み、母に引き合はせて、
『わたしの一番親しい友人ですから』と說明した。賢三としては、何かかね儲けを一緒にしたいと考

へてるからであつた。そしてひるまのうちにをんなどもがあすからの用意の一つに拵らへたところの屠蘇を持ち出させて、皆でまだ早い新年の前祝ひをひらいた。

『僕も寄附するものがある』と云つて、中田はするめを二枚持つて來た。

『では、わたしも』と云つて、母はまた酒を自分からおごることになつて、お初がその代理でわざ〳〵買ひに行つて來た。

『寒いの、ね。――新潟だツて、これよりやァ寒くないでしよう――?』

『なに云ふてるのだ』と、母はその娘をちよツと輕くたしなめるやうに、『こちらはまだ雪もないくせに!』

『そりやァ、ね。』

『寒いとおもへばどこまでも寒いべに。』

『まるで貧乏人同士の持ち寄りぢや。』中田は自分で火に當ててたするめを小さくちぎり初めながら、この時、斯う云つてこちらを笑はせた。

『來年ア何からうまいことアあるべし――。』

『腕によりをかけて置いて、な。』

『そだ。』

『催眠術のモデルにも』と、妻も笑つた、『もう、飽き〳〵しました、わ。』

『なアに』と、母は中田に向つても最も樂天家のやうであつた、『若い時にや苦勞して置くのが却つて藥りになります。』

『……』賢三には、然し、それを聽いてゐると、母がありがたくもこちらの貧乏をよく推察して、まだうち明けないうちからかばつて呉れてゐるやうに受け取れたので、それが爲めに涌き出る自分のあまい涙を人知れず自分の胸に飲み込んだのである。

六

明けて三ケ日のあひだに尋ねて來たものと云つては、例のリヨウマチ患者が一回あつた切りで、その他には誰れもなかつた。それもその筈で、中田さんのほかには友人が獨りもないのだ。東京へ來てから、たまに治療をしてやりに出て行つたことのほかでは、たツた一度藩主の津輕伯爵を訪問しただけであつて――それも友人となつて呉れるには餘りにかけ隔つてる關係だ。

『東京のお正月ツて詰らないがんだ、な』と、母は娘にがツかりしたやうな言葉ぶりを發してゐた。

『そりやア、親類づき合ひも、ね』と、お初は答へた、『友達づき合ひも、ね、ないのだすかい。ですから、御馳走なんかして置いたツて無駄よ。』

『それも却つて物入りがせんでえいがんかな?』
『……』賢三はそんな話を默つてにやり／＼しながら聽いてゐたのだが、ます／＼自分の寂しさを感ずるばかりであつた。三日の日に來なければならぬ患者が四日、五日になつても顏を見せないのを見ると、あんなに切れ離れがいいやうに見せてゐても、こちらへ拂ふかねを惜しくなつたのでもあらうか?それとも、たツた二回の證明暗示が利いて、もう直つたのかも知れない。自分としては、まだ自分の腕におぼえが殘つてるやうに思はれるので、その患者はきツと直つたのだと信じたかつた。同時に、また、かかる自分を信じて多くの依賴者が集つて來ない世の中と云ふものを呪はしかつた。
『どうせ隱してゐたツても、ね、長いあひだには分つてしまうことだから――』お初はその母が錢湯へ行つた留守にこちらに向つてうちわ同士での見えを張ることなんかやめようと發議した。
『そだ、そだ』と、粂も容易に贊成した。『おらだきや苦しいばかりだはで。』そして巡査を志願してあることをも母にうち明けてしまつた。
『何をしたツて世の中だすかい』と云つて、母は別に氣にかけないやうすであつた。
正月の用意が毎日ちびり／＼と家族にばかり喰ひへらされて行つて、六日目になつた時、殘して置いてもどうせ無駄だからとあつて、その晩、母の發議で以つて中田さんをも呼んで、皆で一席の宴會をひらいた。酒は矢ツ張り母のおごりで、中田は大分にお相伴をした。そしてその醉ひに乘じてそれ

その生まれ故郷なる紀州の盆踊り歌などを無器用に歌つた。
　すると、母は三味線をひきたくなつたかして、おほ屋の小さい娘が持つてるのを借りて來させた。そして先づお初にそれを持たせたが、かの女はそれを膝の上でいじくりながら、
『もう、忘れてゐますさかい』と云つて、ただきまり惡さうにばかりした。
『では、貸して御覽。』母は三味を娘から受け取ると、手早く調子を合はせて、口のうちでだが、端唄とやらをつづけて二つばかり歌つた。が、賢三にはオルガンに合はせて歌ふ『君が代』やその他の小學唱歌のほかは耳慣れてゐないので、渠は冗談に首をふりながら、
『おれには全く日本の音樂ア分らぬ』と云つた。
『少しおッ母さんに敎へて貰つたら、わたしも――』お初は母の下に置いた樂器をこわごわらしく手に取つて、ちよッと何かの曲を考へ考へひいてるやうであつたが、口には低い聲も出さなかつた。
　いよ〱七日になつたので、賢三は試驗を受けに巡査敎習所へ行つた。が、掛りの人にあたまからはね付けられてしまつた。
『君の目つきが餘りにきよと〱してゐる。それに、あまりども過ぎる。巡査にはとても向かない。巡査はもッと大膽な人物でなければなれるものぢやアない』と云はれてだ。
『……』渠はまた考へ込んでしまつた。ぢやア、どうしたらいいのだ？人まへに出てどもるのは決

して自分の生まれ付きではない。成るべく國のなまりを出さないやうに努めるのが、つい、さうなるのである。日つきだツてもさうだらう——尤も、自分はさう大膽な男だとはうぬぼれてゐないが、巡査ぐらゐになれないほどの卑怯ものではなからう。目はきよと〱してゐるかも知れないが、それは催眠術に於いて患者の顏つきをよく注意する爲めに絶えず目をくばるその習慣が、或は、自分のくせとなつたのだらう。『それを——なんだ、馬鹿くさい——人物ができてゐないツ!』

『さうくよ〱しないでも——』母は大して失望もしないで慰めて呉れた。

『………』渠は獨りで部屋にゐる時、こツそり妻の手かがみを取つて自分の顏を寫して見た。生活上の心配の爲め少し色が青くなつてるかと思はれるだけで——長おもての顏にはりりツとしたうはひげもあつて、兩方の目はじツと落ち付いて光つてゐる。この光りが患者に對する暗示力をうまく助けてゐるに相違はないのだ。して見ると、自分の心の引け味などがどこにもあらう筈はない。左りの鬢髮にわかしらがの一と固まりがあるので、それを隱くすやうに髮を眞ン中から分けてはゐるが、それはそれでかまはないではないか?

餘りに『氣さ惡りい』し、きまりが惡いし、二三日は中田と顏を合せても試驗の不結果などはまだ曖昧にしてゐた。

『何とか云ふて來ませんか』など云はれても、こちらはにが笑ひをしながら、

『まア、何とかなるべい』とばかり答へた。が、中田も亦郵便局が不首尾になつてしまつたのを知つた時、『實は、僕も巡査を落第でした』とうち明けた。

『僕はまた』と、中田は語つた、『郵便局に鼠が出て郵便物をかじると云ふ實例を擧げて、遞信省で出す雜誌に投書したのです。表題は「郵便局員の注意すべき事」と云ふのでしたが、一等賞を得ましたところ、局では僕が不都合にも自分のつとめてゐる局のあらを素ツ破拔いたと云ふのです。』

『分らないことを云ふものです、な』と、母はそれにも驚いてゐた。

『世間は一般に皆そんなものだべい。』こちらは斯う云つて失敗のあひ手ができたのをこころ丈夫に思つた。そして毎日、毎晩のやうに、向ふへ行くかこちらへ來るかして、無職同樣の男がふたり顏をつき合はせては、何かいい金儲けがないかと空しく語り合つた。が、もう、お初の腹も六ケ月になつてゐるし、何とか少しでも落ち付かせることにしなければならなかつた。

『若い時は苦勞した方が』と云ひ／＼する母も、餘りたよりにならないことが分つた。さう云ふ言葉を楯に取つてゐるかのやうにして、苦しいのを見ながらも、なか／＼かねの補助はして呉れない。自分の喰ひたい物を自分で買つて來て酒のさかなにはするが、その娘にさへただ申しわけのおすそ分けをして呉れるだけだ。

『なか／＼水くさいの、ね』と、お初も私かにこちらへその母のことを不平さうにささやいたことが

ある。

止むを得ず中田と相談して、ふたりの持つてる本を賣る爲め淺草の公園へ古本を並べることにした。水族館のすぢ向ふには、ひるまを寒いから風が吹いてるにも拘らず、歌の本、鼠取り、ゴム風船、南京だま、目がね、金の入れ商、かんじんよりにうるしを掛けた花立てなどを別々に賣つてゐた。その間にまじつて、しぶ紙を先づ地べたに廣げ、その上へ毛布を敷き、そしてふたりの本をばら〳〵に並べた。

中田のには文學書が多かつた。いまだに渠は散文詩を作つて雜誌などに投書してゐるので、こちらは、

『僕も國で歌の雜誌を出してゐましたが――』と云ふやうなことが、一つには、またこのふたりの貧乏生活を一段と結び付けるわけになつたのだ。こちらのにも歌や詩の本もあつたが、もとの名殘りとしては教育書もあり、ここ一二年のには心理學に關するものが多かつた。

それらをずらりと並べて、かたみ替りに番をすることにした。大の男がこんな小さい店にふたりもかかつてると見えては却つて價うちがないからであつた。中田がそこに坐わつてるあひだを、賢三は他の商賈人どものやうすを視察するつもりで公園内をぶら付いた。ところが、野師のやつてることが渠自身には一番おもしろかつた。たとへば、法律の本を賣つてる男は大學生の風をしてその本の効能

を述べ立ててゐるうちに、家賃の貸し倒れの話などをする。

『借り主が家賃をためてなか〳〵に拂はない。家主は自分の家だから意張つてそれを追ひ出しまして、たまつた家賃の請求を裁判にかけた。すると、その裁判が六ケ月も七ケ月もかかつてやツと落着したかと思ひますと、何のことだ、こツちが負けになつた。それもその筈でした――法律によりますと、その家を立ちのかせるには先づ以つて三ケ月以前に通知を發して置かねばならぬ。すべてさう云ふことが詳しく叮嚀に分るやうにこの書物には書いてありますから、たツた二十錢で人間一生の儲けができる。諸君、實に安いものではありませんか？』

『………』こちらは默つて、雜誌屋の店さきで雜誌を明けるやうにしてちよツと調べて見ると、定價五十錢としてあつた。それを二十錢でも恐らく十五六錢は儲かるだらう。

『一册もらをか？』田舍もの見たやうな男が代價を出して買つた。が、そのやうすをこちらが多少くろうと側のものとして觀察してゐると、決してほんとうのお客ではなかつた。同じ穴のむじならしかつた。から云ふまわし者でもツと滑稽なのは、かたの凝りその他すべてからだの痛みに利く藥りを賣るのにあつた。人が大分にたかつた時を見すまして、『わたしにも利きますだらうか』と云つて、とぼけたやうなお婆アさんがひとり横の方からおづ〳〵と聲をかけた。

『あなたはどこが惡いのです！』

『ここですが、な。』かの女は兩手をおろして、それで以つて左右からをかしなところを示した。
『わッはッは』と、何も知らないものは笑つた。
『いや、それはおかどの違ふ病氣だらうが、な。』藥り屋はすましたものだ。ちよツと笑ひながら『この藥りはさう云ふところへは塗り込めませんよ。』
『わッはッは！』
『ここも痛むのです』と、お婆アさんはまたその兩手を自分のかた〳〵の肩へ持つて行つた。
『いや。それには持つて來いだ。一つ拾錢安いものです。』
『………』さう云ふこともお客に對して一種のへたくそな暗示をかけてゐるのだと、賢三には愉快にうなづかれた。そして自分の店へ立ち戻つて來ると、五六名の人だかりがあつたので、自分も客のふりをして作文の本を一つねぎつて見た。
『ぢやア、負けときます――全くそれではもとが切れますが』と、中田も如才なくとぼけてゐた。
『………』そのおかげで、お客どもの目をかすめる爲め、また急いで一とまわりして來なければならなかつた。そして再び戻つて來ると、自分のむかし壹圓八十錢も出して買つたところの民法論がたツた五十錢で賣れてた。
『安かつたけれど、仕かたがなからう』と、中田は附け加へた。

『そだべか？』斯う云つて、こちらはちよッと顏をそむけた。これには少し自分の不服を云ひ含めたのであつたけれども、この簡單な言葉の意味が通じなかつたかして、紀州生まれの中田は平氣でゐた。が、こちらはまた渠の平氣でゐるのを、ひよッとすると、高く賣つて置きながら、二三十錢をこッそり懷中したのではないか知らんと疑はれた。で、中田と入れ替つてから、こちらも渠の大きな國語辭典を六十五錢に賣つて、たツた四十五錢にしかならなかつたと報告した。

そんなことも幸ひに知れないで、その翌日も一緒に出たが、中田の方は二日目のがすむと、

『どうせ賣れただけ喰つてしもて、もとにも何もならぬから、やめぢや』と云つて、出るのを斷念してしまつた。

『……』賢三はそれにも拘はらず獨りで三日目にも出て行つて見たが、氣のせいか、獨りだけではお客も餘り立たないやうだし、何だか自分ばかりが馬鹿らしく人にじろ／＼顏を見られるやうだしして、とても、この寒さに堪へ切れなかつた。そしてどこからとなくただ／＼心ぼそくなつたので、いつもの時間よりも早くそこを切り上げて歸つて來た。

七

然し、何かを企てて見なければ自分も安心してゐられないし、妻をも安心させて置けないので、こ

れも矢ッ張り自分の催眠術から敷衍したところの、
『自由自在』と割り註した『氣合術心得』と云ふ物を書いた。そして賢三は中田に賴んで印刷屋へ持つて行つて貰つた。そしてそれが思つたよりも早くでき上つて來た時には、その千部に對してかねが一文だツてなかつた。
『いま無いから、今度渡す』と云つて小僧を歸した。が、その小僧は直ぐ引ツ返して來て、
『そんなら印刷物をそれまで預かつて置きます』と云つた。
その時には、もう、丁度二百部ばかりを中田とふたりして折つてしまつた。
『これだけあつたら結構ぢやないか』と、中田に云はれたので、賢三はその氣になつて、あとの八百部を何喰はぬ顏して返してやつた。
新聞大の紙を三つに折つて、たツた十六頁の刷り物だが、これに定價三十錢と附けて、實際には十五錢に賣らうとするのだ。それにはいろんな用意があつた。かたな——かな棒——かわら——。そしてほかの人のやつてるふり合ひを見ても、かたなは白ざやでなければ面白くないのだが、生憎、うちに持ち合はせのは黑ざやであつて、それを取りかへるだけの費用もなかつた。
『…………』賢三はそれを母にちよツと立てかへて置いて貰ひたかつたのだが、かの女はその娘と日くばせして、

『このままでえいねツか、ね』と答へた。そしてそのやうすがこちらの必迫に何等の同情もなささうに見えた。

『では、ふくろを縫つて呉れないか？』渠は斯うむツつりしてお初に命令した。そしてかの女は急いでうこん木綿の袋を縫つた。

『……』これを抜いて見せる時には、『えいツ』と一度振つたりして、紙などを切つて見せてから親ゆびと人さしゆびとにかたなの脊と刃とを挾んでかたなを垂らし、段々としたへすべらせて行くと挾んでる兩ゆびは段々とさきの方へあがつて行く。惡辣な野師になると、その刃を指が切れないやうに途中まであらかじめ鈍らせ置いて、紙の切れるさきの方へ來ると直ぐ、ちよツと指を離してかたなの兩はらをつまんでしまう。が、氣を落ち付けてじようずにやれば、正直にやつても決して指のはらを切るやうな恐れはない。この秘訣としては、

『急がず、あわてず、かたなを搖れぬやうにして、じわり／＼としごいて行くべし。そこに精神が指の腹に緊張して決して切れるものにあらず』と云ふ文句を入れた。

次ぎには、二本のかな棒だが――太い二尺五寸の方のは磐石力を證明する爲めに使ふのである。かた手に棒の眞ン中を握つてかまへると、大の男が二人で兩端をちからまかせに押しても泰然として動かないのである。このかまへのことをこの本に斯う書き込んだ、――

『棒を握つた右手は握りを下の方へ向けて十分に突き出し、他の手を下向きに左りの腰に當て、右足を前方へ折つて左り足を十分に後方の地上へ踏みこたへべし。斯くの如く構へる時は、萬人の力を以つて棒の兩端を押し來たるとも、子供一人で磐石の如く能く是を支ふることを得べし。』

また、ほそい方の二尺棒はこれを火に熱して眞ツ赤にし、そしてこれを手でぢかに握りしごくのであるが、

『はツと思ひ切り氣合ひをかけてしごけば、何のこともなし。但し、この時には必らず燒けどうはせぬと云ふ信念を有せざるべからず。この試探を經へると直ぐその手を水につければ、手の裏に些かのあとも殘らぬものなり。』

次ぎに、かわらで——これは自分で自分のひたへにうち付けて割つて見せるのである。その秘訣と云つては、これも讀ませてしまへば何でもないことだが、

『かわらはその平面を額にぴたりと當たるやうにせざるべからず。若し少しでも額と瓦の平面との間に角度を置いて打たば、必らず摺り剝き傷を生ぜしむる爲め最も注意すべし。兩方の平面がぴたりと當たりさへすれば、如何に強く當たるとも擦傷を生ぜぬものなり。』

すべてさう云ふことを書き込んであるだけだから、本を買はせるまでは成るべく秘密にして、こちらが先づその實例——と云つても滅多に六ケしいのはせず、一番自分にも容易なのでも——を見せて

なかつた。

『どうしたらよかべか？』渠は一緒に行つて貰ふ中田にこのことも相談した。すると、中田は何の苦もなささうに、

『あすこのを一つ盜んで來ようぢやないか』と云つて、近處に一ケ所かわら屋があることを告げた。

『そだ、そだ！』こちらはそれに乘つてうち喜んだ。

『ぬすとしないでもえいがんに』と、母は少しおそろしさうにしてとめた、『買うて來たほが――？』

『一枚や二枚、分らないだらうすかい――』妻は別に氣にもしなかつた。

『……』賢三は中田と一緒に行つて、手近の物を夜にまぎれて盜んだが、そこの物に一つ手がさわつたかと思ふと直ぐ、先づ自分は何も云はないで驅け出した。そして半丁ばかり戻つて來たところで、あとからこれもおツ驅けて來た中田と一緒になつて見ると、自分はたツた一つしかひらたい瓦を持つてゐないのに、一方は三つ持つてゐた。そして、

『どうせ盜むなら、一つも三つも同じぢや』と、息を切らしながら云つた。

『君はえらい！』こちらは斯う半ば獨り言にしたが、自分の心では一方を自分の相ひ棒としてまことに頼母しいと思つた。

さて、いよ〳〵その日となつた。中田は相變らず書生風のままであつたけれども、賢三は俄かづくりの野師その物の本人として多少でも違つた風をしなければならなかつた。ところが、恭盤じまのした着に干すぢのうは衣や羽織（すべてガス）を着込んで、セルのはかまはまだしもいいけれども、
『帽子だけはおかしいさかい、それをやめなされ』と、母は忠告した。
『さうですよ、見ツともないから。』妻も訴へるやうにしてとめた。
『それほど、君、いいばだに見べか？』斯う中田に云つて、渠自身は今一度トルコ帽を澄ましてかぶり直して見た。氣安い患者のうちで貰つて來た切り、かぶりもしないでしまひ込んであつたのを思ひ出して、自分はこんな時にこそそれをかぶつて行くつもりになつてゐた。
『然し』と、中田は答へた『おツ母さん達がいやがつてとめるものをゐながちかぶつて行くにも及ぶまい。』
『そへば、やめだ。』賢三もとう〳〵それは斷念して、玄關の土間へおりてから、中折れを持つて來させた。如何に自信あることをしに行くにしても、自分に補助者がついてるのを一層たよりに思つて、久し振りの元氣を以つて家を出た。そして『あべ、あべ』と中田を自分からうながしながら、自分も分け持つてゐる荷物をさげて足を電車停留所へ急がせた。

八

殊に寒い日で、おまけに曇つてはゐたけれども、丁度、ひる頃に淺草公園へ着いた。
かみなり門を這入つて、觀音堂を向つて左りへ行くその左りの角(乃ち、水族館があるがわの一番觀音堂に近いところ)が最も多くの人を喰ひとめるに都合のいい場所だ。こちらもそこを當て來たのだが、既に他の野師が占領してゐた。
『困つた、な。』中田はこちらを返り見て私かにささやいた。
『そだ、な』と、賢三も低い聲で苦笑しながら、『今少し早く來てゐれば――』
これだけしか言葉は取りかはさなかつた。そして渠は中田と共に可なり重い荷を分け持ちながら、別々に突ツ立つて、見物人のやうになつてその後ろからさしのぞいて見た。
四十餘りの男だが、かんぬしのやうなかんむりを戴き、辯護士風のころもで胸に白いすぢのあるのを着込んで、こよみを賣つてるのだ。地面へ圓をゑがいて、その中へキのへ、キのトとか、カのト、カのへとか書き、それを説明しながら、何々に當たるものは何の何年生まれで、本年は何歳であるなどと云つてゐる。
『わたしは明治八年の生まれで、本年取つて四十五才ですが、性はどうでしよう』と尋ねたものや、

『一つ呉れ』と、わざとらしく意張つて買ふものがあつても、それはすべてうちわのものらしかつた。

『定價は五十錢ですが、けふは特別のお負けとして僅かに二十錢』と云ふのが、暫らく客待ちがほにしてゐたけれども、ほんとうのお客を得なかつた。そして人の顏々がまた新らしくなつたのを見て、また同じやうな說明を初めた。その辯舌だけは如何にも流暢に達者で、とてもこちらが眞似さへもできようとは思へない。

『………』こちらは、つい、それに釣り込まれて、われ知らずつま立ちをして、人の後ろからのぞき込んでゐた。そして自分の手の重いのに氣が付くと、自分もあア云ふ風にしてこのさげてる荷を開展したいのであつた。が、どう云ふやうにすればその仲間へ入れて呉れるのか、それが分らなかつた。

　そのうちに、そのこよみ賣りは、

『どうもこれぢやア商買になりませんが』と云つた、『あとにまだ澤山順番の人が控へてをりますから、わたくしはお若いのとさし替はります。』

『諸君、僕のは重寶な法律書であります。』全く違つた口調を以つて、殆どすきも見せず直ぐどこからか現はれ出でて歸りかけた人々をも喰ひとめたのは、例の大學生風の男だ。

『………』さう云ふ具合ひでは、とてもこちらが飛び入りをするをりもないのであつた。さうかと云つて、重い物をさげていつまでも順番の終はるのを待つてもゐられなかつた。低い聲で『まア、一と

休みすべア』と告げて、中田と共に奥の方へ進み、觀音堂うらの噴水のそばへ行つて、荷をおろし、そこの鐵柵にもたれかかつた。

　ふたりの目前をはすかひに、千束町の方へ行く人とかみなり門の方へ行く人とが急がしいはたのをさを成して往き來してゐる。が、そんなに寒さうにして無頓着に過ぎて行く人々にも何だかこちらの顏を見られるのを嫌ひな氣がして、賢三は暫らく中田に向つて自分からの發言をすることもできなかつた。

　あたまのうへを氣まぐれに仰ぎ見ると、大きないてふの木がそびえてゐて、その冬枯れしてゐる高いえだえだにから風が當つてひゆう〳〵云つてゐる。そしてセルの袴やもも引きをはいてゐても、地べたを這ふ風がまた下から吹き込んで自分のからだぢうをふるえさせた。

　自分のつれて來た中田のことだから、自分から先づどうすべきかの相談をかけるべきであるが、發言しようとすると、それに先き立つて自分の齒が奥齒からがく〳〵し初めるのだ。但し、これは寒さの爲めばかりではなかつた。

『あべ、あべ』など氣安く云つて家を出た時の元氣が自分に今やなくなつてゐた。折角たよりにしてつれて來た中田も、こちらが物を云はないのをしほにして默つてるのは、てツきり、その方が先づ以つてがッかりしたらしいからである。して見ると、こちらも何もできなくなるのは當り前ではないか

――丁度、おもい荷物をおろしてがツかりしたやうに、すべてのことも？さうだ、それに違ひなかつた。默つてると、中田は多少こちらを馬鹿にしたやうな、甚だたよりない口調で、突然斯う尋ねた、

『君にほんまに鐵の棒をしごく勇氣があるか？』

『……』鐵の棒と云へば、ただの棒ではなからう。必らず赤く熱した棒であらう。そのことをさう、全くあかの他人のやうになつて面と向つて聽き糺されると、實は、こちらもただ〳〵固くなつてしまつて、やアわりとあたたかに自分の確信をいだいて見せることができないのである。こちらは自分の發見だと思ふ催眠術的氣合ひの眞理から云つて――これはまだ實行して見たことはないのだが――熱鐵をしごくことでも、かたなの刄を渡ることでも、その他なんでも皆、やつてできないわけはないと云ふ自信がある。然し、それをそばにゐて手助けして呉れる約束で來た者までが、先づ、自分よりも機敏な野師どもの爲めに何もしないうちから壓倒されてしまつては、こちらも獨りで張り合ひぬけがするではないか？で、家を出る時には、自分の強い確信と共に持つて出たと思ふ勇氣だが、それが實はいつのまにか無くなつてゐるのをおぼえた。一つには、人は皆あア云ふ風に辯舌が達者なのに、自分は固なまりが意識的に邪魔になつて、どうもうまく口が利けぬと云ふ豫感がさきに立つからである。さうかと云つて、然し、この場合、苟しくもこれで商買をしようと云ふ自分として、その通

りには答へられなかつた。わざとにもから元氣をつけて、簡單に尤もらしく、『あるでば！』

『では、やつて見るか？』

『うん、やるでば！』然し、實際は、そんなことまでして見せるには及ばないと思つて、火をおこす用意などを怠つて來たのだ。どんなおほ野師でもさう六ケしいことはわざ〳〵して見せないので――。

で、火鉢をどこかで工面して來るからと云つて、中田には荷物の番をさせた。そしてまた例の野師のゐる前をとほると、私かにどんなことをしてゐるか見て置きたかつた。またのぞいて見ると、ごろつき書生のやうなものが十人ばかり、皆柔道の稽古着をつけて、これも鐵の棒をやつてゐた。

『この棒を獨りでに立てて見せろとおつしやるなら、いつにても立てて見せます』など云つてゐる。

『………』そんなことも氣合ひの極致に至れば理論上できないでもなからう。が、どんな名人でもそれは――できても――實際には一生に何遍と數へるほどしか實行すまいとこちらが思つてると、果してその男は棒の握りをひよいと上へ放してその目の前を離れた方へ棒を引ツくり返し、おのれの方へ飛んで來たその一端をちよいとその手に受け取つた。

それから、石をうへへ投げてその方へ顏をあふ向け、鼻のさきに於いて棒で以つてじようずに受けとめた。それから、また、賣り本の或ページをひらき、そこを見物中の子供を一名えらんでこツそり見せて讀ませ、

『分つたか？分つたら、さア、やつて見ろ。決していていこともあぶねいこともねい――大丈夫だ。』

『……』こちらが見てゐると、その子供は微笑しながら見物の輪をはづれて中へ這入り、見物に向つて自分の喉を突き出した。そしてまた別な見物人の一名をして棒を以つてその喉を突かせた。それでもあとへはすさらないと云ふのである。そのかまへは丁度こちらが棒の眞ン中を握つて突き出しその兩端を見物に押させようとする時のかまへと同じだが、ここでは子供が少しでもちから負けをしてあとへ引く氣味になると、後ろにゐる男がそれと目に立たないやうに指のさきで加勢した。のみならず、その子供と云ふのもうちわの者でなければさう大膽に喉を貸しはしなかつただらう。

九

次ぎには、同じ組のものが石油を入れた竹づつのさきに火をともし、そのもえる火で以つて兩方の胸などをこするのだけれども、少しも燒けどうをしないのである。これも容易にできることで、こちらも自分が印刷して持つて來た本に書き入れてある。

『から云ふ祕密はすべてこの本に』がそこでは定價三十錢を十錢までに下げてゐた。して見ると、こちらのを十五錢で賣らうと考へてゐたのは高過ぎるのであつた。

その棒の組がすんでしまうと、そのあとへ直ぐきた源水のこま廻はしが現はれた。それは見てゐた

くもないので、賢三はそのまま中田の待つてゐるところへ戻つて行つた。そして、

『とても割り込めそでねえ』と告げた。そして一方が火鉢のことに就いて問はないのを丁度仕合はせだと思つた。もう、自分としては、やる氣が全くなくなつてゐたのである。あんなごろつき書生どもとこちらは獨りで當の競爭をしなければならぬかと云ふことだけを考へて見ても、相ひ手のおそろしさが先きに立つた。そして、きツと、自分の見物に向つてしやべり出さうとする所の口が、丁度この噴水のはたでがく〳〵してゐるやうに、矢ツ張り、その時もがく〳〵するだらうと云ふことが豫想された。そしてまた寒さと云ふものも人を不斷よりも卑怯にみち引くところの一つの暗示だと云ひたかつた。

ところが、中田はそれをまだ聽かないのに心で感づいてか、そんなことでは承知しないぞとでも云ふやうな顏つきをして、

『割り込め――なければ――別な――ところで――やつても――えいぢやないか』ぽつりぽつりと、言葉を切りながら、むツつりとして云つた。餘ほど不平らしかつた。

『そだな。』こちらは苦笑を見せてだが、こと更らに手輕く贊成するふりをした。暫らくまを置いてから、中田の機嫌を取るつもりの笑ひを――自分の齒ぐきまで出たかと思はれるほど、にやりと――して、『では、ねす、針を一つ用意さないばまいねい』と云つた。

自分がやらうとしてゐたことを他人もやつてるのが分つた時、鐵棒などはやめて、手に大きな針を突き刺すことをしよう。そしてそれでも血の出ないのを見せれば、人は一層驚くだらうと考へた。その思ひ付きに必要な針を、今、買つて來るからと云つて、再び噴水のはたを離れて行つたのだが――もう、自分はほんのただ中田のそばを逃げてゐて、時間の過ぎるのを待つのであつた。火鉢の時はまだ多少の本氣があつて中途からそれが消えたのだけれども、今度は全く初めからうその口實に過ぎなかつた。

若し近處にぐづ〳〵してゐるのを中田に見られては、今度こそはおこり出すかも知れぬと思はれたので、わざと渠によく見えるやうに眞ツ直ぐにずん〳〵と觀音堂わきをとほつて、かみなり門を出た。そして直ぐ門ぞとに在る御飯つき三品四十五錢の料理店の少しさきの角から右へまがり、その通りの飾り窓や大道あきんどの店を見ながら、ゆツくりと、ずツと活動寫眞小屋の多くある一廓へ出た。

そして兩がはの繪看板を仰向いて一つびとつ見て歩き、それから、その方の大きな池のはたなる屋臺みせの喰ひ物のいろ〳〵や、江川の玉乘りの看板などを見てゐると、ぷんと香ばしい雀燒きのにほひなどが鼻を突いて、忘れてゐた食慾が動き出して來た。そして自分らはけさ餘り元氣づいて、はや晝さへ喰つて來たかうたことが思ひ出された。

『たべて行けばええいがんに』と云ふ母の新潟辯をも亦思ひ出したが、自分はそれに對して、

『よごす、よごす』と、相變らず氣安い國なまりを以つて答へた。
をんなだからこそあれでもかまはないだらうが、自分は男子として、而も野師や大道あきんどにならうとするものとして、これではどうしても困るのである。けれども、それが直せない。そして直さうとすれば、それだけ言葉がもつれて物を云ひにくくなる。それが苦しいばかりではなく、それが爲めに自分を生れ付きよりも一層卑怯にする。けふのことだツて、云ひかへれば、他の達辯な野師どもの爲めに自分らは店を明けぬうちから壓倒されたのだ、威壓されたのだ。そして儲けたものはただこの空腹に過ぎなかつた。自分ひとりでこツそり何か安い物を喰つてやらうかとも考へたけれども、そのかねさへこころ細かつた。
然し、考へて俄かに嬉しくなつたことには、もう、中田もいい加減に往生してゐる筈だ。ぱツと世界が明るくなつたかと思ふと、自分の周圍にどこもかも電氣がついたのである。
十二階の前へ突き當つてからまた右へまがり、花屋敷の前をとほつて戻つて行くと、果して中田も斷念したと見え、むツつりとしてだが、こちらを見るが早いか、反對の横を向いて、
『もう、歸らうぢやないか』と云つた。
『まいねい、まいねい!けふア、もう、歸るべア。』
また荷物を別々に分け持ちしてそこを引き上げた。が、觀音堂の後ろに當つては、今ついた瓦斯燈の

光りをたよりにして、まだ一名の藥り賣りが——前に見たのとはまた違ふが——肩の凝り、痛みどめのくすりに多少の人を集めてゐた。そして暫らくこちらが見てゐるうちに、十錢のものを二つも賣つた。が、それを買つたものはよく見てもうちわのまわし者とは見えなかつた。して見ると、いまだに殘つてゐるのも割り合に賣れる爲めで——恐らく、けふの野師どものうちでいい儲をしたのは、

『このすとだけだべか？』

『斯うして見れば、實際、何が儲かるか分らぬ、なア』と、中田も步きながら、感心したやうに云つた。

『……』こちらもまだ初めぬ商買をだが、もう、私かにそんなのに乘り替へようと考へてゐた。そして電車の乘り場までやつて來た。

電車に乘つて、ふツくらした上へ腰をかけると、渠は自分の精神ばかりでなく、肉體までもがツかりしてゐるのをおぼえた。そしてこんなに意久地なく無駄ぼねばかりをたび〳〵折つてゐてはと、俄かに泣き出したくなつた。

『わたしは、もう、おなかの兒が六ケ月ですから、ね』と、ゆふべ、自分の妻がその母のぐツすり寢入つた時に自分へ語つたのを思ひ出したからである。

そら、兒が生れた——かねはない！その時の用意がこんなことではいつできるか分らないのであつ

た。いや、自分は腹の大きくなつた妻と共に――質屋などを當てにしないと――けふ、あすを、喰へないのだ。

一〇

氣合術心得の印刷物はおもて向きではすツかり返したことになつてるので、かねを拂はないでもよからうけれども、中田に對するかけ引きと妻やその母に向つての遠慮との爲め、渠はその翌日も淺草へ行つて見たいやうに語つた。そしてあすにも何かのきツかけを得て、初めてそれを斷念して見せることにしたかつた。

すると、ひるまから怪しいとも思へたそらが、幸ひにも、その夜なかから雪になつた。そして三日間も降りつゞいた。

そのあひだに、蝦蟇仙人と云ふのが場末のよせへ出て、いろ〳〵の不思議を演じて見せてから、うまく藥りを客に買はせてゐるが、ひび、あかぎれを直す藥りだと云ふことを賢三は錢湯へ行つて聽き込んで來た。

『それは確かにジヤガいもにうどん粉をまぜた物だすかい』と、母はまだ見もしないのに直ぐ云ひ當てたのである。

『…………』賢三はそれをまた不思議に思つたので、母を說いて自分と自分の妻とをそのよせへおごらせた。ついでに、中川もつれて行つた。そしてその仙人の藥りを買つて來てよく調べて見ると、果して母の云ふ通りであつた。『どうして知つたべか』と、自分は母にも聽えるやうに自分の妻に聽いて見た。

『そりや越後の寺では』と、母が直接に受けて、『人助けに皆よう作ります。』

『そだべか？そんなら、おれもそれをやるべし。』斯う云つて、やツとのことで、氣合術の本賣りよりは藥りの方が見込みの多いことを云ふことができた。それから、母に手傳つて貰つて簡單なひび藥りを製造した。そしてしじみ屋からあさりのかひのからを貰つて來て、これに詰め、一とかひ十錢とした。

もう、中田の相ひ手を借りなかつた。たとへ一緒に行つても、相ひ手が先づこころを弱くすれば、それが暗示のやうになつて、こちらまでが卑怯を見せるからである。渠は天氣がよくなるのを待つて、今度は獨りでまた淺草公園や他所の夜店へ出た。そして見物に向つて熱鐵をやがてしごいて見せる、見せると云つては、いつまでもただ眞ツ黑な鐵の棒をしごきつつ、その藥りの効能を說いた。たまには少し賣れる日もあるが、とてもうまい商買にはならぬことが分つたので、それをも一週間ばかりでやめてしまつた。

その一週間を渠は自分でも餘ほど俄かに中田に對して冷淡であつたことが分つた。そしてそれが分つたのは、また、自分獨りでは矢ツ張りたよるべき相談相ひ手がなくて、まことにこころ寂しいのが分つたからである。母は母自身のことばかりしてゐるし、妻はます／＼妊娠の爲めにおもやつれまでがして來た。

『確かに男の子に違ひない』と、母は云つてゐる。

『………』けれども、やがて生まれるときまつてるその兒に對しての用意などはまだ少しもできて行かないのであつた。

『早く何かしないでは、ね――』妻に斯う遠慮がちに云はれれば云はれるほど、渠は寧ろ何とかもツときつく自分を叱つて貰ひたかつた。そしてこの叱りの籠つた意見を中田さんから聽かれるやうな氣がして、再び一週間以前の通りに接近して行つた。

『………』この接近で思ひ出すと、さうだ！こちらが自分の術を向ふにかけようとした時、中田は少しもその兩手に持たせられた火ばしと火ばしとを接近させないでしまつたツけが――。

『印刷屋の註文取りをやつて見たらどうです』と、今度の中田さんは注意して呉れた。

『それもよかべ、君と一緒なら――』どうも自分はそんな慣れいな仕事を自分だけではやれようと思へなかつた。渠なら、一度、その友人のところで活字をいじくつたと云ふ經驗もあるのだが――。

そのうちに、中田はかねを工面しに國へ歸つてしまつた。そのあとで賢三は自分自身で小さいあら本屋をやらうと云ふことを思ひ付いたが、それには十圓と三十圓に對する二人の保證人を立てなければならなかつた。小口の方はおほ屋さんに賴むことにしたが、大きい方になつて與れる人の當てがないので、中田がかねを拵らへて來ると云ふのをたよりにして、もう歸つてはゐないか、まだか／＼と、何度も活字を持つてゐるその友人のところへ尋ねに行つた。そしてやツと歸つて來たのに會つて見ると中田自身の金策もあてがはづれて、ほんの、ただ小さい印刷屋へ割り込むことになつただけであるさうだ。そして前とは打つて變つた他人口調で、

『君は假りに、まア、以前のとは別な郵便局へでもつとめたらどうです？』

『さうしましようか、な』と、こちらもまだ親しみのない人に對するやうな言葉を使つた。實に、自分はそんな人にたより切つてかねの話をしたのがその場で直ぐ後悔にもなつた。

『そのおつもりなら、僕の知つてる人がをりますから、これから印刷所へ行くついでに寄つて紹介しましよう。

『………』別によろしく賴むとは返事しなかつたが、中田が、用ありげに立ち上つたので、こちらもそれについて渠の友人の家を出た。そして渠の知人がゐると云ふ局の前まで來たが、去年の暮れに於けることを思ひ出すと、たとへ別な局ではあつても、這入る氣にはなれなかつた。

暫らく一緒に立ちどまつてたあとで、中田が先づその前を歩き出したので、こちらもま〻ついて行つた。すると、やがて印刷屋の前へ來たところ、こちらがまだ何も云はないうちに、向ふは、

『では、ここで僕は失敬します』と云つて、そのうちへこちらを見向きもしないで這入つてしまつた。

『…………』賢三はなほ暫らくぼんやりとして、また云ひ殘したことがあるやうに思ひながら、そこに突ッ立つてゐた。が、ふとわれに歸ると急に自分はゐても立つてもゐられない氣がした。たツたひとりの心だよりにも見放されたのだ！そしてそれも止むを得ない、自分の少し調子がいいと思つた時には、自分もこちらから思はず渠をおろそかにした。

ぞツと自分は身ぶるひをした。そして、『何をしたツて世の中だすかい』と母が云つたその世の中は、もう、全く自分の獨りぼツちだと云ふ覺悟を得た。

人を怒つて見る氣にもなれないで、足を自分の家の方へ向けた。そしてあら本屋をひらけなければ、また大道のふる本賣りにでもならうと決心した。

――(大正八年五月)――

母の立ち場

『………』

一

おね娘のお花が丁度取つて三十歲になつた年の七月、いよ〳〵兼てからのいひ名づけの男と共に家を持つことになつて、その奉公さきから歸つて來たが、五年間もこちらが待たせてあつたその望みの叶ふわけであるから、そのいろ〳〵な用意の爲めにいそいそしてゐるのは無理もなかつた。男の工藤さんが用達しに出た留守を、ちよツと茶のまへ落ち付いて、こちらとさし向ひに長火鉢のそばへ坐わつて、一服しながら、

『おツ母さんには、子供の時はいぢめられましたが、今度と云ふ今度こそはありがたいと思ふ、わ——大相お世話になりまして』と云つた。

『いぢめられたツて？』母はちよツと不思議なので聽きとがめた。『おツ母さんは少しもお前さんたちをいぢめたことアありやしないぢやないの？』

『そりやア、おかツちやんはさうでしたでしようけれど――』

『……』こちらはこの子がまたその妹に對するひがみ根性を起してゐるのかと取れたので、一層ことやわらかに、『お前さんをだツて――』

『だツて』と、お花はそのいもうとにもよく似た長おもての上品な顏をかしげて、而もこの年をして、もう、よせばいいのに、見ツともないと云つてやりたいほどあまへたやうすで、目を細くして口にゑみを漏らしながら、『亡くなつたお父アんがさう云つてた、わ、よ。』

『そりやア――』こちらはこれツ切り暫らく物が云へなかつた。その娘の云つたことがよく當つてるからではなく、却つて當つてゐないところに、自分や自分の子のこれまでにとほつて來た別々な苦勞が思ひ出せたからである。苦勞は娘らして來ただらうが、こちらが自分の惡い亭主の爲めにした苦勞と來ては、並み大抵ではなかつた。が、そんなことは今の今まで辛抱して、成るべく娘どもにはおくびにも出さないやうにしてゐた。自分がこのやうな下品な商賣をやり初めたのもその爲めなら、自分が三十二の時にお花をその父の方へ附けて、こちらはおかつと共に籍を別にしたのもその爲めだ。そしてお花が十一の時にその父が牢で亡くなつたので、またかの女を引き取ることにした。それが年ごろになつてから、深川の大きな料理屋へ賴んで女中に住み込むことになつて、そして今日までに至つた。今回の目出たいことだツても、これまでになるまでの五年間と云ふものは、自分が工藤さんをそ

の老いぼれた母と共にうちへ置いて、その日常を監督しながら、一家の主人になれる時を見きはめてからのこちらが許した祝言であつた。そのあひだのことで、娘が何を取り立ててさう云つてるか分らないので、込み上げて來た胸の中を無理に押さへて、わざとにも笑つて見せながら、『一體、お前さんはお父アんが何を云つたと云ふの?』

『おこつちやアいやよ——もう、とツくに濟んでしまつたことですから、ね』と、お花は少し舌をもつれさせて、火鉢のふちへかた肱を押し付けながら、前置きのやうなことを云つた。

『………』こちらは笑ひをつづけてたが、とツくに濟んでしまつたことと云へば、自分の亭主がまだ生きてた時のことだらうかと思つた。

『それ』と、いよ〳〵云ひにくさうにして、『おツ母さんはあたしをひどいお米屋へ奉公にやつたでしよう?』

『………』果してさうであつたので、『そりやア、おツ母さんがやつたのぢやアありません。お父アんがやつたのだよ。』

『さう?』なほ疑はしさうにして、『だツても、あたしが牢へ尋ねて行つた時、お父アんが、「お前のお袋が薄情なので、お前もお父アんもこんなに苦勞するのだ」と云はれたのをおぼえてます、わ。』

『隨分うそ付きだ、わ、ね!』

『どうして?』
『ぢやア』と、こちらは娘を見つめて、『お父アんがなぜあんなにたび／＼牢へ這入つたのか、さうしてとう／＼おしまひの牢で死んでしまつたか、お前さんにやアまだ分つてゐないの、ね?』
『そりやア——何度うかがつてもおッ母さんは今までちッとも話して呉れないんだもの!』こちらを見返しながら、少しまを置いて、『おッ母さんに可愛がられて來たおかッちやんだッて、これだけは矢ッ張り知らないやうすだ、わ。』
『おかつだけをあたしが可愛がつたと云ふのアおよしよ』と、こちらはこんな時だと云はぬばかりにいましめてやつて、『云つてわりいことアおかつにだッて云やアしないよ。』
『ぢやア、後生ですから今きかして頂戴よ——おかッちやんとこッそり相談して見てもこれだけはさッぱり分らなかつたんだもの。』
『……』こちらが思ひやつて見ると、それも尤もであつたらう。不斷は死んだ父、生きてる母と兩方へひとりびとりに味かたが分れて、一方が父の死にひがむと、他方が母の愛を自慢するなどのやうすは、ちやんとこちらも想像がついてゐないことはなかつた。で、お花が暫らくうちへ來ることが遠のくと、おかつが横濱の奉公さきから遊びに來た時によく云つて、そのあねの機嫌をもうかがはせにやつた。また、あねが深川からたま／＼やつて來ると、時には親のところへ來る足でいもうとの方を

も尋ねてやれと云つてきかせた。そしてきやうだい同士がふたりツ切りで落ち會ふと、矢ツ張り血を分けてるものだけに、おのづから父のことをも一緒に思ひ出して、いろんな不思議に行き詰つてたのかと思ふと、まことにいぢらしくもあつた。それに免じても、またお花があすからいよ〳〵別に家を持つと云ふ一ときまりをしほにしても、けふは一つ、今まで秘密にしてゐた自分の所天のことをお花に洗ひざらひ云つてしまはうと決心した。さうすれば、おかつの方へは云はないでいつか知ら傳はるだらうと考へながら、『お前さんはお父アんがよくごまかしのにせ札を澤山重ねて、その上のを一枚ほんとうのにしてゐたのをおぼえてゐやしない？』

『おぼえてます、わ。たしか一度見たツ切りですが、「お父アん、それをどうするの」と聽いたら、「手めへらの知つたことぢやアねい」ツて云ひました、わ――まだあたしがお米屋へ奉公に行く前だツた、わ。』

『お前さんも馬鹿な子ぢやアなかたつから直ぐそれに氣が付いたんだ、わ、ね、――あれが、ほら、詐欺賭博のたねだツたんだよ。』

『へい』と、娘は胸をそらせてその上半身を火鉢からあとの方へ引いた。それから、またその半身をこちらへ近よせて、『ぢやア、人があたし達に聽かせてイたんはほんとのことだツたの、ね――うちのお父アさんだけは、まさか、自分から進んでそんなわりいことをしたとは

うそで、みんな無實の罪だと思つてましたに！』
『無實どころか、ね』と、こちらはここへ力を入れた。『然し、それがみんな、お前さん、いつも人の儲けになつてしまつて、あのお父アんと來ちやア、人にばかりうわまへをはねられて、うちへ持つて來るおたからはほんのぽツちりで――それも亦もと手だツてそとへ持つて出ちまうから、このあたしにやアこれがあたしの小使ひだツてこれんばかりも呉れやしなかつた。そりやア、あの死んだお父アんはお人よしでもあつただらうけれど、――わりいことにだツて人のかしらに立つならまだしも、情けないことにやア、いつもただ人の手さきに使はれてゐたのだから、ろくな儲けもしないくせに、そりやア、ね、擧げられる時にやア自分ばかり擧げられて、肝腎のうまい露を吸つてたものアいつも警察の手を知らぬ顔の半兵衛さんで、ね。』
『隨分だ、わ、ね！』娘は自分で泣き出しさうな顔つきになつてゐたのを斯う云つて俄かに引き立てた。
『………』こちらはかの女の頬ツぺたまでが燃え立つたやうに赤くなつたのを見た。多分、その父の愚かさとその愚かさを出しにした人々の行ひと二つながらに對していきどほりをおぼえたのであらう　さすが、江戸ツ兒同士の血を受けたものはあると私かに頼母しかつた。そしてこちらもいよ〱娘に對する親子の遠慮と云ふものを取り去る氣になつて、『だツて、お父アんが間抜けだから、仕かた

がなかつたのだよ。』
『仕かたがなかつたツて』と、娘は今度はまたこちらへ當るやうに、『おツ母さんがしツかり云つてやめさせることはできなかつたの？』
『それが、ね、お前さん、江戸ツ兒のできそくなひによくあるやつ、さ、ね。』斯う一方でうち明けながらも、こちらはそのできそくなひ男の、而も本氣になつてちやんとすれば、小意氣で樣子がよかつた昔のそのいなせな姿をあり〱と自分の目の前に浮べながら、心が見えるものなら、娘に向つてお前の亭主になる人のやうな律義一方の野暮くさい男ではなかつたのを見せてやりたかつた。

二

今は髮結ひのお柳で原町界隈をとほつてるかの女が、お花の父のところへかた付いて行つたのは、決してそんな下品と思へるやうな商買をする女としてではなかつた。神田に有名なかな物屋の娘としてだ。そして立派な仲人が立つて、向ふ島の植半で正式な見合ひもした。こちらはあの人ならいいと云つたし、向ふもそれでよかつた。そして一緒に家を持つてからも、初めのうちは江戸ツ子同士としてまことに樂しく面白かつた。
日本橋の主人すぢからのれんを分けて貰つて、淺草へ袋物屋の店をひらき立てであつたけれども、

こちらの所天としての渠は、財布やたばこ入れを造るにも仕事の手がよく利いてると云はれたし、またその賣り込みもじようずであつた。そのうちにお花が生れる、おかつが生れる。人の手も入用になつて、暮し向きが大きくなつた割り合ひには、この商賈が繁昌して行かなかつた。いや、卷きたばこを多く吸ひ、洋服の方が便利だと云ふ世の中になつて來ては、意氣な財布やたばこ入れなどを珍重しなくなつた爲めか、どこの店だツて、こんな品はうまく行かなくなつたのである。然し、野暮に落ちないだけの律義を重んじ、多少世間の流行をあしらつて行けば、さう馬鹿にしたものでもなかつた。

『ところで、ね、お前さん、ちよいとしたはづみでだよ――魔がさすと云ふのはあんなことを云ふのだらうが、ね』と云つて、こちらは娘に云つてきかせたのであるが、――或晩、おたなから一度歸つて來なかつたことがある。おかねもないのにまたお女郎買ひにでも行つたのかと思つてると、却つて、何でも二十圓か三十圓のお札を持つて、翌々日の朝の九時頃に歸つて來た。そして奥へ這入つて來るが早いか、

『おい、そんなにふくれツつらなんかしねいで、これを見ろよ』と云つて、そのお札をばらばらツとこちらのむツつりとして坐わつてる膝もとへ投げた。

『あら、まア、どうしたの？』ちよツと嬉しかつたので、顏をやわらげて、そのわけを知りたかつた。

『うめいことを教へて貰つたのでい、もう、まじめな仕事なんかしたくもねいや！』

『……』それが詐欺賭博であつたのだ。それからと云ふもの、うちをそとに遊び出して、それが每日のおまんまよりも好きになつた。こちらが何と云つても聽かないで、五圓札や十圓札をたツた一枚うへに置いた胡麻化しの束をもとにして、上野へ下りる田舍ものなどを怪しい宿屋へ引ツ込んで、その持つてるかねをみんな卷き上げるそのおさき棒に使はれた。そしてとう／＼擧げられて最初の牢へ這入つた。

『ぢやア』と、娘は聲をふるはせて來た、『おツ母さんもお父アんの爲めにやア隨分苦勞したのだ、わね。』

『人並みの苦勞ぢやアなかつたのだよ。』何だツて、その留守をどうにか斯うにかして續けてゐたのに、渠が牢から出て來ると、少しも店を持ち直させようともしなかつた。そしてまた同じ惡いことに耽つて自分自身の小使ひぐらゐは儲けて來ても、また刑事とか云ふもの――ほん物かどうか分らなかつた――が每々やつて來て、袖のしたを取つて行くから、結局は何にもならなかつた。そしてそのあとは店の賣り上げをせびつて行つた。そんなことをいつまでやつてゐても詰らないにきまつたから、何度もはたから注意した。が、うか／＼として承知しなかつたうちに、渠はまた擧げられた。

　かの女は二名の兒をかかへて、もう、仕かたがないので、店をしまひ、近處の狹い橫丁に家を借りてをんな髮結ひの看板を出した。そしてあね娘を學校へ送りながら、所天が再び牢から出て來たら

今度こそは懲りごりして改心するだらうと思ひもし、望みもした。
『ぢやア、あの時お父アんが遠いところへ行つてるのだと云つてたのもみんなうそだツた、わ、ね！』
娘の聲はます〳〵うるんで來た。
『まさか、子どもにその親が牢へ行つてるとア云へないぢやアないの？』そして二度目に出て來たものが今度はまたすツかり世のいはゆる『髮いの亭主』になつてしまつた。男はその女房に喰はせて貰ふのが當り前だと云つた風で、毎日のらくらして、矢ツ張り、賭博を忘れなかつた。だから、お花の九つの時に、思ひ切つてふたりの子どもをひとりづつ分け合ひ、あね娘は自然の道理上父のあとをつがせることにして、こちらはいもうと娘と共に籍を別にした。そしてこんな悶着のあとをこちらの商買上の競爭が多い淺草にゐたくなかつたので、二度目の引ツ越し先きなる下谷の方へ來た。
『そりやア、ね、死んだお父アんは腕もよし、賣り込みもじようずだツておたなから隨分惜しまれたんだけど、――かうなつちやアあたしも仕かたがなかつたぢやないの？それにしたツても、ね、子どもに對してえこ引い氣なんぞアなかつたのだよ――可哀さうだとア思へ、さ！』
『ほんとに、ね！』
『そのうちに、御覽！』こちらもいつとはなしに娘のやうすに引きこまれて、聲をふるはせてゐた。
『また擧げられたぢやアないか、ね？――それでも、少しやアまだ性根が殘つてたと見えて、子ども

に對してきまりが惡かつたのだらうよ、お前さんに向つてこツちを薄情だなんて云つて、さ。』

『あたし、知らなかつたのだもの！』娘はとう〳〵はや口に泣き出してしまつた。そして折角今度新らしく拵らへてやつた銘仙の不斷着の袖を兩方ともかたみに目に持つて行つて、そのあとから、あとから出るらしい涙をふきつつ、しやくり上げながら、『あたしが――惡かつた――ので――ございます、何にも――知らないで――おッ母さんを――ばかり――恨んで！』

『なに、ね、お前さんがお父アんを牢へ尋ねたとすりやア、まだたツた十一の時だツたから――』こちらも矢ツ張り向ふの顏が見えなくなつて來たので、ふと、繻絆のたもとを探したが、ひとへ物の時節だからそれがないのに氣が付いた。そして急いで鼻がみを出して先づ鼻をかみ、そのついでのやうにして目をもふいた。そして考へて見ると、その年にお花の父が牢死したので、かの女をその人情知らずの米屋からこちらへ引き取つたのである。あの米屋でぶたれたり、こき使はれたりしたと云ふのをみんな母のせいだと云はれてゐたのでは、子供のことだから、それをそツくり信じてこちらを恨んだのも尤もであつたらう。思へば、そんなことのせいでもあつたらうが、この娘はうちにゐても強情で向ふ見ずで、お掃除や勝手向きのことはしろと云つてもなか〳〵しないで、何かと云ふとその母やいもうとに喰つてかかつた。そしておしまひにはよくすねてしまつた。ゐの五黄は生まれ星がつよくツて、是が非でも押しとほさうとするとはよく云つたものであつた。然し、――『つき日の立つのア

早いもので』と、ヤツともとの聲に立ち返つたが、その早いつき日のうちに、また、ふたりの娘を自分ひとりの腕で年ごろまで育てたり、それから奉公にやつても間違ひのないやうにかげながら主人に頼んだり、監督したりして娘どもにはまだ云へない多くの心配や苦勞をして來た。そしてまた下谷の方では自分の髷型が餘り古くなつて、はやらなくなつたので、數へて見ると、丁度六年まへからこの小石川の原町へ來て、競爭者の少いあひだに手をひろげたが、この頃ではまたここでもふる株になり過ぎて來たことをも考へた。そして一方の壁に添つて、うへの神棚の下で、簞笥の上に在るお廚子の中には、自分のたツた一回持つた所天の位牌を娘が奉公さきからひまを取ると同時にこないだから持つて來てあるのをまた少からずなつかしく思ひ出しながら、『もう、お父アんが死んでから二十年――お前さんは三十になつたし、おかつは二十七。』

『さうだ、わ、ね――もう。』娘もやツと涙のかわいた顏を擧げた。『その長いあいだ、罪もないおツ母さんを恨んでて――あたしはなんて馬鹿でしよう？』

『………』こちらは、もう、それには氣をかけなかつた。『おかつは妹のくせにあねより早く旦那を持つた代りにやア、實は、この頃さきと別れたいと云つて來てイるんだよ――こツちからはまだどうとも返事はしてやらないが、ね。』

『そりやア――おかツちやんがあたしにやア、もう、せんから云つてたことだ、わ。』

『さうかい？』こちらはこの娘がいもうとのことに就いて母よりもさきに知つてるのを得意さうにしてゐるのに對してちよツと意外をおぼえた。同時に、さう云ふ身のうへの大切なことを先づ親に相談しないで、どいつもこいつもなぜぼんやり默つてゐたのだらうと云ふ不平がむら／＼と起つた。
『どうも、聽いて見ると、旦那がけちんぼうでうまく行かないやうすだ、わ』と云ふお花に向つて、こちらはこの不平をもらすつもりで、
『お前さんもお前さんぢやアないか、ね、さう云ふことを聽いてながら、早く親に知らせないで？』
『だツて、おツ母さんにやア――心配するから――まだ知らせたくないツて云つてたから、ね。それをとう／＼云つてよこしたのはよく／＼になつたんだ、わ。』
『……』さう聽いて見ると、別に親として何も云ふことはなかつた。寧ろきやうだい同士が――兎角、別々な親のことから折り合ひがよくないと見えながらも――さう、いつのまにか打ち解けて語り合ふほど親しんでゐたのを結構だと思へた。そしてあね娘はあね娘だけのことがあると賴母しくなつて、『して見ると、矢ツ張り』と、一段かの女の方へその機嫌を取る爲めに聲を低めて行つて、『くツ付き合ひはいけない、ね――お負けにお目かけさんだから、ね。』
『そりやア、おかツちやんは早まつたんだもの！』
『……』こちらが見ると、お花の朖かに思ひあがつたやうな云ひぶりには、また、憎いほどそのい

もうとに對するきつ〳〵しさがあつた。が、それをこちらは持ち前の病氣の爲めだと見てゐるのである。子宮內膜炎とかが久しくつづいてゐるので、その爲めにからだばかりでなく、その心までが始終いら〳〵して、われにもないきついことを云ふかと思へば、俄かにまたそのいもうとよりも意久地なく、めそ〳〵泣き出す。こちらはその度々のことに面倒くさいのを知つてるので、大抵の場合は成るべく當らず觸らずにしてゐる。

『あたしのいひ名づけができて、それがおツ母さんと一緒に住むことになると、もう、直ぐあたしがおかツちやんに代つておツ母さんのあとを取るものと邪推したんだもの。』

『そんなことはありやアしないぢやアないの？あたしはよくおかつにもわけを云つて聽かせたから——ねえさんを見込んでお嫁に貰ひたいと云ふ人ができたが、どんな人物だか見きはめを付けるあひだおツ母さんが預つて一緒に住んで見るのだからツて？』

『だツて、おかツちやんにやア分らなかつたのだ、わ。ねえさんも男にくツ付き合つたのだから、あたいだツてもそんなのを見付けてもかまはないなんて行つてよこして。あたしの事情はおツ母さんが御承知の通りだのに。』

『お前さんのことは知つてますが、ね、おかつがお前さんにそんなことを云つてよこしたとア——』

と、こちらはとぼけてゐた。

『知らないことがあるもんですか、あたしがおかツちやんの手紙のをどし文句まで見せたぢやアありませんか、おツ母さんはいつもあたしの云つたことは氣にとめて吳れないんだから？』

『……』氣にとめないどころではない。いや、とめ過ぎるほどである。が、母として見れば、どうせ同じ腹から出たものが、あねとしてさういもうとのことを一々やき〳〵と取り上げるにも及ぶまいと思へたのだ。

三

五年間もその好いた男をその母に預かられて、母の許しが出るまでを待つことにし、奉公さきから時々うちまで逢ひに來ても、お互ひに若い男と女とのうやまひ合つた話を取りかはした末、一度だツてとまりもしないで歸つて行くあね娘の辛抱づよさ、奥ゆかしさを、母はわが子ながら私かに感心してとほした。それに比べると、あねにあらぬ濡れ衣をきせても、自分が母の愛におぼれて勝手な眞似を急いだいもうと娘は、殆どかたなしのみだら者であらう。

けれども、そのおかつはこちらがまた自分のあと取りとして可愛がつて來たものである。あと取りだとは云ひながら、さうだ、自分の暮し向きの不如意やよその行儀見習ひやの爲めに、可哀さうにも、十七つ時から、横濱へ、これも矢張り料理屋へやられた。そして初めのうちは、こちらの仕つけがや

『然し、もと〳〵みだらな女にできてるんだらう』と叱り付けたことがあるほど、母の許しも得ないで、而もあまりわけもなく、今の旦那の云ふことを聽いて神奈川へ家を持つことになつた。それを一度はいましめて置かなければ氣がすまないので呼び寄せたのだが、その時、丁度あね娘も呼ばないのに來合はせてゐた。かの女は工藤に會ひたかつたのだらうし、こちらも渠を預り立てでまだ珍らしかつた。で、渠とお花とのあひだを尋常の話がうまく行くやうに努めた。

『おツ母さんはあたいばかり叱つて――ぢやア、ねえさんはどうです、ね？』

『馬鹿云へ！』これは確かにえこ引い氣のないところであつた。『ねえさんは、ね、あたしが仲に立つてまだいひ名づけができたばかりだよ。』

『かげで――分るもんですか？』

『お前さんぢやアあるまいし』と、この時、お花も溜らなくなつたかして口を出した。

『………』こちらはそんなことでのきやうだい喧嘩は殊に見ツともないと思つたので。『もう、やめろ――どいつもこいつも勝手な熱ばかり吹きやアがつて』と云ひながら、そのそばにおとなしく坐わつてたお花のいひ名づけに笑ひを向けた。すると、工藤さんはした手からだが皆の仲を取るやうにして、

『然し、まア、おかツちやんはねえさんよりも先きへ家を持つことができたのアえらいのですよ。』

『そんなことが――えらいもんですか？』
『然し、わツしなどを御覽なさい。まだ塗師屋の小僧も同樣で、やツと家を持つかねを拵らへてますところでげす、ぜ。これならいいと、おツ母さんのお許しがでるのアまだまだいつのことだか分りません。』
『そりやア、ねえさんの好き勝手からですから、ね！』
『何を云ふ、おかつ！』こちらはかの女の不しつけをまた叱つて、皆が行儀を正しくしてゐるあひだにあつて、かの女だけが兎もするとかた手を少し後ろへ突いて、膝をくづしさうになるのを注意した。が、おかつのやうな、どちらかと云へば、おめかけ肌か、ばくれん女になりさうなものには、工藤のやうた律義一天張りの男は馬鹿に見えるのも尤もで――神奈川に囲はれるやうになつたのは却つてそのがらに似合つてゐるのだらうと、口にはそれと出さなかつたけれども、私かにこちらの心ではあきらめた。今、それを思ひ出して、お花に、『おかつが初めてお召しをぞべらぞべらと着て來てから、もう、二、三年――いや、四年目ぢやアないの？』
『さうだ、わ、ね、もう、――工藤さんがおツ母さんと一緒に住んでから、五年目ですもの。』
『おかつにも子供ができないとすりやア、お前さんにやアなほ更らだよ――よく療治をさせて貰はなくちやア。』

『さうかも知れません、ね。』斯う答へたお花は、それでも、ちよツと顏を赤くした。いよ〳〵結婚のできたのを嬉しく思ひ出したのであらう。

『……』こちらはそれもさう喜んで貰はないでは詰らないのである。工藤にはこの五年のあひだにやツとのことで正味六十圓を溜めさせた。それへ、お花の貯金九十圓と、お花の所有物の一部分を質に入れさせた三十圓と、都合百二十圓を足した。この總計百八十圓を資本として、いよ〳〵あすから指ケ谷の電車通りへ塗師屋をひらかせることになつたのだが、その所帶道具類はすべて母が渡してやつた――あり合はせの物に新らしく買つたのを足して。

『いろ〳〵おツ母さんにやア御厄介をかけまして』と、かの女はありがた涙をこぼしたが、その時こちらも一緒に泣かずにはゐられなかつた――工藤さんの手まへもあつたけれども。と云ふのは、子供が大きくなるに從つて、ます〳〵可愛くなつて、たとへこれまでもよそにゐたのであるけれども、そしてその男は却つて長らくうちにゐたのだが、いざ、その男に渡すのだと思ふと、惜しいやうな、寂しくなるやうな氣がして溜らなかつた。が、お花のゐ慣れたところがところだけに、こまかい所帶のことなどにまだまだ氣が付かないやうすを見ると、まだ、この上にも、いつまで親の厄介になつて來るかも知れなかつた。

『おツ母さんなどは、もう、お前さんの年にやア――とツくにお父アんと別れてゐたから、ね――立

派に一本立ちでゐたッたよ。お前さんもそれを思へば、いつまでも親に厄介はかけられるものだと思はないで、もッとしッかりしないぢやア。』

『そりやア、おッ母さん』と、お花はこちらと工藤とを見比べながら答へた、『もう、これからうッちやつて置いて御覽なさいよ——いまにおッ母さんをらくにしてあげますから、ね。』

『………』三十にもなつては、もう、むろんのことでなければならないが——と、こちらはその時思つた。今、丁度誰れもゐないのを幸ひに、『お前さんにも子供ができれば早く納まるのだが、ね——おかつは早く產まないから仲がうまく行かないのだらうよ。今どきの若いものはどうしてさう子宮病なんかになるのだらうか、ね？たしかに不養生をしてひえるんだらうよ。』

『あたし達にやア確かにさうでしようよ——だッて、寒中の寒い時だッておかまひなしですから、ね、お客さんのお膳やお銚子を持つてはしごのあがり下りばかりにだッても腰が氷のやうになつてしまひます、わ。』

『氣を付けて中將湯でも飮んでゐなさいよ、冬ひえるものは夏になつても矢ッぱしひえるんだから、ね。』

『さう、ね。』

『………』こちらが娘を見ると、かの女はまた目をしよぼ付かせてゐた。また向ふを泣かせてそのも

らひ泣きをしたくもなかつたので、話をおかつの身の上に轉じて、『あれもどうせ駄目なものなら、もう、工藤さんもゐなくなるのだし、こツちへ引き取つてしまつてもいいのだが、ね。』

『どうせ駄目でしよう。可哀さうだから、引き取つておやんなさいよ。』

『さうだ、ね。』考へて見ると、ずツと以前一度引き取つたあね娘をまたそとへ出すとなると、今度はまた假りにでもよそへ出してあるいもうとの方を引き取らねばならぬわけだ。そのあひだにおよそ十九年を過ぎてしまつた。『數へて見て御覧よ、淺草に九年、下谷に五年、この原町にまた五年として見りやア――但し、さうきツぱりとは行つてゐないんだが、ね――兎に角、世間のことア先づ五年一と昔で變はつて行くから、ね。かみいのやうな商賣でも、これはあたしに腕がないせいかも知れないが、そりやア、ね、いい加減になると、お客さまがたの方から飽きが來るものだが、夫婦だツてさうだよ。おツ母さんのやうに、ふたアりも子供があつて別れるのアよく〱のことだが、ね、早く子でもできないぢやア、もう、二三年目から夫婦同士にごた〱が起るのア當り前で――お前さんだけは、然し、こツちの目がね通りさうならせたくないのだから、ね。』

『あたしは工藤さんとアどうあつても辛抱致します、わ。』

『そのつもりで頼むよ。』こちらはおかつをいよ〱引き取らねばならぬ上に、また折角かた付けるお花に同じやうなことがあつてはと云ふことが心配になつてゐた。

四

工藤がお花と共に指ケ谷町に塗師屋の店を持つたし、渠と一緒にゐた老母も新夫婦の邪魔にならない爲め淺草にゐる渠のあねの方へ行つたしして、かみ結ひの家は俄かに當の母ばかりになつてしまつた。

他の人がゐた時には得意さきへ出ても行つたけれども、今度は戸を締めて出るのが臆劫になつた。殊に、夏のあひだは朝ツぱらから、この狹いたツたふたまの家でも明けツ放すと涼しくツて、客を坐わらせる玄關の窓からは酒井さまのお屋敷の高い庭木が見え、奥の坐敷からはうらに隣りの成り金さんの山が樹木を繁らして見えた。

一段落が附いたのだと思ふと、何だかがツかりして俄かに年がいくつか寄つたやうな氣もした。が、それでもまだ次ぎから次ぎへと來る客があとを絶えた時など、三人もごちや〱と住んでゐたのよりも、たツた獨りの方がのんびりして氣苦勞はなかつた。ちよツと長ぎせるで一服しながら、自分の手で自分が澁茶一杯を飲む度にも、氣がすツきりするのであつた。

ぽんと、きせるを火鉢のふちへはたいても、その音が指ケ谷へも神奈川へも響いて行くやうに思へて、母としては今やふたりの娘の無事を祈るより外に樂しみはなかつた。これまでにあつたいろ〱

なきやうだい喧嘩を思ひ出しても、尤もな道理も兩方にあり、無理なこともまた兩方にあつた。いつもその仲を取つてこちらはその兩方の云ひぶんを立てるやうにして來た。

そしてそれ以上のことは神さまに賴むより仕かたがないので、うちの神だなやお臺どころの荒神へはいつもおみきやお燈明を絶やさないやうにしてゐる。お廚子の方には、然し、左ほど信心がなかつた。と云ふのは、自分は所天と離婚して以來、自分の里へは歸らないでその分家にして貰つたので、先祖代々のお位牌と云つては、自分のもまた所天の方のもなかつた。して見ると、自分には、お廚子に小さい阿彌陀さまが這入つてゐても、ほんの、ただ飾りにしか思へなかつた。

所天の方のは、そのあとを繼ぐことになつてゐる――そして今回工藤を養子にしたところの――お花が持つてゐるので、奉公さきからいよ〳〵引き上げて來てゐたあひだは、それをお廚子に入れてあつた。そのあひだは久しぶりで亡き所天にも會ふやうな氣がして、兎に角、それをほんとうにも拜むだ。が、今はまたそのほんとうの物をお花が持つて行つてしまつた。

『おツ母さんにやアお氣の毒ですが、ね、あたしも拜む物がなけりやア困りますから、ね』と云たツけ。

『……』さうだ、あの子も小いうちから苦勞した爲めに、そのお父アんのお位牌を手放さないで信心ぶかいのを御主人も信用してゐて呉れてゐたのであつた。こちらのこころ寂しいことなどは、あの

子の爲めには、辛抱してやらねばならぬのである。

それは七月からのことであつたが、その前から旦那と母とのあひだにいろんなかけ合ひを進めてゐたおかつが、いよ〳〵十月になつて、迎へに來いと云ふ電報をよこした。そして迎へに行くと、旦那と奇麗に手を切つて母と共に歸つて來た。

『あたい、ね』と、これはまだ京濱電車に乘つてた時のことだが、旦那と切れたのを悲しんでるやうすもしないでほほゑみながら、『矢ツぱしおツ母さんのあとを繼ぐにやアをんな髮いになりたい、わ、これから、おツ母さんも、ね、さうするより仕かたがないと思つたのだよ。』

『ああ。おツ母さんのした梳きにして頂戴、ね。』

『さうでしよう』と、おかつもあまへた時にする通りまた目を細くしてこちらの顏をのぞき込みながら、こちらの思つたことを云ひ當てたのを喜んでるらしかつた。『あたいだツて、少しやつてりやア、おツ母さんのうへへは出られないまでも、おツ母さんほどにやアなれます、わ。ねえさんのやうにこれを全く嫌ひぢやアないのだから、ね。』

『………』こちらはおかつが會ふと直ぐまた話にまでもそのあねを押しのけるやうにするのを、そこにはゐないあねに對しても氣の毒に思つた。が、いもうと娘の年が行つてる割りにはいまだにあどけないところがあるのも亦可愛かつた。ただこの子の一番缺けてると思へるところを注意させる爲め斯

う告げた、『ほん氣でやつてれば、ね。』

『ほん氣でやる、わ！』からだをゆすりながら、かの女はまた斯う答へた。初めは何だか不平らしく口をとんがらかせたが、直ぐにこ付いて一層その顏を突きだして來て、あくどく念を押した、『した梳きにして頂戴、ね。』

『ああ』と、ただすげなく答へて置くより仕かたがなかつた。娘がこんな年をしてなほ母にあまへてゐるのを、あたりの乘客どもが頻りに見つめてゐたのに氣が付いたからである。

あねの結婚祝ひには母がいもうとにも命じて旦那の身ぶん相當の贈り物をさせて置いたのだが、斯うして歸つて來たしるしにも多少の物を携へて工藤の店へは初めての見舞ひに行かせた。あねが結婚以來例の病氣の段々ひどくなつた爲めに寢てゐることは、こちらには、その前から分つてゐたのだ。

するとおかつは見舞ひから歸つて來て、

『あのねえさんの顏いろツたらない、ね。あれぢやアにイさんが可哀さうだ――まるで土左衞門も同樣だ、わ』と云つた。

『馬鹿をお云ひでない！』この子の思ひ切つたことを云ふ惡いくせはいつものことだが、若しあの癇癪持ちのあねに聽えたら、またほん氣になつてどんなにおこり出すか分らないではないか？それに、この子だツても、これまでに子供ができないとすれば、矢ツ張り、あねと同樣な故障が多少でもある

に違ひなかつた。神奈川の旦那としツくり行かなかつたのも、ひよツとすると、その爲めだらうと思つたからこそ引き取つてもやつたのだ。いろけと云ふ物がなくなつたものに取つては、わが子のことを想像して見ても、若いものが何だかきたならしくツて溜らなかつた。『人のことをかれこれ云ふよりやア、ね』と、つい、こちらはおこつてしまつて、『お前さんがそんなことにならないやうに氣を付けるがいい！』

『ふん！』娘は鼻で笑つたが、それをこちらもまさか親に向けたのではないと信じたので、向けられたあね娘の肩を持つてやるつもりで、

『人がここにゐないからツて、さう馬鹿にするものぢやアありませんよ！』

『だツて、あたしやアねえさんのやうに隱しごとなんかして來ませんでしたから、ね。』

『隱しごと――？』ふと、こちらは行き詰つたのである。これは、そも〳〵何を意味したのであらうか？人めを忍んで暫らくのあひだでも男に逢つてゐたことを云ふのなら、あねよりも却つてそんなことを云ふいもうとの方がさうであつた。如何に不正直なものでも、自分の恥ぢになるやうなことを自分で云つて人に押し付けることはなからう――結局、ばれた時は矢張り自分の惡くちになつてしまうから。して見ると、………さうだ、こちらの顏までが思はず赤くなつたかのやうに取りのぼせた。娘が聽いたのか？想像か？母としては迷はないでは、また怒らないではゐられなかつた。そんなことを

云ひ合ふやうな子には育てなかつたつもりだが、どいつもこいつも仕かたがなくなつてゐたのかと思ふと、苟しくも、先づ、その下品なことを口に出した娘を叱らないではゐられなかつた。それでも、實際に何をさしてゐるとは見せないで、『何を證據にそんなことを云つてるんだ、ね？』

『ねえさんがいつか云つたことがありますよ。』

『なんだ、ね、見ツともない！』こちらの權幕には娘も横を向いて默つてしまつた。

あまりにけがらはしいので、火鉢のそばを立つて行つて臺どころの棚から火うち石を取り出し、神だなや部屋べやを切り火をして淸めたのである。

それで氣が濟んだので、娘と別な話をしようと思つたが、かの女はまだ何だか不平さうであつた。

『何だツてそんなにむツつりしてイるんだ、ね？』

『だツて』と、かの女はやツとまた口をひらいて、『おツ母さんはうちの道具をあんなにねえさんに分けたぢやアありませんか？』

『……』うん、そんなことをおこつてゐたのか？この娘も矢張りけち臭い根性があるのだらうが、けち臭いと云へば、あねの方がどんなにさうだか知れやアしない。子供の時からいもうとの物をせびり取つたり、こツそり盗んで喧嘩になつたりもしたが、今度だツて、實は、隨分それからそれとねだられたのだが、目出たい時のことでもあるから、さういやな顏を見せなかつただけのことだ。現に

角、そんなことをおかつがおこつてるなら、入らざらんことは省いて早くはツきりとさう云へばよかつた。さうすれば、きたならしい話なんかは抜きにして、直ぐ申しひらきをしてやつたものをと思ふと、その申しひらきが時をはづれてしまつたやうにも見えた。で、くど〳〵しいことは云はないで、ただ、『そんなけち臭いことはお云ひでない』と云つてのけた。

『だツて――』と云つて、娘もただこれツ切りにしてしまつた。

『………』氣ままな子ではあるけれども、今度引き取られると直ぐこの家を自分の物に思つてるのか、却つて、可愛く頼母しくないこともなかつた。

兼てから客の髮を見せたり、結はせたりしたこともあるので、おかつにはした梳きぐらゐのところ得は前以つて備はつてゐた。

母はまた獨りの時には出るのを臆劫がつたけれども、今度は相手を得たので、そして時節も戸障子を成るべく締めさせるやうになつたので、ふたりで留守の締まりをしてまたお得意さきをまわる氣になつた。得意をまわらないで客を待つばかりでは、どうしてもいいうちの奥さまやお孃さまは扱へないのだ。

そしていいうちをまわるには、おかつを――器量がよく生まれた子だけに――成るべく上品な風や言葉使ひをさせるやうに云ひ付けた。すると、或お屋敷の旦那などは、奥さまのおぐしができ上る頃

にそれを見に來て、

『かみいさんはいい娘を持つてるぢやアないか、おれに一つ世話をさせて呉れないか、ね』と、こちらに言葉をかけた。

『旦那さまは御冗談ばツかし！』娘がさきへまわつて行つて、もう、ここにゐなかつたからいいやうなものの、かの女のゐる前ではそんなことを云つて貰ひたくなかつた。が、商賈がら、むきにおこりもできないので、毛すぢ立てで奥さまの髮をふツくらかき出しながら、ただ角立たないやうに答へた。『あれはうちの婿取りでございますので、身ぶん相應の相手がございましたら、――どうか――お世話――願ひます。』

『上品で、なか〱器量もいい娘さんですから、ね』と、奥さまもでき上つた髮を合せ鏡に寫しながら云つて呉れた。

娘にはあさ黄のこまかい立てじま銘仙の絆纏を買つてやつて、髮を梳くに便利の爲め、袖をきりりとしたもじり鐵砲にして着せてあつた。

五

『少しかね切れがよくツて、うわツつらで如才のない人なら、さらにあります、わ。おかツちやんは

まだ苦勞が足りないから、そんなのに引ツかかつたんでしようよ。』お花は以前に斯う云つてたことがある。

『あたしは少しやァ頓馬な男でも律義なのを一生のつれ合ひにした方がいいの』と云つて、かの女は工藤を見込み、工藤はまたかの女の入り婿になつたのだ。

が、互ひに待ちに待つた結婚であつたからでもあらう、その愛情が俄かに激しくぶつかり合ひをしたのであることは、母もかげながら知つてゐた。果して家を持つが早いか、その爲めにお花はその持病がひどくなつて、とこに就きツ切りになつたのだ。そして何度もこちらから見舞ひに行つてやつた末、それとなくくち明けられるところでは、男の律義と云ふことは少しも病氣を直す藥りにはならなかつた。

『そんなことをしてィちやア、ずん〳〵ひどくなるばかしぢやアないか、ね？』

『だツて、仕かたがありませんもの！』

『馬鹿々々しい！工藤さんも少しやアその女房の末ずゑのことを思つて呉れたらいいのに！』斯う低いけれども、つよい聲で母はいきどほつた。が、工藤は店の方へ出てゐたので、渠には聽えないと安心してゐた。土左衛門のやうだと云つたいもうと娘の惡くちも、實に、尤もなところがないではなかつた。

暫らく引き分けて置く方が工藤にも娘の爲めにもお互ひにいいだらうと思つたので、母は無理に當分のあひだ娘をうちへ來させて、保養させることにした。そして電車には乘れないだらうと云ふのでそろそろと人力に乘つて——それも人目をさけて、夜——うちへ引き込んだ。そしてうら縁に添つた障子ぎはへ床を取つて、天照太神宮と書いた軸のかかつた床の間の方をまくらにして寢させた。

十月の末のことで——もう、近所あたりから聽えて來るすがれた蟲のねにも熟した秋の夜の趣きがしんみりと響いてゐた。

『どこかにいい聲で蟲が鳴いてゐます、ね』と、お花は天井へあふ向いたまま誰れにともなく云つた

『もう、秋も更けて來たから、ね。』母が斯う受けてやつた。

『………』おかつは、どう思つたのか、こちらが前にして坐わつてる火鉢の猫板のうへにあつた一輪ざしの黄の小菊を花さしごと手に取るが早いか、あねの枕もとへ持つて行つて、『ねえさん、おはなでも供へてあげますよ』と云つて、それをそこに置いた。

『さう。』あねはちよツと顏をそらせてまくら元を見たが、それツきり默つてしまつた。しく〳〵泣いてるのであつた。

『………』また初まつたのかと、こちらはわざとうツちやつて置いた。人のよく云ふヒステリなのだらうから、泣くだけ泣いてしまへば氣がすむものと考へた。さうかと云つて、またあねのその樣子を、

——こちらと火鉢をさし挾んで正面に坐わつて、横向きに、——意地わるさうに見てゐるおかつを私かに憎らしかつた。

『ねえさんは自分でもいいことをしてゐながら、泣くにやア當らない、わ。』

『默れ！』こちらはいもうと娘のはしたなさを叱つた。

『……』あねは一層こらへ切れなくなつたやうにくるりとうつ伏しになつたかと見ると、かけてある蒲團にまで浪を打たせて居たが、自分の押へた口にわツとそのむせび泣きを破裂させた。

『およしよ、見ツともない！』

『……』なほむせんでゐるのが苦しさうなので、特別に何か急病でも出たのかと思へて、『どうしたと云ふんだ、ね』と叱りながらも、枕もとへ行つて見た。

すると、あねはすすり上げながら、

『だツて——おかツちやんは——あたしを——もう——死びと扱ひに——して！』

『馬鹿！』こちらはあねの蒲團へかけてた兩手を引ツ込めた。『子供ぢやアあるまいし！』

『冗談に云つたのだよ！』おかつはただ笑つてゐた。

『冗談にだツて何だツて、病人をいぢめるやうなことアお前さんもおひかへよ！』

『はい〳〵。』親やあねを馬鹿にしたやうな返事をしてから、獨り言のやうにむづかつて、『ねえさん

はひがみがつよいんだもの！』
『………』實際にそんなところがあねにはあるのだ。けれども、『かツちやんかずの子、にしんの子』などと云つて、小い時に、あねがよその子供と一緒になつていもうとを泣かせてゐたのを思ふと、今ぢやア五分五分だらう。

兎に角、その明くる日から、工藤の店には御はんをたくものがなくなつたわけだから、母はいもうと娘に命じて朝、ひる、晩と時を見計つて、三度の世話をして來させることにした。

すると、茶目のおかつは塗り立てのお椀を工藤さんの見てゐないうちにこツそり口へ當てて見たとかで、その爲めに口のまわりへ圓くうるしのかぶれができた。

『馬鹿だ、ねい、まるで喰はん喰はんの繪のやうぢやないか、ね？』

『………』三疊のすがた見へ行つて、おかつは自分の顏を寫して見て、『成るほど、ね！あたい、當分、そとへ出るのアいやだ、わ。』

『………』これにはお花も聽いてて枕のうへで吹き出した。

『お前さんが勝手にしたことだ。』母もからかひ半分に斯う云つて、した梳きに出るのだけはやめさせてやつたけれども、工藤さんの世話は矢張り三度ともやらせにやつた。

そのうちに十二月に這入つた。そして歳の暮れが近づくと塗師屋の商買も多少急がしくなるし、お

正月の用意もしなければなるまいしするので、大分によくなつたと云ふお花を再び歸してやつた。

さうなると、おかつはさう度々向ふへ行くには及ばないのだのに、今度は母に隱れて行つてたかして、あねから苦情が來た、

『おかツちやんをさう度々來させて下さると困ります』と云ふ。

『ねえさんのところだから、見舞ひがてらに行つてやつたんだのに、隨分現金だ、わ』と、おかつは怒つたのである。『病氣の時は人をさんざん使つて置いて、直ると直ぐそんな薄情なことを云つて！』

『だツて、ね、お前さんも當分行かない方がいいよ。親切を盡すのアこツちのことで、その親切を恩に着ると着ないとア向ふの勝手だから、ね。』斯う云つて、母もあね娘のぶつきら棒の通知を少し不愉快に感じた。が、また考へて見ると、あのいら〳〵した心でふとしたことを種に工藤とおかつとのあひだを疑ひ初めたのではないのか知らんとも見た。さうでなければ、今が今までうちにごろツちやらして保養を受けてゐながら、俄かにさう恩知らずのわけを云はないで、おかつの行くのをさしとめる筈がなかつた。果してさうなら、何かの思ひ違ひに相違なかつたらう、うちのおかつに限つてあねの亭主を寢取るやうな、そんな不埒なことはしまいし、――殊に、工藤のやうな律義ものをかの女は好かないたちだから。

『あんなけち臭いところなんか、もう、たとへ呼びに來たツて、二度と行つてやるもんか！』

『さう、さ、それがいいよ、ねえさんはあんなたちだから、ね。少しうツちやつて置いて、自分の氣がすむやうにさせてやる方がいいんだよ。』そのうちにはおのづから奇麗にことが分つて、向ふからまたあたまを下げて來るだらうと思へた。

六

すると、歳が明けて、正月も四日になつた日の午後二時半頃、工藤さんが顔を眞ツ青にして息をせいせい切らしながら母のところへ飛び込んで來た。

『お、おツ母さん、ゐ、ゐますか?』

『ど、どうしたと云ふんです、ね、その苦しさうなやうすは?』こちらは客の髮を結つてたので、成るべくさう見せないやうに努めたが、きツとお花とのあひだに事件が起つたものと感づかれた。そしてその場に、お花の暮れによこした通知のことが思ひ合はせられた。おかつが不埒にも、矢ツ張り、さうであつたのか知らんと考へると、お客さまの前では話し合へぬことであつた。『まア、奥へ行つてなさいよ』と、渠に命じた。そして奥にゐるおかつをこちらへ呼んで、髮の道具をわざと何を取れ、かを出せと云つて引きつけて置いた。が、こちらはもつとひを結はへる手もとがわく／＼してよくきまり兼ねた。

またあとへ來たお客さまをこれからよんどころない用があるからと云つて斷わつた。そしておかつと共に工藤の前へ出た。

『おほかたそんなことだらうと思つた。』

『お、お花が殺すと云つて、で、出齒をふりまはすのです！』

『馬鹿なねえさんだ、ね！』

『お前さんは默つて！』こちらは娘を叱り付けて置いて、『どうしたツてそんなことを！』

『わツしがおかツちやんとくツ付いてると云ひますのです。』

『誰れからそんなことが知れたんでしよう？』ちよツと斯う云つて息をついだ。

『そ、それが』と、工藤はまだ苦しさうにして、『近處のものがお花にしやべつたとかで――わツしとおかツちやんが一緒に夜、ぶらついてたツて。』

『………』こちらはまだ息を休めてゐた。

『おツ母さんにやアすまないと思ひましたが、とう／＼組みうちになりまして、さうしてお花が負けると出齒を取り出しました――殺してやるツて。』

『………』組みうちして女が負けるのは當り前だ。が、出齒を持ち出したからツて、それをもぎ取ることもできないで驅け出して來た男の意久地なさが思へた。『直ぐ取り上げてしまやアいいぢやアむ

りませんか？』
『それが大變な權幕でげして――血相を變へまして。』
『……』變へたツて、變へなくツたツて――然し、また一方には、わが子ながらにそのいら〳〵した心を突き詰めたおそろしい姿が芝居にでも見るやうに想像された。困まつたことができたとは思ひながら、何とかふりさばかなければならないので、先づ工藤にかまをかけて、『一緒にあるいたことは――きやうだいのことだから構はないだらうが――ほんとうにあつたことだか、どうだか？』
『いゝえ、確かにございません。』
『ない？』また娘の方に向つて、『おかつとしちやア、どうだ、え？』
『ありません、ね。』
『ぢやア、ねえさんに向つても確かにさう云ひ切れるか、え？』
『云ひ切れますとも！』
『……』それならそれで、お花の方を叱つて、兎に角それから氣を落ち付けさせさへすればいいのだらうと考へられた。『ぢやア、ねえさんを呼んで來な』と、おかつに云ひ渡したのである。
おかつは呼びに行つたが、やがて眞ツ赤になつて、ぷり〳〵しながら歸つて來た。その注進を聽いて見ると、

『こんちは、ねえさん。』いもうとが先づあがつて行かうとした。すると、あねはいきなり、

『何の爲めにうせやがつた』と云つた。

『あたいは』と、それでも素直に答へたさうだ、『おツ母さんの云ひつけをねえさんに申し上げに來たのだ、わ。』

『てめへなんぞア來なくツてもいい！手めへのやうないぬ畜生は、な、きやうだいでもなんでもねいや！とツととうせアがれ！』

あねのこの惡口をいもうとがあんまりそツくりとその場で聽いた通りにらしく述べ立てたので、工藤はまた心配さうな顏でだが吹き出した。母もちよツとそれに釣られてゑみを漏らしたが、直ぐまじめになつて、

『それだけしツかり云はれるにやア、お前さんたちが何かその證據を握られてるんぢやアないか、え？』

『そんなことアございません。』

『くやしいツ』と云つて、おかつはその袖を以つて自分の顏をおほひながら母のそばへ泣き伏してしまつた。そしてしやくり上げながら、『どうせいぬ畜生なら――いぬ畜生の――やうに――して――見せてやる！』

『馬鹿云へ！』大きな一と言でこちらは娘を叱り付けた。『うそにでもそんな疑ひを受けた以上は、ね、その疑ひの解けるやうにするのが人間だよ！』

『御もつともです。』

『おッ母さんはまだねえさんの肩を持つてても、ね』と、娘は直ぐけろりとしてそのからだを起して、『行つて御覧なさいよ、あのざまを——呆れちまひます、わ——ただおい／＼泣いてて。』

『………』泣くのはあれの病氣ではないか？然し、これも、もう、いい加減に泣き飽きて氣がすんだ頃だらうと思つたので、母は工藤をつれてその店まで出かけて行つた。もう、電氣がついてたが、行つて見ると、お花のそばにはお隣りのきぐすり屋の夫婦が來てゐた。見ッともないではないか、餘りにおい／＼泣いてたので、棄てても置けずに、隣りの義理として慰めに這入つて來て呉れたのだらうが？かの女の母としては穴へでも入りたい氣がして、こちらは先づこの人達に何とかその挨拶をしなければならなかつた。が、娘の眼を泣き脹らして、眞ッ青な顏をしてゐるのを見ると、可哀さうにも、胸が迫つて來て、暫らく言葉が出なかつた——惡い病氣だとは考へながらも。

『まだ病氣あがりのおかみさんだア、ね、工藤さん』と、きぐすり屋が先づ口を出した、『もッとよくしておやんなせいよ、可哀さうぢやアないか？』

『へい、どうもすみません——御心配をかけまして。』

『おツ母さんは』と、今度は娘がこちらへ突ツかかつて來た、『なぜあのいぬ畜生をつれて來ないんです？』

『だツて――』こちらはわざと落ち付きを見せて、『お前さんが來るなと云つたさうぢやアないの？』

『知れたこツた――人間でもねいことをしやアがつて！』

『ぢやア、あいつはどけものにして置いても話は分りますよ。――一體』と、娘をあたまから抑しつけるやうに、『お前さんには思ひ違ひがありやアしないか、え？』

『ありません！』お花はこちらの仕向けた話をとぼけるやうに云ひ切つて、わざとらしく横を向いた。そしてその上品な顏が高い鼻にまで凄みを見せてゐた。

『だツて、あたしは改めてお前さんに聽きたいんだが、ね、この男はわけもなく女に手を出すやうな人物であつたか、え？』

『……』娘はなほ横を向いてゐて、返事をしなかつた。

『この男に限つちやアそんなことアありません』と云つて、やツと隣りの夫婦へこちらの如才のない顏を向けた。そして先づ心配をかけたお禮を述べてから、この婿は多少野暮であるとは云はれてゐるが律義は缺かさない男で、こちらは五年間もそばに置いてためして見たが、そのあひだ、ただの一度だツてもまだ自分と結婚しない娘の前で膝を一つ崩したことがなかつたことを語つた。

『さうでげしよう、な、わッしらも工藤さんに限りそんなことアあるまいと思つてました。』
『だから』と、こちらはなほさう云つた方へ向つてだが、實は、娘を納得させるつもりで、『たとへうちのおかつにやアそんな氣まぐれがないとは受け合はれないとしても、工藤に限つちやア決して氣まぐれなんか起す男ぢやアありません。』
『さうでしよう。まア、工藤さん、君も男だ、手荒いことアしねいで——まア——』こんなことを云つて、きぐすり屋はそのかみさんと一緒に歸つて行つた。
それを送り出してから、母はまたもとの奥へ立ち戻らうとする時、店のお盆やお椀が——工藤の身がはりになつたのであらう——毀われてちらかつてるのに氣が付いた。それから、ふりまわしたと云ふ出齒はと見ると、奥の居間と臺どころとのあひだの敷居の上に横たはつてゐた。工藤がさツきからこの方を見い見いおづ〳〵したのは、この爲めだらうと分つた。で、それを默つてひろひ上げてから、
『一體、をんな風情で以つてこんな物を持ち出すやつがありますか——箱屋殺しの芝居ぢやアあるまいし？』斯う低い聲でだが怒鳴りながら、それを流しもとの鉋丁さしへ持つて行つた。それから、また、もとの坐に戻つて娘と婿とを一と渡り睨み付けたが、男の方は殊勝さうに下をばかり向いてるに反して、娘がじろりとこちらを見たのを見て取つて、先づ、それへ口をひらいた。『おかつは以後決してここへはよこさないやうにしますが、ね、お前さんもいくら病氣のせいだツて、見ツともないか

ら、少しやア氣を付けて泣いたりわめいたりするのアよすがいい、ね。』

『あたしやア、もう、死んだ方がましだ、わ！』

『また泣くのか、え？』

『おれが悪かつた。これから、おツ母さんに對してもすまねいから、お互ひにおだやかにしよう。』

『さう云ふお前さんだが、ね――』こちらは工藤に向つてゐ直つた。『自分の女房のいもうとだからツて、それをなんかつれて歩いちやア疑はれるにきまつてますよ。』

『そんなことア致しません。』

『正直に云つて御覽！うそを云つたツて、どうせあとでばれてしまうんだから、ね。』

『決してそんなことはございません――御恩を受けましたおツ母さんに誓つても。』

『ぢやア分りました、然し、今一度念の爲め申しますが、ね、一度だツておかつと一緒になんか歩いちやア困ります。』

『へい、決して！』

『……』これだけ念を押し、これだけ誓はせて置いたら、もう、あとはふたりの勝手にさせていいと思つたので、無挨拶に立ちあがつてだが、命令でもするつもりで、『もう、今夜は店をしまつて早く休むがいいよ』と云つた。

『……』娘は目だけで見送つたが、まだその涙がかわいてゐなかつたのをこちらはあとまでも思ひ出せた。

七

うるしのかぶれが直つてからは、おかつをまたした梳ぎに出してゐたのだが、二三日を見てゐると、どうもその様子が少し怪しかつた。

『おかツちやんは話して見るとなか〳〵快活さうです、ね』と、お得意さきの若い奥さまなどからよく云はれてゐた子だ。それがこの頃では頻りに何か物を考へ込むやうになつた。ひとりで窓によつてぼんやりしてゐるのはまだしもだが、お客さまのあたまのうへで髪を梳くその手をやすめてゐて、母に叱られることもできた。

『……』まさか、親でも、お前は男が戀しいのかとはあけすけに云はれないので、『この頃、お前さんは何か考へごとでもあるの』と尋ねて見た。『した梳きがいやならいやでいいから、また何かお前さんのする仕事を考へてやるよ。』

『いいえ、おツ母さん、あたいにやアこの仕事が好きで、面白いんだもの！』

『ぢやア、もツと本氣になればいいぢやアないの？お前さんはうちの大切なあと取りだから。ね、こ

れからはうか〳〵へたな男なんかにだまされちやアいけない、わ、よ。』
『そんなことア、おツ母さん！』
『だツて』と、少し立ち入つて、『意久地のない塗師屋なんかと疑ひを受けるやうぢやア――？』
『そりやア、ねえさんのひがみですもの。』
『………』さうだ、向ふのお花にも例のゐの五黄から、これと思ひ込むと、そのひがみをでも無理に押しとほす強情さはあるのである。だから『そんなことなら、まだしもだが、ね』と云つて、こちらが考へて見ると、若し果してただそんなことであつたとすれば、人の云つたことはうそであつたのだらうが、それでも、江戸ツ兒の意地として、――これは決していい意地ではないが、――あねにいぬ畜生と云はれたくやしさから、いもうとがさう云はれるならいツそのこと向ふの亭主をほん氣になつて取つて見ようと云ふ氣を起してゐないとも限らない。現にくやし泣きをした時に、いぬ畜生ならいぬ畜生になつて見せると云つて、母に叱られた。初めはほんたうにさうでなかつたのだが、あとでさう云ふ氣を起したかも知れない。さうしてそのいら〳〵とつもる思ひがおしまひにはあねの亭主に對する實際の戀になつて來たのかも。兎に角、それから、二三日をそれとなく注意して見てゐた。
するど、娘が手の明いた時を見てはよくそとへ出たがるので、その度毎にこわい顏をして見せてゐたが、一度わざと時間をきめて出してやつた。ところが、果してその時間通りに歸つて來なかつた。

それでも悪い顏は見せないで、
『どこへ行つてたの』と尋ねると、娘はにこ〳〵しながら、
『これを買つて來たんですが、ね』と、黑地にこごめ櫻の刺繍をした半襟を出して見せた。そして、
『途中で○○の奥さまに出逢つて立ち話をしてゐたのだ、わ。早く歸らうと思つても、あのかたがなかなか話をやめないんだもの。』
『……』あの人とは、近ごろこちらの商賈がたきの方へばかり行つてて、少しもうちへは髮を結ひに來なくなつた婦人だ。そんなものと立ち話なんか長々とする必要もない筈だが――。それに、買つて來たと云ふはちよツと見ても四五圓はするしろ物だ。そんな物を買ふ小使ひ錢を娘も持つてゐないことはなからうけれども、多少はそのあねに似てけちんぼうなところのある娘が、母にちツともねだりもしないで、自分で買つて來たと云ふのも不審の一つであつた。ひよツとすると、買つて呉れたものがあるのではないかと感づかれたので、試みに、一度うちを明けて見る氣になつた。乃ち、あらかじめその前夜、娘を湯に行かせる前に、
『おツ母さんは、ね、あすはお客さまの賴みで金のかんざしの足をつけて貰ひに淺草の加賀屋へ行かなけりやアならないが、ね、ついでにまげの新がたも見せて貰ひたいし、また久し振りのことだから、話も長くなるだらうから、多分、歸りは夜の十一時頃になるかも知れないよ』と云つて置いた。それ

は一月九日のことであつたが、いよ〳〵十日になると午後二時頃から外出した。そしてその通り淺草へ行くことは行つたが、丁度九時に歸宅して見ると、案にたがはず、男が來てゐた。

『おッ母さんですの？――隨分早かつたの、ね！』斯う無邪氣さうに云つてから迎へに出た娘のあとには、玄關のまと奥とのふすまも明いてて、電氣を長火鉢のうへの方へいつも引ッ張つてあるその下で、こちらがゐれば娘の坐になるところに、工藤がこちら向きに坐わつてるのが見えた。

して見ると、こちらの留守の坐は娘が占めてゐたのだらうが、それは主人がはりになつてたのだとすれば、左ほど惡くも思へなかつた。が、前以つて疑ひを持つてたことがいよ〳〵てツきりその疑ひ通りに突きとめられたのにむら〳〵と燃え立つた自分の心には、若いもののふたりが示めし合はせて自分の留守に天照太神さまのお前をけがしたとばかり思へた。そして信心の前には自分の娘や養子の遠慮ゑしやくはなかつた。神の目のあたりで示めし合せごとなどするものは、すべて自分にはけがれた物であつた。そして同時に、また自分のかかる潔癖性にも自分の昔、男を知つてた時の思ひ出がありありと浮んで來て、いやなにほひがしてゐないかとまで自分の鼻のさきに注意を向けながら、今や自分の亭主か女房かを寢取られたのを見付けた時のやうな寂しさとねたましさとを感じてゐた。一度はひやりと水をあびせかけられたやうな氣がした。が、これがその寂しさとねたましさとの爲めに燃え立つて行つて、からだぢうにあつい〳〵熱までもおぼえたのである。

娘は母の顔をちよツときまり惡さうに見た切りで、母の足もとへ、いつも云はれてゐる通りに坐わると同時に、

『おかいんなさい』と云つてうや〳〵しく兩手を突いた。

『………』こちらは自分がけふ結つてやつたいてふ返しが――思ひ做しか――もう、少しつぶれてゐるらしいのをうへからしり目にかけて、挨拶も返さないで、玄關をあがつて行つた。そして向ふの工藤に向つて、『お前さんが來てゐたのか、え?』

『へい。』工藤もその以前からこちらの方をぬすみ見て當惑してゐるやうすであつたのが、この時、おづおづ坐蒲團を引きさがつて、『お歸り』と云つた。

『………』こちらは神だなにお燈明があがつてるのを見て多少の滿足をおぼえたが、今夜に限つては、渠が不斷の義理がたいふる舞ひを憎らしかつた。この男も相變らず世間一般の人のやうにとほり一遍の義理や律義の皮をかぶつてゐたのであつて、その化けの皮を割り合ひに長いあいだ見せなかつたのは、ほんの、氣がよわかつた爲めに過ぎないのだらうと思へば、こちらがそんな男を信用してあね娘の養子にしたのも、あねのかはりにいもうとを以つて渠の世話をさせたのも、今更らくやしくて溜らなかつた。で、さうとは見せないが、但し坐蒲團に直れとはこと更らに云つてもやらないでゐた。

『ちよツとおかどを通りましたので、おツ母さんの御機嫌をうかがひにお立ち寄り致しましたのでげ

すが――』
『あア、よく來て吳れました、ね』と、うはのそらで返事をした。別にふさはしい挨拶を思ひ付かなかつたからである。こちらは直ぐ横の方へ向いて長ぎせるのけむりを吹いた。そして罪もない火鉢のふちへそのきせるを叩き付けて、すひがらをはたき落した。それから、『おかつ！』つんけんした言葉で娘に云ひ付けた、『お隣りのおほ屋さんの旦那にちよいと來てお貰ひ！』
『………』おかつは返事なしにだが、直ぐ出て行つた。云はれたことをぐづぐづしてゐるのは、母の不斷に好まないところであるをよく知つてるからであつたらう。
『お前さんは、然し』と、こちらはおほ屋さんを待ち切れなくなつて工藤に思ひ切つての言葉を向けた、『今、あたしに會はせる顏があると思ひますか？』
『別に――わりい――ことを――してゐたんぢやア――』ぽつりぽつりと言葉を切つて、こちらのやうすを伺ひながらだ。
『今更らいい、わりいを云ふんぢやアありません！』こちらは渠を睨み付けて、『何と云つた、え、お前さんは以前に？おかつと一緒にやアぶら付かないツて云つたぢやアないか、ね？』
『ですから、ぶら付いたことアござませんが――』
『そんならなぜ』と、こちらの問ひは向ふのびくびくしてゐるのにおツかぶさつて行つて、『あたしの

留守にあがり込んだりしてゐます、ね？あたしがゐないと聽けば、「ぢやアまた」ッて、さッさと歸つてしまうのがほんたうぢやアありませんか？』

『………』工藤はしたを向いて默り込んでしまつた。そしてこの詫びはとても叶はないと思つたのであらう、俄かに氣を變へたやうになつて、こちらへは手ごたへのうすい返事をした。『如何にもわッしがぢゆう〳〵不都合な思ひちげひを致しました。就いては、隨分御恩になつたおッ母さんにやアすみませんが、斯う云ふまことにふつつかなわッしでげすから、以後お目にかかりません。』

『あア、かからないなら、かからないでもいいよ。』こちらも、だから、つい、賣り言葉に買ひ言葉となつた。

そこへおかつが獨りで

『おう、寒い！寒い』と云つてかけ込んで來た。つづいてまたおほ屋の旦那が來た。

『………』こちらは然しこの時には、もう、何の爲めにおほ屋さんなどを呼ばせたのか自分ながら分らなくなつてゐた。自分は寒いそとから歸つて來て、突然にのぼせたので、ちよッとまご付いておほ屋さんにでもさばきを附けて貰つたらばと思つたのだ。が、工藤とさし向ひで言葉をかはしたので大抵の見當が附いてしまつた。手ッ取り早く云へば、つまり、おかつと一緒に出奔するか、さなくば、おかつをも、またいやになつたお花をも棄てて、自分ばかりで姿を隱すかのことに決心したのだらう

と思つた。

で、おほ屋さんへはそれとなく工藤をこのことに就いていましめて貰ふやうなことばかり云つて、それだけで歸つて貰つた。

すると、工藤もそのあとで歸り支度になつて、こちらが少しでも改心(かいしん)したかと思ひのほか——矢ツ張り、

『おツ母さんにやアすみませんが』を繰り返し、涙をまで浮べながら、『以後、それぢやアお目にかかりませんから——おからだをお大切に』と云つた。

『………』こちらもそぞろに悲しみをさそはれたが、そのあひだに渠がその日でおかつにちよツと合ひ圖らしいことをしたので、それが最も癪にさわつてぐツと氣を持ち直すことができた。そしてわざと見送りに出もしなかつたので、娘も母のそばに坐わつてるままただもじ〳〵してゐるばかりであつた。なに、くそツ！この子さへ押へてゐればと思ひながら、暫らくは親子互ひに默り合つてゐたが、また一服のけむりを吹いてから、『お前さんにやア、ね、わりい魔(ま)が憑(つ)いてるんだよ。』

『………』娘はじろりとこちらを見たが、また、したを向いてしまつた。が、惡魔と云はれたのをおそろしかつたのか、ぞツと身の毛のよだつやうすをした。

『………』戀は、然し、素直(すなほ)なのでも魔に落ち易いものではなからうか？まして、この不義なのでは？

締め切つた部屋をいやなにほひがまだ殘つてはしないかと、私かにまた自分の鼻で探つて見ると、それとは違つて、鼠の小便くさいのがしてゐる。今度の炭が惡いのであらう。やがて『戸じまりをして來な』と、娘に早くちの言葉を投げ付けると同時に、こちらも然し立ちあがつて、また火うち石を出して來た。そして部屋ぢうをかち〳〵と清めまわつた。そのうちに娘が玄關の方から戻つて來たので、その正面からかの女のあたまへも切り火をかけた。何の意味だかは、この時、云はないでも分つてると思つてだ。

八

すると、その翌日、乃ち、十一日の午前十一時頃、工藤のお隣りのきぐすり屋さんがやつて來て呉れての注進によると、工藤がお花を湯にやつたあとで、かの女の衣物をすべて質屋へ運んで行つた。『……』それをそばで聽いてたおかつは、横を向いてにツこりした。が、こちらはそれを見付けて、わが子ながら憎々しかつた。

『わざ〳〵御親切にお知らせ下すツて、まことにありがたうございます。そのつもりであたしも氣を付けますから』と云つて、きぐすり屋を歸した。果して出奔をもうち合はせてゐたのであつたのだらう。こちらは工藤とおかつとをいま〳〵しくなつただけ、それだけ病身なお花が可哀さうで溜らなく

なつた。そしてかの女が前におかつをさう度々よこして呉れるなと云つて來たのも尤もであつたと思ひ出された。

おかつをさへしツかりつかまへてゐれば、やがて向ふから何とかばれて來るだらうと考へたので、ただそればかりをこころ待ちに待つてゐた。當分は仕事に出まいと、ゆふべから決心したのも、つまり、それが爲めであつたのだから。

すると、午後の二時になつて、おかつは

『おツ母さん、あたい、ちよいとお湯に行つて來たいんだ、わ』と云つた。その許しを乞ひ具合ひが不斷の無邪氣なやうや〳〵しさとは違つて、どことなく、おど〳〵、わさ〳〵してゐるやうすなので、而も亦その目に涙をまで浮べてゐるので、こちらはてツきりこれがうち合せになつてる時間だらうと氣が付いた。

『お湯に行くのもいいが、ね――』ここだと云はぬばかりにこちらの腹をきめて、火鉢のそばからかの女の顔を横向きに見上げて、『お前さんはほかに何か間違つた考へをしちやアゐないか、え？このおツ母さんの目にやア、ね、どうも、どこかそこいらでお前さんを迎へに來た男が旅支度でぶらついてるやうに見えるが、ね？』

『………』娘はしやぼん箱を手ぬぐひにくるんだのを持つて、玄關のまと奥とのあひだの敷居の上に

こちらを向いて立つてゐたが、ぱら〳〵と淚をその足もとへ落した。

『おツ母さんの顏をこれで見納めにするツてんなら仕かたがないが、ね――』斯う少し皮肉に出たつもりだが、それでも自分ながら見納めと云ふ言葉にあまりの悲しさをおぼえて胸が詰つて來た。けれども、今、親として弱みを見せるところではなかつたので、無理にこわい顏に言葉だけを和らげて、

『先づその男をつれて來て御覽、この場合、誰れであつてもかまやアしないから。』

『はい』と、娘は素直に返事して、持つてる物を敷居のはじに置いた。そしてそとへ出て行つた。

『………』こちらはかの女がそれツ切り歸つて來ないものならそれまでだともあきらめてたが、あのやうすではまさかと云ふ望みがあつた。

こんなことにもかの女は素直であつた――やがて、酒井さまの橫手の道からでもあらうか、三十分ばかりして、工藤をつれて歸つて來た。が、渠をしも座の方へ坐わらせ、娘はそのかみへ坐わつてこちらへ一緒に向ひながらも、恥かしいのか、下を向いて物を云はなかつた。

『どうもすみません、こんな風になりまして』と、工藤がやツともみ手をしながら口を切つた。そのかたわらには、今度わざ〳〵買つたらしい旅かばんを置いてあつた。

『お前さんは一體――』こちらは渠を睨み付けて、『こツちをあまいと思つて馬鹿にしてイる、ね?』

『いえ、どう致しまして――そんな、もつていないことは!』

『お花が病氣になつたツてうツちやるなら、この子をもそんなときやアまたさうするつもりだらう？』

こちらは、この野暮律義の男にかかつてはおかつも——うまずめであるだけに——亦あねのやうにならないとは受け合へなかつた。

『飛んでもないことを！』

『お前さんは、ね、これで二度あたしに對して約束を破つたんだよ。それに、お花の衣物なんか質に入れて！三度目にまた破るかどうか、今一度おかつから手を引いて、獨りでお花のところへお歸り！』

『へい、承知致しました。』

『……』たわいのない男だと思はれた。つよく出れば、こちらの負けると負けないとは別なことにしても、どうしてもおかつと一緒になりたいと云ふこともできように——ほんの、ただ、女にちよツかいを出すことをいつのまにか覺えやアがつて！

　かばんを明けさせて見ると——おかつに着せる爲めか、それともまた旅で困つたら賣り拂ふつもりか——お花の、こちらもおぼえがある縮緬の衣物に赤地の長襦絆が這入つてゐた。そのほかには、しやぼんや齒みがき粉や手ぬぐひのやうな、けち臭い物で——それに、馬鹿々々しいことには、さくら紙ばかりがどツさり仕入れてあつた。横ツつらを一つ喰らはせてやりたいほど癪にもさわつたが、親ながらまた私かに耻かしい氣もして、そんな物をすべて知らぬふりでもとの通りにさせた。それか

ら、渠の持つてゐる金を調べると、これもたツた四十五圓しかなかつた。
『馬鹿々々しい！』それにはこちらもおもて立つた苦情が云へた。『これツぽッちで何がどこでできると思ふ？』
『五十圓工面致しましたのですが、そのうちから五圓は、もう、このかばんに使ひまして――』
『……』まア、そんなところで喰ひとめることができただけでも仕合はせであると思へた。『その五圓と利子とはあたしが出してあげるから、早く歸つて質物を出すがいい、ね。さうしてお花にやアよんどころないことでお前さんの衣物を無斷で借りたが、もう、入らないことになつたからこの通り返すと云ひな。』
『どうも――こツちの不埓をお見のしが下すツて――ぎやくに、またお世話を受けましちやア！』これも意久地なく涙をこぼして、手の甲でそれを押しぬぐつてた。
『いいから、直ぐ歸つてさうしな！』こちらはこれでお花に對して義理が立ち、工藤にも二度と再びかけ落ちなんかする氣を起させはしまいと考へた。
工藤が恐縮して、またかばんをさげて歸つたあとで、
『わッ』と泣き伏してしまつたのは、おかつであつた。『死んでしまう！死んでしまう！馬鹿を見たのアあたいばッかしだもの！』

『それが馬鹿だい！おやきやうだいに不孝ものめが――親を棄てて、あねの亭主とかけ落ちしてどうすると云ふんだ！』一度はあらはに云つてやらうと思つてたことを、やツと、今云へたので、多少こちらの氣がせい〳〵した。如何に可愛い娘にだツて、さう〳〵あまく見られたくはなかつた。

『……』娘は何も云ひ返しをしなかつた。そしてその涙がかわくと、默つて晩の御はんの用意に取りかかつた。

十二日に何か向ふから沙汰がありはしないかと待つてゐたが、別に何もなかつたので、多分うまく納まつたのだらうと喜んだ。で、十三日になつてこちらから行つて見ると、塗師屋の店は戶をしめたままになつて、お花だけが口を泣き張らして、奧でただ考へごとをしてゐた。

『工藤はどうした、え？』

『おツ母さんに合はせる顏がないツてツて、きのふからあたしを逃げて、どツかへ行つてます。多分あたしの衣物を質入れしたかねで、あのいぬ畜生と出奔でもしようとしたんでしよう。』

『そんなことアないが、ね』と、こちらはとぼけて見せた。『何か儲けぐちのことがあつてお前さんの衣物を質入れしたと云ふから、そりやアよくないツてツて、あたしが利子を出してやつて直ぐ受け出させるやうにしたんだ、わ。』

『そんなこツたら』と、娘はこちらへ突ツかかるやうに、『大きなかばんなんか買つてどうします！』

『そりやア、ちよツとその爲めに旅へでも出なけりやアならな　なつてたんだらうよ。』
『おツ母さんはまだあのいぬ畜生の肩を持つんですか？――つれて來て御覽なさい、あいつをも喰ひ付いてやるから！』
『……』こちらには、工藤のゐないのも亦そのきつい女房が喰ひ付いたり引ツかいたりするのを逃げてるのだと分つたので、もう、どうせこの家は納まるまいと思ひながら『何もさうおかつぱかしを惡く云はないだツて――？』
『ぢやア、これでもあたしがわりいツて？』
『いいえ、お前さんのことぢやないが、ね、工藤が何もお前さんの物をまげたりしないだツても――』
斯う云つて、少し娘の機嫌を取り直した。
　そして聽いて見ると、質物は兎に角そツくり出してもとへ返つてゐた。が、娘は
『あんな人につれ添つたツて、末の見込みがない、わ』と云つた。
『……』もう、本人があきらめたと云ふなら、こちらにはそれにも異存はなかつた。いよいよ全く自分らの目がねが間違つてゐたのだから仕かたがない。あれだけ、こちらは義理と人情とを含めてあとの爲めをも思つてやつたのに。誰が亭主としての權威を以つてあたまから一つ怒鳴り付けて女房の心を押しつけてしまふ甲斐性もなく、まだそんなことを云つて逃げまはつてゐるやうな男なら、その

女房の親としても愛相が盡きるばかりであつた。

で、娘とその荷物とはすべて取りまとめて、その晩にこちらへ引き取ることにした。

『いぬ畜生、こツちのしやぶりかすでも嘗めに行け！』お花はこの晩初めていもうとを見た時にそれに向つて怒鳴つた。

『………』おかつは、然し、その方をちよツとじろりと見た切りで、小さくなつて、なんにも答へなかつた、もちろん、答へるすべもなかつたのだらう。

『あたしが目の黒いあひだは、ね、おかつにだツて二度と再びあねに義理のわりいやうなことアさせやアしないや、ね。』これはお花に向つてぢかに云つたのだが、おかつにもそのつもりにならせる爲めの意味が籠つてゐた。が、こちらはこの娘ふたりがもとの仲いい時に語り合つたらしい下だらぬ話や、ふたりとも子のないたちなのやを思ひ出して見ると、そんなことを云はれたりしてゐるのを實にいやアなやうな、また馬鹿々々しいやうな氣がしたのである。

九

そのまた翌日の十四日には、おかつの拵らへた朝はんを熱いおみおつけで娘同士はただにらみ合つて喰べた。

それには、いもうとがそのみなもとを作つたのであるから、あねに於いて少しも惡いと云へることはなかつた。そこはこちらも十分に察してはやつたが、お花は食事をすませると直ぐ、もとの主人のうちへまた奉公をつゞけるつもりで出かけたのだ。こちらもとめはしなかつたが、折角ゆふべから持つて來てうちのおづしへ再び納めたその父のお位牌をまた持ち出して行つたので、何だか矢ツ張りもともと通り頼母しくない子のやうに思へた。お花が今度工藤を見棄てたのと同樣に、こちらが昔自分の亭主を思ひ切つたのが、いまだに祟りをしてゐるやうで――。さうだ、それがいろ戀に於いていまいましいきやうだいのいさかひになつてるのかも知れなかつた。

母がさう云ふことを考へてのむしやくしやがうちに殘つてる娘に向けられたのであつた。

『その顏を御覽、自分でわりいことをするものだから！二度とアおツ母さんも承知しないよ。』

『夜ツぴて朝まで眠られなかつたんだ、わ。』折う、娘は青い顏で不平さうに云つた。

『どうしたツて？』

『だツて』と、然し、少しは口のさきへにこ付きをとがらせて、『ねえさんにやみくもに殺されやアしないかと思つて！』

『馬鹿だ、ねい』と、こちらもこわい顏はしながら少し笑ひを見せた。殺す、殺さぬと云ふやうなことが、苟しくもきやうだいのあひだで、うそにも、どこから考へ出せるのだらうとも思はれた。

こんなことの爲めに怠つてた仕事を十五日と十六日とは腕によりをかけて取り返した。が、十七日は髮結ひの休みであつたので、お花を深川へ見舞ひに行つてやつた。

すると、また例の病氣になつたとかで、女中部屋に引き籠つて寢てゐた。そしておもちやのやうな小いおづしを——可哀さうに、人のうちだから、別にちやんと飾つて置くところもないのだらう——自分の枕もとへ立ててあつた。

『斯う云ふところアお前さんは感心だよ。おかつと來ちやア、自分の死んだお父アんのごとなんぞアこれツぽツちも思つてやしないんだから、ね。』人さし指を出してその先きの方へ親指を持つて行つた。

『そりやア、おツ母さんがついてるからです、わ。』

『………』こちらはさう云はれると、折角賞めてやるのをあだにして、當てこすりを報いられたやうに思へて、ちよとツ言葉が行き詰つた。この子は病氣の度毎にひがみとひねくれとが增して行くやうであつた。『何も——あたしやアおかつだツて、お前さんだツて、えこ引い氣はないつも、だが、ね』と、もう何度も娘にかたみがはりのやうに云つて聽かせて來た意味をまたここにも繰り返さないではゐられなかつた。そして斯うしては主人にもすまないわけだらうから、また病氣のよくなるまでうちへ來てゐるやうにお花に勸めて見た。それには暫らくだツて、こちらの所天の位牌をうちに置いて拜

んで見たい心も這入つてゐた。

が、お花は主人に氣がねしながらもなか〳〵承知しなかつた。そして、

『あんな犬畜生のゐるところなんかへ死んでも行くもんか』と云つた。

『……』こちらは自分のうちを娘に惡口されながらも、それは尤もだと思はれた。

それに、御主人は元からのことで、割り合によくして吳れるさうだし。親切なお客さまのうちには、今回のことにただからだと荷物とを引き取つて來たばかりでは馬鹿だ。少くとも、店を持つ時に出したかねを公正證書にさせて段々に取り返すがいい。ほかに口の聽き手がなければ、おれが行つてやるとまで云つて吳れる人もあるとのこと。

して見ると、そんなお客さまの親切やら、御主人の御恩に免じても、證書のことなどうツかりしてゐたこちらは、あねをこんな目に會はせたいもうとの親として、二つにはまた死んだ父のお位牌をお花と共にこんなところへまご付かせるに至つたおかつの母として、安閑とはしてゐられないやうないきどほりを覺えた。で、うちへ歸つて來るが早いか、まだ坐わりもしないうちにおかつに向つて、

『お前さんのゐる爲めに、ね、お花は可哀さうに病氣で寢てゐてもうちへは歸らないと云つてるんだよ！』そしてあね娘が御主人や朋輩には――歸つて來れば、しないでもいいところの――氣がねばかりをしてゐることが語られた。

『あたいの爲めにさうねえさんがお困りですなら――』

『困るのア當り前だよ！』

『ぢやア、出て行つてやる、わ！』

『さう、さ、出て行け！』斯う、時のはづみが叫ばせた。苟しくも母たる者に向つての悴まれ口をほざいたのだと受け取れたからである。心のいきどほりがそツくりそとへまで出てしまつたのだ。『お前さんのやうな、ね、おやきやうだいに不孝ものはとツとと出で行きな！』思はず二度、言葉につれてたたみにかた足を足ぶみまでして見せた。それから、よそ行き姿のままで火鉢のそばへ坐わつたが、二度とかの女に言葉をかける氣が出なかつた。實際に、母親として一方の娘の苦しみを見てゐながら、他方を無事に自分のそばへ置いて置いちやア、えこ引い氣の汰沙だと云はれても仕かたがない。それを自分は好まなかつた。

『……』おかつは玄關のまに坐わり込んで暫らくうなだれてゐるらしかつたが、こちらの部屋の敷居ぎはに手を突いて、『ぢやア、おツ母さん、なが〳〵お世話になりました。この御恩――は――死んでも忘れません！』

『……』反對の方を向いてこちらは返事もしてやらなかつたが、娘のおしまひの言葉がはやロにな つたのは涙を呑み込んだのであると察してやると、いぢらしくもあつた。けれども、『出て行つてやる』

と云つたにくて口に對して一旦『出て行け』と命じた以上、結局、このあとへあね娘を呼んでやればよかつた。直ぐ手紙をお花に書いて、おかつを追ひ出してしまつたから早く歸つて來いと云つてやつた。

その夜十一時頃になつて、工藤の方からの使ひとして老母がやつて來た。男ひとりになつたので淺草から再びこの母を呼び返したらしいのだ。

『おかツちやんがおツ母さんに追ひ出されて、行くところがないと云つて來ましたので、うちへ預つてあります。どうか御安心を――』

『……』何が安心だ、娘が追ひ出されるわけとなつたうちでその娘を預つたツて？義理としてもそんな預かりかたができよう筈はなかつた。が、出て行けと云つた以上、もう、どうでも勝手だと云ふつもりで、そツけなく、ただ『さうですか』と答へてやつた。

ところが、それをいいしほにしておかつは工藤へずる〳〵べツたりになるつもりらしく見えたうへに、お花からは二三日たつて返事が來たが、歸りたくない、それに病氣がいい方だからとあつた。母はあぶ蜂取らずの馬鹿を見たやうにおぼえて、これからまた獨りぼツちで暮すのかと思ふと、俄かに寂しくもあり、がツかりもした。

一〇

深川の方ではくやしまぎれに相變らずみんなにしやべり散らすかして、お客としてお花をおだてる辯護士もあり、三百もあるやうすで――そのうちの誰れかのおごりでだらうが、或日、かの女は歌舞伎座から使ひをよこし、お客さまの御好意だから、都合がよければ直ぐ來いとあつた。嬉しくもないことはなかつたけれども、まだこんな事件のあつた當座でもあり、仕事もしツかりやらなければならなかつたので、

『殘念だが、けふは行かれません』と返事した。

そのうち、お花は三百らしいのを二名もつれてやつて來た。そしていよ〳〵指ケ谷に公正證書を書かせるから、明後日正午を期して、芝の區裁判所まで、母と母のおほ屋さんとが證人に立つて、工藤とおかつとをつれて來いと云ふのであつた。

それはこちらもこころ好く引き受けたが、客どもに馳走を出した代金を置いて行かないで、

『これはあたしのおごりですからね、立て替へといて頂戴、ね』と云はれたには、またお花のけちな手かと思へた。が、これもかの女の機嫌を取り戻す爲めとすれば、こちらに少しも異存はなかつた。

お花の三百が呉れぐれも明後日の正午を念押して歸つたその翌日、丁度、おかつも其の家を出てか

ら初めてやつて來た、

『おッ母さん』と、玄關の土間から呼んで、『おそうざいができましたから、持つてまゐりました。』

『……』こちらはかの女のおづ〳〵とふるえた聲を聽いても、可愛さよりも憎々しさの方が勝つてゐたので、返事もしてやらなかつた。

娘はこそ〳〵とあがつて臺どころへ行き、戸棚を明けて、どんぶりか何かの音をさせた。多分、そしへ持つて來たものを明けたのだらう。やがて、明いてたふすまの敷居ぎはにこちらを向いて坐わつて、話をしかけたさうにしてもじ〳〵してゐたが、こちらが少しも相手にしなかつたので、

『ぢやア、またまゐります』と云つて、立ちかけた。

『ぢやア、ね』と、やツと母の聲が出せたのである。『お花がゆふべ三百をつれて來て、ね、お前さん達を裁判にかけるか、それとも公正證書にさせて、出したおかねだけはきツと取つて見せると云つてるんだから、ね、工藤にさう云つてお呉れ。裁判なんかへかけて貰ふまでもなく、どうせ返してやらないぢやアすまないおかねだから、おとなしく證書を書くがいいと、ね。』

『はい、歸つたらさう申します。』

『……』こちらは、こないだの始末をあねにまだ云つてないが、あれを知られちやアこの上にもまたどんなにおこるか分らないと妹を威し付けて、そちらの不始末の爲めに今度おほ屋さんと一緒に證

人なんかになることを小言まじりに云つて聽かせた。そして印形を持つて出るのを忘れてはならぬこと、あすの時間を間違へてはいけないことを告げた。

その翌日の二十四日は大寒の三日目であつたが、こちらはおほ屋さんともうち合はせをして時間の來るのを待つてゐると、何のことだ！十一時頃になつて、工藤の老母がおかつの手紙を持つて來た。そして、

『今日はあたしは少し加減が惡く、主人はおたなへでき上つた仕事を持つて行きました留守ですから、行けません。また明日は土曜日、明後日は日曜ですから、二十七日にして下さい』とあつた。

『……』これはてツきり徒らに日を延ばす手ぢやアないかと思はれたので、こちらは老母を歸すと直ぐおほ屋の旦那にこのわけを話し、自分は兎に角指ケ谷へ行つて來るが、いよ〳〵延びるならその足で裁判所の方へ出て、待ちぼけしてゐるものにそのよしを知らせるし、若し工藤らも行くとなれば今一度歸つて來るからと云ひ置いて、指ケ谷へ向つた。途中でまだぐづ〳〵歩いてる老母に出逢つたが、うるさいので言葉もかけてやらなかつた。

そして行つて見ると、果して工藤は店にゐて、

『おツ母さんですか』と驚いた。

『……』こちらはあがり込みもしないで、あがりぐちの土間に突ツ立つたまま、怒鳴るやうに云つ

た。『お前さんは！お前さんは！うそを云つて、いよ〳〵裁判になつてもかまはないんだ、ね――人が爲めを思つてあんなに云つてきかせたのに？』きのふのことを思ひ出して、奥にゐる娘をしり目にかけてだ。

『どうもすみません。實は、おかツちやんが少し加減がわりいツてんでげして――』

『……』それはうそでもないらしかつた。ちよツと睨らんだところで見ても、おかつは火鉢に向つて中腰になつてくすりをせんじてゐるやうすであつた。中將湯か何かのにほひがしてゐた。どうせまた確かにお花の二の前になつてしまうのだらうと思ひながら、おかつがまア上れと云ふのには返事もしないで、『ぢやア、二十七日にやアきツとか、え』と念を押した。

『へい、二十七日にやア間違ひなく。』

『ぢやア、これから直ぐ向ふへ知らせに行つてやらないぢやアいけませんから、ね』と云つてそこの土間を出てしまつた。向ふが待ち遠がつてるだらうと思ふと氣がせいて、電車のうへも用意して來たほどさう寒くなかつた。

こよみを見るとこの日の星もよくなかつた。が、あれほどに云つて置いたのだから、今度こそ間違ひはなからうと安心して、二十七日にはこちらはこちらで別々に裁判所へ行つて見た。すると、矢ツ張り、工藤とおかつとは時計を三時まで待つてもやつて來なかつた。

『おツ母さん、こりやアどうしても訴訟にするより仕かたがないです』と、お花がはの男が云つた。

『今一度待つていただきましよう、あたしは直ぐこれから行つてうんと叱り付けますから。』おほ屋さんに無駄あしさせただけに對してもこちらは承知できなかつた。指ケ谷へ來た時は、もう、電氣が付いてゐたが、案内も乞はないで、づか〳〵奥へとほるが早いか、そこに相變らずくすりのコップを口へ運んでたおかつの、誰れに結つて貰つたとも分らない丸髷をいきなり取ツつかまへて、ぐいとかの女を引き倒した。それから、矢ツ張り髷をつかんだまま、『このいね畜生』と云つては左りへ引ツ張り『このすべたをんな』と云つては右に引き、『ばいた！亂痴氣！うそつき！あね不孝！おや不孝！』あらゆる惡口と卑しめの言葉とを以つて成敗した。

『……』娘は髮を握られて引きづられながらも、張り合ひのないほど手むかひせず、少しも音を立てなかつた。すると、

『まア、そんなに手荒いことは』と云つて、老母がとめに來た。こちらはそれに向つて、

『あなたも一體何ですか？歳は何の爲めに取るのです？あたしから見りやアまた二十も年らへなくせに、若いものがいぬ畜生の眞似をしてゐるのを、そばにゐて、默つて許して置くとアどうしたんです？』

『つい、氣が付きませんでして――』

『それほど老いぼれてりやア、こツちのすることにやアかまはないで置いて貰ひましよう！』斯うまで思ひ切つて云へたに就けては、今ひとりの相手にもぶつかりたかつたのだが、その相手がどこにも見えなかつたので、なほ老母に、『息子をよこしもしないで――ただ逃げまわらせてばかし！』
『おたなへまゐりましたんでございますが――』
『おたなへなんかいつだツて行けます』と云ひ放つて、いきどほりの目をまた娘の方へ向けた。
『……』娘はこちらの手を離れると、押し付けられたあたまをぐちや〱になつた髷と共に前方へ垂らしたまま、横向きの腰のあたりから疊へひらたくねぢれたかみ半身をひろげた兩ひぢと兩手とで以つて起し初めた。そして段々とこちらへ向いて擧げて來たその化粧がほを見ると、くツきりした鼻すぢで以つて分たれる兩方の目つきにも、頰の色にも、こちらを恨むと云はんよりも却つて許しを十分に乞ふやうな意味を見せてゐた。それが可哀さうにも見えると、今出した腕の力によつてかの女の髮がすツかり拔けなかつたのを不思議に思へた。が、工藤の老母をも叱り付けたその勢ひがまだ〱殘つてゐたので、娘の顏を穴の明くほど瞰み付けて、
『かさねがさね親の顏に恥ぢを塗り付けやアがつて！今夜はお前さんの不斷おろそかにしてゐるお父アんに成り代つて成敗してやるんだ！』實際に、お父アんのたましひでも乘り移つてゐなかつたら、こんな、云はば、生まれて初めての亂暴などはする筈がなかつた。息ぐるしい程むねがどき〱する

のを押し靜めようとすると、太い膝を揃へてちやんと坐わつてる自分の手も指もぶる〳〵顫へてゐるのに氣がついた。

『おツ母――さんの――爲めなら、どうなつても――お恨み申しません！』娘は俄かにすすり泣きになつて、そのまま倒れ伏してしまつた。

『わたしも申しわけがありませんから、あす早く淺草へ歸ります』と、老母が云つた時には、こちらもあふれ出ようとするむせびを無理に押さへてゐた。

二

あまり亂暴したのを返り見ると、自分の娘にだツて少しきまりが惡いので、二十八日になつて、自分の代理としておほ屋さんに工藤のところへかけ合ひに行つて貰つた。それが歸つて來ての話によると、工藤も今度こそはさう〳〵逃げてもゐられないと見たのだらう、確かにあすの十二時を以つて裁判所へ出ることに約束した。が、そのついでに、

『おツ母さんのやりかたも少しひどいぢやございませんか』と恨んださうだ。『なんぼ親はその娘の身を自由にしてもいいからツて申せ、その朝、もやうによりやア裁判所へも行かせようツて結はせた頭を握つて引きずりまわすとア、髪いの冥利にも關しましようツて。』

『……』今ではそれを後悔してゐないでもないが、こちらをさうおこらせたには、無斷でまた出頭しなかつたのが惡いではないか？

『あたしは別におッ母さんの愛におぼれてゐたわけでもありませんが、ね』と、おかつはおかつで云つたさうだ『ねえさんとは違つて、お母さんのあと取りにもなつてますし、ね、また子供の時からずッと一緒にゐましたし、それで今度のことだッて――たとへあたしが惡かつたにしても、ね――つまり、おッ母さんはあたしの味かただと思つてましたんですよ。』

『……』それも、尤もでないことはなかつた。が、事件が事件だけに、お花の方へも義理は立てなければならなかつたのだ。

『工藤さんも、成らうことならおッ母さんをも一緒に引き取らうッて云つて呉れてるんですのに――』

『……』そんなことは、然し、金輪際できるものか？それほどの親切だから、こころざしとしては喜んで受けるが、お花の手まへもあることだ！それをおい、それと承知するやうな母ではない。『あたしやア、これから石にかじり付いても、娘なんぞにやア手よらないでやつて行きます、わ』と、おほ屋さんに答へた。

『御尤もです。それにやア、お前さんに獨りで喰つて行ける腕があるからだらうが、ね。』

『腕なんか一本や二本切られちまつても』と、笑ひにまぎらして話をおしまひにしてしまつた。そし

てこのことを深川まで知らせに行つたのである。おほ屋さんには、『電話ででも分ることだ』と云はれたけれども、ぢかに逢つてお花を少しでも喜ばせてやりたかつた。然し『とう〳〵あの畜生を髷をつかんで引きずりまわしたんだよ』と云つた時には、あの場に於けるやうな意氣込みのなかつたのは勿論、この言葉に當然含まれる筈のいきどほりも隨分少くなつてゐた。だから、お花の答へとして、

『いい氣味だが、それでもまだ〳〵足りやアしない、わ』とあつたのを、

『だツて、まア――』と云つて打ち消してしまひたかつた。

公正證書の手續きは、それでも無事に、一月二十九日の午後すんでしまつた。にらみ合ひながらも、お花がはが何ごとにも意張つてゐたのに比べては、工藤とおかつとは可哀さうなほどおとなしかつた。

『さア、これで大丈夫、大丈夫！』斯う、お花は自分の三百からできた證書を渡された時にわざとらしく叫んだ。そしてその證書で自分の亭主を取られたことを承知して！まつたわけになるのをも知つてか、知らないでか、如何にも勝ち誇つたやうすで引き上げて行つたのが、こちらにはおろかのやうに見えた。『一杯どツかで飲みましようか、ね』と云はれたのをも、こちらはおかつやおほ屋さんの手まへを思つて、それとなく斷わつた。

さうかと云つて、歸り道や電車をこちらはおかつ等と一緒になりながら、かの女へも亦話をしかける氣にはなれなかつたのである。

＊　　＊　　＊　　＊

二月に這入つてから、早々、お花はまた別なをとこ客を二名つれてやつて來た。そしてこないだのお禮を云ひたいからと云つて、大屋の旦那をも招いた。さう云ふ飲み喰ひの費用を凡てまた母に拂はせた。

『今度拂ひますよ』が幾度かさなつて行くのか分らない。そんなことなら、いツそのこと、來て呉れない方がましであつた。以前にはおかつの方を目かけ肌だと思つたが、この頃では、却つてお花がさうした女であるやうに分つて來た。

そんなあね娘に比べると、矢ツ張り、いもうと娘の方がどれだけ可愛いか知れなかつた。

『あたいはねえさんよりやア家庭的、ね、髮も結へるし、お勝手のことも好きだし』と、よく云つてゐたツけが――。それがあんなひどい目に會はせられたのを恨みもしないで、相變らずおそうざいなどを持つて來て呉れる。

『………』こちらは、然し、まだ心が解けないので、話を仕かけてやつたことがない。

『おツ母さん、すみませんが、けふ、髮をちよいと結つていただけますまいか？』斯うおそるおそる

云つて、もつとひや髪の道具をまで自分で自分のところから持つて來られると、まんざら結つてやらないわけにも行かない。

『……』これを摑んで、可哀さうにも引きずりまわしたんだと思ひながらも、矢ツ張り、こちらは無言の業だ。面と向つて顏を見合はせるのをすらわざとにも避けるところから、たま／＼髮いの鏡を仲立ちとして顏が出くわしても、おもて向きは何だか氣恥かしくツて、直ぐ目をそらせてしまうが、心では、この無言のかつゑと寂しさとの爲めに、自分の喉まではぐびりと込み上げて來るものがあつても、それを淚とならないうちにまた飮み込んでしまうのであつた。

——(大正八年六月)——

お増の信心

一

濱田さんの女中のお隅さんが果してまもなく引ツ返して來た時には、ますはわざと何げないふりをして狭い居間のあがりがまちまで出て、そこに突ツ立ち、店さきを土間へずツと這入つて來るお隅さんに向つて、

『またどうしたの』と、こちらから先を越して聲をかけた。

『奥さんの財布がありませんでしたか？』お隅さんは土間からこちらの顔をうさん臭さうに見上げて立てつづけに云つた、『奥さんがここで落したに違ひありませんが――』

『いいえ、そんな物は――』ますは自分ながら機轉が利き過ぎると思はれるほどのとぼけかたであつた。

『確かにここよりほかに落したところはないのですが――』

『ここよりないと云つたツて』と、わざとおどし付けるやうにまでして、『落ちてなかつたら仕かたが

ないぢやアありませんか？』

『………』お隅さんはその顏が赤くなつたほどむツとした樣子をして、その足もとなる土間のあたりを見まはした。實は、見まはすのも尤もなことで、そこにそら豆のさやのむきかすの上へ財布が落ちたのだ。それを――奥さんやお隅さんが歸ると直ぐ――拾ひ取ると同時に、その豆のさやをも手早くかたづけてしまつた。

『疑ふなら、見せてあげます、わ。』ますも土間へおりた。そして相手が目をつけてる籠を眞ン中の店臺の、こちらへ尻あがりにあがつてる下から取り出して、『このさやが散らかつてたばかりぢやアありませんか？』

『このさやの上に落してあつたに違ひありません。』

『ぢやア、何かそんな證據がありますか？』

『………』お隅さんはまたむツとしたまま、暫らく默つてゐた。それから、かの女は何も云はないで店を出て行つた。その後ろ姿に向つて、ますは、もう、安心だと云はないばかりになつて、

『そんな疑ひをかけられちやア、うちが迷惑ですよ。』

暫らくはそのまま獨りで土間に立ちどまつてゐた。すると、意外のひろひ物が嬉しい爲めにいつになく鼻のあながとほつてか、店に飾つてある靑物や水菓子のいろいろなにほひがこと新しく嗅ぎ分け

られた。そして枇杷のこがね色にも、熟した林檎の赤さにも、洗ひ大根や小かぶの白さにも、いんげんやほうれん草の青さにも、すべておかねの顔がぺた／＼とくツ付いてるやうに見えた。
『おい、三十六圓五十錢這入つてゐたぞ』と云つて、うちの人もまた顔にゑみを溢れさせてあがりがまちのところまで出て來てゐた。
『聽えるぢやありませんか！』斯う渠をたしなめて、ますもにこにこしながら再び奥へあがつて行つた。
　奥さんと女中とがこちらの乳を飲ませてやつてる坊ちやんをつれて歸つて行くと直ぐその落し物をこちらは拾ひ取つたのだが、この時、うちの人は店さきで註文かごへお得意から聽いて來た註文の物を入れてゐた。その渠を――一つには、はだしも同然のやぶれ靴をはいてるので――店の横手からお勝手の方へまはらせ、こちらも亦奥に行つて臺どころへ出で、居間とのあはひの障子を締め切つて、奥さんの財布を見せたのだ。
『……』渠はこちらにかまはないで、獨りでその中を數へてしまつたものと見える。嬉しさに足のよごれなどを忘れてしまつたのらしいが、こちらもそんなことをうちの人がしてゐるのに注意を與へるひまもなかつた。
『そんなに這入つてるの？あの奥さんのことだから、ね。』

『向ふは、もう、てツきり感づいてるにちげひねいんだが』と、渠もまだ居間に立つてゐながらの答へであつた。『こツちは飽くまで知らねいでとほしてしまう、さ。』

『そりやア、きまつてます、わ。』店の方を氣にしながら、ますは自分も財布のなかを數へて見ると、うちの人が云つたとほりであつた。そしてそのほかにも何か奥さんの色男でもあつて、それからでも來た秘密な物でもないかと、贅澤にも物好きごころまで出して調べて見ると、まだ新しい電車の回數券と三つばかりおかねの受け取りと簞笥の鍵らしいのが一つとだけあつた。『こんな物アどうしましよう？』

『よその受け取りなんか』と云ふが早いか、うちの人はそれを手に取つて引き裂いてしまつた。そして鍵はゆかの下へ投げ込んでから、財布を冗談のやうにこちらからひツたくつた。

『……』ますはそれをも亦暮しや店のことに使つてしまはれたくはなかつた。自分の兒が生れると直ぐ死んで、そのあとの乳をそツくり濱田の坊ちやんに飲ませてゐるそのお禮だツて、かねで貰へば自分の物にはならないので、毎月衣物や何かにして貰つてるのだ。今月のは、また、やがて田舍のお盆が來ると坊ちやんをつれて一と晩里へ歸つて來るつもりなので、その時の爲めに夏帶を賴んである。それらもみなさうだが、今度の拾ひ物だつてもその濱田の赤ン坊のおかげで――いや、今一つ立

ち入つて云へば、自分の兒が死んで呉れたおかげだ。だから、うちの人にだが、笑ひながら、『わたしと半分わけよ』と、念を押さないではゐられなかつた。

　それは午後の一時頃のことであつたが、四時近くなると、また坊ちやんの乳を飲ませにお隅さんがやつて來た。そして

『わたし、うらなひ師に見て貰つて來ました、わ』と云つた。

『うらなひですか』と、うちの人は初めから茶化して、『うらなひなら、わたしでもやつてあげますよ。』

『どうせ當るも八卦、當らぬも八卦でしよう。』ますも自分で成るべくとぼけてゐるやうにした。が、氣になるので、乳を飲ませながらも、『どう云ふことであつたの？』

『それは云へません』と、お隅さんは勿體らしく答へた。

『………』けれども、こちらはそれをおこるわけにも行かなかつた。

『財布に這入つてた鍵がないので奥さんは困つてゐます』と、さもこちらのせいであるやうにして、歸つて行つた。

「なア、どうせこれは出ませんとでも云はれたのだらうよ』と、うちの人はかの女が歸つてからも高をくつてゐた。

『でも、いつ調べられるか分らないから、當分のあひだは持つてゐられません、わ。』
『ぢやア、どうするんだ？』
『思はず授かつたものだから』と、こちらは暫らくおろそかにしてゐたお燈明を今夜は上げる氣になつてたので、『まア、神棚へでもまつつて置きましよう。』
『それもよからうが――』うちの人は拾つた財布をまた腹がけのどんぶりから出して見て、『こんな財布こそ、持つてゐると、却つて疑ひの種にならア！』
『……』ますも初めてさう氣が付いて見ると、渠が今まで大切さうにそれをそのまま持つてゐたのを攻めたくなつて、『分つてるぢやありませんか……』
『いいにほひがしてゐるが、な――女郎か藝者のやうな』と、渠はわざとらしく二度にも三度にも嗅いで見てから、現金と電車券とを取り出すが早いか、こはく色の絹の財布を二つに引き裂いた。そしてそれをもゆかのしたへ投げ込んでしまつた。
『……』ますは蚊やり線香を一と束ねづつ賣つたあとの細長い明き箱の一つに現金を入れてちやんと蓋をして、それをねずみ入らずの上なる神棚に上げ、ついでに、まだ早いが、お燈明をもつけた。そして不斷はうすぎたない、うすくらい居間だが、それが何だか花やかになつたやうにおぼえた。たツた六疊の一とまに、鼠入らずの外に簞笥もあり、さうめん箱も重ねてあり、はしご段もあり、ちよ

ツとした帳場がたりの臺も半間のあがり口をふさがないやうに置いてあつた。

すると、また七時のお乳になつて、お隅さんが坊ちやんをつれてやつて來て、

『奥さんは簞笥を明けるのにお隣りの鍵を借りましたが――わたし、おいなりさんへ伺つて來たら、矢ツ張り、よく當つてゐます』と云つた。

『……』こちらはかの女が來るたんびにこれからそんなことを云ふのかと思ふと、たまらない氣がして來たけれど、相變らずそらとぼけて、『おいなりさんに目がありますか？』

『あゝから當るんでしよう』と、お隅さんもつけつけ答へた。その云ふところによると、これは決して通りすがりのものなどが拾つたのではない、財布を落した奥さんのいつも行きつけてるうちの人が拾つたので――名を云つてもいいが考へて見れば直ぐ分ることだ。その人の髪は奥さんと同じ髪に結つてて――。

『……』そんなことはこちらへ疑ひをかけてれば、おいなりさんでなくても云へることではないか？女中が奥さんと相談して來て、尤もらしくいい加減のことを云つてるのだらうと見えた。で、これにも心を落ち付けてちよツと神棚の方へ目をやつてから、『おいなりさんへ行つて來たのぢやないでしよう。』

『うそだと思ふの?』お隅さんも『けふは大層景氣がいいやうです、ね』と云つて、お燈明に氣を付けてゐたが、その話のつづきを語つたのによると、奥さんの帶のあひだから財布が半分顏を出してゐた時に、その人は早く落ちればいい、落ちればいいと思つてた。

『………』成るほどそれはほんたうのことだ。こはく色がその通り出てゐた。

『そのうちに落ちたが、奥さんは話に夢中になつてゐて、氣が付かなかつた。それをその人はそツとかた足で以て引き寄せて、物のしたへ隱して置いたのださうです。』

『………』それも間違つてはゐない。物とはそら豆のさやで、そのしたへこちらの足で以て取り敢ず突ツ込んだのだ。どうしてそんなことまでが分るのか、少し不思議にまたおそろしくなつて來て、こちらはわれ知らず坊ちやんを抱いてるまゝ縮み上つた。そしてこの少し前からお隅さんの話を自分だけで避けるやうにして、うらへぬけて出たうちの人を餘り圖々しく勝手すぎはしないかと恨めしくもなつた。

『その人は然し強情な方だから、なか〳〵尋常には白状しさうでないが、おいなりさんが知つてると云ふことを度々云つてるうちにはたまらなくなつて盜んだものを出すツて。』

『然し盜んだのぢやないでしよう』と、つい、おこりたくなつてこちらは口に出した。

『でも、盜んだのも同じでしよう――拾つてそれを渡さないんだから?』

『………』さう云はれると、こちらはまた一言もなかつた。默つてるに越したことはないと思つて、そのあとはただうすら笑ひにまぎらしてゐた。

女中が歸つて行つたあとで、うちの人はのツそりうらから這入つて來て、先づ神棚(かみだな)のおかねを取りおろした。

『こんなところへ置いときやア、直ぐ見られてしまふ、わ、な。』

『さうですよ。』お隅さんにじろりとその方を見られた時にはこちらもひやりとしないではゐられなかつたのだ。

『………』うちの人はおかねの這入つた線香箱を簞笥(たんす)へ持つて行つたが、それは餘り分り易いからとこちらが反對したので、鼠入らずへ入れた。が、それもどうかと二人で心配したので、渠はさうめんの大きなから箱へ投げ込んで、そのまゝそれをうら土間から明いてるゆかしたへ押し入れた。そして

『斯うして置きさへすりやア、誰れが來たツて分りこアねいや』と云つた。

『………』こちらはまたそこへ、丁度、二階を貸してあるミシンの敎師が歸つて來たので、それに向つて何喰(なにく)はぬ挨拶をした。

二

その晩は、店へ買ひ物に來るよその奥さん達を初めとして、女中のやうなものにまで、ますは愛嬌があつた。

『八百屋さんはいつも剽輕な人だが、今度のおかみさんがまた矢つ張り無愛相だ』と云はれてゐることは、前々から、自分もそれとなく聽いて知つてゐるのだが、うちの人の仕向けかたでは女房が人に愛相よくしてゐることはできないのである。

　百姓上りの八百屋ふぜいでありながら、ひまさへあらば哲學とやら云ふ六ケしい本を讀んでゐて、何を話しても話に乘つて呉れず、さうして一週間に少くも三晩と云ふもの、渠はキツと店を明けて、自分ばかりが芝居を見に行くのだ。

『芝居は新派に限る、面白くて分り易い』と云ふのはいいが、自分ばかりの樂みであつて、こちらを一遍だつて一緒につれて行かうとはしない、そのたんびにこちらは留守番ばかりさせられて、みやげ一つ買つて貰つたことがない。そして日々の儲けと云へば、うちの人にばかり使はれてしまつて、女房の樂みになるものは少しも殘つてゐない。

『これぢやア、わたしだツて詰らない、わ』と云つて見たこともある。

『をんなは皆さうした役割りになつてるものだ』ツて、

『へん、馬鹿々々しい』一番初めのかみさんが店の賣り上げをちよろまかしてゐたことが分つて、い

よいよお拂ひ箱になるときまり、里の方から仲人が迎へ取りに來た時、かの女は二階からなかなか下りて來なかつた。どうしてゐるだらうと心配して、うちのお袋があがつて行つて見ると、かげも形もなかつた。まさか、消えてしまふわけもないがと、ふと、戸棚のふすまを明けて見て、
『お前は、まアー』思はず腰をぬかしたと云ふ。かみさんは戸棚の中にあふ向けになつて、腹を一文字にかツ切つて、臓腑までがはみ出してゐた。里へ歸されるのを恥だと思つて、髪剃りで切腹して死ぬ氣になつたのだ。それは直ぐ醫者を呼んで假り縫ひを受け、病院へ送られて全快したさうだが、餘ツぽど覺悟のきつい人であつたかして、おツ母さんに見付けられた時には、あふ向けのまま、はツきりした聲で、
『どうも濟みません』と云つたさうだ。二度目のかみさんも亦へそくりばかり拵へてゐたのだが、これはそれが或たかまで溜ると里かたへ持ち運んで行つた。どうも賣り上げの勘定が餘り合はなさ過ぎると云ふところから、段々また分つて、追ひ出されてしまつた。
手傳ひかたがた來てゐたお袋は、こちらが腰入れすると直ぐ、そのあくる日から、
『まア、これで安心だ。年寄りがゐては若いものの邪魔になるから、わたしは歸ります』と云つて、田舍の方へ行つてしまつたほど人のいい方だから、お袋のことで夫婦喧嘩が起るやうなことはなかつた筈だ。して見ると矢張り、へそくりのことがもとで二度も夫婦別れをしたのではないか？

『お前だツて、また追ひ出してやるぞ』と、うちの人は冗談のやうに、またおどすやうに、云つたことがある。けれども、代々のかみさんが揃ひも揃つて同じやうなことをするとは、何かわけがなければならぬ。そしてどう云ふわけかと云へば、つまり、うちの人が勝手氣まま過ぎるからであらう。

自分ばかりが見たいこと、したいことをして、こちらには少しもそのお相伴をさせて呉れない。

『一體、どうしたわけなの』と、うち僻けてる時、聽いて見ても、

『きやうらくは自分ひとりでなければできぬものだ』などと、わけの分らぬことを云ふのだ。

『…………』それでは、こちらが別にまた隱しごとをしても仕かたがないではないか？

それはさうとしても、拾つたおかねは店の上りではない。こちらが拾つたのだからこちらへみんな呉れて置いても、道理から云へば、少しもかまはないのである。そして、それで以て少しはこちらの息ぬきをさせて呉れても。

然しこちらも自分ながらおそろしいことがないでも無い。巡査に訴へてあると云ふから、これが若し公けの沙汰になつた場合に、自分だけが罪を着ることはいやだ。せめては、うちの人と一緒でなければ。

さうだ、そのつもりで半分わけを承知してあるのも知らないで、渠はただにこ〳〵と嬉しがつてる

のはをかしい。

が、こちらも亦一方では、もう、わが物になつたかのやうに思つてる嬉しさが、ひとり手にお客さん達に愛相をよくしたのだが、一と晩中の儲けなんかいくらあつても知れたものだと思ふと、早く店を締めて、今一度床したの物を數へて見たかつた。

『お湯に行つてらツしやいよ。』戸じまりを急がせて、うちの人を錢湯にやつてから、むツと籠つた青物や水菓子のにほひの中で、こちらも急いで一つの寢床を――これもこの際新らしいのにしたいがと思ひながら――敷き延べた。それから、その室のはづれへ腹這ひになつて暗い床したからさうめん箱を引き出した。餘りに力が這入つて、胸を押し付けたので、今坊ちやんに飲ませたその殘りの乳がしぼり出されてひとへ物の襟をぬらした。

ぬくといやうで而もぷんとしたにほひが、いつになく、自分の鼻へするどくきこえた。そして近ごろよく笑ひ出した坊ちやんの可愛さをも思ひ浮べたが、同時にまたおかねの顔も見たかつた。

かた手で胸のぬれを衣物のうへから一とこすりしながら、他の手で以てから箱の中の線香箱を取り上げた。そしてその中を電燈のもとへ來て立ちながら調べて見ると、前に數へた通りそツくりしてゐた。にツこりしないではゐられなかつた。そして奥さんを世に結構な人だと思つてるだけこちらは前前から沾みや骨みを持つてるので、拾つた物など返してやらないでもいいと云ふ氣になつたが、若し

それがいけないなら、その申しわけに坊ちやんを貰つてしまひたかつた。

『いツそわたしにお呉れなさい、な』と、もう先に云つたのは、おかねではない、坊ちやんをであつた。それが初めて笑ひ出して、こちらの顏をにツこり見た時は、何とも云へぬ可愛さが出てしツかり胸に抱き締めてゐた。斯うなると、我子も同樣であつた。奥さんにはさうでもなくて、つれて來る女中になついてるのを、いツそのこと今のうちにこちらにばかり向けたいのである。

考へて見れば、坊ちやんの爲めにも飛んでもない惡いことをして——然し、今更ら返しやうもなかつた。

約束の夏帶は——このことがある爲め——貰へるか、どうだらうとあやぶみながら、手に持つてたおかねはもとのさうめん箱に入れ、それをまた腹這ひになつて力一杯にゆか下へ突ツ込んだ。その勢ひで、はたけた膝が折れて、兩方の足をぴんと天井の方へはね上げてゐた。

『何をしてゐるの？』筒井さんが丁度二階のはしごを下りかかつてゐたのだ。

『………』こちらはばね仕掛けのやうにはね起きた。そして『へ、へ、へツ』と笑つて見せた切り、向ふが段と土間とのあひだにある一つ便所へ這入つてまた出て來るまでも、どうしていいのか分らないで突ツ立つてゐた。今見せた不ざまに對するきまり惡さも加はつてだ。

『わたしも、もう、休みます、わ。』

『さうですか? お休みなさい。』こちらは二階へあがつて行く人の後ろ姿をじろりと見あげて、今のを見つけられはしなかつたかと考へてゐた。

いや、まさか、見つけたのではあるまい。それにしても、ゆか下の眞ツくらなところへ箱の蓋もなしで突ツ込んで置いたら、鼠が夜中に喰ひ散らすかも知れないと思へた。

うちの人と入れ替つて、ますも錢湯へ行つた。そして歸つて見ると、簞笥の上の鏡臺のわきに置いてある圓い置時計は、矢張りいつもと同じ程の時間になつてゐた。

うちの人はこの日の賣り上げ高を締めくくつてしまつたかして、もう、とこへ這入つてゐたが、

『おい』と、渠はこちらが立ちながらちよツと綺麗水を顏になすつたその裾を引ツ張つた。

『なアに?』にツこりしてふり返ると、渠も下からほく／＼した笑ひを見せながら、

『お前、こツそり出して見た、な。』

『ぢやア、あんただツて――わたしの留守に?』

『おれはおれの爲めに見たのだ。』

『わたしもわたしの爲めによ』と今一度、顏を兩手でなすり付けて鏡の方を見ながら、『でも、どうして分つたの?』

『それくらゐの心おぼえはしてあらア、な。』

『あんたはおそろしい人！』ほんの無造作のあひだにしたやうに見えたことにもおぼえがあるのだ。
『さんざん、前々の女房に惡いことをされて來たから、な。』
『だから、わたしもさうだと云ふの？』こちらは渠の枕もとへぺたりと坐つた。そして互ひに笑ひを見せ合ひながら、『それにてしも、あすこへ置いとくなら、蓋でもして置かないと――。』
『へん、ねずみが危險だと云ふのだらう。とツくにそんなことア――』
『ほんとに？』ますは立つて行つて、床したをのぞいて見た。そしていかにも蓋ができてるのに安心して、またもとの座へ立ち返つた。
『大きなはしら時計も買はなけりやア店の飾りにならないし、自轉車もいいのと買ひ換へなけりやア――いツそのこと、早く使つてしまつた方がいいぞ、鼠にも喰はれねいで。』
『いけません。いけません。それこそ直ぐ分つてしまうぢやありませんか？』
『分るもんか？』
『あんたはさう云ふけれど、ね――』ふと氣が付いて顔と共に聲をも低め、
『泥棒だツて、俄にかね使ひが荒いところから手が附くのぢやアありませんか？』
『それもさうだが――』うちの人の聲も低くなつてゐた。
『今暫らくの辛抱よ。さうしてこれは店の買ひ出しに使はないで、成るべくふたりの贅澤品を買ひま

しよう。』

『そりやアその時のことにして、さ――』もう、休めと云はれるのだけれども、ますは渠に自分の手を引ッ張られながら、家ぢうがしんとするだけ、そとの方へ氣が取られた。けふに限り鼻の道がよく明いたやうに、また耳の穴も特別に明いたかして、人の足おとが一々にびくり、びくりと自分の胸にまでこたへて來る。そして四方八方から家の中を巡査か誰れかがのぞいてるかと氣持ち惡く、自分のからだ中の毛穴もふし穴のやうに大きくなつてるかとおぼえられた。

　ぞツとするほどおそろしいのである。うツかり休んででもゐると、そのまにおかねと共に自分のからだをも持つて行かれさうであつた。それに、あのおいなりさんと云ふ物が――目には見えないけれども――巡査のやうにまわつてるものと見えるのだ。それでなければ、ただ出しぬけに伺ひに行つたものに對してほんたうのことが云へるわけのものではなからう。

『落ちればいいと思つてるそれが落ちたので、それをかた足で寄せて隱した。』云ふことが斯うてツきり當つてるではないか？若し奥さんが初めからそんなところを知つてたなら、こちらに拾はせてあとの騷ぎをするまでもなく、自分でその場に拾ひ返したに違ひない。

　それとも、わざ〳〵そんな芝居をして、こちらの心をためしてゐるのか？

『あんた』と、ますは握られたる手で以て所天の手を握り返し、他のかた手をまた渠の肩にかけて、兩手の力で渠をゆすぶりながら、『奥さんが、まさか、何かしつかりした證據を持つてるんぢやないでしよう、ね？』

『持つたらどうすると云ふんだ？』

『わざとおいなりさんなど云つて、わたし達の心をためして、――』

『白狀しなけりやア、最後に巡査にでも渡すと云ふんか――馬鹿！そんなことがあるけい！』

『では、どうして拾つた時の樣子を知つてるんでしよう？それが不思議だ、わ。』さうだ、不思議には違ひなかつた。が丁度その通りのことがお隅さんの伺ひに出たのだとすると、どうしても自分はおいなりさんに見ぬかれてゐるのであつて――。

『おいなりさんがいい加減なことを云つたのが、ひよツくり、うまく當つたのかも知れねいや。』

『そりやア、ね。』さう考へればそれだけのことであるから、拾つただけがこちらの儲け物で――嬉しいことは矢張り嬉しくないでもなかつた。かの女は所天の顏へおツかぶさるやうにして、『でも、ね、若し分つた時にわたしだけがわる者になるのはいやよ。』

『下だらねい！』渠は少しつれなく見えるほどこちらを相手にしないで横を向いた。けれども、早く寢ろとばかり云つてるやうに。

『……』こちらもそれツ切り物は云はなかつた。そして自分の心に怖ろしさと焼けツ鉢とが加はつてるまま、兎に角、圖々しくなつて一と眠りすることにして、蚊屋を釣つた。

すると、やがて眞ツくらの中に鼠が何か物をかじつてるやうな音がしてゐる――がり／＼と。また、がり／＼と。そしてそれが度かさなるに從つて大きく聽える。ふと、例の物をでないか知らんと思つたが、手あしが重くツて立ちあがれない、まるで何かに押し付けられてゐるやうだ。そして闇の中がはツきり見えるのが不思議であつた。そのうちに、驚いたことには、脊の圖ぬけて高い泥棒がぬッと床の下から覆面をして現はれた。あツとたまげて叫ぶつもりであつたが、どうしても聲が出ない。
『おい、おい』と呼び起されたので目をさますと、自分のそばにうちの人がからだを半分起してゐた。
『何か云つて……』
『……』別に返事もなく、渠はまたぐツたりしてしまつた。
『夢を見てこわかつた。』こちらもぐツたりと、ただ一口でも濱田の奥さんのやうになつて見たらと思ひながら、また眠りに落ちてしまつたのである。すると今度は、何だかかうがうしい森の中に赤い鳥居がいくつも見えて來た。その奥から、神さまらしいものがしづしづと下りて來る。自分はただただおそろしいので顫えてゐると、段々近くなつて、神の顔が濱田の旦那に見える。

が、それが不斷よりも一層こわい目つき、口つきをして、

『お前は人の物を盜んだのだ。盜んだのは仕かたがないとしても、おいなりさんだけによく白狀して、その罪をかばつて貰ふ爲めに每日色の付いた御飯をあげろ。さうしないと、一ときは得をしたやうでも、直ぐあとでそれにも增したわざはひが來るぞ』と云つた。

『……』自分のつもりでは、地べたへ手を突いて、へい畏まりました、きつとその通り致しますと答へた。が、その心持ちだけの引き締まりが自分のからだにないやうにおぼえた。

顏のこわいのに比べると、さう怖ろしいことも云はないのだ、いかにお米が高いと云つたツて、僅かの赤飯かこわ飯ぐらいでことが濟むのではまことに結構ではないか？

『さう、さ、おいなりさんも案外話せるわい』と、うちの人がいつものやうに冗談を云つたと思へた。で、自分もそれにつれておほ笑ひをしたかと思ふと、目がさめた。矢つ張り、あつ苦しい蚊屋の中にゐたのである。

そしてまたうツとり眠りに落ちてしまつた。

すると、今度はまた――

自分の產むと直ぐ死なせた兒が大きくなつて、濱田の女中さんに抱かれて歸つて來た。そしてその

お隅さんが

『早く乳をあげて頂戴――もう、時が來たやうですから』と云つた。いつもの通りにだ。

『おう、坊や！』こちらは然しいつも通りではゐられなかつた。不斷とは違つて可愛味と珍らしみとを以て、『歸つて來たのかい？よく歸つて來ました、ね！』

『………』坊やはお隅さんの手のうちにぴん〳〵とはね喜んで、やがてこちらの手に抱かれると、こちらの顏をうつとりと見上げてにこ〳〵ツとした。するとそれは人の子であつた。

半ばさめて見ると、さきの夢に見た泥棒のおそろしさに死んだ兒を思ふ情けなさまでが加はつて、延ばしてゐるからだの手も足も、またどこもかも、動かせないほど世の中をいやアな氣がした。自分もこのまゝ死んでしまつてもいいやうな――。泥棒同前のことをしてまで生きてゐないでもいいやうな――。さうして自分ら人間のあさましさが考へられた。

けれども、そこへ、また、自分は寢前に溢れる乳を搾り棄てることを忘れたことが思ひ出された。この十分な乳が坊ちやんをも又濱田のうちの人をも喜ばせてゐるのだが――今ごろ丁度目をさまして坊ちやんが泣いてはゐやしないだらうか？

『子どもの飲む乳が張る時には、丁度その子が乳を飲みたくなつた時ださうですよ』と、お隅さんがどこからか聽いて來て、さう云つたので、

『さうでしようよ、わたしのだツて丁度張つて來たかと思ふと、坊ちやんが泣いて來ますから』と答へたツけ。

半ばうつらうつらのうちにその坊ちやんの可愛い泣き聲が聽えたかと思ふと、はツきりと目がさめた。そして自分の乳にさわつて見ると、赤ン坊と同じやうなあまいにほひはするが思つたほどには溜つてゐないのであつた。

『お乳には心配が一番毒だ』と云ふことに思ひ當つた。自分の前に乳母がきまつてたのだが、餘り乳が出ないのでやめられてしまつた。

さうだ、たつた四十圓にも足りない拾ひ物のことを心配して、毎月貰ふ乳母としてのお禮を乾あがらせても詰らないのだが——事によると、乳は當り前に出てゐても今回のことの爲めに坊ちやんとの手が切れるかも知れないのだ。

それが一番可哀さうでもあり、つらいやうでもあるので、うちの人を呼起して何とか相談を仕換へて見ようかとも考へたのである。が、渠は不斷と少しも違はないやうにぐうぐう寢入つてゐる。自分はますます目が冴えて行くので、渠の丁度

『おりやア知らん』と云つてるやうなのが小憎らしくつて、指のさきでその頰ツぺたを突ツついてやりたかつた。

『………』兎に角夢においなりさんは何と云つたか？『盜んだものは仕かたがないから――色のついた御飯を――』さうだ、これで身を免れるより外に道がないと思へた。

三

翌朝、先づ目をさましたのはうちの人であつた。それにつれてますも自分の寢不足の目をさましたのだが、うちの人は起き上ると直ぐ、床の下をのぞいて箱を引き出し、その蓋を取つて見て安心したやうすであつた。

かの女は蚊屋の一方をはづしながら、渠のそばへ行つて、

『うちでもおいなりさんを信心しませう、ね』と、にが笑ひをしながら低い聲でささやいた。

『そんなことは入るもんけい？』

『でも、不思議ぢやアありませんか、拾つた時のやうすを知つてるなんて？それに、ゆふべ夢にお告げがあつた、わ。』

『なんだつて？』

『盜んだものは仕かたがないから、これからおいなりさんに毎日赤い御飯を上げろッて。』

『馬鹿々々しい！夫れよりやア、早く使つてしまつた方がいい、さ。』

『いいえ、いけません。それこそ感づかれます、わ。』
『なアに、おれやアおれでまた夢を見た、さ。――自轉車をいいのと買ひ換へるのもいいが、一つ金齒を入れることだ。』
『そんな贅澤まで？』かの女は手をあげてちよツと渠を打つまねをしたが、
『人の心配も知らないで、ぐう〳〵眠つてたくせに！』
釜のしたをやツと焚き付けた時に坊ちやんがつれて來られたが、お隅さんが朝ツぱらからまたおいなりさんのことを云ふのが當付けのやうに聽えて面白くなかつた。
『奧さんも御飯がすんだら行つて來ると云つてます』と。
『………』どこへ行くのも向ふの勝手だが、あとでまたそのことを聽かせられるほどなら、もう、二度とこの店へ來て貰ひたくないと思へた。さうなれば、然し、坊ちやんの乳がなくなつて困るだらうではないか？
朝の食事が濟むと、二人とも店のことにまぎれてあのことは忘れてゐた。が、坊ちやんがまたつれて來られたので、お隅さんはまたおいなりさんの話をした。
『奧さんが行つて來たら、矢ツ張り、おんなじことを云はれたさうです。さうして拾つた女はなかなか強情だから、こちらもそれに負けないでしツかり強情に攻めとほせツて。』

『誰れを攻めるのですの』と、こちらはとぼけてやつた。
『もちろん、その人をです。』お隅さんはまたむツとしたやうすだ。そしてなほそのおいなりさんのことを語つたによると、奥さんが行つた時に職人の親かた風の人が來てゐて、その人などは去年その息子が行くへ不明になつたのを伺つて見たが、六日目には必ず歸つて來るから安心しろと云はれた。で、それを信用して待つてゐると、六日目のゆふがたになつても歸らない。九時過ぎになつてもだ、また十時を過ぎても。こりやア、とうとうおいなりさんに一杯喰はされたのだと云つてると、不思議にも、十一時を十分ばかり過ぎた時、息子はしほ〲として歸つて來て、どうも濟みませんでしたと詫びた。
『………』ますはそれを聽いて一層おそろしみを感じないではゐられなかつた。とぼけてゐる自分に、いつ、どう云ふおいなりさんの仕返しがないとも限らなかつた。けれども、それは、もう、お隅さんや奥さんとはぢかの關係がないやうにも思はれるので、ただ笑ひながら、『そんなに當るおいなりさんなら、わたしも伺つて見ようか知らん？』
『何か心配ごとがあるの？』お隅さんの尋ねかたもなか〲喰へないやうであつた。
『えい、來月のお盆に田舍へ歸れるか、どうかツて。』
『………』お隅さんは何だ、つまらないと云ふ風をしたが、こちらにはそれにも夏帶のことが勘定に

這入つてゐた。

　ますは今聽いたところの、おいなりさんに關するまた新しい話をうちの人にも話して聽かせた。そして

『不思議ぢやアありませんか』と云ふことをます／＼念を押すやうになつた。

『そんな道理はてつがくにはありやアしないが、な』と云ひながらも、渠も少しは分つて來たと見え、

『それも氣休めにならうから、つまり、きようらくの一つだらう』と、分らないことを附け加へた。

『ぢやアわたし早速行つて來ましやうか？』

『さう急がねいでもいい、さ、ね。』

『でも――』

『バナナを頂戴。』

『あづきを下さい、な。』

『人參がありますか』と、店のお客さまがごた／＼と集まつて來たので、こちらは其方へ氣を取られてゐると、うちの人も亦近處への註文さきに出て行つてしまつた。

　その留守に、丁度客あしの絶えた時を見計らつて、ますは例のところをのぞきに行つた。けふにな

つてはこれが初めてのことだが、先刻から見て置から置からうと思つてるのに其ひまがなかつたのだ。

ゆか下から箱を引き寄せた。そして蓋を明けて、線香箱のかねを取り出した。先づ、ちよつとそれを兩手に載せて押し戴いてから、一枚々々に數へて見ると、確に三十六圓五十錢あつた。これさへ確かにあれば、まア、何よりも安心なのだ。今一度それを押し戴いてから、もとの通りに直した。

『やがて苦しくなつて後悔する時には、そのかねを門のうちか、またはうら口の石の上かへそツと置いて置くだらう』ツて？

『………』へん、誰れがそんなまぬけたことをするもんか？斯うなれば、十分に隱しをほして吳れるのがおいなりさんの力ではないか？

づるいことに於いてはうちの人もなか〱に負けてはゐないたちだから、いかに勝手氣ままな人でも、まさか途中から裏切りするやうなことはあるまいと思はれた。

すると、果して渠もいよ〱同じ氣になつたと見え、おもちやのやうなのだが、赤の鳥居を一つと素燒きのおきつねさん二つと買つて來た。そとから歸つて來るとその腹がけのどんぶりから、それを――どこで買つて來たのか知らないが――にこ〱しながら出して吳れた。そして今度はまじめ腐つた顏になつて、

『いわしのあたまも信心からと云ふだア。』

『そんな勿體ないことを！』こちらの本氣になつてゐるのに比べては、うちの人の心持ちはまだよく分らなかつた。不斷から、冗談を云つてるかと思ふと、それがまた本氣でもあるのだから。

兎に角直ぐ受け取つてそれを箪笥の上の眞ン中へ飾り据ゑた——置き時計をもツと右に、鏡臺をもツと左にして——眞ン中には、おきつねを二つ並べて、鳥居をその前へ立てた。そして早速、うちのものにもお祝ひのつもりで、店のあづきを煮て、おいなりさんの御飯を焚いた。

それを見たお隅さんは、案の定『あんたのとこは急に信心し初めたの、ね』と云つた。

『……』こちらは前以て云はれるのを覺悟してゐたことではあるが、向ふの冷かしが私かに癪にさわつた。然し向ふに負けて行く爲めではないと云ふ心を見せて置くつもりで斯う答へないではゐられなかつた、『さう利き目があると聽いちア、わたし達だツておいなりさんを信心しなけりやア損になります、わ。』

『得にもなりますまいよ。』

『どうして？』

『段々分つて行くでしやうから。』

『……』また云ひ出してるかと思はれたので、わざとそれにはさわらないやうにして、まだその

損得の話をしてゐるつもりで、

『だつて、おいなりさんが人に御利益を與へてこッちにばかりさうでなけりア、えこ引い氣の沙汰になるぢやありませんか？』

『さうですか…』お隅さんは面白くもないと云つたやうにちよッと横を向いた。そして箪笥の上をあさ笑ひながら見てゐた。

『………』拾つたうちから少しお隅さんにもおすそ分けをして、なんにも云はせないやうにした方がいいか知らんとも、こちらは考へてるのであつた。この人だつて自分で拾つたら、きッと隱してゐたに違ひない。自分で拾はなかつたから、羨ましがつて奧さんの味かたにばかりなつてるのだらう。

そのうちに、坊ちやんの乳がすんだので、お隅さんの方へ手渡しした。すると、かの女は喜んで足をぴん／＼させてる坊ちやんを脊中へ廻しておぶひ紐を締めながら、

『まア、せいぜい、信心おしなさいよ』と、いや味ッたらしく云つた。そしてなほ云ひ足りないと思つてか、また斯う附け加へた、『さうしたら、段々分るでしやう。』

『何がです…』今度はこちらも餘り馬鹿を云はせない爲めに、少しきつい聲で聽き咎めてやつた。

『それは云はないでも自分で自分に知つてることです、わ。』

『何オッて、誰れですの。』若し向ふが一度だッて泥棒とでもはッきり云つたら、こちらもその證據

を見せろと突ツかかつて行く考へであつた。が向ふもさうと云へる筈がないので、こちらもそれツ切り默つて笑つてのけるつもりが、思はずちよツとにが笑ひになつてしまつた。

お隅さんが歸つてから、うちの人は

『相手にするからいけねいんだ』と、こちらをおこり附けた。

『だつて、相手にしないわけには行かないぢやアありませんか――向ふから云ひ出すのですから…』

『だから、うツちやらかして置け！』

『あんたはそれでもいいか知れませんが、ね、わたしとしちやア困るぢやありませんか――いツそのこと、うち明けてこツちの味かたにでもしてしまはない限り…』

『飛んでもねい！』うちの人はそんなことをするに及ばないことを語つた。若し向ふに確かな證據があるなら、巡査をつれてでも奥さんが乘り込んで來るに違ひないが、奥さんはあれから一度も來ないで女中にばかり云はせてゐるのは、つまり、證據がないからではないか、と。

『……』成る程、さう云れて見ると、安心なことは安心でないでもない。が、心に引け味があるのが苦しいのである。いよいよ分つたとなれば、誰れが取つたかと云ふことになるだらう。その時に、うちの人は少しも知らなかつたと云つて逃げることもできやうが、こちらはどうしても云ひのがれることができない。誰れか知らん、ひとりはどうしても取つた本人が出なければならないから。

それにしても、うちの人だツて心ではきツと心配してゐるには違ひない。こちらの云ふ通りにおいなりさんを祭るやうになつたし、また、けさからお隅さんにいつもの冗談をちツとも云はなくなつた。

『お隅さん、お隅さん』と、たとへば、そとから本當らしくかけ込んで來て、『今、あなたのうちから電報が來ましたよ、歸つて御覽なさい――お嫁の口があつたツて。』

『また』と、お隅さんも慣れツこになつて、『八百屋さんの冗談でしやう。』

四

二晩目の夜はその前夜よりもさう怖ろしいことはなかつた。が、けふ一日奥さんの顏が見えなかつたのは却つて何かこちらに對する深いたくらみがあるのではないか知らんとも思はれて、うす氣味が惡かつた。

晝まよりも話しをこそ〳〵にしながら、互ひに顏を押し寄せてゆか下のおかねを數へて見てから、とこへ這入つた。そしてますは何だか自分のうちが一ときに癩病やみにでもなつた氣がした。

と云ふのは、この近處に〇〇と云ふお屋敷があつて、その主人は信州かどこかの代議士だが、親類家族がみな癩病だ。ところで、癩病には人間のからだの肉がいいと云ふので、國ではその一村、一郡

の豪家であるのを幸ひ、お寺の坊さんや墓掘りを澤山のおかねで抱き込み、新らしい死人があると、それを夜中に掘り出して、その肉を牛肉のやうに小さく刻んで鹽づけにし、その壺をゆか下へ隱して置く。そして時をきめて、家族ばかりでなく、血縁つづきの親類をみな呼び集めて、――それも夜中に――その肉をさかなにしてお酒盛りをするのだ。皆これにあやかつて病氣の直るやう。また直らないでも、自分ら一生のうちにはくづれて來ないやうに、と。

親類同志が夜中にこツそり水入らずでやるのだから、世間のものは誰れもそんなことをしてゐるとは知らなかつた。が。或時、本家の小さい娘ツ子の口から分つたのである。その娘ツ子は、ふと、わけもなくだらうが他人のゐる前で、その母親に向つて、

『かアちやん、もう、緣の下のおととは眞ツ平、ね』と云つた。

『緣の下のおととツて何だらう』と云ふことが世間の人の口から口へ傳はつて、とうとうそれが人間の肉だと云ふことが分つたさうだ。

その話を聽いて知つてるので、こちらがゆか下を氣にするのが丁度そんなやまひ付きのすることのやうに思はれて、自分ながら胸も惡くなるのであつた。けれども、それも仕かたがなかつた。うちの人がゆか下を氣にしてゐると、こちらも亦そこのおかねを渠にばかり自由にされたくないと云ふ氣が出るのである。そして自分も負けない氣になつてそこをのぞきたいのだ。

『お前はなか〳〵強つく張りだ、な。』

『あんただツて』と、互ひにこツそりと笑ひ合ひもした。

その夜、――今夜も心がゆるんでる爲めか、少し早く休んだのだが、――十一時頃になると、隣りのはた屋の裏の方で人の騷ぐけはひがした。さア、大變だと、ますは思つた。こちらをとツつかまへに來たのではないかと、俄かにはね起きた。すると、うちの人も申し合はせたやうに起き上つた。そして二人とも無言で蚊屋の中をただ目くばせしながら、息を殺して音のする方へ耳をそば立てた。

はた屋のかみさんも裏へ出たらしい。そして

『大變です、大變です』と云つて、その亭主を呼んだ。

『またか畜生!』亭主も出て來たやうすだ。

『………』して見ると、また、あのふすべむろから火が出たのだと、ますには直ぐ感づかれた。前にも一度あつたことだから。急いで臺どころへ出て、裏の戸を明けた。まだ大したことにはなつてゐないやうであつた。

『一體、こんな無用心な火を入れて置きながら、おろそかにして置くとは不都合ぢやアないか』と、どこかの男が云つてゐた。『おれがとほりすがりに見付けなかつたら、確かた火事になつたかも知れないのだ。』

『どうも濟みません』と、おかみさんは云つたが、あの主人も一體にそそツかし屋で、前にも火が出かけたのを見付けたのは家人ではなくツて、こちらであつたのだ。

麻の絲に色を付けるには一と晩中硫黄でふすべなければならぬとか云つて、こちらもとほることになつてる道を板壁の方に寄せて、箱を置いてある。そしてその下で毎晩硫黄をふすべてゐる。それが火になりかけたのだ。

横丁へ出る木戸をいつも明けツ放しにしてあるのが仕合はせで、とほりすがりの人が見付けて呉れた。それでなければ、うちも火事のお相伴をした――さうだ、例のも――。

ますは、ふと、忘れてゐた物を思ひ出して、後をふり向くと、うちの人がそれを自分ひとりの物のやうに大事さうに持つてゐた。

『あんたばかりの物ぢやないのよ』と云つて、先づうらの戸を締めてから、渠の手なる箱を奪ひ取らうとした。

『なにしやがるんでい!』渠は他人か何ぞのやうに無氣におこつて、こちらの手をふり拂つてしまつた、『若し火事になつて燒けてしまつたら、どうする?』

『そりやア、さうですけれど、まア、貸して御覽なさいよ』と云つて、ますは自分の手にそれを受け

取つた。そして今夜は、二階には旦那が來て、火事さわぎも知らないでぐツすり休んでるらしいのに安心して、またその中を數へて見た。それから、『どこへ置いときましようか、ね。』
『知れたこツた、もとのところ、さ。』
『だつて、若し燒けてしまつちやアー』
『それが燒ける時にやア、おれ達も燒け死んでしまはアー』
『でも、用心のいいやうに矢ツ張り簞笥に入れることにしましようか？』
『馬鹿！まだ、いつ調べに來るかも知れねいんだぞ。』
『さう、ね。』ますはこの大切な物を椽の下のおとにして置くのが面白くなかつた。が、今のところよんどころないことであつた。そして自分で持つて行つてもとの通りさうめん箱に入れたが、うちの人は監視でもするやうについてゐて、無事にそれが納まつたのを見てから、やツとその箱を巖丈な手でゆかの奧へ突ツ込んで呉れた。
　それから、ふたりはまたとこへ這入つたけれども、あつ苦しさと何だか不安心との爲めに眠られなかつた。火事のことがまだ氣になつてたので、
『隣のそそツかし屋にも困りますね。』
『安眠妨害ぢやアねいか？』うちの人も直ぐ返事をした。矢ツ張りこのことを考へてたかして、『こ

れで、もう、二度も火事を出しかけたんだ。そのたびに人から見付けられるばかりで、あいつらはいつも氣が付かねい。』

『そりやア、さうです、わ。』

『あんな不注意なものを住ませて置いちやア、近處隣りはろく／＼安心して寝られもしやアしねい。』

『ほんとに。』

『みんなで相談して立ちのいて貰ふんだ。』

『さう、ね。それにやア、先づ、濱田の旦那を頼めばいい、わ。』ますが斯う云つたには、何か別なことを持つて行つて、旦那さんをえらい人に立てて、あすこのうちの機嫌を取つて置く方がいいと思はれた。『濱田さんのとこから先づお向ふの二階にゐる巡査によく話をして貰つたら。』

『さうだ、あす、早速おりやア云つてやる』と、うちの人も答へた。

そして、翌朝、濱田の旦那が會社へ出勤しないうちに行つて、うちの人がお隅さんに『ちよつと旦那にお願ひがあるのですが』と取り次ぎを頼むと、お隅さんはあまり氣早くも早合點をしてそれをもおいなりさんの利き目だと見て取つたらしい。

『ぢやア、いよ／＼白状するの』と、嬉しさうに云つたさうだ。主人に忠義な女中だと思へば、それ

が却つて感心なのだらうが、あたまから人を如何にも見くびつた云ひぶんではなからうか、こちらのやつたことが確かに知れてしまつたかのやうに？

だから、うちの人もまたあたまから馬鹿にして、

「わたしにやア何も白狀などすることはありませんよ——はた屋のことでお賴みがあるだけで』と云ひ返してやつたさうだ。

そのうちに旦那や奧さんが出て來たので、うちの人がはた屋のことを云ふと、

『ぢやア、こツちから注意するから、向ふの巡査に出勤前にちよツと來て貰ふやうに云へ』と、旦那がお答へになつたさうだ。

『旦那や奧さんはどんなやうす？』

「なアに、別に違つたことはねいや、な。』

『さうでしやうか』と、こちらはうちの人の返事が少し疑はしかつた。お隣さんの云つてることが本當なら、八百屋が行つたとすれば、きツと變な顏をするとか、いや味を云ふとか、そこに何か間違つたことがなければならぬ筈だのに——旦那でなければ奧さんからでも。

さうだ、あつてもそれが男には氣が付かなかつたのか知らん、自分ばかりのことは考へても、人のことはどうでもいい方のうちの人だから？わたしにやア何も白狀することはありませんよツても、ひ

よツとすると、それはうちの人だけに關係はないと云つて自分ばかりがいい兒になつてたのではあるまいか？今一度、わたしにアではなく、わたし達にやアと云ひ直して來て貰ひたかつた。

うちの眞向ふはお米屋で、その右隣は車屋だが、その角をお米屋の二階のおまわりさんが濱田さんの方へ曲つて行くのがうちの店から見えた。ところで、濱田さんでそのついでにうちのことをしやべつたらどうなるだらう？そんな不正直で不都合なやつは矢ツ張り隣近處へ置いて置けないと云ふことになつて、はた屋と共にここを追ひ出されてしまひはしないか知らん？

お米屋の左隣のそば屋さんが惡い石炭を焚いて、而もその煙突が低いので、ゆゑんが遠慮なく近處の座敷へ這入つて困つた時にも、近處の人は皆相談をして、濱田さんを口利きに立てて、手ごわい談判をした。さうなると、如何に商賣の爲めでもさう頑張つてゐられないことになつて、そば屋さんは立ちのくか、煙突をずツと高くするか、二つに一つの返事をしなければならなくなつた。そして煙突を高くすることにして納まつたのである。

ところが、今回のはゆゑんの騷ぎどころではない。まかり間違へば、そそツかし屋のそそうの爲めにいつ火事が出て、店も家も――從つては、ゆか下の物をも――燒かれてしまうかも分らないのだ。淺野さんが巡査としてうまくはた屋へかけ合つて吳れるならいいが、若しうちのことを聽き知つた爲に、

『なんだ馬鹿々々しい八百屋のゆか下をばかり保護する爲めにはた屋を立ちのかせることなどできるものか？はた屋を立ちのかせたいなら、先づ八百屋から立ちのけ』とでも來たら？さうだ、藪へびとはこのことではないか？

『………』ますは店のお客にも顔を見られるのがまぶしいやうな氣がして、淺野さんが白い服で濱田さんの方からどう云ふ顔つきして出て來るかに氣を付けてゐた。

ますが見て見ないふりをしてゐるうちに、サアベルのかちや／＼は店の前をとほつて隣へ行つた。ちらとこちらの目に寫つたおまわりさんはいつも通りの淺野さんであつた。ちよツと色をとこじみてゐたから、濱田さんの以前にゐた女中とくツ付いたとか、くツ付きかけたとか云はれたが、獨り者で而も近處中の子ども好きが、あのおとなしさうな顔をして、はた屋へきついことが云へるかどうか疑はしかつた。そして若しそれが云へるとすれば、こちらに對しても亦どんなにきつく出て來るかも分らなかつた。

それとなく耳をすましてゐると

『火事が行きかけたのはどこですか』と云つてゐる。

『………』もツとてきはきやればいいのに！

『火事などは行きませんが――』
『……』早速あれだ。そそツかし屋のくせに、おかみさんが人を馬鹿にして！
『然し、ゆふべ行きかけたと云ふではないか？』
『ありやア火事でも何でもありません』と、いま〳〵しいことには、主人もとぼけてゐやアがるのだ。
『ほんの、ただ硫黄のふすべ火が少し大きくなつたのですが――』
『どれ、どこだ？』
『うらです』と云はれたので、かちや〳〵は横丁をまわつて行つた。
『……』ますも自分のうちをかけ上つて、臺どころへ行つた。丁度そこのそと障子がしまつてるのを幸ひに、そのうちがはで、おととひ、うちの人が拾ひ物を勘定してゐた時のやうに突ツ立つてゐながら、そとの話を立ち聴きしてゐた。
『硫黄をどこでくすべるのだ？』
『この箱の下からです。』
『こんなに箱が燒けるまで知らなかつたのか――不都合ぢやアないか？』
『へい、どうもすみません。』
『とほりがかりの人が見付けなかつたら、おほ火事になつてゐたかも知れんのだぞ。』

『以後は氣を付けます。』
『お前のうちが而も同じところから火を出しかけたのはこれで二度目だ。重々注意しないと、近處のものが立ちのきを迫るぞ。』
『へい、すみません。今度ありましたら、何とでも御制裁を受けます。』
『………』主人ばかりが答へをしてゐるのを見ると、おかみさんはおぢけて引ツ込んでるらしい。あの人も圖々しいのだから、しツかり叱つて貰ひたいのだが――
『今回は許すが、以後十分氣を付けないと承知しないぞ。』
『………』淺野さんもあアなると如何にも一かどのおまわりさんである。あのおとなしいやうでもしツかりした口ぶりでは、云はうとすれば立ちのきのことまで云へるだらうから、いツそのこと、そこまで漕ぎつけて呉れたらいいのに。
はた屋がゐすわりでは、二度あつたことは三度あると云ふから、その時にいよ〳〵火事が出てさうだ、ゆか下の物が燒けでもすればと云ふ小ごとじみた考へが出た時、巡査の靴おとがこちらの臺どころの方へ近づいて來た。そしてそれがこちらを押しつけて來るやうであつた。
今度はこちらの番かと思はれたので、かの女はその場を半ば腰がぬけさうになつて逃げ出した。が、居間の眞ン中まで來て、足こしをふるわせながら、そツと向ふのけはひに心を向けてゐると、

靴おとがまた遠ざかつて行つた。何のことだ、あれは淺野さんのいつものくせで、あツちへ行つたりとツちへ來たりするのであつた。この時、丁度、うちの人も店に見えなかつたので、ますはまたこツそりゆか下のを數へに行つた。

五

『また見た、な』と、うちの人が云ふには、うちの人も亦いつのまにか見たに相違ないのである。秘密と云ふものはお互ひにしようと思へばできるのだと云ふことを、ますはつくづくこの二日、三日のあひだに考へさせられた。そしてここの前々のかみさんどもがへそくりを拵へた位のことは恐らくわけはなかつたのだらう、と。

けれども、ます自身のは別にその隱し物をこツそりわが物にしてしまひたいのでもなかつた。また、早く山わけにして處分をつけたいのでもなかつた。ただ發覺しないのが願ひであつた。

『わたし、あれを數へる時には、ね、嬉しいのか、それともおそろしい爲めか、きツと手がぶるぶる振ふ、わ。』

『そんなに面倒くせいもんなら、いツそのこと、早く使つてしまう、さ。善はいそげと云はア、ね、きようらくは急げだ。燒けてしまやアそれツ切りだア。』

『それは、然し、違つてます、わ。おかねならちよいと持つて出られますが、ね、品物にしちやア、あんたの云ふ赤がね落しの火鉢でも、もう、さう輕く行けませんから。』さうだ、この火鉢を買ふことも相談のうちに這入つてるのである。

『なアに、火事さへ出なけりやアいいんだ。それにやア、あのおまわりも氣が利かなかつたぢやアねいか――そんな手ぬるいことを云はねいで、斷然立ちのかせるやうにして吳れたらよかつたのに、な！』

『さうこツちの勝手ばかりにや行かないでしようよ――それに、さうつよく出るのも考へ物でしよう、誰れが云はせたとなると、つまりは、うちと云ふことになるぢやありませんか？』さうなると、こちらには例のことがもとになつてるのだから、ちよツと申しわけの仕やうがなくなるではないか、火事の心配の裏に隱し物があることを白狀しない限りは？

『うちであつたツてかまうもんけい？向ふのそそツかしいのが不都合なんだから。折角、濱田のおやぢにまで云つてやつたことをどいつもこいつも無駄にしやがつて、癪にさわらア。どうせ燒けくそだから、おい』と、わざとにも心をきめたやうにして、『使つてしまはうぢやねいか？』

『まア、お待ちなさいよ。』こちらはそれをとめないではゐられなかつた。『まだ起らない火事とそれとは別物ですわ。使ふにしても、わたしが先づどう云ふ風にすればいいかおいなりさんに伺つて來ます

から。』
『それもさうだ、な。』うちの人もこれには異存のない返事をしたが、
『向ふの行つてるおいなりさんへ、然し、こッちも行けるもんけい。』
『その位のことは――わたしだッて――』さうだ、考へてゐないことはなかつた。
兎に角、こちらはずッと引け味があるのだから、別なおいなりさんへ行くとしても、濱田さんのうちのやうに朝ッぱらからおほぴらに行ける筈がなかつた。
けふはまだうちの新らしい神にも御飯をあげなかつたが、赤いのを僅か焚くのも面倒なので、近所の一膳飯屋から色の付いたおこわを買つて來て、それに店のさくらん坊を添へてすませた。そして日のあるあひだは、うちの人と一緒に店の用をした。坊ちやんが來れば來るで、時間々々に乳も飲ませた――向ふのおいなりさんの話を半分は茶化し、半分はまじめに聽きながら。

濱田さんの行くおいなりさんは折り戸の乞食橋の近處にあつて、近ごろ可なり有名になつてゐるがまだ〳〵小さいのである。こちらが行くなら、いッそのこと、もッと大きいのにしたかつた。夫に多少は癪だから、成らうことなら全く方角の違つたのに行きたかつた。
ますはうちの人と顏をつき合はせて相談して見ると、自分のうちは西巣鴨に在るので、乞食橋の方

は東に當つてゐる。その反對の方角と云へば、自宅より西でなければならない。西と云へば少し遠いが、池袋から雜司ケ谷の方に當るのである。

『鬼子母神の御境内にはありさうなもんですわ。』

『さう、さ。おりやア聽いて來てやらう』と返事して、うちの人は大根、にんじん、バナナ、林檎など註文物を入れた籠をかたに掛けながら、どこかへ自轉車で飛ばして行つた。そしてやがて歸つて來て、元氣さうに、『あるぞ、あるぞ、あの御境内の森のそばに。』

『ぢやア、歩いたツて半みちとないでしよう。譯はない、わ』こちらは田舍に育つて來たので、半みちや一里を歩くのは少しも臆劫でなかつた。それに、車に乘つて行けば、どこへ行つたかが分るし、神に向つて正直に云ふことをも立ち聽きされるおそれがあつた。

『然し、乞食橋のと違つて、みこのやうな者はゐないさうだぞ。』

『さうすると――?』ふと氣が付いて見ると、濱田さんが伺ひを立てたのには、おいなりさんからぢかにでなく、女が男のみこから返事を聽いたのだ。みこがゐないと言葉で以て返事を聽くことができないわけだ。『いや、然し、それでもいいわ』斯う云つたには、こちらにもツと深いと思へる考へもあつた、御利益があるものとすれば言葉でなくとも、もツと確なことにそのしるしは顯はれるだらうと云ふ。

坊ちゃんのゆふがたの乳が少し早く濟んだので、お隅樣に向つて

『わたし、これから直ぐちよツと出かけて來ますから、今度の乳には少し後れるかも知れませんよ』

と告げた。すると、早合點のお隅さんはまた入らざらんことにも

『おいなりさんですか？』

『……』こちらは向ふの早合點にもさう出たら目に云ふことがぴたと當つたので、先づぷりりと怒りを發した。が、どうして斯うよく當るのかを考へて、その場にまた一つの恐ろし味を加へた。同時にまたおいなりさんの信心が人間をさう利口にするものなら、自分も亦この信心の爲めに何か得をするに相違ないと云ふ樂しみがあつた。

不斷の用から手が離れて、神さまなり佛さんなりへ參詣すると云へば、たまに自分の里へでも歸へるやうに氣が勇むものだ。けふも勇んではゐながら、矢ツ張り手が離れてからまた何やかやと多少の時間が取れた。が、これから歩いて行けば丁度日がとツぼり暮れて向へ到着するだらうと思へた。そして心丈夫なことには一つ、今夜は舊暦の十二日ごろで、それに相當する月が――まだ白みがちにだが――そらにかかつてこちらを案内して呉れるも同樣であつた。

うちの人によく念を押して聽いても出たが、道はいつか鬼子母神へお詣りした時とほつたことがあるので、大抵は當が付いてゐた。

村役場や小學校の前をとほつて人家の段々左りがはに絶えたところをまた池袋に出て、停車場を右に見た時には、月の光りも十分に出て來た。そして風があるので、歩いてゐても割合に凉しかつた。

おいなりさんへ行けば、先づ、ほかに誰れも聽いてる人はゐないのだから、『成るべく正直にああも云はう、斯うも云はうと、それればかりに考へ込んでたので、いつのまにか、前以て承知の弓のやうに曲つてる坂へ來た。ここで初めて氣が付いたのだが、もう、多少でも明るいのはそらばかりであつた。ちよツと立ちどまつて、自分のからだの左右を見まわすと、どちらからも人の屋敷のこんもりした樹立ちのかげが迫つてゐる。行くさきの方を見ると、また、一體に天までとどくやうな森の繁みがこちらへ押しかぶさつてる、そして足もとはまるで眞ツくらだ。

思はず身ぶるひをした。が、自分の田舍にもこんなところがあつて、夜遊びにはよく獨りでもとほつたものだ。あの時は平氣であつた。

『お前とわしがめをとなら、われ鍋さげても』何とか云ふ歌までうたつてだ。それをおぼえてゐるから、今夜も斯う大膽にやつて來たのだが、東京慣れると、生まれ變つたと云はれるほど色は白くなつた代り、こんなに氣が弱くなるものかと、自分ながら不思議なほどであつた。

自分の足をあげるのがこの坂から闇の底へ踏み込むやうに思へて、――立ちどまつたのをしほにこ

のまま直ぐ引ツ返さうかとも考へた。が、それでは、うちの人に對しても、餘り度胸がないと笑はれるばかりであらう。

女に度胸は入らないかも知れぬ。が、それは最初のかみさんのやうな、髮剃りでおなかを切るやうな度胸のことだらう。あとで醫者に縫つて貰つたといふだけが無駄になつてしまつた。それにしても、また、女が腹を切りながら泣きもせずわめきもしないで、お袋に向つて、ただ『すみません』と云つただけの辛抱づよさを思ひやつて見ると、――その時にも目はくらんでたらうが――うちの人の爲めにもなるやうにこのくら闇のおそろしさを辛抱するほどのことは何でもなかつた。それにはまた信心しやうと云ふ力が手傳つてる。そして途中で狐に會つたところで、おいなりさんのお使ひであるから、御飯をあげに行くものには田舍でもいたづらをしないことになつてる事をおぼえてゐた。

それには今あぶらげとこわ飯とを途中で買つて持つて來てゐるから安心だとして、あとは闇をさへ辛抱すればいいのであつた、田舍でよくする丑三まゐりに比べれば何でもない。

斯う觀念してまた足を進め、曲つただら〱坂を下りて行つた。向ふから書生さんらしいのがふたり、ただ白ツぽい姿の物として、大きな聲で詩吟をしながらやつて來たのがこちらの力にもなつたが、行き過ぎてしまうと、また火の消えた直ぐあとのやうに眞ツくらであつた。

それでも、木の枝葉から漏れる月の光で鳥居が見つかつた。それが高い鳥居だが、それをくぐる時にその上から自分のくび筋を何物かがつかむやうに思へて、心がすくんだ。が、それをくぐつてしまうと、もう、自分は信心でからだ全體が固まつてゐるのをおぼえた。またいくつもの小さい鳥居をくぐつて、石段をのぼり、右や左に目を呉れないで、眞ツ直ぐにおやしろの正面へ進んで行つた。

すると、自分は大きなお賽錢箱に突き當つた。そこで初めて左右と後とをふり返つて見たが、別に異樣なものは目に入らなかつた。然しそこからなほ向ふへは進む氣になれなかつた。

先づ箱のこちらがはのふちへ持つて來たあぶらげと御飯とを置き、これも用意のお賽錢として白銅を一つ投げ込んだ。それが自分の手を離れた時、もツと勢ひよく投げるのであつたがと氣付いた。今一つ財布のを出さうかとも思つたけれども、それはやめた。餘りいい音はしないながらも、このしんかんとした樹立ちの闇の夜には隨分おと高く神さまにも聽こえただらうからであつた。

それから手を合はせかけたが、俄にえり元がぞツとした。氣になるので、こわごわ、今一度後をふり返つて見た。立ち聽きするやうなものはゐなかつた。

そこで思ひ切つて、兩方の手を合はせて、田舍で神ぬしがするのを見てゐた通りに、その手を鳴らした。一つではなからうと思つて、なほ二つ續けた。

『どうぞ、おいなりさん、正直に申しますから、このわたしのお願ひを叶へて下さいまし。わたしはおととひ濱田の奥さんの財布を拾ひました。それもさう落ちる初めの時からは萬更ら拾ふ氣でもございませんでしたが』と、成るべく自分はその時の具合ひを狙らひ取つたと云ふ言葉にあてはまらないやうに取りつくろつた。そしてうそばかりでもないやうに續けて、

『奥さんのお歸りになつたあとで拾つてしまひますと、つい、慾が出まして、返す氣がなくなりました。それをわたしの夢に現はれたおいなりさんも今更仕かたがないからと申して下さいました。』實はあの夢では今更とは云はなかつた。盗んだ物は仕かたがないとあつたのだが、ここでもぬすんだと云ふのを少しきまり悪く感じて、その通り云ふことを避けた。

『ありがたいお思し召しと存じましたが、それがどこのおいなりさんであらッしやつたか分りませんので、今晩、わざ／＼改めてこなた樣へあがつた次第であります。これからは毎月、日をきめて參詣致し、お賽銭もあげます。ご飯もあげます。うちでも亦こなた樣のお社をかた取つておいなりさんを祭ります。つきましては、どうかこのことだけはお見のがし下さいまして、奥さんの方で信心するおいなりさんに負けないやうに、あなた樣もわたしをおかばひ下さいまし。

向ふのにはみこがゐますが、こなた樣には無いさうに受けたまはつてまゐりました。わたしはみこの言葉などによつておいなりさんの思召しを伺ふよりも、あなた樣とぢかに向ひ合ひまして、あなた

樣からぢかにおしるしを戴く方が結構だと存じます。』この點も實はわが身勝手から思ひ付いたのであつて、みことと云ふ人間には白狀しにくいのを前以てうまく云ひまわすやうに考へて置いたのだ。

『で、實は奥さんの財布の中にはおかねが三十六圓五十錢這入つてをりました。只今はそれをゆかの下に隱してございますが、直ぐ使つてよろしいものやら、それとも今暫らく隱して置くべきものやら、そこをまことに迷つてをります。うちの人は直ぐ使へと申します。をんなは所天の言葉に從はねばならぬものでございますから』と、自分ながらいい口上が出たと感心しながら、その實、自分も早く使ひたいのだから『成るべくさうさせたいと存じますが、――』ふと氣が付くと、自分は自分の兩手を指と指とのあひだに握り合せて、胸のあたりで自分のあごの下につけてゐた。これではまるで田舍のうちのお佛壇に向つてるやうであつた。おいなりさんへは氣の毒になつたので、直ぐ手をとつて、ぽんぽんと續けさまに二つ打ち直した。さうしたら、また、それがおいなりさんにお願ひのおしまひだと思はれやしないかと云ふ氣になつて『どうぞ今少しお隱れにならないでお聽き下さいまし』と、あはてて云ひ添へた。

『で、いかがなものでございましよう――もう、段々とそのおかねを使つて行つてもよろしうございましようか？心配になりますので、このことをはつきりとお伺ひ致したいのでございます。前にも申しました通り、お祭りは毎月キツト致します。よろしければ、そのおしるしをわたしのからだに見せ

て下さいまし——歸り途で耳がむづ〳〵するとか、足の方がかゆくなるとか。』おいなりさんのことだもの、狐を使つてでも、それ位のことはできると信じた。

　最後の手をぽん〳〵、ぽん〳〵ぽんと叩くと、すつかり落ち付いたせいか、それとも信心が嵩じてゐる爲めか、這入つて來た時とは全く違つて、前後左右のくらやみが少しもおそろしくなかつた。

けれども、きびすを廻らして二三歩出るが早いか、ますは

『きやアーツ』と云つて自分でかけ出したかと思ふと、自分の足を自分でもつれさせてそこにぶツ倒れた。

『ちよツと待て』と云つたのが男の聲であつた。今までお賽錢箱の後ろに隱れてゐたらしい。もう、こちらのそばへ來てゐた。

『………』こちらは何をしられるかと、ただぶる〳〵顫えるばかりであつた。若し田舍にありがちないたづら者なら、そのいたづらを許してやりさへすれば何でもないのだがとは思ひながら。

『おれは警察の刑事だ！』

『………』それこそ思ひも寄らぬことを云はれたので闇を見上げたが、黒ツぽい衣物を着てゐる男の顏ははツきり見えなかつた。

『それともまたおいなりさんの使ひと見てもいい！』

『………』

『つまり、警察とおいなりさんとの威勢を以てお前に命令するが――その盗んだと云ふ三十六圓五十錢を、みんなとは云はぬ半分だけこツちへよこせ。』

『………』どう答へていいのか分らないので、先づ、聲をふるえどもらせながら『何も――ぬすんだの――では――ございま――せん』

『ぢやア、拾つたのか？それでもいいから、半分よこせ。あとの半分をお前はおいなりさんのしるしがあつたとして使へば十分だらう。』

『………』さう云はれてゐるあひだにこちらは耳のあたりに男の近づけた木の葉か何かのさわりを感じた。それから、また足くびの邊りにも、それを。むづ〳〵と氣味が惡かつたので、よこ倒れにかた手を突いてゐたのを地べたにきちんと坐つてしまつた。そしてどうせ人の金がもと手なのだから、どうしても出せと云へば出してもいいと決心した。

『おれだツて人間は人間だから、お前と同じやうにかねが欲しくないわけはない。山分けをして呉れるなら、今夜のところは刑事を廢業して置かう。』

『でも――今――ここに――持つて――をり――ませんが――』

『ゆか下に隱してあるのをだ。』

『……』こちらはまたぎよつとしたと同時に、そこまでがはつきりと見えるやうな氣持ちに引き締つてゐた。こちらの願ひがどうしても全くはとほらないとすれば、一方に半分の祟りを受けるわけだが、まだ一方では、半分だけに對するおいなりさんのしるしがあつたことにならう――むづがゆいことを誰れがしたにしてもだ。これも矢ツ張り信心の利き目だと思ひ込んでしまつた。『ではここへ持つて來ましようか?』

『いや、お前の家の近處までついて行つてやる。その代り、家に來たからツて安心して裏切りしちやア承知しないぞ。云つて置くが、な、おれは、もう、一たびお前の惡事を突き止めた以上は、たとへお前が裏切りしても、おれは泥棒にもゆすりにもならないのだ。なぜかと云つて見ろ。おれの仕事は泥棒やゆすりに化けて惡人を突きとめさへすりやアいいのだ。おれは警察へ出ても役目としてお前をゆすつて見たとおほびらに云へるが、お前にはさうは行かないからな。裏切りすりやア、お前の損は拾つたかねをそツくりどころぢやアないのだ。そこは如才なく分つてるだらう、な?』

『へい、分つてます』と、仕やうがないので答へた。そして私かにうちの人と同じやうなづるいことを考へる男がまた世の中にあればあるものだと思つた。人が拾つた物を山わけにしようなんて。そしてますは起き上つて自分の衣物の裾を手さぐりではたいた――こんな人は矢ツ張りそのおかみさんを

留守番同様にして、芝居見物などを自分勝手にしてゐるのだらうと思ひながら。

六

『どこだ？』
『巣鴨の宮仲です。』かねを渡すことさへきめてゐさへすれば、もう、こちらはその男をこわくもなかつた。
　わざと少しつん／＼したところを見せて先きに立つと、男はこちらを逃がすものかと云はないばかりに、並ぶやうにしてついて來た。
　それツ切り互の言葉をかはさなかつた。こちらとしてはこんな男と言葉を取りかはしたくなかつた。そこで
『ゆすりだ』と叫んでやらうかとも考へるひまがあつた。呼んで、然し、これが却つて本當の刑事とやら云ふものであつたら、淺野さんを出しにしやうとしたのと同じやうにまた藪へびになるかも知れない。そこはうツかりやれないところであつた。
　歸ると、うちの人に相談してからにしようか？然し、それもだ、うちの人はきツと詳しいわけを聽かないうちに、おこつてしまうに違ひない。

『なんだ、馬鹿々々しい！泥棒だから、おれが巡査を呼んで來てやらう』なんて。

『……』さうなつて見たら、向ふが刑事であるにせよ、ないにせよ、うちの惡いことがおほやけになつて、つまりは、こちらがうちの人と共にあげられて行かねばなるまい。そしてあげられて取り調べられた上で、うちの人は許されても、こちらだけは牢へ入れられるかも知れない。して見ると、ここは一つ、あとで知れるとしても、先づ、どうしてもうちの人には內證で取り引きをしてしまはねばならぬわけだらう。

　これは、もう、心をきめてゐることだが、それには今一つのわけがあつたやうに思はれるのである。自分に段々とついて來る人がどうも本當の人間だとは見えなくなつた。刑事でも、泥棒でも、あんな森の中やこんな暗い道で女を自由に嚇し付けることができてゐれば、もう大丈夫だと思つて、本當の人間なら、のしかかつて來ないことがなからう、若しまたさうでなくとも、手を握つて見るとか、肩にさわつて見るとか、冗談の一つや二つは聽かないでゐまいに、そんなことが一つもない、こちらを逃がさないやうにと、ただ默つてついて來るだけだ。

　おやしろでは何をされるかと云ふこわさ一身でその顏をじツと見上げたけれど、くらやみが邪魔をしてよくは見えなかつた。考へて見ると、それからこツちへはまだ一度もこの男の顏なり、姿なりをふり返つて見ないのだ。どう云ふわけか、自分の目をちよツとでも横へそらすのがおそろしかつた。

自分の、つい、右や左へ向ふのからだが來てゐるのだけれども。せめてはその足もとだけでも見たいのだが、それもできなかつた。當り前に歩るいてるやうでも、後から見れば、雨あしを揃へて跳んでるのかも知れない。横までは來ても、こちらの前の方へは出ないのがまたこの疑ひを增させる種であつた。

若しこれがおいなりさんのお使ひの化けた物とすれば、なか〳〵おろそかにはできないわけだ。『お使ひがゆすりたどするけい』と、うちの人なら直ぐ云ふだらうが、うちの人はこちらが、お賽錢を惜しんだことは知らない。そしていかにおいなりさんだツて、おいなりさんとしてはぶし付けにお賽錢が少いとは云へまい。だから、警察の刑事などと云はせて、こちらのけちん坊を十倍百倍にして罰をお與へになるのだらう。白銅の五錢と十八圓二十五錢とは何倍の違ひだらうと云ふことを考へて見た。

お罰は心よく受けます。その代り、あとの半分は無事に使はせて戴きます。なんにしろ、こちらのお願ひしたしるしはあつた。御叮嚀にも耳と足くびとの兩方がむづがゆかつた。若しただ男のいたづらなら、決してあれだけではとどまらなかつたらうに。

みち〳〵考へたところでは、自分の店のすぢ向ふなるそば屋さんの横丁、乃ち、濱田さんの裏手に當るところが人通りも少く、また今夜の月もさしてゐない筈であつた。こちらもこんな取り引きを明

るいところではしたくなかつた。

ますは男をそこへみち引き、そこに待たして置いたが、自分が店へ飛び込むのを突きとめに、男は店の通りまでは出て來たやうすであつた。

丁度誰れもうちにゐなかつたのを――不用心だと思つたが――幸ひにして、直ぐ例のを出し、先づ大きな札を十八枚だけ數へ取り、それから一枚の五十錢札を店のかねで崩してその半分の二十五錢を足して、またそとへ出た。

男は、月の光りもさしてゐない狹い横丁のやみで、白い扇子を人間らしく使つてゐた姿は矢ツ張り黑かつた。

『………』こちらは默つてそれを渡すが早いか立ち去らうとすると、

『待て！』低いがその力のある聲の命令であつた。そして急いでお札を數へてゐるやうであつたが、

『よし』と云ふが最後、一目散に驅けて行つた。

『………』泥棒！と一つ、大きな聲で呼ばつてやりたかつた。暫らく立ちどまつて、その一生懸命に逃げて行く黑い影を月の光りにかすめて見つめてゐたが、これでおいなりさんの信心はすツかり覺めて、俄かにぞく〳〵とさむけをおぼえながら、引ツ返した。

すると、二階のミシンの敎師が下のあがりがまちのところをうろうろしてゐて、

『あんたでしたの』と筒井さんはとぼけたやうに聞いた、『今、ここでがた〳〵させてたのは?』

『えい。』『まだ店を這入りかけてゐたのが、青物と水菓子とのあひだのとほり道を――わざとわがうち顏に――進んで行つた、たださへ氣持ちが惡くなつてるところへ、他人が下でうろ付いてたのを見たので、一層おも白くなかつた。半分取られた上に、またその他の半分を取られて溜るものか?

『まア、どうしたのよ』筒井さんは突然びツくりした聲を出した。

『え、えツ!』こちらも、また何か起つたのかと一緒にびツくりした。

『あんたの顏は眞ツ青ぢやないの?』

『………』あゝそんなことなのかとそれだけには落ち付きを取り返したが、さう自分の顏が青くなつてるとは知らなかつた。『少しさむけがするのです』とだけ答へて置いて、直ぐ床に就く仕度をしてゐると、うちの人が歸つて來た。

『早く歸つて來ないから、不用心で困るぢやないか?注文は持つて行かにやならねいし、坊ちやんが泣いて來たぞ。』

『さう早く歸れるもんですか?これで當り前の道取りです。――然し、今夜は乳もあげませんよ、斯う氣ぶんが惡くツちやア』斯う云つて橫になり、自分の太つてる足くびをあの男にむづ〳〵させられたあたりで揉みにかかつた。ぞツとするばかりでなく、大分にけツたるいので。

『どうしたんだ――もう、寢るつもりか？』

『……』狐につままれたあとの氣ぶんは丁度こんなだと云ふから、自分が若しやそれであつたのかも知れないとは思ひながら何も返事する氣になれなかつた。ただ奥さんに迷惑をかけた上にまた坊ちやんを病氣にしてもよくないから、『濱田さんへちよツとさう云つて來て頂戴』と賴んだ。

『今牛乳を取つて來たから、それで今夜はすませると、さ』と云ひながら歸つて來たうちの人は、あがりがまちを腹這ひになつて、その强慾張りの圓ツこい顏をこちらの枕もとへ寄せて來て、『おい、おいなりさんはどうであつた。』

『……』その前からどう云つて置かうかと考へてたのだが、一日でも二日でもこのしくじりを知らせない方がいいと思つた。『今使つちやアいけませんと。それに、ゆか下はそのままそツとして置かないと、却つてまた人に取られますと。』

七

一と晩を過ぎたら、さむけも直り、また氣ぶんもよくなつたので、朝早くから坊ちやんを呼んだ。矢つ張り、坊ちやんを一と晩でも見ないと氣がすまないのであつた。けれどもお隅さんがまた面白くないことを云つた。

『おいなりさんへ行つて行つて病氣になるのは、何かの祟りでせう』なんて。

『……』にが笑ひをしながら、『わたし、おいなりさんへ行つたのぢやないのよ。少しうちの買ひ物をしに行つたの。』

『ぢやア、思はぬおかねが這入つたからでしよう』と、また――

『そりやア、店をしてればたまにはいい儲けもあります、わ。』おこりもできないので、こんな胡麻化しを云つてみた。

奥さんのおかねは、もう、その半分はこちらの知つたことではないと云ふ氣になつた。自分が取つたのだとしても、自分が使はないうちに人が持つて行つたのだから。あとの半分も、斯うおそろしい目に會つては、而もうちの人にも云はれないやうな目に會つては、いツそのこと、すツかり返してしまつた方がましだが、どうして返したらいいか、それが分らなかつた。門のうちへ投げ込んで置いて、今度はお隅さんに拾はれてしまふ位なら、誰れが取つて置いてもいいわけだ。

だから、殘りの半分はこのままうちで貰つて置いて、その代り、坊ちやんについてお孃ちやんが來るたんびにお菓子などを買つてやり、また偶には下駄をやり、それとなく段々と品物で返して行きさへすれば、こちらの氣だけはそれで濟むわけだ。且また、あの察しのいい奥さんのことだから、さうして行けばこちらの物を戻してゐるのだと云ふほどのことは分るかも知れない。さうなれば、こちら

ばかりでなく、向ふでも氣持ちがよからう。

奥さんの財布が落ちた時のことも、別においなりさんがさうはツきりと云つたのではないかも知れない。丁度こちらがゆふべ間違つたことを思ひ詰めてゐるやうに、奥さんも自分で斯うだらうと云ふところを思ひ詰めて、そしてさう獨りできめてゐたのが、たま〳〵本當のことに合つてたと云ふばかりであらう。お隅さんのほかは、濱田さんのうちの誰れもが何も云つて來なかつたのを見ても、もう、とツくに夢のやうなことであつたと思つてるのか?若しさうだとしたら、なほ更らこちらに都合のいいばかりだ。

斯う心を持ち直して見ると、あとに殘つてる心配はうちの人のことだけであつたが——渠はこちらの云ひ拵らへたそのお告げを本氣にしないで、またゆか下のを——今度は人の見てゐる前で——圖圖しくも見ようとした。

『いけませんと云つたら、あんた!いけませんよ!』こちらも止むを得ずむきになつてそれをとめに行つた。そして渠が箱へかけたその手を横からもぎ放した。

『畜生!なにしやがるんだ!おいなりさんが云つたなどとぬかして、おのれの勝手にしようと云ふんだらう。』

『……』さうだ、さう云はれて見ると、うちの人も亦別においなりさんの伺ひを持つて來たやうに、

こちらの心を云ひ當ててゐる。して見ると、誰れでもおいなりさんになれるやうだが――この場合、まご付いてしまつた。渠が腹這ひになつて、どうせ足りないお札を勘定してゐるのを、こちらはただ突ツ立つて胸をどきどきさせながら見てゐた。

『ヤア』斯う叫んで渠も立ちあがつた。ありツたけの金を持つてこちらを睨み付けながら迫つて來るやうにして、『うぬ、半分盜みやがつた、な！五十錢札もちよツきり二十五錢になつてるのアどうした！』

『わ、わたし、ぞ、存じま――せん！』言葉をどもらせて、雜司ケ谷のおいなりさんで出會つたあのおそろしさと同じやうなおそろしさを感じた。

『知らねいことがあるか――山わけにしようツて云つたのアうぬぢやねいか？』

『そ、そりや申しました。然し半分欲しがつてたのはわたしばかりぢやありません。』

『ぢやア、だ、誰れだ？』

『濱田さんのうちでもです。』こないだから、お隅さんが奧さんの考へだとして半分出ればあとはその人にやつてもいいのだがと云つてたのだ。

『馬鹿な！ぢやア、濱田で誰れかに盜ませたと云ふんか？』

『さうでしようとも！』つい、斯う云つてしまつた。けれども、それで少しからだの顫へがゆるんだ

のである。と云ふのは、筒井さんをそれに結び付けることができたからである。こちらがおいなりさんへ行つてたあひだに、かの女は自分でいつも惡くちを云つてたところの濱田さんへ遊びに行つたのだ。そしてお湯まで貰つた。その時きツと、奥さんなりお隅さんなりから、こちらがおいなりさんへ行つたことに關しての惡くちを聽かせられたに違ひない。そして自分ばかりがいい兒になるつもりで『ぢやア、そのおかねでしようよ大事さうにゆか下の箱にしまつてあるのは』とぐらゐは云つただらう。一度、こちらがしまつてるところを見てるから。そして、『あれなら、わたし、こツそり取つて來てあげましようか』と云ひ添へたとして見れば、人の留守に下をうろ／＼してゐたのが實際にあやしかつたではないか？こちらさへ遠慮して滅多に貰はないお湯を、こちらのおかげで知り合ひになつた二階のミシンが貰ひに行くのさへ不都合だのに！なんぼミシンだけでは喰へないとしてもあの年をして通ひの旦那を持つたりなどして！

斯う考へると、妬ましさも添つて來て、あの泥棒のことをミシンの女のせいにしてしまひたくなつたのだ。

『ぢやア、お隅だらう。』うちの人もその勢ひをよそに向けたのをしほにして、こちらは『いいえ、二階の人でせう』と、曖昧にだが答へた。そして全くさうだと思はせても、ミシンの爲めに氣の毒だから、『それにしたツて仕かたがないぢやございませんか――向ふの物を向ふが取り返した

のですから』と、念を押した。

『……』渠はこちらの爲めにやり込められでもしたやうにむツつりしてしまつた。暫らくしてから、その立つてるからだをくるりと向ふ向きにして、『ええツ、燒けツ腹だい、自轉車でも買つてやる…』

『もう、いいでしようよ——斯うなつちやア。』こちらもさうして貰ふ方が、實は、早く肩がぬけるのであつた。

まだ暑い日盛りだのに、渠はうちの自轉車に乘つて出て行つた。帽子は去年濱田さんのところで貰つた古ぼけたパナマを被つた。

餘ほど時間がかかると思つてると、やがて別な自轉車に乘つて、桐の角火鉢と大きなはしら時計とをしよつて歸つて來た。

自轉車は九圓五十錢出して取り換へたのださうだが、火鉢と時計とにも六圓五十錢かかつたさうだ。

『だツて、まだ五十錢殘るわけだわ。』

『これ見ろ。』うちの人は顏を少し右へうわ向き加減にかた向けて、左の方のうわ口びるを上げて見せた。すると、そこの前齒の一つ隣りの齒が——尤も、以前から少し蟲喰ひ齒にはなつてゐたのだが——奇麗な金齒に變はつてた。

『あら！大分取られたでせう？』
『それもおいなりさんに伺つて見たらどうだい？』
『もう、おいなりさんは眞ツ平よ。』
『ぢやア、云つてやるが、な、どうせかねがねいから、めツき、さ。』

ゆふがたになつてミシンの教師が歸つて來た時、新らしい火鉢と時計とがあるのを直ぐ見つけて、
『おや、よい物がいろ〳〵買へました、な』と云つた。
『………』不斷なら、うちの人も冗談にからだを後ろへずツと反らせて、それはそれは結構な物ですよとでも云ふのだらうが、つんとして相手にもしなかつた。すると、ミシンが變な顏をしたのが氣の毒になつて、こちらは止むを得ず、
『別に大した物でもないのよ』とあしらつた。
『どれ、拜見。』無遠慮につか〳〵とそうめん箱のつんであるところへ行つて、その上の火鉢をいぢくつた。
『………』こちらもその遠慮なさを――人のかねでいいことをしてとでも思つてるらしく取れて――けふは特別にいやであつた。品物にしないでも今少し置いて置けば、今度はそれをこの女に取られて

しまつたかも知れないと。

その夜は、前以てお隅さんに斷つてあつたので、その日の最後の乳を飲ませがてら坊ちやんにはおしやぶり、お孃ちやんには赤ぬりの下駄、うへの坊ちやんには學校用の帳面を用意して、久し振りで濱田さんのお湯を貰ひに行つた。餘り行かないと、却つて疑ひをこじれさせるだらうし、またミシンにばかり勝手なことを云はれるのも詰らなかつた。

奥さんの枕もとの蚊屋のそとで坊ちやんにお乳をあげながら、成るべく自分の痛手にさわらぬやうな世間ばなしをした。が、奥さんの方から筒井さんのことが話し出された時、

『あの人はいやな人です、わ』とつい、自分から口に出してしまつた、『都合によれば斷わつてしまはうかと思つてますのです。うちで買つて來た物を何からうさん臭い物のやうにいじくつて見たりして。』

『なアに、年が行つてるから、遠慮がないだけなのだらう。』

『さうでしようか』と云ふより仕かたがなかつた。こちらは年に於いて奥さんとはさう違はないけれど、身ぶんでは丁度あのミシンと年が違つてるほど違つてるのである。とても競爭はできないけれども、あやかる爲めにいつまでもお世話にはなりたかつた。それを思ふと、斯うしてここへ來てゐるのさへありがたくツて、涙がこぼれるやうで——奥さんのおかねはこれで、もう、半分少し以上は爲しくづしましたと白狀してもよかつた。今夜のみやげ物をも勘定してだ。

乳がすむと、お隅さんと一緒にお湯に這入つた。そして先づ、
『簞笥の鍵があつて』と聽いて見た。
『まだお隣りのを借りてるの。』
『………』して見ると、まだ出るかも知れないと思つてるのだらうか？氣の毒なやうな、またをかしいやうな氣がしたままに、別なことにも白をつづけて、『ミシンがたび〳〵來て？』
『まだあの時たツた一度よ。』
『何からうちのことを云つてて？』
『何も――別に』
『………』この女中もなかなか喰へない女であることは分つてるのだ、が、今一つ突ツ込んで見た、
『奥さんはうちのことを何かおこつてない？』
『さア、どうですか？――然し、筒井さんからこの夏休みにミシンを習はうかと云つてます。』
『さう？』思はず大きな聲が出た。斯うして段々と自分だけが見限られて行くのではないかと思つて。

八

うちの人は金歯を入れたので浮かれ出したわけでもなからうが、いつも御用聽きに行くお得意さきで、十代の若い奥さんといもうとさんとがゐるところの、そのお臺どころの戸ぶくろへ、矢立ての筆を以つて

『戀しくば尋ね來て見よ八百屋なる——』と書いたとかで、そこの主人からひどいお目玉を喰つた。それは然し例の爲しくづしの一つにはならないけれども、買ひ換へた自轉車がパンクした。いんげんとほうれん草とを取り寄せに田舍のうちへ歸つた途中でだ。そしてゴムやその他の損害を勘定に入れると、三四圓のものはまた奥さんの方へ戻したことにならう。

斯うして段々ともとの安心が取り返へせて行くに當つて、お盆に締めて田舍へ歸る筈の夏帶も奥さんに拵へて貰つた。そして第一着にそれを締めて、奥さん、お孃ちやん、お隅さん、小さい坊ちやんと一緒に銀座の夜景を見に行つた。丁度新暦のお盆の十五日であつたから、店は大抵締つてたけれども、奥さんの買ひ物につれて、ますは自分でお孃ちやんの爲めに小さい日傘を一つ買つた。そしてカフエ何々とか云ふところでお菓子とコーヒの御馳走になつた。

『こんな結構なところへ來たのは生まれて始めてよ』と、お隅さんに向つて云つた。

『わたしも。』

て、天井には大きな煽風機とか云ふものが勢ひよくまはつてて、涼しいけれども、落ちやアしない
かと心配であつた。一方の隅からは獨り手に鳴るオルガンとか云ふものが鳴つてる。廣い部屋にはいくつものテイブルがあつて、いろんな人が別々に物をたべてゐる。自分は嬉しいのと恥かしいのと心配なのとでのぼせるばかりであつた。奥さんに何か話をしようと思つても、その糸ぐちが出ないので、壁にかかつてる一つの景色の繪から思ひ付いて、『奥さんとこの畑はお茄子はよくできさうですが、胡瓜の方が駄目のやうですから、わたしが播き直してあげましようか？』

『なアにあれは旦那のおもちやだから、はたの者はうッちやつて置く方がいいんだよ。』

『ほ、ほ、ほッ』と、自分はお隅さんの方を見て愛相笑ひをした。

『今度はピヤノの彈けるところへ行きましようか、ね』と云つて、奥さんはそこを引き上げた。

電車の上でお孃ちやんが日傘を持つて喜んでるのを奥さんはあぶないと叱つたが、

『まあ、樂しんでゐらッしやるのですから、いいでしよう』とかばつて、こちらも一つの功德と爲しくづしになつたとが嬉しかつた。』

そして神田で下りると、前よりもまた一層廣い西洋造りの二階へあがつた。そこで奥さんのピアノを聽いてから、お孃ちやんをも入れて四人がみんな盛りのいい而もなか／＼おいしいアイスクリームをおかはりをしてたべた。そして歸る時に奥さんは白い衣物を着た男の人に、

『けふはおかねがないから借りて行きますよ』と云つた。
『………』こちらはお隅さんとちよつと顏を見合はせたが、自分のしたことの爲めに奥んさがこれほどのお拂ひにも困つてるのかと思つて氣の毒になつた。自分のふところにはまだ四十錢ぐらゐは殘つてるから、『わたしが拂ひましよう』と、手にがま口を出した。
『いいよ、いいのだよ、いつも來るところなんだから。』
『さうですか』と云つたことは云つたが、こちらは結構なところへ來て結構な物をたべながら、それでは何だか奥さんにもここの人にもすまない氣がした。
その翌日、二階の人は他へ引つ越すやうになつた。多分、奥さんが銀座や何かへこちらをばかりつれて行つて、この頃は時々濱田の留守番をも頼まれるあの人をつれて行かなかつた當てつけだらうから、これも爲しくづしの一つには數へてもいいと思はれた。そして直ぐうちの人に頼んで、『貸二階』の札を張て貰つた。

――(大正八年七月)――

燃える襦袢

一

『おい〳〵、おかみさん』と、權藤はここに到着して皆のものから出迎へを受けると直ぐ氣安く聲をかけた。『鈴木の奥さんが來てゐる筈だが、どの部屋だい？』

『今度は一番奥のお部屋ですよ。』おかみさんはにやりと笑ひながらも、まじめ臭く取りつくろひながら答へた。

『ぢやア、ね、おれを奥さんに知れないやうにその次ぎの部屋へ案內して貰はう――明いてたら。』

『明いてますよ。――お豊、奥さんに知れないやうにですと。』

『さうだ、知らせちやア承知しないぞ。』後ろ向きに玄關の踏み段へ腰をかけて靴をぬぎながら、吹き出しかけようとする笑ひを無理に胸へ押し退けて考へた、みち〳〵ちよツと工夫して來た芝居を演ずるには丁度いい。一番奥と云へば、かけ橋で以つてつながれてる離れだらう。部屋はたツた二つしかないから、そのどちらかにゐるのだ。こちらは先づこツそりその隣りへ陣取つてゐて、奥さんが女

山に、『誰れか來さうなものだが』とか、何とか云つてる時を見て——さうだ、寂しくなればきツとさう云ひ出すに違ひないから、その時を見て取つて、ひよツこりと、宿の寢まきを着たままで現はれてやらう。時間にすればまだ早い。もツとじらして置いて、日が暮れるのを待たう。さうすると、向ふは、もう、二晩目のことだから、段々寂しくなつて氣が落ち附かなくなるにきまつてるから、と。

　これ位の芝居はこの鑛泉旅館では何でもないことであらう。瓢輕ものの或成り金は、或時、ほうかい節のつれになつて、月琴を彈いてやつて來た。その時おかみさんは最初から氣付かなかつたが、お玉と云ふ女中が直ぐ見破つてしまつた。その次ぎには、また同じ成り金がわざ〳〵顏ぢうに鍋ずみをぬり付け、巡禮すがたの乞食同樣になつて、先づ勇館へ行つた。そこでは相手にもしなかつたので、改めて盛平館へ行つた。とめては呉れたが、女中部屋のはづれで、天井もなく、夜が更けると、鼠が出て來て、耳をかぢらうとした。女中の湯がすんだ頃に湯に這入れと云はれたけれども、もう結構ですと云つて遠慮した風で這入らなかつた。そしてその翌日になつて、この○○のおかみへ電話をかけ、かねを以つて迎へに來させ、大森から藝者を呼んで盛平の泊り客が皆びツくりする程のおほ騷ぎをして見せた。

　その成り金はまた三度目には大きなビール箱へ色けぬきの婆々ア藝者と共に詰め込まれて、荷車に運搬されて來た。こんな道樂はかねさへ自由になつてればどこまで發展して行くか、とめ度のないも

のだ。が、こちらはそこまでの身ぶんでもないし、またそこまでの馬鹿でも低級趣味者でもない。ただ、二度までもこんな役目を仰せ附けられるに至らしめたところのお杉さんを、多少でもやきもきさせて、こちらの無邪氣なかたき打ちか心やりかにすればいいのであつた。

『珍らしい、ね、お豊さんがおれの番に當つたとは』と云ひながら、踏み段に立つが早いか、中へ這入つて行つた。

『横藤さん。』ここでの古がほで意張つてるお玉がこの時出て來て、『また、お迎へですか？あなたは色をとこ、ね——憎らしい！』

『………』もう、さう皆に見られてゐるのか知らんと私かにうぬぼれながらも『さう馬鹿にして呉れるなよ、おれだツてまたこんな役目は申し付けられたくないんだ。』

『嬉しいから來るんぢやアありませんか？』

『馬鹿云つてらア！』けれども、心ではその實うれしくないこともなかつた。幅の廣いはしご段のさきを右の狹い廊下へ曲つて行くと、直ぐ後ろへ座蒲團とたばこ盆とをもつてついて來るお豊が

『ほんとにわたしの番になるのは初めてです、ね』と云つた。

『だから、いいぢやアないか？』こちらは後ろを向いて、その方へ右の手を出し、かの女がくびをすくめて立ちどまらうとしたその肩へまはした。そしてかの女をこちらへ引き寄せて、その座敷着のや

はらかい手ざはりを感じて進みながら、『たまにやアおれの世話をしても。』
『結構ですよ、おさし支へがなくてあなたのお世話なら。』
『うまいことを云つてらア』と、手を放して先きになつた。
廊下は左りへ曲つた。横手の長い堀の水に面する部屋々々の後ろの廊下を突き當ると、一段高くなつてちよツと右へ曲り、直ぐまた左りへ折れて二部屋ばかりを過ぎた。すると、太鼓橋のやうに眞ン中の高まつた廊下が少しはすかひにかかつてて、長い堀を縦に見る離れの二部屋があるのである。
『奥の方がふさがつてるのですよ』と、お豊はこちらの耳もとへ來てささやいた。
『さうか？』こちらも低い聲でかの女の方へふり向いたが、この廊下を半分ほどに達した時から、少しわざとらしくだが、ぬき足さし足して離れの横手の縁がはへ急いだ。
『くすくす』と、女中は笑ひを忍んで、『もう、大丈夫です、わ。』
『……』こちらはその方を見て、默つてをれと云ふことを目つきと手つきとで知らせた。そしてこの方のがはの二枚障子の、奥の方のを明けて八疊の座敷へ這入つた。
女中の置いた座蒲團の上へどツかりとあぐらを落すと、ポケトから、二十本四十五錢の葉巻きを出してそれにマチの火を附け初めた。
『まア、いらツしやいまし』と、手を突いた女中の改まつての挨拶を、

『ああ』とばかりで受けたつもりが、矢ツ張り、こちらの見すかされてるやうに思はれる弱みで、思はず少しあたまを下げた。この時、マチの火が短く刈つてあるうは髯をちよツと燒いた。『うん、こりやア』と、あわてて、つい、口に出して直ぐまたその口を自分の他方の手で押さへた。そしてちよツと隣りの方と女中の方とを見くらべて、自分のまご付きを自分で笑ひながら、今度は低い聲でだがてれ隱しのおも／＼しく、『直ぐどてらを持つて來て。』

『はい、かしこまりました。』女中はまた一層のくす／＼笑ひを一層忍ぶやうにして、きまじめな返事をした。ひげのことでか、それとも奧さんのことをか、そこはこちらにははツきりとは分らなかつたが、しまひには、やツとうすら笑ひに納まつて、そツぽうを向きながら出て行つてしまつた。

『……』こちらはそのあとをやツと全く獨りの落ち付きになつて、よこ目に隣りの方へ耳をかた向けて、壁越しに、何か一つでも先づぶるツと來て、こちらの胸がふるひ立つさうなものをと思つた。じツとその樣子を殆ど息を殺して伺つてたのだが、別に何のけはひもしなかつた。用もないのだから、うたた寢でもしてゐるのか知らんと思つてると、やがて足ずりの音が疊にして、呼びりんを鳴らせたらしい。その返事のりんがこちらの部屋の隅のそとでりり、りりんと鳴つたので、向ふにばかり氣を取られてゐた自分は却つてちよツとびツくりした。

お豐がお茶とどてらを持つて來たのに前後して、向ふへも女中が來た。お仙のらしい聲で、

『お呼びでございますか？』
『今、お隣りへお客さまが來られたやうだが、ね、うちからも、もう、誰れか來さうなものだが、ね。』
『……』お豊はこちらの顏を見て、ひひひツと云ふやうにくびをすくめた。こちらはまたお豊に向つてぺろりと舌を見せてゐた。
『さうです、ね。』
『多分、欟藤が來るだらうと思ふんだが――』
『……』お豊はそれ御覽なさいと云はないばかりの横目をしてまたこちらを見た。
『では、今にいらツしやいましよう。』
『……』お仙だツて、もう、こちらの來てゐることは知つてるだらうに、うまくとぼけてゐる。
『さうだらうと思ふが、ね――もう、ゆふ飯でしよう、ね。その前にわたし、ちよツとお湯に這入りたいから、都合を見て來て頂戴。』
『はい。』
『それに、御飯の時にまた一本つけて貰ひましよう、ね。』
『かしこまりました。』ばた／＼と云ふお仙のうは草履の音が行つてしまつたかと思ふと、途中で大きな聲を出して、中庭の向ふへお湯の都合を聽いてゐた。そしてそこから引ツ返して來て、『どうぞ直

ぐ。』

『ぢやア、一緒に行く、わ。』

『……』こちらも多少は馬鹿にしてかかつてるお杉さんのことだが、その足おとがさすが女らしくしとやかに緣がはを響いて行くと、まだ心をうち明けぬ戀人のそれに對するやうに、私かに胸をとどろかせながら、女中のとは聽き分けつつ、それが消えてしまふまで耳で以つてそのあとを追はないではゐられなかつた。

『あなた、召し上り物は』と、お豐はこちらへ云つた。

『まア、今少しあのやうすを見よう。』權藤は女中が行つてしまつたあとでくすりと獨り笑ひをした。そして自分ながらこれほど解放された心持ちはないと思つた。向ふもその亭主の――いや、旦那の――もとを無斷で逃げ出して來てゐるのだから、多少の解放氣ぶんにはなつてゐようが、それは旦那なる鈴木君にはあまい言葉を以つて迎へをよこせと云ふ、そしてこちらには必らず權藤が迎へに來いと云ふ、かの女にばかり都合のいい手であることは見え透いてる。が、こちらの今の心持ちはもツと自由であつて、一本や二本の酒を以つてうけに入つてられるやうな安ツぽいのではなかつた。おほ袈裟に云へば、殆どかの女の死活をこちらの手に握つてるもののやうであつた。

向ふが半分は待ちぼけの體で、そして半分はその爲めの焼け氣味で酒を飲み出して見ろ、あのおほ

酒飲みの女しやう〳〵の一本が二本となり、二本が三本となつて、
『まだ飲みたいのだが、相ひ手はなし、ねい』などと女中につぶやく頃を見きはめて、
『さア、お望みどほりお迎へに來ましたから、直ぐお歸りなさい。』はどうだ？向ふを興ざめさせてしまつて、以後は二度と再びこんな詰らない役目を本人からもふり向けまいし、女にあまい鈴木からも頼まれなくなつて、一擧兩得だらう。本人もこちらも砕けてゐる割り合には固くツて、旦那は旦那として、友人は友人として立てゝゐればこそ、不斷にも事が起らないですんでる。
『おれ達ふたりのあひだは君でなければ納まらないのだから、なア』と、鈴木は半ば燒けツ鉢でこちらを信用してゐるのだ。
　鈴木とは初めからの知り合ひではなかつた。お杉さんがかの女自身の都合上からの引き會はせで知つたのだ。お杉さんが、
『今度、ね、田舍のおかね持ちで、東京に一つ家を持つから來て呉れないかと云ふのがありますの。田舍には奧さんも子供もあるんださうですよ、然し行つてもいい』と、こちらへ向つて小首をかしげたことがあつた。
『そりやア、何も僕に相談するまでもなく、あなたの御自由です。』
『さう云つてしまつちやア、それツ切りのことだ、わ。然し、わたしが行つたらあなたもその人に會

つて吳れる？」

「向ふでさへさし支へがなけりやア。」斯う云ふ話があつてからまもなく、かの女は

『おぢイさんだけれど、行つてやる、わ』と云つて、その時の男の本名もこちらへ分つたのだが、鈴木と中澁谷の高臺へ家を持つた。もとの男に產んだ君子と云ふ女の兒をつれてだ。男と一緒に住んでるとは云ひながら、戸籍は持ち寄りだから、云はば、まア、めかけだ。普通のめかけと違ふのは、單にかねを目的でなつてるのではなく、お互ひに相當の理解を持つてゐるところだ。

男は相場師だが、田舍の舊くさい生活を厭つて、できるだけ新らしく生きて行きたいと云ふ希望の人だし、女はまた有耶無耶のあひだにもとの男と別れたその燒けや不平の爲めにすさんでるところの生活をこれによつて立て直さうとするのであつた。

『…………』こちらもその點では向ふのふたりを少しも卑しむ氣はしなかつた。すると、いい加減の時になつて、かの女はこちらを初めて鈴木に紹介して、

『權藤さんはわたしの一番親しいお友達ですから』と云つた。そして鈴木もおほやうな男のうへに、前以つて女からこちらのことを正直に說明されてゐたかして、一見舊知の如くうち解けてゐた。それが二度となり、三度となるに從つて、かの女もその仲で醉ひの出たのにまぎらせて、『若し權藤さんにもツとおかねがあつたら、わたしだツて最初に決心してゐたかも知れません、わ』などと云つた。

『さうです、ね、あなたの方にお思し召しが見えた時にやア僕が進む氣になれなかつたし、僕が進まうとした時にやアあなたが乘り氣にならなかつたし。まア、はね付けたりは、ね付けられたりしたんです』と、こちらは鈴木君とも一緒になつて笑つた。向ふが最初にお思し召しを持つて來た時には、こちらは丁度女房を死なせて獨り身を困つてたのだが、かの女がもとの男なる田崎との切れかたに於いてまだ十分でないところがあつた。然しあとの場合を云へば、鈴木のと女房持ちたるに於いてはそこに何等の違ひはなかつたのだが、はね付けられた。

が、鈴木が都合によれば一攫千金を緊める仕事をしてゐるに比して、こちらはただ一錢一厘をも數へなければならぬところの、乃ち、昔なら手堅い質屋のやうな、銀行のおほ番頭たるに過ぎなかつた。かねを取り扱ひながら、さうかねが自由にならない事情はかの女もよく知つてゐた。

けれども、痴話喧嘩を好きで、それをやるとなると、もとの男とでも隨分ひどい攫み合ひをして、障子やふすまを突き破つたり、一と晩ぢうでもそとをぶら付いたりしたと云ふ女は、鈴木とでも、特別に情交がこまやかになる時にぶつかると却つていさかひをおツぱじめた。そしてその事情を正直にうち明けて、その仲裁をこちらへ賴みに來るのは鈴木であつた。それが二度や三度のことではなかつた。そのうちに、こちらがよく森ケ崎の〇〇へ行くと云ふのを聽いて、かの女もここへ逃げ込むことをおぼえた。前の時には、迎へに來た晩、素直に歸つたが、けふはこちらが來たのでは却つてさう行

かないと云ふ事情もないではなかつた。

かの女の湯あがりを私かに待ち佗びながら、こんなことを考へてると、やがてかの女のだらうと思はれる足おとが今度は性急にばた〳〵として來た。變だ、な、と思つて、こちらはどてらすがたで寢ころんでたばこをすつてたからだをかた手で半分起し、その方へ顏を向けて、きツとなつた。性急な足おとは走るやうになつて、こちらの部屋の、堀に向つた障子の前へ來ると、かの女はいきなりその障子を明けて、その突き出した顏に溢れるばかりの笑みを含んで、

『ばア！』

二

『………』こちらも微笑しながら、あぐらに起き直つてかの女を見上げてゐた。かの女の湯あがりにうす化粧をした瓜ざね顏は――暫らく見ないと、見違へるのが常だが――その引き締つた筋肉に囲みを帶びて、もツと若かつた時の美相をも忍ばしめる。思つたよりもヒステリづらではなかつた。『美人に見えますよ、なか〳〵美人に。』

『人を馬鹿にして――いけません、ね、權藤さん！』腰をゆすつて板の上を踏み締めたが、なほにこにこした顏でこちらを見つめながら、『白ばツくれたりして、人が惡い！』

『なアに、ちよツと失禮(しつれい)ですが、かげからあなたを觀察してゐたのです。』

『觀察だツて？それにしたツて程があるぢやアございませんか、日曜だのに、さんざん人を待たせて？』

『然し、僕が來るかどうだか分つたもんですか？』

『いいえ、分つてますぢやアございませんか、あなたにだツて？きのふは土曜日ですよ。けふは日曜日ですよ。』

『さうです。さうしてあすは月曜です。』

『冗談は置いて、さ、あなたの來るのに都合(つがふ)がいいやうにしてあげたんぢやありませんか？』

『………』して見ると、この銀行家の爲めにそんな都合までして夫婦喧嘩をして來たのか？

『そんな冷淡(れいたん)なお迎へなら、今夜も歸りませんよ。その代り、あなたも歸さないから。』

『猛烈(もうれつ)です、ね。』

『まア、こツちへいらツしやい、な。』

『どうせ行かなけりやアならないんですから、ね』と、直ぐ立ち上らうとすると、

『でも、ちよツと待つて頂戴、ね、お呼びするまで。』

『はい、はい。』自分ながら少し拍子ぬけのしたやうな返事をして、半ば持ち上げた腰をまたおろし

た。これでも、年から云へば鈴木よりは大分下だが、女を取り扱ふ上では負けないつもりだが――。
『………』かの女は障子を明けツ放しにしてそちらの部屋へ行つてしまつた。そして今、宿の寢卷きの上にしてゐた伊達卷きのほどけるらしい音をさせてゐるのを聽くと、衣物を着かへてるのであつたらう。帶をしめてるけはひもしたのである。やがてあまへるやうな聲で、『さア、いらツしやい、權藤さん。』
『………』あれでもなか〳〵色けがあるので、不斷はお互ひに我儘になつてゐても、こんな時にはさうもさツくばらんに行かずに改まるのだらうと思ふと、出て行くこちらも――場所が場所だけに――また、初めて行ふ婦人の前へ出るやうな、胸のとどろきをおぼえた。が、それを努めて葉卷きでくゆりに押し隱しながら、そのこれも八疊のどツしりした部屋の、明いてる障子の敷居の上に突ツ立つて、『やア、お召しかへができましたか？』
『だツて』と、かの女はまだ立つて澁い繻珍の帶の結びを氣にして、黑びかりのしたとこ柱につづく違ひ棚の前なる、鏡臺のかがみに後ろ向きで腰を少し落して向つてるのが、ちよツとこちらを見い見いあまツたるい言葉だ、『これでも少しやア氣がとがめますから、ね、あなたの前に出ちやア。』
『どう致しまして』と、わざと固くるしく受けて、『僕も失敬してゐます。』
『をとこはかまひませんがよ。』

『さうでもないでしよう。あなたの前へ足を投げ出して叱られたこともあるんですから、ね。』
『お、ほ！あのときやア、まだおつき合ひが淺かつたのですもの。』
『今だツて——氣まぐれの多いあなたですから、ね、いつ何どきあげ足を取られるか？』
『馬鹿に警戒ですの、ね。』
『さうですとも——奥さんのお迎へですから、ね。』部屋の眞ン中へ來てどツかりあぐらをかいた。そしてかの女の帶を氣にしてゐるのを見てゐると、やツとそれが終はつた。すると、今一度正面からかがみに向つて、腰をかがめながら、ちよツとその顏を兩手で撫でたのが、こちらへ向き直るが早いか、そばへ來て坐わつて、『一本頂戴よ』と云つて、こちらの袋から細の葉卷きを一つ受け取つた。そしてまた立つて行つて、雜誌の乘つてるちやぶ臺のそばにあるたばこ盆（多分、雜誌を讀みながらたばこを飲んでたのだと思はれる）を持つて來たが、こちらは自分の白い灰が膝に落ちたのをそのままにして、葉卷きすひが燒けこげの恐れを超越してゐる境界を味はつてゐた。
『あなた、おこつてるんぢやアないでしよう、ね？』
『何をです？』こちらは突然のことに少し面喰つてると、
『これで、もう』と、かの女は遠慮がちな目つきを見せながら、『二度目ですから？』
『いや、そのことですか？』また平氣のよそほひになつて、『なアに、二度でも三度でもそんなことな

ら致しますよ。』

『あなたの爲めにならでしよう？』

『さうかも知れません。然し、そのあなたが先月のまたけふでしよう。一體、これから毎月でも逃げ出すつもりですか？』

『それもさうかも知れませんよ。然し、そんな野暮は、もう、云ひツこなし！』かの女はその兩手を膝の上に置いて、じツとこちらを見つめながら、からだを前方へゆすつた。その手を取つてやれば直ぐにも應じさうに。

『然し、一體、どうするつもりです？』

『どうするツて――約束ですから、一緒に飲むのです、わ――ふたアり水入らずに。』

『そんな約束をいつ致しました？』

『したぢやアございませんか――こないだ、芝居の歸りに？』

『ありやアあなただけの申し込みであつて、僕が承知したわけぢやアありません。』斯う答へたものの、或はそのつもりではないか知らんとは、みち〳〵も考へて來たことだ。かの女は、もう、一年半ばかりも鈴木と一緒に住んで、また多産的を發揮して赤ン坊がひとりあるが、したい放題、あまへ放題をして來た。そしていまだに鈴木をいやでもないやうだが、感情に於いて餘ほど贅澤心を起してゐ

るのは事實だ。贄澤には心のゆるみが伴ふ。そのゆるみはうちへ向いての不平となり、そとへの放縱となる。そしてこの放縱氣味はかの女が野に置かれた時でも、手折られてからも、かの女の持ち前であるから、それがまた出て來たのに違ひないのだ。

『あの時』と、かの女は、先月ここへ來た時のことを思ひ出して。『あなたと一緒に飲みつぶれて見たらよかつたのに、殘念だ、わ』と云つた。鈴木に對しておきまりのやうになつた不平をこぼしてだ。鈴木はこの時も痴話喧嘩の結果としてかの女を芝居に伴はなかつたのだが――『あなたとは、ね、このふたアりが知つてる通り、世間一般のやうな關係こそありませんが、云つて見りやア、永ねんの深い仲ですもの。一遍ぐらゐは醉ツ拂つて、あなたにあまへて見たい、わ。』

『それもいいでしよう』と、こちらは何の氣もなく受けてゐた。有樂座へ鈴木の代理でお伴させられた歸りに、カフエに立ち寄つて少し飲んだので、かの女が多少くだまき氣味に醉つてゐたからである。ところが、それを矢ツ張りおぼえてゐたのだ。

もう、とほつてゐたかして、お仙とお豊とが料理を運んで來た。そして部屋の隅にあつて、新小說と中央公論とを載せてゐる大きな紫檀のちやぶ臺を、その雜誌をおろして、こちらどもが開らき直つたあとへ据ゑて、その上へ皿を並べた。

『さア、お仙さん、飲み相ひ手が來たんですよ。』

『よろしうございました、ね。』

『まア、お初に權藤さんへついでおあげよ。』

『では――』

『………』こちらは無言でお仙の酌を受けた。

『わたしはお豐さんに賴む、わ。』

『でき過ぎましたか知らん』と云つて、お豐もまじめ腐つて酌をした。が、女中はふたりとも直ぐ出て行つてしまつた。

『………』こちらは女中どもがおかみさんに云はれて氣を利かしたのだらうとは思ひながらも、渠等の手前を俄かに憚るやうになつてた氣ぶんをなほわざと自分の堅苦しい態度に續けて、まだ猪口には口をつけなかつた。『ところで、奧さん、まだゆふがたですから、今お飮みになるのはいいでしようが、一體、どうするおつもりです？』

『だから、飮みますと云つてるぢやアありませんか？』

『どうせ斯うなれば、飮むのはかまひませんが、僕の持つて來た役目をどうして下さるんです？』

『それこそきたお迎へのことですか？』斯う云つて、かの女は手酌で二杯目をかた向けながら、『あなたがわたしを迎へに來たのだとさへ思はなけりやアいいぢやありませんか？』

『そんなことアいけません。僕はあなたよりやア飲みませんが、おつき合ひをしてゐるうちにやア醉うてしまひます。』
『それでいいぢやアありませんか?』
『いけません。醉ふのもかまひままんが、無理にでも歸れるやうに、先づ以つて車を何時に來いと命じて置かなけりやア――』
『そんなことはその時の都合にしましようよ。行きあたりばツたりでいい、わ、よ。しみツたれな!』
『……』こちらはそれがかの女の本意だとは思へなかつた。かの女にもいろいろ手があつて、斯うやつて逃げて來たのも、その最後は再び鈴木のあらたに溜めた蜜のやうな抱擁を受けたいのである。こちらはそこへ至らしめるみち引き繩に過ぎないのだが、かの女はその繩にも味をつけようとしてゐるのだらう。それは前の時にも知つてたので、そのやはらかい繩にはならないで、わざと初めからぶツきら棒に出て、かの女にくど／＼云ふ餘地を與へなかつた。
『まア、聽いて下さいよ、鈴木が、ね』と云ひ出したのをうち消して、
『もう、分つてるぢやないか?そんな野暮ツたらしいことは云ひツこなし、聽きツこなし!僕がわざわざ出馬したに免じて、さア。直ぐお立ちなさい。』
『ほんとにぶツきら棒、ね、あなたは――色けも愛嬌もないぢやアありませんか?だから、好きよ』

と云つて、かの女も直ぐ出發の用意をした。そしてお互ひにそのあひだを默々のうちにとほり拔けた。

が、けふはさう行かないのだ。向ふもまへ〳〵から多少の前ぶれを以つてからんで來てゐるし、こちらも二度目だと云ふゆるみがあつた。で、しみツたれなと云ふやうな言葉を以つて向ふがこちらを刺戟したのにつけ込んで、

『よろしい！』ここに決心したふりを見せて猪口を初めて取り上げながら、『あなたがその氣なら、僕も意地にも腰を据ゑます。その代り、鈴木君から受けた使命を耻かしめたのは僕ではなく、鈴木君の奧さんなるあなたその人ですよ。』

『ようござんすとも！まア、お酌をおしなさいよ。』

『へい、奧さん』と云つて、こちらは素直に酌をしてやつた。すると、かの女がその猪口を口へ持つて行く時にあがつたその左りの腕の輪廓が、赤に青みがかつた模樣のある長襦袢をちら付かせる袖の垂れに、何となく四角張つた線を引くと見えた。『……』歳が歳だから。さうだ、ことし三十三と云つてるのはどうも當てにならないのである。

『人をわざ〳〵奧さん、奧さんツて——そりやア、權藤夫人になりそくなつたのですから、ね。』

『そんなことア、もう、四五年も前のことです。』

『前だツて、ほんとうぢやアありませんか？それから、わたしがどうしたと思つて？』

『さうです、ね』と、一と口飮んでから、こちらは餘ほど皮肉のつもりで答へた、

『それから、また田崎君とよりがもどつて、今の二番目の子どもをお產みになりました。』

『そりやア、ほんの、燒けのやん八の結果に過ぎないぢやありませんか？』かの女は獨りでついだのをぐツと飮んでから、『わたしがタイピストをよして、朝鮮までわざ〳〵料理屋の女中にまでなりに行つたことを御承知なのはあなたばかりです。』

『いや、さうでもありますまい。』ちよツとその時のことを思ひ出したので、わざとにも斯う受けた、と云ふのは、如何にこちらが應じなかつたからとは云へ、遠方へ行くのを知らさないと云ふ法がなかつた。或は田崎がまたあちらへ行つたのぢやア――と、多少きまづく思つてたところへ、それが知れて來たのも本人からではなかつた。だからそれとなくその意味を含めて、『僕も初めは人から聽いたのですから、ね、田崎君を追ツかけては行つたが、どうせかねのない男だから、可哀さうに、あの普通以上に教育もあるお杉さんを女中か何かにさせたりしてツて。』これには、然し、かの女のだらしなさを責めるよりも、田崎の意久地なさと冷淡とをかの女に成り代つて攻擊する心が這入つてゐた。

『然し、何の爲めに行つたか知つてて？』

『無論、あとで分つたことだが、おなかの兒を渡しにでしたらう。』だから、實はきまりも惡くツて、

こちらへは通知をもさし控へたのらしい。
『それできた喧嘩をしたり、燒けを起したり、隨分苦勞しました、わ、よ。』
『いいことをしたあとにやア、また苦勞も當り前でさア。』
『ところが、ね、をかしいやうですが、田崎にもわたしにもおぼえがないんですもの。』
『何をです？』
『何をツて――あの君子を。』
『痴話喧嘩と云ふものアお互ひにそんな蟲のいいことを云ひ合ふんですか、ね――自分らでこさへて置きながら、おぼえがないなんて？』
『だツて、不思議なんですもの！』
『ぢやア、兩方とも醉ツ拂つてゐた時のなんでしよう。それとも、あれは月から云へば僕にも多少疑問の想像が附くが、あなたと話があつてあなたからぶち毀はしたと云ふあの評判のおぢイさんのですか、ね――一緒に鎌倉へも旅行したさうだから？』
『そりやア、うそです、わ。』かの女は躍起になつて、『あの時、田崎も鎌倉へ困つて引ツ込んでたんです、わ。あのおぢイさんにも鎌倉でひよツこり出ツくわしたんですもの。』
『別に僕のことぢやアないから、どツちでもようございますが――』

然し　あなたにわたしを誰れにでもくツ付く女と見て?』
『誰れにでもツて、そんなことア信じません。鈴木君だツて、さうは信じてゐません。』
『だから、さ、田崎に持つて行くしか仕かたがなかつたぢやありませんか?それに、田崎は信じなかつたのですもの。』
『何と云つて?』
『あなたのだツて。』
『冗談を!』こちらは餘りのことにきまり惡さをもおぼえて、てれ隱しに手を猪口へ持つて行つた。飲みながら、『あなたは一體誰れにでもくツ付かない代り、誰れにでものろけを云ひ過ぎます。僕は田崎のを云はれて、もう、耳がたこのやうになつてますが、田崎に向つては、きツと、また僕ののろけを云ふんでしよう――好きだ、好きだツて?僕は田崎と云ふ男には二三度會つたばかりで、その内生活はあなたから聽いてるだけだが、あんな意久地のない燒き餅燒きをいじめるのア可哀さうだよ。』
『………』目を細くして微笑しながら聽いてたかの女は、この時いやな顏を見せて、もとの男を辯護するやうに、『意久地がないツて、まだ親がかりで、どうすることもきでないんです、わ。』
『年から云やア、僕とさう違はない癖に、まだぐづ〳〵してイて』と、こちらはかの女のもとののろけに報いるのはこんな時だと云はないばかりに、『そんならそれで、あツちにもこツちにも女を拵ら

へるのをよして、あなたばかりに夢中になるか、それとも、あなただけはそれだけのかねで生活ができるやうに保護して置けばよかつたのだ。』それもできないと云ふやうな男にうち込んでのたが馬鹿だと云ふ意味を含めたつもりで。

『然し、あれがたちですから』と、かの女はその聲と樣子とでは少し折れて來たやうだが、まだ辯護の意味が殘つてた。

『まア、女と云ふものア、男が少し弱く出てゐると、自分からをんな髮い流になるのを喜ぶものですから、ね。――それにしても、君ちやんの顏を見りやア、誰れの種だと云ふこと位は直ぐ分るぢやアないか、あのまゆ毛が濃くツて、たださへ低い鼻を一層壓迫するやうな?』

『ほ、ほツ』と、かの女も笑つた。『だから、田崎か朝鮮から歸つて來て、初めて君子を見た時、九分九厘まで納得して不思議がりました、わ。』

『當り前でさア!』然し、さうだ、かの女は向ふでも田崎と喧嘩して、兒を産み落す前に歸つて來てゐた。その後は人を立ち會はせてでなければ渠と會見しなかつた。ふたりだけで向ひ合へば、ずるずるベツたりにまたもと通りになつてしまうに相違ないことをかの女も知つてて、身づから警戒した爲めだ。そのあひだに、今度はこちらが多少の永續的條件を提出してちよツかいを出して見ようとした。が、それはかの女から、

『つまり、簡單に云へば、おめかけです、ね――わたし、いやです、わ。あの時あなたが承知しさへすりやア、それこそわたしはあなたの立派な奥さまになれたんですのに、今更らそんなことア』と云つて、はね付けられてしまつた。そしてそれを一生の殘念に思ふほどには、こちらも――今に至るまで――今の女房を價うちない者にはしてゐないのである。

渠は自分にだツて子どもがあるのだから、もう、子どもの苦勞はさせたくない程だから、人の子までもしよひ切れないとして、

『それを先づ、』かの女が以前の兒を思ひ切つて處分したやうに、『どこかへやるのです、ね』と云ふことをも、一つの條件に云ひ加へたのであつた。それがまたかの女の感觸を一層害して、

『まして、あなたの奥さんだツて大切にする子どもをわたしが手放すなんかとは、ね』と答へしめた。

『ぢやア、それまでのことですが、ね。』こちらも斯うかの女に應じた時には、藪へびを出したと思つて氣まづかつた。すべて斯う云ふことまでもかの女は鈴木にうち明けてあるのだから、鈴木もすツかりうち解けてこちらにも向つてるのだ。が。まだ一つかの女がうち明けてないことがあらうと思はれるには、その後、乃ち、こちらをおのづからの結果としてしツぺい返しにしてから、まもなく、またかの女が何か知らん飜譯とか、編纂物とかの請け負ひ仕事をやつてる獨り住まひを尋ねて見ると、その前の提供を餘ほど切實に考へて見たと見えた。そして理解と同情とを持たれてのお目かけならこ

ちらの云ふ通りになつてもかまはないがと云つた風な口ぶりを以つて、
『然し、君子がゐたツていいぢやアないの』と、かの女はこちらへ諷した。
『……』こちらはいい人にはいいでしよう、ね、と云ふやうに答へて置いた。つまり、それからかの女は誰れの目かけになつてもかまはない氣になつて、鈴木を發見したのだが、この點は恐らく鈴木もまだ知つてゐなかららうと思はれた。

三

『さア、もツとお醉ひなさいよ――あついのを一つぐツと飲んで！あなたも意久地なし、ね』と、かの女はこちらが川崎に向けた言葉をなほおぼえてゐて報いるらしくなつて、『こツちが積極的に出れば、いつもいぢけて、眞じめ腐つてしまつて。人をばかり醉はせてどうしようと云ふんですよ？』
『それこそ醉はせて聽きたいことがあるんでしよう。』こちらもいつのまにか餘り心の持ちかたが開くなつてるのをおぼえて、斯う碎けて出た。
『ぢやア、何でもお聽きなさい、な。』『またいつもの警戒とも申しわけともつかぬ言葉を繰り返して、
『わたしは醉つて來れば來るほど、男と云ふものが馬鹿々々しく、またきたならしく、なつて來るんですから、ね。』

『いや、もう、度々伺つてゐます。けれども、男は反對です、ね。醉つて來れば來るほど、おかめも美人に見えて來ます。』

『ひよツとこが美男とア行きませんから、ね。でも、男と女とは何ごとにも反對です、わ。うらなひ師の云ふやうな陰陽のことばかりぢやアありません、わ。をんなが熱心になると、男はいい氣になつて薄情になるし、男があツさりしてゐると、をんなの方で好きになるし。』

『つまり、おんなじことを云つてるんぢやアありませんか?』

『おや、さうですか、ね?少し醉ひましたか、ね?』

『………』少しどころか、大分にかの女の醉つて來てることは分つてゐた。それでも、なほかの女には思はず口をすべらしたことをまぎらすだけの餘裕はあつた。蓋し、思ふに、かの女としてはその反對比較が、實は、決しておんなじことではなくツて、たしかに別々であることを承知してゐるらしかつた。をんなが熱心の方は田崎との場合を云つてるのであつて、男があツさりとはこちらとの淡い關係を云つてるのだらう。そしてこの兩方のどちらもがかの女の自由にならぬのを考へて、獨り住みの寂しみに引き入れられて行つた時などには、かの女はわれ知らず持ち前のヒステリを起して、世間の人のことを羨やみ妬んで、自分のことを自分で自烈たがり、その果ては世をはかなんで死にたい、死にたいの一天張りを三日でも一週間でもつづけたのだ。そんな時に行つて見ると、湯にも毎日這入ら

ないで、顏をあかだらけにしてゐるばかりでなく、頰の肉までが落ちて、そこの骨が高く見えてゐた。男をきたならしいなど云ふけれど、をんなもさうなると見られたざまぢやアなかつた。それをこちらは女の獨り者のあはれさだと思ひやつてやればこそ、我慢してなほ親しみを持ちつつ時々訪問してゐたのである。

　すると、時には思つたよりも美人に見えることがあつて、それはきツとかの女のふところが少しあツたかい時であつた。

『この頃は、少しおかねがありますから、一つ、飲みましようよ。こころ待ちにあんたを待つてたんですから。』

『さうです、ね――まア、あなたは飲み過ぎない程度で酒がまはつてれば、悲觀もしないし、見ツともない顏にもならないで、まア、結構なんでしようが、ね、あなたが瘦せを見せた時ほど見ツともないことはないんですから。然し、また飲み過ぎると、かねが無い時と同樣になつてしまひます。』

『ぢやア、風船だまのやうですか、ね。』かの女はお茶を濁しながらも、そのあとでまた『わたしはどうして斯うヒステリ性になつたのでしよう』と、身づから不思議がるやうに云つたツけ。

『………』それは、もう、かの女には年がふけたと同樣、恐らく直りツこのない持ち前だ。可哀さうだから、氣前のいい女ではあるけれども、飲みくひしただけの費用はいつも與へて來た。けれどもだ、

然し、今日では、かの女を獨り者として敬意を拂ふにも、同情を表するにも及ばなくなつてゐながら、かの女はなほ且時々その持ち前を出してゐる。そしてこちらもそのかの女の持ち前を多少馬鹿にし初めて來た。

『またあなたは何を考へてゐるんです、ね、ヘンペックがまた奥さんのことでも思ひ出したんでしよう』と云つて、かの女はちやぶ臺の向ふにゐたのがその横からかた手でからだをゐ去らせて來て、瞰み付けるやうな目つきをして、『お飲みなさいツてば！』

『飲んでゐますよ。』取り澄まして、かの女の酌を受けた。『どうせ酒量が違ふんだから、あなたのおつき合ひはしてゐられません。あなたはただ僕をさかなにして飲んでりやアいいんでしようから。』

『さうおとなしく往生してゐて貰へるの――わたしの爲めに？』かの女はほほゑみながら一層近くからだを寄せて來て、臺の横手へ坐わつた。

『いいでしようとも。』もう、とツくに電氣が付いてゐたが、こちらも今夜こそ初めて人が惡く出て、かの女のへべれけに醉ひつぶれるところを見屆けてやらうと決心したので、お迎への使命のことなどは、かの女が云ひ出さないのを幸ひに、とうでもよかつた。

『ほんとに？』

『ええ、ほんとに。』

『ぢやア、飲んでもいい？』また來たお銚子を右の手に持ち上げて、左りの方へ小首をかしげた。
『うん、飲んでもいい。』
『あとでいや氣がささない？』
『ささないでしよう。』
『誓つて？』
『……』こちらはその應對に堪へ切れなかつた。女のわざとにもくどいのはまだしもだが、くどいにつれて段々なまめかしいそぶりになるのを見ると、胸のどこかに痛みをおぼえるほど自分の慾情をそそられた。そしてそれを忍びがたかつた。
それはかの女の手が成功し初めて、こちらの心をかきまぜるのだと云ふことは知りながらも、今や自分の心をゆるめてゐる男としては、氣が引けて、かの女を正面に見ることができず、不器用にだが、臺の前と平行して疊のうへへ横になつてしまつた。すると、自分のあたまの方がかの女の座と二尺を隔てて並んだ。そとへ出ようとする慾情は抑さへてゐても、それが女のうつり香にそそられて、梅花のかをりのやうな引き締まつたいい氣持ちにさせて吳れた。
うツとりとなつて、手まくらの上から横に目を放つて、かの女が獨酌をしてゐる横がほを下から私すかひに見てゐると、けふ、まだ明るい時に見えたよりも青ざめて目が引き釣つて來たけれども、鼻

の高いのが特色でぴんと年増の威嚴があつて、而もそのうす化粧を以つて、澁いところに綾のあるお召しを着てゐるのに、まだ十分の色けを見せた。

『お杉さん』と、こちらは調子を改めた。

『なアに?』かの女は何かを箸でつまんでたのがこちらを向いて、また溢れるばかりのゑみを見せた。

『あなたは今夜馬鹿に別嬪に見えるよ。』

『それもあなたのお酒のせいで、おかめも美人なんでしよう?』

『いや、實際だ、ねい。』『今度はこちらが思ふざま見つめてゐると、

『いやだ、わ、よ、そんなに見つめて!』かの女は目を猪口の方へやつて、猪口を取り上げるにまぎらした。が、それを口へ持つて行きかけて、またこちらをよこ目に見て、吹き出しながら、『わたしの大事な顏に穴が明くぢやアありませんか?』

『吹き出した酒が鼻へ這入り、そのあとへおさしみがぱくりと這入るならか』と、かの梅忠にある『悲しい涙は目より出で、無念の涙は耳より』を反對にもじつたつもりで獨りごとのやうに云ひながら、また起き直つた。こんなによく見える器量を持ちながら、かの女があの、聽いてもいやなぢィさんなどに――結婚すると云ふのを出しに――一度でも評判通りおもちやにされたのではないか知らんと云

ふもと〱からの疑問が私かに起つて、それを突きとめたかつた。そして若し果してそれが事實なら、一方には、かの女があはれにも渠にだまされたのを明らかに憤慨し、他方には、また私かにこちらが改めてちよツかいを出す口實もできると思へた。

『さア、少しさめたでしよう――一杯。』かの女はお銚子を擧げた。

『……』こちらはわざと猪口をずツとさし出して、『これでまた二三杯立てつづけに飲めますぞ。』

『弱いくせに！でも、あなただツて歸らないでいいでしよう――？』

『僕は、もう、今夜は歸らないときめました。あなただけお歸んなさい。』

『わたしだけが――どうして？』

『鈴木君が――あツたかい――手をひろげて――待つてますよ。』言葉の切れ毎にこちらの小くびで念を押しつつ、にが笑ひをしながら、からかつて見た。

『わたしだツて歸りませんわ。』

『ぢやア、僕が歸りましようか――疑はれたツて詰りませんから？』

『疑はれたら、それまでのことです、さ。』かの女の返事には案外落ち付きがあつて、鈴木にもこの旅館にも高をくつてるやうであつた。

『然し、あなたはここでさう大膽にやつてゐられますか？』

『ここがいけなけりやア』と、かの女は不平ごゑになつて押しつけるやうに、『どこかほかへ行つたらいいぢやありませんか？』

『行つてどうするんです？』

『もツと飲むのよ。さうして、二度と再び斯う云ふことはないかも知れないから十分あなたにあまへて見たいのよ。』

『矢ツ張り、僕がおさかなですか？』

『それでもいいぢやありませんか、あなたのお許しが出たんですから？』

『よろしい！それなら、僕も許して貰ひます。』ころげるやうにかの女のそばへ行つて、後ろ向きにかの女の膝をまくらにした。今思ひ付いたことを突きとめるには、成るべくかの女のふところへ飛び込んで、正直にそれを云はせて見たい爲めであつた。

『さア、一杯あげましよう。』かの女は酒のついである猪口をこちらの口へ持つて來た。

『……』こちらも默つて口を明けたが、何だか少からず氣恥かしかつたので、かの女の云ひ歳よりは十二三はうへである男がその爲めに變な口つきをした。それをうへから見てゐたかして、

『あなたも存外うぶ、ね。』

『矢ツ張り、あまへてゐるの、さ。』うは向きになつて、微笑しながら、かの女と目を見合はせた。

『わたしもあまへますから、先づ、あなたがもツとおあまへなさいよ。』兩手をこちらのからだにかけて、それをゆすつた。

『……』さう云はれると、こちらは別にこれ以上のあまいこともできなかつた。かの女を見つめながら、『一體、僕をおさかなにさせたのアあなたですか、それとも鈴木の罪ですか？』

『そりやアわたしでしよう、ね、鈴木はあなたをかつぶしにしたんだ、わ。』

『あなたゞ猫に見立ててですか？』

『ふ、ふん！』

『あア、いやだ、いやだ！』こちらはわざと大きな聲をして、かの女のわなから逃げた。かの女の膝に在つても、何だか苦しい方が勝つて來たからである。もとのところへ來てから、『このかつぶしはなかなか堅いから大丈夫です。』

『猫もなかなか行儀がいい、わ。』

『さうしてその猫はいつ歸ると云ふんです？』

『そんなことアきまつてます、わ、ね。あすでもあさつてでも構ひません、わ。』

『……』かの女が實際にそれほど落ちついてるのなら、そして何かのきツかけを見て俄かに車とか自動車とか云ひ出さなければ――それほど氣まぐれでないこともないが――兎に角、あのあまい鈴木

の方は、何とか都合のいいやうな口實がかの女にあつて、どうにでも申しわけが付くと云ふ考へでゐるのだらうと、こちらは思へた。
『兎に角、もう、少し飮みましようよ。さうして一度散歩して來ましよう。』
『………』こちらはここだと思つたので、惡落ちつきに落ち付いて、『然し、ね、お杉さん、僕にやアまだ一つ、實は、疑問が殘つてるんです。あながち、當てにならない評判を信ずるんぢやアないのですが、どうも、僕にやアあの君ちやんはあなたの心理狀態上、精神的にはまた田崎に似て行つたのかも知れないが、肉體的にはあのおぢイさんの種のやうな氣がするよ。』成るべくかの女を怒らせないやうに輕く云つたつもりであつたが、かの女は――わざとにか、ほんとにか――すねてしまつて、暫らく返事をしなかつた。それから、
『さうなら、さうとして置きなさい、な。別にあなたに關係したことぢやアございませんから。』
『………』こちらはどう云ひ直したらいいのかに迷つて、暫らく苦笑を向けながら默つてゐた。
『あなたも失敬ぢやアありませんか？』かの女はやがて微笑のうちにそれでもなほ恨めしさうな目つきをして、『わたしと君子とを馬鹿にして？』
『何も馬鹿にしたわけでもないでしよう』と云つて、こちらはこの件をも亦かの女が今度はこちらに對する口說の種に播きかへてるのぢやアないか知らんとも思つた。それで、却つて心を落ちつけてか

の女の云ひ放題にまかせるつもりになつた。
『ああ、世の中ツていやなもの！わたしはそんなだらしない女でしようよ。少くともあなただけはこのことにもわたしの味方だと思つてたのに、そんなに不信用なら、今まであなたにうそを云つてたも同様です、わ。』
『……』
『あなたもわたしを信じたふうをしてゐたのがうそぢやアございませんか？』
『……』
『わたしがそんな女なら、鈴木にもさう云つて、早く手を切らせて下さい。あなたは鈴木に信用されてるんですから。』
『……』こちらはかの女と目と目を見合はせてはゐたが、わざと默つてゐた。
『何とかおツしやいよ』と、かの女は最後に微笑ばかりに碎けて、『わたし、歸ります、わ。』
『歸つて下さりやア、僕の使命もすんで一番結構です。然し、あなたの云ふことアつじ褄が合つてゐませんぞ。若し鈴木君と手を切つたら、どこへ歸らうと云ふんです？』
『もう、取り消し、取り消し！』かの女はもとのやうすに立ち返つて、『でも、ね、權藤さん、あなただけはわたしを信用して下さいよ――鈴木は、わたしに取つちやア、云つて見りやア、まだ　たツた

一年と少しばかりの知己ですもの、ね。』
『あなただツてもです、さうおこつたツて、僕に何と云ひました？田崎にもあなた自身にもおぼえがないので不思議だツて――さうだから、僕も別な不審を出したんです。』
『だツて、子どもを見りやア分るぢやありませんか？わたし、お友達がそんなことを云ふと、誰れにでも君子を突き出して、さア、見て下さい、○○さんに似てゐますか、權藤さんにかツて。』
『そりやア、どツちにも似てゐないのは事實です。』
『それがあなたにも立派な證據ぢやアありませんか？』
『まア、さうでしよう。あなたが今度の子どものことは餘り云はないで、君ちやんのことばかり云ふのを見ても――一つには、あなたの獨り住みの時に得たくせに過ぎないのかも知れませんが――ほんとうでしようよ。』斯う答へてこの場だけは納めた。が、詳しく云へば、似てゐると云ふことが必ずしもその證據にはならないのであつた。他人のそら似と云ふこともある。また、その現在に好きなほうの男へ胎兒の顏が似て行くと云ふ心理的作用も信じられるのである。

四

自分とお杉さんとのあひだがらは、先づはね付けて、はね付けられ、かの女がまた思ひ返すと、自

分が取り合はず。そして今度は今一度かの女から來てゐるらしいのを、自分も都合によれば受けて見ようかと云ふ氣になつてるのであることは、權藤もよく分つて來てゐた。

『散步して來てから、また飮み直しましようよ』と云ふ頃には、かの女はその自身のからだを大分もて餘して、こちらがあふ向けに寢ころんで、組んだ兩手をまくらにしてゐるその胸のあたりへ來て、坐わつてゐた。

『然し、歸るたら今ですよ。もう、十一時で、やがて京濱電車もなくなります。』そのくせ、こちらはだらりとした氣ぶんになつて、散步さへしたくなくなつてゐたのだ。

『あなたは歸りたいの？』

『いいえ、あなたが歸ると云ふから、お歸んなさいと云ふのです。』

『わたしだツて歸りたかアありません、わ。そりやア、君子のことが少し氣になりますけれど——。今云つた通り、ね、わたしは決心してゐるんですから。』

『………』さうだ、今かの女は鈴木のことを詳しく話つた。おほやうで可なり理解もあるやうだが、かの女には一方に田崎と云ふ、云はば、放浪的苦勞を共にした思ひ出の記念があり。他方には權藤と云ふ、かの女の言葉に從へば、これはまた綺麗な關係で力づよくかの女を牽引する友達がある。此二つに比べると、鈴木のつよみはただ金力に過ぎない。ところが、十萬二十萬の金力なんて云ふ物は、

女ふぜいでも一たび決心すれば、三文の價打ちにさへ踏み落してしまうこともできる。鈴木にはそんな物はあつても、どうもかねには換へられぬところの、理解が足りない。同情が足りない。意氣と感激とが足りない。かの女としては、一瞬間の感激にでも滿足を得れば、その場に死んでもいい。鈴木とのこざこざした衝突など、しやべつたツて野暮くさいから云はぬが、つまり、さう云ふ友達なり所天なりを欲しい。今、斯うしてこちらと一夜を飲み明かすのを、若し鈴木が疑ぐつてかれこれ云ふなら、云つても構はない。これが原因で手を切らうと云ふなら、即座に切れても少しも殘念ではない、と云ふのだ。こちらはここまで持つて來られた氣持ちを、かの女が君ちやんを思ひ出して横へそらせたのに興ざめてるところであつた。『ぢやア、兎に角、あなたの發議を容れて一と先づ散歩して來ましよう。その代り、今度は僕がまたどんな提案をするかも知れませんよ。』

『えい、ようござんすとも。男と女とでも、ひとりと獨りとでは、どうせあひ對づくのことでなけりやア何もできませんから、ね。』

『よく知つてます、ね、經驗がおありですか、ね?』こちらは無論そんなことは百も承知であつた。

『みんながさう申しますよ。』

『僕からも申し上げたことがあります。』

『さうでしたか、ね?』かの女は斯うとぼけてゐるだけ、貴ても喰へない面白味をこちらへ與へた。

『………』こちらは起きるを惜しいやうな氣がしながら、默つて起き上つた。

『ぢやア、行きましようか、ね？』かの女も帶のあひだから小さい鏡を出して、急いでかほを直してゐた。が、立ち上ると、先づ敷島の袋をたもとに入れてから何か探してゐるやうであつたから、こちらはマチだらうと思つて、吸ひ物椀のかげにあるのを見つけてやつた。

かの女はたばこ二つに火をつけて、その一つをこちらへ呉れてから、またあと戻りをして、酒のあとに取つたビールのコップで殘りのビールを立てつづけに二杯あふつてから、廊下へ出た。そして一二歩よろけたので、直ぐそのかた手をこちらの手にまかせて歩いた。

『………』こちらからかの女の手を取つたことは今までになかつたが、かの女から取られたのはこれで二度である。有樂座の歸りに今夜のことを豫告した時と今とだ。然し、こちらも今の若い妻と結婚し立てに、或友人の馳走から歸りに夜の十二時を過ぎてゐたので、人通りのない大道をわざとふらふらして歩いて妻を心配させるのが面白かつた。そしてとう〳〵調子に乘つて、目をつぶつてよろめいた爲めに、路傍のみぞへころげ込み、向ふずねを切り石で怪我した。妻はこちらの出血をも世話しようとしないで、笑ひ倒れんばかりであつた。それを思ひ出すと、向ふばかりうけに入つてる醉ひどれやそれをよそほふものやに向つて、あぶないですよなどと云ふだけが癡だから、ただ『ぶッ倒れたッて僕のせいぢやアないから、ね。』

『だツて』と、しツかりからだをまかせながら、『面白いぢやアありませんか、この廊下が何だか馬鹿に長く見えて？』

『そしてそれがまた笑つてるやうぢやアありませんか、ね？』こちらが知つてるところでは、かの女が醉ふと、有名な笑ひ上戸になるのである。ところが、今夜はさうでもなかつた。そこに不斷とは違つた物を待ち受けられる氣がして、こちらは押し付けられるやうなまじめを感じてゐた。そして、廊下が笑ふと云ふ言葉の綾から、ふと、思ひ出したのは愉快さうに見えてもそれが却つて最も陰欝の感じを與へる森林の中である。それは曾て自分の畫家志願の末弟が見せて呉れた何とか云ふ獨逸の畫家の畫帳にあつた景色のことだ。二人の醉ひどれがとぼると、その周圍の樹木の枝や木こぶが皆人間の笑つてる顏に見えてる。この女もつまりそこまで醉つて、そこまでそのところを得たいのだらうと思ふと、こちらには如何にも悲慘な同情心が出ないでもなかつた。

が、玄關に達する手前の廊下で、かの女は手を放してしツかり歩き初めた。玄關につづく帳場からは、こちらどもを受け持ちの女中二名が直ぐおかみさんと一緒に出て來て、

『お出かけですか？』

『ちよいと散歩して來ますわ。』お杉さんは答へた。そしてたもとからたばこを出してそれに火を移して、おかみさんにもやつた。

『………』こちらは重い氣持ちで先づそとへ出てしまつた。かの女もついて來かけたが、またあと戻りをして暫らく出て來なかつた。また、くだを卷いてるのだらうと、ちよツと舌うちをした。が、門の前でふところ手をしながら待つてゐると、さう飮めもしなかつたのだが、日本酒とビールとのちやんぽんにまはつた醉ひ苦しさがあたまへ來てゐた。淺い醉ひざめも手傳ふのであらうが、海の方から來る風がまだ寒かつた。

星あかりばかりで、月のない夜だ。よし切りが鳴いてゐる。そしてあたりの堀ぷちからも、まだ埋め立てられぬ沼の中からも、よしの切られるらしい音がギイギイとしてゐる。そのほかには何の響きもしない寂しさに、かの女のぴンとしたうつり香ばかりが鼻のさきに殘つて、その本體を僅かのまでもそばに控へてゐないのが物足りなかつた。ぐづぐづしないで早く來いと怒鳴つてやりたかつた。

そのうちに、かの女はちよこちよこ走りに出て來た。

『お待ちどほさま！』

『………』こちらは直ぐ海の方へ行きかけると、

『あなたそんな方へ行くの？わたしこツちへ行く、わ』と云つて、反對の方へ足を向けた。

『どこへ行くのです――さんしよの蟲！』こちらはそのひねくれた蟲の名は思ひ出せなかつたが、そのままにしてかの女について行つた。あとで『あまのじやく』と口のうちで繰り返しながら。

『あのおかみはなか〳〵喰へませんよ。もう、今夜もとまらせる氣で、帶上げがわたしのでは地味過ぎるからツて、向ふのを持つて來て假りにつけて呉れた、わ。これでまたお茶代をはり込ませられます、わ、ね。』

『いい加減におだてられて喜んでるん、さ。』

『だツて、おだてられてりやア面白いぢやありませんか？これが醉ツ拂ひの一德だとお思ひなさいよ。』よろけを踏みこたへながら、『待つて頂戴、ね、あなたにもたばこを付けてあげますから。』

『……』ふり返つて、こちらはかの女が頻りにマチの火をつけようと努めてゐるのを見ながら、その手のそで口に散ら付いてた長襦袢の青みをかの女の好みであらうと考へてゐた――今更ら自分の好まない物を買はせられるやうな位置にもゐないのだから。

『さア、あげましよう』と、火の付いたたばこを持つて來たので、

『……』こちらは手を出すと、

『口をお出しなさいよ、直接に。』

『……』さうだ、この闇には直接に口で受けても、明るい電氣のもとで猪口を受けたほどの引け味がなかつた。けれども、そのあひだに他方のは消えてゐたので、今度はかの女がその顏を近づけて來て、こちらの喰はへたたばこの先きから火を受けた。

『さア、手を引いて頂戴。』かの女はそのからだを右から寄せて來た。

『どうせ醉ッ拂ひが――そんなことだらうと思つた』と云ふやうなまぎらしを云ひながら、こちらは左りの腕にかの女のおもみを嬉しくささへた。

かの女は、もう、からだをおまかせしましたと云つた風になつて、たわいもなかつた。こちらを引ッ張つて倒れかけたり、かの女から倒れて來てこちらをみぞのふちまで危うくしたり。それが必らずしもわざとらしくはなかつた。成るべくそッぽうを向いてあしらつてた渠が、ちよッとかの女の顏をのぞける折りも一二度あると、暗くッてよくは分らなかつたけれども、その高い鼻すぢにもとほつた醉ひの線が兩方の眼をずッと引き釣らせてゐるやうであつた。空氣草履の一方が足からはづれて、かの女をたびはだしにしたりもした。

小さい遊園じみたところへ突き當つてから、左りへ曲らうとすると、

『どこへ行くんですよ――どこへ』と云つて、かの女は立ちどまつた。

『どこへッて――？』

『海へ行くんですよ、海へ！わたしは「海の夫人」になるんですよ！』

『………』こちらはかの女がイブセンの芝居を一緒に見に行つた時のことをも忘れてゐないのだと思ひながら、『だから、向ふから直ぐ行かうと云つたのに。』

『さう？わたしはまたこッちが海かと思つてよ。』
『ふざけるにも程がありますよ。然し、こッちからでも行けます――遠まわりだけれど。』どうせ海岸の堤防の上を一とまはりするのなら、結局、どちらから行つても同じであつた。

玄關を明るくさせて、ここでもまだつれ込みの客を待つてゐるらしい勇館の前をとほつて、富士川の門まへまで一直線に進み、そこから右へ曲がつて、萬金の角をまた左りへ折れた。そして小さい別莊や漁師の家や養魚試驗場の垣根やでかこはれてる狹いくねつた道を、何とか云ふ狹い川――それでも舟がとほれる――のふちへ出ると、もう、海岸堤防のつづきであつた。それをまた左りへ行つた。兩がはに松の木が並んでゐて、その枝のかげをこちらどもの頭上におッかぶせてゐる。漁師の藁ぶき家が路傍のところどころに見える。

かの女は相變らずこちらの手に倚りながらも、みち〳〵また殆ど手放しののろけを田崎や鈴木のことに關してしやべつて來た。それが不斷ならこちらへの當てつけに過ぎないで終はつてしまうこともあるのだが、珍らしいほど醉つてるにも似合はず、今夜は少し不斷のがら〳〵した浮かれとは違つて、餘ほどしんみりしてゐた。息づかひの苦しさうなのは酒のまはつてる爲めとも取れたが、こちらの胸へも傳はつて來る動悸につれてどき〳〵と出すかの女の言葉は、殆どむせび泣きの聲を含んでゐた。こちらもそれに引き入れられて、しんみりとその氣になつて聽いてゐると、自分が田崎と鈴木との

あひだに在つてかの女の思ふやうにならなかつたに對するかの女のそれとは云はぬ正直な恨みや不平がからまつて來てゐるやうに思はれた。そしてかの女に對して氣の毒でもあり、またいい氣持ちでもあつた。

『そりやア、ね』と、かの女はこの時云つた、『田崎とのことは、もう、過去のできごとですから、どうでもようござんすよ。けれど、鈴木が可哀さうだと思ひます、わ。わたしのやうなうわ氣ものを持つて――それが實際にどう云ふうわ氣かと云ふことにやアまだ十分の理解がないから――實は、あなたとのあひだを燒きもきしてゐるんです、わ。』

『ぢやア、行かないだけのこと、さ。』こちらはそんなことがあつたのなら、わざわざうはべの打ち解けなどを鈴木から受けに行く必要はなかつた。知り合つて見れば、お互ひの商買がら、かね儲けのことで世話をしたり、されたりはして來たが、鈴木とはもと／＼お杉さんが會つて置いて呉れいと云ふから會つたのであつて、それ以外にこちらから求めるところも何もなかつたのだ。

『さうおこつてしまつちやア、ぶち毀しでしよう――？』

『ぶち毀はしたツていい、さ、僕としちやア！』

『破壞なんか手安いことで、いつだツてできます、わ。』

『だから、無事に鈴木とくツ付いてた方がいいでしようよ。』

こちらもこの時になつて殆ど初めて意地の悪い皮肉を突ッ込んで見た。どうせかの女は歸宅して一夜を過ぎさへすれば、どうにでも鈴木を圓めて置けると思つてるらしい。こちらはその夜のかの女を想像して、最も不愉快であつた。

『だツて、わたし』と、かの女はその兩方の手でからだの重みをこちらの兩方の手に託して、こちらの顔を見上げながら、『あなたが好きなんですもの!』そして俄かに『鼻を高くしちやアいやよ』と云つて手を放れた。そして獨立でひよろひよろと、はじの木か何かが二分れの低いえだ葉を平ベツたく兩方へ廣げてゐるその幹へ行つて、かた手をかけた。細い幹であつたから、かの女がつかまつた勢ひででもその黒いかげなるえだ葉のさきまでがゆれた。もう、しんみりした口調ではなく、半ば獨りごとのやうに、『男ツて云ふものは、ね、女が惚れ込んで行くと、直ぐお調子に乘つて來るから。』

『………』こちらも急所を突かれたのであるから、それをそツと受けて置くつもりで、その方へ近よりながら、『矢ツ張り、手を引いてあげます――あぶないから。』

『いや!わたしだツて足があります、わ。』かの女は若いをんなの子のやうにしなをするくろ影を見せて、先きの方へ逃げた。

五

土手の左りの下には、廣い養魚場の、いくつにも直線で區劃された水が光つてゐる。土手の右には、多少の地面が廣がつてて、そこに藁ぶき家が二つ少し相離れて並んでる。そのさきの方の家の手まへに突ツ立つて、じツと耳をかた向けてるかの女の脊のすらりとした束髪姿が、樹木のかげを離れて、くツきりと見えた。

『………』渠は自分のあゆみをわざと急せがないで近づいて行くと、自分もその家のうちで男や女のがや〳〵云つてるその聲に氣が付いた。若いものの寄り合ひ所、若しくは密會所だらうと思はれた。

『しツ』と云つて、かの女はこちらを制するつもりでその右の手をうちがはから指のさきまで廣げて後ろへ突き出した。やわらかいたもとも同時にぴンとはねた。

『………』こちらは何も云はないでかの女のその手を右の手で捉らへた。そしてそれをそのたもとと共にこちらの左りの腕にかい込んでしまつた。

『密會所でしよう――？』かの女も一緒に足を進めながら、矢ツ張り、よろけた。

『そりやア、人間のお互ひでさア、ね。』こちらの腕はまたかの女のかい込みをもしツかりと感じた。

『でも、わたし嬉しい、わ。あなたも嬉しくない？』

『僕も嬉しいやうです。』

『やうですとは水くさいぢやありませんか？あなたはまだ鈴木に遠慮してイるんです、ね。』

『こんな場合に遠慮なんかありますか？その代り、またあなたの名譽もないかも知れません。』
『名譽なんか何になります？』かの女は獨りで踏みとまつてしまつた。『自分の人間その物だツて入りません、わ。』
『………』道の右の方も亦かの女の細く緊張した言葉のやうに餘ぶんの地面なんか無くなつてしまつて、今や、土手は六郷川の川ぐちをだだツぴろく正面に受けてるので、海の波がぽちやん、ぽちやんと石垣の裾を洗つてゐた。周圍から聽えて來るものとては殆ど全く何もなかつたので、そのひどくもない波の音がそらを渡つて天上の星々までも屆くやうだ。みちばたには松のかげもまばらだ。ふたりは右からも左りからもただ水に挾まれてるのであつた。若しここで大きな石をたもとへ入れて心中するものがあつたとすれば、きツと知れなかつただらうと思はれる。
『しく〳〵』云ふのに氣が付くと、かの女は兩の袖を顏に當てて泣いてるのであつた。
『どうしたんです？』こちらは多少興ざめかけたが、あと戾りをして行つて、かの女の脊中へ左りの手をかけ、『泣くのはおよしなさい』と命令するやうに云つて、かの女の顏からかの女の兩手を離れさせようとした。
『………』かの女はそれをからだのゆすりでふり切つて、今度はわツと泣き出しかけたが、自分で自分を制したやうにその口を袖でしツかり抑さへてしまつた。そしてまだすすり泣きをしてゐる。

『ぢやア、今から直ぐ歸りましよう。鈴木君も待つてるでしようから。君ちやんも泣いてるかも知れません。』

『いえ、もう、わたし泣きません。あなたと一緒にどこまでもまゐります。』顏から袖を放して、かの女はちやんと歩き出した。

『……』こちらはそのあとからぶら〳〵とついて行きかけたが、『まア、御覽なさいあの波を。まるで活きてるやうだ。』

『わたしあれを見ると直ぐ悲しくなりました、わ。』少しあと戻りをして一緒に立ちどまつて、『あなたとわたしとはどうしても心と心をぴツたり合はせることができないんだ、わ。』

『そりやア、さうでしよう——鈴木君があるから。』

『いいえ、さ、あなたに奧さんができたからだ、わ。』

『それはそれです。これはこれでいいでしよう。』

『あなたはそんな人ぢやアないの。』かの女はこちらの持つて行く手を避けて、また先きへ行つた。

『……』ぢやア、こちらも四五年來の妻とその子どもとを棄てたら一緒にならうと云ふのか知らん？それとも、お互ひに棄てられぬ物があるから、いツそのこと、お互ひその物を——心中？さうだ、かの女は今おだてられさへすれば、その氣にもなれる狀態にあるのだらう。

堤防が海の中へ一番突き出て、段々と左りへまはつてるところは、波のあたりがつよく高いせいか、防のうへにまた防が築き上げてある。矢張り、石を以つて――おとなの半身に達するほどに、そしてその反對の路傍には、松の並み木がまた少し密になつてゐる。

そこへ來ると、かの女はずツと廣くなつた東京灣一面の海に顏を向けて、

『ああ、いい氣持ちですこと』と、その言葉の意味に比べてはずツと控へ目に云つたが、そのまま又顏をおほつて石につツ伏してしまつた。そしてその初めのしく／＼が段々大きくなつて、聲は呑みつつも、背中の方へまでおほ波を打たせてゐた。

『また泣くのですか？』こちらも聲を顫はせて、かの女のそばへ――かの女の今の言葉での要求通り――ぴツたりと寄り添つた。そして、『泣くのだけはおよしなさい――ね、僕が附いてますから。』肩へ左りの手をしツかりとまはし、右の手で以つてかの女の右の手を顏から無理に引き放し、こちらの口を持つて行つてかの女を接吻してやらうとした。

『いや！』かの女は横へからだを引いて、こちらへ後ろを見せた。『だツて、あなたが惡いんですもの！』

『………』四五年も前にこちらが今の妻と結婚してしまつたことを今あり／＼と悔しがつてるのだと思ふと、すぢかひに養魚場の水を拜んでるやうな風をして雨の袖を顏に押し當ててるかの女を可哀さ

うにも又愛らしくもなつた。いつまでもさうさせて置きたかつた。が、あの時を考へて見ると、矢ツ張り、かの女は何かと云つても田崎を思ひ切れなかつたのぢやアないか？こちらに向つて『あなたはずツと思ひ切つて出られない人、ね』などとおだてるやうに云つたが、かの女が向ふを思ひ切れないところへ出て行くだけの必要もなかつた。そのうちに、また、かの女は子どもを拵らへてしまつた。

『あなただツて、然し、その失敗――でしよう、ね、矢ツ張り、あなたに取つては――に對する損害賠償は得てゐますよ。』

『どうしてです？』と、かの女はこちらを突然、存外らくさうに、ふり返つた。

『……』半分は作り泣きであつたか知らんと考へながら、『兎に角、一度は、また元の樂しい夢に耽れたんですから。』こちらはそれが妬ましかつた、斯うなるとだ。

『ああ、いツそ死んでしまひたい！』かの女はまたその顏へ袖を持つて行つた。『どうせあなたにそんな侮辱を受ける位なら！』

『何も、侮辱ぢやアありません！』醉ひの爲めではないが、こちらも少し眼が引き釣つて來たやうにおぼえながら、かの女の肩を抱きすくめるやうにして燃えてる口を持つて行つた。

『いやよーいやよ！』かの女はまたそれを拒絶しながら、築き石の方へ押されて行き、その石の上へ

からだをのしかけるやうにして、兩方の袖を以つて顔を埋めた。
　この時、ぽきりと云ふ音がした。
『どうかしましたか？』こちらは、しまつたと云ふ驚きに打たれた。かよわい女の骨がどこか折れたのではないかと思はれたからである。
『ちよいと待つてよ。』かの女は、然し、左ほどのやうすでもなかつた。石垣を離れると、不思議さうにして帶のあひだを探つて、小さい長方形の物を出した。その一部が星あかりにきらと光つた。『さうれ、かがみが毀はれましたよ。どうして呉れます、緣喜が惡い？』暫らくはそれをそのまま殘念さうにいぢくつて見ながら、『これでもおかねが出たんですから、ね』などと、くど／＼云つてゐた。
『どれ、見せて御覽なさい。』こちらはそれを女の手から奪ふやうにして取つた。はツきりとは見えないが、星あかりに少し高くさし上げて見ると、かがみの三分の二まではすかひに來てゐるふくろ革の色は、どす黑いやうであつた。そしてかがみの上部を指さきで持つと、丁度、革の內部からその上半分が持つた方の手へ離れた。これは再びつぎ合はせることのできないものであつた――かの女とこちらとのやうに。如何にもつじうらが惡かつた。が、それをうち消すつもりで、
『こんな物ア買ひかへさへすりやアそれでいいんだ。』
『ぢやア』と、聲を鼻にかけて、『記念に一つ、あなたが買つて下さいよ。』

『買へと云へば買ひもします。鈴木君にあなたが叱られさへしなけりやア、ね。』こちらも何だか興ざめて來たので、かの女が云つたことを捉らへて、『記念なんて、然し、もう、過去のことになつたのですか？』

『心機一轉よ。わたし、もう泣きませんから。』

『ぢやア、歩きましよう』と云ふより仕かたがなかつた。

防上の石垣を向ふへ少しはづれると、堤防みちの左りがはに、松の枝をうへに戴いた切り石が一つあつた。そこへかの女は腰をおろして、

『もう、さめたと思つたのに、まだ醉つてます、わ。』

『さうでしようとも、半分は酒があなたを泣かせるのです――それにも亦僕をおさかなにして。』實際思ふに、かの女はこちらを相ひ手にして泣いたので、多少は氣がすんだらしい。かの女の所謂あまへて見たい意味を實行して。

『ぢやア、感謝しなけりやアなりません、わ、ね。』

『十分に感謝おしなさいよ。』斯うは答へたものの、こちらもかの女を泣かせるまでにしたので、ここへ來ないうちよりも一層親しくかの女をこちらへ近づけたと云ふ滿足があつた。ただ接吻を拒絶された一事を殘念に思ひつつ、かの女のそばへ行つて、道の上へどてらの尻もちをつき、かの女の腰かけ

てる膝へ兩手の肱をかけた。そしてそこにからだの重みを托して顏を押し付けながら、かの女の褄し
たのあたりから、暫らく默つて、白くきら／＼する海の方を見てゐた。

　波の音とは違ふ音がひた／＼として來たかと思ふと、堤防と平行して、一つの小さいひら底ぶねが
一人の漁師に漕がれて來るのであつた。

　こちらは兩手をもかの女の膝から放した。すると、かの女は
『もう、十二時にも近いですのに』と云つて立ち上り、舟が左りへ去る方をながめた。

『……』鈴木をも亦戀しくなつたのか？それとも、君ちやんを思ひ出したのかと、こちらはなほ默
つてその樣子を見つめてゐた。

　かの女は松のかげから離れて堤防のそとぶちへ行き、足を傾斜のおもてへ投げ出したかと思ふと、
石の上へ腰をおろし、兩手を後ろへ突いてからだをそらへ向けた。そして、
『ああ、いい氣持ち！』

『醉つてる時はあぶないから、注意しなさい』と云つて、こちらも近づいて行つた。

『これで海へころげ落ちて死んでしまつたら本望よ。』

『あとで誰れが一番困るでしよう？』

『そりやア、君ちやんです、わ、ね――いッそこれから歸りましようか？』

『歸るなら、歸りましよう。』
『あなたはとまるとおツしやつたぢやありませんか？』
『然し、もう、あなたが御滿足を得た程度にやア僕も滿足を得ましたから。』
『矢ツ張り、男は薄情だから。』
『薄情だツて、ね、あなたの心を今占領してゐる物を當てて見ましようか？』
『そりやア、あなたよりもまだ君子が可愛い、わ。』
『それだから、お歸んなさい。』
『……』かの女は返事をしないで、矢ツ張り、海をながめてゐた。
『ところで、ね』と、こちらは言葉をつゞけて、『鈴木君はどうでしよう？』
『鈴木だツて可愛いところがある、わ。』
『ぢやア、僕は？』
『憎い！』かの女はこの返事と共にそのからだをちよツとそらへ向つて延ばした。それから、また、あまへた聲で、『まア、起して下さい、な、ね。』
『……』後ろへまはつて、かの女の兩方のわきの下へ手を入れると、それへしツかりつかまつてかの女は起き上つた。

かの女はさきに立つて向ふへ千どり足で進んだ。或距離まで行かせてから、こちらはまたかの女の手を取つてやつた。何だか話も盡きたやうな氣で、今夜ぢうのことを心のうちに向つてばかり樂しくおさらひをしてゐたので、夏になれば開らける海水浴の出張り屋をとほり過ぎても知らなかつた。

『ちよいと、あなた』と、かの女はこちらのと組み合はせてゐる腕をふつて、『あなたにやアこれで平氣なの？』

『さうです、ね――』こちらは自分のことばかりで云へばそれを肯定してもいいのだが、かの女のすべきあと始末がかの女を思つて氣にならないでもなかつた。『平氣でもないです――然し』と、踏みとまつて言葉をわざと轉じて、『さう進んで行つたツて仕やうがないんです。』

『どこ、ここは？』かの女も踏みとまつた。

『そこの建て物のはづれから下りて行けば、直ぐ〇〇の前です。』

『さう？わたしもまだ醉つてるの、ね。』

堤防の下り道へ來たけれども、かの女は下りようともしなかつた。で、また同じつつみの上をもと來た方へ戻つて行つた。今度は左りに海、右に養魚場の水を見てだ。お互ひに手を取つたり、腕を組み合はせたりして、互ひの電氣は通じ合つてゐても、口にのぼる言葉は、もう、索然たるものであつた。

漁師の寄會所にも人のけはひはしなかつた。そしてその邊から見えた旅館の二階のあかりも――戸がしまつてか――見えなかつた。

六

お豊とお仙とに迎へられて、楢藤も先づお杉さんの部屋へ行つて見ると、奥の障子に寄せて一つのとこが取つてあつて、屏風が半ば立てまはされてた。

『………』畜生！餘り氣が利き過ぎて、人を馬鹿にと、こちらは思つた。

『もう、一遍飲み直しましようよ』と云ふので、それにおつき合ひをしてゐると、かの女もまた勢ひを回復して、不斷通りはづみ出し、帳場へ帶上げを返しに行つて來たりした。それから、帶を解き、衣物をぬぎ　長襦袢一つになつてとこの上へ倒れた。

『もう、どうなつてもいい、わ、よ――自分をさへうツちやつてしまへば！』

『………』それでは、まるで早く來いと云つてるやうではないか？然し、こちらはその手には乘らなかつた。或代議士の未亡人やその眞似をする或をんな小説家が、燃えるやうな襦袢を着て、病氣でもないのにそれと稱して寢どこへ這入り、そこへ多くの物好きな青年をとほして、なまめかしく渠等の心を奪つて樂しんでると云ふことを、かの女はよそごとに聽いて知つてるのである。だから、いい氣

になつて、うツかり口說きにでも行つて見ろ。かの女の內心ではここぞと云はないばかりに、然しそれでもおもて向きには柳の枝で、ひどく又やさしくこちらがはね付けられるにきまつてる。『ぢやア、僕もどうでもいいや。お休みなさい』と云つて、次ぎの部屋へ來た。これでかの女もあすは無事に鈴木のもとへ――兎に角、綺麗な申しわけを以つて――歸れるだらうと思ひながら、女中を呼んでそこへ自分のとこを取らせた。

が、昂奮してゐて、なか／＼眠れなかつた。心は隣室へばかり馳せて、枕の上で耳をそば立ててゐると、やがてかの女のまたすすり泣きをしてゐるのが聽えた。そしてそれがなか／＼やまなかつた。あれだけこちらの前で泣いて置きながら、それでもまだ足りないのだ。いかに敎育がある女でも、ヒステリ性になると、獨りの時は每晩でも泣いてゐたのかと云ふ事實をこちらは初めて知つた。氣の毒でもあり、可哀さうでもあるが、これはたとへ言葉の上での好きな男が二人できても、三人できても、恐らく、直りツこがない病氣だらう――矢ツ張り、鈴木の手に全身をまかせた瞬間よりほかにはと思ふと、寧ろそれに對する反感の方が先きに立つた。泣くだけ泣け、そして泣き勞れた時には獨りで眠れるだらうと。

こちらはいつのまにかとろ／＼したと見える。然し、何となく心配の爲めにまた目をさますと、かの女は矢ツ張り泣いてゐた。で、こちらまでが神經だつて來て、目が冴えてしまつた。そしてこちら

も妻のことや子どものことが思出ひされた。そしてうは氣と云へば、これも一種のうは氣だが、その爲めに斯うして貴重な時間を空費してゐたのが、いつになく、後悔もされた。どうせ、斯う云ふヒステリをんなを女房としてしよひ込むことなどは眞ツぴらだ。

二時を打つ時計の音が聽えても、泣きの聲は絶えたり續いたりした。そして三時が鳴つた頃、かの女は――さうだ、かの女の方が――眠つてゐたかして、今度はうなされて、

『あツ！あ、あ、あア――！』そして目がまたさめたかして、また泣き出した。

『………』思ひ出して見ると、かの女は海の夫人になるのだと云つた。それはその女にも無意識のうちで實際に死にたいと云ふことをもじつたのかも知れない。さうだ、かの女には死ぬほかにその泣きを一生とめる道がないのであらう。こちらのせいばかりなら、幾重にも責任は持たう。が、かの女の今までのいろ〳〵な經驗が然らしめたものとすれば、こちらはただ自分だけに責任あるその一部を引き受けてやつてればいいのであつた。

――（大正八年八月）――

難船

『……』土佐のモロト崎と云へば、金華山沖と共に、船乗りに取つては、わが國の二大難所である。そこを一度とほつてゐた時だ、泰助が棚どこの上の方に寢てゐると、船の窓と窓との間にかかつてるがんどうがはしら時計の振り子のやうに右へ寄つたり左りへ行き過ぎたりしてゐた。海が餘ほど荒れて來たのだ。コールバンクと云つて、ふな底に石炭倉がある、そこが船の前後にゆれるに從つて、がらん！がらんと半ば以上空虛な音を立てるではないか？石炭が餘ほど無くなつて來てゐるのであつた。このまま若し大平洋の眞ン中へでも流されて行つたら、人間で云へば、腹がへつてるままだだツぴろい野中へおツぽり出されたも同樣だと、心配しないではゐられなかつた。

こんな時に、いつも一つの明るい心だのみをこの狹い二名づつの船室の夜に與へて呉れるのはがんどうだが、そのがんどうが左右に中心をはづれて行くたんびに、引ツかかつてる釘にきしれて、ぎイぎイと云ふ音をさせる。齒の浮くやうな、同時にまたこちらのからだを闇の中へおツぽり投げるやうな。何とも云へぬ氣味の惡い音であつた。がらん、がらんと、相變はらず、殘りすくなになつた石炭

のころがる音もした。

　そのうちに、氣味の惡いがんどうが――どうした拍子か？――みよしの方へかた向いたまま、その途中にとまつてしまつた。はて、不思議！渠は氣が立つてるので、何かの危險を待ち受けながら、まだ默つてどうしようかと考へてると、下の寢どこに横たはつてる男が先づ飛び出した。そして機關室よこ手の廊下をタラプの方へ驅けて行つた。こちらもその氣になつて寢どこを飛び下り、その男のあとを追つて行つた。

　向ふが幅の狹いタラプを半分ばかりよぢ登つて、甲板へくびを出してゐたので、こちらはよぢることができなかつた。止むを得ず、向ふの背中にとツつかまつて、同じほどにくびを出して見ると、うるしのやうな眞ツくらがりで、何も見えなかつた。

　ふたりとも、今度は一緒に、また自分らの船室へ戻つた。すると、がんどうのゆれも石炭倉の音もこちらの胸に左ほどおそろしくなくなつてゐた。船は矢張りひどく動搖してゐたけれども、

「何と云つても難所ですから、な」と、下からの言葉であつた。

『さやう。』こちらは斯う上から簡單に答へた。すると、改めて、

『伊藤さん。』さも懷かしげに呼びかけたではないか？少しやうすが違つてた。

『永井君。』こちらもいつもとは違つた返事をした。

向ふは年が少し下であるけれども、東京商船學校出を鼻にかけてる事務次長であつた。それに比べると、こちらは大した學歴もなく、經歴もないが、前にも一度船に乘つてたことだけが取り柄と云へば取り柄であつた。室も同じくしてゐながらも、今までは、お互ひの用事のほかはろくに口も聽かなかつた。それが今のがんどうの不思議な運動に危險の豫想を共にしてから、意張つてる永井の方から折れて來たのだ。

『船に乘つてますと、お互ひにいつどんな日に遭遇するかも知れません。これから、一つ親しくしようぢやありませんか？』

『それは僕も願つたり叶つたりです、な。國には親も兄弟もをりますが、東京へ出て以來と云ふもの、餘り友人がなかつたものですから』と云つて、俄かに涙が出ないばかりの懷かしみをおぼえた。

『僕にもまだ親があるのです。さうして頻りに結婚をせよと云ふのですが、お互ひのやうな身の上では、とても、そんなことは思ひもよりません。』

『さうです、な、結句、獨り身の方がらくで、かかり合ひがないですから。』

斯う云つて、こちらは肥後の三隅で女郎買ひをしたら、なか〳〵持てたことを私かに考へてた。

すると、向ふから一層親しみを運んで來て云ふには、

『實は、僕には思ふ女があつたのです。』それが然し云ふことを聽かなかつた。船乘りになるものなど

にかた付きたくないと云つてた。それも、尤もであらう。そして先輩若しくはひら水夫の家庭には、亭主が長い航海で留守の時、女房は平氣でその代理を忍ばせてゐるところもあるから、それよりはまだしもそんな女なら貰はない方がいいのだ。が、いまだにかの女を思ひ切れないでゐる。そしてその燒けッ腹で、『三隅でも大分散財をしましたよ。』

『や、君も行つたのですか？』

『さうです。ぢやア、お互ひです、な。』

『……』それから、別々な相手であつた女の名を互ひに語り、互ひの持てかたを詳しく說明して笑ひ合つたりした。そして、『ぢやア、これからは今夜を記念に兄弟となりましよう。』

『どうぞさう賴みます。實は、僕から餘り話を仕かけなかつたのが惡かつたのです。』

『いや、僕もよくなかつた』斯う云ふわけで、以後はどこにゐても『互ひに生死を共にする』と云ふことを誓つた。年から云へば兄ぶんとして、それはこちらも愉快であつた。

　船と云ふのは外國船であつた。泰助がなぜ外國船などに乘つたかと云ふと、洋行熱に浮かされて、洋行をしたかつた。さうかと云つて旅費の調達もできなかつた。で、この船にでも乘つてるうちに、都合がよくて外國の港へでも入る折りがあらば、それを幸ひにそこで脫走しようと云ふ考へだが、それはこの永井にも打ち明けなかつた。

船長を初めとして、船員はすべて外國人だから、乘つてるうちには獨りでに英語を多少はおぼえられるだらうと思つた。が、たま／＼英語らしい單語が聽けるだけであつて、あとは皆で何を云つてるのか分らなかつた。それもその筈で、ノルヱイの船籍に在る船で、それをただ横濱の邦人がチャアタしてゐただけだ。玄海灘から三隅へ行き、鹿兒島をまはつてモロト崎へ來たのであるが、そこは兎に角無事に通過したので、渠自身に取つては、永井と思はず兄弟の誓ひをしただけが儲け物であつた。

横濱へ歸つてから、今度は北海道のマスケへ鮭を積みに行つた。それを横濱へ持つて來てから、またマスケへ行つた。そこから鮭を積んで歸るにしても、若し小樽へ立ち寄れば、ただ寄るだけの道よりで四百圓ばかりの損になるので、一直線に進んで津輕海峽をぬけることにしてあつた。そしてそれには青森の白鳥崎の燈臺を目あてに船の針をきめるのだ。

ところが、この航海に於いて船は白晝、北の海にありがちな、ひどい濃霧におそはれたのである。そして濃霧がひどいばかりでなく、波もなか／＼荒かつた。

露艦が津輕海峽や太平洋海岸にも出沒すると云ふうわさがあつた時で、皆が油斷しないで甲板へあがつてると、右舷の前方から大きな波のうねりも段々見えなくなつて來て、船が浪間に落ち込むその前半身が白い煙りのやうな物につつまれたかと思ふまもなく、あとの半身もそれに這入つてしまつた。濃霧の襲撃には、以前、船に乘つてた時に時々、千島などで出逢つたことがあつて、心配は心配

だが、それを無事にとほり拔けたので、左ほどにも思へなかつた。が、自分の周圍一間四方ばかりのほかはそらも海も船體も見えないので、こんな時には海坊主と云ふ物があつて、たこのおほ入道のやうにぬツと目の前に現はれたらと云ふ、陸上のお化けに對するやうなおそれがいだかれた。

ぞツとして、泰助は甲板を下りて自分の室に戻り、ついて來た永井と共に、室内の時ならぬやみを照らす爲め、がんどうに火を付けた。今回は石炭倉のがらん、がらんは云はないが、がんどうのぎイぎイがまた初まつてた。

『なんしろ、外國船と云つたツて、隨分舊式船ですから、な。』

『いかにも。然し、君』と、泰助はこんな時に年うへとしての度胸を見せて、相手のしてゐさうな心配を安んじさせるつもりで、『千島諸島の航海なんて來たら、濃霧はまだ〳〵こんな物ぢやない。』一度は、然し、クナジリ附近で進路を失つて、一日ぢう殆ど漂流の如きおほまご付きがあつたことを私かに思ひ出してゐた。

そのうちに、背中合はせの船室にゐる西川と云つて、永井のまたうは役が顏の色を變へてやつて來た。

『伊藤さん、伊藤さん！君はこんなことに經驗があるだらうが、大丈夫かい？』

『なアに、大丈夫です』と、出たら目のやうだが、自分では答へて置く方がよからうと思つた。この

人の手づるで自分もこの船に乘れたのだが、事務長をしてゐるほどの者がそんなことでは駄目だとあはれに思へたからである。

『さうか、なア？』西川はなほ心配さうに、『外國人のことだから、日本の航海に不慣れで、若し暗礁にでも乘り上げたら――。』

『そんなことア！今日まで、あれでも日本ぢうを無事にやつて來たぢやないか？――それはさうと、永井君、一體どこの邊をとほつてゐるのだ？』

『斯うなつちやア、僕にも分らぬ。』

『おそらく、ハーゼンでも知るまい』と、西川はおど〳〵してゐた。

『………』ハーゼンとはノルヱイ船長の名である。『あいつが、知らないでは、ことぢやが――。』

『知るまい、知るまい』と云ひながら、西川はそれでも去つてしまつた。

『あの西川事務長はお互ひよりもまだ船に經驗がない、なア』と、あとでこちらは永井に云つた。そして兎に角、こんな時に少しでも眠つて置けといふ氣になつてゐた。が、さう安心もできないので、永井を待つて置かせて、こちらは視察かたがた、また甲板へ出て見た。

するとノルヱイ人どもは一匹の犬を相手に平氣で甲板の上を笑つたり話し合つたりしてゐた。こちらも一つ日本人の度胸を見せてやれといふ氣になつて平氣をよそほひ、船がどんた危險中に在るか

と云ふやうなことは忘れたかのふりをして、言葉は分らないながらも、目つきや手まねぎでその仲間（なかま）に這入つた。犬は大きくもないけれど、しツぽの房々した茶色のむく犬で、こちらにも親しんでちよこちよことそのつめたい鼻さきを持つて來た。それをひとりのノルヱイ人が捕らへて投げると、船のさきがどかツと波のあひだへ落ち込むと共に甲板のうへへぺたりと落ちて、またその人のそばへ面白さうにしツぽを振つて行つた。

ひとりが菓子をかぢりながら近づいて來たので、犬はそれを欲しがつて飛び付かうとした。すると、これでも喰らへと云つたふうで靴のさきを出した。それがたま〳〵犬の鼻さきへ當つたので、きやんと泣いた。皆はそれを見て、どツと笑つた。

『おい、君、さすが世界的航海國のやつらは違つたものだぜ』と云つて、泰助は船室へ戻つてから永井に自分の見たその樣子を語つて聽かせた。そして自分の寢どこへ段によつてあがつて、横になつてると、どんと一つ、異狀（いじやう）な振動が船體全體に行き渡つたと思へたではないか？さア、しまつた！ロスケの大砲を横ツぱらに喰らつたとしては、何だか振動（しんどう）の方向が違つてたやうだ。

自分は他のことを考へるひまもなかつた。寢どこを飛び下りて、一目散にタラプへ急いだ。そして丁度くびを上へ出すと、船體（せんたい）が左舷の方へかた向くのを感じたと同時に、船長のそばにゐたノルヱイ人どもが船長と共にごろ〳〵と右舷の方から倒れ重なつてころがるところを見た。

暗礁に乘り上げたのだ！それにしても濃霧がひどくツて、目の前を二間さきとは見えなかつた。いよいよ、待ち受けてたやうな一生の大事が起つたと云ふことがぶる〳〵ツと自分のからだ中に響き渡ると、自分のあたまは全く國の父母や兄弟のことで一杯になつた。大きな聲で父を呼び、母を呼んでるやうな懸命な氣持ちで、自分は甲板へ飛び上り、つる〳〵してた甲板のおもてを、そのおもてへぺたりと延ばした手のうらにつばを附けて這ひのぼつて行つて、うへになつてる右舷のサイドの鐵棒につかまつた。いや、つかまつたといふよりも、ぶらさがつたと云ふ方が當つてるだらう。

つまり、鐵のらんかんの裾へあたまを近づけてぶらさがつて見ると、永井もこちらの眞似をしてやつて來た。それはよかつたとしても、まだ西川がゐる。あれはどう─ただらうと心配してゐると、船體が幸ひにもごろりと多少その傾斜から回復した。

そのうちに、西川もやつて來たが、眞ツさをな顏をして、厚さ三寸幅三尺、そして長さ一間半ばかりの板いたを一枚見せた。ダンブルと云つて、船倉なる物があるその蓋であつた。

『どうするのだ？』こちらは渠にわざと聽いて見た。

『これで、伊藤さん』と、渠はまじめ腐つて答へた、『あんたとわたしと一緒に助かりましよう。』

『さううまく行くもんか──浪にはね飛ばされりやア、それツ切りぢやないか？』

『……』西川は失望して去つたのかと思つてると、またレゲンと云つて、さきに重りのついた航路

計りの紐を切つて持つて來た。そして、『これでお互ひにこの板に結び付いたら――』
『駄目ぢや、なア！よし、おれが持つて來てやる』と云つて、泰助は再びタラプを下りた。
廊下は、今や運轉のとまつた機關室のまはりについてるのだが、渠自身の室と脊中合はせに西川の室があつた。この兩室の入口のあひだにかけてある救命布を引きちぎつて、三つだけ持つて來た。そしてその一つを自分のにして胸から腹へ當て、他の二つを西川と永井とに與へた。
そこへしたツぱ船員の支那人のひとりがやつて來て、棄てられた船倉の蓋を取り上げ、
『チタ〳〵、チタ〳〵』とか、わけの分らぬことを云ひながらそれを持つて行かうとした。で、こちらはそれを靴で蹴飛ばした。板だツてこちらの役に立つと思つたからである。そして怒鳴つてやつた
『欲しけりや、自分で取つて來い！』
この危險に臨んで昂奮がそんなことを云はせたり、させたりしたのであるが、そのうちに、濃霧がうすらいで行くと、こちらの眞ツ正面に當つて、何だか大きな眞ツ白い物がぽツと見え初めた。いよいよぞツとしてそれを段々に仰ぎ見つめてゐると、土臺からうへまでも白ぬりのシリヤ崎燈臺であつた。自分らはこの燈臺の眼下へ眞ツ正面に衝突したのであることが分つた。
氣早やな支那人どもは――霧があがつて見ると、もう、――勝手に雨がはのボートをおろして、それに乘り込みつつあつた。

『えい、畜生！』まだ船長の命令もないのにと云つた風で、ハーゼンは大きな石炭のかたまりをサイドを越えてボートに在る支那人のあひだへ投げ付けた。今一つ渠は他方のサイドにも投げようとしたが、渠等がそれに縮みあがつて、われ勝ちにまたあと戻りして來るのを見て、その擧げた手を引ッ込めた。

泰助は自分ら日本人が半ば爲すべきすべを失つてまご／＼してゐるあひだに、――それも一つには船員といつても航海その物の仕事に關係はなかつた爲めだが、――一方には、支那人どもがわれ勝ちに集つてだが、素ばしこくも二つのボートを占領しようとしたし、またノルヱイ人どもがこの危急の場合にも各々その位置に就いて責任を盡してるし、するのを見て少からず日本人としての體面上に恥辱を感じた。自分はほんの會計補助に過ぎないけれども、斯うなつては何でもやらうと考へた。が、船長の命令で、先づ雇ひぬしがはなる日本人がボートで本船を去ることになつた。それから、支那人のしたツぱども。そして最後にノルヱイ人どもが上陸した。時計を見ると、丁度午後の五時で、七月の半ばであるから、まだまだ明るかつた。

『これが若し夜であつたら、とても、あなたがたの生命はなかつたでしよう』と迎へにかけつけて來た燈臺長は語つた。兎に角、波があらいので、船には手のつけやうがなかつた。

泰助は自分の仕事として早速横濱へ電報を打つその役目を引き受けた。徒歩で一里ばかりを行く

と、三十戸ばかりの村があつた。そこでは椎の實を餅について、それを煎餅にして常食としてゐるのだが、せんべいのことをへんぺいと云つてゐた。そこから、わらび原と云ふ人家も絶えた野原を七里、馬で郵便電信局のある町へ出た。無論夜を徹してだ。そして雨に降られた。用をすませてからも降つてゐたが、その雨を冒して翌日、馬上でまた歸つて來た。すると、自分らの乘つてた船の船體は煮えくり返るやうななみに隱れて見えなかつた。

『どうしたのだ？』

『いや、大變であつたよ』と、西川の返事にも今や勇ましみが加はつてゐた。けさ、少し波が靜まつたので、早くから皆が船長と共に船へ行つておもな荷物を引き上げてゐたところ、お晝ごろになつてまた風が出て來た。そして危險の恐れができたので、これも船長の命令で、再び手を引くことになつた。そして皆がボートで上陸するとまもなく、一千五百噸の船は無慘や二つに折れて、波に沈んでしまつたのだ。

『助かつて見れば、これも面白かつたわけです』と、永井は云つた。

『面白いどころか――どうして、どうして？こりや大變ないのち拾ひです。』西川も喜んでゐた。

『一と眠りおれにさせて呉れ』と云つて、泰助は燈臺長の宅へ案內された。乘り組のうち、六名の日本人は別れて燈臺員どもの自宅へ收容され、七名のノルヱイ人は一緒くたに新らしく建つてた物置き

に、そして四十名の支那人は殆ど家根ばかりの舊い小屋に這入つてるのであつた。

俄かに多人數が來たので、食糧の用意に不足の心配があつた。だから、皆で面白半分に磯べをあさつた。あはびは收穫禁止の時期であつたが、先づそれを取ることを特別に許された。ゴミと云ふカモメの一種は、外人どもには土左衛門にたかるものだからと云つて喰はれないが、邦人はそれをさを竹で以つて叩き落して料理した。大きなまぐろが二圓三圓で買へた。燈臺員の家族どもがするのを眞似て、物ほしざをで以つてぶりも釣つた。

『今夜はきツと燈臺の火を目がけて澤山の鳥が來ます。こりやア見ものですよ』と聽いたので、物好きに大雨を冐かして出て見ると、如何にも多くの、いろんな渡り鳥がその鼻ツぱしらを回轉する白い火(これがこのみさきの燈臺の目じるしだ)のがらすにぶち付けて、氣絕したり自殺したりして下へ落ちて來た。そのうちには、かもめは勿論、うづら雀見たやうで青い色の小鳥もあつた。大きなのではあら鷲もあつた。すべてそんな物を外人や支那人にも分けてやつて、別々に好きなやうに料理して御飯のかはりにした。

そのうちに、横濱から船主も來たし、ノルエイの領事も來て、それぞれ臨時の處置がきまつた。泰助は多くの名刺を貰つたが、そのうちにベルゲンのリチヤドヘデルセン並びにタルレイフリイゼと云ふのがあつた。これは一等運轉手と二等運轉手とだ。そのひとりは、濃霧の甲板上で一緒にむく犬を

おもちやにした連中であつた。そして難破後、丁度一週間にして、船主や西川と共に泰助もそこを引き上げた。

義兄弟の誓ひをした永井だけはなほ船主の代表者として外人らと共に殘つたのである。が、その後、泰助は自分の新らしい仕事の都合上で殆ど一年ばかりも――そのあひだに二度ばかり手紙を交換した切りで――直接に會ふ機會はなかつた。但し、まだ戰爭はつゞいてゐたのである。

すると、ふと、新聞に據つて、〇〇丸が對馬海峽で敵艦にやられたと云ふ記事を見た。そしてその船員の姓名中に永井〇〇といふのがあるのを發見した。まさか同名異人でもあるまいと思つて每日注意をしてゐると、いよ〳〵戰死と分つた人のうちにも同じ名が出た。

けれども、永井の故鄕の家を聽いて置かなかつたので、その親や兄弟へ悔み狀を出すこともできなかつた。向ふがそのあひだに結婚してゐたかどうかは知らないが、こちらは既に意中の人を得てもはや以前のやうな冒險生活はやるまいと決心してゐた。そして今やシリヤ崎乘り上げの日と〇〇丸遭難の日とを以つて死んだ友人の爲めの記念日とすることにした。

――(大正八年八月)――

鐵公

『おれの名まへは鐵公と云ふだが、な』と云つて、上野の山したなる内國通運會社の荷物一手取り扱ひ所へ行つたのだ。

一

その前に、田舍から出て來ると直ぐ、本所の染め物屋へ這入つてゐた。そのうちに世界中の戰爭と云ふものが初まつて、世間の人氣が何となく荒ツぽくなつて來たのを渠もおぼえた。そして仲間の者どもから『馬鹿鐵』、『馬鹿鐵』と呼ばれるのを自分ながら心外におもへた。自分は決して馬鹿ではない。が、人並み外れてゐるのはちんばであるからである。それが一番つらかつた。

『せめて鐵公と云つて吳れよ、さうおれを馬鹿々々云はねいで』と賴んだこともある。そして自分を自分の賴み通り呼んで吳れるのは、染め物屋の息子と近處の子供ひとりふたりであつた。あとのものは皆自分を相變らず馬鹿扱ひにしてゐた。それが面白くない上に、この頃は馬かたがなか〳〵金儲けになると人々が云つてるのをちよツと小耳にはさんだので、誰れのすすめにも依らず、自分自身で發

心して、この丸通じるしへやつて來たのである。

おづ〳〵門を這入つては見たが、店の人へぢかに物を云ふのが遠慮されたので、右の足を引きずりながら、馬屋の並んでる後ろ手に添つて奥の方へ這入つて行つた。すると、廣い車の置き場所があつたその横手の二階建てだが、下は土間になつてゐるところで、二三名の馬かたが火を焚いてあたつてゐた。

いかにも寒いのは、まだ朝の八九時ごろである爲めばかりではなかつた。消え殘りの雪がまだところどころに泥まみれになつてるをも見て來たのだ。

『おれも馬かたに使つて貰ひていだが、なー?』

『………』馬かたのひとりがこちらを見上げ見おろしてゐたが、『おめへはちんばぢやアねいか?』

『そりやさうだが――』

『ちんばで馬かたができるかい?』また別なのが不愛相に云つた。

『やらせて呉れりやアやつて見るだが、な――』斯う答へながらも、鐵公は自分の口があんぐり明かないやうに氣を付けてゐた。と云ふのは、いつも口を明けてゐるから馬鹿に見られるのだと、染め物屋のおかみさんに云はれてゐた。それも然し決して自分の馬鹿な爲めではない、口をつめてると鼻が息ぐるしい爲めばかりにだが――。

『ちんばの馬でもゐりやア、丁度つり合ふだらうが、ね。』
『あいにく、うちにやアそんなあつらへ向きはゐねいや。』
『………』そんなひどいことは云はないでと云ふ樣子をして、こちらも火のそばへよつて兩手をその上からかざしてゐた。來た以上はどうしても使つて貰ふと腹をきめてだ。それを感づいてだらう、ひとりの馬かたが並んだ馬屋と馬屋とのあひだをとほつて、こちらを店の方へつれて行つて呉れた。
『なんだ、かたわぢやアないか』と、主人も初めはそツけなく云つた。『ちんばで馬は引けないだらうが、な――』
『だが、な、田舍ぢやアちんばでも馬に乘つたり、郵便脚夫をしたりしてるものがあるだが――』
『馬に乘るのは誰れでも乘れる、さ。乘つてゐさへすりやア運んで行つて呉れるんだから。けれども、馬かたは馬に乘るんぢやアない。馬について行かなけりやアならないので、お前さんのやうな人はとても速い馬にやアついて行けまい。さうしてまたお前さんがついて行けるやうなやくざな馬はうちにやアゐないから、ね。』
『………』成るほどさうしたものか、なアと、初めて分つた。そしてここでも亦自分をこんなかたわに產んで呉れた親を恨めしかつた。が、今はこの世にゐないものに向つて冥途までは訴へやうもないので、ここで若し自分を使つて呉れれば自分の主人となるその人にあまへ込みたくなつて、『ぢやア、

おりやアどうしたらよかんべいか？』
『來たところへ歸ればいいだらう――？』
『實は』と、こちらは少し考へ込んで、『もう、使つて貰へるつもりで出て來ただが――』
『氣の早いをとこだ、なア、足はおそいくせに！』
『へ、へ、ヘツ』と、ただ笑つて見せた。主人の樣子が、たツてと云ふなら使つてもいいがと云ふらしかつたからである。
『馬のかひば掛りになら使へるでしよう』と、おかみさんもはたから云ひ添へて呉れた。
『それでも結構だア。』斯う答へて、かの女を年は若いやうだが自分の母の生まれ代りにでもして見たかつた。
『一體、お前さんは今までいくら貰つてゐたのだ？』
『日給四十錢だツたが――』今少し貰ひたいのだと云はうとした。
『ぢやア、その倍にしてやらう――かひば掛りでもいいなら。』
『倍にして呉れるかい、そりやア結構だア、な。』日に八十錢貰へれば、何もわざ〳〵馬かたにならないでもいいと考へられた。

二

鐵公に割り振られた仕事はなか／＼いそがしかつた。

ふた並びの馬屋には馬が十頭づつ、都合二十頭ゐる。その世話を自分ひとりでしなければならなかつた。

先づ、毎あさ、誰れよりも早く起きて、店と馬屋とのあひだに据わつてる大きな釜土に火を焚き付けなければならない。馬どもにやる豆を煮る爲めにだ。そしてその豆にきざみ藁とぬかとをまぜて一と渡り喰はせると、今度はそのかひば桶に今一杯同じ物をつめて置く。すると、それを一つづつ馬力の心棒にゆはへ付けて、馬かたどもは順番に出て行くのである。それは、然し、ほんの、朝ツぱらだけの用だ。

それから、また、馬の出たあとの馬屋を掃除して、馬の踏み板の上へはざア／＼と水を流す。それが二十仕切りすんでしまうと、今度はまた奥の二階家の下へ行つて、きざみ機械で藁をきざんで置かねばならぬ。それに、また、馬のくそ小便の世話ばかりですまず、人間の方の便所も掃除する。また、車置き場の掃除もだ。

そのうちにはゆふがたになつて、馬力がまだ順番に歸つて來る。さうすると、その馬をおほだらひ

で洗つてやることにも手傳ひをしてやらねばならぬ。

　そして車が二十臺、馬が二十頭、馬かたが二十名、馬屋が二十仕切り、そのすべてに二十と云ふかずがつき添つてるのを不思議のやうに思へた。

『一體、君、二十と云ふかずは緣喜でもいいだんべいか、なア』と、或時、火を皆でかこんでる時、ひとりの馬かたに聽いて見た。

『どうしてだい?』

『どうしてツて、うちのこれは』と、自分の親ゆびを出して見せて、『なんでも二十にしてあるだんべいが。』

『馬鹿なことぬかすな!車が二十あれば馬も二十、馬が二十なら馬かたも二十いるのア當り前ぢやアねいか?』

『さうだんべいか?』

『どうせ鼻つまりの先生と來てゐらア、な』と、また別なのが云つた。

『へ、へ、へツ』と、こちらは先づ笑ひを見せた――皆の機嫌を取つて置く爲めにだ。ここでも皆がこちらを馬鹿だと云ひはじめたが、自分は決してさうではない、鼻がつまるから、つい、口を明けるやうになるのだと申しわけした。そして馬鹿と云はれるよりも鼻つまりと云はれる方がまだしもだと

思へた。で、それにも左ほど氣を惡くしないで、前のものに答へて、『それもさうだんべいか、な、銅(どう)貨(くわ)が二十あればそいうらやおもても二十づつあるわけだから、な。』

『こん畜生！おれ達をそれぢやア馬のうらおもてにしやアがるのか？』

『……』こちらにはそれが何のことを云つてるのか分らなかつたので、にやりと笑ひながら默つてゐると、ほかのもの同士(どうし)の話になつた。

『さうおこるねい、おめへの顏はちよツと馬づらに似てイるぞ。』

『さうして、鐵公はどうでい、ちんばのかた足だけが瘦せツこけて、あとはどこもかもぶよ〳〵して、口を明けてるところア、どうしても馬鹿づらだが？』

『矢ツ張り、それも馬に緣(えん)があらアな。』

『洒落(しやれ)るねい！』

『おれたちやア馬の顏でもねい、腹でもねい、その代り馬の尻だんべいか』と、こちらの口調(くてう)を取つて答へたものもある。『うちの旦那から見りやア、馬の方が人間だらう。いや、馬かたよりやア、馬の方が大切だらう。なんだツて、いくら陸軍(りくぐん)のおふるを買つたツて、二百五十兩や三百兩はするから、な。』

『さう、さ、な、おめへなら、藝者や女郎にも賣れねいし、まア、百兩と云ひていが、正味五十兩に

なるか、どうだか？』
『馬鹿を云ふなよ。これでもたツた二ケ月かせぎやア、九十圓、まア、百兩と云ふところぢやアねいか？』
『けれど、そのうちから酒代や女郎買ひの費用をさし引いて見ろ。五十兩が二十兩の價うちにもなりやアしねいぞ。』
『ぢやア、この鐵公を見つもつて見ろよ。』
『おれ達の身受けが五十兩なら、鐵公は十兩でも受け出せようか？』
『さう、さ。鐵公などと意張つても、實は銅貨ぢやアねいか？』
『は、は、はア』と、皆が笑つた。
『………』鐵公は自分でもにやりと笑つて、私かに考へたのであるが、自分には今十兩どころか、五兩の價うちもないのである。來た時に十四五錢ばかりあつたところへ、きのふ、一週間分として貰つたのが五圓六十錢だが、近處の大福屋へ行つてこないだぢうの借りを貳圓三十錢拂つてしまつた。して見ると、あとに參圓二三十錢しかない。それを、然し、しツかりと越中ふんどしのさきにくるんで、へそのあたりに腹巻きで卷き付けてある。その上へ、近處ではばの利く丸通のしるし絆纏を着せられてるのだが、何よりも自分に一番嬉しいのは腹に手ごたへのある重みであつた。自分は紙幣や銀

貨で以つてこれまでも給金は貰はなかつた。いつも銅貨にくづして貰つた。その方がおもみがあつて、ほんとうにこの世にかねを持つたと云ふ氣がするからである。

『そんな詰らない考へはやめろ。さうして一圓でも二圓づつでもいいから、郵便局へ貯金しろ』と、ここの主人には云はれた。

『……』けれども、こちらは自分が折角儲けたものを人に渡すのは——おかみの人にせよ——詰らないやうに思へるのであつた。

『それだから、皆に馬鹿だと云はれるんだ。』

『へ、へ、ヘツ』と笑つてるより仕かたがなかつた。主人までがこちらを馬鹿あつかひにし初めたのだ。が、おかみさんは女のことだからまささうでもあるまいとすがり付き、それへ泣き付くやうにしたら、

『鐵公はおかしな男だ、ねい』と笑ひながらも、紙幣や銀貨をすツかり、こちらの望み通り、銅貨に取りかへて呉れた。

『……』その親切をこちらはしみ〴〵とありがたく思つた。そして『うちにやア碌な物アゐねいだ。まア、おかみさんだけが少し人間らしいや』と賞めた。

『なま意氣なことをぬかすな』と云つて、奥の二階に寢とまりする馬かたどもの親かたに一つ、あた

まをいやと云ふほどなぐられた、『馬一つ引けもしやアがらんで!』

『……』それでもこちらはおこりもしないで、にやりと笑つただけだが、さうだ!自分の願ひは馬を引けるやうになることだけになつてゐた。自分の給金は本所にゐた時の倍になつてるのだが、そのまた倍を――云はば、日に壹圓六十錢も――馬かたどもは貰つてる。そのくせ、馬について行けばいいだけのことだ。行くさきであつたことなどを皆が話してゐるのを聽いてると、何もかも冗談のやうだ。その仕事と云つては、かひば掛りほどのいろ〱ないそがしさがあるとは見えない。らくなことをして、給金を多く取つてるのが一番うらやましい。『どうして旦那はおれを馬かたにして呉んねいだか』と、仲間のものに不平を云つて見たこともある。

『おめへは一人めへの人間ぢやアねいから、さ。』

『然し、おめへ達だツもて、馬よりやア人間並みでねいと云ふだが――?』これは前に皆が云ひ合つてたことを思ひ出してだ。

『こん畜生!』また一つ、こつんとあたまをやられた。

三

うちにはそとからかよつて來るものもあるが、大抵は獨りもので、丸通の絆纏を着てゐるのが皆で

二十名內外も一緒にめしを喰ふし、それに二十頭の馬が喰ふ豆も用意してある。

奥の二階家の隣りには、その二階家よりも廣い穀倉があつて、人や馬の喰ひ物は皆そこに納めてある。ところが、さきの見と入れ替りに這入つて來る馬かたどもは皆、一度そこへ行つてちからだめしをさせられる。そして四斗俵を持ち上げることができたものでなければ、馬かたにはなれないのであつた。皆が『入學試驗』、『入學試驗』と云つてるのを、どこか書生さんの行く學校か何ぞのことかと思つてたら、或時、このことであることが鐵公自身にも分つた。

『どれ、おれも見て來う！』斯うあまへ氣味で云つて、かひばのことをちよツとうツちやつて置き、ひよこり、ひよこりとかた足を引いて、旦那のあとからそれを見に行つた。その時の試驗を受けるのはたツた一人で、旦那の見てゐる前でらくに俵を持ち上げたから、

『よし、使つてやる』と、直ぐ許された。

『………』この新參めもまたけふから自分より倍額の給金を取るのかと思ふと、うらやましさが先きに立つて、自分が百姓の子に生れながら力わざの仕事を避けて來たことなどは忘れてしまつた。そして旦那の後ろの方で、つい、『あんなことアなんでもねいだが――』と、口に出した。

『ぢやア、鐵公』と、旦那はこちらを笑ひながら返り見て、『お前もやつて見ろ。』

『これくれゐの物ア――』自分だツてもと高をくくつて、直ぐひよこ〳〵と進み出て、同じ俵に兩手

を新參ものがかけたやうにかけて見て、初めて驚いたのである。なか〳〵に重い。そして重いばかりでなく、少しも自分には動かない。よこへまわつて見たり、たてに行つて見たりしたが――。

『そうれ、見ろ！それがあがりさへすりやア、いつからでも馬かたにしてやらア。』

『……』なるほど、な、その爲めにこそと云ふ心をにや〳〵と笑ひにまぎらしながら、試驗と云ふ物が書生さんでなくても必要なのだらうと分つた。

『月給取りになるにやア、なか〳〵勉強しなけりやアならないから、なア』と、よく人の云つてるのはおぼえてゐる。月給取りばかりでなく、日給取りも同じことだらう。で、自分も書生さんの云ふ試驗勉强をやつて見る氣になつて、それからと云ふもの、ひまさへあれば、穀ぐらへ這入つて、米俵を持ち上げることを――人に見られないやうにして――稽古した。

初めは頻りに俵の兩端を兩手で以つて引き上げて見ようとすることばかり努めた。と云ふには、俵をよこにまたいだのでは、旦那の前で自分は最初に失敗したからである。ところで、何日間ころみても、それでは力が這入らないことに氣が付いた。地べたに着いたままでは少しは動くやうになつたが、それも不思議なほど俵の左りの方ばかりが自分の方へ動くのであつた。そして天井なしの家根うらの方へは少しも地べたを離れたことがない。

して見ると、矢ッ張り新參ものがやつたやうに、よこにまたいで俵の眞ン中を兩手で抱くのがほん

たうなのだらうと思ひ返した。そしてそれをまた――ひまさへあれば――何日間もこころみて見た。けれども、相變はらずであつた。少し動いたかと思ふと、俵の前か後ろかのどちらかが持ち上がつて、直ぐ倒れてしまう。而も、その倒れかたがいつも亦自分の右の方へだ。これに氣が付いた時、渠は『は、はア』と云はぬばかりに自分のかた足でつツ立ち、誰れも見てゐないのを仕合はせに、惡い方の足でその俵を踏んまへて、穀ぐらの中で、自分がかたわに生まれ付いたことが恨めしかつた。そして皆が自分のことを『半人前』とも呼び、旦那も皆にやる給金の半分しかこちらには呉れないのを、この爲めだと分つた。

ぷんと、澤山積んである俵からなま米のぬか臭いにほひがするにつけても、人並みにめしを喰ひ、人並みにそれぞれの受け持ち仕事をしてゐるのに、自分だけの半人前が悔しかつた。

『半ちやん、何をしてるんだよ』と、女中の婆々アまでがこちらを半人前あつかひにして呼びに來た。

『馬が歸つて來たぢやないか？』

『さうか』と云つて、渠は顏を出た。そして、さうなるとそれでも惡びれもせず馬の世話をした。が、今夜も亦、川と晩めしとがすめば、あの餅屋のかみさんのところへ遊びに行つてやらうと云ふ氣になつてゐた。

皆のものはかはり番このやうにうち揃つて、毎晩、吉原へ行つたり、浪花節を聽きに行つたりする

が、鐵公にはそんなことの面白味が少しも分らなかつた。ただ、自分が馬鹿あつかひにされたり、かたわとしてのけ物にされたりする悲しみを、初めのうちは、それとなくうちのおかみさんに――優しさうだから――訴へて、聽いて貰ひたいものだと思つてゐた。が、かの女の切親と云はば、いつまでもこちらの給金を銅貨にくづして呉れるだけのことであつて、その他のことには旦那や馬かたも同樣で、少しも取り付く島がない。

それに比べると、餅屋のおかみさんはからだが見ツともないほど肥えて巖丈なくせに、段々と親切になつて來て、この頃では、こちらが何も買はないと、却つて向ふから大福などを一つや二つは喰へと云つて呉れたりするやうになつた。そして、

『うちの人はどうせあの通りだから』と、ゆふべも、夜ぐるまを引きに出た亭主の病身で瘦せこけてるのを歎いて、『わたしも心ぼそい、わ。これから、あなたが少し力になつて下さいよ。』

『おれも、別に大して人と違つたことがねいだに、皆から馬鹿にされてるだから』と、こちらも答へた。

『ぢやア、お互ひだ、わ。』と、また、『力になつてお呉れよ』と云つた。

その家は、うちの門を出て左りへ行き、その道をうちのそとがこひに添つてまた左りへ曲ると、うちのそとどぶを前にした狹い橫丁の長屋の四軒目だ。そこへ今夜も行かうと思つて、日暮れの用意を

いそいでると、馬かたのひとりが
『なんでい、またわさ〳〵と――貴さまも案外喰へねいやつだ』と云つた。
『……』こちらにはそれが何のことだか分らなかつたので、ただにやりとして見せた。
『また行くんだ、な』と、また別なのが云つた。して見ると、矢ツ張り、二人ともこのことを云つてるのであつた。『貴さまはあいつにほれてやがるんだぞ。』
『うんにや』と、こちらはまた笑ひにまぎらした。好きなことはうちのおかみさんをよりも好きだが、それを皆がほれてると云ふのだとしては、あまりに何だか悪いことででもあるかのやうに云つてるらしく受け取れたからである。

四

いつのまにか、さう皆に知れてゐちやア、それでも、うか〳〵おほびらには行けないやうに思はれたので、その晩からは、成るべくこツそりと門をぬけて出ることにした。
もう、上野の山の櫻がぽつ〳〵咲き出さうとすると云はれる時節で、ひるまのうちは大陽がほかほかと馬屋のなかへも當つてゐた。その蒸しあツたかいにほひが晩までも殘つてゐて、それを今、自分がうちのそとがわを通りながら、却つてはツきりと臭ぎ分けることができた。馬のくそ小便までが目

に見えないでもまじつてるにほひだが、それにつつまれてからだが運ばれてると、自分までがひと目を隠れてゐる氣がして、おかみさんに會はないうちから心やすい氣持ちで目的の店へ這入ることができた。

　が、あいにく、そこの土間には車が入れてあつた。そして亭主の車夫が奥の寢どこに這入つてるのを見ると、車を引きに行きさうでもなかつた。

『やア、なぜ出ねいだか、今夜は』と、鐵公は自分の主人が自分を責める時のやうな調子で寢てゐる人に尋ねながら、屋臺の後ろにゐたおかみさんのそばに腰をかけた。『一と晩やすみやア、一と晩だけの損するだんべいが――？』

『少し加減が惡いのですよ、朝から。あなたのやうに巖丈なからだとは違つて、ちよツとすると直きに熱が出て』と、おかみさんは亭主に代つて答へた。

『困る、なア。』こちらは自分がまた賞められたのを得意であつた。『どうしてまたさう直きに熱が出るだんべいか？』

『よわい者は駄目だ』と、亭主もこちらへ顏を向けてゐた。

『………』その不斷からの病人づらをこちらは面白くもなかつた。『時に、おかみさん』と、その方へ向き直つて、『おれがおめへのとこへ來るのを皆がよく知つてるだが――。』

『知つてたツていいぢやアありませんか、皆のやうにお酒を飲みに行つたり、女郞買ひをしたりするのぢやなし――あまい物をたべに來るくらゐは？』
『そりやさうだんべいが、な、おれがおめへにほれてると云ふだが、一體、好きなことをほれてると云ふだんべいか？』
『ふ、ふン』と、亭主は奧の方で笑つた。
『さうかも知れません。』おかみさんは優しい口つきをして、『ですが、ね、わたしもあなたを好きだから、それでお互ひにいいぢやアありませんか？』
『いいならいいで、おりやア何もかまはねいだが、皆で何かそれを碌でもねいやうに云つて、おれを馬鹿にしやアがるだから、な。』
『馬鹿にするものア馬鹿にさせてお置きなさいよ。』
『うん、それでいいだか？』餘ほど嬉しかつた。
『ふ、ふン』と、また亭主は笑つた。
『………』こちらはそんなことに頓着なく、話を米俵のことに移し、どうしてもそれが持ちあがらないことを訴へた。すると、おかみさんは相變らず親切を以つて尋ねて吳れた、
『そんな時におかねをどうして置くの？』

『矢ツ張り、おりやアここにつけてるだが、な』と答へて、自分のつけ足しに出ツ張つた下ツ腹を自慢で以つて兩手に叩いて見せた。
『ふ、ふン』と、また亭主は笑つた。
『だから、それが邪魔になるのでしようよ。』
『そんなことアねい筈だが――』若し邪魔なことがあるなら、自分のかたわがそれだらうと云ふことをも正直に歎いた。
『でも、たださへあなたのかた足が利かないのが不自由なうへに、またおなかへ不自由な物をつけてたら、力が二重に這入らないわけぢやアありませんか？』
『………』さう云はれて見ると、腹の銅貨が段々ふえてゐるのが不斷でもおも過ぎて來たが、それを自分のからだから取り放して置けば、一心に俵を持ち上げる稽古中に、いつ人に盜まれるかも知れなかつた。
『若し稽古中が心配なら、その時だけわたしのところへでも預けてお置きなさいよ。』
『うんにや、かねと云ふ物アいのちよりも大切だと云ふだから。』
『ふ、ふン』と、また亭主は笑つた。
『なか〳〵強情な人、ね。獨り者のくせに、あなたはさうおかねをためてどうするの？』

『おりやア、少し考へがあるだ』と、鐵公はにこ付きながら、『二百五十圓になつたら、人間よりもえらい馬を買つて、自分で自分が馬かたになるだア、な。』
『ふ、ふン』と、また亭主は笑つた。『そのときやア、おれを君の馬屋がかりにでもして貰はうか？』
『いい考へだんべい、さうしておかみさんはおれの女房にしてやるべい。』
『ほ、ほ』と、かの女も笑つた。それがこちらには、もう、其時の事を喜んでるやうに受け取れた。
『まア、大福を二十錢がぶん呉んねいか』と、こちらも嬉しさの餘り小出しのかねを腹がけのどんぶりにぢやら／＼させて、そこから十箇ぶんの代價を先き拂ひした。
『一つお負けして置きます』と云つて、おかみさんは大きな皿に出して呉れた。
『……』ありがたい！世にこれほど親切な人はないと思ひながら、五つまでをぺろ／＼平らげてしまつた時、突然、
『おい、馬鹿鐵』と、あたまのうへで呼ばれた。
『……』びツくりして六つ目の餅を手から落したが、そのまま直ぐ顏を上げると、脊だかと綽の云ふ馬かたであつた。『へ、へ、へ、ヘツ！』
『こら、馬鹿！半人前！親かたが來いとよ。』
『旦那が――知つてる――筈は――ないだ。』言葉の切れ目毎におど／＼した。

『旦那ぢやねいや、二階の親かたでい！』
『ぢやア、これをみんな喰つてから行く。』
『直ぐ來いと云ふんだ、畜生！』
『………』何と云はれようが、おほぐちに殘りのをまた喰ひ初めた。
『その色けもくそもねいざまでおかみさんにほれたりしやがつて！今に見ろ、つつ持たせだぞ。』
『なんだと、畜生！』おかみさんもなか〳〵肩を持つて呉れた。『大福一つ買ひもしねいで、何ぬかすんだい！出てうせろ！』
『うせようが失せめいがおれの勝手でい！』
『何をいやがるんだ、人の店へどなり込みやアがつて？今一遍ぬかして見ろ、承知しねいから！』
『ぬかせといやア云つてやらうが、つつ持たせだ。』
『なんだと！』
『出て失せろ！』おかみさんの立ちあがつたと同時に、寢てゐた亭主までが起き出して來た。
『………』鐵公はそのあひだでつつ持たせとは何だらうと考へながら、平氣で餅を口へ運んでゐた。そしてあとから直ぐ來ないと承知しないぞと云ふ龜公の威し文句に『よし、來た』と答へて置いた。
皿をすツかりからツぽにしてからそこを出たのである。すると、おかみさんがそとの暗がりまでつ

いて來て、

『わたし、人の悪くちなんか少しも心配しないで、何でもあなたの云ふことは聽いてあげるから、ね、その代り、ちよツと五圓ばかり貸してお呉れよ。でき次第返しますから。うちの人はあの通りで、働らきがないから、あなたばかりが力だ、わ』と云つた。

『……』こちらはかの女をあはれにも感じたので、『ぢやア、あす渡してやるべい』と答へた。

『ぢやア、あす、おひる過ぎに、ね。』

『よし來た。』ひる飯をすませると、ちよツとひまがあることをかの女もこの頃では知つてるのであつた。

五

二階の親かたは鐵公を呼び付けると、日ごろの意張りかたにも似合はず、

『おめへに達て賴みがあるから、聽いて呉れんか』と云つた。

『なんだんべい？』

『實は、ほかでもねいが――』この二階に人が起きてるあひだ、したの火にでも當つて番をして呉れいとのことだ。

『……』こいつア多分ばくちか何かの惡いことをするのだ、な、と思へたので、からだを壁までも顫はせながら、『おらア、やアだ！』

『そんなことを云ふなよ。これから毎晩のことだから。』

『そりやさうだんべいが――』毎晩となれば、なほ更らこちらの困ることがあるのであつた。けれども、また考へ直して見ると、餅屋のおかみさんに會ひに行くのは夜なかの方がよからうし、二十錢づつ貰へると、自分の給金が日に壹圓となつたやうなものでもあつた。それに、親かたの威し文句かも知れないけれども、これを聽いてやらないと、餅屋へも行けないやうにしてやると云ふのだ。今のところでは、それが一番つらかつた。で、とう／＼承知をして、やかましい店のものがここへまわつて來でもすると、はしごの下から二階へ合ひ圖の石を投げてやることにした。この店ではばくちが禁物で、若しひとりでもそんなことをやるのが見付けられると、――うちでやつたにせよ、またそとでしたにせよ、――直ぐ馬かたをやめられるのであつた。

　そんなことがあつては氣の毒だから、自分は成るべくゐ眠りなどしないやうに、うすぐらい電氣の光を補ふ爲め十分の炭火をおこして、床几に腰かけながら、いろんなことをおさらひでもしてゐるやうに考へて見た。第一に、自分は少しも馬鹿でもないのに、ただかた足が利かない爲めばかりに人が馬鹿あつかひにすること。次ぎに、米俵を持ち上げることができない爲めばかりに、馬かたになれな

いこと。けれども、染物屋にゐた時よりもずツと割りがいいこと。それに時節もあたたかくなつて來て、ここへ來た當時よりは働らき易いこと。馬と云ふ物は、何よりもうまい大福は喰はないけれども、と、言葉の上の洒落まで加へて、人間よりも大切にされてうまいこと。かねができれば、自分も一つ陸軍省の拂ひ下げ馬を買ふこと。さうなれば、今夜約束して置いた通り、餅屋の亭主を家來も同樣にして、あのおかみさんを自分の女房にすること。

いつのまにかこくり〳〵やつてたのだが、おほ勢のものが自分を襲つて來たと思つて、びツくり目をさまして見れば、二階の聲であつた。自分もこれではすまぬと、腰を床几から起して、土間ぢらを歩きまわつて見た。すると、自分のをんな戀しい心持ちが馬屋のにほひのやうに土間ぢうに廣がつてゐて、それが餅屋の家になつてるやうだ。こんなことはこれまでに少しもなかつたのである。

馬の嘶きごゑが一つした。すると、今一つそれに應じた聲があつた。前のは馬屋の右二番、龜公の扱ふ馬であつて、あとのは左り十五番、源次の馬だ。自分はさう云ふ風にそれぞれの聲を聽き分けられるやうになつてゐた。

上野の鐘が鳴つてゐる。自分は藁きざみのそばへ行つて、晝まするのとは違つた遊び半分の氣持ちで、藁をきざみ初めて見た。ぎゆうツ、ぎゆうツと云つて切れたのが大きな受け箱へ落ちて行く。これが若しあの餅屋のおかみさんの首であつたらどうだらうと思はれた。自分は、きツと、可愛さのあ

まり、その首のきざみ目から出るそのなま血をぺろ〳〵と嘗めてやるだらう、と。その癖、自分は國にゐた時、一度、女のなま首が田ン圃の中に落ちてゐたのを——誰れよりも早く——見つけて二度目の人が來るまで腰をぬかしてゐたので、一週間ばかり牢へ這入つて取り調べられたが——。

さうだ、あのおかみさんはこちらの云ふことなら何でも聽いてやると云つたツけ。そして、こちらのあす貸してやることになつてるかねは必らず返すけれど。だから、どんな無理を云つてもいいのだらう。いツそのこと、今から持つて行つてやらうか？然し、それでは二階のものが困るであらう。これが見付かつて、自分までがまた牢などへ這入ることは眞ツぴら御免だけれども——。

もう、大分に夜が更けて來た。あたりの樣子がしんかんとしてゐるのに、二階だけがあまりに騷がしい。あがつて行つて、ちよツと氣を付けさせてやらうとも考へたけれど、そのあひだにも誰れかがこツそりやつて來ないとも限らなかつた。

丁度さいはひにも、先き拂ひの二十錢と共に一つの小石を渡されてゐたのに思ひ及んだのである。それを下からねらひをさだめて、氣を利かしたつもりで、二階へほうり投げてやつた。すると、その騷がしい聲はこちらの思ひ通りぱツたりやんだ。

すると、然し、親かたがはしごを半分ほどまで下りて來て、ひそやかな聲で首をずツと突き出して、

『おい、誰れが來た？』

『うんにや』と、こちらも赤顔を持つて行つて、ひそやかに、『誰れもまだ來ねいだ。』

『ぢやア、どうして石を投げた？』

『なアに、さ、あんまりやかましいだから、人に感づかれると惡いと思つただ。』この返事には自分として十分得意があつたのだが、

『なんのこツたい、馬鹿野郎』と、一言のもとに叱られてしまつた。

六

折角、人の爲めを思つてやるのに、相變らず馬かたの親かたまでにさう馬鹿呼ばはりされたのを鐵公は面白くなかつた。乃ち、自分の好きな女ができたに對しても、馬鹿呼ばはりはきまりが惡いことだから、少しは考へて見て呉れよと自分としては云つてやりたかつた。そしてその夜ねどこへ這入つてからも、あのおかみさんのことばかりが思ひ出された。

こないだも、雨が降つて寒い夜であつた――さしつかへの爲めに、十時ごろになつて出かけて行つて見ると、

『つべたいから燒いてあげます、わ』と云つて、わざ〳〵鍋のしたへ火を入れ直して、こちらの爲め

に殘して置いて呉れたところの大福を十ばかりあぶつて呉れた。そして『もう、來ないかと思つてました、わ。』

『なアに、來ると云やア來るだよ。』斯う答へて、あツたまつた餅をかたツぱしから喰ひながら、そのうまさをおかみさんその物であるとして味はつた。そしてそれがいよ〳〵かの女を好きになつた初めであつたらうが、それを馬かたどもはこちらがかの女にほれてるのだと云ふ。けれども、若しそれが惡いことだとすれば、あの亭主も何とか小ごとを云ひさうなものだのに、ゆふべだツて、ただ笑つてゐるばかりであつた。おかみさんはまたおかみさんで、こちらのあとをそとまでついて來て、何でも云ふことは聽くと云つた。

さうだ、あの時、あいつのくびツ玉にでも取ツついてやればよかつたのに――と、それをばかり殘念がりがなら、夜の明けるのを待つた。そして先づ仕事に取りかかつたのだが、ひるめしが濟んでちよツと手が明くのをも待ちかねた渠は、かねを渡すつもりで、成るべく自分のにこ〳〵がほを人に見られないやうにして餠屋へ行つたのである。

すると、店が締まつてゐたので、先づむツとしないではゐられなかつた。あれだけ人に賴んで置きながら、たツた一と晩のうちに、病人の亭主に何か云はれでもして、氣が變はつたのか？若しそれなら、承知しない！怒鳴り込んでやる、と。

けれども、締まつてる戸の一番おしまひのが一つ少し明いてるのに氣が付くと、そこをがらりと押し明けて、いい方の足からをどり込ませた、亭主にもかみさんにも、
『おれを馬鹿にするない』と云つてやるつもりでだ。が、這入つて見ると、亭主はゐないで、おかみさんがその代りにとこへ這入つてゐた。そして、にこ〳〵して、
『おそかつたの、ね』と云つた。
『………』こちらもこわい顏をつづけるどころではなかつた。『どうしただか？』亭主の熱でも移つたのではないかと、俄かに可哀さうに、また心配になつたのである。
『なアに、ね』と、然し、かの女はにこ付きをつづけながら、『ただ骨休めをしてゐたのよ。』
『ぢやア、いいだが――』こちらはこのいいと云ふことを私かに別な方へも持つて行つてゐたので、土間をあと戻りして、明けツ放しになつてる戸ぐちをぴツたり締めて來た。そしてなほとぼけながら
『なぜ店を締めてるだ、それだけ品物が賣れねいで損だんべい？』
『あなたを待つててあげたのぢやアないの？――ゆふべの約束をおぼえてて？』
『うん、おぼえてる！おぼえてる！』向ふも、もう、その氣なら、大丈夫、遠慮も何も入らないのであつた。あさうら草履をぬいで座敷へあがつた。そしてかの女が蒲團のうへへ起きて坐わつたその枕もとへあぐらをかき、渠は自分の腹がけの下を開らいて、かね入れを引き出した。この頃では、白木

綿の胴巻がができて、その中へかねを入れて、腹につけてゐた。
惜しいやうに自分のからだのぬくみが移つてるのを胴巻きのまま出して、わざとざら〳〵音をさせた。
『隨分持つてるのだ、ねい！』
『そりやア』と、にこ〳〵しながら、『おめへの亭主よりやかね持ちだア、な。』
『お札か銀貨にして置きやア、かさ張らないでいいぢやアないの？』
『かるいから、駄目だアな。おりやア重くねいと、かねを持つた氣がしねいだ。』
『それも、ね、あなたの考へだから仕かたがないけれど——早くわたしにも渡して頂戴よ。』
『まア、待てや。』ふと、勘定をして見る氣になつてゐた。『そうら、十錢だぞ。——二十錢だぞ』と、袋から十錢づつ出しては別々に置き並べ、それが一圓分となり、二圓分となり、三圓四圓分となり、かの女の要求する五圓に達してもやめなかつた。
投げ出した兩あし（もも引きをはいてる）のかかとで以つて自分の尻をあとずさりさせながら、なほ十圓、二十圓と並べて行つて、ありツたけがものをかの女の前へさらけ出した。枕もとは勿論のこと、寢どこのこちらがはには、その裾の方までも、疊のうへは銅貨で一杯になつた。そしてそれを見渡すと、自分の買ひ喰ひの爲めに拂ふ分や、女郎買ひにつき合はぬ爲めにその申しわけの寄附に取ら

れる分などがずん〳〵へつて行く故、思ふやうには早くふえて行かないけれども、例の二百五十圓に達した時のことが今から樂しまれたのである。馬を買ふ——馬かたになる——日に一圓六十錢取れる——ここのおかみさんを女房にする——。

『どうでい、いいにほひまでしてゐるべいが？』これは自分でも鼻のつまるものには、ほんのただ、たとへであると思へた。が、丁度そこへかぎ慣れないにほひがした。そして馬屋のくさいそれでもなく、燒き大福のからばしいそれでもない。多分、女のはだから出るにほひだらうと見て取ると、珍らしさも手傳つて、自分のこころのしんまでもそれがひびき渡つたのである。

が、この時、おかみさんは

『これをみんなわたしに吳れるの』と云つたので、

『どうして、どうして！』こちらは驚いて、ちよツとかの女に向つて目を見張つたが、直ぐかねをかたツぱしからかき集めて袋へ戾しながら、『五圓だツて、おめへに貸してやるんだぞ。』

『ぢやア、それでもいいから、早くお渡しよ。』

『まア、待てや。』また斯う答へて、ずん〳〵袋へ納めてゐたかねが、あとに十錢づつ五十竝び殘つたところで、渠は惜しみながら暫らくそれを見つめてゐたが、『ぢやア、これだけ渡して置くだ。おめへは都合つき次第返して吳れるだんべい、のう？』

『えい、えい、返してあげますとも。』

『………』證文を書けと云つたのだが、たとへ書かれたとしてもそれを讀める男ではなかつた。そしてかの女も別なことで濟ませてしまつた。

思はず時間がたつた。そして鐵公は主人の店から呼びに來られて、また馬屋の仕事に立ち返つたのだが、おひる前までとは全く心持ちが違つて、する仕事にまた一つの珍らしみ、大きな樂しみが加はつたと云ふ氣がして來た。

七

夜になるとまた二十錢貰つて渠はばくちの番をしたが、もう、そのことの爲めに氣をくばつてゐるやうなことはできなかつた。ひるまのことを思つて、自分の心は餅屋へばかり行つてゐた。

そして考へて見ると、二階のやつらこそ却つて馬鹿のやうに思はれた。人を馬鹿、馬鹿と呼びつけにしてゐながら、こちらが渠等の知らないうちに何をしたかと云ふことは渠等も氣が付かないでゐるのだ。

そりやア、人を『畜生！貴さまは半助だと思つてたら、それでもこツそり人竝みに惡いことをおぼえやがつた、な』などとは云つた。そして又『おほびらに女郎買ひのつき合ひをしやアがらねいで、

けちくせい女にこびり付きやァがつて』とも。然し、誰れも現ばを見たのではない。自分だツても、初めてこんないいことがまたと世にもあらうかと思はれたほどだ。そしてそれは自分だけにしか分つてないことではないか？

『あなたばかりがいい人よ』と、かの女は云つたツけが、その時の優しさと來たら、こちらもわれ人を忘れしめられてゐた。何だツて、あァ云ふことをもツと早く知らなかつたのだらうと思ふと、直ぐにもまた行つて見たいのである。

　かの女のやうすばかりが頻りに目の前にもちら付いて來るのに、二階では人の心も知らないで、相變らず平氣でピンとかグとか云ひ合つてる。それを早くやめて欲しかつた。斷わりなく出て行くこともできないのだから。

『貴さまは馬鹿だから、ひよツとすると、いやになつたら勝手に行つてしまうかも知れねいが、な、駄賃をやつた以上、そんなことをしちやア承知しねいぞ』と、親かたから云はれてるのだ。『さかりのついた犬のやうに急にいろけが附きやアがつて！』

『……』そのいろけと云ふこともほれてるの一件を云つてるのだらうと思はれたので、『そんなことアねいだが――』と、そらツとぼけて置いてやつたが――。

　いくら待つてゐても二階の勝負には切りがなかつた。こちらは餘り待ち遠しくなつたので、そして

一つにはまたばくちと云ふものはどんなことをするのか見たかつたので、自分からはしご段をのぼつて行つた。
すると、皆が一齊にけげんさうな顔つきをしてこちらをふり向いた。そして皆の言葉を引き受けたもののやうに、親かたが、
『なんでい』と云つた。
『……』こちらは然し惡い氣もなく、にこ〳〵して、『いい加減に、もう、やめんかい』と云つた。
皆があぐらをかいて蠟燭の火を取りまいてるはたへ突ツ立つてだ。
『なま意氣ぬかすな！』これは脊だかの龜公の言葉であつた。
『相變らずぬけてる、なア』と、よそを向いて權助の獨り言だ。
その他に、與吉もゐれば春公も熊公もゐる。起きてるものはすべてで七八名だが、それがまた口と共に性根の惡いやつらばかりと見えた。が、
『おめへも入れてやろけい』と、熊公は今夜に限り優しい聲であつた。
『おりやア駄目だア』と、こちらは笑ひながら答へた。
『仲間に這入りたけりやア入れてやらう』と、親かたも云つて呉れた。
『駄目だア。』またにやりとして、ちよツとくびをかしげたが、ただ面白さうなので、かた足に力を入

れて立つたまま、それを見てゐた。

敷いてある半紙は黑いすぢで六つに仕切られてあつて、その一と切り毎に一つづつ書いた字が一六、二五、三四と出てゐる。そして親かたがさいころを茶椀に伏せて、ころ／＼云はせながら、ぴたと振り納めてから、

『さア、來い』と云ふと、

『ピンだ。』龜公が先づ一のところへ十錢を置いた。

『おらアマツクロでい。』春公は六のところへ龜公のと同じだけの物を置いた。

『おれもだ。』

『サウ』とは、三つのことらしい。

『なアに、ハトでい。』これは二つのことであつた。

グとは五のことだが、四は矢ツ張りシと云つてる。そして六のところへは今一つ置かれた。いづれも十錢づつをだ。

ところが、親かたの明けたさいの目には一が出たので、龜公が皆のかねを浚ひ取つてしまつた。當れば、成るほど得をするものであつた。

鐵公は自分もその氣になつて來たので、先づ、疊のうへへ皆に後ろを向けて足を投げ出した。例の

胴卷きを解き初めたのである。
『鐵公、なんでい、へんてこな眞似をしやがるぞ』と、ひとりがまじめ腐つて云ふと、
『あは、は、はツ』と、皆が笑つた。
『……』染め物屋にゐたあひだに人から敎へられておぼえたことを云つてるのだらうと氣が付いた、そしてまた餅屋のおかみさんをからだぢうが振ふほど思ひ出さないでもなかつたけれども、思ひ切つて胴卷きから十錢だけを數へて出した。そしてあとをまたもとの通りに腹へ卷きつけてから、にこにこしながら皆の方へ向き直つた。
『やるつもりだ、な。』
『よし、おれも入れて吳れ。』
『なか／＼話せるやうになつた、わい、餅屋のかみさんが附いたせいか？』
『なアに、おりやアおめへらに勝つてやるだア。』
『なま意氣云ふねい、胴卷きまでみんなかツ浚つてやるぞ。』
『然し、負けたくやしまぎれに、馬鹿だから、店へつげ口でもしたら――？』
『そのときやアお互ひにお拂ひ箱だア、ね』と、親かたはこちらに向つて、入れてやる代りには、負けても裏切りしちやア承知しないぞ。尤も、こちらが裏切りすれば、ここを追ひ出されるものは馬か

たどもばかりでなく、こちらも一緒だらうと云ふことの念を押した。
『おれだツて、——まさか——』
『ぢやア、這入れ。』
『さア、ピンだぞ』と、鐵公は自分の握つてた銅貨——一錢づつ十箇——を一のところへ張つた。龜公の勝つた眞似をしてだ。
『まだふつてねいぢやアねいか』と、親かたは伏せた茶碗の下にさいを振りながら云つた、『氣のはえいやつだ。』
『こいつの早いのアこの張りかたばかりぢやアなからうぜ。』斯う云ひながらも、龜公は四に置いた。
『女郎買ひに行きやアきらはれるやつだらう。』熊公はつづいて三にした。
『……』こちらは人數をかね目で數へて七十錢がものは取れると考へながら、ただにやりと笑つてゐた。皆の云ふことが俄かに分つて來たやうな氣がして。
『鐵公と一緒になるのもいめイましいから、な』と考へ込んだものがひとり、その下の六に十錢銀貨を光らせた。
『……』こちらは却つてそれを喜こんでた。すると、然し、その他のものらのうちに、またひとり爲と云ふのがこちらと同じところへかけたので、當るにきまつてると信じてるのが當つた時に、邪魔

になるではないかと思つた。そして少し面白くない氣がした。

『さア、どうだ』と云つて、親かたがふたを明けると、果して一であつた。そしてこちらは爲公とふたりで皆のかねを山分けにした。望んだものの半分しか這入らなかつたけれども、もと手は十錢だから安いもので――こんなうまい商買はなかつた。

乘り氣になつて、直ぐあとをつづけた。そしてまた一へかけたが、今度は當らなかつた。

『さう、いつも柳の下にどじようはゐるもんけい？』

『ぢやア、ハトだア』と云つて、次ぎには二にした。が、これもはづれてしまつた。そして四度目には、三のしたなる四に張つて見たが、これもまた取られた。

これでまたもと／＼になつてしまつたので、今一度もとの十錢からやり直して見ようと考へて、人並みに腕まくりをして見せてると、寢てゐた馬かたのひとりが便所にでも行つたのか立ち戻つて來た時、

『誰れか見まわりに來るぞ』と注意した。

『ふツ』と、親かたは蠟燭の火を吹き消した。そして部屋ぢうさいの目の六つになつてひツそりした。

『また、あすの晩だ』と云つたものがあつて、皆が寢どこへもぐり込んだらしかつた。

もう、夜なかの一時頃だらうと思はれたが、鐵公は直ぐ寢るつもりにはなれなかつた。取りもどさ

れた分を初めから自分の物であつたかのやうに惜しい氣もしながら、なほそれにも増して氣を浮かされたのは、人の云ふやうに自分にこびり付いて來たおかみさんの爲めであつた。
今一度かの女の顏を見たくなつた。そして時間にかまはず、こツそりと相ひ室の仲間をぬけて出て、横がこひの高い柵を自分の足よりも腕の方にずツと力を入れてよぢ越えたのである。

八

その翌日も、おひる過ぎに一度餅屋へ出かけて行つたが、ゆふがたに近づくと、夜になるのを待ちかねて、鐵公は自分から先きになつて皆に勝負を初めることをいそがせた。
『………』女もいいが、かねをもまた儲けたかつたのである。すると、親かたが
『こん畜生』と、親しみのある口ぶりを以つて讃めて呉れた、『女はできたし、ばくちは打つやうになつたし、おめへもなかなか話せて來た、なア。』
『この上は、また少し女郎買ひにもつき合へよ』と、爲公が云つた。
『………』こちらはそれにはかかり合はないで、親かたの方へばかり向つて、『おれだツて――何も――』嬉しさにそれ以上の自慢までがまじめになり、『ちんばのほかに――人並みやア――はづれて――ゐねいだ。』

『さう、さ、そこまで修業がつめて來たら、あとはただ馬が引けねいだけよ。』

『それだツて、今に見てゐろよ。自分で馬を買つて自分で馬かたになるだ。』斯う答へたには、ばくちに毎晩勝つてゐれば、その時節がもツと早く來るだらうと云ふ考へも這入つてゐた。

『ぢやア、それでいいから、畜生』と、龜公ははたから責め立てた、『あの餠屋のことを白狀して見ろ——日に二度も夜ばひ、ひるばひに行きやアがつて！』

『へ、へ、へツ！』笑つて受けては見たが、鐵公自身にもこれだけでは何となく物足りなかつた。皆は、馬鹿々々しくも、折角儲けたかねを使つてまで女郎買ひなどをしてゐるのに、自分は一文も使はないで、つまり、一人のきまつた女ができたわけなのを鼻が高かつた。そしてそれを皆に吹聽して意張つてやる氣になつた。

　すると、その自慢話が進むに從つて、皆が段々根掘り葉掘りして來るので、とう／＼向ふの女の言葉のやうすをまでも——二階の疊のうへで——して見せた。

　が、勝負を初める用意の爲めに立てた蠟燭の火を取り圍んで、皆が吹き出したので、こちらはそれツ切りにしてしまつた。

『面白いから、もツとやつて見ろ、畜生』と、云つたものがあるけれども、俄かに興ざめたので、『もう、やめだ』と答へた。

『あいつ、からだの弱い亭主だけぢやア物足りねいんだぜ。』
『それにしたツて、鐵公のやうな馬鹿なんかいろにしねいでもよからう。』
『なアに』と、眞がほになつて『おれを馬鹿にやアしねいだ。一番好きだと云つただ。』
『わツはツはツ！』また皆が笑つた。
『馬鹿の方があとでめんどうがなからう、な。』
『おりやア鐵公より巖丈なからだを持つてるから』と、熊公の言葉だ、『もツと好かれるだらう、な。』
『ぢやア、おらも行つてやろけい？』これは權であつた。
『行つたツて』と、かまはない返事をしようとしたが、實は行かれては困るので、わざとそらとぼけた落ち付きを見せて、『おめへらアかねを貸してやれねいだ。』
『なま意氣ぬかすねい、畜生！胴卷きごと卷き上げてしまふぞ』と、親かたも笑ひながら、『いろ女にかねを貸してやるのアやつたも同然だ。そんなことをするくれゐなら、いツそのこと、女郎買ひに行つた方がましだい。』
『然し、それは返して呉れるだ。』
『そこが矢ツ張り馬鹿だ、なア』と、春公が口を出した。
『五圓で二度も三度もは安いが、おりやア』と、龜公だ、『しまひには筒持たせだぞと云つてやつたら、

あすこの亭主までがおこりやアがつたんだ。』
『うん、そのつつ持たせとアなんだんべい？』こちらはこないだからの疑ひにまたぶつかつたのである。そして女がその亭主と共にあとからひどい無心を云ひに來ることだと聽いて見ると、あの優しさでしさうもないことだから、『そんなことアねいだ』と、かの女の爲めに云ひわけをしてやつた。そして、『あの亭主だツて、おれが馬かたになりやア、かひばの世話をして呉れる約束だから、なア。』
『わツはツ！馬鹿を相ひ手にしてゐちやア切りがねいや。早くやろ、やろ』と云つたものがあるので、こちらも皆と共にその氣になつた。

　前以つて小出しにして置いた三十錢は、また一から初めて、二、三と順番にかけて行つて見たのにすべてしくじつてしまつた。で、胴卷きを解いて、二十錢を出し、そのあとをまたしツかり腹にゆはへ付けて、今度こそはこれだけのもと手でうまくやつてやらうときめた。

　そして四にかけたら、勝つたことは勝つたけれども、五人も一緒であつたので、儲けを分けると、何ほどにもならなかつた。二三度躍起になつて見たが、すツかり取られてしまつた。そしてまた胴卷きを解いた時、思ひ切つて一圓分を用意して、
『十錢づつぢやア詰らねいから、一度に五十錢がけにしよう』と云ひ出した。これで取り返すつもりで。

『えらいぞ、鐵公』と讃めたものもあつて、皆がそれにしたところ、二度にまたすツかり負けてしまつた。

『おればかり負かしやアがるだ！』渠はむツとしないではゐられなかつた。そしてみんなで一圓五十錢の損が五圓の貸しよりはずツと大きく思はれたので、『もう、やめる！』

『さうおこるねい、畜生！』

『けれど、おこらねいでゐられるだか？』

『勝負は時の運だア、な、辛抱してやつてるうちにやアまた勝つこともあらア。』

『おりやアいやだ！』

『いやなら、よせ！』

『よすから、ぢやア』と、怒りを渠は自分の頰にまでほてらせて、『みんな返せ！』

『馬鹿云ふな、鐵公！』親かたもこちらを怒鳴り付けた。『負けておこるなら、初めからしねい方がいいんだ！下へ行つて番でもしてゐろ、また二十錢やらア。』

『負けたのも返して呉れるだら——。』

『そんなことができるもんけい？』

『……』親かたまでがさうなら、こちらにも覺悟があつた。これから直ぐおもてへ行つて、あのい

やなやつだけれども、女中の婆々アを叩き起し、旦那に云ツつけて、旦那に來て貰ひ、無理にでも取り返して貰はうと考へたのである。そしてぷり〳〵しながら、默つて二階のはしご段を下りかけると、

『念の爲めに云つてやるが、な』と、親かたはこちらをにらみ付けながら、『また餅屋へでも小便しがてら泣き付きに行くんならいいが、腹立ちまぎれにうちの店のものに話しでもしやアがりやア承知しねいぞ！貴さまのいきの根をとめて、二度と再びあのおかみさんにやア會へねいやうにしてやる！』

『………』こちらは、いきの根をとめると云ふことは先づさし置いても、それぢやア、まア、待つて呉れいと云ひたかつた。いきをしてゐるよりも面白くなつてるのは、今やかの女とのことではないか！それに會ふことを皆に邪魔されては、何よりも困るのであつた。で、今度は顔をやわらげてそんなことは云ふなと賴むやうにして皆の方を見ながら、はしごを下りかねてると、ひとりが

『畜生、顔でも洗つて來やアがれ！』

『なアに、初めツから小便づらだア』と、また別なのが、『勝負に負けてくやしけりやア、もツと戰つて勝つて見ろ！』

『………』そんなうまいことを云つて、もツと負かすつもりだらうと受け取れたので、おぞ毛までが立つた。そして默つて下へ來たのだが、負けたくやしさよりもおかみさんに會ひたい方が勝つてゐたので、直ぐまた柵を乘り越えた。

『今夜も來るから、戸を立て寄せただけにして置けよ』と云つてあつたのだ。が、締まつてるので、これにも腹が立つて、あたりかまはず、どん／＼どんと叩いて明けさせた。そして這入るが早いか、勝負に負けたことを不平がると、おかみさんが

『わたしにおこつたツて仕かたがないぢやありませんか？』

『そりやア、負けたものア仕かたがねいだが、その代り、おめへに貸したものを早く返して呉れ。』これをも取り返さなければ、氣がすまなくなつてゐた。

『返すことは返しますが、ね――今夜は駄目よ。』からだにさし支へができたから、二三日あとでなければと云ふのであつた。

『………』よんどころないことだが、何だか、かの女の言葉がいろの賣り買ひをでもしてゐるやうに聽えたので、『それとこれとは別なことだぞ』と云つて別れた。そして先刻ばくちにすつてしまつた位なら、あれを以つて皆のやうに吉原へでも行く方がましであつたと云ふむら氣を初めて起して見た。尤も、それだけのかねが、もう手にないからこそそんなことも思へ、手に在つたら、胴卷きにしツかり入れて置く方がよかつたのだが――。

『また勝負しよう』と皆が勸めるけれども、それは皆がこちらのかねを卷き上げようとするのであると思ひ込んでしまつたので、渠は腹をしツかり締めて二度とはつき合はなかつた。そして一と晩の駄賃二十錢を無理に三十錢に値上げして、また皆の番をしてやることにした。少しでも餘分に儲かつて行くのが嬉しかつたからである。

が、餅屋のおかみさんに對しては三日を待ち切れなかつた。それが爲めに、別に拾圓を貸してやらねばならなかつた。すると、今度は向ふが三日もたたないうちにまた二十圓を貸せと云ひ出した。

『しよ手のもまだ返さねいぢやアねいか』と、こちらはおこつてしまつた。

『まさか、お前さんはかね貸しをしてゐるんぢやアあるまいし!』

『なんだア、畜生!ぢやア、おめへはさう高い女郎ぢやアあるめい?』斯うなると、もう、こちらも破れかぶれであつた。夜なかではあつたが、大きな聲で怒鳴つて、かの女にかねを今が今耳を揃へて返せと迫つた。かの女はまたこちらをにらみ返して、かねはそのつど返したも同然だと答へた。そして兩方のつかみ合ひになると、一方が

『早く來て下さい』と叫んだ。すると、ゐないとこちらの思つてた亭主が緣がはの戸を明けて飛び込んで來た。そして明けツ放しになつた戸ぐちのそとには、人力車の横ツ腹の黑ぬりがうちからの電氣に映つて光つてた。

『………』して見ると、これまでにも亭主がゐないと云つてたのはうそで、うらに隱れてゐたのだらう。殊に、最初、夜なかに叩き起した時には車がおもて土間にありながら、亭主のかげは見えなかつたが、うらから出て、そとに立ち往生してゐたのだらう。それよりは、尤も、辻待ちのやうに車の蹴込みにかけてた方がらくであつたらうが――。こんなことはすべて、びツくりしたその場に、かの女に對して出た俄かの恨み悲しみとまじり合つて浮んだ考へで――そのあひだは、ただあつけに取られて、足を組んだまま、口をあんぐり明けてゐたのである。

『失せアがれ、馬鹿野郎！』亭主はすごい顏をして、いきなり、こちらの脇の下を蹴つた。

『いてい！』こちらは横に倒れた。そして聲をしぼつて泣き出したが、それは痛かつた爲めよりも、胸に込み上げて來る怨みの悲しみであつた。女をこれほど可愛がつてやつてたのにと云ふ。そしてそれが爲めに、その亭主に手向ひするだけの心の力も出なかつたのだ。

『………』かの女も立ちあがつて、この時、亭主の後ろへ行つてゐたのが、こちらを見おろしながら、その亭主に『ひどいことはしないでもいいから、歸つて貰ひさへすりやア』と云つた。

『早く歸りやアがれ！』

『………』こちらはからだを起しながら、なほじツとかの女を見つめたが、かの女は何も云はないで、横を向いた。それが一層つれなく思はれたのである。そして殺してやるから、さう思へと心では叫ん

だ。無論、女にではなく、男の身にだ。亭主さへほんたうにゐなければ、さう水くさくもなく、そのかみさんとかねの貸し借りなどもしないで一緒になれるのであるから。

すご〱歸つて來てから、鐵公は二階のものらを呼び起した。そしてこれ〱だから、直ぐ行つてあの亭主を皆でやッ付けて呉れいと、涙をこぼしながら頼んだ。と云ふのは、自分で手をおろすと、自分がまた牢へ入れられるかも知れないので、それは――間違ひででも一度這入つたことがあるから――いやなことであつた。

『それ、見ろ！云はねいこッちやアねいんだ』と、龜公が先づ口を出した。

『吉原で高い散財をしたとおもやア――。』

『なアに、何度行つたか知れねいが、もう、いい加減取り返したも同樣だんべい。』

『いい兒だから、もう、泣くなよ。その代り、あす、おれが女郎買ひにつれてッてやらア。』

『……』そんなまぜ返しばかり云つて、皆がこちらの頼みを少しも相ひ手にして呉れなかつたので、鐵公はただがッかりして自分も寢どこへもぐり込んだ。そして一層あのおかみさんを肌に近く思ひ浮べて、からだぢうの物足りなさを辛抱しながら、獨りで自分の悔しさと情けなさとに涙をすすり上げてゐた。

いつのまにか夜は明けたが、渠は自分で起る氣にならなかつた。からだの具合ひが惡いからと云つ

て、ここへ來てから初めてだが仕事を休んだのである。すると、もう、皆が馬を引いて出て行つたと思はれる頃を一時間も過ぎてから、自分の枕もとへうちの旦那がやつて來たので、これはてツきり叱られるのだらうと思つた。
『お前も隨分馬鹿だ、なア』とは云つたが、然し、存外なことであつた。餅屋のかみさんの亭主が來て、こちらに會ひたいと云ふのださうだ。が、旦那は――もう、皆から樣子を聞いてゐたので――わざと會はせるやうには取り計らはないで、その用向きを云はせると、つまり手切れ金を出せとのこと。
『……』は、はア、これが矢ツ張り龜公の云ふつつ持たせだ、な、と初めて思へて來た。
『お前はどうするつもりだい？』
『どうするも、かうするも』と、餘りのねたましさに口をもぐ〳〵させてゐたが、『まだ十五圓、二度に貸してあるだ。』
『今更らそんなことを云つたツて――お前も惡いことをしてあるんぢやアないか？』
『惡いこととア云はなかつただ。』
『お前は氣が付かないんだらうが、な、若しこれがおもて沙汰になりでもすりやア、お前も向ふのかみさんも牢へ這入らなけりやアならないんだぞ。』
『えツ！』こちらはぎよツとしないではゐられなかつた。『人も殺さねいだにけい？』

『もちろん、さ。』
『……』よく聽いて見ると、別に姦通と云ふ罪を犯してゐるのであつた。法律に問はれたなら、どうしても自分も引かれ者にならなければならぬ。思はず寢どこの上に坐わり直つて、『ぢやア旦那、どうしたらよかんべい？』
『さうだ、な。おれの考へぢやア、牢へ行くのはお前もいやだらうし、おれもうちの店からそんな者が出たと歌はれるのも困るし――まア、もう少しかねをやつてぷッつり關係を斷つのだ。』
『この上にけい？』かねのことになると、ばくちにも取られてゐて、もう、懲りごりしたところだから、腹のあたりまでもびく付いたのをおぼえた。そしてそのびく付いたところから、また、自分の女に對する慾も動いて來て、ぷッつり關係を斷つと云ふこともつらかつた。
『然し、そんなことを云つてる場合ぢやアなからうぜ』と、旦那は少しも思ひやりがないやうに云つた。
『……』それをもこちらは怨めしく思ひながら、『ぢやア、貸した分はすッかりやるから、向ふの亭主に手を切つて貰ひていだ。』さうしたら、おかみさんだけは自分の方へ來ると考へられた。
『そんなことア駄目だぞ、けち臭い！』かみさんだッて、またかねが目あてであつただけだらうから、初めから亭主と相談して置いた上のことで――そこに向ふでも弱みがあるから、ほんたうには訴へる

やうなことはすまいが――とても、鐵公のやうな男といつまでもくツ付いてゐるつもりではなからう
と云ふのであつた。
『……』こちらは、然し、そこに旦那とは考へが違つてゐた。かの女の優しい言葉や樣子を思ひ出して見ると、決してただかねの爲めにいろを賣つてたとばかりは考へられないのである。つつ持たせと云へば、きツと亭主ばかりのことだらうから、そのつつを旦那から皆に賴んで殺させるやうにして吳れいと云つて見たのだが、旦那はおこつて承知しなかつた。
『それが分らないんなら、それまでのことだから。お前の勝手にさせる代り、今直ぐにうちを出て貰ひたい』と云つた。そして少し聲をやわらげてだが、斯う云ひ添へた。『お前も亦そんな女にだまされてゐないでも、もツとかねさへできればまだ〳〵いいのが持てるぢやアないか？』
『へ、へ、へツ』と、それは嬉しいので笑つて見せたが、兎に角、よんどころないので、それぢやア以後はぷツつり行かないと約束した上に、惜しいけれども、また二十圓を今來て待つてると云ふ亭主に渡してやることにした。

一〇

けれども、そのあとでの殘念と、をんな戀しさとがごツちやになつて、胸のなかが煮えくり返つた。

そしてじッとしてはゐられなかつた。

　まだ使はないうちにそのかねを取り返し、その上におかみさんを自分の物にしてしまうつもりで、旦那や店のものには隠れて餅屋へ驅けつけて行つた。そして

「どろ棒め、おれのかねを返せ』と怒鳴り込んだ。不斷なら、その口に直ぐ親しみを持つところの大福のことなどは忘れてしまつてだ。そしてそこにゐた亭主とおかみさんとから力を合はせてのさんざんな目を見せられて、這ふ〱のてゝで逃げ出した。『まさか』と思つてたおかみさんも、全く別人のやうになつてゐた。

　思ひも寄らぬほど力のあつた亭主になぐり倒されたこちらに向つて、かの女もつばでも吐きかけるやうにして、

『おほ馬鹿の、おほ喰ひめ！誰れがお前のやうな者にほれるもンか』と云つた。

『……』歸つて來てから、まだ直ぐそのままになつてる寢どこへ這入つて、鐵公は誰れも見てゐないのを仕合はせにして、せき來る聲をしぼり擧げて泣いたのである。矢ツ張り、旦那の云ふ通り、だまされてゐたのかと思ふと、悔しさを通り越して、生まれて初めての耻ぢと云ふことを知つた。たとへ仲間のものにだツても、二度と再びこんなことが自慢さうに云へるかと。

『かねさへできれば』と、旦那も云つた。さうだ、もツと奮發してから、あんな女よりもいいのを手

に入れるべきであつた。

思ひ出したのは、かの女の爲めに暫らく中絶してゐた力わざのことだ。渠も亦別人のやうになつてその方へ熱心になつて行つた。米俵を擧げるやうになれば、また、かねを儲けることも早いのだから。皆に何と冷かされても、もう、口かずをきかなかつた。にや／＼笑ひもして見せなかつた。そしてひまを見ては私かに穀ぐらへ這入つて、いろ／＼自分としての工夫をこらした。

風の少しでもある日は、櫻の白い花びらがいくつもひら／＼と飛んで來る頃になつてゐた。その花びらのやうに、渠は自分の心の目さきに、いつも、誰れとはきまらないがやがては自分の手に這入るべき女のおもかげを浮べてゐたのだが、それが或時、近ごろ珍らしくも、餅屋のおかみさんに見えた。そしてまた、

『胴卷きが邪魔になるぢやアないの』と云つた。

『……………』さうだ、あア云はれたことを忘れてゐたのだ。そして一人前の男になれなければ、腹にいくらかねがあつても駄目だと云ふことに今更らの如く思ひ當つたのである。胴卷きを取つてやつて見ようと決心した。

で、それを地べたへ取りはづしてから、帶を締め直すと、自分のからだがすツかり輕くなつたのをおぼえると同時に、今までにもあつたのを自分が押さへ付けてゐた力が腹から兩方のうでにもみなぎ

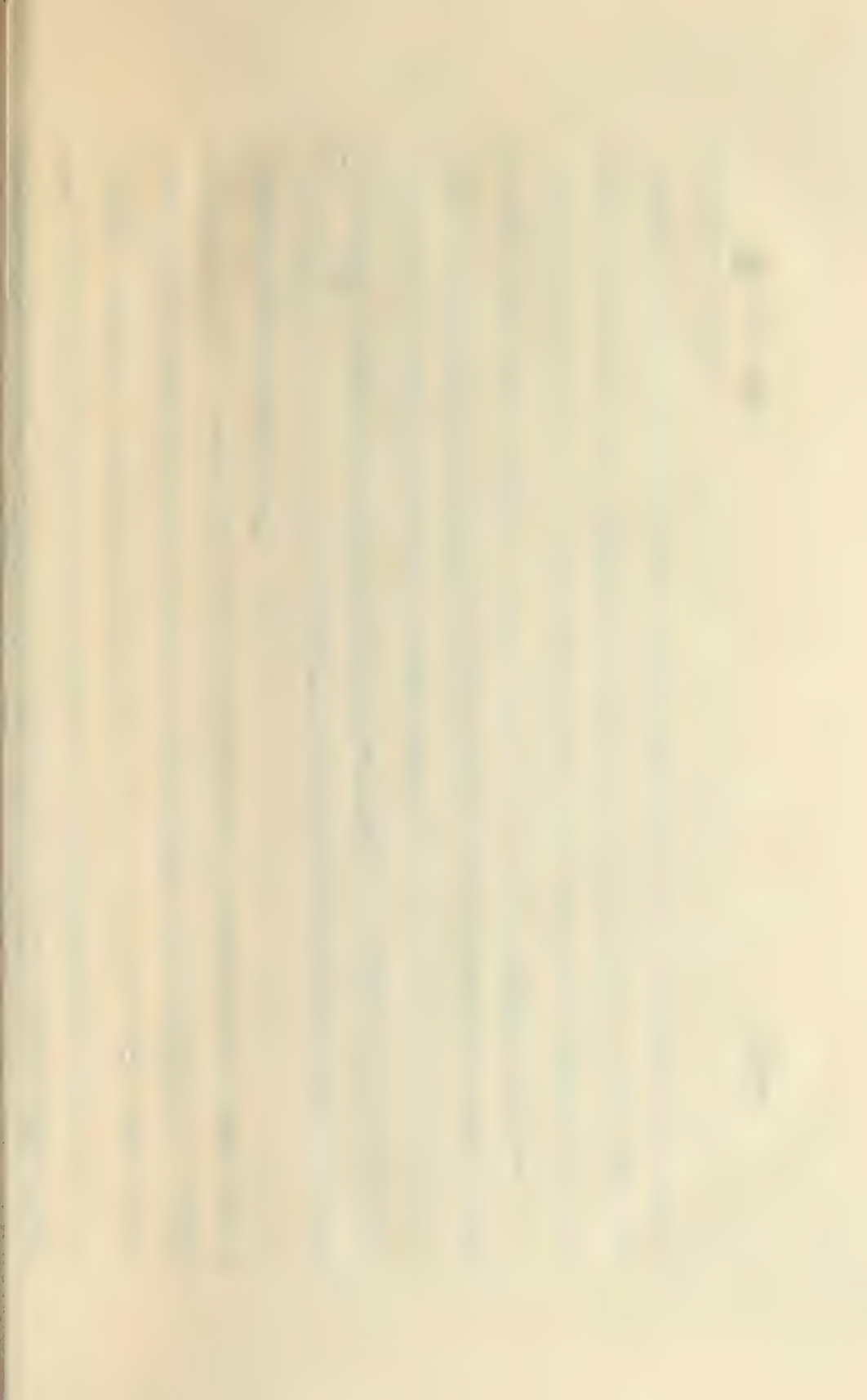
つて來たやうだ。いかにもいい氣持ちになつて、俵に手をかけると、割り合ひにらくに動くではないか？

『これだ、これだ』と、われを忘れて叫んだのである。そしていよ〱、うんと力んで擧げて見ると、俵はうまく自分の左りの肩に擧がつた。すると、その場に、餅屋のおかみさんが藝者のやうに意氣な衣物の褄を取つて、向ふから自分の方へ飛んで來る姿が見えた。が、それはほんの、ただ一秒か、またたくひまばかりのことであつた。

自分の右手には、米だわらが自分の立つた脊より二倍ほど高く積めてゐたが、その方へよろけて行つて、その裾へ自分の肩の俵と共に自分のからだをぶちつけた。

すると、積めてるたわらが自分の上にくづれ落ちて來て、

『あツ』と思つた時には、もう、自分の一生にあつたことが一ときに思ひ出せてしまつた。

――（大正八年八月）――

狐の皮

明治貳十八年のことだが、與吉は樫の棒を小わきにかかへて横濱居留地の巡査をしてゐるのがいやになつた。そしてまた若氣の氣まぐれに船乘りを志願した。

渠が事務員の一人として乘り込んだのは千島に向ふ船だが、横濱を出發すると直ぐ、暴風雨に出會つた。どんなに荒れてゐるのだらうと思つて、渠は自分の船室の戸を明けて見た。すると、いきなり、船のサイドを越えて來たおほ浪をかぶつて、それに淩らはれて行つた。もう、いのちは無いものと覺悟して、國に殘つてる獨りぼツちの母のことが思ひ出された。巡査と云ひ、船乘りと云ひ、自分の誇りにもならぬことをしてゐるので、友人には勿論、たツた獨りの親にもわざと音信不通にしてゐたのだ。が、

『最後のたよりもしないでこれツ切りになるのか』と、自分の目の前には突然の絶望がぴかりと光つたやうに見えた。それだけ自分のからだ全體に救ひを求める努力をしてゐたかして、何か知らん堅い物が手にさわつたのをしほに、それにしがみ付いた。

それはみよしの方に据ゑ付けてある　四角な水漕であつた。それにしツかりつかまつてゐて浪を引かせてから、再び室に逃げ込んだ。ぬれ鼠のやうになつてゐた。

『ざまア見い、馬鹿』と、同室の市島がにく〳〵しさうに云つた。『こんな時に戸を明けるものがあるかい？』

『おぬしが死ぬだけならかまんけれど』と、今一人の土屋も、はたから、わしらの寢どこまで浪が這入つて、づぶぬれになるぢやないか？』

『……』與吉もまた、すまなかつたとは、この時、まだ云ふ氣になつてゐなかつた。自分のいのちがやツと助かつたことをばかり考へてゐた、恐らく、人から見れば、眞ツ青な顏つきをして、しづくの垂れる服のまゝ、靴のまゝでつツ立つてゐて。胸の動悸がなか〳〵納まらなかつた。そして船乘りなどになつたことが初手から後悔された。舊式な船であつたからこそ却つて助かつたのだ。サイドが新式船に於けるやうな鐵の欄干にはなつてゐないで、人の腰までも達する板張りである。這入つたしほ水はそれに取り圍まれて、盛り上げられた爲めに、幸ひにも周圍の海から別になつた。その中を自分が泳いでゐたのであつたから、船とは離れないで助かることもできたのだらう。

兎に角、この暴風雨の爲めに船も前進をつづけることができず、房州の館山に避難して三日間も空しくすごした。それから北海道の函館に渡り、また根室へ行つた。船はそこと千島とのあひだの便船

をつとめるのであつた。

『六月になつても、こんなにうす寒い。』渠は他の同室者と共に甲板から內地のとは違つた山や海をながめてゐながら、斯う獨り言のやうに云つた。そして自分が親しむものもなく日本國の北のはてへ來てゐることを身にしみて感じたのである。それと同時に、かかる海上になほ島が澤山あると云ふから、どんな島だらう、そしてそんなところに住んでるのはどんな人間だらうと云ふ、餘ほど寂しい好奇心にそゝられてゐた。

『國のことが思ひ出される、なア』と、市島はそのそばにゐるこちらのことは相手にしないで、今ひとりの土屋の方へ向いた。

『おぬしもか？』

『………』與吉には、その簡單な應對が如何にも心ぼそさうに聽えた。そして自分も私かにそれに釣り込まれないではゐられなかつた。

みよしの先きから、また細い鐵の棒のとがつたのが二間ばかりも突き出てゐる帆前船や、別な汽船やがたツた四五隻ばかり、椴やえぞ松に明けた朝の山に對して碇泊してゐる根室の港を、自分らの船は今やいかりを拔かうとしてゐる。その甲板に立つて、自分ら三人は一緒に――然し、別々に――どことはなく海の上をながめてゐた。海も空も同じやうにどんよりとして、胸にこたへるものはただ

ごと〱動き出した機關の響きばかりであつた。

かかる時、人間として思ひには恐らく變はりがなからうに、他の二人は兎角こちらを疎んじてゐるのだ。渠等は國なまりが同じところから名乘り合つて、同鄕人であるばかりでなく、而も遠縁ながら親類に當るのが分つたのを嬉しがつて、いづれもこちらに比べてはいい年をしてゐるにも拘らず、同じ仕事をして、同じ室に寢起きするこちらだけを何となくのけ者にしてゐる。

そりやア、ゆふべだツても、房州館山の三日間に於ける如く女郎買ひにつき合ひをさせられたことはさせられたけれども、猪口の取りやりにも——或は、こちらをまだ若いと思つて馬鹿にしてゐるのかも知れないが——何となくよそ〱しかつた。こちらがその爲め私かにいだいた恨めしさは、けさのこの心細さに會つて、一しほ印象を深くしたのである。そしてそのままで港を離れた。

根室から海上三里のところに、トマリと云ふところがある。千島列島中の一番近い港で、クナジリ島の南端だ。そこへ至るあひだに、ガスと云つて、北海名物だと云ふ濃霧に——千島航海のそも〱に於いて——出くわした。殆ど陸上のやみ夜のやうに前後が分らなくなつたので、みよしに据ゑ付けてある小さい大砲にわらを籠めて、どん〱と空砲を打ちつづけて進んだと云ふのは、その響きが山などにこだまして、陸の近いか遠いかが危險なく分る爲めだ。船はたツた二百五十噸の木船だが、もとはケプロンと云つた軍艦で、維新前に外國から買ひ取つたのであつた。勝海舟などの乘つた記念が

殘つてるところの船だ。

トマリのつゞきにチノミノチと云ふところがあつた。昆布の澤山取れるところかして、その採集會社もあつて、昆布が海岸一面に帶を延べたやうに乾してあるが、まだ日清戰爭中のことゝて便船が不自由の爲め、そのまゝになつてゐた。この船の歸航には必らず根室まで運んで行つてやるべきものであつた。そこの山々には、山櫻の花とべに色のつゝじとが一緒に咲いたり、そだてば人間の脊より高くなると云ふおほぶきの芽や、わらびの芽が澤山出たりしてゐた。さう云ふ珍らしい物を見て、心の寂しさは多少まぎれてゐた。

そこから七里、シコタン島に渡ると、また違つたものが見られた。周圍たツた一里ばかりのこの島には、もとはロシヤから來たのだと云ふオロコ人が住んでゐた。この土人はさきに北海道の東南部へまで侵略して來たものだが、北海探檢の奇傑近藤重藏に追はれてこの島へとぢ籠つてしまつたのだと云ふ。今は和人の醫者も敎師もあつて、村長は長い口ひげを胸の下までも垂れた八十歲以上の鹿兒島人であつた。土人の酋長はまたアレキサンドルと云つて、その職業は船大工であつた。和風の家は建つてゐるが、冬になると、部落の後ろ手なる山の裾に穴居するので、澤山の穴が明けてある。ゴミと云ふ一種のかもめを常食とし、その羽根は奇麗にこれをつなぎ合はせて女のうは着になる。つまり、羽ごろもになるのである。

イヨンと云ふ土人の青年は日本語もでき、ロシア語もできて、水さきをつとめてゐた。アレキサンドルはまた酋長らしいことを云つた。

『戰爭はすべてとん〳〵拍子にうまく勝利つづきだ』と聽いて、

『それなら安心ですが、若し淸國のやつらに負けてるやうなら、わたくしも部下を引きつれて出征してもよしと考へてをりました。』

『……』與吉はその應對を聽いてると、たツた五十名足らずの部下が滑稽のやうでもあつたが、そのまじめなのには感心しないではゐられなかつた。

そこの產物としては、トド、オツトセ、アザラシ、鮭、たら、オヒヨウ鰈、黑ぎつね、熊、土人の彫刻した盆などがあり、殊に、三毛ぎつねの皮は特產だ。島へ來たものへ勝手に賣り渡しはできないことになつてゐて、一年ぢうの收穫を取りまとめに、每年四月、道廳の官吏がやつて來て、それを根室へ持つて行つて處分し、そのあがり高を以つて部落一切の費用を辨じさせるのである。が、ことしはその官吏が後れて、やツとこの最初の便船でやつて來た。

次ぎに向つたのはエトロフへだが、またひどい濃霧に出會つた。そして船は例の空砲を打ちながら、同じところを行き來してゐた。而も四日四晩もだ。その爲めに飮料水の用意がなくなつて來たし、石炭倉は殆どからツぽになつて、ふなぞこでがらんごろんと空腹のやうな力のない音を立てる。

乘客が四十名ばかりゐたが、その喰ふ白米も玄米もたツた一俵づつしかないと云ふところまで行つた。

船員は頻りにあせりながら、さぐりを入れて船の歩みをつづけてゐたのだが、とう〳〵どこかの暗礁に乘り上げた。そして目の前には一と坪ほどの山の鼻が見えた。

『ウルツプに來たのだらう』と、或者は云つたが、他の者は

『いや、チノミノチの沖だ』とも云つた。

船長は思ひ切つてゴスタンと云つて、逆轉を命じた。すると、船は幸ひにも、木船だから却つて破損もなく、あと戻りして再び海に浮んだ。そしてシコタンへやツと引き返すことができた。

そこで一と晩の避難をしてから、再びエトロフのシャナへと向つたのである。そこには鑵詰め製造所が二つもあつて、その一つは土人高田と云ふ者の所有だが、他の一つは三井から手を出してゐるのだ。おでんと云ふガの字、乃ち、女郎あがりの女がゐて、なか〳〵はばを利かしてゐた。何ごとにもそれが出ないと事が納まらないとかで、人もかの女をエトロフの女王の名を以つて呼び、かの女自身も亦その氣取りになつてゐるのであつた。でぶ〳〵と肥えて、如何にも巖丈さうな四十前後の女だ。

シャナは千島全部に對する都會で、郡役所もあり、警察もあり、女郎屋もあつた。かねてそのことは皆の話に聽いてたので、與吉も待ちかねてたやうにして、他の船員と共に一、夜を明かしに行つた

のである。が、あいにく、その家には女が足りなかつた。土人の女なら却つて面白いのだがと私かに自分は思つたが、そんなものもなかつた、そして自分のあひ方はちよツと一度來ただけで、二度とは顏を見せなかつた。不愉快を押し隱して、皆と一緒に引き上げる時、その女が頻りに土屋にからかはれながら、その世話をしてゐるのを見ると、渠のところにばかり寢とほしてゐたのであるらしいことがこちらに察せられた。

『馬鹿々々しい！もう、二度と再び一緒に女郎買ひなどに行くもんか』と、與吉の心では叫んでゐた。

この不愉快も、然し、自分らが今度はいよ〱この航海の最北端に當るウルップ島に向ふと云ふことから引き起されるまた新らしい好奇心のうちに消えて行つた。と云ふのは、聽いてるところでは、ウルップは二三年前まで全くの無人島であつた。そこへ前々年、鱒や鱈の漁場ができて、留守居の爲めに五人の男が越年したところ、五人とも凍え死んでしまつた。で、前年はまた一倍の用意を盡して三人を殘してあるのであつた。その安否――と云つても大抵のことではない、人間が死んだか生きてるかの重大事件――を確かめに行くのが、この航海では一つの任務になつてゐた。

ところが、シヤナで與吉が不愉快な顏をして歸つたことが二人組にも不快を與へたかして。――そんな勝手氣ままな法はあるべきでないのだが――それが海の上でも渠等にはつづいてたのだらうと思

はれる。船室に於ける自分らの寢どこは三段になつてて、與吉は一番とし下だから遠慮して、一番したの段を占領することになつてゐた。で、自分は自分の段に何の遠慮もなく腰をかけて、隅のはしらにもたれながらうと〳〵して、機關の響きを母の兒もり唄か何ぞのやうに氣持ちよく感じてゐた。すると、

『おい、西尾！西尾』と呼ぶ市島の聲がするのであつた。

『……』こちらは面白くない男の聲よりも機關の兒もり唄の方がじッと親しみがあつてよかつた。

『おい、こら、西尾！』

『……』

『シヤナで女にふられて、寢足りないのぢや、な。』

『……』多少は事實に相違ないと思つてにが笑ひをしながら、ふと、目を明けると、向ふの靴のうらがこちらの鼻さきをなでまわしてゐるではないか？むツとしたので、直ぐその足を取つてこちらの小またにかい込んでしまつた。そして、

『何をする』と云つて、足を取られながら抵抗して來るその手の親ゆびをぐツと逆にねぢて見せた。

『さア、折れてもいいか？』

『いたい、いたい！あやまる、あやまる！』

『いいや』と、力を持ちこたへながら、『斯うなつちやア僕もいのちがけだ。ただぢやア許さない！』
『何とでもあやまる、許して呉れ！』
『おい、西尾、許してやつて呉れ』と土屋も近づいて來た。
『一體、君らは』と、土屋にも聽かせて、『僕を子供あつかひにして失敬なことばかりしてゐるのだ。僕だツて本當におこつたら、承知しない！』
『どうか許してやつて呉れ、今回のところは市島が惡い。』
『………』こちらは市島ばかりではないぞと云つてやりたかつた。『これから注意するか？』
『する、する！』
『よし』と云つて、手あしを一度に放してやつたら、向ふはその勢ひで尻もちを突いて、
『あア、いたい、いたい！』ほツとしたやうに息をつきながら、親ゆびの根を嘗めてゐた。
『………』こちらもからだぢうに緊張してゐた力をゆるめたので、俄かにたよりない寂しさをおぼえたが、まだ空しく殘つてゐる武者ぶるひを押し鎭めるやうにして苦笑した。
『………』市島はそれからして起きあがると、うつて變はつたやうで、『君は柔術を知つとるのか？』こんなことを云つてこちらの機嫌を取るやうにした。
『知つとる、知つとる』と、土屋も少からずおそれをいだいたらしい。

『………』いづれも弱いやつだと心では卑しみながら、無論、多少はかじつてる柔術ではあるが、『そんなものは知るもんか、ただいのちがけ、さ』と、もツとらくな笑ひに落ちながら威し付けて置いた。

南北の兩端が綺麗に一と目で見渡されるほど小さい、そして細長いしま山には、殘んの雪が積んでゐて、落葉松がそのうへにも生ひかぶさつてるのが望遠鏡によく見えた。火を焚いてるものがあるかして、けむりがあがつてる。汽笛を鳴らすとその最初の鳴りに對して果して答へがあつた。

『おーい』と云つた聲であるらしかつた。が、廣い海に向つての叫びであるから、ただかすれて壓迫された響きとしか聽えなかつた。たとへば、自分が子供の時に惡い友達からくくり枕で鼻や口を押さへられた時、息ができないその苦しまぎれに助けを呼んだやうな。尤も、今や、もう、船は大分に陸ぢかく來てゐたけれども。

そこの漁場に關係を持つて來た連中はすべて上陸した。與吉らもそれについて行つて見た。三人の越年者はみな無事であつたが、そのあひだを湯にも這入らずかみそりも當てなかつたかして、その顏は眞ツ黑になつて、土人のやうに長いひげだらけであつた。それが皆その目だけを光らせて、涙をこぼさんばかりに喜んだ。

『よく無事で辛抱してゐた。澤山、褒美をやるぞ』と、漁場の親かたは云つた。

『どうやら、まア、凌げました』と答へた男の日本語が、與吉には、思つたよりもなかなか優くし聽

えた。尤も、ちよツと見たところ、土人でなければ、どこか外國の野蠻人のやうに見えてゐたからである。そしてその答へが何となく奥ゆかしい感じを自分の心に與へた。こんな北のはてのやうなところにも、また自分と同じやうに他人の人情に感ずる人間がゐたのかと。そして『一體、あなたがたは冬ぢうをどうしてゐました』と聽いて見た。その前の人はみな死んだにと思つてだ。

『毎日、山へ行つて焚き木を取つたり、狐を追つたりしました。』

『さうだ、それが運動になつてよかつたのだ』と、親かたはまた賞めた。その前のはみなぶしよう者で、寒いからと云つてただ穴にばかりすツ込んでゐたから、抵抗力がなくなつて死んでしまつたのだらうと云ふのであつた。

『……』ただ動くと動かないとで人間の生き死にが別れると云ふことは、與吉には初めてしツかりと考へられたのだが、自分ながらぞツとするほど單純で而も切實な事實であつた。さうだ、自分が不斷から運動を重んじてゐなかつたら、市島らのやうなものにでも——ちよツとしたことから——殺されるかも知れないのであつた。

エトピリと云ふ鳥がゐて、岩の穴などに玉子を生むでるのも喰へるといふので、自分は市島らを促し、もう、心にわだかまりがないことを見せるつもりをも兼ねて、

『探しに行つて見ようぢやないか?』

『いこ〱』と、市島も答へた。

　業松が人のあたまにつかへるほど低く枝を這はせてゐるその樹かげの岩まに、果して一つの巢を發見した。そこから親どりをも一匹つかみ取ることができた。が、まだ雪が消え殘つてなか〱寒いので、それ切りにしてもとのところへ戾つて來て見ると、越年者の一人がいつのまにか小屋の後ろなる穴居の中で首をくくつて死んでゐた。

『折角、無事に冬を越して來ながら、なア』と、不思議がられた。が、他の越年者どもの云ふところでは、

『あまりに嬉しがつて氣が狂つた』のであつた。皆も冬ぢうを心ぼそく、情けなく思つたことは思つたが、死んだ人ほど早く春が來ればいい、早く迎への船が來ればいいとばかり云ひつづけてはゐなかつたさうだ。

『……』可哀さうに、もう、その時から氣がふれてゐたのかも知れなかつた。與吉がつい一二時間前のことを思ひ出して見ると、三人のうちで一番默つてむツつりしてゐたのはその死んだ人であつたのだ。思ひ做しか、その日も少し變であつた。そして渠等三人のひとりはわれからわれをのけ者にしてしまつたのに比べて、自分は他の二同宿者から不本意にわけなくのけ者にされてゐるのであつた。一たび仲直りをして、一緖に山へ鳥を取りにまで行つたあとでも、矢ツ張り、何となくお互ひにぴツ

たり行かず、取つたものも、親どりの方は籠に入れて船の物にしたが、玉子は不愉快な顔を竝べて一緒に喰ふ氣もしなかつたので、わざと海の中へうツちやつてしまつた。

　ウルツプより北の島々にはなほ更ら人が棲んでゐなかつた。で、行く必要はなかつた。ウルツプに越年者の安否を確かめ、漁場の關係者をおろしたのを往路の最後として、今度は歸路になつて、シャナで根室行きの客や荷物を受け取つてから、またシコタンへ立ち寄つた。自分らの留守中に土人の產物を道廳の官吏が取りまとめたのを乘せなければならぬからであつた。

　三毛ぎつねの皮は同島特產物中の特產であるので、與吉は水さきのイヨンを捕へて――もう二三度なじみになつてるから――私かに僅かのパンやせうちゆうと交換させようとしたけれども、なか〲承知しなかつた。今日でも、まだ、土人としてはそれを望んでゐないのでもないが、土人の利益保護の規則がやかましくなつてゐて、發覺の時の罰が恐ろしいのであつた。まして、道廳の官吏が來てゐる時だから。そして、

『市島さんもさう云つて來たけれど』と云つたのを見ると、あいつも亦同じことを考へてたのだが、同じやうにしくじつたのだ。

　このしくじりをしくじりとしてお互ひに無邪氣にうち明けて笑つてしまうのならいいが、市島はさうしなかつた。そして船がここを出てから、少し手がすいた甲板のうへで、

『おい、西尾』と、渠はこちらを呼びつけて、如何にも道聽にやとはれてるへぼ官吏か何ぞのやうに、『貴さまは皮をせしめただらう？』

『いいや、せしめやしない。』

『いいや、せしめた、せしめた』と云ひながら、土屋も市島のよこから進んで來た。そして甲板洗ひの雜巾棒を兩手で持ち上げて、そのさきをこちらへ突き付けるのであつた。

『君こそ僕よりも前にイョンにかけ合つて見て』と、こちらはじく〳〵したよごれた雜巾をよけてあとずさりしながら、矢ツ張り市島に向つて、『僕と同じやうに失敗したのぢやないか？』

『いいや、貴さまが邪魔したに相違ないのぢや。承知せん！』

『さうぢや、さうぢや。邪魔したのぢや』と、土屋も亦同じやうな棒のさきの雜巾をこちらの胸もとへ進めて來た。

『………』こちらは船のサイドへ脊なかが當つて、もう、あとずさりもできなくなつてゐた。そして、ふと氣が付いたのが、これは渠等の冗談ではない。市島が遠縁を自慢してゐる土屋にけしかけられて、こんなことを云ひがかりに喧嘩を賣らうとするのであつた。ふたりにひとりでは尋常のことぢやア行かなかつた。こないだ、根室の港へ避難した外國船に喧嘩があつて、一名の水夫が海中に投げ込まれたと云ふことをも聽いてゐる自分には、また一つの大覺悟が必要であつた。

『まア、これでも喰らへ』と、土屋が雑巾をこちらの口のあたりへ持つて來たのをしほに、

『何をしやがる!』こちらはひらりと身をかはすと同時に、雑巾棒を奪ひ取つて後ろの方へ投げた。そして右のポケットからあり合はせの銀ぎせるを握り出し、『さア、來い』と頭上にふり上げて、それに相當するだけの身がまへをした。

『抜いた、な!抜いた、な!』今度は、土屋が斯う云つてあとずさりをした時に、卑怯にも尻もちを突いた。そしてそれをかばふやうにしてだが、そのまた後ろへ行つて、市島がこわごわさうに突ッ立つた。

『……』こちらには、それでいよ〱今度のことは土屋がわざ〱あと押しであつたことが分つた。突差のあひだにまた勝利を得たのだとは思ひながらも、なほ威し付けて置くつもりで、私かに吹き出したいのを我慢して、『どうだ、もう、しないか?するなら、いツそのこと、今これで切つてしまうぞ!』

『もう、せん。許して呉れ。』

『おれが悪かつたんぢや』と、市島も少しその顔を和らげた。

『よし、ぢやア許してやる!』我慢してゐた輕蔑の笑ひが一ときに顔へ出たが、そのまま擧げてた手をおろすと、言葉も砕けて、『君らは親戚同士を鼻にかけて、年のうへなのを自慢してゐながら、弱い

やつぢやないか？これを見ろ。』こちらはおろした手の握りを青ぞらの方に向けて明けて見せたのである。海上のそらは珍らしく晴れてゐた。

『なんぢやい、きせるか？』土屋は起きあがつて、きまり惡さうであつた。

『然し、西尾はえらい』と、市島も大分に往生したやうに見えた。

『えらいとか、弱いとか云ふのは喧嘩ごしになるからだ。これから皆そんなことを云はないで仲よくしようぢやないか』と云つて、與吉は別に、おもて向きを意張りもせず、その後も年したは年したのつもりになつてゐた。

船がクナジリへも二ケ所立ち寄つてから、根室へ第一回の歸航をしたので、皆のものは爭つてその故鄕へ手紙を書いた。そして與吉も皆に釣り込まれて、つい、その氣になつた。何か一つ大きなことをしなければ國へも音信をしまいと決心してゐたのだ。が、こんなことをして、こんなところへ來てゐると、まだほんの僅かのあひだにでも、既に、天然の危險に二度出逢つたし、人との喧嘩でいのち掛けになつたのも二度だ。この後だツて、またどんなことがあるかも知れなかつた。自分の生國と戸籍とはやとひぬしには知れてるので、若し死んだとすれば直ぐ母へも通知が行くにきまつてる。が、兎に角、久しぶりにちよツとした消息を漏らしてやるつもりで、

『只今北海道の根室に來てをり候。無事に付き御安心あれ』とばかり、ハガキに書いて投函した。『何

か一つ事を仕上げねば歸らぬつもりに候へば、左樣御承知下されたく候。』

そして根室をさきに出る時と今度歸つて來た時とでは、心持ちに於いて、大分違つてるのをおぼえた。航海やその危險にぶつかつて、心が少からず練れて來たのだらう。それに、皆にも自分と云ふものが分つて來て、親しみさへ加はつてゐるので、自分だけが獨りぼツちだと云ふ感じも出なくなつた。一緒に女郎屋へあがつても、以前のやうには仲間から輕蔑を受けなかつた。その實、船ぢうで子供の給仕一人を除いては、自分の年が一番若かつたけれども。そして船長を初めとして、皆に『西尾西尾』と呼ばれるのを、こちらは給仕に次いで皆から可愛がられてゐるものとありがたく思つた。

ところが、ここにまたひとり手にをへない者がゐた。クワータマスタと云へば、陸上の巡査のやうなもので、水夫のうちから選ばれて、水夫の行動を監視する役目に當つてるのだが、それが四名ある。運轉手も四名だが、その中に運轉手長がゐるのとは違つて、巡査の方は四名の上にまた別な水夫長が一名据わつてる。乃ち、水夫長の下役なる巡査四名だが、そのうちの一名は中里と云つて、四十五六のおほ男であつた。土屋よりも肥えてゐて、土屋よりもツと力や膽ツ玉が强いのを自慢に誰れにでも突ツかかつて行つて、誰れをでもいぢめ付けた。皆のおそれ物、憎まれ物になつてるので、與吉も渠とは成るべく顏を突き合はさないやうにしてゐた。ぶつかれば、からだの小さい自分は負けるにきまつてたからである。

けれども、こちらは渠と止むを得ないことであら立たしい言葉を云ひかはすことになつた。船が根室に碇泊して、まだ第二回の航海に出ないうちにだが、船ぢうに用意のマチが無くなつたことが發見された。そしてそれを貰ひに行つたボートの歸つて來るのを待ち切れないほど、皆がたばこの味を空しく渴望した。大した時間を待たせるのでもないのだが、ただその僅かのあひだを——人間と云ふものは隨分意地ぎたないもので——待ち切れないのであつた。

荷物のつみおろしばかりでなく、かかるうち輪のことにも意を用ゐるのが事務員のつとめであるをつい、渠等がそれとなく怠つたのだから、まことに氣の毒に思へた。そして與吉は陸上で自分自身のかねを以つて卷きたばことと一緒に買つて來たマチ箱が一つ、たま〳〵、寢どこの棚にあつたのを幸ひそれを誰れでも殊勝にあたまを下げて貰ひに來るものには、その中から一本づつ出して呉れてやつた。

が、あの中里だけには、たとへ來てもやるまいかと、多少はこちらも意地の惡いことを考へてたところへ、果して渠も亦やつて來たのだ。そしてその横柄な言葉ぶりが面白くなかつた。

『おい、西尾』と、まだ姿も見せない時から怒鳴つて來て、『貴さまはマチを一つ隱してゐるだらう。出せ。』

『そんな物はない。』つい、首を横にふつてしまつた。自分の寢どこに腰をかけて、柱にもたれ、揃へ

た兩ひざを兩手で抱きながらだ。
『ないことがあるもんか、みながさう云つてる！』
『いいや、ない！』
『よし、あつたら承知しないぞ』と云つて、中里はあたりをうろ〳〵探した。そしてそれを發見すると、こちらの占有なる寢どこの眞ン中へ左りの手を突いて熊のやうに大きなからだをもぐらせ、右の手にマチを取り上げるが早いか、起きあがらうとしてそのあたまをうへの段のはじへこつんと打ち付けた。こちらには滑稽でもあつたが、それが一しほ渠を怒らせたと見え、再び突ツ立つた渠はその顏を眞ツ赤にまでして、手に持つたマチをこちらの鼻さきに押し付けて、『これが貴さまにやアマチと云ふ物でないか？』
『……』こちらは、もう、辛抱できなかつた。そのマチをいきなり奪ひ取つて立ちあがり、『貴さまは』と、この頃には、もう、この社會並みの言葉も出るやうになつてゐたので、さう云つて怒鳴り返した、『おれが隱したと云ふマチを取りに來たのぢやないか？』
『さう、さ。だから、それを渡せ！』
『然し、これはおれの隱したマチぢやない。おれがおれのかねで買つたマチだ。』
『そんな理窟は入らん。渡しさへすりやいいんだ。』

『失敬なことを云やアがつて』と、また武者ぶるひを大きくしながら、『コッちこそ承知できるかい！』

『ぢやア、貰はん。その代り、おぼえてやがれよ』と云つて、中里は室を出て行つてしまつた。そのあひだ、うへの段にゐた二人はただ默つてちぢみ上つた。

與吉は然し平氣で、直ぐ船員の食堂へおりて行つた。そこへ中里は子杓をふり上げてやつて來た。

『さア來い、西尾！マチどころか、貴さまのいのちを取つてやらア！』

『……』こちらも覺悟はしてゐないことでもなかつたので、『投ぐるなら投ぐつて見ろ！』食卓から離れて身がまへをして、擧げた左りの腕で自分の顏をかばひながら、向ふが子杓を打ちおろしたのをそらすが早いか、飛び込んでそれを奪ひ取つた。すると、渠はまたスコプと云つて、船で使ふ十能を持つて來た。こちらはそれをも取り上げようとして今度は組み打ちになつた。

斯うなると、大きなものに抱きすくめられるのは止むを得なかつたので、そのまま甲板へつれて行かれた。

『畜生、どうするか見てをれ！』中里もその言葉さへ苦しさうに息をはづませてゐた。

『……』こちらはこのままでは結局投げ込まれるのだらうが、その時はどうせ自分ひとり海へ落ちるものかと考へてゐた。そしてかじり付き、かみ付いても、他方をお伴につれて行つてやるのだ、と。

この時、船長やその助手は上陸中だからゐない筈だが、それでも中里はみよしの方を避けて、ともへ行つた。そして左りがはのサイドへ來ると、こちらのからだをサイドの上に出して、突き落さんばかりであつた。

船は煙突一つの二本ばしらだが、後ろの方の帆ばしらの帆づなが一つ、與吉の手もとへ引かれてあつた。これを渠は成るべく高いところで自分の兩手に握つた。これさへしツかり握つてれば、いのちには別條がないと思つたからである。すると、自分のからだはくの字なりにぶら下つて力が這入つてゐた。

こちらの、尻の方を頻りに押しながら、中里は一生懸命になつて

『消えて失せろ、畜生！貴さまのやうな者は消えて失せろ、畜生』と云つてゐた。その危險と云へば危險、殘酷と云へば殘酷ないちづの言葉と押しとにつれて、こちらのからだはぶらんこに乘つてるやうに前後へ動いた。

『………』與吉はそれを却つて占めたと思つた。そしてぶらん〳〵と動くにまかせながら、段々中里の正面へ自分の足が向くやうにしていたのが、いよ〳〵これでいいと云ふところで、うんと力を入れて、靴のさきで渠の顏を蹴飛ばしてやつた。

『いたい！』渠がその目のあたりを兩手で押さへてあふ向けに倒れたのを見すまして、こちらは綱か

ら飛びおりた。そして敵が半身を起したのに向つて、

『無禮なことをすりやアこんなものだぞ』とあびせかけた。もう、これで自分も殺されるとしたツて本望であつたほど、胸がすツとしてゐた。

『どうしたんだ？』機關長が丁度そこへやつて來たのである。

『西尾がおれの目をこんなに蹴りやがつて』と云つて、中里は痛い爲めにか少し泣き出しさうな聲をしながら、つれられて行つた。そしてこちらがまた武者ぶるひを押し靜めるやうにして自分の室に引ツ込んでると、やがて敵は本人自身で呼びに來て『さア、來い！機關長の前でおれと貴さまと對決して貰はう。』

『………』こちらが今しがた見た時とは違つて、向ふの目のふちは赤みが變じて俄かにむらさき色に腫れあがつてゐる。それでも可なり平氣でゐるのには、敵ながら感心であつた。

機關長室では、與吉はありのままを告げて置いた。すると、またやがて水夫長が船へ歸つて來た時その室へ呼ばれたのでいよ〳〵自分も船を追ひ出されるものと覺悟して行つて見た。が、それは豫想外のことであつた。

『西尾、今回のことは君に少しも惡いことはない。中里が惡い。あいつは、どうも、これまでにも亂暴なやつで皆に憎まれてをつたところだから、船長とも相談して、これをしほに――丁度また根室

を出發してゐないのを幸ひ――ここで解雇することにするから、安心し給へ。』
『いや、それでは僕があんまり割りがよ過ぎましよう』と答へないではゐられなかつた。一つには自分の義俠心を見せてやるつもりもあつた。そして、どちらがいい惡いにしても、喧嘩は兩成敗のものだから、向ふを出すならこちらも出ようし、こちらが殘るなら向ふをも改めて置いて貰ひたい。その代り、以後中里のやうな無禮や亂暴は愼ませることにしてと云ふことを賴んだ。そしてその通りになつた。

根室を皆が無事に再び出發してからは、中里も往生して、あの圓う體で生まれ變はつたやうにおとなしくなつた。市島や土屋はまた、このことあつて以來、ます〱こちらに心服するやうになつた。斯うして年うへのものらが段々だツた獨りの若い者に從つて來るのを見ると、與吉は自分ながら愉快になつて――千島の航海が段々とその珍らしさの失せて行くにも拘はらず、自分のまじめな生活に於いてその埋め合はせができて來るのであつた。

ところで、渠にどうしても思ひ切れぬことが一つあつた。それはコタン特產の狐だ。その皮をたツた一枚でもいいから安く手に入れて見たかつた。そしてそれには、どうしても水さきのイヨンを何とかして丸め込むより外に道がなかつた。パンをやつたり、せうちゆうやブランデを飲ましたりして、もう、二三圓が物は使つてるが、今少しおごつてもいいつもりで第二回目の歸航にこツそり渠をまた

訪ねて見たが、相變らず强情であつた。

こちらは全く失望のていで船へ引き上げたのである。すると、日が暮れて船が今出ると云ふまぎわになつて、イヨンがやつて來て、こちらを呼び出し、

『西尾さん、ちよツとうちまで來て吳れませんか？』

『今ごろになつて何だい』と叱り付けながらも、それと察しられたので、交換物の用意を身に隱して再び上陸した。

海岸から村の入り口につき當るのだが、その門内の直ぐ左りがはには學校があつて、その向ふがはの屋並みの三軒目が渠の家だ。そこへこちらを引き入れてから、渠は

『誰れにもしやべらないなら、お望みの皮を渡します』と云つた。そしてそれを出して來て見せた。

渠の八十七歲だと云ふおやぢも出て來て、――これは日本語はしやべれないので――何か分らんことを頻りに長いひげだらけの口にしてゐた。多分、三毛の狐はこの島の特產物で、道廳の官吏がやかましいのでなか〳〵一私人には渡せないのだが、お前のことだから、特別にこツそりとやるから、人には嘗つてしやべるなとでも云つてゐるのだらうと思へた。

こちらは用意の物を與へて皮を受け取り、云はれるままに服の下に着込んだ。そして狐の足のつめが自分の胸の前へ兩方から來てゐるのを、うは着のうへから、何よりも大切にそツと兩手で押へなが

ら、歸船した。同室のものらは直ちに感づいたけれども、
『默つてろ、儲けたら割り前をやるから』と云つて、口どめをして置いた。根室に着したのは明くる日の午前八時頃であつた。直ぐ上陸した。北海道中で根室は一番名物だと云ふ濃霧が港の町を夜のやうに籠めてゐた。こんな密賣をするには却つて持つて來いの天氣だと思ひながら、もやの中を掻き分けるやうにして皮屋を尋ねて行くと、やつと一軒見つかつた。が、主人が今ちよつと留守で、そこの細君ばかりでは何とも話がつかなかつた。そして、
『小牛さんへ行つて見なされ』と云はれた。
『……』小牛とは根室一の大きな皮屋であつた。そこで早速持つて來た皮を見せると、番頭の鑑定では三毛と云ふべき性質の物ではなかつた。
『然しをかしいぢやないか、茶色が多いとしても、別にちやんと白もあり、黒もあるのに?』
『それがです、然し』と云つての說明によると、狐の腹が白いのは當り前で、つめの周圍にはまた黒い毛があるものだ。『そんなものは勘定に這入りませんから、これは矢ッ張りあり振れた赤狐です。』
『ぢやア、こッちがうまくだまされたのか知らん…』
『あのイヨン一家のものでしよう?』
『どうしてそれを――』して見ると、少しはこちらも聽いてた通り、以前から行なつてる手をまたこ

ちらにも喰はせたのであらう。その手は喰はぬつもりで、だから、色をよく見分けて來たのだが――。
『あれはわれ〳〵の社會には有名ならそ付きときまつてをりまして、土人中ではなか〳〵の利口者です』と、番頭はこちらをあざ笑ふやうな風であつた。
『さうか？』こちらも明いた口がちよツとふさがらなかつた。こちらがまじめな死に生きの目に會ひながら初めて今知つたことを、この番頭は店に坐わつてゝよくも知つてたのである。これには降參するより仕かたがなかつた。
これこそまことに、下世話にも云ふ通り、眞ツ赤なうその皮だらう。自分は慾に釣られて、却つてそんな狐にだまされたのだ。而も死んで、皮ばかりになつた狐にだ。イヨンの如き土人ふぜいは再び相手にしないでも、自分自身のこの失敗やうが如何にも殘念でたまらなかつた。さうかと云つて、また、自分自身のことだから、かの市島や中里に對したやうないのち掛けの力をそとへしぼり出すこともできなかつた。
『これではどうしやうもありません』と云はれて見ると、折角、骨を折つたつもりの自分もがツかりしてしまつた。
『仕かたがないから、ぢやア、いくらにでも買つて呉れ』と頼んだ。
『欲しくもありません。』

『さう云はないで、さ、折角このガスの中を探して來たのだから。』
『では、ありがたくもありませんが、八十錢で買ひ取りましよう。』
『たツたそんなものか？こちらは思はずまた月を見張つて見せたのである。
『相場がきまつてますから。』
『………』如何にも殘念だが、それ以上に行きさうでもないので、こちらは思ひ切つて賣り渡すことにした。
本物なら、少くとも八九圓は取れたものを、その十分の一ばかりとしては、それが爲めに使つたかねにはまだ二三圓が物を不足したわけだ。歸船してから、皆の笑ひ草になつた。そして、
『西尾は柔術はうまいが、狐にはうまくだまされた』と云はれた。柔術だツて、本當に知つてるのではないことを渠は、然し、自分では分つてゐた。

――（大正八年九月）――

犠牲

『いろ／＼な花火の工夫に於いては日本が世界一である。その世界一の日本の花火では新潟が一番である。そのまた新潟で一番の花火師になれば、それが取りも直さず本當の世界一だろ。おれはそれになるんだ』と云ふのが、歳三の煙硝をいぢくり出してからの意氣込みであつた。

渠は今でも親ゆづりの表具屋をつづけてはゐる。が、一度兵隊となつて日露戰爭にまで行つてからと云ふもの、煙硝のにほひを何となく懷かしくなつたと同時に、鐵砲の音がどん／＼と云ふのを聽いても生まれ故郷にのみ上る尺玉のことが思ひ出された。そしていよ／＼除隊になつて歸郷するが早いか、花火のことにたづさはるやうにもなつたのである。

『そんげなもんあぶないすかい』と、母は初めのうち頻りにとめた、『やめてくんなさいや。』

『何があぶなかろば。』斯う云つて、ただ獨りの親にだが、取り合はなかつた。戰場では尺玉のことばかり思ひ出されたのが、家にゐては、また不思議にも大砲の音が戀しかつた。ずどんと云つて飛び出す玉が敵に當る當らないは渠自身には第二の問題であつて、音その物が何よりも壯快なのであつた。

そしてそれを自分としては立派な花火師になる爲めに持つて生まれた素質だと信じた。
若しそれに危險が伴ふとすれば、軍隊では用意した煙硝を使つてたに反して、花火師は煙硝その物を用意しなければならぬ。その用意が不慣れの爲めに研究の仕初めには時々爆發した。そしてかたかたの頰ツぺたに大きな燒けどうができた。けれども、そんなことを心配してゐては、鐵砲や大砲の玉が飛んで來る戰場などには一刻も出てゐられないわけではないか？
やがて母が病死して——その時にも、どうせ死んでしまつたからだなど、親のも人のも同樣だから、尺玉の筒に入れて空天へ撃つて見たら面白からうとまで思つたが——日常の世話をして吳れる者がないので、妻となるものを探した。が、來手がなかつた。
『本職外のあぶない仕事ばツかりする表具屋さんだ、す、か、い、に、ね』と云はれてだ。
それでもやツと妻をきめることができたが、その條件として花火の仕事場だけを別にして置くことになつた。で、他の人にも例のあることだから思ひ付いて、おほ濱のうちで成るべく自分の家に近く便利なところに持つて行つた。ところが、日本海のあら浪とおほ風とを受ける新潟の濱は、まるで沙漠のやうで——去年の寢雪を埋めて自然にことしの夏まで貯藏することもあるかと思へば、また、きのふまであつた沙やまが一夜にしてなくなつて、別なところに別なのができることもある。渠はそれを子供の時からよく知つてるので、成るべくそんな變化のない場所として、一ケ所、グミやネムの

灌木で取り圍まれてる小高いところを撰んだのである。そしてその眞ン中を可なり深く掘り起して、そこへ土藏造りの八疊敷きばかりの物を建てた。そしてその横手へ持つて行つて、また、煙硝倉を掘つた。倉と云つてもうへに家根があるだけで、ただ沙を掘り下げてその穴の周圍に板を張つたのであつて、入り口が海の方とは反對に向いてるから、どんなに沙が寄つて來てもかまはなかつた。いや、沙が寄つて來てその上につもつて與れるほど、爆發の機會に遠ざかり、よしんば爆發しても危險のおそれが少くなるわけであつた。自分としては、然し、好きなことにいのちを取られても平氣だと云ふ考へであつたけれども――。

仕事場がそこになつてからも、――だから――平氣の油斷から、硝石に木炭や硫黄をまぜた中へたばこの火を落した。そしてちよツとあわてた爲めにその火をつまみ上げることはしないで、逃げ出した。そのあとでどんと一つ大きな音を立てて爆發した。

巡査でもそれを聽き付けてやつて來はしないかと、仕事場のそとへ出て低い周圍を見まわしたのであるが、まア、大丈夫らしかつた。が、そのうちにやつて來たのは『小便がめ』であつた。それはあだ名だが、本名を佐久間と云つて、顏ぢうを長いひげだらけにしてゐる癖に湯には這入つたこともないと云ふ男だ。そしてここから小半町ばかりさきの監獄うらなる竹藪の中に、見ツともないほどきたない藁ぶきの小屋を建てて、その女房や子供と一緒に住んでるが、財産と云つては小便甕のほかに何

もないと云はれてる。渠は、こちらに取つては、表具屋としての商賣がたきである。が、あまり貧乏なので度々表具依賴者の物を質に入れたりする爲め、得意が段々へつて行つて、それだけこちらの得意がふえて來るのを、何かこちらの仕わざでもあるかのやうに思つて、不斷から、ひがみ根性を起してゐた。そしてこちらがここに花火の仕事場を置いたのが分ると、不平さうにやつて來て、

『こんげなとこへ煙硝ぐらなんか置かれては、あたり近處のもんが迷惑だ。』

『何が迷惑であろば？』こちらは馬鹿なことを云ふやつだと思へた。『若しかしくじりがあつたとしても、その爲めに死ぬのはおればツかりだ。近處の衆なんかへ少しも迷惑をかけるもんか！』

『そりやだつて人をたまげさせるだけでも迷惑でないか？』

『……』腰ぬけめ、そんなことをよくも言葉に出せたものだ！火藥破裂の音を聽いてびツくりするやうでは、戰爭なんかへ行けるものか？ちよツと兵隊にでもなつて見ろよ、さうして兵隊の小便でも一度飮んで、膽ツ玉を据ゑるくすりにでもして來い！

いつかさう云ふ意味を云つて聽かせてやつたやつが、今、その總領息子までつれてやつて來た。

『人間の膽ツ玉は火藥なんかではできるもんか』と云つたツけ。だから、いよ／＼ちから自慢の喧嘩をでも吹ツかけるつもりだ、なと、こちらは思はれた。

『……』こちらだツても、然し、『飛びあがりのぼら』とまで云はれてる男だ！賣りに來た喧嘩な

ら、買つてもいいと覺悟して、大したことでもなかつた爆發のあと始末をしてゐると、佐久間は沙の高みからこちらの中を見おろして、

『今どんと云はせたのは君のとこか』と聲をかけた。煙硝がおそろしい爲めか下へはおりて來ないが果して穩やかならぬ樣子であつた。

『おれのとこが、どうした？』

『びツくりさせやがつたな』と、勿體らしくその口ひげをいじつてる。

『びツくりするのは貴さまの勝手だ。』こんなやつこそ二尺玉か三尺玉かに乘せて生きながら打ち上げてやつたら面白からうと思ふのであつた。

『勝手とは何だ？　畜生！』

『なんだい』と、飛び出して行つた。こちらは人間のうちで一番畜生に近い暮らしをしてゐる者に畜生と云はれたのが癪にさわつたのである。『もう一遍云つて見やがれ！』そして返事を聽かないうちにもう、組み付いてゐた。

沙のうへを上になり下になりしてゐたが、やがてまた組み合つたまま二人は起きあがつた。するとその前から向うの父に加勢してゐた息子がこちらの小またを取りにかかつたので、こちらは足のさきで沙を蹴上げたのが、ぱツと、うまく息子の顏に當つた。

『あツ』と云つて、息子は横へ逃げるが早いか、その兩手で兩方の目を押さへた。その父もその方にちよツと氣を拔かれたところを、こちらは左りの足にかけてその大きな圖體を横倒しに投げてやつた。そしてこと更らにも威だけ高になつて、

『巡査でもないくせに、これからぐづ〳〵云ひやがるな！』

『……』起き上つたのが、もう、手出しをして來ないで、『おぼえてゐやがれ』と云ひながら行つてしまつた。

『何をおぼえてゐやがれだ。表具はちツとばか上手でも賴み手がないし、火藥の調合なんかは何にも知らない癖に』と、をかしかつた。

こちらは妻に子供などを拵らへさせるよりも、火藥を拵らへる方がどれだけ面白いか知れなかつた。その材料には乳糖、鹽酸加里、ナフタリン、鷄冠石などが必要だが、つまり、桐か松の皮かの木炭を十パーセント、硫黄を十五パーセント、並びに硝石七十五パーセントをまぜ丸めて、ごま煙硝と云ふ物ができるのである。それで以つて、たまに退屈な時などには、南京花火の眞似をして見せて、物好きに集つて來る子供らを喜ばせてやつた。また或時は、釣り星の仕掛けから思ひ付いて、二度にぽんぽんぽんとはじけるのを拵らへて見て、それを犬のしツぽに結び付けた。そして

『さア。お前たちに面白いことをして見せてやるぞ』と、子供らに云つて、犬のあたまを一つ叩いて

から少し逃げ遠ざかると導火線に火がつけてあるから溜らない。やがてぽんとはじけたので、無邪氣な畜生がきやんと云つてびツくりするそのまも置かず、尻の方がまたぽん／＼と鳴つた。沙の上を三度ころげて、やがてあわてて起き上りかけた時、またあとのがはじけてぽん／＼ぽんと鳴つた。犬はまたころがつて一ときは氣絶してしまつた。

その犬がやツとわれに返るが早いか、方角も見ずに海の方へ逃げて行つたあとで、また例のやつのやつてくる姿が見えた。

『しよんべんがめが來た！』

『しよんべんがめ！』

こんな惡くちを聽えるやうに云ひながら、大抵の子供も逃げて行つたあとへ來て、渠は相變らず勿體らしい樣子で、

『今、音がしたのは君のとこでないか？』

『さア、どこだか、ね、おらア知らない。』

『知らないことはあるまい。』執念ぶかさうに、『この邊でしたのだすかい、耳があるものには聽えないことはあるまい。』

『知らないから知らない』と、こちらは飽くまでとぼけてやつた。

『………』向ふは何だかぐづぐづ獨り言を云つてたが、今回はそのまゝ引ツ返してしまつた。

『畜生！』こちらは斯う自分の口にまで出した。何の爲めに人の研究を空しく邪魔しに來るのか、そのわけが分らなかつた。もう、自分の表具職さへ段々とうツちやつて行くつもりだ。世界一の花火師にならう爲めには、あんなしみツたれな表具屋なんか眼中になかつた。

が、困つたことには、近處の子供らが

『またやつて呉れなれや』と云つて、度々いろんな犬をつれて來るのであつた。こちらは如何に試驗かたがたとは云つても、一度やつたことを二度やるほどの必要もなかつたし、またそんなむだな費用もなかつた。

『………』かの尺玉の註文まで引き受ける小泉や片桐のやうな資本ある花火師とは、まだ〳〵違つてるのである。渠等は尺玉をも揚げるからます〳〵廣告になつて、どし〳〵かねもできるのだが、かねができるからこそまた尺玉を揚げることができるのだ。こちらはそれが自分ながらねたましいほど殘念であつた。

それにはまだ自分に於いて犧牲が足らぬからであると思はれた。考へて見るに、片桐でも小泉でも、當主でなければその先代が、何度も人を殺してゐる。それも別にわざとではなかつたらうが、その度毎に、殺された者の家族や殺した當人の迷惑はちツとやそツとのことではなかつただらう。警察へは

呼び出されたらうし、損害は取られたらうし、――然しそれが爲めに、また、膽ツ玉も太くなつたし、研究の精神も引き締つて冴えて行つた筈だ。が、この自分には、戰爭以外のことでは、人間の顏を燒いた經驗こそあれ、それは自分自身のことだから、大して自分は迷惑も感じなかつた。そしてその他では、まだ犬のしツぽに迷惑をかけただけだ。さうだ――して見ると、

『どうしても一遍や二遍は人を殺して見ないでは――』と云ふ花火師一般の、修業としての本願と云はば本願、迷信と呼ばば迷信を自分も初めから持つてゐたのである。それが然しふとしたことから成就した。

と云ふのは、研究以外では、線香花火に毛のはえた位に過ぎないところの三寸玉や五寸玉のやうな、小仕事の註文をいつまでも受けてゐるのでは心ぼそいので、少し在の知り合ひに運動して、やがて村の祭りに揚げると云ふ五寸玉を他よりも安くしてやつて引き受けることになつた。玉はその徑一寸を增す每にその値段が大抵倍增しになるのであつた。で、三寸玉が三十五錢なら、四寸玉は七十錢、五寸玉は一圓四十錢だ。それを思ひ切つてたツた一圓づつで約束した。

大した儲けにはならないが――と思ひながらも、徑五寸の巖丈ながらんどう玉を生紙で拵らへてそれを眞ツぷたつに切り、その一方にはしだれ櫻やしだれ柳の用意を入れ、他の方へはまたごま煙硝を丸めたのをいくつも詰めて、兩方を合せると、その周圍をのり附け生紙でまたいくへにも卷いた。こ

れは夜のうち上げだが、ひるまになると、旗などに換へて置くのだ。晝はいろ〳〵な火が出ても、太陽の光りにうち消されて少しも分らない。で、ぱツとそらで開らくと、火の代りに旗があらはれて、それにつけてある僅かのおもりで段々下へ下へとおりて來る。斯う云ふ晝夜兩様のを拵らへつつ、さきにできた方のが乾燥するのを待つて、一つ、試みに仕事場のそとでうち揚げて見た。
『あぶないずかい、逃げろ、逃げろ』と、皆に云つて置いたのである。が、物好きな子供らのうちにはなか〳〵云ふことを聽かぬのもあつた。近ごろ渠等を喜ばせるやうなことは少しもやつて見せなかつたので、渠等は自分達で何か面白いことをしようと思つて、こんなひまにも、こちらのすきを見ては煙硝を盜んで行くのである。大したことでもないから、うツちやつては置くが——。
　試驗の花火が今どんと云つて筒を出たことは出たが、晴れた天へはうまく揚がらなかつた。最初の音と共にそれて、意外にももとの地上に飛んだ。そしてそこで二度目の爆發をしかけたのである。
『どけろ、どけろ、馬鹿！』思はず全身の力をふり起して叱り付けると同時に、その危險を救ひに行つたけれども、まに合はなかつた。そしてそこにゐたいたづらツ兒のひとりを打ち倒した。
『しまつた』と、こちらも驚いて飛び込んで行き、引きつづいてまた旗がぽん〳〵はじけるそのあひだからその兒をかつぎ出して來た。が、兒はからだ中におほ焼けどうをしての即死であつた。こちらも亦自分の足を一ケ所焼けどうしたが、そんなことは頓着してゐられなかつた。

第一に、自分の恐れたのは小便がめがまたやつて來て、今度こそは向ふが威だけ高になつて、『そら見やがれ、云はないがんではない』と云ひはせぬかと云ふことであつた。が、幸ひにも、來ないやうすだ。自分のわれ知らずふるえる手あしを努めてしツかりと踏みこたへながら突ツ立つてゐたが、暫らくはどうしていいのか分らなかつた。やがてわれに返ると、先づ、死んだ兒の親がこれを聽くとどんなに悲しむだらうと云ふことが思ひやられた。自分もこの頃では子供があつて——まだ然しいたづらをしには出て來ないが——その可愛さをも知つてゐないことはなかつた。

さうだ、それを思ひやると、世界一の花火どころか、自分のいのちを投げ出す以外には、どんな申しわけを持つて行つても駄目のやうであつた。が、この氣ぶんで以つて研究に緊張して行つたら——と思ふと、直ぐ然しこれが自分の待ち受けてゐた犧牲ではないかと考へられて、嬉しくないこともなかつた。

兎に角、先づ、あり合はせのふる菰を死骸のうへにかぶせた。そして自分で以つて警察へ知らせに行つて、檢分の巡査をつれて來た。その巡査は

『許可を得てやつてる危險な場所へ來たが惡い』と云ふやうなことを漏らして吳れた。

『いかにも仰せでございます。それに、ただ通りすがりのものなら、わたくしばかりに全體の責任がございましようが、煙硝を盜みに來たのでございますから。』これはうそのことではないので、申しわ

けには一番都合のいい事實であつた。『それも度々のことですから、わたくしもうるさくなつて、いツづも大抵はおほ目に見てやつてゐましたが――』

『よろしい。成るべく示談で濟めば濟むやうにしましよう』と、巡査も答へた。

こんなことで被害者の家へは巡査につれて行つて貰つて、ひらあやまりにあやまつた。この時ほど自分の男を下げたことはなかつたが、その代り、以後は十分に注意しなければと云ふ心をふり起した。と云つても、花火の中の用意は一々順番によくはじけたところを以つて見ると、そこには別にしくじりはなかつたのだ。して見ると、あとの出來具合ひも今一度改めて見るには及ばないやうだ。そしてこれから拵らへるのも今まで通りでいいだらう。が、自分の注意すべきはただ花火筒の埋めかたであつた。どうせ試驗に揚げて見ることだからと云ふ油斷から、自分はあまり沙を掘らなかつた。いい加減な埋めかたをした。それが淺過ぎたので、爆發の時、筒がぼやけて破裂し、玉は眞ツ直ぐに揚がる力を得ないで、筒の一番弱みのできてた方へよこにそれてしまつたのであつた。

それはそれで結局自分の知識の一進歩としてすんでしまつたが、或金滿家のお屋敷へふすまを張りに行つた時、そこの主人から、

『君も段々一人前の花火師になつて來た、ね』と云はれた。

『……』もう、評判になつてるのであつた。が、その主人も、もとはと云へば、新潟が沼垂に停車

場を取られた時、櫻井などと竹槍騷動や燒き打ち事件を起し、隨分人のいのちを取つたのが原因で人望を得、ついに今の出世をした人である。『然し』と、だから、多少氣安い心ではけ持つ手をちよツと休めて、『花火師と云ふ者は一般に人一人のいのちを取つて、やツと一つの呼吸をおぼえて行くんだと云ふすかい、ね。』

『殺された者こそいいつらの皮だ。』

『は、は、はア！』

『兎に角、新潟と云ふとこは人氣が荒ツぽて、昔から物騷な土地、さ。』

『さうでございましよう』と、こちらが答へたには、無論、自分としては、花火のおほもとであることも數へ入れてゐたのである。

この經驗から歳三は果してまた一段の自信と新工夫とを得て、更らに尺玉の製造に進んだ。これになると、徑一尺のが拾圓なら、二尺のは五十圓で、三尺のになると貳百圓内外もしよう。それだけにまた研究費や製造費が嵩むわけである。けれども、この時、新潟で尺玉と云へば一尺玉のことであつた。それ以上のは禁じられてゐた。蓋し、片貝村――ここも亦縣下で花火の好きなところだ――で、亂暴にも大した手加減もなく三尺玉を揚げた時、その大きな響きで耳を破つたものがあつたり、人死にがあつたりしたばかりでなく、その花火の火が落ちたとこでも亦人死にや火事があつた。それから

と云ふもの三尺玉は勿論、二尺玉も嚴禁されて、一尺玉ばかりが許されてゐるのだ。
　但し、その一尺玉でも、それを、普通のどんな大砲にも太さに於いて負けぬ長い木づつ――それにはおもての木地を少しも見せぬほど密接に竹のたがをはめてある――に入れて、沙の中へうわ向きに深く半分以上も埋め込み、上から火を落して爆發させると、かの信濃川の川開らきの時を見よ――どん！ぶる〳〵ツと云つて、あたりの空氣を振動させながら、すざまじい勢ひで夜の天上へ揚がつて行く。その壯快さは――人の揚げたのを見てゐても――自分までが玉と共に星ぞらへまでものぼつて行くやうだ。自分はこの心持ちを三倍に擴張して、早く三尺玉を揚げるやうにしたいのであつた。それができないとすれば、せめては二尺玉を揚げて見たいのだ。危險と云はば危險かは知らないが、うまく上へあがりさへすれば、上で爆發してしまうのであるから、下にゐる見物人を傷めるどころではない。却つて、その立派さにわツと鬨の聲を擧げさせて、こちらはまたこちらでそのさきがけの名譽を得よう。
　それには、然し、たとへ警察の許しは出たとしても、殘念なことに、まだ自分としての資力も足りない。腕も、亦、今のところ、なか〳〵及ばない。
『さう殘念がるがんなら、いツそのこと、花火なんかやめて本職ばツかり一生懸命になつたらよかつたが、ね』と、こちらの心も分らぬ妻は二番目の兒に乳をふくませながら云つた。『お前さんは一體、

氣が多い。表具屋のくせに、花火もするし、盆栽屋もやるし。』

「おれは何でも人に負けるのがきらひだすかい、な』と答へた。が、實は、花火に熱心になつて來るに從つて、道樂の盆栽などは段々おろそかになつて、近ごろは盆栽會にも無沙汰なのだ。表具屋だツて、花火で儲かるやうになればすツかりやめてもいいのだけれども、今ではまだそれをつゞけてゐなければ他方の研究費が十分に出ないのであつた。

兎に角、もツとかねが欲しかつた。そしてもツと花火師としての腕を磨きたかつた。自分としては隨分人に向つて強情のつもりだけれども、われ知らずこの弱みを訴へることがあつたので、或へうきんな人が自分に向つて冗談に

『どうだ、もう一遍、人を殺して見ないか、ね』と云つた。

『さうだ、ね』と、こちらは然しそれを寧ろまじめに受けないではゐられなかつた。今一度自分の爲めに犧牲になる物があつて欲しかつた。さうしたら、今度こそは自分をして十分に自分の願ひを成就させて呉れるかも知れなかつた。願ひの爲めには自分の腕が空しく鳴つてゐるのだから。さうかと云つて、また、怪我でもなしにわざ〳〵人を殺すわけにも行かなかつた。

渠自身としては、小泉や片桐があり來たりの尺玉をばかり揚げてるあひだに、自分が少くとも三尺玉のさきがけをしたいのであつた。この本願が自分には、もう、迷信と云はれても何でも、神への信

心同樣、深く自分の心に喰ひ入つてると思はれるので、若し花火の神さまが許して吳れるなら、本當に人殺しをして、それをかど出の血まつりとも石づゑの人ばしらともするに、自分は何らのためらふことを要しなかつた。うか〳〵してゐれば、自分は直ぐ四十歲に達するし、この頃では、もう、三人の父であつた。

『お前さんの段々瘦せて行くのを世間はおれのせいにしてゐるのがつらいすかい、ね』と、太つてる妻は或時心配さうに告げた。

『そんげなことあるもんか？』本願が達しないからである。然し、たとへからだは瘦せて行つても、花火の工風は段々に肥えて來た筈だ。

　或夜、魘ものが多い爲めに日が暮れると餘り人の出ない濱べを、考へごとをしながら、ぶら付いてゐた。そして、ふと思ひ付いたことには、狐をでもいいから取ツつかまへて、それを犧牲として念じて、殺して見たかつた。昔のさむらひは腕だめしに辻切りをしたではないか？血を見て驚くやうでは、かたなも持てなからうし、火藥いじりもできまい。兎に角、物の血を見て一層自分の腕が磨けるものなら――と思つた。その上、若し人を化かす狐の妄念が自分に乘り移つて、おのづからに自分のうち揚げる花火に現はれ、やみ夜の天空にぱツと九尾の姿をでも開らいたら、ます〳〵面白いのであつた。

斯う云ふことを考へたその翌日のことであつた――或家へ掛けぢのできたのを持つて行く途中で、鍋茶屋の前をとほると、そこの大きな洋犬――猛烈なのを飼ひぬしがはではおほ自慢してゐる――がこちらに向つて吠え付いた。それだけならまだしもだが、そこの若い衆が出て來て『きしかい、きしかい』とけしを掛けた。苟くも新潟一の料理屋ともあらうところで、とほりすがりの者に犬を――とめもしないで――吠え付かせるとは以つての外であつた。ましてこの強情と喧嘩ばやいとで名を賣つてる『ぼらさ』に！

『おれを知らないか、馬鹿』と、こちらは立ちどまつて若い衆をにらみ付けた。全身にいかりをみなぎらせてだ。そしてそこの主人なり、かみさんなりを奥から出て來させて、詫びを云はせたかつた。が、飛び出して來たのは頓馬なものばかりであつたかして、ぼんやりと顔をそろへてゐながら、謝罪するものは一人もなかつた。

畜生の吠えるのなどは別におそろしくもないので、それを蹴飛ばしながら門内へをどり込んでやらうかとも思つた。が、それよりも今は默つてゐて、こいつを自分の血まつりにする方がいいやうであつた。

おのれの運命も知らずになほ追ひかけて來る畜生を一と先づ遠ざけて、急いで家に歸つて來た。そして直ぐ臺どころへ行くが早いか、出齒庖丁を取り出してあら砥の上で磨ぎ初めた。その顔いろが變

はつてたと見え、妻はこちらを見ると直ぐ、子供の添へ乳からはね起きて、胸をはだけたまま、飛んで來た。

『お前さん、なにするがんだ、ね――またいさかひするがんだか、ね？』

『……』こちらは自分の兒のぎやア〳〵泣いてるのにも毛の赤い洋犬の吠え付きばかりを思ひ出せて、『なんだろば、あの鍋茶屋のかめを殺してやるがんだ！』

『そんげなことをしていいか、ね？』

『かまふもんか？』實は、斯う〳〵云ふわけだからと云ふことを、ぷり〳〵怒りながら、云つて聽かせた。

すると、かの女は何でもないことに過ぎぬと思つてか、笑ひ出して、泣いてる兒の方へ行つてしまつた。そして言葉だけはつゞけたのである。

『鍋茶屋とも云はれるものが時々行く客に犬をけし掛けるとはあんまりだけど、犬ッこだすかい、そんげなことは分らない。きッと、お前さんの顏を見て、變な人間だと思つたんだ、ね。』

『おれだッて目は二つ、口は一つの人間だ』と、笑ひとも付かず怒りとも付かぬ調子で答へた。が、云はれて、ふと、氣が付いて見ると、自分の一方の頰には、大きな燒けどうのあとがベッたりむらさき色に押されてゐるのであつた。この顏でにらみ付けられては、如何に畜生でも並みならぬおそろし

さを感じたであらう。而もその上に何かの血を見たいものだ、ものだとばかり考へて歩いてたのだから。

然し、丁度いいことにぶつかつたのだ。あれを血まつりにしようと決心してゐると、あの犬と自分の本願とがまたとは無いところのいい對照關係にあるやうに思はれて、犬を殺すことが自分には今や人間以上、狐以上の手ごたへになるやうであつた。

刄物をそツと手ぬぐひに包んで再び出かけたのである。そして目あての場所へ來ると、門の前に突ツ立つて、わざと大きな聲で犬の吠える眞似をして見た。すると、直ぐ、果して洋犬がまた吠えつつ飛び出して來たので、

『畜生!』遠慮なしに向つて行つて、門を這入り、奥深い帳場の前まで追ひつめ、左りの手で以つて渠のうわあごをつかみ上げると同時に、右の手で振り上げた出齒を渠の横ツぱらへぐざと刺した。

『うちの犬をなにするのです』と云つて、そこにゐ合はせたかみさんが突ツ立つた時には、もう、二度目に立て直した刄さきでえぐつてしまつた。かみさんは怒りながら言葉をつづけて、『大金をかけた犬ですよ!』

『百兩したツて、千兩したツて――』こちらもからだぢうの怒りを聲のふるえにまで運んで、『不都合な物は殺すのだ!』

『何が不都合です?』
『一體、强いのを自慢に、その犬を放して置いて、人に吠え付かせるのは不都合だ。』
『うちでは吠え付かせないやうにしてゐました。』
『なに云ひやがるんだ!』斯う一つきめ付けて、息をちよツと休めてから、『おれがさツきとほつた時、けしをかけるとはどうした?』
『そんなことは知りません。』
『馬鹿!知らないですむか?さうだすかい、こッちが手ツ取り早く直接に征伐してやつたんだ。』
『誰れが、また、けしなんかかけたのだらう』と、かみさんも少し勢ひをひるめてあたりの女どもを返り見た。
『………』そんなことは勝手に相談しろと云はなかばかりにして、こちらは出齒についた血をくたばつた犬の毛にわざとなすり付けだが、横の方から勢ひ付いた若い衆が二三人驅けて來る姿を見たので、手早く刄物を手ぬぐひに包みながら、そこを一目散に逃げ出した。自分は指のさきを一ケ所かまれたのが分つてゐたけれども、女どもがおぢけながらにでも怒つて見てゐたのが剛はらなので、それとは少しも見せないで來た。そして二三丁も驅け過ぎたところで、追ツ手は離れてしまつた。
歸宅してからも、なほ、はづんだ息はなか／＼納まらなかつた。が、或喧嘩に勝つたよりも以上に

氣がせい〳〵したのをおぼえた。そしてその瞬間には他の何ごとをも忘れてしまつた。早速、隣りの盆栽とも達のところへ行つて、誇り顏に今、斯う〳〵云ふことをして來たと報告した。

『この出齒で、ね。』

『どれ、見せなさい』と云つて、友達は庖丁をこちらの手から受け取つたが、『まだ血が付いてゐる、ね。』

『どれ――』こちらは、もう、ふき取つたつもりであつたがと不思議がりながら、よく調べて見ると、如何にもまだ地にしみ付いてるところがあつた。そこへ息をはアとかけて見たら、それが直ぐよく現はれた。

　けれども、そんな面白味が時間と共にまたうすらひで行くと、あの時、犬を殺してせい〳〵したのをおぼえたのは、たださうおぼえただけであつて――あとになつては、自分の望みの手ごたへなる物が少しも見えて來ないのが不思議であつた。向ふは直ぐに訴へ出たかして、こちらもその翌日警察へ呼び出されたが、二三日のあひだにそれもたわいなく濟んでしまつた。向ふが惡いと分つたので、却つてひらあやまりに謝罪して。だから、さきにこちらが子供を打ち殺した時ほどの身にしみた引き締まりも、それから生ずる新らしい知識も得られなかつた。矢ツ張り、わざ〳〵自分から手出しした犧牲では何にも效果がないと云ふことになつて。

けれども、それからと云ふもの、何かを自分以外から求めると云ふ心持ち――それは成るほど迷信だと自分ながら悟れた――を離れて、もう、自分で自分が我無しやらにでも何でもやつて行く氣になつた。そして自分がやがて花火の大家になれると思ふと、表具屋としてばかり思ひ出される商賣がたきなる小便がめの貧乏があはれましくなるので、自分の手まに餘る仕事を少し、お客さんにはこツそりだが、分けてやりたくなつた。

　この好意を以つて自分は、安い軸物をだが、二つ持つて行つて、家がきたないのであがり込みはしなかつたが、渠に向つて、

『佐久間君、どうだ、これを引き受けて見ないか、ね――僕はこの頃ほかの商賣が急がしいから！』

『………』渠もちよツと欲しさうであつたが、暫らく考へてゐてから、『なんだい、君の仕事かすなんか御免だ。』

『よし、そんげなつもりなら分けてやらんぞ』と云つて、引ツ返した。こちらが折角の好意をも向ふが受けなかつたのには、あたまをはねられるものと思つたのだらう。無論、少しははねるつもりであつたが、それをいやなら、はねないでもいい。こちらは註文を全くして、得意さきに渡しさへすればよかつた。が、向ふは惡意に取つて斯うはね付けられて見ると、そんな説明をしてやる氣にもなれなかつた。しみツたれな奴は飽くまでしみツたれだ。勝手に貧乏ばかりしてゐろ！そして人の見込みあ

る研究を、遠くから、いつまでも疝氣に病んでゐろ！

歲三が濱の仕事場に專ら隱れたのは、ことしの川開きに尺玉の懸賞花火を揚げる爲めであつた。そしてその日になると、八月廿二日で、新潟のたなばた祭でもある。例の如く、有名な花火師どもは日本全國から集つた。そして新潟縣下から見物に來た人で以つて、ゆツくり流れる信濃川の西ぎしには、澤山ある宿屋が皆滿員になつた。その宿屋が夜になると、皆揃つて凉しさうな提燈をいくつも軒々に出した。そのうちで、矢ツ張り、一番立派に見えるのは、橋よりも川かみの方に寄つた篠川旅館のであつた。そのまたかみには市會議事堂の高い森があつて、そこで恰もわざと川の賑はひを喰ひとめて、こちらの氣ぶんをしツかり引き締めて吳れてるやうだ。

その森と、東新潟なるもとの沼垂の八木さまの森とは、川を隔てて、橋のかみしもに相對してゐる。そしてこの兩方の森のあひだを、川は一面にこれも提燈をつけた多くの屋かた船の往き來である。その上にかかつてるのが四百三十間、丁に直せば七町餘の長さある萬代橋だ。この橋だけででも新潟は日本一を誇れるのが、一つには、歲三の世界一的野心を昔から鼓舞してゐたのである。

橋の上にも見物は一杯であつた。そしてその川かみには萬代島、川しもには小柳島があつて、この兩方で、釣りがね道成寺や牛に乘つた菅公やの仕かけ花火は勿論、普通のうち揚げが澤山揚げられてゐたのである。渠は小柳島の方にゐて、同業者と共に世話をしながら、すべて周圍の景をその內部か

ら呑んだ程の大きな息を吐いてゐた。
舟々から馬鹿ばやしや盆踊りの唄が聽える。——
○新がた戀しや白山さまよ、松が見えますほのぼのと。
○行こかいづも崎、歸ろか新がた、ここが思案の寺どまり。
○盆の十三日になすの皮の雜炊だ、あまりてつこ盛りで鼻のてつぺん燒いたと、さ。ありやさ、ありやさ。
○しよんで來たよ、しよんで來たよ、梅干に紫蘇の葉、中の種まで眞ツ赤で、てつかで、しよんで來た。ありやさ、ありやさ。

さう云ふものはすべて自分の子供の時から知つてる下だらない唄だが、今夜に限り、自分を祝して呉れるやうで嬉しかつた。

ずどん、ぶる〳〵ツと云つて揚つて行く尺玉が、空天にあり振れた唄も同樣なしだれ柳か何かを開らいても、見物は相變らず喜びを叫んでゐた。尤も、新潟のものは子供までも玉が片桐のであるか、小泉のであるかと云ふほどのことは、その最初からの音で以つて聽き分けることができるのである。東京の川開きを一度渠も見たことがあるが、東京人の自慢な佳い仕掛け花火や細いうち揚げなどはまことに子供だましのやうに貧弱で、見られたものではなかつた。それでも、それを玉屋とか鍵屋とか

云つて喜んでる。が、自分は東京では揚がらぬ尺玉をも、實は、貧弱だと思つてるのだ。

けれども、今揚がつた尺玉のうちで、そらに菊を現はして、そのさきのみどりなのが出た。これは、實に、自分にはとても及ばぬあざやかさであつた。すると、また、枝が黄で、葉が青いろで、花の變色する菊があつた。枝術に於てはまことにすぐれた物だ。これはきツと今年の一等賞だらうと、自分にも思はれた。自分のは『大和にしき』と云つて、いろ〳〵な色をぱツと咲かせるやつで、――あり振れてゐるが、兎に角、思ひ通りにあざやかに行つた。これが、審査の結果、やツと五等賞までに漕ぎつけることができた。

この新聞を見ると、知り合ひのものらは皆喜びを云ひに來て呉れたけれども、それがいづれもただおべつかを云つてるやうに思へて――歳三自身では渠等の云ふ、『おめでたう』が少しも面白くなかつた。

『……』五等賞が必らずしも不服であつたわけではない。兎に角、尺玉が十種ばかり揚がつたうちを漕ぎ拔けてそこまで行つたのだから、當地の兩大家を除いては、第三等であつたわけだ。が、これ位では工風と技術とに於いて自分以上のものを押しのけて行くのは、まだ並み大抵のことではない。そしてそこに自分としての根本的失望があつた。『おれは今度ですます〳〵考へてしまつたが、ね、おれが世界一の花火師になるのは、何でも人より圖ぬけた大きいやつを揚げるに限る！』

斯う云つたには、二尺玉なり三尺玉なりを、たとへあり振れた工夫ででも、ただ成るべく危險のないやうに注意して置いて、早く自分だけが警察の許可を得るべきだと云ふことを含ませてあつた。そしてこれなら、技術がさう上手でないにしても、一番らくのやうであつた。ただ必要なのは自分にその危險を冒す大膽その物であつた。そしてこの大膽に於いては、かねを持つてふくぶくしてゐる大家達には勿論のこと、他の誰れにも劣らねつもりだ。

　ところが、それはさて置き、五等賞のおかげででも在からの小さい花火註文が續々來るやうになつた。新潟には既に濟んだ祭りに引き續いてあるところの方々のお祭りの爲めにだ。思はぬかねが這入るので、手まを省く爲め、隨分多くの材料を買つて火藥の調合をすませ、煙硝倉へ貯へた。そして註文のあひま、あひまに製造しつつある三尺玉ができ上れば、あらかじめ新聞に廣告して、日と時間とを約束して置いて、成るべく人家に遠ざかつた海ぎわで、一つ、多年の鬱忿と五等賞の恨みとを晴らして見たいのであつた。

　そしたそれが半ばでき上つた時、また在からの三寸玉、五寸玉、八寸玉の註文を受けた。自分の肝腎な方に乘つて來た興味を半分でそがれるのは惜しかつたけれども、それを橫の棚に乘せたまま、兎も角もと註文のを急いだ。蓋し、自分がその氣であつたばかりではなく、註文ぬしからも急ぎであつた。それには、然し、一つの花火だまのそとまわりや、そのなかへ入れる小だまやの、表皮を包み固め

るのり附け生紙がなか／＼かわかないのに困つた。

　佐渡までもはッきりと見える天氣が珍らしく續いてたが、秋の太陽には左ほど乾燥の力がなかつた。據んどころなく、製造法にはそむいてゐるが、變則を手加減で行けるだらうと思つて、仕事場——ここは疊もござも敷かず、直接に沙の上であつた——の眞ン中に炭火をおこした。そして太陽の光りでかわかぬものは、これを自分の手でくる／＼まわしつつ、少しうへの方から炭火にあぶつた。

『危險なことをしてゐるではないか？』斯う云つて、用事あつて訪ねて來た人もそばへ寄らなかつた。

『なんだい、大丈夫だ』と、こちらは平氣で答へた。『物には何でもころ合ひと云ふことがある。それをわきまへてゐさへすれば、どんげな物にも危險はない。そこがおれの腕、さ、ね。』

『いかにも、ね。』人はそれでも入り口から深くは這入らないで用談をした。そして用談とは小便がめのことであつた。こちらが仕事を分けてやりに行つた時はつよいことを云つてはね付けたが、ますます貧乏をしてく行ので、今ではそんなことも云つてゐられないから、またどうか仕事を分けて呉れろと云ふのだ、この人をとほして詫びを傳へながら。

『おれは、もう、いやだ——當人が來てあやまらなければ。』この時、持つてた玉を餘り火に近づけてたと見え、導火線にもよらないでどんと爆發した。

　火に向つて低い腰かけ臺に腰を据えてた者は、先づ、正面から顏と胸とに煙硝火を浴びた。同時に

一度そとまで飛び出した。が、破裂したそと玉から散らばつたなかの小玉がまだあちらこちらに破裂しつつあるのを見て、また飛び込んで行つて手早く沙をぶツかけてゐた。が、そのうちに、出來かけの三尺玉に火が移ると、仕事場の四壁と家根とを破り拔いた。その勢ひでまた煙硝倉が爆發した。そして一ときは高くそらへ揚がつた沙とけむりとで何も見えなかつた。

渠はそのあひだからなほ强情にも飛び出して來たが、直ぐにも氣絶しさうな氣持ちをしツかり自分に攫みこたへて、それでも、沙の上をグミやネムの芽ばえ、猫の手やあまじこの草のあひだにころげまわつた、耻ぢも何も忘れて助けて呉れいと叫びながら、少しでも燒けどうのあつさを冷さうとして。けれども、おほ燒けどうの上に、ところもかまはずころがつたので、からだ中の皮膚が赤むけになつて、肉の中へは沙やとげが一面に深く這入り込んでしまつた。

寢臺に乘つて病院へつれて行かれたが、自分ながら、とても助からぬものと見て、自分の一生その物も花火のやうに消えるのだと覺悟した。枕もとへ來て泣いてる妻に向つては、

『別に遺言することはないども、子どもが大ツきなつたら、うちのおとゝはあんまり大膽過ぎて馬鹿なことをしたと云ふて聽かして呉れ』と告げた。そしていよ〳〵息を引き取る前になつて斯う切れぎれにつけ加へた、『おれの――求めてゐた――犧牲は――おれのことで――あつた。』

――(大正八年十月)――

渠の舊日記より

（明治二十九年）一月十三日。雨。子供が病氣の氣味だと云ふので、僕はきのふの夕がた妻をして清子を醫者のもとへつれて行かしめた。すると、その醫者の言葉では
『まさか實布垤里亞ではないだらう。これを飲ませて、あす、また午前の九時頃に來て御覧なさい』
とのことであつた。呉れたのは水ぐすりの一と瓶だ。何だか、浮かない氣ぶんになつて、僕も常より早く床に就いてしまつた。清子もちよつと、一睡したやうだが、目をさますと、何となく息が切迫して、腹の底より無理に呼吸してゐるかの如きありさまであつた。可哀さうになつたので、その方へ顔を近よせてやると、却つていやだと云はないばかりに拂ひのけた。そして寢返りを打つかと思ふと、直ぐ手を延ばして枕もとなる五分心ランプをつかまふとした。
『きいくが惡いんぢやありませんか』と、妻はその度毎にとめたが、なほ、時には身づから飛び起きたりするのであつた。そしてむづかつてばかりゐた。母におんぶされて、ねんねこ歌をうたはれ、居間につづく英語や夜學中學の廣い教室をまはつてゐると、多少は落ち付くと見えて、眠つてゐた。

が、寢どこへそつと寢かされると、また直ぐ目をさますので、妻はよわつてしまつたあげくの怒りを帶びて叱つた。すると、今度は獨りで、起き上つて、

『おちツこ』と云つた。やつて見ると、別に出るのでもなかつた。『おぶう、おぶう』とも云つた、夜中のことだから、湯もわいてゐないので、水を茶碗に汲んで來てやると『おべたい、ね』と喜びながら、舌うちをして飮み盡し、また二度もおかはりをした。喉には始終たんの溜まつてるやうすで、時々は吐き氣を催して、けつと云ひさうになるのを自分自身で無理にこらへてしまつてゐた。それでも一度は大變に吐いた。けれども、それを夫婦は藥りのききめだと思つた。醫者がこの藥りで吐くかも知れないが、それは心配するに及ばないと注意して呉れてあつたからだ。僕らもただ早く夜の明けるのを待つてゐた。

五時頃、僕らが起き出たのを見て、淸子も起きたくなつたのだらう。

『着もの』と云つた。その聲は喉にせかれて、よく聽かないと分らなかつた。着物を着かへると、然し、そのまま、ぐつたりと蒲團の上にうつ伏しになつて、まだ眠りに落ちた樣子であつた。そつと、その上に小さい蒲團をかぶせてやつた。夫婦が急いで食事を終つた時、また母を呼ぶやうであつたから、膳の前につれて來ていつもの牛乳を與へると、さじ一杯を飮んだか飮まないで口をふさいでしまつた。

からだが俄かに弱つて、かほ色がまた少し變はつてゐて、喉がいたいと云ふことを知らせた。割り合ひに呑氣な妻も、いよ〳〵九時まで待つてゐられなくなつて直ぐおんぶをして、今度は小兒科專門の醫者へ驅け付けた。僕はいつも通り六時半から來るおとなの生徒二三名に英語の個人教授をやつた。そして八時から十二時までは、西洋人の日本語教授に行くのを休んで待つてゐた。そのあひだ六時間あまりたつても、妻は歸つて來なかつた。

十二時を過ぎて、例の看護婦三名を敎へてゐると、突然、僕の妹がいきせきやつて來て、淸子が北里病院で死んだことを知らせた。

『最初に行つたところでは、もう、とても見込みがないと思つたのでしよう、早く北里へつれて行つて注射して貰ひなさいと、ていよく斷わつたさうです。なんだつて、ねえさんはあんなに可愛い兒をそれまでうツちやつて置いたのです』と妹が悲しみの餘りの權幕はひどかつた。

『おれも惡かつたんだ、初めての兒で、まだそんな經驗も何もなかつたから、さうひどい病氣とも思はなかつた。それに、もとの醫者がさう心配するに及ばない、と云つて吳れたから。』

『あんなヘツぽこ醫者なんか、ほんの、風引き醫者ぢやアありませんか？』

『さうだ。それを信じ過ぎてゐたんだ。』こんなことを云ひながらも、僕はまだこの事實を事實として身に受けるだけの用意もなかつた。ただ、ゆふべの小ランプをつかまうとしたのは、喉がつまつて、

息苦しさの焼けからであつたのが、いぢらしくも想像できたばかりだ。

兎に角、妹をそのまま留守番に頼んで、北里の研究所へ車を飛ばした。一體、何の爲めに皆に知らせが遲かつたのか、――多分、妻の不慣れなあわてと悲しみとの爲めであつたらうとは思はれたが、――道の近いおやぢとお袋もやツと今來たと云ふところであつた。死んだ兒のからだにさわつて見ると、氣のせいか、まだ少し體溫が殘つてるやうにも思へたが、かほ色は全く變はつてゐた。けれども、ゆふべからの苦しみで既に弱り切つたうへだと見えて、今はのきわに苦しみもがいたと云ふやうなあとは出てゐなかつた。

『急性實布垤里亞に心臟痲痺が出たのださうです』と、妻は沈み切つた聲で說明した。がツかりして、何もかも投げ出してるかのやうに『いい兒であつたのに、ねい』と、僕の第二のお袋は目に淚を一杯ためてゐた。

『可哀さうだが――死んだものは、もう取り返しが付かないから。』斯う、僕の父はあきらめたやうに云ひ添へた。

『……』僕も死んだ物には未練はなかつたけれども、死なせた自分らには何とかもツといい考へがあつたらうにと殘念であつた。一つには、まだ若くて、何等の經驗にも乏しい爲めだらうが、また一つには朝から夜おそくまでの教授や出教授に、自分は勿論のこと、別に教師ではない妻までも落ち付

いて子供を見てやるひまがなかつた爲めだ。それを思ふと、少からず淸子にすまなかつた氣がする。
『せめて、ゆふべのうちにここへつれて來たら――』
『もう、何も云つて下さるな』と、妻は悲しみの上にいやな顏を見せた。けれども、暫らくまを置いてから、『どうせ手後れでしたよ、松川さんへつれ込んだ時、わたしが脊中からおろしてやると、ころりところがつたばかりでした、わ――もう、動くだけの甲斐性もなくなつて！』
『………』さうでもあつたらう。ここへ來て半ときもたつか、たたぬうちに、死んでしまつたと云ふから、九分通り見込みがないがと云つて、醫者は三ケ所まで注射をして見たが、矢ツ張り、無効であつたのだ。いよ〳〵駄目ですと、云はれた時、妻が顏を近づけて
『とツちやんが』と聽かせて見たら、三角の口つきをして笑つたと云ふ。が、それも實際に笑つたのか。それとも最後の苦しみであつたのか、どちらとも分るまい。さう云ふ風にして死んだ兒は、享年二年二ケ月だ。

傳染病だから、死體を家に引き取ることができなかつた。そのままで死亡屆、棺桶取り寄せ、二十四時間以内の火葬の許可、などの手續きを、僕に父と共にしたり、して貰つたりして、午後八時頃二名の人夫に棺をかつがせて、皆が病院を出た。そして死兒の母と祖父と祖母とには途中から別れて、そのあとは僕ひとりでつき添ひ、人足と同樣に足を急がせて桐ケ谷の火葬場に向つた。そして九時過

ぎに着した。

僕はその前に一度、僕の祖母を砂村の火葬場へ送つたことがあるけれども、直接の手續きなどには不慣れの爲め、ちよツとまご付かないではゐられなかつた。が、茶屋でやツと、火葬室の錠と鍵とを受け取つてしまうと、人夫のかつぎ入れる小さい棺と共に火葬堂へ這入つて行つた。先刻から、僕らの氣ぶんと同樣に、何だか欝陶しい夜であつた。『雨だ、な』とは途々人夫どもも云つてたのである。そして僕も私かに降られては溜らないがと考へて來た。ところが、何だかおそろしいやうな、氣味の惡いやうな、そして何だか變なにほひがしてゐるやうな、堂內へ這入るが早いか、俄かに家根のうへで、ばり／＼させる大きな音がした。子供の時なら、直ぐ天狗のつめをでも思ひ合せたであらう。今や苦にがみが下りて來て、僕の兒のたましひを受け取る合ひ圖ではないかと云ふやうなことをあたまに浮べて、ぞつと自分の肩をすくめた。が、その一瞬間を過ぎると、おほ雨が降つてゐて、堂の家根がトタン張りであることに氣が付いた。

寒い夜だ。そう毛立つふるえが僕のからだを裾の方から續けざまにさか登るのは、あながち、抑さへてゐる悲しみの爲めや不慣れなところに對するおそろしさの爲めばかりではなかつた。途々だツて素ツぱだかになつてる、くぬ木ばやしなどにから風が鳴つて、その音さへも寒かつた。

煉瓦造りだが、三等室の戸びらを明けたてして、僕がその錠前をおろしてから、鍵をしつかり手に

して逃げるやうに堂内を出るともう、雨は過ぎてゐた。が、ちよツと途方に暮れてしまつた。

『どうせ、また、あすの朝出直すよりか、あツちの茶屋にとめて貰つたらいいよ』と、別れる時にも僕の父は注意して呉れたのだ。

『とめて呉れるか知らん』僕はその時たよりなかつた。そして最初、火葬料を拂ふと同時に當つて見たところでは、矢ツ張り、僕のあやぶんだ通りであつた。宿屋の鑑札を受けてゐないから、警察がやかましくツて、と。けれども、今から歸るのも――また、あすの朝來なければならぬことを思ふと――いやであつた。だから、僕はそこのおかみさんに泣き付くやうに一生懸命になつて賴んで見た。すると、

『では、警察へ内證のことにして』と云つて、朝の食事なしに六十錢ときまつた。案外わけもなかつたので、僕は父の云つたことに經驗上の先見の明があると感服した。

人夫を歸したあとに、人夫休憩所の焚き火が燃え殘つてるのも心ぼそかつた。茶屋はお客を待つ時間も、もう過ぎたからとてあたりの戸を締めてしまつた。お客とは僕のやうなものを、一般に云ふのか。それとも死んで來るものを無同情無感覺的にさしてゐるのか、それを僕はあの平氣過ぎるやうなおかみさんに聽いて見たいものだが――。

兎に角、いはゆるお客の休みどころになる座敷の一つに寢床を取つて貰つて、それに這入つたの

だ。が、常ならぬ寒さと寂しさとになか〱寢つかれないので、今、起き上つて、このゆふべからの日記を書いてるのである。人夫休憩所の火の燃え殘りがどうなつてるのか氣になるので、小さいながらす窓附のあま戸からそツとのぞいて見るともうひとりで消えたのか、それとも宿のものが消したのか、そのありかさへ分らなかつた。

山中の一軒家！ただ寂として、少しも、世間の聲が聽えて來ない。夜の風がそとの樹々に吹き渡つて、僕の心をも何だか空しく響かせるばかりだ。悲しみ歎きの湧き出る筈の時でありながら、而も殆どそれを感じないのはからだの疲れてゐる爲めか？はた又、感情の實際に於いて僕はまだ兒の死んだことを確かめるまでのひまがないのか？

一月十四日。晴。けふ、日記の筆を置いてからも、寒い寢床に於いて夢とも就かず、まぼろしとも見えぬあひだをうと〱、いつのまにか眠りに落ちてしまつたらしい。第一の夢を見た。清子がまだ生きてたのだ。そして非常に息がつまつて苦しんでる。あまりに可哀さうなので、抱きあげてやると、

『う、うーん』と呻つて、その兩手までさし上げて反對の方へそり返つた。

『あ！』僕はあまりにその殘酷なのにうち驚き、いやアな氣がしながら目をさました。そして、もう夜が明けてるのではないか知らんと思つたので、わざ〱床を出て行つて、戸の末を少し明けて見

た。まだ薄らあかいばかりであつた。

　また床へもぐり込むと、やがて第二の夢を見た。このたびは病院のことらしかつた。僕は何かの都合でそこを出て行かうとしてゐた淸子はその母と共に僕を尋常に見送つて來て、僕が玄關の敷居をまたがふとすると、その後ろからかの女は

『あばよ』と云つた。して見ると、幸ひにもまだ達者であつたのか知らんと思つて僕は目をさました。そしてきのふからの寂しい情けなさが俄かに一ときに湧き出る氣がして、自分のからだの今こそぐつたりしてゐるのを感じた。起きたくもなく、またいつものやうな考へごともしたくなかつた。麻布へ來る三ケ月前までは、代々木の或軍人の家に留守番かた〴〵住んでゐたのだが、お寺のやうに高い緣がはから淸子がころげ落ちて、而も無事であつたことが浮んだ。宙を一つ眞ツつさかさまにでんぐり返しして庭の地上に落ちたと見え、坐敷の方を向いて尻持ちを突いてゐたのであつた。

　やがて第三の夢を結んだ。僕が實際通り火葬場の一室に寢てゐるのだが、最初に床を取って貰つた時には、おかみさんが

『この室はいつも明けて置くところですから戸のほかに別に障子がありません』と云つた筈だ。それだのに、今や不思議にも、立派な障子がはまつてゐる、そしてそれを男衆が明けてゐる。どうしたことだらうと思つて、ふと、目がさめた。障子ができたわけでもなかつた。と[illegible]

人が隣りの室に起きて、戸棚を明けた音であつた。もう、火鉢に火が起つたのかして、炭がぴん〱はねるやうすであつた。時計を見ると、午前の六時三十分だ。

僕もそれをきツかけに床を出た。そして直ぐ庭先きに出しツ放しになつた手桶の水で顔を洗はうとしたが、氷が堅く張つてゐた。それを叩き破つて自分の手に水をすくひ上げた。

直ぐ拂ひを濟ませた。おんぼうも既に出てゐるやうであつたから、僕は昨夜(ゆふべ)の鍵を持つて火葬室に行き、三等室の戸を開らかしめると、清子は火がよくとほつて全くの灰となりただ頭蓋骨ばかりが半ばその形のままに黑くなつてゐた。出して來たのを臺のうへで長い竹箸で以つてかき分け、僕は二三の固まりを用意の壺へ入れた。すると、そのあとは、おんぼうが棒のさきでうち碎きつつ入れて呉れた。そして、

『人間も火にかかつちやアもろい物だ。殊に、子供の骨はよく燒けます』と云つた。

その壺をハンケチに包んで外套の袖に抱きかかへ、僕はまたもあの深い田舍みちを辿りつつ、目黑(めぐろ)に出た。そこで一番汽車を待つて澁谷へ行つた。すると、そこの停車場に丁度バトラ宣教師夫婦が――どこへ行くのか――汽車を待つてゐた。近頃米國から來た若夫婦だが、僕はこの二人にも日本語を教へてゐるので、斯う〱云ふわけ合ひから今一日休むことを告げた。そして、ふいと同情を求める氣になつて、渠等(かれら)の目の前へハンケチ包みを突き出し、それでもなほ日本の言葉を教へるやうに、

『これが――その兒の――ほね。』

『………』渠等は、然し、申し合はせたやうにぎよツとして、からだを兩方へ引いた。氣味が惡かつたのだらうと云ふだけに思つて、僕はそこを別れ、渠等も一緒に住んでる某學院の一洋館へ行つて、ソーパ老教師へも今一日休むわけを報告した。それから妻の屬してゐる教會の牧師を訪ひ、葬式の順序をさだめ、それからまた青山の墓地の茶屋へ立ち寄つて、僕の家の墓場へ穴を掘る場所を指定した。そして、やツと自分の住まひに歸れたのだが、教室の正面なる玄關の石段をのぼりつつ感じた心持ちでは、清子が

『とツちやん、どこへ行つてたの』と云つて出て來るのを自分は待ち受けてゐた。然しその兒が、もう、永久にゐないのだと云ふことを、僕は坐敷に足を投げ出してから、俄かに思ひ確かめることができた。妻の顏と共に僕の周圍が火の消えたやうに寂しくなつた。

今夜、ソーパ老人からハガキが着して、普通の病氣でなかつたのだから、ここ一週間教授をしに來ることを遠慮して呉れろとあつた。まさか、渠等も子供を持つてるのぢやアあるまいし！實布垤里亞はおとなに傳染するやうなことなんかないと云ふではないか？潔癖と云はうか？日本人を馬鹿にしてゐると云はふか？僕は死んだ兒に對する悲しみの出しどころがないので、それが怒りに變じて耶蘇教を――一度信じたこともあるが――ますく呪ひたくなつた。日本語教授の報酬など、たとへ棒にふつ

ても知れたものだ。

一月十五日。晴。僕は〇〇教會の牧師は大嫌ひだ。渠が隱田に住んでたあとへ僕もちよツと住んだことがあるが、その家ぬしのかみさんの話によると、渠は自分の妹だと云つて引きずり込んでた女といつも一緒の室に寢てゐた。その他のことに於いても渠のまじめは疑はれるのである。けれども、僕の妻の意に從つて葬式を耶蘇教式にやるとなると、その教會の牧師として渠を招かねばならなかつた。教會まで持つて行くことだけは僕が反對したので、自宅でやることになつた。自宅と云つても、今の教室になつてるところは、もと、耶蘇教の傳道會堂であつたのだから、教壇もそのままになつてゐて、丁度持つて來いの場所だ。

出席者は僕の父母、妹と弟、常川の叔父、妻の叔母一家、近處の人々で、僕の友人どもにはあまりおほ袈裟になるので知らせなかつた。來て吳れたソーパ老人が聖書を讀み牧師がちよツと說教をしたが、お坐なりで、僕から見れば馬鹿げてゐた。それでも、耶蘇教のことは何も知らないものらまでが泣いてたのは、ただ淸子の思ひ出にだらう。皆に可愛がられた兒であつた。

葬列が霞町をとほつてゐた時、あいにく、また、バトラ氏夫婦と行き違つた。渠等は僕にも挨拶をしたことはしたが、コレラ病の棺をでも避けるやうにおづ〳〵して、その男の顏も女の顏も――却つてその方が――死にかけてるけしきであつた。

可哀さうにも無邪氣な死ではないか？而もそれが既に藥りと火とで以つて十分に消毒されてゐたのだ。それが分らないほどの唐變木どもなら、愛の敎へなど云つて傳道するのはやめて、早く本國へ引き取るがいい！

『あいつ、日本を馬鹿にしてやがるんだ』と、わざと牧師やソーパ氏にも聽えるやうに僕は僕の車が少し過ぎてから妹を返り見た。妻は留守居かたがた家にとどまつてゐたから。然し考へて見ると、あまり友人もないくせに僕自身が僅か一人の兒をなくした爲めにさうむやみと昂奮するのも、結局意久地のないやうであつた。今までのやうにさう家庭や日々の生活なんかに拘泥しないで、もツと自分の勉强と奮發をしようと云ふ決心が出た僕は、車の上で悲しみやら憤りやらの熱を自分の顏におぼへてゐた。

墓は僕の實母のよこ手にしてあつた。淸子の遺骨と共に、かの女が生前に好きであつたところの羽根と、小さな水くみと、坐わつてるはだか人形とを埋めてやつた。

『ちやア、ちツこおちなさい』と云つて、自分がさせられたやうに、その人形にもさせてやつてるかの女のすがたが、今更らのやうに、僕の目の前に見えたが、その本體は、もう、灰となつて土の下になつた。

『靈は靈に、つちは土に』と云ふ、まじめのやうな、また不まじめのやうな祈りも終はつてしまつ

た。こんもりと盛り上げられた土まんぢうの上には、持つて來た清子の墓じるしが立ち、その前に置かれた花づつには、葬式の場に用ゐた梅と椿と水仙とがさし込まれた。

すべてそんな物は生きてるものらの氣休めばかりであつた。死んだ者には何の役にも立たないものである。死んだ者に靈が殘るなどとは、とても、考へられない。生きてるものに殘る記憶や愛着のほかに靈もありやうがないのだが、それでも僕は最後にこの新らしい墓を離れる時、清子が今やどこの追ひ羽根を習ひに行つてるだらうと云ふやうな空想を浮べてゐた。

――(大正八年十月)――

大正十年六月十五日印刷
大正十年六月二十日發行

泡鳴全集第七巻

（非賣品）

著作權所有

著作者　岩野美衛

國民圖書株式會社代表者
發行者　中塚榮次郎
東京市麴町區内幸町一丁目六番地

印刷者　井波修次郎
東京市神田區三崎町二丁目三番地

發行所
東京市麴町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話新橋一二一七番
振替東京五二二九八番

印刷所國民圖書株式會社印刷所

（製本所　製本所）